

---

# ユーヴァンス叙事詩録-Renovin's Chronicle-

長岡壱月

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ユーヴァンス叙事詩録 - Renovin's Chronicle

### 【Nコード】

N7439V

### 【作者名】

長岡き月

### 【あらすじ】

マナの雲海に抱かれた、無数の大陸が浮かぶ世界群。そこにとある一組の兄弟がいた。

兄は冒険者として剣を振るい、弟は魔導師の卵として夢を追う。これはそんな彼らと仲間達、そしてセカイの光と闇が織り成す、小さく大きな叙事詩の一編。

( 自ブログにも掲載中です )

Table1\12 『梟響の街』 編、Table13\ 『皇国再燃』

編

1 - (0) 奥底からの声

『…………え、ますか？』

何処からともなく声が聞こえた。

それは途切れ途切れで弱々しくて、沈み込んでいるこの意識を弾き起こすには強さが足りなかった。

いや　そもそもここは何処なのだろう？

辺りはしんとしている。閉ざされた黒。その筈だったのに、ふと意識を「下」に向けてみるとそこからは大量の淡い緑や青の光が静かに溢れてきているのが分かった。

そしてそうした意識を、感覚を覆っているのは自由の利かない、それでいて何だかホッと

するような不思議な浮遊感。それらは何処からか聞こえてくるこの声と相まって、僕を優しく

く包み込むかのような温かささえ与えてくれているような気がする。『私の、声が…………聞こえますか？』

すると、フツと弱々しかった声のはつきりと聞こえるようになってきた。

その声の主は、聞く限り多分女の人だろうと思った。

優しい穏やかな声。間違いなく先程から聞こえていた声だ。

意識がすうつと引き寄せられるような感覚。だけどその寸前で…………気付く。

彼女の声は、何処か押し殺した必死さのようなものを含んでいるらしいという事に。

『……………』

その言葉の後、暫く彼女は黙り込んでいた。

いや、もしかしたら聞こえなかっただけかもしれない。

ここにいますよ？

そう言おうとしたのに、声が出なかった。沈み込み浮遊する意識と同じように、もしかし

たら身体の自由もまた利かないのかもしれないと思った。

その間も「下」では、深い深い奥底から湧き出す水のようにただ静かに無数の淡い光の粒

が漂ってはそつと消えてゆくことを繰り返している。

『もし……貴方が』

やがて再び彼女が口を開いた。

『もし貴方に、この声が届いているのなら。もし貴方が、その意思と力を持つのなら』

それは多分……懇願だったと思う。

必死に自分の中の強い感情を抑え、あくまで冷静にこの人気の知れない薄闇の中に呼び掛

けるその声は、確かに願いだっただと思う。

『……お願いです』

だからその願いを、僕は何とか叶えてあげたいと思えた。

『どうかあの人を、止めて下さい』

次の瞬間、力任せに引き上げられるように意識が、奥底で瞬き続ける淡い光が、眼下に遠

退いてゆくのを感じながらも……。

## 1 - (1) 忌を狩る者達

目の前には鬱蒼とした緑が広がっていた。

人の手が満足に入っていない自然。そう言えば聞こえはいいが、多くの場合こうした場所

というのは“奴ら”にとつては身を隠す格好の棲み処になる。

その日も、ジーク・レノヴィンは仲間達と共にそんなヒトと未開の境界線付近に佇みながらじっと待機をしていた。

腰に下がっているのは愛用の三本の刀と、上着に隠すように差した三本の小刀。

ばさつき伸びっ放しなその黒髪は彼自身の性格を覗かせるように紐で大雑把に後ろで括られ、小さな尻尾のようになっている。

(シフォン達はまだか……?)

じっと目を凝らして茂みの奥を見遣る。黒い瞳の中に未開の自然が映り込む。

黒い瞳と髪。それは紛れもなく女傑族アマゾネスの血を受ける者の証でもある。

「団長、皆」

ややあつて茂みが揺れ、ストーンと数名の人影が降りてきた。

ジーク達が視線を向けると、そこには色白で尖り耳 妖精族エルフの

青年と他数名の斥候役の仲間達。

「確認してきたよ。グラスホッパーとアルラウネがそれぞれ二十体前後といった所かな」

「俺達には気付いてないみたいだな。てんでバラバラにうろついてる」

「今なら一気に畳み掛けられるんじゃないっすかね」

このエルフの青年、シフォン・ユーティリアらはそう先遣の報告を口にする。

腰元の柄にそつと手を掛けたジークと、他の仲間達は誰からともなくその視線を集団の中のとある人物らに向けていた。

「そう……。ありがとう」

その先、ジークら面々の中心にいたのは四人の男女。

一人はこの集団のリーダーでもある涼しげな美貌の女性、イセルナ・カートン。

一人は戦斧を握る猫系獣人族の大男、ダン・マーフィ。

一人は一見して神父風の黒の礼装に身を包んだ薄眼鏡の男性、ハロルド・エルリツシュ。

一人は大太刀を腰に下げた、ジークと同じ黒い瞳と髪的女性、ホウ・リンファ。

彼女達、そしてシフォンを含めたこの五人こそが、ジークらこの場の面々が所属している

冒険者クラウン「ブルートバード」の創立メンバーでもある。

シフォンら遊撃隊の報告を受け、イセルナはそつと口元に手を当てた。

サアつと緑の奥から風が吹き、彼女の羽織るマントがなびく。彼女はその数拍の間を置いた後、クランの団長として宣言する。

「じゃあ、早速任務開始といきましょうか。皆、打ち合わせ通り配置に就いて」

『応ッ！』

その言葉を合図に、面々は一斉に散開を始めた。

ダン、リンファ率いる前線の斬り込み隊が中央と左右の三方面に分かれ、そのすぐ後ろに

イセルナ率いる主力隊が長方形に陣形を取る。遊撃隊と支援隊は更にその後ろだ。

「準備はできてるよな、ミア？」

「……うん。大丈夫」

斬り込み隊の第一陣の中に収まったジークが、ゆっくりと腰を落として刀の柄に手を掛け

ながら顔見知りの猫系獣人の少女　ダンの一人娘でもあるミアに声を掛けた。

両腕に装着した手甲の下でポキポキと拳を鳴らし、静かに彼女は応える。

戦斧の柄でトントンと肩を叩く父・ダンも、ちらと背中越しにその様子を見遣っている。

「ハロルド、レナちゃん。結界を」

「ええ。レナ、始めますよ」「は、はい……っ」

隊を整えた面々を確認してから、イセルナは背後を　支援部隊を率いるハロルドと、

その傍らで緊張気味に立つ彼の養女・レナらに呼びかけた。

養父の言葉に、ぴくんと羽毛のような耳と背中に生えた真っ白な翼が揺れる。

鳥系の亜人種・鳥翼族<sup>ウイング・レイス</sup>。レナはその内の白鳥系に当たる少女だ。

大きく深呼吸をしながら目を瞑り、胸の前に組まれた両手。

ハロルドと支援隊の面々は彼女のその動きを合図に、一斉に呪文を唱え始める。

『穢れ許さぬ金霊よ。汝、輝く糸を以って困いの籠を紡ぎ給え。我は穢れを纏いし彼らに健

やかなる浄化を与えんことを望む者……』

魔導。それは今や世界中の人々にとって欠かせない二大技術体系の片輪である。

奇蹟という名の現象を司る“精霊”達と、特殊な共通言語たる呪文と自身の魔力<sup>マナ</sup>を以って

交渉し、その恩恵を借り受ける術<sup>すべ</sup>。

それらは何も一般市民だけでなく、ジーク達のような冒険者にと



つても様々な面で有益であることに変わりはない。

『盟約の下、我に示せ』

セイクリッドワールド  
『聖浄の鳥籠』

一般人にはただの雑多な音声にしか聞こえない古代の言語。

だが詠唱が完成した次の瞬間、ハロルド達の足元に人数分の金色の魔法陣が展開された。

同時に金糸のような無数の輝く線が周囲に広がり、あっという間に面々を中心とした一帯は文字通り金色の鳥籠<sup>ドーム</sup>の中に包まれる。

『ギギツ!?』

驚いていたのは、茂みの向こうに思い思いに潜んでいたジーク達の“標的”だった。

鋭い針のような脚で蠢く大人一人以上の大きさはあるバッタのような生き物。

同じく上半身が褐色の肌をした女性で、下半身が蜘蛛のような生き物。

それらはまさに「怪物」という姿に相応しい。

魔獣。それは“瘴気”に当てられ怪物化した者達の総称である。

マナの劣化は、本来世界に存在する者全てを精神の面から育む生命エネルギーというその

働きを、それとは真逆の方向 生の終焉へと導く毒素・瘴気へと変えてしまう。

魔獣とはその中であって死滅せず、狂気の中で怪物と化してまで生き延びた存在なのだ。

「今よ!」

ドームが形成されたのを見計らい、イセルナが叫んだ。

同時に堰を切ったようにジーク達は得物を引っ下げて茂みを飛び越えると、虚を衝かれて

いる魔獣の群れとへ突撃してゆく。

「ぶっ

」!

ジークに目掛けてグラスホッパーの刃のような脚が振り下ろされた。

しかしその一撃は地面を抉るだけで、当のジークはその伸ばされた脚を伝い一気に跳躍、空中で二刀を抜き放つと前傾のベクトルに任せてその甲殻の腹に斬撃を叩き込む。

そして上がる断末魔。

バッタ型の魔獣は文字通りの“三枚に下ろされ”て切り裂かれ、地面に倒れた。

「ジーク、突出するな。複数で囲んで確実に仕留めろ！」

「分かっていますっ！」

本来、生半可な攻撃手段では魔獣は倒せない。いや……死なないのだ。

元より瘴気という生を蝕む毒にすら耐えて生き延びた魔獣は、普通の生物に比べて圧倒的なまでの不死性を誇る。その凶暴さもさる事ながら、多少の傷ならすぐに塞がってしまう。

そこで有効な方法は二つ。

一つは魔導による遠隔攻撃であり、もう一つは錬気法マナ・コートと呼ばれる戦闘に特化したマナの制御法である。

普段は生体が呼吸するのと同じように、大気中と身体中を巡っているマナを意識的に配分する事で魔獣の治癒力を上回る威力を、魔獣の破壊力を上回る耐性を獲得できうるのだ。

その為、この錬気法は冒険者 特に魔獣討伐や兵力供与といった依頼を主に受けている

所謂「傭兵畑」の者達にとって必須技能の一つとなっている。

「どっ……せいつ！」

真っ先に飛び込んでいくジーク、それに続く仲間達。

ダンが副団長として若い面々に熱くなり過ぎないように注意を飛ばしつつ、自身の得物である戦斧に握り締める掌からマナを伝わらせて振り薙いだ。

迫ろうとしたグラスホッパーの前方両脚と頭を、次いで身体を回転させながら二撃目以後

方の甲殻の身体を粉碎する。典型的な強化の錬氣法だ。

「……ちっ！ 今度は俺らが困まれてるぞ！？」

「退くな、押せ押せっ！」

その背後では、リンファ隊の面々が個々では拙いと踏んだらしい魔獣らの集団攻勢に晒され始めていた。

繰り出されるグラスホッパーの刃のような足先や、アルラウネの刃のような五指。

それらを面々はマナを配分した得物と強化を施した肉体で何とかしのいでいる。

「……。皆、少し下がってくれ」

それでも中央に立つリンファだけは冷静さを失っていなかった。

凜とした一声を仲間達に掛け、自分の背後に退避させる。

すると彼女は腰に下げた長太刀の柄をそつと握り、

「トナン流錬氣剣」

深く長い息をついて目を見開くと、

「円！」  
まじか

繰り出すしたのは、目にも留まらぬ高速の抜刀。

次の瞬間、マナを纏った斬撃が宙に孤を描くように飛び、襲い掛かってくる魔獣達がその

一太刀の下に斬り伏せられる。典型的な放出の錬氣法だ。

数の上では、確かに「ブルートバード」総出の兵力の方が上ではある。

しかし相手は一般の人間では太刀打ちできない魔獣の群れ。

それ故、結界で力を抑え込まれているとはいえ、そんな彼らを軽

々と薙ぎ倒すダンヤリン

フアに、ジーク達クランの面々は素直な感嘆の声を漏らしてしまう。  
「やるなあ……。副団長もリンさんも相変わらず強」

すると、ジークの背後で短い気合の声と共に強烈な打撃音が響いた。

思わず振り返ると、そこには背後から迫っていたらしい首ごとへし折られて絶命した魔獣

と、その当の殴り飛ばしたらしいミアの姿。

その拳には、錬氣で強化されたマナが淡い光として漂っている。

「……油断しちゃ、駄目」

「あ、ああ……。悪い、助かったよ」

それはそれだけ高濃度のマナを拳に込めていたということ。

感情の読み取れない淡々とした声色でこちらを向く彼女に、ジーク

は両手に二刀をぶら下げ

たまま思わず苦笑いを浮かべる。

そうしてリーダー達の武勇に奮起されるようにして。

団員達は、荒削りながらも魔獣達を再び押し返し始めていた。

「ギギ……ッ！」「ッ」

「シャアアッ！」「ふっ……」

そんな刻々と移り変わる戦況に注意を配りながら、団長・イセル  
ナもまた魔獣達の猛攻の中

にあった。

しかしそこに焦りの色は微塵もない。

あくまで華麗に、まるで舞うように最小限の動きで魔獣の攻撃を  
かわし、マナを伝わせた

サーベルで受け流して体勢を崩させてからの一閃を、

「盟約の下、我に示せ 冷氷の風渦」  
アイストーム

駄目押しの魔導を撃ち込んで次々と魔獣側の兵力を削り取っ  
ていく。

掌から拡がった青色の魔法陣。そこから生じた冷気は急速に放射

され広がり、魔獣達はその渦に揉まれて一挙に凍り付かされる。

「シフォン！ ハロルド！」

イセルナが叫ぶ。

今度はそれを合図にシフォンら遊撃隊と、ハロルドら支援隊が攻撃の体勢に入る。

「散開っ！」

その二度の彼女の号令で、それまで魔獣に押し迫っていたジーク達前線のメンバーが一斉に距離を置いた。

突然出来た、空間的余白。

「撃ち方、構え！」

『盟約の下、我に示せ』

そこにぼつねんと残される形になった魔獣の残党に向かって、

「てっっ！」

『アシローレ日輪の浄濁！』

シフォンの放った錬氣を纏った矢や遊撃隊の面々が放った銃弾、そして螺旋状に渦巻く光

撃の魔導が一挙に爆音と共に降り注ぐ。

残党達から上がる断末魔。だがそれはややあつて聞こえなくなつた。

急にしんとした周囲からゆっくりと晴れていく土埃。そこには討伐者らの攻撃を受けて遂に全滅した魔獣達の屍が累々と横たわっている。

やがて散開していた前線メンバーらは再び集まり直し、討伐漏れがないか まだ息のあ

る魔獣が残っていないかを確認して回ってゆく。

「……悪いな。これも、俺達ヒトが安心して暮らしていく為なんだ」

二刀をゆっくりと鞘に収めながら、ジークもまたそんな小声の言葉をこの忌み嫌われた怪

物達の末路へと投げ下ろす。

「団長、全滅確認しました!」

そして団員の一人がそう、代表して報告の声を上げた。

ジークも他の団員達も、ダンら幹部メンバーも、その一言に何処かフツと安堵の表情を漏

らす。構えていた得物も解いて心なしリラックスし始めた面々を見遣ると、イセルナは剣を

そっと鞘に収めてから言った。

「うん、任務完了ね。じゃあギルドに連絡して浄化班を呼んでちょうだい。浄化作業が済み

次第、撤退開始よ」

『了解!』

それは討伐終了を告げる一言。

その言葉にジークら団員達は皆、息ぴったりの返事で応えたのだ。った。

## 1 - (2) 蒼染の鳥

ブルートバードが拠点<sup>ホーム</sup>を置く街・アウルベルツは北方の大国アトス連邦朝の北東内陸部に位置している。四方に延びる国内の幹線街道にも近く、この辺り一帯における人や物の行き来の要衝ともなっている街だ。

ジーク達のホームは、そんな街の一角にあった。

「皆、お疲れさま」

<sup>バー・ブルートバード</sup>  
酒場『蒼染の鳥』。

イセルナはホームの敷地内にあるその店内で、任務から帰って来た一同を見渡して言う。

「今回も皆のおかげで魔獣討伐を成功させる事ができたわ。ギルドへの報告はさつきダンと

ミアちゃんに頼んだから、今日はゆっくりと休んで。明日からも頑張りましたよ」

『ういゝつす！』

締めの一音。団長のその言葉を以って今日は解散となった。

団員の大半はそのまま店の裏手にあるクランの宿舎へと向かっていき、残った面々も思い

思いに仲間との雑談を始めている。

(……ふう)

そしてジークもまた、そんな仲間達の緊張が解けリラックスした雰囲気の中に身を委ねる

ようにしてテーブル席の一角で静かに一息をついていた。

「やあ。お疲れさま」

「お疲れ様です、ジークさん」

「ん？ おう。お疲れ」

そうしていると、シフォンと盆にカップを載せたレナが歩み寄っ

てきた。

シフォンが対面するように席に着き、レナが二人分の珈琲を出してくれる。

ジークは「ありがとよ」と微笑む彼女に返すと、シフォンとかちんとカップを合わせて一先ず一口。熱過ぎず温過ぎず、且つしつこくない味わいがじわりと喉を潤してくれる。

それから暫く、二人は他の団員達のそれと同じように雑談に興じていた。

シフォンはクランの創立メンバーの一人ではあるが、ジークとは年齢が近い（といってもあくまで人族換算であり、実年齢では彼の方が遙かに上ではあるのだが）事もあり、二人は普段からこうして少くないプライベートの付き合いがある。

彼はジークがこのクランに所属するようになってからの、一番の友と言っても差し支えがなく、また同時に冒険者としても良き先輩でもあった。

「……しかし、ジークも随分と腕を上げたよね。以前よりも魔獣を討つ効率が上がっているように僕には思えるよ」

「そ、そうか？ ま、まあ一応これでも日頃の鍛錬は欠かしてねえし」

「ダンには突っ込み過ぎだと注意されていたけどね」

「うぐっ……。それは、確かに言われたけどさあ……。」  
褒めてくれたり、かと思えば手痛い所を撫でてからかってみたり。シフォンは、物腰が落ち着いている割には思いの外茶目っ気がある性格をしている。

そもそも、一般的にエルフは保守的・排他的な気質が強い種族と  
言われている。

なのに彼というエルフは、自分達多くの人々と積極的に交わって



いるように見える。それ

は前々からジーク少なからず引つ掛かっている疑問点でもあった。

「僕はね。妖精族はもつと……ヒトと共存するべきだと思っ  
ているんだ」

ふと脳裏に、以前シフォン本人が漏らしていた言葉が過ぎる。

苦笑と疑問符。二つの異なる思考と感情が混線するのを感じなが  
らも、ジークは目の前で

温厚な微笑をみせるこの友に話を合わせて相槌を打つ他なかった。

「何。ジークに向こう見ずな所があるのは昔からだろう？ これ  
もまだ、うちに来て日の

浅かった頃に比べれば大人しいものだよ」

すると今度は、近くの席で愛刀の手入れをしていたリンファが口  
を開いた。

芸術品にしてもいい程のその刃を、打ち粉で優しくポンポンと撫  
でつつ、フツと凜とした

容貌を緩めて何処か遠い日を見るような眼でそう微笑む。

「あ、あの頃は……。も、もうその話はいいじゃないですか。昔の  
事くらい……」

ジークは思わず口籠もった。

それはまだ、今よりも幾分か若かったが故の無茶を繰り返してい  
た日々。

がむしゃらさに身を任せ、同時にそれを自覚できていなかった日  
々。

「……そうだね。今はもう立派な僕達クランの一員だよ」

シフォンがそう言って微笑んでいる。リンファが静かに頷き、刀  
身を拭い紙に通す。

創立メンバーにして、冒険者としての先輩二人。

シフォンとリンファにからかわれるような格好になり、ジークは  
返す言葉もなくただ照れ

隠しに残りの珈琲をくいつと飲み干しに掛かる。

「……………」

そんなジーク達を含めた団員達の団欒の様を、イセルナはカウンター席から穏やかな眼差しで眺めていた。

団長として、一人のヒトとして自分がこのような居場所を作り出した事に喜びを覚えて。

「嬉しそうだな」

そして次の瞬間、渋い男性の声色がしたと同時に彼女の肩の上に突如として現れたのは、

静かに揺らめく青いオーラを纏った、一体の半透明な全身青色の孔雀。

「ふふっ、そうね。一仕事終えて一息つけているというのもあるのかしら」

「……今回はあまり力を貸してやれなかった気がするが。辛くはなかったか？」

「そんな事はないわよ、ブルート」

ブルート。それがこの青孔雀、イセルナの「持ち霊」の名だ。

「貴方のおかげで魔導をスムーズに使えるもの。私達だけが必死にならなくてもいいのは、

それだけクランの皆の実力がついてきているからでしょう？」

持ち霊。それは簡単に言えば、特定の人物と専属契約を結んだ精霊のことである。

本来、精霊族はその姿形すら千差万別で、このブルートのようにヒトのような力と自我を

備え、且つ自身の意思で顕現している個体は決して大多数とは言えない。

それ故“持ち霊付き”であることは世界中の奇蹟を司る彼らに認められたという魔導を扱

う者 とりわけ魔導師にとって大きなステータスであり、また魔導の実務上もおいても、

細かい詠唱を省略できるといったメリットを示すものでもある。

「それに……貴方は知性の精霊。元々戦いを好む者ではないでしょう？ だったら皆の成長

には感謝しなくっちゃ」

「……否めぬな。だがイセルナ、我は汝の持ち霊だ。……汝が生まれる前から、我はその魂

の音色に惹かれて契約を結ぶことを選んだのだ。必要とあらば多少の力は貸すつもりだぞ」

もっとも、イセルナが伴<sup>ルンナ</sup>霊族という“生まれながらに持ち霊を宿す民”の出身である為、

そのままそうした一般論が通用する訳ではないのだが。

「その辺りの思考が堅いのは流石知性の精霊といった所だね。はい、どうぞ。ミルクたっぷり

りのブレンド珈琲」

その会話に混ざるようにカウンターから出てきたのは、黒スーツにエプロン姿という格好

に身を包んだハロルドだった。

ソーサーに載せたカップをイセルナの前に置き、ちらとブルートのそんな堅苦しさと主へ

の忠義に微笑ましい視線を向ける。イセルナは「ありがと」と小さく返すと、そつと甘い味

に包まれた珈琲を一口、また一口と堪能し始める。

「それは我を褒めているのかけなしているのか……」

「褒めているに決まっているじゃないか。何せ克蘭の名前も、この店の名前も君から取ら

せて貰っているのだからね」

そうしれつと言ってみせる、ホームの食堂兼副業としての酒場の店主。

ブルートは若干胡散臭そうに目を細めていたが、特にそれ以上文句を言うつもりはないよ

うだった。

团长たるイセルナと、自分の名を冠したこの冒険者集団とその拠  
点。

その店内には、気付けば少なからぬ兵力にまで成長したこのクラ  
ンの団員達のくつろぎの  
姿が点在している。

語らう者、軽食を摂る者、或いはテーブルに突っ伏してくると  
寝てしまっている者。

そんな仲間達の中をレナはとてとと立ち回って給仕役を務めて  
いた。

イセルナもハロルドも、そしてブルートも。

暫しの間、三人は何処か達成感にも似た静かな感慨に浸っていた。

「ん……？」

ちやうど、そんな折だった。

カウンター内の壁に取り付けられた導話器（マナを用いた通信装  
置。電話のようなもの）

がはたとベルを鳴らし始めたのである。

「はい、もしもし。酒場『蒼染の鳥』です」

一度布巾でサツと手を拭い、ハロルドはゆたりと導話器に近付く  
と、その本体から伸びる

筒状の部位を耳元に当ててこの掛かって来た通信に対応していた。

カウンター席のイセルナが、刀の手入れを終えようとしていたり  
ンファが、談笑を続けて

いたジーク達、この場の面々がおもむろに彼へと視線を遣る。

導話器の前でハロルドは何度かこくこくと頷いていた。

「ジーク君」

「あ、はい。何ですか？」

それからややあつて、受話筒を胸元に遣って振り返ると、

「君に導話だよ。例の弟くんから」

思わず姿勢を伸ばし気味にしかけていたジークに、彼はそう告げ

た。

「もしもし。僕、アルス・レノヴィンといいます。兄さ……ジーク・レノヴィンの弟です。」

今そちらに兄はいますか？ お話は伝え聞いていらっしゃるのですが「所変わってアウルベルツ駅の構内。」

その導話器がいくつも設置されてたスペースの一角で、アルスはこれからお世話になる下

宿先へと一報を入れていた。

『ああ、君がそうなのかい？ 初めまして、話はジーク君から聞いているよ。今度こっこの魔導学司校アカデミーに入学するんだってね』

兄が所属しているクラン・ブルートバードの連絡先をダイヤルすると、応対してきたのは

紳士然とした声色の男性だった。

以前聞かされていた面々の情報を記憶から辿る。確か下宿先は酒場も兼務していた筈だ。

という事は、この声の主がその店主も兼ねている……ハロルドさんなのだろう。

『でも、確か彼の話だと入学式まではまだ日がある筈じゃなかったかな？』

「え……？」

しかし次に導話の向こうのハロルドが紡いだ一言。

アルスはその言葉を聞いて、思わずため息と共にくしゃつと頭を抱えた。

「兄さん、伝え忘れてたんですね……。実は学院から連絡がありました。大事な伝達事項が

あるので僕には早めに手続きに来て欲しいと……」

「ああ……。なるほど」

アルスが改めてそう事情を説明すると、ハロルドも納得と嘆息を

漏らしたようだった。

『じゃあ、ジーク君に代わった方がいいね。彼なら今テーブル席にいるから』

「あ、はい。お願いします」

言われて応えると、ガサゴソと雑音が混じった。遠巻きに兄が呼ばれているのが聞こえて

くる。アルスが暫くそのまま待っていると、ややあつて兄が導話に出てきた。

『おう。どうした、アルス？』

「どうしたじゃないよ……。兄さん、伝え忘れてたでしょ？ 学院から早めに手続きに来て

くれて言われたから出発の予定を繰り上げるって。この前導話したじゃない」

『えっ、そうだったっけ……。じゃあお前、まさか今こっちにいるのか？』

「いるよあ。今さつき駅に着いた所。……。ホント、念の為に連絡を入れてみてよかったよ」

ぶくつと頬を膨らませてアルスと言う。

導話の向こうで兄は慌てているようだった。やはり完全に頭から抜けていたらしい。

こんな事なら、あの時クランの団長さんなりに繋いで貰っておけばよかったなあ……。

アルスは受話筒を耳元に当てたまま、今更ながらにそんな事を思う。

『わ、悪い。すぐに迎えに行く』

「いいよ別に。住所も分かってるし、ここには前にも受験で来て多少の地理なら調べてある

から。それよりも兄さんは今度こそクランの皆さんにちゃんと伝えておいて？ このままだ

と僕が勝手に押しかけるみたいになっちゃっよ」

「ぬう……。わ、分かった。すまん……」

「うん。じゃあ少しゆっくりめに時間を潰しながらそっちに向かうね」

バツの悪そうな兄に今度こそ伝達をと念を押して、アルスは受話筒を置いた。

途端に意識を一齐に刺激するのは、ざわつく構内の雑音達。

目を遣った改札の向こう側では、大陸の各地を結び、多くの人々を運ぶ列車が何台も鎮座しており、再び走り出すその時をじっと待っている。

機巧技術。それは魔導と並ぶ今日の文明の要、二大技術体系の片輪だ。

歴史の長さでは魔導に及ばぬものの、かつての「大帝国」時代に大成されたこの機械を自在に作り出す技術は、鉄道や飛行艇、鋼車（いんこう車）（自動車のようなもの）といった、各地で開拓の進む今日の世界に不可欠な技術となっている。

魔導が人的要素の強い技術だとすれば、機巧技術は物的要素の強い技術。

今日の活発な人や物の行き来と豊かな暮らしは、この両者が上手く相互に活用される事によって成り立っていると言ってもいい。

「ジーク、忘れてたんだ？」

するとぼうつと構内に目を遣っていたアルスの少し上から声が降ってきた。

アルスが視線を移すと、そこには中空にふよふよと浮かんでいる、翠色のオーラを纏わせ

た一見して踊り子風な衣装の少女の姿。

彼女の名はエトウルリーナ、通称エトナ。アルスの持ち霊である。「うん。だから兄さんがクランの皆に話している間、僕は遠回り  
で向かおう？」

「それはいいけど……大丈夫？ 迷わない？」

「大丈夫だよ。地図も持って来てるし、いざとなれば人に聞けばいいしね」

アルスは苦笑いをして言った。

心配し過ぎなんだよ。兄さんも、エトナも。

（兄さんだつて忙しいんだ。僕らの為に一生懸命働いてくれている。なのに、僕は……）

ぐっと胸の中を撫でる心苦しさ。

アルスはそんな感覚を払い除けるようにざっと周囲を見渡してみた。

案の定、ちらちらと往来の視線が自分達に向いているようだ。

精霊の存在自体は一般の人々の間でも常識のことだ。しかし実際にその姿を知覚できる者

は限られている。魔導を修め、しっかりとしたマナの制御を身につけている者であるか、或

いは精霊自身が人前で顕現してみせているかのどちらかでない限り、それが常識。だけど 自分がその事に気付くのは、もっと後になつてからだった。

「……アルス」

そんなぼんやりとした思考に気付いたのが、エトナが控えめな声を掛けてきた。

自分を見る表情は心配の毛色を映し、外見の可憐な少女らしい優しさを宿している。

「……。大丈夫だよ、行こっか」

分かっているからこそ、アルスは彼女に微笑で応えていた。

そして足元に置いていた大きめのキャリーバッグの取っ手を握り締めると、アルスは彼女

という持ち霊を伴い、その紺色のローブを翻してその場を後にする。

世の冒険者たちはその活動を保障されるべくとある組織に加盟し



ている。

それが七星連合<sup>レギオン</sup>。世界中の冒険者を統括し、彼らと依頼主達との仲介などをこなす、民間最大の武の勢力である。

元々は魔獣の脅威から人々を守るべく創設された組織だが、今日ではそうした「傭兵畑」

だけでなく広く一般の人々からの依頼とそれらを主力とする「便利屋畑」の冒険者も多く抱えており、世界各地にその支部<sup>ギルド</sup>を構えている。

「次の方どうぞ〜」

それは此処アウルベルツも　というよりも、ある程度の規模の街ならずべからく　例

外ではない。窓口職員の女性に促され、窓口に延びる行列の一つで待機していたダンとミア

の父娘はようやく自分達の順番を迎えていた。

「依頼完了の報告に来たんだが」

「はい〜。ではカードと報告書類を提出して頂けますでしょうか」  
言われて、ダンは懐に手を伸ばした。

取り出したのは一枚の薄い金属製のカード。

七星連合加盟証　通称レギオンカード。レギオンに加盟登録した者一人一人にに交付されている、冒険者としての身分を証明するIDカードである。

ダンがカードを、ミアが抱えていた今回の依頼書類を窓口に出すと職員はそれらを受

け取り、まずはカードを手元の専用機器の溝部分<sup>リーダー</sup>に通した。

ピコツという機械音と共に、魔導の力で手元の空間に出力されている画面に次の瞬間、多数のデータが映され始めた。

彼女はそれらとミアが渡した書類を見比べてから、

「はい。クラン『ブルートバード』副代表ダン・マーフィさんです

ね。少々お待ち下さい」

そうデータ照会を通ったことを告げると、そのままの流れで慣れた様子で手続き業務を進めてゆく。

「ミア」「……何？」

そうして待っていると、ふとダンが隣に立っているミアに呼び掛けた。

「先に帰ってていいぞ。今日は疲れたる？ 後は俺がやっつくから。ついでに次の依頼の目星をつけてから帰るからさ」

「……分かった」

こくりと小さく頷いて、ミアはその場から離れた。

窓口の周囲にはたくさんのテーブルや依頼書が張り出している掲示板が設置されており、そしてそれらを吟味したり雑談を交わしている冒険者達（あそび者）がわんさかと屯している。

そんなある種当然ながらにむさ苦しい空間を横切り、ミアはギルドの玄関を出た。

街の大通りに面した、賑わいのある区画の中という立地条件。それだけでもこの組織が持つ力の大きさが垣間見えてくる。

「おっ？ 可愛いネコちゃん発見」

ちようどそんな時だった。

ふとミアに向かって掛けられた声。その方向を見遣ってみると、ギルドの敷地の傍で二人

組の若者がこちらに近付いて来るのが見えた。

細身のキザな風体と、小柄だが気の強そうな面構え。

二人はミアの左右を囲むようにして立つと、ヘラヘラと笑いながらこう声を掛けてくる。

「ねえねえ、ギルドから出て来たって事は君も冒険者？」

「実はさ、俺らもこう見えて冒険者やっつてんだ。よかつたら組ま

ない？ 俺らが色々教えてあげるからさ」

そんな口実を作ったナンパ。

ミアは寡黙なまま眉間に皺を寄せ、じつとこの二人を睨み返した。だがそんな彼女の元々の口数の少なさを、彼らは別の 手前勝手な意味で 解

釈で以って捉えたらしかった。

初対面なのに馴れ馴れしく、そして下心が透けて見えて。小柄な方の若者がそつと手を伸ばして

「……ボクに、触るな」

バシッと、次の瞬間ミアはその手を少々乱暴に振り払っていた。加減はしたつもりだった。しかし父譲りの、獣人族という種としての身体能力の高さは殺し切れず、その軽い一発ですら彼は大きくよろめき、弾き飛ばされていた。

「なっ……!?!」

驚く当人とその相棒。

「この、屁あつ！」

だが驕りに覆われたこの若者達に、自身と彼女の力量差を見出すことはなかった。

代わりにむしろ二人は一気に怒りの沸点を越え、うち細身の若者は腰元に下げていた小剣を抜き放つといきなりミアにその刃を振り上げてきたのである。

反射的に身体を反らしてその斬撃をかわしたミア。

しかし僅かにだが、その頬には赤い一筋が走っていた。

「……」

身勝手に逆上した若気の冒険者二人。突然始まった刃傷沙汰に悲鳴や驚きの声を漏らして視線を向け始めた往来の人々。

(面倒な事になった……)

ミアは相手とは違い、冷静に周囲の様子を窺いながらそう思っていた。

この程度で平静を失うような雑魚なら、軽く一撃を叩き込めば終いだらう。だが強い力で

あればある程、その行使には慎重でなければならない。

「こんのお！」

それでも対する細身の冒険者は再び小剣を振りかぶって地面を蹴っていた。

やれやれ……。仕方ない。

半ば嘆きに近いたため息と共に、ミアは静かに拳を握った。

あまり気乗りしないまま、大上段で飛び込んでくる彼の土手っ腹に一撃を。

「盟約の下、我に示せ ウィンドダート 風紡の矢」

「ふッ!？」

だがミアの拳が振るわれる事はなかった。

代わりに聞こえてきたのは、驚愕の混じった細身の冒険者の短い声ならぬ声。

一瞬、スローモーションのように見えた。

彼が斬りかかって来る、まさにその瞬間に螺旋状の風の塊がその横っ腹に命中し、彼をそ

のまま思いつ切り吹き飛ばしたのである。

ズザーッと通りの石畳に転がり、気絶した若者。何が起こったのかわからず目を丸くして

いるもう一人と、同じく往来の野次馬達。

「……？」

そしてミアはゆっくりと視線を移して、見た。

風の塊が飛んできたその先に、一人の少年が立っていたのを。

紺色のローブに身を包み、紺の混じった黒髪をしたヒューネスの少年。

小柄な体格をしているせいもあるのかもしれないが、自分よ

りは二つ、三つは年下に  
見える。

何よりも目に強烈に目に映ったのは、こちらに向かってかざされた掌を中心に展開され、  
今まさにそつと消えようとしている白色の魔法陣。そして、彼に付き従うように中空に浮い

ている碧色の 十中八九精霊の少女。

それは他ならぬアルスとエトナの姿で……。

「……もしかして、魔導？」

普段あまり感情を表に出さないミアも、流石に驚きの気色を漏らしていた。

「オラアツ！ てめえら、俺の娘に何してやがる！」

だがそんな驚きも束の間、気付くとギルドへの報告と軽い下見を終えたダンが泣く子も黙

るような怒声を上げて姿を見せる。

その様はまさに怒れる獣そのもので……。

思わずビクツと身を振るわせる野次馬達と、そして残されたもう一人の若気の冒険者。

「げっ……。親父同伴だったのかよ」

すると流石にこの状況はマズいと踏んだらしい彼は、

「お、おい。逃げるぞ！」

「うあ……。？ ちょ、無理……。身体が、動か」

「待てやゴラアツ！」

「ひいっ！？」

一度は相棒を揺り起こそうとしつつもダンの二度目の怒声に完全に怯え、そのまま彼を路

上に放置したまま一人猛ダッシュで逃げていってしまう。

「あ！ このッ……！」

「もついい、お父さん。ボクなら大丈夫」

「ぬう？ まあ、お前がそう言うなら……」

すかさず追いかけてようとしたダンだったが、それは他ならぬミア自身が止めていた。

これ以上状況をややこしくしても意味は無い。それよりも……。「……あ、えっと。大丈夫でしたか？」

マーフィ父娘が振り返ると、おずおずとアルスが近寄って来ていた。

ふわふわとその後ろをついて来るエトナも、自分達に向けられている周囲の往来の眼に若

干の気まずさにも似た思いを感じているらしくその表情は繕った苦笑いのそれ。

「うん。平気」

「もしかして、さっきのは坊主が撃つたのか？」

「はい……。歩いていたらそちらの娘さんが暴漢に襲われそうになっ

つていまして、つい」

驚く二人に、アルスは謙遜を通り越した苦笑で弁明していた。

こんな少年が魔導とは。十中八九同じ感想を抱いて互いの顔を見る二人だったが、

「あ。そこ、ほっぺ怪我してます」

「？ うん……。大丈夫。これくらい放っておいても」

「駄目ですよ。女の子だから顔の傷にそんな無頓着でいちゃ」  
次の瞬間、ミアの頬の赤筋に気付いたアルスにずいっと詰め寄られる。

そつと彼から差し伸ばされる手。

「今治しますね。ちょっとじっとして下さい？」

言って、アルスは軽くその傷口に掌を当てると静かに呪文を唱え始めた。

「生けとし生ける者を支え見守る黒霊よ。汝、我が朋の抱えたる傷を癒し給え。我はかの者

の痛みを、傷を治せしむことを望む者……」

するとその詠唱と共にアルスの掌から淡い光が漏れ始めた。

どつしりと落ち着いた、包容する鮮やかな黒土色の光と彼の足元に展開される魔法陣。

「盟約の下、我に示せ 地脈の癒キュアライト」

つむぎ終わったその瞬間、光がゆっくりとミアの頬の傷に集まっていた。

ほんのりと温かな熱を伴う感覚。だがそれもほんの数秒のこと。「……はい。終わりました」

そう言っただけで魔法陣を消去して一歩後退した時には、そんな感覚は静かに消え失せ

ミアの頬にできていた筈の赤い筋は跡形も無くなっていた。

「……………」

ぼくと頬に手を当てて目を瞬かせているミア。にこっと優しく微笑んでいるアルス。

暫くミアはまるで何かに取り憑かれたようにそんな彼の見上げる顔を見ていた。

そんな彼女に、小さく疑問符を浮かべて小首を傾げるアルス。すると暫しそんな様子を娘

の傍らで見っていたダンが、

「あ……。その、なんだ。すまん。娘を助けてくれたみたいで照れと訝しさ半分の苦笑でぼそつとようやく口を挟んでくる。

「いえいえ。僕の方こそ余計なお節介ではありませんでしたか？」

「そんな事はねえさ、ありがとよ。ほらミア、お前も礼ぐらい言えつて」

「あ。うん……。あ、ありがとう……………」

「はい。どういたしまして」

ダンに促されてぼそつと礼を述べるミア。

しかしその視線は何故か定まらず、何処か頬もほんのり赤く上気しているように見える。

「むう……………」

そんな彼女の表情を認めてエトナはアルスの背後で小さくむくれ

始めていたが、当のアル  
ス本人は全くそんな事には気付く様子もなく、にこにこ微笑んで  
いる。

（ん？ ミア？ 猫の獣人さんの親子……。これって兄さんの  
言ってたクランの……）

その代わりにアルスはふとそのやり取りの中で飛んでいたフレ  
ズに、はたと思い当たっ  
ていた。ぶつぶつと呟きながら一度眉間に皺を寄せる。そしてやや  
あつて、アルスは思い切  
つたように二人に訊ねたのだつた。

「あ、あの……。もしかしてですけど、お二人ともブルートバード  
っていう冒険者クランを  
ご存知ですか？」

「あん？ 知ってるも何も、俺らの克蘭だよ」

「……お父さんが副団長」  
「ああ……。やつぱり！」

予想的中と言わんばかりにアルスは破顔した。傍らのエトナも「  
おお？」と驚いている。

「そうだったんですね。えっと自己紹介が遅れました。初めまして、  
僕アルス・レノヴィン  
といます。ジーク・レノヴィンの弟です」

「ジークの……弟？」

「おお！ そうだったのか。お前さんがあいつの……。話なら聞い  
てるぜ」

その言葉を聞いて、ミアもダンも差異はあるがパツと驚きと歓迎  
の気色を見せた。

ペこりと頭を下げてお辞儀をする彼にミアは目を瞬かせ、ダンは  
陽気に豪快に笑う。

「ちようどいいや。これから俺達もホームに帰る所だ。一緒に来る  
か？」



くいつと立てた親指でホームのある方角を差しながら訊ねてくる  
ダン。そしてコクコクと

小さく何度も頷いているミア。

「……はいつ。勿論です」

アルスはエトナと一度顔を見合わせると、満面の笑みでそう答え  
たのだった。

1・(3) 兄弟と三人娘

「え、えっと……。あ、改めてよろしくお願いします。お世話になりそうです」

その後、マーフィ父娘と共に『蒼染の鳥』に到着したアルスとエトナは、ジークより話を

聞かされていたイセルナ以下団員達の出迎えを受けることとなった。その思っていた以上のウエルカムぶり　というよりも大人数の眼差しに対して面食らい

ながらも、アルスは何とか笑顔を作ると、これからお世話になる下宿先の面々にコクリと頭を下げてそう挨拶をしていた。

「そんなに硬くなるなって。俺だっているんだし、そんなに気兼ねされても困るって」

「ふふ。そうね。少々騒がしい所かもしれないけど、自分の家だと思っ……ね？」

「……はい。ありがとうございます」

「ははっ、良かったねアルス。いい人達みたいで」

「うん。そうだね……」

ジークやイセルナ達は、そんな礼儀正しい彼に逆に若干の戸惑いを感じつつも今日から加わるこの新しい仲間を微笑ましく見る。

「でも、凄いやね。アルス君ってアカデミーに入学するんだよね？」

試験、結構難しいって

聞くのに」

「……そういえばアルスって、何歳？」

「十六だ。俺より三つ下だからな」

ポンと手を合わせて感心するレナと小首を傾げて呟くミアに、ジークが代わって答えた。

ちなみにレナは十七歳、ミアは十八歳である。

「ふむ？ だとすれば浪人でもしたのですか？ 確かアカデミーの受験資格は“成人である”

こと ヒューネス換算で十五歳以上”の筈ですが」

「い、いいえ。一応これでも現役合格……です」

ハロルドの言葉に、気恥ずかしそうに答えるアルスの言葉。

その返答に「おお〜！」と場の面々が驚きの声を上げた。そんな面々の中空では何故かエ

トナがさも自分のことのように胸を張っている。

レナも言っていたように、確かにアカデミーはその門戸自体は開かれていた。成人に達してさえいれば性別や種族、出自は問わない。だが魔導師という世界が必要とする人材を育成

する場所が故にその分入学試験自体のレベルは高く、一筋縄では合格できない筈なのだ。

否が応なしに向けられる羨望の眼差し。

アルスはそんな皆の視線に照れたように苦笑し、ポリポリと頬を搔いていた。

(……？ リンさん？)

ただ一人、ジークはその中であって、

「どうかしたんすか、リンさん？ さっきからアルスを見てぼくっとしてますけど」

「えっ？ あ、ああ……いや、何でもないさ。ただ顔立ちこそ似ているが、兄弟なのに随分

と違うものだなと思ってね」

「ん……まあそうっすね。お互い強く受けてる血が違うんですよ。

俺は母さん アマゾンネス 女傑族の、

あいつは父さん ヒューネス 人族の血を濃く継いでるらしくて」

何処か上の空なようにも見えるリンファを認めて、そう声を掛けると、彼女のその疑問に

あつさりとした口調で答えていた。

「……。そうか」

大陸同士の行き来が難しかった大昔とは違い、今は飛行艇の航路も整備され人々の往来も

活発になってきている。それに伴い、異なる種族同士の恋愛・結婚も最早珍しくはない。

だがリンファは何を思っているのか、苦笑の後に微笑を漏らすと、そう短く呟いた。

「十六か。だつたらもう成人の儀は済ませてるんだよな？ よぉ〜っし、今日は宴会だ！

おいハロルド酒を」

「駄目だよ、ダン。アルス君はさっき着いたばかりなんだし、せめて今夜にしなよ」

ダンは既にアルスの歓迎（というよりもそれが口実で酒が飲めること）で笑っていた。

しかしそんな酒豪の彼をよく知っているからか、そこですかさずシフォンがやんわりとそ

う言つてその企みを諭す。

「そうね。アルス君の歓迎会をするにしても準備は要るし……。それでいいかしら？」

「え？ でも、わざわざ僕のためにそんな……」

「気にすることはないよ。こういう時に騒ぐのは冒険者の習性みたいなものだからね。料理

やら準備やらは任せておいてくれ。いいかな？ 二人とも」

「まあいいっすけど。お前らもいいよな？」

「う、うん……。大層だとは思っけど兄さん達がそこまで言ってくれるなら……」

「私もオツケーだよ。というかアルスがうんっつていうならついでにだけだもん」

「よっしやあ！ 今夜は宴会だぜ！」

そうして話がまとまり、ダンは心底嬉しそうに笑った。

ぐいっとその太い腕を肩に乗せられ、ぐわぐわ揺らされる脳味噌ごとアルスの周りで、他の

の団員達も宴会と聞きテンションが上がり始めている。

「あ……。副団長、とりあえずアルスを離してやってくれませんか？ 夜からなら、それまで

に俺達は細々とした用事を済ませてきますから」

「ん？ おう。例の学院の手続きがどうのってやつか」

「ええ、そんな所です。いくぞアルス、エトナ」

「はい」

「う、うん。じゃあ皆さん、一先ず僕たちはこれで」

そしてジークはそんな面々の渦中から弟を引き取ると、改めてペコリと皆に頭を下げる彼

の代わりにキャリーバックを持ってやり、三人して宿舎の方へ歩いていく。

「へえ、これがジークの部屋なんだ」

冒険者クラン「ブルートボード」が拠点を構える敷地内は、大きく分けて三つの施設に分かれていて、

表の通りに面する形で団員らの食堂を兼ねる酒場『蒼染の鳥』が。

その裏手の空き地 中庭はクラン面々の運動場として使われ、更にその向かいには団員

らが寝泊りする横長の宿舎が一棟建っている。

「何だか、思ってたよりもこざっぱりしてるかも」

「というより……物が少ないんじゃない？」

「……まあ基本、寝泊りに使うか着替えを置いてるかだけだしな」  
ジークが使っている部屋も、団員の例に漏れずその宿舎の一角に宛がわれていた。

本人の言葉の通りやや殺風景な室内を見渡しつつ、アルスとエトナは言う。

「宿舎は基本、二・三人で一部屋になつてる。まあここはお前が来るって分かつてた事もあ  
るから俺一人だったんだけど。トイレ兼手洗い場は各階の真ん中と端っこ、風呂場は一階の  
真ん中だ。使い方とかの細々とした決まりは……まあその内覚える  
だろ。分からないことが  
あつたら俺や他の連中に遠慮なく訊いてくれ」

「うん。分かった」

ボフツと二段ベッドの下に腰掛けてジークがさらうように説明を  
してくれ、アルスは微笑  
みながら頷いていた。キャリアバッグから荷物を取り出し、一先ず  
仮の整理を始める。

(あ……)

そこでアルスは気付いた。

窓際に真新しい机と空っぽな本棚が置かれていることに。

(もしかしなくても、これって僕の為の……なのかな?)

兄は自身が口にするくらいに勉強が苦手だ。だとすればこれらは  
十中八九自分の下宿に合  
わせて用意され、運び込まれたものだろう。

アルスは素直に嬉しかった。

口調も言動も、いつものぶっきらぼうなままの兄。

だが、こうして密かに自分の為に手を回してくれる不器用な優し  
さが、嬉しかった。

エトナもそんなアルスの内心の嬉々を読み取っているのか、ここ  
にこと静かに微笑を見せ  
つつ、自分を見下ろしながら中空に漂っている。

「……なあ、アルス」

そうして荷物を整理していると、ふとジークがベッドに腰掛けた  
ままの格好で声を掛けて  
きた。アルスは「何?」と言わんばかりに振り返り、いつの間にか

じつと目を細めて自分を  
見ている兄の表情を確認することとなる。

「お前、本当に宿舎でよかったのか？ はっきり言ってここは騒が  
しいぞ？ 依頼によっち

やあ昼夜関係なしで動くしよ。それに学院の近くにアパートを探し  
た方がよっぽど環境は」

「ううん、大丈夫だよ。僕は……こっちの方がいいんだ」

兄の何度目かになるその言葉に、アルスは半ば遮るように答えて  
いた。

実は受験の為に一度アウルベルツに来た時も、アルスはクランの  
面々に顔を出そうと思っ

ていた。普段兄が世話になっているその仲間達に、せめて挨拶ぐら  
いはしたいと。

だがそれは他ならぬジークが断わった。

曰く「お前は大事な時期なんだから、今は受験に集中しろ」と、  
わざわざ学院近くに宿ま  
で取ってくれて。

そしてその後合格通知が届き、今度は 少なくとも在学中はこ  
の街に住むと決まった時

も、彼は同じくアパートを探してやるうかと打診してきたのだ。

しかし、今度はアルスがその申し出を断わった。

『僕なら兄さんの部屋でいいよ。クランの皆さんがいいよって言っ  
てくれればだけど……』

家賃だってゼロにできるし、母さんも兄さんと一緒だったら少しは  
安心すると思うんだ』

そうして切り出した、このクラン宿舎への下宿話。

ジークはその時も「勉強に集中できるのか？」などと渋って  
心配してくれたが、家賃

や母の名を出された事で最終的には承諾し、話を通してくれた。

とはいえ、その際にアルスが口にした言葉。それは半分本場で、

半分は違う。

確かにそうだった打算があったのも事実だが、本音を言えば“久しぶりに兄さんと一緒に暮らせる”からというのが大きかった。

「……そっか。ま、お前がいつて言うなら無理強いはできねえしな……」

十五歳 成人の儀を済ませるや否や、一人故郷を飛び出してしまった兄。

寂しかったのかもしれない。息子が足早に姿を消してしまい、ぽつねんとしていた母の心の機微に影響されていたのかもしれない。

だから母の為に 自分の本音からも、アルスは一人暮らしよりも兄（とクランの皆）との再びの共同生活を望んだのだった。

「あ……。とりあえず荷物の整理は大雑把でいいぞ？ 必要なら後で何人かに応援を頼めばいい事だしな。それよりも、軽く一服したら学院へ行くぞ。さっさと急かされた手続きとやらを済ましちまおうぜ」

「……うん。そうだね」  
腰掛けたベッドから起き上がり、ガシガシと髪を掻きながら言うジーク。

アルスは荷物に伸ばしていた手を止めると、そんな思いをごまかすように苦笑した。

一方、時を少し前後して。

レナとミアは同じく宿舎内の相部屋でのんびりと昼下がりの時間を過ごしていた。

「……………」  
ただ一つ、いつもと少しだけ違っていたのは、ルームメイトたる



ミアの様子が何だかおかしいという点で。

(ミアちゃん、どうしたのかな……?)

レナはぱらりと手に取る本のページを捲りながらも、テーブルに両肘をつきぼんやりと何か物思いをしているかのような彼女を時折ちらちらと覗き見るように見遣っていた。

同じクランの創立メンバーの娘同士(といってもレナ自身は養女だが)として、二人は物心がつくよりも前からの付き合いがある。

決して口数は多くないが、いざという時は主張し肝の据わっているミア。

養父譲りの柔らかな物腰と、控えめで常に相手を立てる清楚可憐なレナ。

お互いに補い合うように、惹かれ合うように、二人はこれまで幼馴染 いや親友としての関係を重ねてきた。

ただ、ちなみにもう一つ付け加えるとすれば  
。「…………ん？ あ、は〜い」

コンコンと控えめなノックの音。

レナははたと気付き本から顔を上げると、反射的に返答を寄越す。  
。「…………入ってもいいかな？」

するとそつとドアを開けて顔を出してきたのは、白系の銀髪を左右の耳元辺りで結い、淡く黒いローブに身を包んだウィザード眞法族の少女。

年齢は二人よりも下の十六歳。とはいえ、ウィザード特有の銀髪がその印象を実際よりも少し上に、神秘的にも見せている。

ステラ・ルーシエル。

付き合いはまだ短いものの、二人と行動を共にするもう一人の親

友とも言える少女だ。

「うん。勿論」

レナはふんわりと微笑んで即答していた。  
するとステラはきよきよと辺りを見渡してから、おずおずと室内へと入ってくる。

「ねえさつき、誰か来ていたみたいだけど……?」

「うん。アルス君っていつてね、ジークさんの弟さんだよ。今度こ  
つちのアカデミーに入学  
するんだって。凄いよねえ」

それはまるで人の眼を警戒するような、怯えの混じった様でもあ  
つて。

「ジークの……そっか。あ、えっと……」

「大丈夫だよ。さつきお父さんが、ジークさんと一緒に出掛けたく  
て言っていたから。すぐ  
には帰って来ないと思うよ?」

だがそれは無理からぬ事だった。

「……。うん」

何故なら、彼女は“とある事情”によりこのホームで半ば引き籠  
もりに近い生活を送って  
いるのだから。

籠り切り故かはたまた元々の体質か。

ステラは先んじてレナに微笑と共にそう補足を受け、白い肌と銀  
髪の下で複雑な表情を浮

かべていた。くると、耳元の横髪を指先で巻いてはゆるりと離  
して弄って場を濁す。

「それで……ミアはどうしたの?」

だがそんな彼女も、先程から上の空状態のミアには気付いていた  
らしい。

レナは静かに苦笑いを零してから、肩をすくめてみせて言う。

「よく分からないんだけど、さつきからずっとこんな感じなの。ダ

ンさんと一緒にアルス君をホームに案内してきてからかなあ……？ 私が呼びかけてみても全然反応しなくて」

「ふうん……」

ステラはその話を聞きながら、暫くじっとミアの横顔を見遣っていた。

対するミアは、相変わらずテーブルに両肘をついたままぼんやりとしている。

すると、ややあつてステラはおもむろに立ち上がった。レナはその行動に、頭に疑問符を浮かべて見守っている。

そしてステラは、そつとミアの傍らに忍び足で近寄って。

「アルスが来てるよ」

「……！？」

ぼそつと、彼女の耳元にそんな一言を囁く。

次の瞬間、それまで心ここに在らずといった状態だったミアが突如として反応した。

頭の猫耳とふさつとした尻尾が一緒にビクンと逆立って跳ね上がり、まるで弾かれたように身を返して部屋の奥へと飛び退る。

「……？ あれ、ステラがいる」

「み、ミアちゃん？ 大丈夫……？」

驚いていたのはミアは勿論、レナも同じだった。

そんな互いに別々に驚きや戸惑いの表情を見せる二人を、ステラは暫し黙して観察しているようにも見える。

「うん。やっぱりね」

そして、ステラはその中で何かを確信したように言い放った。

「ミアはアルスに惚れている」

「えっ」「ッ！？」

レナは短い驚きを。ミアは茹で上がったように耳まで真っ赤な表情で。

そしてミアのそれは、語るまでもなく彼女の言葉が間違っていることを認めているようなもので……。

「ええっ!? それって本当なの、ミアちゃん? そっかぁ。ミアちゃんが……」

「ち、違う。ボクはそんなこと一言も……」

「でも顔に出てるよ? ミアには珍しいくらいはつきりと真っ赤っか」

「……っ」

ミアは頭がショートしたようにふらふらとしながら、その真っ赤になった自身の両頬を押さえて押し黙ってしまっていた。

その傍らに寄ったレナは何故かウキウキしながら、まるで自分の事のように満面の笑みで

そんな親友を微笑ましく見遣って呟いている。

一方でステラは、そんな二人の友の姿を見つめながら、

「……ふふ。そっか。でもこれで“私達は皆”恋する乙女って事だね……」

小さな小さな声で一人、そうこちる。

「うわぁ……随分と人が多いんだね」

「うん。サンフェルノとは大違い」

一息の休憩を入れて支度を整えた後、ジークとアルス（そしてエトナ）はアウルベルツの街中へと繰り出していった。

「ま、そりゃそうだろ。この辺りじゃ一番大きい街なわけだしな」

少々興奮気味な二人とは対照的に、ジークは慣れっこな様子で腰の三刀を揺らしながらそ

の一步先を歩いている。

その言葉の通り、ジーク達の歩く通りの両翼には大小様々な露天が軒を連ねており、人族をはじめ多種多様な種族の人々が行き交っていた。

露天を開いている内の少なからぬ者は、商才に長ける奉人族<sup>サヴァノ</sup>。

往来を客に手相を視ているのは、額に第三の眼を持つ星詠の民・星眼族<sup>ジフシイ</sup>。

木箱を背負った両生類系の亜人は、優秀な薬師を多く輩出する蛙人族<sup>トリア</sup>。

軒先で酒瓶片手に碁を打っているのは、頭に角を持つ鬼族<sup>オグ</sup>と半人半器の付喪神たる宿現族<sup>イマジン</sup>。

各地から集まり、或いは旅立つ。そんな人々の流れがこの街に賑わいを形成している。

「分かってると思うが、人が多いからくれぐれもはぐれるなよ？」

二回目つってもお前はお

上りだしな。ここは村みたいに気のいい奴らばかりじゃないんだ」

「うん……分かってる」

ちらとすぐ後ろをついてくるアルス達を確認するように肩越しで見遣ると、ジークはそう

淡々とした口調で言葉を重ねていた。

アルスはそれに小さく頷いていたが、

「……やっぱり兄さんは、村に戻ってくるつもりはないの？」

ふと暫しの沈黙を挟むとそんな事を兄に問い返す。

ジークはその問いにすぐには答えなかった。再び振り返ることはせず、

「俺はこれでも一応、稼ぎの半分はそっちに送ってるだろ？ 責任は果たしてるつもりだ。

今の生活もそこそこ忙しいしな。依頼はこっちの都合なんて待つてくれねえし」

「そう、だよね……」

「……その、なんだ。母さんや師匠せんせいやリュカ姉、皆元気にしてるか？」

「うん。母さんもクラウスさんも、先生も村の皆も……元気だよ。僕がこっちに出発する前

には村総出でパーティまでしてくれたいし」

「そっか。変わんねえなあ、そういう所は」

ただじつと背を向けたままで往来の中を歩く。

「……それよりも今は、お前のやるべき事に集中しろ。皆もそれを望んでる筈だ」

「うん……」

背中であんなに語る兄。

アルスはか細く頷いていたが、その後ろ姿をまともに見ることはできなかった。

ジークはそんな弟と、自分達を複雑な表情で見比べているエトナの姿をそつと肩越しに――

瞥すると、曲がり角に差し掛かって言う。

「ほらこっちだ。さっさと行くぞ」

アカデミー 魔導学司校は、今日の魔導の最高学府・アカデミア 魔導学司が魔導師育成のために各地に設立・運営している教育機関である。

ある程度の人口規模を有する都市を中心に開校されており、難関の試験を通った者であればその出自は一切問わない。倫理と実践、何よりを実力を重んじる

そんな学び舎だ。

当のアカデミー・アウルベルツ校は、通りの角を折れ、緩やかな坂を上った先にあった。

「ちよつと待ちなさい」

どっしりと建てられた正門。

ジークがアレスとエトナを連れ立ってそのまま門をくぐるうとし

た時、はたと両端に立つ

ていた守衛らしき男性二人がその進路に割って入ってきた。

「君は何だね？ 剣を下げてこの学院に何の用かな？」

「あん？」「あ、えつと……」

彼らの視線の先には ジークが下げている三刀。

ジークは眉間に皺を寄せたが、アルスの方は素早く彼らの意図を察したようだった。

アルスは持つて来ていた手提げ鞆の中を弄ると、

「あの。僕、今年度ここに入学する事になったアルス・レノヴィンといえます。学院の方が

ら早めに手続きに来てくれと連絡を受けまして……。あ、こちらは付き添いに来てくれた兄

さんです。この街で冒険者をやっています」

紙製の『仮学生証』とプリントされたカードを守衛達に見せて、そう説明する。

「……ジーク・レノヴィンだ。これで身元は確認できると思うが」

弟のその対応を見て、ジークも若干面倒臭そうにしながらも懐から自身のレギオンカード

を取り出してみせ、余計な誤解を解こうと試みる。

「ふむ。冒険者か」

「レノヴィン……ああ、例の」

すると守衛達は、ゆっくりと警戒を解いたようだった。

内一人が傍の詰め所へと駆けて行って何処かへ連絡を取っていたかと思うと、再びこちらへと戻ってくる。

そしてそれまで塞いでいた道を、二人は促すようにして互いに身を退いて言った。

「失礼したね。どうぞ」

「一応言っておくが、学院内での無闇な抜刀は控えるように」

「……ういっす」「はい。では失礼します」

以前に受験で来ている事もあって、学院の敷地内に入ってからアルスが先頭に立った。

知的な静けさの漂うキャンパス内。まだ長期休業中ということもあるのだろうか、人の姿は疎らに思える。

アルスの記憶と構内の案内板を頼りに、三人はほどなくして事務局のある棟に着いた。

「あのく、新入生の入学手続きに来たのですが」

「はい。では合格通知と仮学生証を見せて下さい」

窓口から呼び掛けたアルスに、一人の女性職員が応対してくれる。アルスが鞆の中から言われた通りそれらを提示すると、彼女は手元に置かれた端末を操作して照会を開始。

「……はい、アルス・レノヴィンさんですね。それで、そちらの方は……？」

「こいつの兄だ。今日は付き添いで来た」

またかと片眉を上げてレギオンカードを取り出してみせるジークの返答を受けると、冷静

な事務的な口調で「そうですか」とだけ小さく頷いて一旦席を外し、後ろのオフィスの一角

から手続き用の書類の束を持ってきた。

「それでは、こちらに必要事項とサインをお願いします」

「はい。分かりました」

そしてアルスがそれらにペンを走らせ始める。

ふよふよと中空に浮いたまま、エトナは後ろからその様子を眺めている。

ジークも、これで一先ずかと窓際に背を預けて腕を組んで目を瞑り、じつと手続きが済む

のを待つことにした。

（アルスがアカデミーの生徒ねえ……。昔っから頭は良かったけど



……)

閉じた視覚の中、ペンを走らせる音が微かに聞こえてくる中、ジークは改めてそんなことを思った。

自分とは違つて勉強　魔導に才能に恵まれた弟。勿論、本人の努力も相当なものだが。

しかし剣を振り回すぐらいしか能のない自分に比べれば、よっぽどこの先彼はきつと世の中に通用する人材になると自分は思っている。

だからこそ、あの村の中で小さくまとまっていた欲しくない。そう思うのだ。

気心の知れた村人達との暮らしと“あの日”の辛い記憶が残るあの村には……。

(まあこんなのは所詮、俺の勝手な押し付けになつちまうんだろうけどな……)

行きがけにアルスにあんな事を訊ねられたからだろうか。

ジークは窓際にもたれ掛かったまま、静かにフツと自嘲気味に己を晒す。

「兄さん、終わったよ」

「ん……？　おう」

そうしていると、はたとペンの音が止んでいた。

鞆を提げ直しながら向き直ったアルスとエトナに、ジークは目を開いて身体を起こす。

「お疲れ。それじゃあ、さっさと帰　」

「あ、ちよつと待って下さい」

だがその時、ジークの台詞に割り込むように先程の女性職員が口を挟んできた。

何事かと振り向く三人に彼女は言う。

「え」と、アルス・レノヴィンさん。このまま学院長室へと向かつて貰えますか？　学院長

から直接会って話したい事があると伝達を受けています」

「学院長が？ アルスに？」

「はい、構いませんが……。ねえ兄さん。もしかして連絡のあった、早めに学院に来て欲しい理由って……」

「ああ。どうやらこの事らしいな」

「では少々お待ち下さい。学院長室に繋がりますので」

そして互いの顔を見合わせるこの兄弟を横目に、彼女は早速導話を掛け始める。

「こちらが学院長室になります。くれぐれも粗相のないように暫くして、三人は連絡を受けてやって来た一人のウィザードの女性によって、別棟の一角にある学院長室の扉の前へと案内されていた。眼鏡を掛け、ビシツとスーツを着こなした一見すると秘書風の外

見。

エマ・ユーディと名乗った彼女も、その道中の事務的な自己紹介からするにこの学院の教

員の一人であるらしい。

「あ……アルス・レノヴィンです。呼びに預かりさ、参上しましたっ」

傍で控えるエマの視線と目の前の重厚な扉、これから会う人物からかアルスは緊張で身体を硬くしつつも背を伸ばしてドアをノックしていた。

「はい。開いていますよ。どうぞ」

ドアの向こう側から返ってきたのは、穏やかな声色。

後ろのエマに無言で促されるようにして、アルスとエトナはおずおずといった感じで中へと足を踏み入れていく。

「……ようこそレノヴィン君。そしてその持ち霊・エトウルリーナさん。私が当校の学院長

を務めています、ミレーユ・リフォグリフです」

学院長・ミレーユは室内の上座の自身のデスクに着き、そうアルス達を出迎えた。

ウィザードである事を示す白系の銀髪が、さらりと長く流れている。

アルスはどれだけ老練な魔導師なのかと思っていたが、少なくともその外見は若かった。

フツと両肘をついて組んだ手。

すると彼女は入口の前で思わず立ち尽くしている二人を、

「そんなに緊張しなくてもいいですよ。さあ掛けて？ よければお兄さんもどうぞ」

「あ、はい……」

「……。じゃあ、失礼します」

そして廊下側で待機の姿勢を取っていたジークにも声を掛ける。

三者三様の戸惑い。

だがこのまま立ちっ放しというわけにもいかず、三人はややあつて彼女と対面するように

入ってすぐ傍、下座のソファへと腰掛けた。ポフンと高級さを示す沈み込みの感触が全身を

包み込む。

「先ずは合格おめでとう。そしてようこそ本校へ。私達教職員一同は貴方を歓迎しますよ」

「あ、ありがとうございます……」

ミレーユは一先ずといった感じで合格への祝辞を述べる。

その言葉にアルスは緊張して恐縮していたが、一方で隣に座るジークは対照的だった。

「で、学院長さんよ。まさかそれがアルスを呼んだ理由じゃないだろ？ 一体うちの弟が何を

をしたっていうんだ？」

言葉なく慌てるアルスに、中空から「ちょっとお。失礼だよ」と

視線を投げるエトナ。

ミレーユの傍らに移動していたエマも僅かに眉間に皺を寄せていたが、当のミレーユ本人は多少の荒っぽさには動じないらしく、むしろフツとその微笑を濃くして答えていた。

「勿論です。今回わざわざ早めに来て貰ったのは他でもありません。レノヴィン君、貴方に

は今度の入学式でスピーチを頼みたいのですよ。……新入生主席としてね」

『えっ!?!』

その言葉に、ジークとエトナは重なった驚きの声を漏らした。

だがそんな二人よりも、

「……………スピーチ? 主席? ぼ、ぼぼぼ、僕がですかっ!?!」

むしろ告げられた本人が一番驚いていた。

学院長直々という事もあるのだろう。アルスはソファにちよこんと座ったまま、動揺でぐ

らぐらと瞳を揺らしてその場で固まっていた。

元々あまり活発な方ではないとはいえ、コイツは…………。

ジークはそんな緊張で既にガチガチになってしまっている弟に向かって訊ねる。

「っーかお前が主席なんて聞いてねえぞ? 合格通知に点数は書いてなかったのかよ?」

「書いてないよお…………。合格したかどうかしか…………」

「試験の個人成績は、入学式の三カ月後までに事務局で手続きをすれば書類として発行されるようになっていきます。プライバシー保護の面もありますので」

「…………なるほど」

すると半ば泣きつくような返答をみせるアルスの言葉を補足するように、エマが眼鏡のブ

リッジを軽く押さえながら言った。

「ちなみにレノヴィン君の成績は二百点満点中、筆記試験は二百点。実技面接は百八十八点

でした。受験生の中でも断トツのトップ成績です」

「それに、確か面接前の導力測定（ようりょく）では750MC……だったわよね？」

「はい。今年の受験生達の平均値が520MCでしたから、こちらも高水準ですね」

ちなみに導力とは、個人が制御できるマナの限界量の指標（キャパシティ）である。単位はMC。一般人の平均は100MC前後だが、訓練による導力強化が大前提である魔

導師に関しては、一般的に1000MCを越えると一流と言われている。

「……改めて聞くと凄いな」

「すっごい、凄いな！ やったね、アルス」

「う、うん……ありがと。頑張った甲斐が、あつたみたいだね……」  
ミレーユとエマが教えてくれたアルスの成績。

ジークは驚きで勢いを削がれ、エトナはアルスの傍をくるくると飛び回りながら我が事のように喜んでいる。

ただ一人、当のアルスはまだ緊張しているのか、返す言葉はぎこちない謙遜だった。

「別にご実家に導話させて頂くか、書面を送れば済んだ事ではあったのですが……。内容が

内容ですし、直にお願いするのが筋だろうと思ったのです。それに……これほどの好成績を

収めたルーキー君をこの眼で見たいという個人的な理由もありまして」

口元に手を当てて上品に笑い、少し茶目つ気ばくそう理由を話したミレーユ。

そんな事の為に、わざわざアルスの上京を繰り上げさせたの

かよ？

対するジークは内心そう思っ  
てあまり面白くなかったが、  
はにかんで  
いる弟と嬉々として

いるエトナの姿を見ると結局言葉にする気にはなれなかった。

「それで、どうかしら？ スピーチ、引き受けて貰えるかしら？」

「あつ。えつと……」

そして改めて、この依頼に対する意思表示をミレーユは訊ねてくる。

アルスはまだ戸惑っているようだった。ちらちらとジークの、エ

トナの顔色を窺うように

視線を泳がせている。

「……わ、分かりました」

だがそれも数十秒。やがてアルスは意を決したように、

「そのスピーチ、お受けします。精一杯頑張らせていただきます」

「ごくりと息を呑むと、そうミレーユを見据えて受諾の意思を伝えたのだった。

1 - (4) 歓迎の夜

「それじゃあ、未来の大魔導師クンのこれからを祝して……乾杯！」  
『乾杯〜っ！』

そしてその夜。

酒場『蒼染の鳥』にて、アルスの歓迎会が幕を開いた。

大ジョッキを片手にしたダンの音頭を皮切りに、クランの団員達は一斉に唱和してお互いのジョッキを打ち合わせる。

「か、買い被り過ぎですよ……」

そんな彼らの輪の中に放り込まれたようにして、今夜の主役たるアルスは恥ずかしそうに苦笑しながら呟いている。

「そんな事ないよ。アルスはもっと自信を持っていいと思うけどなあ」

「う〜ん……。そう言われても」

ふわふわとその傍らで浮かんでいるエトナは、パートナーが主役なこの宴を喜んでいるよ

うだった。ちびちびと目の前の料理を口に行っているアルスに、彼女はせめてこんな時くらい

は胸を張っていいものにと思いながらそんな言葉を投げ掛けてみる。

「ま、謙虚も美德だがな。だが顔を上げなきゃ見えるものも見えなくなるってもんよ。ほら

よアルス。お前も飲め飲め」

「……はい」

そうしているとダント、複数の団員達がずっと身を寄せてくる。ドンツとテーブルの上にジョッキを置き、ダンがそこになみなみと酒を注ぎながら言う。

アルスは勧められるがままにそっとジョッキを両手で掴んだ。シ

ユワシユワと静かに泡が

せり上がってくるたつぷりの酒を、ゆっくりと時間をかけて飲み干していく。

「ふはぁ……。げぶ」

わっとテンションの上がる面々。

だがその量も相まってか、飲み終えたアルスは苦しそうに見える。

「ん？ どうした、もしかしてキツイのか？」

「は、はい……。正直あまり慣れていなくて……。すみません」

「お前が謝ることはねえよ。副団長。そいつに無茶させないで下さいよ？」

「……。お父さん、お酒が絡むと強引だから。アルス、大丈夫？」

「は、はい。何とか大丈夫です」

すると皆の輪の横でシフォンと飲んでいたジーク、焼き魚の肴をつまんでいたミアが口々にダンに批難の声を漏らした。

「ぬう……。ミ、ミアまで。あ……。分かったよ、俺が悪かったって」

堪らず洗面を漏らしてダンが言い放つと、周りにはやにやとしたり我が事と苦笑したり。

そして流石にその後はアルスに無理に飲ませようとする者はおらず、代わりに彼への質問

攻めの時間が始まっていた。

「魔導は何処で勉強したんだい？」

「村の教練場（寺子屋のようなもの）の先生が元魔導師で……。その先生に基礎から教えて

貰っていました。あとは自分で色んな魔導書を読んだり、でし  
ようか」

それは魔導師としての彼だったり。

「エトナちゃんとの馴れ初めはどんな感じ？」

「ふふ〜ん。聞きたい？ 聞きたい？ えっとねえ」

「村の近くの、子供の頃よく皆で遊んでいた森の中に住んでたんで



す。その頃から僕は精霊

が見えていたみたいで、一緒くたになつて遊んでいて。多分それが最初だと思います」

「むう。それは確かにそうなんだけどお……」

持ち霊エトナとの出会いについてだったり。

「はいはい。アルス君の好きな女の子のタイプは何ですか？」

「ちよつ、レナ」

「うん……あまり考えた事ないですね。馬が合うのなら別にこだわりなんてないと思うん

ですけど、やっぱり僕にないものを持っている人がいいのかなあ」

「そつか。だって、ミアちゃん？」

「……レナのバカ」

はたまた色恋沙汰についてだったり。

語らい、飲み交わし、笑い合ひ。

やがて宴の空間は主役だった筈のアルスをそつちのけで散らばつてゆく。

『ハイ八杯目、ハイ八杯目、ハイ八杯目！』

「んぐつ。くはあ〜！」

「……うむ。美味だ」

中央のテーブルではいつの間にかダンとリンファの飲み比べが始まっていた。

すっかり出来上がった団員達のコールの下で、豪快な飲みっぷりのダンと、同様に飲んで

いる筈なのに平然としているリンという酒豪二人が何度ともなく空ジョッキを置いていく。

その騒々しい輪の外では、シフォンらが静かに時折肴をつまみながらそんな光景に視線を

遣つており、カウンター席では溜息顔のブルートと微笑を湛えるイセルナ、そしてその内側

ではハオルドとレナがゆたりと皆が平らげた料理の食器を洗ってい

る。

「……………」

だがそんな中で、

(アルスとジークが、いない……………?)

ぼくっとテーブルに肘をついていたミアはふとそんな様子の変化に気付き、ピクンと頭の

猫耳を揺らす。

「こんな所にいたのか、二人とも」

アルスは酒場の裏手の軒下、クランの宿舎と中庭を臨む小さな段差に腰掛けていた。

ふらつと現れ、声を掛けてくるジーク。アルスはゆっくりと振り返った。

すっかり暗くなかった夜間に、エトナの碧色のオーラが静かに溶けるように漂っている。

「どうしたの？ 皆まだ飲んでるんじゃない……………」

「ああ。すっかり出来上がってる。だから抜けてきた。副団長やリンさんのペースに合わせ

ちまった日には悲惨なことになるからなあ。身を以って経験してる者としてさ？」

「あ、はは……………」

思わず苦笑いを浮かべるアルス。その傍らに、ジークはそっと立った。

「とりあえずお疲れさん。見ての通り荒っぽくて騒がしい連中だけど、少なくともここは皆

は信用できるぜ？ 五年ここにいる俺が保障する」

「うん。僕もね、なんかいいなって思った。……………家族みたいな感じだよな」

「家族ねえ……………そういう類とはちょっと違う気もするが。まあでも、同じ釜の飯を食ってる

冒険者仲間って意味じゃそうなのかもな」

ジークはそんな少々過大評価な弟の言葉に、照れ気味に頬を掻きながら言った。

家族というよりは、拠点を構えたパーティというものに近いとジークは考えていた。

冒険者としての目的は一にするが、必要以上に馴れ合う事までが集う理由ではない。とは

いえ、確かにこのクランは結束は強い方なのだろう。他のクランではもっとドライなのかも  
しれないが。

「……僕も学院で友達、できるかなあ」  
するとポツリとアルスがそう呟いた。

ジークはその声を耳にし、フツと口元に笑いを浮かべる。

「大丈夫だろ。何せお前は新入生主席なわけだからな。友達かは分かんねえけど、少なくとも

も注目はされるんじゃないの？」

「うう。やっぱりそうなのかなあ……？　あまり目立つも恥ずかしいんだけど」

「おいおい。入学式のスピーチを頼まれた奴の言う台詞だよ。……やっぱ、緊張しているの

か？　無理そうなら断われればいいだろ。式までまだ日はあるんじゃないの？」

「うん。来週の賢者の日（第六曜日。十二日で一週間である）だけ……でも断われる訳

ないじゃない。学院長先生から直接頼まれたことだし……」

「真面目だなあ」

ジークは思わず苦笑した。

だがそんな所も弟のいい所だと思った。恥ずかしくてとても口には出せないが。

「……………」

アルスはエトナのオーラを灯りに、じつと夜空を見ていた。

そこには星々の他に、遠くマナの雲海の中に“浮かんでいる大陸”が点々と確認できる。

「……僕ね。不安なんだ。厳密にいうと期待半分、不安半分ってところなんだろうけど」

ぼつりと一言。アルスはその視線のまま、そう兄に抱く思いを漏らし始める。

「……今までずっと僕は村で暮らしてて、魔導も先生にみてもらって勉強してきた。だけど

本からだけじゃ、満足できなくなっている気がするんだ。もっと色んなものを見て聞いて、

いっぱい勉強して……。もっともっとたくさんを知りたいんだ」

そこで一度、アルスはフツと苦笑のような声を漏らした。

「当たり前的事なんだけど、僕達の知ってる世界は今こうして立っている地面　大陸だけ

じゃない。この大陸だって実はマナの雲海に浮かんでる大陸の一つに過ぎなくて……。一つの

ミ下カレト 顕界っていう世界に過ぎなくて。この空の向こうには他にも色々な世界が広がってる」

「ああ、そうだな。普段はアウルベルツの周りで仕事してるから忘れがちだけど」

「……初めて本で読んで知った時はびっくりしたよ。でも、それ以上には怖かった。結局は僕

なんて、そんなたくさん並列した世界の中の小さな一粒でしかないのになって……」

ジークは合いの手の後のその言葉に押し黙っていた。

学院生活の不安だけではなかったのか。

なまじ知識が豊富なだけに、そこから広がるイメージの広大さに押し潰されそうになると

いう不安。いや恐怖感なのだろうか。分からなくはない。でもそれ

は。

「だから魔導を習ってるのか？ 魔導は別界に行ったって通用するしな」

「うーん……それもあるのかもしれないけど。でも、一番の理由はもつと別の事だよ」

「じゃあ何なんだよ？」

「……。内緒」

人差し指で口元を押さえ、アルスは茶目つ気ぼくそう言ってみせる。

だがジークには、それが何処か無理をしているようにも思えた。

ふよふよと傍らに浮いたまま、そんな彼を黙して見つめているエトナへちらと一瞥を向け

てから、ジークは片眉を上げて両手を組む。

「なんつーか……。お前は高い所を見過ぎだな。ポジティブな言い方をすれば上昇志向だとも言えるんだろうが……」

ふーっと大きく一息。

今度はジークが夜空を、夜闇の中に浮かぶ大陸群を目に映す番だった。

「俺だつて冒険者だ。色んなものを見てみたいって気持ちがないわけじゃない。だけどな、

そんな遠い目標つーか何つーか……背丈に合っていない所ばかりに目を遣ってばかりもどうか

と思うぞ？ 頭を上げっ放しで足元が留守になってちゃ本末転倒だろうよ。高い所を目指し

たきや、足元から少しずつ積み上げてゆかねえとさ」

「……足元から、積み上げる」

「ま、お前は俺と違って出来がいいんだ。そんなに焦らなくたっていいって事だよ。無理し

て崩れちまったら、結局遠回りだ。お前はお前の道をゆっくりしっ

かり進んでりゃいい」

アルスは少し驚いたようにそんな兄の横顔を見つめていた。

ジークもちらとそんな弟の様子を見遣る。

「……そうだね。ありがとう、兄さん」

「礼を言われるようなことはしてねえよ。……無茶だけはするなって話だ。まだお前の学院

生活は始まったばかり　　というか、厳密にはまだ始まってすらいねえんだしな」

フツとアルスは微笑んだ。ジークはその笑顔を直視できないとでも言わんばかりに、再び

夜空の方へと顔を向けてしまう。エトナがくすくすと静かに笑っている。

無数の浮遊大陸。並列する世界。

だがそんな事は関係ない。ただ自分達は、自身の道を誠実に歩んでいければいい。

「……頑張れよ、アルス」

「うん。兄さんも」

広き世界の片隅で。

久々に再会を果たした兄弟の一日目は、こつこつと過ぎてゆくのであった。

## 2・(0) 辛酸の日

それはある意味、世界にとっては日常の出来事であった。だが同時に当の彼らにとっては、それらは決して納得ことわりできる理ではない。

魔獣は、人々にとって時にその生命すら脅かされる忌むべき害獣である。

それはただ、瘴気という“死の毒に中てられても尚、生きようとした者の末路”である、故に彼らは邪悪な存在である。そんな人々の「常識」からの起因だけに留まらない。

ヒトと魔獣の境界が侵される時。

それは圧倒的な彼らの「狂気」が、人々に襲い掛かることを意味するからである。

「ぐっ……！ ダメだ、押さえ切れん……っ」

「踏ん張るんだ！ これ以上下がったら村の皆が危ない！」

何処にでもある、ありふれた小さな村だった。

ヒトによる開発の魔手が及んでいない、山間の小さな集落。

その鬱蒼とした森の奥から、魔獣の群れが迫っていた。

ギリリと血のような真つ赤な眼を向けて、その狂気の歩みを押さえ込もうとする村の自警

団の面々と、押し合い圧し合いの競り合いを繰り広げていた。

「何が何でも耐える！ 守備隊（国が領内各地に派遣している駐留軍事・警察隊）には連絡

を飛ばしたんだ。それまで持ちこたえるんだ！」

だが相手は魔獣。腕っ節だけのわか勢力では容易に退けられる筈もない。

「バカヤロー！ 死ぬ気か!？」

ちょうど、そんな最中だった。

「で、でも……っ。精霊達<sup>みんな</sup>が泣いてるんだ、苦しんでるんだ！」

「だからってお前まで森の中に行って何ができたよ！」

自警団らの戦線の少し後ろ　ちょうど村と外を結ぶ小川の橋の手前で、一組の若い兄弟

が揉み合っていたのである。

「ジーク、アルス！？　何でここに……」

「馬鹿野郎っ！　何してるんだ、早く村の中に逃げろ！」

それは村に住むとある兄弟。

彼らは剣や槍に力を込めて魔獣の猛進を押さえながら口々に叫ぶ。

だが、その一瞬のやり取りが“隙”にならない訳がなかった。

「があっ!?!」

次の瞬間、一つ目のゴリラのような魔獣　サイクロプスの剛腕

が彼らの一人を捉えた。

地面に叩きつけられる音。くぐもった叫び声。そして崩される防衛線。

その兄弟達はビクツと身体を震わせて硬直し、その変化を見た。

弾き飛ばされた自警団員

らを蚊帳の外に、魔獣の鋭い爪が倒れた彼の身体を、

「　　が、あああああッ!?!」

突き刺した。

絶叫と、飛び散る血飛沫。他の自警団員たちも思わず尻餅のまま、顔を背ける。

だが……事はそれだけでは終わらなかったのである。

「う、あア……」

突如倒れた彼から、濛々と上がり始めるどす黒い霧<sup>オーラ</sup>。

「あ、あれって。まさか」

「……瘴気」

兄弟達、そして自警団員らはすぐにそれが何を意味しているかを悟る。



「まずいぞ。マーロウが“中てられ”やがった……！」  
「に、逃げるお！ 巻き込まれるぞ！」

そして武器も投げ捨てて一目散に逃げ出していく大人達。

その言葉はきつと兄弟達にも向けられたものだった筈だが、二人は恐怖と動揺で耳に入っ

ておらず、ただ啞然とその場に立ち尽くしている。

「ア、ガアアアアア　　！！！」

やがて、狂いの絶叫が響いた。

どす黒い靄、生を蝕む毒素・瘴気が彼をじわじわと覆い尽くした  
と思った次の瞬間、その

黒の皮膜を破るようにポコポコと隆起し、何かが飛び出す。

腕。しかしそれは最早ヒトのものではなかった。

隆々とした巨大な、鋭い爪を持った怪物のそれ。

間違いなく今まさに、彼は　魔獣と化そうとしていた。

「お、お前達……！」

ゆっくりと起き上がった彼は、右半身は既に瘴気に中てられ魔獣  
化しつつあった。

一つ目のゴリラのそれと同じような、明らかにヒトの身体には不  
釣合いな膨張したように

隆起した巨大な上腕。

それでも尚、彼は内から押し寄せる狂気に激しく顔をしかめなが  
らも、兄弟達に言う。

ビクリと。二人は肩を寄せ合って震えた。

「……………俺を、殺せ」

その震えは次に紡がれた言葉によってより激しく確かなものとな  
った。

弟は焦点が合っておらず、今にもその場に崩れ落ちそつで。

兄は辛うじてそれは免れるも、その命令　懇願に黙って震えな  
がらふるふると首を横に

振っている。

「殺すんだッ！！ このまま、じゃ俺は……完全に、魔獣になって  
お前……達を、村……を  
ほろ、滅ぼし……ちまう」

彼は殆ど怒声に近い叫び声でそう拒否しようとする少年の兄を叱  
咤した。

途切れ途切れになってゆく声でヒトの意識を繋ぎ止めながらそう  
言くと、一度発狂したよ

うな叫び声を上げて魔獣化した腕を渾身の力で振るった。

その思わぬ一撃。すると残りの魔獣達は首を狙った一閃を受け、  
例外なく倒れ伏す。

「こ、これで……一先ずは、時間が……稼げる。俺を、殺せ……。  
俺が本当に、魔獣になっ

て……お前らを殺しちまわない、内にッ」

苦悶の顔から遣られた視線。

その先を追うと、地面に転がっていた自警団員らの武器がある。  
それを兄が認めたのを確認してから、彼はゆっくりとこちらに向  
かって近付いて来た。

「何でもいい……。首だ。首を、刎ねれば……。何とかなる……」  
「ごくりと兄が息を呑んだ。

近付いて来るのは魔獣？ それともよくしてくれた気のいい村の  
おじさん？

その場に崩れ落ちて震えている弟をそっと傍の木の幹に預け、少  
年は再びゆっくりと顔を

上げた。ふるふると。自分には殺せないよと、拒もうとする。

「いいから早く！ お袋さん シノブさん達が、巻き添えに……  
なっても」

再び彼が叫ぼうとする。

だがその瞬間、ドクンと何かが強く脈打ったようにして彼ははた  
と動きを止めた。

しかめていた顔がガクガクと震える。

そして俯いていた顔を上げたその両の眼は 血のように真っ赤に染まっていた。

「ガ、アアアアアア……ッ!!」

狂気が彼を押し遣った瞬間だった。

ボコボコと残り半身を魔獣に変えてゆく瘴気の毒。少年に振りかざされようとすする剛腕。

そしてそれは少年にとっても殆ど自己防衛という本能だったのかもしれない。

その襲い掛かる一撃を頭上に、彼は咄嗟に駆けていた。

地面に叩き付けられた腕。駆けながら拾い上げた一本の剣。

それを、指示の通りに魔獣化したその首へと力の限り跳んで、振り下ろして。

「がッ!？」

深々と刃がまだヒトの姿を残す首を横断していた。

短い悲鳴と、どす黒くなりつつある血飛沫。少年は数拍遅れてから、ぎゅっと瞑っていた

その目をゆっくりと開いた。

「……………よく、やつ、た……………」

目に映ったのは、グラリと自分の目の前で倒れてゆく、魔獣として侵食されていった村のおじさんだった筈の姿で。

首が半分千切れるようになりながらも、自分にそんな言葉を遣して逝こうとする村のおじさんの姿で。

ズンと大きな音と共に、彼は倒れた。

生気を失っていく眼。尚もシユウシユウと瘴気によって滅んでゆくその身体。

「あ……………ああ……………」

少年の手にはどっしりと剣の感触があった。

べっつりと魔獣の血で塗れた刃。よく知る村のおじさんが殺めら

れた元凶。

驚愕、恐怖、悪寒。

見開いた目だけでは自分の姿を直視することができないような錯覚だった。

血塗りの剣を握ったまま、少年はガクガクと震える。

殺した。俺が、マールウおじさんを……。

「あ、あ、ああ」

生まれて初めて魔獣いのちをこの手で殺めたその日。

少年は血に汚れた姿のまま、曇天の空に向かって慟哭の声を上げた。

## 2・(1) 団長の指針

「ッー!!」

強烈に蘇って来たあの日の映像<sup>ヒジヨン</sup>。

ジークは弾かれたようにベッドから飛び起きていた。

じわりと肌を伝う嫌な汗。

その一方で、カーテンの隙間から差し込む朝の光は穏やかだ。眠気の中にある人々をそつ

と撫でるように照らす光である。

(……夢、か)

ガシガシとバサついた髪を掻きながら、ジークはむくりと身をよじって薄布団を払った。

(久しぶりにアルス達と会ったせいかな……?)

ベッドの脇に腰掛けて足を伸ばし、そんな事を考える。

だがそんな思考が過ぎるのを自戒するかのようになり、ジークはぶんと首を横に振る。

もう戻れない日なのだ。彼らはもう、戻って来ない……。

ジークはすくつと立ち上がると身を返し、すぐ横の梯子に足を掛けて二段ベッドの上を覗

き込んだ。

「……すう」

「うん。もう食べられな……zzzz」

そこにはジークの新たなルームメイトとなったアルス達が眠気の中にいた。

ほんわかとゆるい表情<sup>かお</sup>で寝転がっているアルスと、その上を身を

丸めてふよふよと浮かん

だまま眠りこけているエトナ。

穏やかな寝顔。

(そういえば、二人のこういう顔を見るのも久しぶりなんだよな…

…)

ジークは暫しそんな事を思いながらその寝姿を眺めていたが、やあつてはたと自身の頬が緩んでいることに気付く。

いけない……気を引き締めないと。ぱちんと軽く両手で頬を叩く。雑念を眠気と共に払い、ジークはアルスを軽めに揺さ振りながら声を掛けた。

「お〜い。アルス、エトナ。朝だぞ起きろ〜」

「ううん……？ ああ、おはよう。兄さん……」

「うにゃ。あ、あと五分……」

「おう。早いところ起きろよ？ さっさと支度して酒場の方に行くぞ。まあ一応お前らは正式

な克蘭メンバーって訳じゃないが、かといって朝飯の手間をかけちまうもなんだしな」

「そうだね。ほら、エトナも起きて起きて」

「ふあ〜い……」

眠気眼を擦って身体を起こすアルスが、まだ半分夢の中のエトナを促す。

それを見遣ってから、ジークはすたと梯子を降りた。

寝巻き代わりの古着を蓋付きの洗濯物用の籠の中へ脱ぎ捨てると、引き出しとクローゼツ

トから何時もの半袖シャツと長ズボン、そして腰近くまでをカバーする上着を取り出して手

早く着替えを済ませる。バサついた長髪を、大雑把に紐で括って尻尾のように散らす。

何時もの格好。ジークは同じく梯子を降りてくるアルス達に振り返って言った。

「先ずは手洗い場だ。歯ブラシとコップ、持って来いよ」

三人は着替えを済ませて一旦部屋を出た。

ジークを先頭に向かったのは、左右に延びる廊下の中ほどにある

手洗い場だ。

そこには同じく、既に起きた他の団員達が隣接するトイレに入っていたり、横並びに水で

顔を洗っていたりとわらわらとした朝の身支度の光景があった。

「おう。三人ともおはよ〜」

「おはようさん。アルス君もエトナちゃんも」

「おはようツス」

「あ、はい。おはようございます」「おっはよ〜」

そしてその中にジーク達も混じり、早速冷えた水を蛇口から捻り出して顔を洗い始める。

冷たい刺激が眠気の残る体に心地よい。

数度、顔全体をその冷やっこさで洗ってから、すぐ頭上に取り付けられた戸棚の下からぶ

ら下がっている棒に引っ掛けられているタオルの一つを取って顔を拭く。

宿舎は基本的にクラン一つの共同生活だ。

設備も自室の備品を除けば、大概はこうして皆で使い回している事が多い。

「おい。歯磨き粉寄越してくれ」

タオルを棒に引っ掛け直し、ジークが言った。

すると何処からか「あいよ〜」という声と一緒に歯磨き粉のチューブが投げ込まれる。

ジークは「ありがとよ」と受け取ってから蓋を開け、戸棚の中に置いていた自分のコップと

歯ブラシを取り出す。

「アルス。お前も今日以降はこっちに置いておけよ。一々持つてくるの面倒だしな」

「うん。分かった」

歯磨き粉を分けて貰いながら、アルスが同じくコップと歯ブラシを手にこくと頷く。

二人は揃ってもごもごと歯を磨き始め、その後ろをエトナが様子を観察するようにして浮かんでいる。ちらと彼女が目遣ってみると、左右にはずらりと同じように顔を洗ったり歯を磨いたり或いはトイレの順番を待つ団員達がそこかしこにいるのが確認できた。

(何だかむさいなあ……。いや、まあイセルナさんとか、女の人も居はするけど……)

改めてとエトナは内心苦笑する。

だがそれは自身にとって大きな問題ではない。相棒アルスが行くのなら、何処にだって自分はつ

いてゆく。それが持ち霊というものだ。

「あ、トイレ空いたみたい。行ってくる」

「おう。分かっているとと思うが、他の奴をあんまり待たせるなよ？」

口をゆすいで歯磨きを終えて、はたとアルスが空いたトイレへと駆けて行った。

ジークは「分かっているよ」と微笑むその後ろ姿を見送りながら、自身と弟のコップと歯ブ

ラシを軽く水洗いし、戸棚の中へと隣り合うように保管する。

「……そっぴやジーク、お前聞いてるか？」

そうしていると、ふと仲間の団員の一人がそう話し掛けてきた。

「何を？」

「いやな？ 何か団長が皆に話があるんだってよ。朝飯食い終わっても暫くは酒場に残って

てくれってさ」

「団長が？ 何だろ……」

「さあ？ ま、そういう事だからもし伝わってない奴がいたら伝えておいてくれ」

「ああ……。分かった」

言つとその団員は身支度を終えたのかスタスタと立ち去ってしま



った。

(何か俺達、団長が注意するようなへマしたっけか……?)

少々慌しい、しかしもう見慣れた朝の身支度風景。アルスはまだトイレの中にいる。

ジークは手洗い場の漕に軽く背を預けながら、弟が戻ってくるのを待った。

酒場に足場を運ぶと、やはり既に少なからぬ団員達が朝食を摂っている最中だった。

ざっと店内を見渡すとカウンター内にはハロルド、席にはイセルナとリンファ、テーブル席の一角にはマーフィ父娘。

「やあ。おはよう、三人とも」

そしてシフォンと、主要メンバーも揃っている。

ジーク達は彼に姿を認められ、手招きを受けた。

三人は各々に挨拶をすると、彼の着くテーブル席に腰掛ける。アルスはこういった人気や

忙しなさが珍しいのか、時折ちらちらと周囲を見渡していた。

「手洗い場もそうだったけど、やっぱり皆忙しそうだね。これだけ人がいると朝ご飯を食べ

るだけでも大事になるんだろうなあ……」

「まあな。飯の用意とか、裏方は基本的に支援班　ハロルドさんやレナと所属連中がやつ

てるんだよ。とはいっても、俺も含めて他の団員も輪番で手伝ってはいるんだがな」

「ふうん……。そっかあ」

「ええ、でも皆さんの健康管理も私達の役割ですから。おはようございます。ジークさん、

アルス君、エトナさん。はいどうぞ、今日の朝食です」

するとジーク達の姿を認めて、今度はトレイに朝食を載せたレナ

がやって来た。

皆への奉仕が楽しい。そう全身で語っているかのように嬉々として、彼女は慣れた手付きで二人分（精霊であるエトナは物質的な食事を必要としない）の料理を配膳すると、コクリと丁寧にお辞儀をして再びカウンターの中へと戻ってゆく。

ジークとアルスはその後ろ姿を見送ってから、ポンと手を合わせた。

「じゃあ、早速……」

「いったただつきまゝす」

今朝のメニューはパンに牛乳、厚切りベーコンやレタス、トマトを和えたサラダ、そして玉子のスープ。朝の胃腸にも優しい、あっさりとしながらもそれだけで量もしつかり確保してあるラインナップである。

一足早く摂り始めていたシフォンに続き、ジークとアルスは暫し咀嚼した食べ物という名のエネルギーをもきゅもきゅと空腹の身体に取り込んでゆく。

（ん……。美味しい）

副業とはいえ、酒場を営んでいるハロルド（と手伝うレナ）の料理の腕は中々のものだ。

身体が資本の冒険者にとっては絶好の食環境だと言えるだろう。

ジークはパンを一口二口と齧りながら周囲をちらりと見渡していた。

同じく食事中の団員達も少なくないが、その一方で食べ終えたと見える団員達が居残ってまったりとしている姿も確認できる。

先刻聞かされた、例のイセルナからの話とやらを待っているのだろう。

（……？ ステラ？）

そんな皆の様子をステラがこっそりと物陰から覗いているのに気付いたのは、ちょうどそんな折だった。

ちらと向けたジークの視線に、ややあつて彼女も気付いたらしい。銀髪をふあさつと静かに揺らして物陰に掛ける手に力を込めている。

やっぱり、まだ出てくるには勇気がいるのか。

ジークは内心の“罪悪感”と共に、彼女の視線の先　サラダを口に運んでいるアルスの

顔をそつと見遣る。十中八九新しい宿舎の住人となったアルス達を警戒しているのだろう。

（またレナに訊いておくか。それか暇を見て、俺が直接様子を見に行くか……だな）

くいと牛乳を口に含んで喉を潤し、ジークはそんな思案を巡らせる。

「……どうかした、兄さん？　何か考え込んでるみたいだけど」

「ん？　あ、いや……何でもねえよ。と、ところでお前、今日はどうする？　俺らはまたギルドに顔を出しに行くと思うが」

なので急にアルスがそう訊ねてきてジークは内心ドキリとした。

だがアルス自身はステラに気付いているようではないらしい。ジークは一瞬跳ねた動揺を

抑えながら、そこはかとなく話題を変えようと試みる。

「うーん、そうだね……。街を散策してみようかな？　受験の時は追い込みを掛けていたからあまりじっくり見て回れなかったし」

「そっか。でもお前、エトナと二人で大丈夫かよ？」

「なら僕が同行しよう。ギルドに顔を出すにしても、何も全員で行く訳でもないからね」

「まあそうだが……。悪いな、助かるぜシフォン」

アルスの応えたその予定に、シフォンがそう追隨してきた。そしてフツと微笑むこの友は、片肘を椅子の背に乗せながら周りに振り向く。

「……という訳だけど、他に誰か来ないかい？ 僕一人よりも何人かいれば、色々と案内できると思っただけど」

「ふむ。では私も行こうか」

「あ。じゃ、じゃあボクも……」

次いで彼の呼び掛けに応えたのは、リンファとミア。

コクと頷くイセルナを、何処か微笑ましく見遣っているレナと少々怪訝な様子のダンを、

二人はそれぞれに目を遣ってからシフォンの首肯を確認する。

「はい。じゃ、じゃあよろしく願います」

「……ならさつさと食っちゃまわないとな。お前、この量食い切れるか？ 小食にはちよいと

辛い量じゃねえか？」

少し恐縮と言わんばかりに苦笑いを浮かべてコクリと頭を下げるアルス。

ジークはその横顔を見遣りつつ朝食の残りを喉に通してから、元よりさほど頑丈とは言えない弟を半ば無意識の内に気遣っている。

「ううん、大丈夫。ちゃんと頂くよ」

それでもアルスは頑張ろうとした。言って、もきゅっとパンの残りを齧り出す。

「……。無茶はするなよ」

そんな弟に、本心から、少し照れ隠し気味にそう最後にぼそっと付け加えて。

ジークはベーコンで包んだパンの欠片を口の中に放り込む。

「ふう。食った食った……」

それからややあつて。

朝食を平らげたジーク達のテーブルの上には三人分の空になった皿が鎮座していた。

腹回りを軽く撫でつつまったりとするジーク。アルスはお冷の残りをくいつと飲み干すと

その皿をざつと見渡して訊ねる。

「ねえ兄さん。普段の後片付けとかはどうしてるの？」

「ん？ ああ……俺たち団員は客って訳じゃねえから、食い終わったらカウンターに出して

おくんだよ。後は厨房の面子が洗っておいてくれる」

「そつか。じゃあ、僕が出してくるね」

言つてアルスは皆の皿を重ねると、両手に抱えてカウンターの方向へと持つて行つた。

カウンターの内側から迎えたレナに受け取つて貰う。

「すみません、誰か手伝つてくれませんか？ 皿洗いの人手が足りないのですが」

すると仕切りを隔てた厨房の方から、ひよこつとハロルドが顔を出してそんな事を皆に呼び掛けてきた。

「あ、はい。僕でよろしければ手伝います」

アルスは優等生よろしく、その頼みに逸早く応えていた。

レナにカウンターの中へと通して貰い、そのまま同じくやって来た数人の団員らと共に厨房の方へと消えてゆく。

朝は特に皆が入れ代わり立ち代りで飯を食いに来るからな……。

ジークはぼんやりとその後ろ姿を見送っていたが、

「皆。ちよつといいかしら？」

ちよつどその時、まるでこのタイミングを待っていたかのように、カウンター席に座つて

いたイセルナが不意に立ち上がったかと思つと身を翻し、場の面々

に向かつてそう呼び掛けたのである。

「今朝の内に伝令はしたのだけど……。もしここにいない子には後で言っておいてね」

もしかしなくても、例の皆への話だろうか。

団員一同が一斉に彼女へ視線を向ける中、ジークもまた同じくそんな事を思いながらこの

涼しげな容貌をした女団長を見遣る。

「これからの私達の活動方針についてなのだけど……。魔獣討伐といった『傭兵畑』以外の

依頼 『便利屋畑』の依頼の受注を増やしていこうと思うの」

少なからず団員達は顔を見合わせ、怪訝の声を漏らした。

それでもイセルナにとってはその反応は予め想定内だったらしく、「皆は、本当によくやってくれている。昨日の魔獣討伐も犠牲者を出さずに完遂することが

できたわ。でもね？ 知っての通り、今回も怪我人は出てる。だから臆病になったという訳

ではないけれど、貴方達のことを考えれば、もっとローリスクな仕事の割合を増やしてもい

いんじゃないかって思ったの。……。昨夜、ダン達とも話し合っただことよ」

団員達はどう応えていいか分からないといった様子だった。

見てみるとダンも、リンファも、シフォンも彼女の発言を追認するように各々が小さく頷

いている。

「……団長。それはもしかして、アルスがうちに来たからってんじゃないっすよね？」

しかしその中であって、ジークだけは少々違う反応を見せていた。イセルナをじっと半ば睨むようにして、眉間に皺を寄せた不機嫌

面。

その問い掛けに彼女は答えなかったが、その沈黙は肯定に等しかった。

テーブルの上で握った拳にギュツと力を込めて、ジークは自身何とか感情を押し留めていくかのよう続ける。

「……見くびらないで下さいよ。俺達はまだまだやれる。この手の依頼がハイリスク・ハイリターンだって事くらい、皆分かってやってる筈だ」

見れば団員達もちらほらと頷いていた。冒険者としての、傭兵畑の戦士としての矜持がそうさせているのだろう。

そんな反応に、イセルナは少々苦笑気味に笑って応える。

「そういうつもりで言っているんじゃないわ。ただ、今までよりも業種の配分を考え直さな

いかって言っているの」

「でもだからってそれで魔獣がいなくなる訳じゃないでしょう？

俺達がやらなきゃ誰が」

「落ち着けよ。勇気と蛮勇は別物だぜ」

身を乗り出しそうになって、食い下がるジーク。

だがその彼を、副団長たるダンが止めた。娘のミアがきょとんとする程に、そこに何時も

の荒っぽい気質はなく、ただ一人の先輩冒険者としての冷静な眼がジークを捉えている。

「……すみません」

その眼差しに抑え込まれるようにして、ジークはそっと席に座り直した。

「確かに、アルス君がうちの下宿人になったからというものもあるわむしろ私達が話し合う

切欠になったわけだし……。でもね？ だからこそ貴方達には無駄に命を危険に晒して欲し

くないの。魔獣を間引かなければ誰かが犠牲になる。それは確かよ。でも、その討伐の為に

貴方達が犠牲になってしまえば、悲しむ人がいるんだってことも…

…忘れないで？」

改めてイセルナは言った。それは懇願するように、まるで家族を想う母のように。

皆は押し黙っていた。それだけ彼女の心遣いが身に染みるように思えたから。ダンの発し

たその言葉で、自分達のややもして無鉄砲な“武勇”を内省し始めたから。

「……………分かり、ました」

やがてたつぷりの間を経て、神妙に黙する皆を代表するように。

「団長が、そう言うのなら……………」

眉間に皺を寄せ目を合わせられないまま、ジークはそっぽそりと呟いたのだった。



## 2 - (2) 兄弟の理由

レナは食事を載せたトレイを手に宿舎の廊下を歩いていく。

既に克蘭の団員達の多くは不在だった。それぞれがギルドに向いたり、個々に受けてきた依頼の為に掛けているのだ。

そんなすっかり人気の少なくなった昼間の宿舎の一角、空き部屋を挟んだ角部屋のドアの前でレナは立ち止まる。

「ステラちゃん、私だよ。朝ご飯持ってきたんだけど」

「……。ちよつと待ってて」

呼び掛けると、ドアの向こうから控えめな返事が聞こえてきた。

少し間を置いて、カチリと鍵が開く音がすると、そっとドアを半開きにしてステラがおずおずと顔を出す。

「大丈夫だよ？ 皆、ギルドに行ったり依頼主さんの所に行ったりしてるから」

「うん……。あ、入って」

レナはステラの後に続いて彼女の部屋の中へと入っていった。

閉め切ったカーテンで部屋は少々薄暗い。ステラ自身が（克蘭仲間達以外の）人の目を

避けるように閉じ籠った生活を送っているためだ。

だがそれを補うように、室内にはふわふわと下級精霊たちが淡い光を放って漂っている。

魔導を修めている者でなければ、精霊を知覚することはできない。そこに居るのは黒い人魂の姿であったり、髑髏に羽根が生えた姿であったり。

ステラの得意とするのは“冥”魔導。闇を司る魔導だ。それ故に彼女の力に惹かれて集

まってくる精霊達も、自然とその多くが冥属性の奇蹟を司る存在になる。

元神官の養父に影響されている為か“聖”魔導 光を司る魔導を得意とするレナとは、ある意味で対照的だとも言える。

「ごめんね。机の上、片付けるから」

言ってステラはテーブルの上に積まれていた本（おそらくその殆どが魔導書と見える）を片付け始めた。

普段部屋に籠っている分、彼女は日頃の魔導の研究に余念がない。それは生粋の魔法使いの民・ウィザード故の気質とも言えるのだが。

「はい。どうぞ」

「ありがと。……いただきます」

そして空いたテーブルの上に配膳し、早速ステラは遅まきの朝食を摂り始めた。

レナは何時ものように闖入者が来ないように外の様子に気を配りつつも、この心の傷を抱える友をそつと見守っている。

でも、やっぱり本当は彼女も含めて皆で一緒に。

「ねえステラちゃん」

若干の躊躇いはあったが、レナは意を決してこれで何度目になるか分からない問いかけをしようとしていた。こくと牛乳を喉に通してこちらを見遣ってくるステラに、彼女は神妙な、心配げな眼差しで以って言う。

「やっぱり……まだ表に出てくる勇氣は、ない？」

「……うん」

ステラの返事は、レナの予想通り否だった。

だがそれでも、出会ってすぐの頃の“怯え”に比べれば随分落ち

着いてきたようにも思え

るのだが……。それを言ってしまうのは自分の勝手な解釈に他ならないとも思っていた。

「でも、今朝は酒場の方に顔を出そうとしたよね？ ジークさんも、何気に気付いていた

みたいだったけど」

「う、うん。でもやっぱり」

「……アルス君が来たから？」

推測の域だったが、レナはそつとステラにそう訊ねてみている。

返事は返って来ない。だがその沈黙は間違いなく肯定のそれに等しくて、

「大丈夫だよ。だって、ジークさんの弟クンだもん」

レナはつい、自分の中の信頼を友に押し付けてしまつて。

「そんなの分からないよ！」

だからその言葉を後悔した時には、既にステラがくわつと声を荒げていた。

マナが感情の触れ幅と共に増幅したのが分かった。辺りをふよふよと浮かんでいた精霊達

もそれに影響されて一瞬、剣呑な気配を纏おうとしたのも分かった。

「……分からないよ。私の正体知ったら、何て思うかなんて……」

だが驚き、申し訳ないという表情かおをしたレナを見て、ステラの声はスツと尻すぼみになつ

ていた。

立ち上がりかけた腰を下ろし直し、高揚で“血のような赤”に染まった両の瞳をそつと掌

で覆い隠すようにしながら、自らで一人その昂ぶりを治めようとしている。

「ステラちゃん……」

レナは後悔していた。そして心配で堪らなかった。

アルス君の下宿話を持つてきたのは他ならぬジークさん。そして

アルス君が魔導師の卵だ

という事も自分を含めて聞かされている。

だが ジークさんは、彼にステラちゃんの事を話してあるのだろうか？

(でも、アルス君が忌み嫌うような素振りはなかったし……)

レナは内心迷っていた。一抹の疑心がどうしても拭え切れない。

ジーク本人に聞いてみれば分かるのだろうが、生憎もうイセルナ達と共にギルドへと出掛けてしまっている。

でも本当は優しい人だと信じていた。この前だって、弟クン用に学習机や本棚の見繕いを手伝って欲しいと頼んできた。ぶっきらぼうだけど……本当は優しい。あの人は、きっと。

「……大丈夫だよ」

そしてレナは、やがて自分に言い聞かせるように口を開いた。

そつと顔を上げてくる友に、フツと笑い掛けて言う。思い出してと投げ掛ける。

「ステラちゃんは、ジークさんやイセルナさん、クランの皆の事、信じてないわけじゃないでしょ？」

「う、うん。それは……そうだけど」

「だよな？ 最初は私達も驚いたよ？ だけどそれ以上に皆、ステラちゃんの力に、居場所になつてあげたいって思ったんだと思う。だからステラちゃんも、この部屋に腰を落ち着けていられるんじゃないかな？」

ステラは上目遣いで友を見遣り、黙り込んでいた。

無言ながらの肯定。それは自分の正体を知っても尚、保護してくれた恩義があるから。

「大丈夫だよ。ジークさんも、クランの皆も……信用できる人達だ

から。アルス君だって、  
きつと話せば分かってくれると思う」

あの日の出会いと、ジークが見せた優しさを思い出しながら。

レナは友の心の傷を、そつと優しく撫でるように呟くと、そつ静かに微笑んだ。

「だって誰よりも、それはステラちゃんが一番知っている筈だもん……」

朝食と支度を済ませた後、イセルナとダン、そしてジークから十数名の団員達は依頼を見繕

うためにギルドを訪れていた。

そこには多くの冒険者達トウキョウシヤが窓口や依頼書の貼り出してある掲示板を中心に集まり、今日明

日の糧を得るべく品定めを行っている。

(うーん……。便利屋の類つつつても色々あるもんなんだな……)

そんな面子の中に混じり、ジークは間仕切り付きの端末が並ぶスペースで、画面に映し出

されている仲介中依頼のデータに目を通していた。

中身は会社の警備といった若干「傭兵畑」とも被るものから、清掃代行に子守り、落し物

探し、果ては浮気調査など。そんな「便利屋」の名に相応しい雑多な依頼データの数々が、

次々とディスプレイの上を流れてゆく。

(何つーか、ガクンとグレードが下がった感じだよな。ホント……)  
小さくため息をついて、ちらと仲間達の様子を見遣ってみる。

すると案の定、他の団員達もそれぞれに依頼書やデータベースを参照しているが、皆一様

にその内容と傭兵畑じぶんたちのそれとのギャップを感じているらしいかった。

勿論、ジーク達も今まで一度も便利屋系の依頼を受けた事がない訳ではない。

魔獣討伐のような大口の依頼の場合を除き、基本的にクラン所属の冒険者であっても自分の食い扶持 契約する依頼は自分で確保するのがこの業界の常識だ。

それでもクランに属するメリットは、それ以外の雑務を代行して貰ったり、衣食住の面倒を見て貰えたり、そして何よりも依頼争奪における競争力で有利に立てる点にある。

ただその分、依頼の大小を問わず契約した依頼は一度クランの代表に目通しをしなければならぬ等、クラン毎によって種々の掟<sup>ルール</sup>はあるのだが。

(団長と副団長も交渉中……か)  
窓口の方では、イセルナとダンが顔馴染みの職員と何やら話し込んでいます。

大方、クランとしてのコネクションで他にも依頼が来ていないか訊いているのだろう。

仕方ない……。団長命令だし、もう暫く粘って探してみよう……。そしてジークがそう思い、再び端末を操作しようとする画面に向き直った。

ちょうど、そんな時だった。

「ダン・マーフィはいるか？」

ガラリとギルドの扉を開けて入って来た一行。

その中心に立っていたのは、一人のいかにも気難しそうな強面の男性だった。

肩に引っ掛けて羽織るロングコートの下から覗く腕や頬などに見える鱗の名残と、蛇を思わせる長く頑丈な尻尾。

それはまさに、爬虫類系亜人・蛇尾族<sup>ラミアス</sup>の特徴である。

「なあ、あれって“毒蛇のバラク”だよな……？」

「ああ……。クラン・サンドゴディマの頭だろ？ 名指しとか、何

が始まるんだ……？」

彼らの姿を認めて、ギルド内の冒険者達がざわつき始めた。

その解釈　ダンが名指しで呼ばれた事を含めた多くは「何かごたごたが起きるのでは」

といった様相を呈している。

この男・バラクを先頭に三人の幹部らしきメンバーが後に続く。

一人は綺麗なセミロングの白髪を蓄えた、犬系獣人の女性。

一人は唾広帽を被った六本腕の　昆虫系亜人・インセクト・レイス 蟲人族の男性。

一人は赤毛に褐色の肌、荒ぶる南海の狩猟民・ヴァリアー 壺牙族の青年。

「おう、お前らか。何か用か？」

ぞろぞろと十数人程度の集団。

だが名指しされた当のダンは慣れたもので、平然としていた。

イセルナやブルート、ジーク達団員らもが黙して見守る中、猫の

亜人と蛇の亜人はじりつ

と対峙する。

「……クランの代表として先日の詫びに来た。調子付いたうちの若いのがお前の娘にちよっ

かいを出したそうだな。おい、お前ら。さっさと頭下げろ」

「ひつ。す、すみませんでした！」

「ご、ごめんなさいでしたっ！」

しかし厳しいのは、少なくとも今回は顔だけだったらしい。

啞え煙草を燻らせた強面を向けて背後を促すと、すっかりビクついて飛び出してきたのは

先日ギルドの前でミアに絡んできたあの若い冒険者二人組だった。

しおらく、というよりはすっかり怯えた様子で。

ダンとバラクの二人に睨まれた蛙状態で、彼らはぶんつと頭を下げてくる。

その対応に、ダンは少し「大仰だな」と苦笑するように口を開いていた。

「あ……アレか。お前のとこの若造だったんだな」

「ああ。ま、こつちでシめてやっててもよかつたんだが、迷惑を掛けた当事者に侘びを入れる

のが筋つてもんだら。……今日は、娘つこの方は来ていないみたいだがな」

「すまねえな。今日はシフォンヤリンと一緒にアルスに街を案内してるんだ」

「アルス？ 誰だ、新入りか？」

「ん？ あゝ……そつか、知らねえよな」

「そのの、ジークの弟クンよ。今度ここのアカデミーに入学する事になって、うちの宿舎を下宿先に提供しているの」

軽く眉根を上げるバラクに、イセルナが代弁して答えた。

端末のブースからこちらを見ているジークを一度視線で示し、ふわつと穏やかな微笑みでそう言う。

「ほう。あの無鉄砲小僧の……。ふん、随分と対照的じゃねえか」

「ははっ、違いねえ。ま、この詫びはミアにも伝えとくよ。もつともあいつがそんなに気に病んでると思えねえけどな」

獣人の副団長と、蛇亜人の頭領が荒削りに笑い合う。

どうやら、危惧するような喧嘩沙汰が展開される心配はなさそうだった。

それが分かれると、周りの冒険者達も視線を戻し、再び自身の依頼の品定めに戻ってゆく。

(……やっぱ俺って、サンドゴイマの連中にもそういう認識なのか……)

ただ一人、話題に上らされたジークだけは苦笑交じりの落胆で複雑な顔をしていたが。

「まあそれで詫びの代わりと言っちゃ何だが……こいつを分けてやる。キリエ」



「はい。ボス」

そうしていると、次いでバラクが白髪の犬系獣人・キリエに目で合図を送った。

一歩進み出て彼女が取り出してみせたのは 数枚の依頼書。

「うちで確保した依頼の一部だ。好きなのを窓口を持っていってくれ。……便利屋畑の依頼

を探しているんだろう？」

イセルナとダン、そしてジーク達団員らがその提示に顔を見合わせていた。

何かあるのか？ 一瞬イセルナらは警戒したが、サンドゴディマの面々とは同じ冒険者ク

ランとして良き好敵手ライバルであり、時に良き協力者ともなる間柄だ。

克蘭の代表として。

イセルナは頷くダンを見遣ってから、

「……じゃあ。お言葉に甘えて」

そつと一歩を踏み出して、その依頼書へと手を伸ばした。

一方その頃、アルス達四人はのんびりとアウルベルツの街中を歩いていた。

街の案内として先ずは大通りの店を梯子し、次いでギルドや他の交流のある冒険者克蘭

にも顔を出してみる。その後は、各々がお勧めの場所を巡ってみるようになった。

ミアは、日頃常連として通い詰めている甘味処を。

リンファは、顔馴染みの酒屋と東方から輸入した品々を扱う骨董店を。

シフォンは、静かに昼寝もできる緑地公園と幾つかの書店を。

「ありがとうございます」

だが当のアルスは、

「っ やっぱり街って凄いなあ。こんなに珍しい本が沢山……」

何よりも梯子して廻った街の本屋を気に入ったようだった。

これで何軒目になるだろう。アルスは店主の見送りを背に受けて店を出てきた。

その両手いっぱい紙袋に入れられているのは、大量の本。しかもその大半が一般人には

到底理解のできない魔導書や各種学術書の類である。

「……凄い量の本」

「そうだね。流石はアカデミーの学生さんといった所か。勉強熱心なのは良い事だよ」

「だけど結局、僕達の案内があまり役に立っていなかった気もするよねえ……」

少々、いやかなり呆気に取られているミア達を尻目に、アルスはほくほくとした笑顔でその書物の山を抱えていた。

「まあアルスは昔っから本の虫だからね。村にいる時も、アルスの部屋は本で窒息しちゃう」

「いそうなくらいギュウギュウだったし」

ふよふよと浮かびながら、そう苦笑いで言うエトナ。

「村というと……確かサンフェルノ村、だったかな？ ジークとアルス君の生まれ故郷の」

「あ、はい。そうです。ここから街道と山を越えた先にある、小さな村です」

そしてシフォンがふとレノヴィン兄弟の故郷についてそう記憶を

辿り始めると、アルスは

視線を向けてはにかんだ。

「緑がいっぱい皆いい人で、夏も涼しくて過ごしやすく……北の方にある分、冬は少し

ばかり辛いですけど。でもとってもいい所です。兄さんは『何にもねえ田舎だ』って言って

ばかりでしたけど。だけど自然も豊かで精霊もたくさんいて、僕に

とつては凄くいい環境で

した。……こうしてエトナとも出会えましたしね」

「アルス……」

その言葉にエトナはじーんとし、うんうんと何度も頷いていた。微笑み合う魔導師の卵とその持ち霊。

そこには間違いなく、パートナー同士としての信頼関係が築かれている。

「……ミア？」

「ッ！？ な、何でもない……」

ぼくつと、見惚れるようにそんな彼に目を向けていたミアを、小首を傾げたリンファが現

実に引き戻す。そんなやり取りと関係性を、シフォンは静かに目を細めて見守っている。

ゆつくりと四人は街のメインストリートに合流し、歩いていた。

周囲には賑やかな活気と人々の往来が五感に届いてくる。

「……。兄さんはあの日から今日までずっと、この街で暮らしてきてたんですね」

それからどれほどの穏やかな沈黙が続いていたのだろう。

ふと、円形に広がる石畳の広場へと四人の足が続こうとしていた頃、アルスはそうぼつり

と誰にもなく呟く。

「あの……。皆さんは冒険者になった兄さんとは、長い付き合いなんですよね？」

「うん？ そうだね、かれこれ五年になるか……」

「ふふ、早いものだよね。まだ僕にとっては昨日みたいな事なのに」

「シフォンさんはエルフだから、時間の感覚が違っただけじゃないかな……」

ちらりと横を向いて、アルスはリンファ達三人を見遣った。

五年。それは兄が村を出奔してしまった時期と符合する。エトナがぼちくりと目を瞬かせ

て自分を見下ろしている。

「……教えてくれませんか？ 兄さんがこの街に来てから、一体どんな暮らしをしてきたのか。村を出て行ってしまっただけから今まで、兄さんはどんな兄さんだったのか」

きゅつと唇を結び意を決するように、アルスはややあつてそう一同に訊ねていた。

はたと見せられた真剣な彼の表情。

それだけ兄の出奔が、この年若い魔導師の卵には大きな出来事だったのか。

三人は少々戸惑い気味に互いを見遣ってから、慎重に口を開く。

「そうだね……。大体半年ぐらいはフリーで冒険者をしてきたみたいだよ」

「でも、いくら成人の儀を終えているとはいえ、たった一人でこの業界を渡り歩くのは難し

いものだ。私達がジークと出会ったのも、ちょうどそんな頃だったな」

「……一言で言うと、無鉄砲。今もあまり変わらないけど」

「はは。でもまあ、昔に比べればジークも随分丸くなったとは思っよ？ 何せ出会いたての

頃は何かにつけて剣を抜きたがる気の荒い子だったからねえ……」

今は友として、先輩として付き合いを深くするシフォンが、そう言っただけで懐かしげに若干に

空を仰ぐように目を細める。

広場の奥では、路上パフォーマーが人だかりに囲まれて音楽を奏でていた。

横笛を吹く金髪の青年とハーブを弾く桃色の髪をした少女とが、その穏やかな音色を人々

へと届けている。

「……でも、今思えばあの頃から妙な所はあったよね。彼が魔獣を

斬り伏せている時に見せる、違和感みたいな」

「……違和感、ですか？」

「ああ。何だろうね……上手く言えないけど、何だかジークは目の前の敵以外のものも一緒に

に斬り伏せようとしているかのように、僕には見える。カんでいる

……とでもいうのかな」

「敵以外の、もの……」

遠くを、いや自身の記憶を手繰るようにシフォンは呟いていた。

ミアとリンファも互いに顔を見合わせると、その証言と自分達の記憶を照合しようとしている。

いる。アルスは暫し彼のその横顔をじっと見つめていた。

「……そうですか。やっぱり、兄さんもあの事を悔やんでいたんですね……」

そしてたつぷりの沈黙の後、アルスの漏らしたその言葉に、シフォン達は思わず小さな怪訝を示していた。

何故か神妙な面持ちになっているエトナ。

アルスはゆっくりとそんな彼女を見上げて一度互いに顔を見合わせる、

「兄さんは、きっと自分からは話さないと思います。だから……僕の口から、話します」

再びそつと視線を　とても哀しげな眼を、三人に向ける。

## 2 - (3) 生きる罪

「あれが例の村か」

ジーク達はアウルベルツから乗合馬車に乗り、郊外に位置するとある小さな村へとやって

来ていた。

停留所に降り立ってから次の行き先へと駆けてゆく馬車を視界の隅で見送りつつ、ダンは

顎を擦りながら静かに眉根を寄せている。

「ブルート。魔獣の気配はする？」

「……ここから視る限りは確認できぬな。もっと奥へ分け入れれば違  
うのだろうが」

「そりゃそうだろうよ。だけどこの面子のままでは魔獣でした、  
なんてオチは勘弁して欲  
しいけど」

念の為にイセルナがブルートに確認を取っていた。

そのやり取りを聞きながら、ジークがごちる。他の十数人の団員  
達も「全くだ」と言わん

ばかりに頷いている。

イセルナがバラクから受け取った依頼書の内容はこうだ。

曰く『村の害獣を始末して欲しい』と。

依頼書の区分は便利屋系の類にカテゴライズされていた。ギルド  
を通してあるのだから、

仮にこれが魔獣を指すのであればそれ相応の記載がある筈なのであ  
る。

しかし……何故か依頼書に載せられていた情報は、少なかった。

だからこそ、イセルナは念の為にブルートに魔獣の気配を調べさ  
せていた。

もし仮に魔獣だと 虚偽情報だとしたらむしろこちらが被害者

だ。そうならばホームから応援を呼んで対処はするが、その後ギルドを通じて然るべき抗議を行おう。

バラクから受け取ってしまった手前、それが今更突き返すわけにもいかない中で皆が話し合った結果だった。

「ま、とりあえず依頼主に話を聞いてみねえ事には始まらねえさ。行くぜ、お前ら」

これだから便利屋依頼は嫌いなんだ。

ジークは内心そうため息が出る思いだったが、ダンが言って皆を引率し始めたために仕方なく自身も腰の刀を揺らしてついてゆく。

依頼主である村は、木々に囲まれた小さな集落だった。

各地に都市が形成されているとはいえ、その発展の恩恵を受けている者は現実的には限られている。だからこそ、より若者は豊かさを求めて街へと出てゆくのだろう。

(ま、俺も他人の事言えた立場じゃねえけど……)

皆と共に村の入口に差し掛かり、周囲の緑豊かな風景を見遣っていたジークはぼんやりと

そんな事を思いながらも密かに己を晒ってみせていた。

自分だって田舎の集落に生まれ、そして“逃げ出してきた”一人なのだから。

「……レギオンの方ですね？ ギルドから連絡は受けていました」

村の中に一步踏み入ると、まるで待ち構えていたようにあちこちから村人らしき人々が姿

を見せた。神妙な、いや神経質になっていると表現するのが正しいように思える面持ち。

どうにも 怪しい。

その村長らしき彼ら一団の様子を見て、ジークは半ば本能的にそ

う思った。

それは他の仲間達も同じだったようで、ジークがちらと肩越しに目を遣ってみると、彼らもまた同じ思いだと言わんばかりにこっそりと頷き返してくる。

「はい。お迎えご苦労様です」

「で？ あんたらが手を焼いているっていう害獣とやらは何なんだ？ 何処にいるんだ？」

「……先日、村の者で何とか捕獲には成功しています。ですがこのままでは、いずれ私ども

の手には負えなくなるでしょう。ですので今回依頼を……。どうぞ、こちらです」

それでも団長・副団長としてイセルナとダンはあくまでビジネスライクの姿勢を貫こうと  
していた。

すると痩せぎすな初老の村長は、そうざつと現状を説明してくれた。

件の害獣に警戒しているのだろうか。彼に付き従う他の村人らは  
鍬や量産剣などの得物を  
手にしている。

イセルナら面々はその不穏さに気付かぬ振りを通しつつも、彼ら  
の案内についてゆく。

「……こちらです」

案内された先は、村の敷地の外れにある大きめな納屋の一つだった。

ただ奇妙だったのはそこに掛けられた施錠があまりにも嚴重過ぎると点。

思わず、ジークら団員達の表情が怪訝で硬くなる。

しかしもう遅いと言わんばかりに、次の瞬間には村長の合図で村人達が一斉にその何重に

も渡って掛けられていた鍵を開け始める。



「さあ。どうぞ」

ギイイと、錆びかけの扉が軋んで開いた。

明かり取りの窓もないらしく、中は昼間にも関わらず、暗く埃っぽい。

だが……半ば押し込まれるように促され足を踏み入れたジーク達が見たものは、そんな

不快感を圧倒的に上回るものだったのである。

「ひっ!?!」

「な、何だお前ら……!?!」

「もしかして、お前らレギオンか……?」

「そんな……。嫌だ。俺、死にたくねえよお!」

そこに居たのは……紛れもなくヒト。徹底的に緊縛された若者が四人だった。

そして何よりも、彼らの両の眼が突然の来訪者によって“血のような赤”に染まっている

のがはつきりと見て取れる。

「ッ!」

「チツ……」

ジークの顔が猛烈な苦悶で引き攣った。ほぼ同時にダンも憤りを隠さずに舌打ちをする。

「おい、どういう事だよ。こいつらは……魔人<sup>ミア</sup>じゃねえか」

魔獣化は、何も動植物だけに留まらない。

いやむしろヒトという存在自体もまた、そのカテゴリの中の一つでしかない。

そんな魔獣化現象の中のレアケース、亜種こそが魔人なのである。外見はヒトと大して変わらない。

いや、ヒトの姿を留めたまま中てられたのが魔人だとも言える。

だが瘴気の中てられたという魔獣化の洗礼を受けた身であるという事実が消え去る訳では

なく、その身は魔獣と同じく不死性の高い“怪物”的要素を備えて

いる。

そして、これも魔獣と同じく、彼らは感情が昂ぶるとその眼が血のような赤に染まるという特徴も持っている。

「ええ……そうです。数日前、この者達は村の郊外にある忌避地ダンジョンに侵入したのです。瘴気も

濃く魔獣も棲む場所だというのに……」

「で、でも！ あそこはまだ掘れる鉱石がいっぱいあるんだ」

「採って来て街で売ればここでの暮らしも楽に」

「黙れッ！！」

村長らは、振り返ったジーク達の退路を塞ぐように納屋の入口を包囲していた。

悶絶するかのような怒声。

瘦せぎすの双眸がギリギリと射殺すように、納屋の奥の 魔人と化してしまった村の若

者らに向けられる。

「……なのにこの者どもは立ち入った。そして瘴気の中てられた拳句、あるう事が死にもせ

ずに魔人となって帰って来よった」

「お前ら冒険者だって知らない訳はないだろう？」

「魔人も、魔獣も、どれだけ世の中の連中に忌み嫌われているのか、分かっているだろう？」

「だからって……！」

ギリツと歯を食い縛るジークの肩をそっと叩き、イセルナは小さく彼に首を横に振った。

確かに魔獣は人々にとって忌むべき“害獣”である。

そして魔人もまた、その魔獣化の亜種存在として人々の忌避のひいては迫害の対象に

なっているのが現実だ。

「このままこやつらを村に置いておく訳にはいかん。かといって解

き放つても周りにこの村

の生まれだと知られれば、儂らの生活も脅かされてしまう」

「……。だから、俺らにこいつらを“始末しろ”って依頼を出すのか」

もうお互いに腹の中を隠す事はしなかった。

元より検めればすぐに分かることだった。だからこそ彼らは武装し、半ばこの場にジーク

達を軟禁してでも目的を果たそうとしているのだろう。

「申し訳ないですが、人殺しを請け負った覚えはありませんよ」

あくまで冷静に。

イセルナがそう皆を代表して言ったが、それは結果的に村長を激昂させることとなった。

「うるさい！ つべこべ言わず早くその“化け物”どもを殺すんだ！ 人殺しだと？ 何を

言っとるか。こいつらは魔人だぞ、もうヒトなどではないわ！ そもそも魔獣殺しはお前達

“荒くれ者”のお家芸だろうが！ さあ殺せ！ 早く殺せ……ッ！

！  
痩せぎすの身体から、忌避からくる狂気が迸っていた。

殺せ、殺せ、殺せ！

他の村人達も迫るようにそうイセルナ達に連呼する。

「……偏見とは、消えぬものだな」

「今更言つてもしやーねえだろ。所詮こんなもんだ」

ブルートとダンのそれぞれの嘆息。

それはイセルナ以下、団員達も同じ思いだった。あくまで自分達は。

「……………」

その時だった。

ふとジークが戸惑ったままの面々の中から一歩抜け出し、腰の刀に手を掛けたのである。

ザラリと金属音が室内に響く。まさか本当に？ 魔人と化してしまつた若者達はその刃が

自分達の姿が映すのをガクガクと震えながら釘付けになっている。

「ほら見る！ その坊主は儂らの言つ通」

「黙れよ。クソジジイ」

だがその切っ先は若者達には向かなかつた。

刀が抜かれたその刹那、ジークは身を返しながらその切っ先を村長の鼻先寸前へとピタリ

と突き付けていた。

言いかけて、中断される村長の声。

それまでじつと俯き加減に表情を前髪に隠していたジークが、キツと顔を上げる。

「……ふざけんな。俺達は単なる快樂殺人者じゃねえよ」

その表情は静かな怒りに満ちていた。

狂気よりも、ずつとずつと深い怒り。それは痛みを知るが故の憤りだ。

イセルナもダンも、他の団員達も始めは驚きこそはしたが、誰一人その突出を止めようと

はしなかつた。

「俺達はな……人を守る為に魔獣を間引いてるんだよ。殺したいから殺すんじゃない。そう

しなきゃ守れないものがあるから、俺達は武器を取っているんだ。

……人を守る為に命張つ

てる俺達が、人を殺す訳ねえだろうが」

それは皆がジークの言葉に賛同しているという証。

「……ふ、ふん。荒くれ者が偉そうに何をわっ！？」

だがそれでも村長は言い返そうとした。

しかしその言葉が完成するよりも早く、今度はジークの刀が彼の喉元へと突き付け直される格好となる。

緊迫で動けない村長。迂闊に手を出せずにいる村人達。

ジークは、そんな中で再び淡々と思いを紡ぎ出す。

「ああ……。確かに俺達は荒くれ者だよ。てめえら一般市民さまに比べれば収入も安定しない、勝手気ままな浮き草稼業さ。……でもな、こんな俺達でも冒険者としての誇りはある。

自分達の力で以って魔獣を間引いて、皆の生命を守ってるんだ。てめえらは俺達や守備隊の

皆の頑張りで今の暮らしを送ってるんだよ。なのに、てめえらみたいな安全地帯でホクホクしてるだけの、奇麗事や偏見で凝り固まった野郎なんか……俺達の仕事をとやかく言う資格なんてねえんだよ!!」

「うぎやおつ!？」

叫んで、刃の代わりに鳩尾に飛んで来たのは、手首を返した素早い鞘打ちだった。

その衝撃に成す術も無く、村長は短い悲鳴を上げて地面を派手に転がっていった。村人達  
が思わず飛び退き、ジーク達の包囲網が解けてゆく。

「……まあそういう事ですから。ごめんなさいね?」

「分かるだろ? 俺達は魔獣は殺しても、無罪の魔人<sup>ヒト</sup>までは殺せねえ」

そしてジーク達はゆっくりと歩を外へと進めた。

ダメージでふらついている村長を囲むように、村人らはその僅か十数名 だが自分達よ

りも圧倒的に強い十数名をただただ怯えと共に見上げるしかない。

「納屋の中の兄ちゃん<sup>あんな</sup>達は、ここで解放する。……文句は言わせねえぜ」

そんな人々の為に魔獣を狩り間引く一団の中央で、ジークはヒュンと彼らに刀の切っ先を

向けると、そう宣言する。

それは、僕たち兄弟がまだ幼かった　　今ほどの力すらなかった頃の出来事です。

あの日……サンフェルノを魔獣が襲ったんです。

後々から聞いた話では、別の村が無理に森に入っていた所為で魔獣が僕らの村へと追い立てられたのが原因だというものでしたが、今となってはその真偽もはっきりしません。

初めは村の自警団の皆が食い止めようとなりました。

僕たち子供や女性を村の奥に避難させて、最寄の守備隊にも連絡して、彼らが到着するま

で何とか持ちこたえよう。そんな作戦だったんです。

でも、そんな大人達の算段を狂わせたのは……他ならぬ僕たちだったんです。

ご存知の通り、瘴気は生を蝕む毒素です。それは精霊達も例外じゃない。いいえ　マナ

に最も近い存在と言われている彼らの方がむしろ、ヒトよりもずっと瘴気に弱いんです。

だから、村の周りで苦しむ精霊達みんなの声をあの日の僕は放っておけなかった。

兄さんが止めようとしても、僕は自分達の置かれている状況も顧みずに皆の下に向かおうとしていました。

そして、僕たちは出くわしてしまっただんです。

村の大人達が侵入してくる魔獣と押し合いになっているその最前線に。

結果的に、僕たち兄弟が来てしまった事でその均衡は崩れました。それだけじゃない。……その内の一人、マールウおじさんが魔獣に押し倒され、あろう事に

か瘴気に中てられてしまったんです。

おじさんは、その場で死にませんでした。魔獣化に……陥ったんです。

だけど、他の自警団の皆がそれを見て逃げ出しても、おじさんは最後の最後まで僕たち村の皆の身を案じてくれていました。

魔獣になりかけて狂いそうな自分を抑えて、残っていた魔獣をその手で倒して。

そして怯えて動けなかった僕たちに言ったんです。

『俺を殺せ』と。

このままでは自分は完全に魔獣になってしまつて村の皆を、僕たちを手に掛けてしまう。

だからまだヒトとしての意識が残っている今の内に、息の根を止めてくれ……と。

僕たちは拒みました。殺せるわけなんてなかった。

でもそうしている内に、おじさんは完全に魔獣側に“持っていかれて”しまつて。

……でも次の瞬間、兄さんは落とされていた剣で、おじさんの首を斬り裂いていました。

今でも、僕は忘れられません。

どす黒い血に塗れて、剣を片手にガクガク震えてあの兄さんの姿も。

首をざっくりと斬り裂かれたのに、ホッと安心したように僕たちに微笑んで逝つていった

おじさんのあの表情かおも。

結局、それから暫く経つた後で、守備隊と近隣の冒険者さん達が村に到着した事で事態は何とか収拾しました。

でも……僕たちは色んなものを、失っていました。

マーロウおじさんは勿論の事、時間を稼ぎをしていた村の自警団

の皆も少なからず犠牲になっ

……。その中で一緒に戦っていた父さんも、村に戻ってくる事は  
ありませんでした。

悔しかった。僕たちは、何もできずに……。いえ、むしろ自分達の  
所為でよく知った人すら

も結果的に死に追いやってしまった。

力が、欲しかったんだと思います。

兄さんは、村のご隠居さんで元冒険者の竜族ドラグネスのクラウスさんに剣  
を。

僕は、その娘さんで村の教練場の先生でもあるリユカ先生に魔導  
を。

もう二度と、瘴気や魔獣の 自分の力不足の所為で誰かを悲し  
ませたくも、失いたくも  
なかったから。

そして十五になって、成人の儀を済ませた兄さんは逃げ出すよう  
に村を出て行きました。

無理もないですよ。いくらマーロウさんのご家族が「仕方なか  
ったのよ。最期の頼みを

聞いてくれてありがとう」と赦してくれていても、自分の手でおじ  
さんを殺したという事実  
は変わらないんですから……。

きっと兄さんの剣が“目の前の敵以外”も斬っているように見え  
るのは、あの日の悔しさ  
を必死に振り払おうとしているからなんじゃないでしょうか？

……。ええ。兄さんも分かっているとは思いますが。そんな事をし  
てもあの日は帰ってくる

わけじゃない。でも、何もせずにはいられないんだと思います。

ですから……。僕からも願います。

一見無鉄砲で、言動がぶっきらぼうでも、今まで通り皆さんには



兄さんを見守って導いてあげて欲しいんです。……そもそも原因を作った僕が言える立場じゃないですけど。

きつと兄さんは、僕よりもずっと苦しんできた筈なんですから。

「あ。おかえり、兄さん」

「……おう。ただいま」

ジーク達が宿舎に帰ってきたのは、その日の空が暮れなずむ頃だった。

部屋のドアを開けて近寄ってきた足音に気付き、アルスは真新しい机に着いて耽っていた

読書の手を一旦止めて振り返る。

「流石にもうそつちは帰って来てたか」

「うん。お昼過ぎにね。大通りのお店を回った後、皆と外でお茶をしてから」

「そっか。しかし随分と買い込んだな……」

「あ、はは……。品揃えが良かったからつい、ね。兄さん達はやっぱり依頼に？」

「ああ。ま、そんな所だ」

早速半分近くが埋まった本棚を見遣ってジークが言う。

そんな反応に思わず苦笑する弟に生返事をしながら、ジークは三刀と三小刀の得物六本を

部屋の一角の掛台にそつと置くと、どっかりとベッドの縁に腰掛けしていた。

(……言えるわけねえよなあ)

何時ものぶつきらばうな顔に浮かぶ微かな苦笑。

だがそれは単なる疲労ではない。

害獣退治と思いきや、実は魔人になった村人の殺害だったというトンデモ依頼。

故意に人に災いを成している魔人ならともかくとしても、そんな依頼を受ける訳にはいかなかった。

結局今回の依頼は撥ね付けた。虚偽情報だったとギルドにも通報を済ませた。魔人と化し

てしまった当人達も「人目に触れると迫害されるかもしれない。でも生きる」と解放した。

後の事はギルドや当事者連中が何とかするだろう。

「……疲れた。ちょっと横になるわ。飯時になったら起こしてくれ」「うん。分かった」

ふうと大きく息をついて、ジークは上着をベッドの柵に引っ掛けごろんと横になる。

アルスはそんな兄を微笑んで暫し見遣ってから、再び本に目を落とした。

(兄さん、無理しちゃって……)

四年近く会わなかったとはいえ、僕たちは兄弟だ。何かあったらしい事くらいは分かる。

でも兄さんはきつと話さないだろう。自分も、だったら無理に訊くべきでもない。

紙面に広がる魔導の構造式。

世の中も、このようにもっと分かり易く体系化されればいいのかなとアルスは思った。

だけど、同時に仮にそうなってしまふときつと面白くなるのだろうなとも思った。

例えば 今こうして自分を気遣って、じつと堪えてくれている兄の優しさも。

徹底的にロジカルな世界とはいうのは統治しやすいのかもしれないけれど、人にココロが

なくなってしまうえば、きつとその世の中は冷たく哀しいものになる。「……ぐう」

兄の寝息が聞こえ始めた。

アルスは肩越しに一瞥し、フツと微笑みを漏らす。エトナはそう  
した彼の様子を見てちょ

こんと小首を傾げながら浮かんでいる。

今だからこそそう思うのかもしれない。

だけど……ココロがあるから、僕らはきつと弱くも強くもなれる  
んだ。

「おやすみ。兄さん」

暮れなずみの陽と机上のランプに照らされながら、弟はそつと兄  
の寝顔に呟いていた。

3・(0) 幼き彼の瞳

「いるもん！ 皆はいるもん！」

それはまだ少年が、その瞳に映る世界が必ずしも他人と同一でないとして理解していなかった

頃の話だ。幼い彼は涙目になって訴えていた。

場所は近所の森の中。

村の遊び仲間達を前にそう力説する。それが、少年にとっての現実だったから。

「いねーよ！ どこにいるんだよ〜」

「オレ達には見えないぞ。この嘘つき！」

「い、いるよ！ 今だって……ほらー！」

しかしこの他の子供達は一向に信じてはくれなかった。ぐつと堪えて、少年はびしりと一同の中空を指差した。

彼の瞳には、確かにそこには頭に疑問符を浮かべてこちらを見つくる千差万別の姿をした

御遣い 精霊たちがふよふよと漂っている。

「……何もねえぞ？」

「ほら〜、やっぱり嘘つきだ〜」

しかしその世界は他の子供達とは共有できていなかった。

再び幼さ故の容赦ない批判が待っていた。皆から連呼される「嘘つき」のコール。

「違……。ほ、本当にいる、もん……」

そして少年の涙目が限界を迎えようとしていた、その時だった。

「こらー！ お前らアルスに何やってんだー！」

「げっ。ジークだ」

「逃げる〜」

同じく子供の、だが確かに叱り付ける声色が飛んで来たのだ。

少年 アルスも含めた面々がその少し年上の少年の姿を見遣る

と、子供達はとてととと  
散り散りになって逃げ出し始めた。

「あ。こら、待て！」

少し年上の少年　ジークが睨みを効かせたが、相手は散開した  
複数人だ。とてもではな

いが捕捉できない。ジークの動きに隙ができたのをいい事に、彼ら  
はそのまま森の出口、村  
の方へと走り去って行ってしまふ。

「あんにやる。帰ったら一発シメとかねーとな。……大丈夫か、ア  
ルス？」

「うん……。ありがと」

駆け付けてくれた兄に、アルスはついに涙を零していた。

少し遅かったか？　ジークは弟の涙を見て内心かなり狼狽してい  
る。

「ねえ、兄さん。兄さんは見えるよね？　ここに居る皆のこと」

「えっ？」

だから次の瞬間、まるで懇願するかのようアルスに言われ、ジ  
ークは困り果ててしまう  
こととなった。

(それって例の森の“トモダチ”の事、だよな……)

弟が村、特にこの森の中でたくさんの何かを見ているらしい事は  
前々から知っていた。

だがジークもまた、他の子供達、いや多くの村の大人達と同様に  
その姿を知覚できてはい  
ない。だからといって嘘つきだとは思わないが、少なくとも弟の期  
待に応えられる自分では  
なかった。

「あ……………」

アルスが懇願の眼差しで指差す中空。だが、やはりどんなに目を  
凝らしてもそのトモダチ

とやらを見つける事はできない。

(うう。俺にどーしろってんだよお……)

兄として、ジークは大いにその返答に迷っていた。

「それは精霊よ」

だがそんな時、助け舟が来た。

二人が振り返ると、村の方向から一人の女性が近付いて来ていた。サラリとしたセミロングの濃紺の髪。そのうなじには宝石状の器官“竜石”が髪の間から垣間見えている。

リュカ・ヴァレンティノ。村の教練場で子供達に勉強を教えているドラグネスの女性だ。

「せーれい？ 何だよそれ」

ジークは聞き慣れない言葉に眉根を上げていた。

その隣でアルスは優等生よろしく、フツと微笑んで言う。

「マナにとても近い、魔導の御使い様……ですよね」

「ええ、そうよ。よくできました」

リュカは二人の傍まで歩いてきた。そして教え子を慈しむように微笑みながら、模範解答

をみせたアルスの頭をポンと撫でてくる。

「精霊はね、魔導を勉強した人でないと目には見えないの。彼ら自身が姿を現してくれない

限りはね。だからあの子達やジークが見えていなくても仕方ないのよ？」

「そうなんですか……。じゃあ、兄さんは」

優しく諭すようなその言葉。

その包容力にアルスの泣きべそが止んでいく。

だがそれと同時に、アルスはふと兄が実は見えていなかった事に気が付きかけるが、

「あ、いや……そ、それじゃあ先生。何でアルスにはそのせーれいが見えてるんだ？ その

話だと、まどーってのを勉強しないと見えないんだろ？」

その不満な視線を振り払うように、今度はジークが質問を投げ返していた。

「そうね……。ちゃんと検査しないと確かなことは言えないけれど、リュカは微笑の中に何処か複雑な感情を湛えていた。」

もう一度、そつとアルスの頭を撫でる。彼のその無垢な幼い瞳が彼女を見上げている。

「……アルスは間違いなく素質があるわ」

リュカはきよんとする兄弟を見下ろしながら、静かに呟いていた。

「魔導師の、それも天賦の才に近いような素質が……ね」

### 3 - (1) 入学式

会場内は式の始まりを待つ人々のざわつきでごった返していた。

中央には幅広く新入生達の列。その両翼には在校生が、更にその外側、演壇の上座方向に

は来賓及び教職員らが陣取っている。

「……こりゃあ、思ってたより多いなあ」  
ざつと見て数百人規模。

ジークは二階の父兄席の一角から、ぼんやりとそんな人々の群れを眺めていた。

「ふふ。だって魔導学司直営の学校なんだもの。注目されて当然よ」

「しかしここからでは……アルスが何処にいるかは分からないな」

その傍らには、イセルナとリンファの二人が座っている。

今日はアカデミーの入学式。しかもアルスはその新入生主席としてスピーチを行う事にな

っている。まさに晴れ舞台と言っていていいだろう。

「まあこれだけの数ですからね。スピーチに備えて別の場所にいるかもしれないですし」

その晴れ姿を一目見ようと、いやむしろ兄として心配で堪らなくて。

ジークは普段着慣れない余所行きの服に身を包み、既にそわそわと何度も演壇の方を確認

していた。加えて、以前に手続きの付き添いで学院に訪れた際に守衛らに見咎められた件も

あり、正装なイセルナ達と同様、今日は刀も差えものして来ていない。

（……本当に大丈夫なんだろうな？ あいつら……）

そうした普段とは違う場・装いなども相まって、現状ジークのそわそわした心持ちは中々

治まる気配を見せずにいたのである。



ややあって、不意にブザー音が会場内に響いた。次いで天井から下がる照明が落とされてゆき、辺りは適度な薄暗さになる。

式が始まった。

それまでざわついていた人々の声が徐々に静まっていく。

その様子を確認するように、進行役と思わしきスーツ姿の女性

エマがスポットライト

を浴びながらざっと会場内を見渡すと、宣言した。

「本日はお忙しい中、当アカデミー・アウルベルツ校第七十七期入学式典にご参加頂きあり

がとうございます。これより式典を開会致します。では、先ず始めに学院長よりご挨拶を頂

きます。……全校生、起立」

エマの淡々としたその言葉一つで新入生・在校生両者を含めた生徒達や教職員らが一斉に立ち上がる。

同時に壇上へと登り姿を見せたのは、学院長・ミレーユだ。

そして彼女が演壇に着いたのを見計らい着席の号令が掛けられ、同じく一斉に一同が重なる

物音と共に席に着く。ミレーユはフツと満足気な微笑を見せてから口を開いた。

「新入生の皆さんは初めまして。在校生の皆さんは終業式以来ですね。私が当校の学院長を

務めています、ミレーユ・リフォグリフです。先ずは入学おめでとう。私達アカデミーの教

職員一同、そして生徒達は貴方達を歓迎します。……そして壇上からではありますが、来賓

の皆さんには本日多忙な中お越し頂き、この場を以ってお礼を申し上げます」

新入生達にそう微笑んでから、こくりと壇上から来賓席にを向い

て会釈を一つ。

のんびりとした雰囲気ながらも、知的にまとめられた佇まい。

ジーク達には彼女がどれだけの間学院長というポストに就いているかは知る由もないが、少なくとも彼女の様子からはこうした公の場における手際の良さと慣れを感じさせる。

「……さて。これから新入生の皆さんは五年間、基礎基本から応用に至るまでみっちりと魔導のイロハを学んでいって貰います。履修など学院生活に関する細かい点は、合格通知と共に送付したしおりをしっかりと精読しておいて下さいね？ それと分からない事があれば、私達教職員だけでなく、先輩達も大いに利用して下さい。訊くは一時の恥かもしれませんが、知らぬは一生の恥ですから」

会場内の面々は、しんと静かに彼女の紡ぐ言葉に耳を傾けていた。それは時折茶目つ気を交えつつも、そこには教え子達への確かな愛情が見え隠れするからなのだろう。

「故に魔導とは人的要素を濃く持つ技術なのです。これからの皆さんが修めてゆく知識や実技は勿論のこと、学院やその周辺での出会い、別れ、各々が取る選択……その全てがこれからの皆さんの一人一人の魔導を形作ってゆくのです。私達アカデミーは最大限、そのお手伝いをしましょう。皆さんの形作る魔導が、これからの貴方に、他の誰かに、そしてこの世界にとって良きものとなることを願います」

そうしてサラサラと流れるように、ミレーユの挨拶が終わった。

再びエマの合図による一同の起立・着席の波と共に、彼女は悠々

と壇上から去ってゆく。

それから暫くは式は厳粛に、滞りなく進んだ。

来賓達の長つたらしい挨拶に始まり、在校生代表のスピーチやエマによるアカデミーの教

育システムの紹介など。時間の経過と共に肅々と予定の項目が消化されていく。

「続いては新入生挨拶です。新入生代表、アルス・レノヴィン君」

「は、はいっ！」

そして……その時はやって来た。

進行役に戻っていたエマが次のプログラムを読み上げ、新入生席の一角 出て来やすい

ように前列端の席から、やや空回った声と共にアルスが弾かれるように立ち上がる。

「やっと出番のようだね」

「……随分緊張しているようだな」

「まあ今朝もガツチガチだったしなあ……。ホント、大丈夫なんだから……」

「ふふ。でもこれもアルス君にはいい勉強よ。私達も見守りましょう?」

その動きを、ジーク達もまたしかと確認していた。

ブルートが鳥の目で皆の代わりにアルスの様子を伝え、三者三様の反応が返ってくる。

アルスは緊張に身体を強張らせつつも何とか壇上に登っていた。ちらりとエマが無言のまま眼鏡の奥の目を光らせる。

新入生代表 即ち今年の受験生の頂点に立った人物。会場内の面々の視線が否応なしに

一斉にアルスに向けられる。

「……」

そしてごくりと大きく唾を呑んで。

「ご、ご紹介にあ、預かりました。新入生代表、アルス・レノヴィンですつ。ご、この度は栄えある当アカデミーへの入学を許して頂き、私自身、身の引き締まるおみよひっ!？」

続けようとしたその言の葉が、突如として中断した。

他ならぬ　アルス自身によって。

「……………」

至つて真面目に聴いていた一同が呆気に取られていた。

壇上では顔を俯けて言葉なくプルプルと震えているアルスの姿が見える。

「……………もしかして、噛んじやったのかしら？」

「あのバカッ！　早速やつちまいやがった……………！」

「むう」「ご、これは流石に……………」

紛れもなくアルスは舌を噛んでいた。緊張の余りに呂律が回り切らなかつたのだろう。

啞然とするイセルナとブルート、愕然と頭を抱えるジークに、思わず苦笑を隠せないでいるリンファ。父兄席からその一部始終を見ていたジーク達だけではない。どうやら壇上の彼

の様子がおかしいらしいと、出席者一同や教職員らが少しずつ戸惑い混じりに騒ぎ始める。

「ちよ、ちよつとアルス！　しっかりして!!」

だがそんなざわめきは、壇上の相棒の失態に慌てて姿を見せたエトナによってより一層大きくなることとなった。

無理もない。現役で活動する者達ですら、持ち霊付きの魔導師の数は全体の半分に届くか

否かと言われている。にも関わらず、この壇上に立つ魔導師の卵は既にその持ち霊を従えているのである。

当のアルスとエトナはそれ所ではなかったが、彼女が姿を見せた事により、アルスの学年

主席としての実力の片鱗はしかと場の者達に示されることになった。

「……………う。あ、ああ……………」

恐る恐ると顔を上げるアルス。だが当然ながら皆の視線は色々な意味で彼にこれでもかと注がれている。

(ど、どど、どうしよう……………!?)

手元に置いていたスピーチのメモの内容などすっかり吹き飛び、アルスの頭の中は瞬く間に真っ白になっていく。

「お、落ち着いてアルス。ここでリタイアしちゃダメだよお。……………ほら、ジークも言ってた

じゃない。今朝のアドバイス思い出して」

「今朝の……………」

だがそうはさせまいとエトナは必死だった。

碧のオーラを纏いながらふよふよと漂い、そう相棒に語りかける。

「で。結局今になってガチガチに緊張してるわけか」

それは今朝の身支度時、宿舍の部屋でのやり取りだった。

余所行きのローブに身を通したアルスの漏らした不安の声に、ジークが嘆息を混じらせた

表情でばやいたのだ。

「だから言ったんだよ。さっさと断わっとけて。お前、大人数の場で熱弁とかキャラじゃねえじゃん」

「で、でも……………学院長先生からの直々の頼みだし、主席の僕が断わったりしたら後味が悪くなるかもしれない……………」

「そういう心理が分かっててあの学院長も言ったんだらうよ。まあ、

結局ここまで来ちまつ

たんだ。もうやるっきゃねえんだろうけど」

『うう……。そうなんだけどさあ』

もじもじと。アルスはローブの裾を握って煩悶していた。

とは言っても、こいつは元々内気な部類だ。そもそもこういう役割は合わねえよな。

そしてそんな弟を暫し眺め、ふとジークは一つの案を思いつく。

『……だったらよ。精霊だって思えばいいんじゃないか？ 見知らぬ人間に見られるのが恥

ずかしいってんなら、そう思い込んでみた方がお前の場合、気が楽だろ。俺とは違って精霊

の姿は普段から見慣れてるし、話してたりするだろ？』

『……うん。確かにそうだけど。なるほど、精霊か……』

『ま、気休めみたいなもんだけどなあ。ともかくだ。後はぶっつけ本番だ。せいぜい盛大に

当たって砕けて来い』

『く、砕けちゃ駄目なんだってば〜！』

得心したり、また弱気になったり。

兄のそんな言動に弄ばれるようにして、アルスは半ば本気でツツコミを入れていた……。

「……精霊だと、思え」

今朝の一コマを思い起こし、アルスは俯き加減でそう小さく呟いていた。

こくんと頷くエトナ。周りでは相変わらずわざめきの声が聞こえてくる。

（精霊、精霊、精霊。僕を見てるのは人じゃなくて精霊。大丈夫、

大丈夫、大丈夫……！）

次の瞬間、アルスは意を決したようにバツと顔を上げた。

瞳に映る無数の出席者達。その驚きや苦笑の顔一つ一つを、アル

スは脳内で馴染み深い隣

人 精霊達へと置き換えてゆく。

「……こ、この度は栄えある当アカデミーへの入学を許して頂き、  
わ、私自身、身の引き締  
まる思いです」

コホンと小さく咳払いをして、再び開かれ始めた口。

それが彼の軌道修正への試みだと皆が気付くのにさほど時間は掛  
からなかった。

ざわめいた声の重なりが、徐々に静けさの中に収まっていく。

「私も、そしてきつとこの時を同じくした新入生の皆さんも、それ  
それに魔導師への憧れと  
夢を持ってこ、この学び舎の門を叩いたのだと思います」

その後のアルスは、再び嚙んでしまおうというような事はなかった。  
相変わらず緊張でたどたどしさを残してはいたが、時折手元のメ  
モに視線を落としつつも  
折り目正しい誓いの言葉を紡いでゆく。

背後でその様子を見守っていたエトナも「もう大丈夫だね」と言  
わんばかりに微笑み、や  
がてフツと姿を消していた。

「 私達は、これより一人前の魔導師を目指して切磋琢磨するこ  
とを誓います。先生方、

先輩方、学院関係者の皆様。 まだまだ発展途上な私達に、是非とも  
ご指導ご鞭撻を宜しくお

願い致します。そして来賓の皆様も、これからの私達の成長を温か  
く見守って頂ければ幸い

です。……まことに簡単ではありませんが、これを以って新入生代表  
の挨拶と代えさせて頂き

たく思います。ご清聴、ありがとうございました」

ペコリと頭を下げてスピーチが終わる。

数拍の間があつて、会場内にどっと拍手の合奏が響いた。

二階で一部始終を見ていたジーク達も、何とか形になったアルスの晴れ姿を見て一安心と

いったように頷き、顔を見合わせつつその拍手の中に加わる。

「……ありがとうございます」

もう一度頭を下げて、アルスは小さく呟いていた。

ちらとエマを見ると「やれやれ」といった苦笑が向けられている。

アルスは彼女に苦笑を

返してその目での合図を受け取ると、ゆっくりと壇上から去ってゆく。

暫しの間、会場はアルスを 新しきルーキーを讃える拍手で満

ちていた。

「……………くっ」

ただ一人、その中で密かに舌打ちをしていた者がいた事に気付くこともなく。

「ふい〜、終わった終わった。やっぱこういう堅苦しいのは柄じゃねえや」

かくして入学式は無事に終了した。

ジーク達は二階席から外へ、会場である学院の講堂の外廊下へ出ると、階下に下りて行く

人々の波の中に合流する。

「でも一息つくのはホームに戻ってからよ？ 家に着くまでが、出<sup>えん</sup>席<sup>せき</sup>」

「しかし……一時はどうなることかと思ったな」

「ええ……。全くですよ。エトナがフォローを入れて何とかならなかったみたいですけど」

リンファの呟きに苦笑して、ジークはちらりと周囲の人々を見遣ってみた。

父兄席からの人なので当然なのだが、その多くは子の親たる世代の男女（と子の兄弟と思



われる少年少女達)のようだ。

ざっと見た限りではアルスを悪く言っているような者は確認できなかったが、ジークは弟のあのテンパリ様を思い出し、はたと我が事のように恥ずかしくなつて黙り込んでしまう。

(……ん?)

そんな折だった。

ふとジークの視界の先 階下の学院のキャンパス内に、何時の間にか多数の人々が集まり人ごみができていた。

少なくとも父兄ではない。多少の年格好の差はあるが、おそらく学院の生徒だろう。

よく見てみると彼らは皆、口々に何かを叫び、プラカードを掲げたり、通り掛かる人々にビラを配つたりしている。

「あれは研究室ラボの勧誘だな」

「ラボ? それが学院と何か関係あるのか?」

そしてジークがぼんやりと目を遣っているのに気付いたのか、ふとブルートがそう言葉を挟んでくる。聞き慣れない。ジークは少し眉根を上げて彼に振り返った。

「知らぬのか……。まあいい。いいか? アカデミーとはそもそも魔導学司直営の魔導師養アカデミア

成学校だ。アカデミア自体もそうだが、基本的に魔導師というのは学者の類でもあるのだ」

アカデミアにおいて、所属する魔導師は組織の研究者である。

そしてその実績を認められた者は自身の研究室ラボを与えられ、他の魔導師らを部下としてよ

り一層の研究に勤しんでいる。

そしてそんな部局的な構造は、その下部機関でもあるアカデミー

においても同じだ。

生徒達に魔導の指南を行う教師陣。彼らも元はアカデミア所属や在野からスカウトされた魔導師であり、多くの場合同じくラボが割り当てられている。

所謂ホームクラスという概念がなく、基本的に自由に履修講義を選べるシステムである学

院の性質上、ラボとは生徒達にとっては所属先となり、その主が彼らの指導教官となる。

「ふーん……。でも何で所属してる連中が勧誘してんだ？ 人数が増えたらその分、そのの

先公は教えるのが大変になるんじゃないの？」

「その面はある。だが基本的にラボへの予算配分は在籍人数に比例するからな。誰とて良好

な環境で学びたいと思うだろう？ 故に新入生を引き込もうとする現象が起こる」

「とはいっても、それ以外にも教官自体の研究実績や研究分野によつて必要な設備の違いも

あるから。一概に人数の多さがイコール予算の多さにはならないのだけどね」

「……なるほど」

ブルートが、そしてイセルナが捕捉して言う。

伊達に魔導の心得があるだけではないらしい。ジークは正直半分くらい頭に入っていない

ながらも頷いてみせ、再びその人だから 新入生勧誘の様子を見下ろした。

「ふむ……。だとすれば、アルスは大変だな」

「えっ？」

すると、それまでイセルナらの説明を聞いていたリンファが真面目腐ったように呟いた。

少々間拔けな顔で振り向くジーク。そんな彼に、彼女は静かに破

顔を  
顔する。

「だってそうだろう？ アルスは今年の新入生主席。しかも見習い段階で持ち霊付きという

レアケースだ。式でスピーチもしたのだし、先輩諸氏らが獲得に動かないとは思えない」

「あゝ…………。た、確かに」

言われてジークはようやくその意味を悟った。くしゃつと前髪を抱えて眉を寄せる。

どうするんだよ。あいつはただでさえ遠慮がちというか、内気な部分があるのに…………。

「…………。アルス、大丈夫かなあ…………？」

今も尚、現在進行中でざわめいている新人勧誘の人の波を見下ろして。

ジークはどよんと迫ってくる心配に気分を重くする。

一方時を前後して。

「レノヴィン君、是非うちのラボに！」

「いやいや、何とぞうちに！」

「何言ってるの。彼が入るのは私達のラボよ！」

アルスは大丈夫ではなかった。

その姿を認めた次の瞬間、殺到してきた先輩達。アルスは成す術もなく人ごみの渦中の人

となり、方々からのラブコールを受けつつ揉みくちやにされていた。

「あばばば…………」

アルスはその謙虚さ故、正直言って自分の置かれている状況を認識していなかったと言え

るだろう。式が終わり、新入生が居残って今後についてのガイダンスを受けた後も、アルス

はミレーユとエマから労いと苦言をそれぞれ受けていた。

だからこそ、そのやり取りも済ませた事でホツとし、油断してい

ただ。

「す、すみません。僕はもう」

アルスは揉みくちやにされながらも何とか口を開こうとしていた。だがラブコールを受ける当人といえどそんな控え目な声が彼らに届くわけがなく、次の瞬

間にはついにバランスを崩してその渦の中に転げ込んでしまう。

頭の上で、騒々しく自分を呼ぶ声が幾重にも重なっていた。

目の前に映るのは先輩達の脚、脚、脚。

しかしアルスは今しかないと思い立ち、時折彼らから無自覚に蹴られながらも、四つんば

いの体勢でこつそりと人ごみから顔を出すと、気付かれぬ内にその場を逃げ出す。

「……はあ。ひ、酷い目に遭った……」

そしてその脚で暫し逃げ回った末に辿り着いたのは、種々の草花が生い茂る庭園らしき場所だった。

「ふふん？ でもモテモテだったじゃない。流石はアルスだよ」

「からかわないですよ……。エトナだって、僕の進路の事は分かっているくせにさ」

「……ま、そーだけとお」

まだ少し荒いままの息を整えながら、アルスはぼんやりとその周囲を見渡す。

人ごみから解放されてやっと姿を見せたエトナが冗談半分でからかってくるが、アルスは

あまり余裕はなかった。少し真面目腐ってそう言い、つーんと唇を尖らせる彼女の反応に對して苦笑の顔色を漏らす。

学院の敷地内に間違いは無いのだが、辺りは静かだった。

見た印象では、校舎同士の狭間のスペースを利用した中庭といった所か。緑の放つ空気が

講室内とは違う感触を味わわせる。

改めて大きく深呼吸をしてから、アルスはようやく人心地をついた。

「で、アルス。これからどうするの？ ガイダンスじゃあもう今日からラボ見学が始まってるって話だけど」

「うーん……どうしようかな。一応は講義シラバス目録から幾つかはピックアップしてきてはいるけど……」

先輩達の勧誘があれほどなのだ。自分がひょいっと気軽に顔を出してみても、あのように騒がれてしまうのは何だか申し訳ない気がしてしまう。

アルスは暫し思案顔になった。その傍らでエトナはふよふよと浮かんでいる。

「……とりあえず、兄さん達に連絡は取っておこうか。僕は少しラボを回ってみるから、兄さん達には先に帰っていいよって」

「うん。おっけー」

腰掛けていた花壇の端から立ち上がって、アルスはエトナを見上げて言った。

頷く彼女を確認すると、

「皆、ちよつといいかな？」

アルスはエトナではなく、周囲の中空に向けてそう呼び掛け始める。

するとその声に惹かれるように、ポウツとあちこちから光る毛玉だったり、羽の生えた半

透明な小人だったりといった下級精霊達が姿を現した。

まるで雛鳥が小さく鳴くように、ふわふわと漂いながら近寄ってくる彼らに、アルスは穏

やかな微笑みを返してお願いをする。

「えつとね。兄さん達に伝言を頼みたいんだ。僕らは少しラボを回

つてから帰るから兄さん  
達は先に帰ってて。……頼める？」

言つと、精霊達は言語にならない鳴き声を上げていた。

それは彼らの快諾の合図。アルスはにっこりと優しく微笑んだ。

兄さんは魔導が使えないから皆は見えないけれど、今日はイセル  
ナさんやブルートさんも

一緒にいるから、伝え聞いて貰える筈。

「じゃあ、よろしくね」

言つてアルスはふよふよと飛んでいく精霊達を見送つた。

少しだけ寂しくなったような気がする庭園。アルスは暫し緑と灰  
色の絨毯から中空を見上  
げると、エトナを伴い早速幾つかラボを回ってみようと歩み出そう  
とする。

「見つけましたわ」

だが、その歩みはすぐに遮られることになった。

「……貴方は？」

そこに立っていたのは、一人の少女。年格好はアルスより少し上  
だろう。サラリと長い淡

い金髪を揺らし、いかにも勝気な瞳をアルスに向けている。

ふわりとエトナが黙したままアルスの傍らに並んだ。

少なくとも見覚えは無い。アルスはぱちくりと目を瞬かせて彼女  
を見る。

「アルス・レノヴィンで、間違いありませんわね？」

「あ、はい……。そうですね」

だが対する彼女はそんな質問は無視していた。代わりに思わず肯  
定してしまうアルスの返

事を聞いて、彼女はふんつと口元により一層気の強い孤を描く。

そしてビシリと。その指を真つ直ぐにアルスに差して、

「私の名はシンシア・エイルフィード。アルス・レノヴィン、貴方  
に勝負を申し込みますわ！」

「この少女、シンシアはそう高らかに宣言してきたのだった。」

### 3 - (2) 初顔合わせ

「勝負？ 何で僕に……」

突然の出来事にアルスは戸惑いの表情を隠せなかった。その傍らではエトナがむくれっ面

であからさまな警戒心をこの金髪少女に向けている。

間違いなく、彼女とは初対面の筈だ。なので何か失礼をした記憶はない。

しかし、先程から彼女から感じているこの気配は。

「とぼけないで下さるかしら？ 貴方が新入生主席だという事は明白でしてよ。それも私と

同じ、持ち霊付きの……ね」

「えっ？」

アルスが小さく驚き、エトナがむすつと眉根を寄せる。金髪の少女・シンシアは不敵に口

元に孤を描いて晒うとパチンと指を鳴らす。

「カルヴィン！」

次の瞬間、彼女の傍らの中空から紅い奔流が迸った。

それは間違いなく精霊の顕現である。数秒も経たずして姿を見せたのは、隆々とした身体

に鎧を纏った、人馬の姿をした精霊だった。

「やっぱ、あいつも持ち霊付き……」

「うん……。僕ら以外にもいたんだね」

そしてシンクロするように腕を組んだ彼女達二人に、エトナはさつとアルスを庇うように

して一歩前に出る。

「我が名はカルヴァーキス！ 鉄と戦の精霊なり！」

カルヴィンの愛称で呼ばれたその精霊は相棒以上シンシアに暑苦しい叫び声で名乗りを上げていた。



中空に浮かぶ人馬の武人。そんな強面の佇まいがアルスとエトナを見下ろしている。

「ま、待って下さい。僕は別にあなた達と争う理由なんて」

「お黙りなさい。貴方になくても私にはあるのですわ。そう、この私を差し置いて主席の座

に収まるなど……認めませんわ！」

「はあ！？ 何言ってるのよ、アルスは真正銘主席だもん！」

「ちょ。エ、エトナ落ち着いて……」

シンシアは勝気に高らかに言い放つ。だがそれ以上に、彼女の言葉にエトナが喰って掛か

っていた。今にも飛び掛りそうになるエトナをアルスは宥めるが、ムキになった彼女の怒り

は中々治まってくれそうにない。

「じゃあ訊くけどさ。あんたは受験の成績いくつだったのよ？」

「えっ。それは」

「……確か筆記が百八十三点。実技が百九十点だったな」

躊躇するシンシアの代わりに、カルヴィンが答えていた。

「……………」

互いの空白に隙間風のような間が空いた。

目を丸くして自身の持ち霊を見遣るシンシアに、ややあってエトナはぷつと小さく吹き出して笑う。

「ふっふっ〜なんだあ、やっぱりアルスの勝ちじゃん。アルスは満

点と百八十八点の合計三

百八十八点。あんたよりも上だもんね！」

「ぬぐっ……！ か、カルヴィン！ 何で喋っちゃうのよ!？」

「勝負をするのであろう？ ならば正々堂々とぶつかってゆくのが武人というものだ」

シンシアは思わず頭を抱えていた。その相棒の姿にカルヴィンは至って真面目に、至って

不思議そうに眉根を上げている。対してエトナは得意気に胸を張っていた。

「え、え〜っと……」

一方で、当のアルスはあわあわと両者の間で視線を行ったり来たり。

事態が悪化している。何とかしないと……。

混乱からまだ立ち直り切っていない頭をフル回転させ、アルスは何とかこの場を穩便に乗り切ろうと試みる。だが、

「……じゃ、じゃあ導力！ 導力検査の結果は！？ ちなみに私は780MCですわ！」

「780う！？ う、嘘……アルスより上じゃない」

「ふふつ。私の勝」

「でもさ？ 導力検査は受験の成績に入っていないよね？」

「ふむ。確かにな」……

事態は無情にもアルスを置き去りにして二転三転してゆく。

「ああ、もうっ！ カルヴィンあんたはちよつと黙ってて！ 何

にせよ魔導は実践よ。今

ここでその白黒をはつきりさせますわッ！」

そして、遂にヒステリーが頂点に達したシンシアが叫んだ。

その様と言葉を受けフツと口元に孤を描き、相棒の真上に位置取って構えるカルヴィン。

見ればシンシアの身体からはマナの光が輝き出している。

「アルス！」

「……う、うんっ」

だがそこはお互い卵と言えども魔導師だった。アルスとエトナは瞬時にその動作が意味するもの

相手が魔導を放ってくることを察知し、迎え撃つ体勢を取る。

「盟約の下、我に示せ

ファル・ヴァロン  
散弾の鉄錐！」

「盟約の下、我に示せ　　ガイアブランチ　大樹の腕！」

次の瞬間両者の魔導が激突した。シンシアの周囲から射出されたのは、大地の鉄分を凝縮して形成された多数の鋼の尖った

弾丸。対するアルスの足元から躍り出たのは、同じく大地から周囲の草木を編み込むようにして巨大な形を形成した樹木の鞭。

短縮詠唱。それは持ち霊という固定の協力者を持つ故に可能な、瞬時の術式展開である。

降り注ごうとする鋼の弾丸と樹木の鞭が、お互いを薙ぎ払い合った。

樹木の鞭を貫いてゆく弾丸もあれば、鞭にを受け止められ、弾き返されるそれもある。

数十秒ほどの間、アルスとシンシア達は互いに放った魔導の破壊力の余波にあおられて身を庇っていた。

「止めて下さい！　僕らに戦う理由なんてない！　カルヴァーキスさん、貴方は彼女を持ち霊なんでしよう、どうして止めて下さらないんですか！？」

もうもつと土煙と細切れに散った草木が舞っている。

ようやく余波から顔を上げたアルスは、そう中空に浮かんでいるカルヴァインに向かって訴え掛ける。

「止める？　何故だ？　申したように我は鉄と戦の精霊……。強き者とは即ち悦びなのだ。

お主の力は我が主に並ぶ……。久しぶりの好機、拒む理由など無かるうて」

「そん、な……」

だが自分達に好戦的なのは彼も別の意味で同じだったようだ。

純粹に戦うことが楽しい。アルスにとっては共感したくない感情

だったが、精霊とは姿も

その性格も千差万別なのは重々承知している。

「……譲歩することなんてないよ。喧嘩を吹っかけて来たのは向こうなんだから」

「エトナ……。でも……」

加えて傍らのエトナも、すっかり敵対心を露わに身構えていた。

それはきつと彼女達が自分に害を成してくる故なのだと思じたかったが、アルスは正直心が痛む思いがした。

何よりも このまま此処で戦えば、この庭園や校舎、もしかしたら他の学院生まで巻き込んでしまうと思ったから。

「アルス！」

だがそんな思慮の暇は許されなかった。

エトナの声に我に返ると、見上げた先の中空でカルヴィンが掌に鈍色の炎を生み出しているのが見えた。そしてそのまま腕を振るい、その炎の奔流をこちら

に向けて放ってくる。

「くっ……！ 盟約の下、我に示せ

バブルコーティング  
水泡の護衣！」

アルスは再び咄嗟に、エトナを仲立ちに短縮詠唱で魔導を完成させた。

足元を中心に現れる水色の魔法陣。そしてそこを中心に大量の巨大な泡が溢れてくると、

その泡がアルス達を守る巨大な緩衝材のような役割を果たし、鈍色の炎を受け止め掻き消してくれる。

「こんのおっ！」

続けざまにエトナが両掌を向けた。同時に地面の草木らがその意思に従うように一斉に躍

り出て、縄のようにカルヴィンを捕らえようとする。

「盟約の下、我に示せ 烈火の矢」  
フレアロー

だがそんな無数の縄は、シンシアが放った“焰”魔導によって一拳に焼き払われていた。

一瞬にして燃えて灰になり、朽ち消える草木。

数拍。撃ち合いになったお互いが、それぞれの持ち霊を傍らに従え、再対峙する。

（なるほど。アルス・レノヴィンの得意系統は……“魄”魔導ですわね）

（シンシアさん達の魔導……“鉄”属性が主力、か）  
瞬時に分析する、互いの得意な魔導。

樹木を司る魄の魔導と、金属を司る鉄の魔導。

（相性が、悪過ぎる）  
だがその両者は相反する関係にある魔導系統だった。

二人は同時にその事実気付き、撃ち合いの手を止める。そして思案する。

幾つかの属性・系統に分類される魔導だが、その両者が仮に相反する属性であった場合、

よほど力量差がない限りは相殺される結果になってしまう。一方で、親和性のある属性同士

である場合は相乗効果を発揮する。

しかし少なくとも、両者の実力は伯仲しているというのがこの撃ち合いでの感触だった。

（厄介ですわね。パワーで押し切ろうにも、彼はかなり反応が早いですし……）

（ここが庭園で助かった……。地の利を活かせてる。でも、あの話が本当なら導力は彼女の方が上だ。持久戦になってしまえばこちらが不利になる……）

二人は考えた。

どれだけ自分の得意な魔導を放っても、この主席を掻っ攫っていた少年は素早く反応し

相殺していつてしまい罅が明かないだろう。

持久戦になれば不利になるのは間違いない。それに何よりもこんな無益な戦いは何とかして終わらせたい。

（ だったら、次の一撃で勝負に出るしかない ）

二人は同時に詠唱に入っていた。互いの意図はすぐに分かった。

先程よりももっと威力の大きな魔導を放ち、戦意を失わせる。それがおそらくこの撃ち合いに早急な決着をつける道となる。

「……………」

だが、アルスは迷っていた。

一から詠唱を構築し、確かな威力を担保しようとしながらも、やはり彼女と戦わねばこの

場は収まらないのだろうかという自問自答と罪悪感。それと、不思議な違和感。

正当防衛？ でも僕は、こんな形で魔導を使うなんて望んでいないのに……………」

「盟約の下、我に示せ」

「ッ！？」

しかし結果的に、それはシンシアに先手を打たれる遅れを作る原因になった。

紡ぎ終わりにかけようとしている彼女の詠唱。そしてその自分へとかざされた掌には、周囲

の地面から大量の鉄分が集束し始めている。

「マジック・サアロン 巨柱の鉄錐！」

次の瞬間、彼女の掌に広がった銀色の魔法陣から巨大な金属の角錐が飛び出してきた。

大きい。直撃したら無事では済まない。いや……………避けたって周りの被害は確実だ。

「アルスッ！！！」

エトナが叫んでいた。自身の奇蹟を駆使し、すぐさま遅れをとった相棒のフォローへ樹木の鞭達を差し向けようとする。

だが遅いように思えた。世界が、スローモーションになったような錯覚に陥る。

顔が恐怖で引き攣る。

巨大な鋼の角錐が、ゴウンと目の前に迫って来て。

(……………?)

しかし、鍔の魔導がアルスに届く事はなかった。

数拍遅れて、アルスがゆっくりと思わず瞑ってしまった目を開く。するとそこには、蒼いオーラを振り撒くブルートの姿と、

「なっ……………!?!」「むう?」

彼によって凍り付けにされた角錐を、掌でかざしたマナの障壁シールドで受け止め、その攻撃を粉

微塵にしてアルスの前に涼しげに立っているイセルナの姿が。

「……………イセルナさ」

「ひっ!?!」

そして、その一瞬だがとても長いように感じられた隙を縫うように駆け、シンシアの首筋

へと迅速の身のこなしで小刀を突き付けたジークの姿あった。

驚くアルスとエトナ、そして何よりもいきなり懐に入り込まれたシンシア。

ジークは逆手にした小刀を握ったまま、普段の気だるい様子から考えられないほどの強烈

な殺気に満ちた両の眼でシンシアを捉えると、

「……………てめえ。俺の弟に何してやがる」

まるで呪詛のような重い声色を放った。

シンシアはどっと冷や汗が背を伝うのを感じた。

気品などまるでない、荒々しい眼。そして瞬く間に己の喉元に突

きつけられた刃。

「お、弟……？ では貴方はアルス・レノヴィンの」

「兄だよ」

ジークは短く答えた。だがその切っ先は微塵もぶれない。

カルヴィンはそんな彼女のピンチに動こうとしたが、すぐさま目を細めて冷気を漂わせる

ブルートがそれを遮る。

凍り付き粉々になって崩れる角錐。

イセルナはそれを一瞥すると、そっと掌から練ったマナを解いてジークに声を掛けた。

「ジーク、その辺りにしておきなさい？ 彼女、怯えているわよ？」

「……うっす」

肩越しに一瞥。団長の命令という事もあって、ジークはそっとシンシアから身を退いた。

同時に懐に忍ばせた鞘に収め、もう一度彼女を睨み付けてみせる。

「全く。念の為に脇差を持って来ておいて正解だったぜ。アルス、エトナ。無事か？」

「う、うん……」

「うん。ありがとう兄さん。イセルナさん、リンファさんも」

一方アルス、そしてエトナはリンファにそっと介抱されていた。

魔導を撃ち合い、多少の擦り傷などは負っていたが、命の別状はないようだ。

ジークがその様子を見てやっと安堵し殺気を収め、視線を向けてくるイセルナを迎える。

「お嬢さん、どうしてこなったのかしら？ うちの下宿人に何か恨みでも？」

「うっ。ええつと……」

イセルナはあくまで柔らかな表情を崩していなかったが、シンシアは思わず大きく後退って

いた。それは彼女の傍らで浮かんでいるブルートの警戒の眼の所為



でもあり、自身の全力で放った筈の魔導をいとも簡単に防いでみせたイセルナの力量への怯えであったり。

「……何でも、ありませんわ」

そして何よりも、こんな私闘を演じた自分をやっと冷静に見れたからであり。

だが彼女は素直にそんな感情の変遷を口にする事はなかった。いやできなかった。

イセルナは黙っていた。だが実弟を危うく大怪我させられかねなかったジークはあからさまに不信の眼で再びシンシアを睨み付ける。

「何もない訳ねえだろうが。てめえ、もう一回」

「待つんだ。ジーク」

しかし一歩踏み込もうとしたジークを、リンファが呼び止めた。

振り返る彼に、彼女はついつと別の方向へと視線を誘導する。

するとそこには徐々に何処からともなく現れ、集まり始めていた野次馬らの姿があった。

とはいっても、ここは真正銘学院の敷地内。その多くは学院の生徒であり、その父兄らしき人物であるらしい。

おそらくは周辺で、アルスとシンシアが魔導を撃ち合った第一砲を聞いていたのだろう。

「……人が集まってきたわねえ」

「どうする、イセルナ？ このままだと私達も当事者扱いされるかもしれないが」

「アルスが巻き込まれた時点で俺達も当事者ですよ。さっさとアルスを連れてここを去」

「ほらほら、野次馬連中は退いた退いた」

「ガハハ。すまぬな、通して貰うぞ？」

そんな折だった。ふと野次馬の中を掻き分けるように、二人組の

男がこちらに近付いて来たのである。

一人は頭にバンダナを巻いた長髪の、ヒューネスの男性。

もう一人は見上げるほどの巨軀をした 巨人族トロルの男性だった。

「げっ。ゲド、キース……」

するとシンシアの表情が分かりやすい程に変化した。

強気な態度は何処へやら。それはまるで悪戯がバレた子供のよう  
で……。

「あだっ!？」

次の瞬間には、すたすたとやって来た二人、いやヒューネスの方の男性からの拳骨を頭に受けてプルプルと悶絶してしまう。

「痛ッッ！ ちょっとキース、主に手を上げるなどあれほど言っているでしょう!？」

「勘違いすんな。俺らの雇い主はあくまで伯爵だ。お嬢はあくまで警護対象だっつーの」

シンシアはムキになってこの男性・キースに怒りを向けるが、当の彼はこうしたやり取り

は慣れたものなのか、そうあっさりと言い放って平然としている。

「ホーさん、野次馬はどーっすか？」

「うむ。今帰しておる所だ。暫し待ってくれい」

「へっい。じゃあそっちは頼んます」

一方でもう一人の男性・ゲドはこちらへ近付いて来ようとする野次馬らを制止していた。

なまじ巨人の体軀という事もあり、また彼自身が何やら説き伏せているらしく、彼らは戸

惑いを見せながらも一先ずはこれ以上進んでくる様子はない。

「さて……」

そつした様子を一瞥し、確認するとキースはシンシアの首根っこを掴んで言った。

「どうも、うちのお嬢がバカをやらかしたみたいで……。すみません。俺らからもキツく言っておきますんで、今回は俺らの顔に免じて許しては貰えませんか」

頭を（ついでにシンシアの頭も強引に）下げての謝罪表明。

ジーク達は突然現れた、このシンシアの関係者らしき人物からの言葉に目を瞬かせる。

「……っか、あんたら誰だよ？」

「ん、別に名乗るほどの者じゃないですけどね。このじゃじゃ馬娘の親父さんに雇われた

護衛役　いや、お目付け役みたいなもんです」

問われて、キースは何処か自嘲気味に言った。その後方ではゲドが野次馬らを少しづつ追いつ返しているのが見える。

「そう言われもな。こうド派手に暴れられて黙ってるってのは」「いいんだよ。兄さん」

ジークは渋っていた。怒りがまだ収まらないといった感じだったが、だがそんな彼を止めたのは、他でもないアルス自身で……。

「謝ってくれたんだし、僕はそれでいいよ。ね？ エトナも」

「えっ？ わ、私は……」

「ね？ もう戦う理由なんて、ないんだよ」

「……むう。分かったよお、分かりました」

汚れや傷で台無しになった今日の装いを纏って、彼は自身の兄と持ち霊パートナーをそうやんわりと諫めようとする。

「アルス君本人がそう言うのなら、仕方ないわね」

「そうだな。諍いは、もう収まったのだから」

「……しゃあねえな。今回はアルスの顔を立ててやる……」

イセルナとリンファも、当の本人のその言葉で引っ込みをつけたようだった。

ジークもエトナも渋々とながらだが、それに従う形を探らざるを得ない。

「ですが、このままお開きという訳にはいきませんよ」  
しかし憤っていたのは他にもいた。

ピリピリとした静かな怒りの声色に一同が振り返ると、そこにはゲドと複数の学院職員と

見られる面々を引き連れたエマが立っていた。

同じく騒ぎを聞きつけやって来たのだろう。眼鏡の奥で鋭くなつた眼差しがシンシアとア

ルス、当事者二人を射抜いている。

「……入学式早々、これはまたとんでもない失態を犯してくれましてね。二人とも、学院長

室に来なさい」

「は、はい……」

「分かり、ましたわ……」

その眼光や強烈なもので、二人はしゅんとなって大人しくただ頷くしかない。

エマはその返答に小さく頷き、きびきびとした所作でその場から身を翻して歩き出す。

「お、おいアルス。大丈夫なのか……？」

「うん……。でも仕方ないよ。僕らの事はいいから、兄さん達は先に帰ってて？」

「シンシア様」「お嬢」

「……分かっていきます。ちょっと行って来ますわ。貴方達は待機していなさい」

ジーク達と、ゲド・キースの護衛二人組に見送られて。

アルスとシンシアは、そのまま教職員らに両脇を固められる様にして連行されていった。

### 3 - (3) 主席と次席

「なるほど。大体の事情は分かりました。入学早々、騒がしいイベントでしたね」

学院長室に連行されたアルスとシンシアは、デスクに陣取ったミレーユの前で事情説明を

求められていた。

「す、すみませんでした……」

「申し訳、ありませんですわ……」

両肘をつけて手を組み、ちらりと微笑の隙間から二人を覗き見る確かな威厳。

アルスもシンシアも、その静かな緊張感の下、ただ頭を深々と下げることしかできない。

「全く……前代未聞です。入学式当日に主席と次席が私闘などその様をミレーユの傍らでエマが厳しい眼差しに見遣っていた。くいつと眼鏡のブリッジを押さえ、憤りを嘆息に込めて言う。

「次席？ えっと、もしかしてシンシアさんですか？」

「ええそうです。シンシア・エイルフィードは貴方の次に高い成績を収めています」

「……というより、あの場でカルヴィンが話したではありませんか」「でもその点差の間に誰か他に食い込んでたかもしれないじゃん。ね、アルス？」

「むきい〜！ そんな事あり得ませんわ、私を差し置いてこれ以上……！」

「お、落ち着いて下さいよ……。エトナも、火に油を注ぐようなこと言わないでってば」

だが相変わらずシンシアとエトナの相性の悪さは健在のようだった。

故意にそう言ってみせるエトナに、シンシアはくわっと声を荒げ

て食ってかかる。この場  
がお説教の場であることも理由だったが、アルスは慌てて両者を治  
めようとする。

「とにかく。厳正な処分が必要です。……学院長、ご決断を」  
それらを結果的に鎮めたのは、コホンとわざとらしく強い音で咳  
払いをしたエマだった。

まるで条件反射のように姿勢を直し直すアルス達。

エマは小さくため息をついてから、その厳しい眼差しで面々を見  
渡し、そうミレーユに訴  
えかける。

「そうねえ……。でもまあ、今回は別にいいんじゃない？」

だがこの学院長は彼女とは対照的に、朗らかに微笑んでいた。

「な、何を仰っているのですか。これだけの騒ぎを起こしたのです  
よ？ 何も処分を下さな

いとなれば学院としての面目が……」

当然ながら、エマは驚いていた。

元よりマイペース、底の知れない上司ではあったが、流石に今回  
はすぐに承諾はできずに  
彼女は食い下がろうとする。

「ユーディ先生。学院の面目と生徒達、どちらが大切ですか？ 規  
律を正す事は確かに必要

です。ですがそれによって入学早々生徒達を陰鬱にさせてしまうの  
は、教育者として如何な

ものかと思えますよ。……いいではないですか。幸い、物的損害程  
度で済んだのです。大事  
なことは、もっと別な筈でしょう？」

「……それが学院長判断であるのなら。私どもは、従うまでです」  
しかしミレーユは変わらず鷹揚としていた。

その彼女の判断に、本心では不服のように見えたが、エマは渋々  
と了解を示す。

「ですが、今後このような私闘を起こされては困ります。当学院内には実習場アリーナもあります。

事前に事務局に申請し、許可が下りれば、講義以外でも利用が可能です。もし貴方達が互い

の実力を図りたいというのなら、そうした模擬戦で以って行いなさい。……分かりましたね？」

「は、はい」

「……承知致しましたわ」

そして実際的な処分は下されることなく、二人には厳重注意という態で。

アルスとシンシアは、エマのその言葉に改めて姿勢を正して頷き、応える。

( 何だか、釈然としませんわ )

それから暫くの間が経ち、シンシアはキャンパスの一角に居た滑らかな質感の石材で

造られたベンチの一つに腰掛け、むすつと無言の不機嫌顔を浮かべている。

入学式が終われば、所属ラボを決める為の見学が始まる。

だがこんな事になった(起こした)手前、少なくとも今日はとてもではないがそんな気分

ではなかった。実際、時折近くを通り掛かる学生がこちらを見遣っていた。傍に控えさせた

キースが眼を光らせている事もあり、特に絡まれたりといった事態は起きていないが。

「いつまでむくれてるんです？ 厳重注意で済んだだけでも儲けものでしょうに」

「うるさいわね。黙ってて」

気だるげに口を挟んできた従者に短くそう言い返して、息を一つ。足を組み替える。

こつもムシャクシャ いや、モヤモヤとするのは何も足元を見られ、敢えて寛大な処分  
で事が済まされたからではない。

(……アルス・レノヴィン)  
そう。今脳裏にあるのは、あの自分から主席の座を搔つ攫っていた少年である。

実際に魔導を撃ち合い、その実力はある程度量ることはできたと思う。自分とは対照的  
でもいうべきか、パワーで押し切るよりも技巧でその場の局面に対応するタイプと見える。

悔しいが、確かに主席に収まるだけの力は持っているようだった。だが……何よりも鼻につくのは、あの態度だ。

状況的に彼は「正当防衛」を主張できた側だった。なのに学院長らに説教を受けていた時  
も、彼は一貫してそんなことを話さなかったのである。ただ私闘を演じたことを詫び、頭を  
下げていた。自身を正当化しようとは微塵もしなかったのだ。

同情？ ふざけないで。

シンシアはギリツと奥歯を食い縛っていた。

主席の座を搔つ攫い、自分の攻撃もしのぎ切り、加えてあくまで「優等生」であろうとす  
るその姿。

屈辱だった。まるで……あたかも自分が全て悪いと言われているような気がして。

「……」

確かに、客観的に見ても自分が勝負を仕掛けたのは事実ではある。それ自体を恨んでも仕方ないことは流石に分かっている。だがやはり釈然としない。決着  
だってついて いや、あのままなら撃ち勝っていた。あのルソナの女や野蛮剣士の邪魔さ



え入っていないければ自分の方が強いのだと示せていたのに。

「待たせたの」

「おいっす。どうでした、庭園げんばの方は？」

そうしていると、先刻から別行動を取っていたゲドが戻って来た。キースが軽く手を挙げつつ訊ねると、彼は巨軀を揺らして大らかに笑う。

「私が着いた折には元通りになっておったよ。流石は魔導師の学校だの。ああも綺麗に草花を咲かせ直すとは」

「そりゃそうでしょう。いくらお咎めなしとはいえ、お嬢が魔導をぶっ放して暴れた事實は消えない訳ですし。早い段階で後始末をするのは何も不思議な事じゃない」

「ちよつと待ちなさい。魔導を撃つたのはアルス・レノヴィンも同じでしょう？ 何をこつそり私一人のせいになろうと……」

「しかし仕掛けたのは我らが先だぞ？」

「うっ……」

「ガハハ！ 反論できませぬなあ」

従者二人や、加えて自身の持ち霊にすらそう突っ込まれて、シンシアはぐうの音も出ずに黙り込むしかなかった。

何だかこれもこれで屈辱だわ。

むすつとふくれつ面をしたまま、彼女は釈然としないモヤモヤを抱えつつも立ち上がる。

「と、とにかく今日の所は帰りますわよ！ この汚れた服も替えなければ……」

そして半ばムキになって言いながら踵を返し、建物の曲がり角に差しかかるうとした。

ちよつと、そんな時だった。

「 待っててくれたの、兄さん？」  
「ッ！？」

ふと進行方向から聞こえてきたのは、アルスの声。

シンシアは殆ど反射的に目を開いて立ち止まり、サツと身を返してその物陰に隠れる。

「 どうかなされたか？ シンシア様」

「 ……？ あゝ、鉢合わせっすね」

次いでゲドとキースの二人も、彼女に追いつくと各々の反応を示して同じく物陰へ。

「 もう……。ゴタゴタするだろうし、先に帰ってて言ったのに」

「 ああ。団長とリンさんには帰って貰ったよ。でもお前を一人放って帰ったままって訳にもいかねえだろ」

シンシア達三人が物陰から覗いた先には、向かい合って立つレノヴィン兄弟の姿。

どうやら兄が弟のやって来るのを待っていたらしい。穏やかに苦笑しながら見上げてくる

アルスに、ジークは気だるい感じを保ちつつも応えながら、そう手にした何かを差し出す。

それは畳まれた服らしかった。

一瞬、目を瞬くアルスにジークは口を閉じたまま小さなため息をつくと、

「 あれから一回部屋に戻ってお前の服、取って来た。そのままのボロ口になった格好で街中を歩かせるのもなんだろ？」

「 あ……。うんっ、ありがとう」

満面の笑みでそれを受け取る弟の姿を、逸らし気味の視線の中に捉えている。

「 良き兄弟のようだな」

「 そうっすね。あの時のキレ具合もこれで納得できます」

「……遠回しに私を批難してないかしら？」

「はは。気のせいっすよ」「……」

微笑ましく、それでいてこちらも主従が主従なのか怪しいやり取りを。

シンシア達は暫しその場を彼らの様子を窺っている。

「で？ お前はさっきまで何してたんだよ？ ラボ見学か？」

「はは……まさか。こんな事になったすぐ後に見学しようにも、周りの目があるもん」

「私は別にいいじゃんって言ったんだけどね。非があるのはあの金髪女の方でしょ？」

傍らで尚もむくれているエトナを穏やかに宥めつつ、アルスは苦笑していた。

兄の質問に、少しばかり恥ずかしそうな戸惑いを見せつつも答える。

「えつとね。庭園を直してたんだ」

「庭園って……あのタカビー女が喧嘩売ってきた所か？」

「うん。僕達が魔導を撃ち合ったせいで、草木が皆ボロボロに荒れちゃったから……。あそ

こは他の精霊達も気に入ってるみたいだし、早く元通りにしてあげたいなって思ってる」

「何せ私は樹木の精霊だからね。植物を元気にするのは大得意だよ」

穏やかに笑いながら言うアルスと、その中空でそう胸を張るエトナ。

だが、対するジークはその返答を聞くや否やあからさまに大きな嘆息をつくくと、掌でそつ

と自身の顔を覆っていた。

「あのなあ……。そういう後始末は加害側がやるもんだろ。お前らがやってどーすんだよ」

「でも、僕だって魔導を撃ち返したんだし……」

「だからさ〜お前はお人好し過ぎるんだっての。あの後、野次馬をとっ捕まえて聞いたが、

何でもあの女、お前に主席を取られたからって喧嘩を売ってきたらしいじゃねえか。逆恨み

もいいところだぜ？ そんな相手にそこまで情をかけてんなって」

「あはは。その点は私もジークに賛成だね」

「う〜ん……。でもそれって、多分表面的な理由のように思うんだよね……」

「あん？」「表面って……？」

それでもアルスの態度はあくまでのんびり穏やか、マイペースだった。

彼が口にするその言葉。ジーク、そしてエトナも頭に疑問符を浮かべてその思案顔を見遣

ってくる。二人に迫るように見られたからなのか、アルスは少々もじもじと恥ずかしそうにしながらも、

「うん……。えっとね？ これは僕の推測、なんだけど」

ゆっくりと自身の思考を整理するようにしながら、口を開き始める。

「あの人 シンシアさんには、もっと深い理由がある気がするんだよ。戦っている途中で

精霊達みんながこそこそ伝えてきてくれたのもあるんだけど、何ていうのかな……彼女

の魔導からは、何だろう。必死さ……みたいなものを感じたんだ。

すごく真っ直ぐで、だけ

ど迷いも一緒に吹き飛ばそうとしているみたいな。辛そう、とも言い換えられるのかもしれない

ないけど……。だから僕は、躊躇ってた。このまま本当に戦って、

ただ打ち負かし合うだけ

でいいのかなんて……」

訥々としたアルスのその紡いでゆく言葉。

それを、当のシンシアはじっと聞いていた。いやもつとえば射抜かれたように硬直していたと表現する方が正確だっただろう。

その様子にはたとえ気付き、従者二人が声を掛けてみようとするが、彼女は上の空だった。

それはジークやエトナも少なからず似た反応であり、眉間に皺を寄せたり、あの一戦での記憶を辿ったりして耳を傾けている。

「だからね。この件が落ち着いたらシンシアさんに謝ろうと思う。

……多分、あの時のそう  
いった躊躇いも、彼女には侮辱と取られたかもしれないから」

アルスはフツと苦笑していた。

エトナだけではない。その周りにはふよふよと何時の間にか精霊達が集まっていた。

穏やかな表情で彼らをそっと掌で迎えながらも、アルスは静かに自分の中の心苦

しさを呑み込もうとしている。

「……やっぱお前、筋金入りのお人好しだね。自分に剣を向けてきた奴に情をかけ過ぎだっ

つーの」

「そうかなあ？　というか、剣を向けていたのはむしろ兄さんじゃ  
……」

「ぬう。そ、それは言葉の綾って奴で……あ、もういい！　分か  
ったよ！　お前が怒って

ないならそれでいいよもう……。ほら帰るぞ？　団長達も心配して  
たんだぜ？」

「う、うん……」

そんな弟のマイペースぶりにジークは頭を抱えたが、結局それ以上追求しない事にしたよ

うだった。ぽやっと小首を傾げるアルスに半分やけくそ気味になると、彼はくると踵を返して

正門のある方向へと歩き始める。

くすくすと笑うエトナと、その眼下で頭に疑問符を浮かべているアルス。

そんな先を行こうとする彼の後を、二人はとてとてとついてゆく。

「……良かったっすね。相手が寛大で」

「少々掛け違いがあるようにも思えるが……。ふふ、面白い者だの」

そしてキースとゲドはそんな彼らを物陰から見つめつつ、静かに微笑ましく呟いていた。

「……ふん」

しかし、ただ一人シンシアだけはその微笑ましさの波には乗らなかった。

やや俯き加減になった前髪に表情を隠し、短く鼻で晒うようにすると、二人を余所に立ち

上がりジーク達とは逆方向へと踵を返す。

「興が削げましたわ。帰りますわよ。ゲド、キース」

数拍、従者二人はその反応に呆気に取られていた。

だがそれも束の間。彼らは互いに顔を見合わせると、

「ういゝっす」「承知した」

彼女に気付かれぬようニカツと笑い合い、いそいそとその後に従ってゆく。

(全く……。何なんですのよ……)

お嬢と従者達と兄弟と。

二手に分かれた両者はそれぞれに帰宅の路に就いていった。

3 - (4) 従者二人

酒場『蒼染の鳥』に深夜の来訪者がやって来たのは、その日の夜更けになるうかとしていた頃合だった。

「すみませんね。今夜はそろそろ閉めようかと思っっているのですが、街の常連は既に帰ってしまい、店内に残っていたのは数名の団員と、ちびちびと飲み合っているジークとシフォン、ダンの三人だけだった。」

カウンター内でも一人後片付けをしていたハロルドは、不意に開いた扉の音を耳にして、そう断りを入れようと振り返る。

「そうか。夜分すまぬな」

「ま、でも大丈夫だ。俺達は客つてわけじゃないからさ」

戸口に立っていたのは、長髪にバンダナをしたヒューネスと刈り込み頭のトロルの男性。

キースとゲドだった。

その姿を認め、小ジョッキを口元に運ぼうとしてたジークが驚いたようにその手を止めて目を見開いている。

「あんたら……」

ジークの姿を見つけて、彼らもフツと表情を緩めた。

だがそれも一瞬の事であり、すぐに口元には真剣な気色が宿り直す。

「どうも昼間はお騒がせ申した」

「改めて、詫びに来ましたって訳でね」

「……？ ジーク、知り合いかい？」

「ああ。ほら、昼間学院でアルスに喧嘩吹っかけきた女がいたって話をしただろ？ そいつ

の護衛役らしいんだ」

「そうだったのか。わざわざ足労を掛けてさせてすまねえな」

誰だと頭に疑問符に浮かべるシフォンとダンに、ジークは説明する。

するとダンは酒が入った赤みを帯びた顔のまま、そうこの来訪者二人に笑いかけた。

「いやいや。それで……あの少年、確かアルスといったか。彼は今何処に？」

「あいつなら部屋だよ。ハロルドさん」

「ええ。内線で呼んでみましょうか」

言つてハロルドはカウンター内の導話を取り、レノヴィン兄弟の部屋への内線番号を打つ

た。受話筒を耳元に当て、暫し皆に背を向けて応答を待つ。

「アルス君ですか？ 私です。今酒場に、昼間に貴方とやり合つた方の従者の方達が来ているのですが……。ええ、はい、ではお願いしますね」

そして導話の向こうのアルスと二、三やり取りを交わして、彼は皆に振り返つた。

「少しお待ち頂けますか？ すぐにこつちに来ますので」

「まあ、立ちっ放しもなんだろう？ 座れよ」

「……うっす」「うむ。では失礼致す」

ジークら三人の座るテーブルへとダンに促され、ゲドとキースは近付いて来て空いた席に

腰掛けた。他の数名の団員らも、傍観者的に様子見の体勢を取っている。

「ま、軽く自己紹介をさせて貰おうかね。俺はキース・マクレガー。昼間のやり取りでも分

かってたかと思うが、お嬢 シンシア・エイルフィードの護衛も  
とい目付け役を任されて

いる者だ」



「同じくゲド・ホーキンスだ。キースと共に伯爵殿よりシンシア様の従者を任されておる。

ちなみに、これでも私達もお主らとは同業者だ」

先ずはと、二人はそう改めてジーク達に名乗った。

キースは言つてゲドに目で合図を送り、彼は懐から自身のレギオンカードを取り出して見せて続けた。

「エイルフィード伯……。確かここよりも少し西の“爵位持ち”の家柄だね。魔導師として

業績を挙げて、数代前に爵位を得た家柄だった筈だけど」

「ふうん……」

爵位とは、何かしらの功績を残してきた「名士」たる者やその一族に与えられる特権的階

級の称号である。原則、一度与えられると以後は世襲となつて受け継がれるが、その称号に

そぐわぬ言動などが重ねれば、最悪本籍国の政府より没収されてしまふ事も珍しくない。

「爵位持ちねえ。通りでタカビーだった筈だよ。でも、それよりも俺は……」

シフォンがそう記憶を辿つて口にするのを聞き、ジークは頭の後ろで手を組み合点がいきつつもスツと目を細めていた。

「何であんたらがこの場所を知つてるのが気になるんだがな。少なくとも、俺は話した覚えはないんだが？」

それは遠回しな牽制。だが対するキースは動揺した様子はなく、

「ま、そういう諸々を調べたりするのが俺の仕事だからな。俺はホーさんみたく生粋の戦士つてわけでもないんでね」

そう気安い感じを保つたまま、片眉を僅かに上げて言ってみせる。

(……なるほど。密偵か)

ジークはその言葉の端を捉え、そう結論付けると納得していた。だが同時に、下手な事は喋れないなと警戒心を密かに維持しておくことも忘れなかった。

「すみません。お待たせしました」

そうしていると、アルスがやって来た。

アルスはジーク達がテーブルに集まっているのを認めると、若干警戒の気色を見せるエトナを伴って近づき、残りの空いた席に着く。

ゲドとキースは改めて二人に自己紹介をし、揃って昼間の非礼を詫びていた。

「いいんです、気になさらないで下さい。もう済んだ事ですし……。こちらこそ、わざわざ

ご丁寧にありがとうございます」

だがアルスは笑って許していた。

それが彼の飾らぬ本心でもあった。応戦した自分にも非はある。

何より彼女から感じた必

死さを、アルスは自分の“正当性”で踏み躪りたいとは思えなかった。

「……まあアルスがこう言ってるから私も目くじらは立てないけどさ？　そういう事ならせめて本人も連れてきて欲しかったな」

「うむ……。その点は、私達も済まないと思っている」

「俺達も引つ張り出そうとはしたんだがな。お嬢の奴、屋敷に帰った後、部屋に籠っちまっ

た切り不貞腐れて出て来なかったもんだから……」

「不貞腐れて、というよりは何か考え込んでいたように、私には見えなかったが……」

その代わりにエトナが遠回しに難癖をつけていたが、ゲドとキースは苦笑を隠せずにそう

弁明して困り顔を見せていた。

とはいえ、シンシアのそういう所は今に始まった事ではないのかもしれない。

アルスには、何処か彼ら二人が“親愛の情”を以って彼女に接しているように思えた。

「……まあ、結果的にはこれでよかったのかもしれないのだがな。あんたらに改めて侘びを

入れるのもそうだが、それ以上に今夜はちと話しておこうと思う事があつてさ……」

そして、ふとそうキースが切り出した言葉に、アルス達一同は小さな怪訝を浮かべた。

周りの団員らの眼を気にして、少し身を乗り出す従者二人組。

アルス達も同じようにその動きに合わせて、少し声量を落とす。ゲドが言った。

「他でもない。シンシア様の事だ。先程話したように、シンシア様は魔導によって立身出世

を果たしたエイルフィード家の直系、現当主の一人娘だ」

「そういう訳で、その例に漏れずお嬢も成人の儀を終えた後、領内近くのアカデミーを受験

して魔導師を目指そうとしたんだが……これにスベツちまつてな」

「しかも一度ではない。二度だ。それでシンシア様はわざわざ領内を離れ、この街で三度目の正直を目指したわけだ」

「……ふーん。でもよ、アカデミーの試験ってそもそも難しいんだ

ろ？ 浪人なんて別に珍しい訳でもねえだろうに」

「そうだね。それに十五からきつちりではなく、ある程度経験を積んでから受験してくる者

も少なくないと聞くよ？ 大抵は冒険者上がりだそうだけど」

二人は大事そうに、重苦しそうに言ったが、ジーク達の反応は淡

白だった。

事実アカデミーの競争率が高い。それを踏まえた“庶民”の感覚としては当然だった。

「そこはまあ……爵位持ちの家柄故というか、プライドというかさ。魔導の名士なのに何度

も落つこちてちゃあ格好がつかないんだよ。だから領内を飛び出した訳で」

「シンシア様が本家を出ると言い出した時は、伯爵殿も大層心配されていたがな」

「……でも、三度目の正直は叶った」

「そう。だけどその代わりと言っちゃあ何だが、主席の座は得られなかった。他ならぬお前

さんによつてな」

「……はい」

二人の話に従い、神妙な表情になっていくアルス。

そんな彼の表情の変化を確かに目に映しながらも、キースはそう続けた。

「悔しかったんだらうよ。元々気の強い性格で、且つ今まで二度も落ちてきたっていう負い

目が付いて回ってる。プライドが許さなかったんだらうな」

「面倒臭え女だな……。どのみち逆恨みじゃねえか」

「そうだよ！ アルスだって一生懸命勉強したんだから！」

「お、落ち着いて二人とも。お二人に言つてもしょうがないよ……」途端に撥ね返す、呆れ顔のジークと我が事のように憤るエトナ。

だがそんな二人を咄嗟に宥めていたのは、他ならぬアルス自身で……。

「いや、君達の言う通りだ。どれだけ自身が努力しようとも、試験といったものは相対的な

評価である事に変わりはない。シンシア様を責めるに拒む理由などなからう」

「……ま、でもそういうお嬢個人のややこしい私情があったんだって事は、補足させて貰いたくつてさ。俺達もお嬢の思いが分からないわけじゃねえが、それがあんならにとつては理不尽なものだつて事もよく分かつてるつもりだ。そもそも俺達がちゃんとお嬢を見てて、防げなかったのも一因なんだ」

それでも従者二人は謝罪を止めなかった。

「改めて……すまなかった」

「改めて……申し訳ない」

ただ主の名誉の為、義理を通す為、二人は自身の恥も顧みずに深々と頭を下げる。

ジーク達は少々呆気に取られていた。

シンシアという人物をよく知らない事もある。会った限りでは高飛車にしか映らなかったという事もある。

「……いいんです。どうぞ頭を上げて下さい。そのお話のおかげで僕も納得ができました。

こちらこそ、ありがとうございます」

しかしその中でただ一人、アルスだけはフツと微笑んでいた。

既に、元より必要以上に彼女を責めるつもりはなかった。むしろあの時自分が感じた彼女の必死さの理由が分かったような気がして、スッキリとした思いだった。

許してくれるか半々だったのだろう。その言葉を受けて、ゲドとキースはゆっくりと顔を上げてから互いの顔を見合わせる。

「……ま、そういう事だ。アルス本人がこう言ってるんだ。もう謝り合いはこの辺にしとこ  
うじゃねえか」

「そだね。私も何か毒気を抜かれた気分だよ……」  
アルスがそう言うのなら。ジーク達場の面々はやがて同じ思いになっただけだ。

まだ若干驚いている従者二人組に向かい合い、彼らはからつと済んだ事と言わんばかりにそれぞれに笑っている。

「……すまねえ」

「恩に、着る」

キースとゲドは最後にもう一度軽く頭を下げ、苦笑していた。

雪融け。だがそう表現すべき雰囲気醸成されたと思われた次の瞬間、突然ドンツと大きな酒瓶がテーブルの中央に置かれた。

「ははっ！　じゃあ陰気臭い話はこれで終いだ。折角だから飲んで行けよ？　俺が奢るぜ」

ダンが満面の笑みで豪快に笑っていた。

ゲドとキースは思わず面を食らっていたが、すぐに表情を綻ばせてその申し出を受ける事にする。

「おい、ハロルド。もつとつまみを頼まあ！」

「はいはい……。少し待っててくれ」

「というか、ダンはただ飲む口実が欲しいだけだよな？」

「全く……。副団長、二人を酔い潰すのだけは勘弁して下さいよ？」

「がはは！　分かっているって」

そうしてにわかにはテーブルが騒がしくなっていた。

置かれてゆく酒瓶と肴。ダンに催促されるように飲み始めるゲドとキース。そんな猫耳の

副団長を、シフォンとジークはそれぞれに生暖かく見守　監視している。

「……ふふっ」

アルスはそっとその場を離れるようにして座り直し、そんな彼ら

の様子を眺めていた。

「何笑ってるの？」

ふよふよと、エトナが浮かんだまま少しふくれっ面で声を掛けてくる。

アルスはそんな相棒を微笑ましく見上げながら、静かに口を開いた。

「うん……。やっぱりね、皆が笑ってるのが一番だなんて思って」「そりゃあ、ね……。でもやっぱり、アルスは甘い気がするんだけどなあ……」

まだ少々ぶつぶつと。エトナは漂いながら複雑な感情の間を行ったり来たりしている。

テーブルの端にそっと肘を寄せ、アルスは穏やかに思った。

ようやく胸の奥の突っかかりが取れたような気がする。彼女はどう思っているかは流石に

察し得ないが、これでやっと今日という一日が終えられるような気がする。

しかし……と、同時に思う。

まさか自分が主席の成績を取ってしまったことで、このような苦悩を抱えさせる人を出してしまうなんて。

あの向けられた対抗心が客観的には理不尽である事は重々承知しつつも、アルスは何だか

申し訳ない気持ちになっていた。

(……主席、か)

僕はただもつと本格的に魔導を学びたかっただけなのに。

しかしそんな平穏を望む学院生活はどうにも危うくなっているらしい。

なまじ主席となつてしまい、次席たる彼女と入学早々私闘を演じてしまった。……今後、

波風が立たないとは到底思えない。

(どうなるんだろう？　これから……)

密かな嘆息と、同時に少しばかりの期待感と。

徐々に打ち解けつつあるジーク達の様子を眺めながら、アルスはぼんやりとそんな物思いに耽ったのだった。



その夜も、大人達の酒場は静かな盛況をみせていた。

適度に薄暗い店内。その中を点々と淡い茜の照明が照らしている。今日一日の、或いはそ

れ以上の労をねぎらいながら、客達は思い思いに飲み交わし、語らっている。

「お待ちどう」

そんな客の中に、イセルナとバラクはいた。

カウンター席の一角に隣り合って座り、バーテンダーから新しく酒を入れて貰っていた。

静かにグラスを掲げて、互いにカチンと。小気味良い音で今夜何度目かの乾杯を。

一口、そしてちびちびとグラスを傾けながら、先にバラクが口を開く。

「この前は、すまなかつたな。まさか魔人殺しの依頼だったなんてよ」

「気にしないで。あの時あの依頼書を抜き取ったのは、他ならぬ私なんだから」

今夜はバラクの誘い、奢りだった。

そういう事か。イセルナはふつと微笑を浮かべながら言い、グラス越しの酒に目を落とす  
ていた。

「レギオンだって完璧じゃないわ。審査を抜けてしまう虚偽報告もないわけじゃないし」

「……だが結局、依頼は蹴ったんだろう？ 無駄な手間を掛けさせたのは変わらんさ」

「ううん。これでよかったのかもしれない。もし私達じゃなくて、金次第で彼らを殺しかね

ない連中があの依頼を受けていたと思うと……ね。私達はただ魔獣を殺すんじゃない。人を  
守る為に、殺さなくてはいけない立場なのよ」

「……ああ。そうだな」

考え込むように眉間に皺を寄せるバラク。だがその横顔を見て、イセルナは何故か面白そうに上品に微笑んでいる。

「前々から思っていた事だけど。貴方って結構義理堅いのね、顔に似合わず」

「顔は余計だ」

眉間に皺を寄せてぼそつと呟く彼に、イセルナは益々可笑しそうに笑っていた。

カランとグラスの中の氷が少しずつ溶け、音を立てる。バラクは数拍心外なという表情をしていたが、

「……ただでさえ、俺達冒険者は世間の連中からは“定職を持たない荒くれ者”って見方を

される。実際に魔獣討伐やら兵力供与、便利屋、欲望丸出しのトレジャーハント 個人差

はあると言い張ってみても、そう見られるのは仕方ない部分はあるだろうな」

次の瞬間には眉間の皺はそのままに真面目な物思いに変わってゆく。

「でもよ。だからこそ俺達は“仁義”を通さないとイケねえって思うんだ。もしそうじゃな

きゃ、金や欲ばっかりに忠実になってりゃ、正真正銘俺達は荒くれ者だからよ」

「……ええ」

「大体、最近の若い連中はそういう事を考えてなさ過ぎる。冒険者の看板を持つてるだけで

万能感を持つたり、仁義もへつたくれもなく一攫千金を狙ってみたり……堕ちたもんだぜ」

酒が回ってきているのか、バラクは普段よりも少々饒舌なように思えた。

だがその紡がれている言葉が偽りだとは、イセルナには思えなかった。自身も数度グラス

に口をつけて静かに相槌を打ちつつ、同じく昨今の世相を憂う。

元々、レギオンは魔獣の脅威から人々を守る為の組織だった。

しかし時代と共に、瘴気の浄化技術が進むにつれ、それだけでは組織を維持できなくなり

今では「便利屋畑」という新しいフィールドへの進出にも積極的になっている。

それはある意味仕方のない事なのだろう。魔獣の脅威が（少なくとも浄化設備の整った都

市部を中心に）緩やかな減少にあるのなら歓迎すべきことだとも思う。

だが……それは魔獣の絶滅とイコールではない。

そもそもに、究極的に言えばこの世にマナが満ちている限り、ヒトが文明を営む限り魔獣

の出現はなくなるらない。

加えて、飛行艇の発達した今日では“開拓派”の者達が日々未だ全容の掴めない世界の開

拓に勤しんでいる。既存の都市の防衛以上に、新しい大陸、都市が歳月を追うごとに増えて

いつている。

「実の所、恐ろしいのは魔獣じゃなく、ヒトの欲望なのかもしれんな。……実際“保守派”

の連中は開拓派を『世界を徒に掻き乱す』などと批判を繰り返している」

「そうね。……かといって、もう止められないのだろうけど」

彼の言葉は、一理を突いている。

革新へと邁進する者と、古き慣習に寄り掛かる者。

この職業柄、そんな彼らの対立も自分達は少なからず見てきている。

「もどかしいがな。しかしよ、イセルナ。お前も気をつけておくに越した事はないぞ」

イセルナのそんな思いを含めた呟きにバラクは同意を示していた。だが続いて付け加えら

れたその助言に、彼女はそつと顔を上げて彼を見返す。

「お前も知ってるだろう？ 開拓だ保守だと、世の中はどうもきな臭い。この前だって西方

で例の連中の作業らしきテロがあつたばかりだろう？」

「ええ。新聞にも載っていたわね」

「……気を付けておけよ。ただでさえ、お前の所は訳ありな奴らが少なくなないんだ」

「分かつてるわ。……忠告、ありがとう」

イセルナはフツと微笑んで応えていた。バラクはふんと鼻を鳴らしてグラスをあおる。

そんな彼を横目で見ながら、イセルナは氷とグラス、そしてカウンターテーブルに映り込

む自身の姿をぼんやりと眺めていた。

豊かさの裏で、争いの絶えないこの時勢。

その過激さの象徴としてしばしば挙げられる彼ら。イセルナは力ランと残り少なくなつて

きたグラスと傾けると、小さな声で一人呟く。

「……結社“樂園の眼”」

#### 4・(1) 拾われの白鳥

「うっ……。気持ち悪……」

その日の朝。ジークは少々体調が思わしくなかった。

何時もよりも遅めの起床。どよんとした表情<sup>かお</sup>で、重く感じる身体を引き摺りながらもふらりと酒場へと顔を出してくる。

「きやつ!?!」

そうしてぼんやりと歩いていて注意力が欠けていたのだらう。

中庭の廊下から酒場の敷居をくぐった次の瞬間、中から出てきたレナと危うく衝突しそうになった。

「……あ、ジークさん。すみません」

「そんなすぐに謝るなよ。悪いな、ぼつとしてて」

ふわつとした雰囲気を纏っているウイング・レイスの少女。

羽毛のような白い耳と背中の翼の物理的なふわふわ感も相まって柔らかな印象が増しているかのようだ。

本人の手前絶対に口には出せないが、よくもまあこんな天使みたいな娘がこのむさ苦しい連中の集まる集団の中にいるものだ。ジークは改めて思う。

「あの、どうかなさったんですか？ 何だか具合が悪そうですけど

……」

「ん？ ああ、昨夜の酔いがちょっとな。副団長に付き合わされてたからさ」

「あ……」

そんな思考から現実呼び戻してくれる、レナの気遣い。

ジークがその不調  まだ身体に残る酔いのダメージを抱えながら苦笑して応えてみせる

と、彼女もまた柔らかい苦笑いを返してくれる。ダンの酒豪ぶりは皆の知る所だ。

「大変でしたね。でしたら、お薬を」

「いや、いい。腹減ってるから先に飯を食うよ。お前も先に行く所があるんだろ？」

言っただけを返そうとしたレナだったが、それはジークがすぐに止めた。内心の過分な気遣

いへの申し訳なさと共に、ついつと彼女が先程からずっと両手に持っているもの 食事を

載せたトレイを顎で指し示す。

「なんつーか、すまねえな。いつもステラの面倒見て貰って」

「いいえ。ミアちゃんも含めて、ステラちゃんは私達の大事なお友達ですから」

詫びたつもりなのに、レナはあくまで優しく微笑んでいた。

これが、奉仕の精神とやらなのかね……。

ジークは彼女のその笑顔を直視できず、若干目を逸らし気味にしてポリポリと頬を掻く。

「ありがとよ」

あいつは、俺の持ち込んできた種なのにな……。

短く言いながら、ジークは何だか居た堪れなくなつて酒場の中へと歩いていってしまう。

「すみません、寝過ぎました。朝飯お願いします」

「了解。適当に座って待っていてくれ」

カウンターに控えていたエプロン姿のハロルドにそう一声掛け、ざっと店内を見渡す。

朝の支度時は過ぎていることもあり、団員らの姿はちらほらとしかなかった。

それでも、そのテーブルの一角に見知った姿を認めると、ジークはそれが何時もの流れで

あるかのように歩いていく。

「おはよう。中々グロッキーな顔だね」

「……満面の笑みで言うなつての。まあ実際、酔いが残ってるわけだが」

そのテーブル席には、一人シフォンが食後の珈琲をすすりながらまったりとしていた。

微笑で話しかけてくる友にちよつとだけの悪態を返し、ジークは彼の向かい側に座る。

「つーか、お前も昨夜は一緒に飲んでたじゃねえかよ……」

「僕はダンとはジーク以上の付き合いの長さだよ。慣れというか覚えた距離感というか。

あの酒豪のペースに合わせて飲んでいたら僕だって身体が持たないさ」

「……そりゃそうだ。俺も慣れてくれればいいんだがなあ」

微笑と苦笑と。友二人は互いに静かに笑い合う。

そうしていると「はい、お待ちどう」とハロルドがジークの朝食を持って来てくれた。

ゆつたりと踵を返す彼に一礼を返すと、ジークは早速その献立を頼張り始める。

「そういえば、もう団長達は依頼に出たのか？」

「うん。ダンやミアちゃん達と一緒にね。確か街道整備工事の警護……だったかな。複合応

募式だったから他のクランやフリーの同業者もいるし、全員で出ることもない。今日の僕らは待機組さ」

「そっか……」

そういえば、庭でリンさんが皆に稽古をつけていたっけ。だからか。

パスタサラダを嚼って咀嚼しながら、ジークは先刻渡り廊下から見かけた光景を思い出し

ていた。何だか、若干置いてけぼりにされている気分だった。

酔いがまだ身体を重くしているものの、かといって食事を抜けば出る元気も出ない。

(後でハロルドさんにも言ってお薬を貰っておけば大丈夫……だよな)

そう思っつて、ジークはとりあえず若さの余力に任せて目の前の朝食を片付けてゆく。

「ねえ、ジーク」

暫くそうして食事に専念していると、シフォンがふとカップをテーブルにそつと置いてか

ら言った。はたと手を止め、ジークも何用と視線を向ける。

「今日は何か依頼を入れているかい？」

「いやまだ何も。そつちこそどうなんだ？」

「僕もだよ。だから食べ終わつたらギルドに顔を出さないかいと思つてさ」

勿論、その酔いを抜いてからだけだね。

シフォンはそうフツと微笑んで付け加えつつ言った。くいとお冷を喉に流し込んでから、

ジークは気安い感じで応える。

「おう、いいぜ。俺も酔い潰れて一日寝てるなんて性に合わねえしな」

「決まりだね。まあ二人だから便利屋系の何かにならざるを得ないだろうけど」

ニカツと笑つてジークは朝食の残りを掻き込んでいた。

最後にテーブルの上のサーバーからお冷を注ぎ足し、一気にあおつてメとする。

そして人心地をつけて、二人はカウンターのハロルドに食器をカッパを返していた。同時

に一言言つて、酔い覚ましの薬も出して貰う。

「……」

そんなジークらの一連の様子を、レナは戸口に立つたままじつと



眺めていた。

食事の用意に加え、団員らの健康管理も担当する克蘭の支援隊のリーダーである父。

そうしてシフォンを含めた団員らと語り、やり取りを交わすジークを見遣ってから、彼

女は密かに微笑むと、そつと身を翻して宿舎に続く渡り廊下へと進んでいく。

私は 両親の顔を知りません。

捨て子だったそうです。ある日、教会の軒先に置き去りにされていたらしいのです。

そんな赤ん坊の私を独断専行ながらも保護し、今日まで実の娘として育てくれたのがお父

さん……ハロルド・エルリツシュです。当時は“クリシエンヌ教”の神官でした。

古代の英雄の一人「聖女クリシエンヌ」様を神々の御遣いとして信仰する。それが今日に

おいて世界最大の信者を抱えるクリシエンヌ教 またの名を聖道教。

お父さんは、その教団に所属する司祭様だったのです。

でも……私が物心つくかどうかの頃、お父さんは教団を脱会しました。そして聖魔導を得

意とする冒険者として放浪の旅を始めたのです。

何故、それまでの安定した地位を捨てたのか？ 確かな事は分かりません。

ただ私も大きくなるにつれて少しは物事が分かるようになって、お父さんが内心で苦悩し

ていたらしい事には気付いていました。

『人々を救う為に私達は祈る。だけど、それだけでは何も変わらない。変わってくれない。』

何より教団という組織自体がもう人々の為ではなく、自分達の為の組織に成り下がっている

のだから」

お父さんが優しく、だけど凄く辛そうな眼で私に答えてくれた一度きりの言葉。

あの時はまだ幼くて全部を飲み込めなかった。神様はちゃんと私達を助けてくれる。そう頑ななまでに信じていたから。

でも、現実には悲しいけどそうじゃない。力を振るえる者が全てを奪い取っていく。

これは推測だけど……お父さんはきっと、自分の力で皆を助けたかったのだと思います。

だから冒険者という道を選んだ。たとえ人々に荒くれ者と呼ばれ、煙たがられようとも、

実際に誰かを助けることのできる道を選んだ。

イセルナさん達クランの初期メンバーの皆さんと出会ったのは、そんな旅路の最中の事で

した。そして共に旅をし、戦い、やがてこのクラン・ブルートバードが生まれたのです。

変わっていった私の周りの環境達。

でも、逃げ出したいとは思いませんでした。

お父さん以外に肉親がいなかった事もあるけれど、でもそれ以上に、たとえ荒つぽくても

私と仲良く、とても親切にしてくれるクランの皆が大好きで。

「ほら、また脇が甘くなっているよ。型を崩さないこと。不要な動きは隙を作るだけだ」

『ういっす！』

レナが渡り廊下を歩いていると、中庭ではリンファが木刀片手に団員らに剣の指導をして

いるのが見えた。

ざっと見ても相手は十人以上。なのに彼女は息一つ切らさず、次々と向かってくる彼らの攻撃を最低限の足運びで交わし、いなし、すれ違いざまに霞む速さで峰打ちを叩き込んで地面に伏せさせていく。

力量差は言わずもがな圧倒的だ。

しかしそれでも団員らは挫けない。すぐに起き上がっては木刀を手に向かってゆく。

それだけ彼女の力を信頼し、慕っているからなのだろう。何よりさっぱりと凜としたその言動は、同じ女性から見てもカッコイイと思う。

(……私はやっぱり、冒険者みんなをずっと勘違いしていたんだよね)

トレイの上の朝食が鎮座している。

レナは父が仲間に、友に用意してくれたそれに目を落とすと静かにそう思った。

今でも冒険者しびんたちと関わりが少ない人達にとっては、この業界はやはり荒くれ者の集まりだと

思われているのだろう。……正直な所を言えば、自分も始めの内は父のこの転職に疑問を

抱いていたのだから。

「大丈夫かい？ 部屋で休んでおく？ 依頼を見繕うなら僕だけでも」

「……いや、俺も行く。薬も飲んだんだ。軽く動いてる内に効いてくるって」

リンファとは違う中庭の一角、レナとは逆方向の渡り廊下を、ジークとシフォンが歩いて

いくのが見えた。

大方、支度の為に一度部屋に戻るのだろう。

ちなみに宿舎内は、男女で左右に分かれた部屋配分になっている

(とはいっても、団長の  
イセルナやリンファなどを除き、大半は男性なので実質は半々では  
ないのだが)。

(ジークさん……)

冒険者に対するイメージ。

それを大きく変えたのは父よりも、仲間達よりも、何よりも彼だ  
った。

しかし、実はレナの中での第一印象は「何だか怖い人」 つま  
り決して良いものではな

かった。元々は教会という温室の中で育っていたのだから、根っか  
らの荒っぽさに対して何

だかんだといって耐性が薄かったということもあるのかもしれない。  
でも今は。レナは自信を持って言えた。

ジークさんは、皆は、そんなのじゃない……。

「……」

きゅっと。少しだけ、少しだけ苦しくなる胸にそっと片手を当て  
て。

レナは中庭に吹いてくる微風に身を委ねながら、静かにあの日の  
事を想う。

#### 4 - (2) 差し出された手

それは、ジークさんがブルートバードの一員になって一年が経とうとしていた頃でした。

あの日も私達は、ギルドが仲介する魔獣退治の依頼を受け、準備を整えると早速現場へと

赴いたのですが……。

「こいつは、ひでえな」

既に、その現場である村は廃墟と化していました。いえ魔獣によって滅んでいたのです。

「……遅かったみたいね」

ダンさん、そしてイセルナさん達団員の皆は、村の入口からそんな光景を見つめて暫くの間その場に立ち尽くしていました。

知識としては、知っています。むしろこれが魔獣による本当の被害なのです。

でも、やり切れなかった。何度見ても、こればかりは慣れる事ができなかった。

「……大丈夫、レナ？」

「うん……。ありがとう」

静かに打ちひしがれていた私を、ミアちゃんはそっと慰めてくれました。

私も零れそうな涙を堪えて、大切な親友の気遣いに感謝していました。

「ブルート、魔獣の気配は？」

「弱いがあるな。群れとしては去ったようだが、まだ点々と居残っている可能性がある」

「じゃあ、俺達のやるべき事は」

「……ええ」

その中にあっても、イセルナさん達は冷静でした。

悲劇な末路が目の前に広がっていても目を背ける事なく、ややあつて私達団員に指示を飛ばしてくれませう。

「皆、生存者を探しましょう。ハロルド達は結界を、シフォン達は散開して先遣調査を」

「他の面子は俺とイセルナ、リンにそれぞれ分かれる。村の中を分割して搜索するぞ」

「ブルートの言っていたようにまだ魔獣が居残っているかもしれない。くれぐれも単独行動

は取るな。必ず四・五人以上のグループで動いてくれ」

『了解！』

経験を積んだリーダー達がいるからこそ、私達は迅速に動くことができました。

様子見で最初にシフォンさん達の遊撃隊が先陣を切り、その後続をイセルナさん達が担当していきます。

「じゃあ私達は結界を張るとしようか。封印より浄化の結界だね」  
そしてお父さんや私の所属する支援隊が、そんな皆の動き出す姿を横目に一斉に詠唱を始めていきます。

『盟約の下、我に示せ  
セイクリッドフィールド  
聖浄の鳥籠』

普段は魔獣の動きを抑える為に展開している結界。  
でも今回は、むしろ村内の瘴気を薄める為に張り巡らせてゆくものでした。

皆で放った金色の魔力の糸が瞬く間に村内を覆い、ドーム状になります。どんよりとした空模様がその輝きで少し眩しいものにも見えてきます。

これで、私達が瘴気にやられてしまう ミイラ取りがミイラになる危険性は大きく減り

ます。術式を維持する支援隊の皆さんを横目で見ながら、私はその事に一安心して。

(……………あ)

ふと、散開してゆく皆の中にジークさんの佇む姿を見ていました。それまでの印象の通り、何処か近寄りにくいぶつきらぼうな不機嫌面。腰に差した三刀は

十六歳の男の子には少し大きく映ってしまします。

ジークさんは、俯き加減でじつと村の中を見渡していました。

瘴気により、魔獣により、朽ちた木々や家々。そして人だったであらう亡骸が点々と。

思わず私は吐き気を催しそうになります。

「……………」

でも、そんな光景を確かに目に焼き付けている筈のに、ジークさんは不機嫌面をピクリともさせていませんでした。

怖い人。感情を押し殺したような 外から見えないように閉じ込めてしまったような、

そんな暗い表情かお。それでも私はただ恐れと若干の好奇心で、そんな彼の横顔を遠巻きに見遣る事しかできなくて。

「おい、ジーク。何ぼやっとしてんだ？」

「置いてくぞ？」

「……………ああ。今行く」

やがて他の団員さん達に呼ばれて、上着を翻して背を向ける後ろ姿をぼうつと見つめる事しかできなくて。

それから暫くは、皆で生存者の搜索を続けました。

時折、村の中に残っていた魔獣と出くわしたりもしましたが、そこは傭兵畑の冒険者達。

群れを成している訳でもないという事もあり、皆ですぐに退治して

くれます。

「皆、ちよつと来てくれ！」

シフォンさん達が私達にそう伝令を飛ばしてきたのは、ちよつどそんな最中でした。

何事かと集まってゆく私達。

するとシフォンさん達は何故か茂みに隠れていました。私達がやっつて来たのを確認すると

シフォンさんは「あれを見て」と真剣な面持ちで視線を移して促してきます。

「あれは……」

その先に建っていたのは、一軒の家。瘴気や魔獣の被害を受けたのは他と同じらしく、その外壁は所々が朽ち始めていました。

そして何よりも私達の目に付いたのは、その周りに集っている魔獣達の姿。

それはまるで、あの家に魔獣達が引き寄せられているかのような……。

「群れ、って感じじゃないわね」

「そうだね。さっきから観察しているけど、個々にやって来ているみたいだ」

イセルナさん達は慎重に対応を話し合っているようでした。

数はそう多くはありませんが、生存者探しにシフトしている今、散開している兵力を考え

ればできれば避けたい戦いだったのでしよう。

「だが、あそこだけ魔獣が集中してるのは妙だ」

「だよなあ。もしかして誰かいるんじゃない」

でもダンさんがそう一抹の可能性を口にした次の瞬間、その様子見は破られていました。

ガサリツと茂みを飛び出し魔獣達へと駆けていった人物。

「!?!? おいよせ、ジーク！」



それは二刀を抜き放ったジークさんでした。

ダンさんが思わず振り向いて制止しようとしたが、ジークさんは聞いてすらいなかつたようでした。ただ駆け出した勢いと抜刀の速さを以って、虚を衝かれた形の魔獣達を斬り

伏せ始めたのです。  
「チツ……あのバカ。仕方ねえ、俺達も加勢するぞ！」

小さく舌打ちをして、ダンさんはリンファさんと共に先頭に立ち、数拍遅れる形で皆と魔獣の群れの中へ斬り込んでいきました。

続いてシフォンさんの遊撃隊の皆の矢や銃弾、お父さんの支援隊の皆の魔導が援護射撃として魔獣に降り注ぎます。

奇襲という形でした。結果的に、その場にいた魔獣達は追い払うことができませんでした。

ややあってその騒音を聞きつけてくれたのか、散開して搜索に当たっていた他の面々が合流してきます。

「まったく。何勝手に特攻掛けてんだよ」

「一先ずは安堵。でもダンさんは強面の顔をしかめてジークさんを責めていました。」

「……誰かいるかもって言ったのは、副団長だろ」

「む……。それはそうだが、あくまで推測だつての」

それでもジークさんは悪びれる様子はありませんでした。

むしろ咎められた事にすら若干の不服を漏らし、二刀をぶらんと両手に下げて言います。

「大体、お前はいつも独断で無茶をだな」

「……待て。ダン」

言い合いになりそうな二人。でもそれを止めたのは、イセルナさんの肩に止まったブルー

トさんだったのです。

シフォンさん、そしてお父さんも彼の制止の意味に感付いたのでしょうか。魔導の心得の

ある面々の何人かが、ふとその視線を目の前の家の全景に移していました。

「中から気配がする。誰かいるぞ」

「何っ!？」

「……ならば、確かめてみる価値はあるようだな」

リンファさんがそう結論付け、皆は頷き合いました。

もしかしたらまだ中に魔獣も潜んでいるかもしれない。今度は遊撃隊や支援隊のメンバー

を囲むように円形の布陣を採りながら、家の中に入って行きます。

中は外以上に損傷の度合いが進んでいました。

お父さんが改めて浄化用の術式を展開し、念には念を入れ、私達は半ば廃墟になりつつある

室内を一つずつ検めていきました。

「ッ!？ 今音が……」

そんな時でした。二階の方から突然僅かですが物音が聞こえてきたのです。

静まり返っていた分、即座に反応した私達。

何か……いる。

そしてイセルナさんの無言の頷きの下、私達はその音のした方向二階のとある一室の

前へと集まり、彼女の手合図を以って一気に突入を図ったのでした。

「ひっ!？」

でも、そこに居たのは魔獣ではなくて。

「……女、の子？」

「もしかして、生存者か？」

血や埃で汚れた大きなタオルに包まり、酷く怯えていた一人の女の子でした。

魔獣ではない。その事に驚き、いいえそれ以上に安堵し、皆はゆつくりと彼女に近付いていきます。

「……それでも彼女は。」

「こ、来ないでっ!!」

タオルで覆った身体を震わせて、叫びました。

そこから覗いたのは、ウィザードである事を示す白系の銀色の髪。そして何よりも……恐怖で昂ぶった感情により血のように真っ赤に染まった瞳。

「……まさか」

「君、魔人マハラなのか……?」

それが意味する事態。

私を含め、皆は次の瞬間には近付きかけた足を止め、目を見開いて驚きの表情を浮かべていました。

「殺さ、ないで……。私を、殺さないで……」

魔獣にか、それとも漂う瘴気にか。

瘴気の中てられ魔人となってしまうたその子は憔悴し、何より怯え切っていました。

無理もなかったのです。魔人は、魔獣化の亜種。魔獣と同じく人にとつて忌むべき存在。

クリシエン又教の教えですらそう示されていた“常識”だったのですから。

「ま……待つてくれ。俺達は君を殺しに来た訳じゃないんだ」

「この村を助けに来た冒険者だよ。ほら、ここにレギオンカードも

……」

「ひぐっ!?!」

「このバカ! 怖がらせてどうするんだよ。ざっくり言えば俺達は魔獣を狩る側だろ?」

「……や、やっぱり、私を殺しに……」

「え？ いや違う。違うって！」

「だあ〜！ お前らゴチャゴチャやってんじゃねえ、嬢ちゃんがビビってるだろうが！」

怯える女の子と、宥めようとして逆に墓穴を掘っている皆。

そんな皆をダンさんは叱っていたけれど、むしろその絶叫の強面の方が迫力があり過ぎていましたね。

「……………」

だけど、そんな中で別な行動を取る人がいました。…………ジークさんです。

皆がそれぞれに狼狽え、イセルナさん達が呆れ顔をしている中、ジークさんはおもむろに

一歩を踏み出し、震えている彼女の前に屈み込んだのです。

「な、何…………？ 殺される、の…………？」

ジークさんは暫くじつと彼女を見ていました。

相変わらずのちよつと怖い、感情を押し込めたような眼。彼女もそんなジークさんの顔を見て、何をされるのかと心持ち後退ろうとさえしていました。

「…………お前。名前は？」

「えっ？」

「名前だよ。魔人になって忘れてもしたか？」

でも、ジークさんは気にする事もないかのように訊ねていました。驚いたのは私達だけではありませんでした。彼女もまた、思っていた仕打ちが来ずに少々面食らったようでした。

「…………ステラ。ステラ・ルーシエル」

そして数秒の間、躊躇いを見せた後、その子・ステラちゃんは答えました。

「少しかけ「おお」と状況の進歩に驚いた皆。でもジークさんは続

「歳、いくつだ？」

「こ、今年で十三……」

「……そっか」

短く、一見してそっけない感じで呟くと、ジークさんはのそりと立ち上がっていました。

イセルナさんやダンさん、お父さん達は勿論、団員の皆が、そして私もその後ろ姿をじっと見守っていて……。

そして暫くその場に立ったままガシガシと数度髪を掻いて、ジークさんは振り向いて私達に言ったのでした。

「……団長。こいつ、俺達で保護できねえかな」

「保護？」「え？ こいつをか……？」

当然の事ながらダンさんを始め皆は驚き、ざわついていました。

「……できなくはないわ。守備隊当局やギルドに報告を通しておけば、クランの保護預かり

扱いにできる筈よ。でも……どうして？」

その中でもイセルナさんは冷静でした。

一瞬間、記憶を呼び起こしてそう可能である旨を答えると、ジークさんに問い直します。

「……田舎に、同年の弟がいるんだ。ほっとけねえよ」

ジークさんは、そう確かに視線を逸らし気味に言いました。

( ツー！？ )

そしてその瞬間、私の中で大きな変化が起きていました。

いつもぶつきらぼう。ちょっと怖い感じの人。

でも……本当は。彼は、とても優しい人なんじゃないかって。

同年の肉親がいる故の情だったのかもしれない。

でもこの時の私には、そんな単純な理由には思えなかった。そもそもいくら冒険者とはい

え、魔人を前にこんな“一人のヒトとして”その相手を扱うなど難

しい筈なのです……。

「……そう」

その言葉に、イセルナさんは数秒目を丸くしていましたが、すぐにフツと表情を穏やかに

緩めていました。何だか良いものを見たような、穏やかな眼でした。

「分かったわ。じゃあ連れて帰りましょうか」

「お、おい。そんな簡単に決めていいのかよ？」

「まあ、確かに捨て置くわけにもいかないけどね……」

だからこそ、彼女の比較的あっさりとした返事に、ダンさんやシ

フォンさん以下、皆は驚

きを隠せませんでした。

それでもイセルナさんは私達クランの団長。リーダーなのです。

戸惑いこそありましたが、最終的には皆、イセルナさんの決定を

ジークさんのステラ

ちゃんを自分達の仲間に加える事に同意することとなりました。

「……殺さ、ないの？」

「ああ。別にお前を殺せなんて依頼、受けてないしな」

ステラちゃんはまだタオルの中にいました。

それでも自分を殺しに来たわけではないと分かった分、怯えはな

りを潜めていたように見え

ました。「……嫌なら別にいいぞ。上手く逃げ暮らせばいい」

「えっ、あの」

半身を返してジークさんは少しだけ、突き放すように試しているようでした。

「……ステラちゃんはちょっと戸惑っても拒む事はなくて。

「そんな事、ないです」

「……そっか」

代わりにそっと、ジークさんはその手をステラちゃんに差し出して

少しの躊躇い。でもやがてステラちゃんは、次の瞬間にはほつと頬を赤く染めてその手を取りました。

成立だな？ そう言いたげな上から目線。でもそこに宿っているのは威圧では決してなくて、きつと魔人であろうが誰であろうが一人のヒトの身を案ずる事のできる、不器用だけど芯の通った優しさの筈で。

(……よかった)

無闇に争わなくてもいい。殺さなくてもいい。

私も、そして皆も、そうホツと安堵の息をついていたのでした。

(そっだよね……。ジークさんも、クランの皆も、世間が思っているような荒くれ者なんかじゃない。誰かを守りたいって、そう思って力を振るっているだけなんだよね……?)

レナは歩を進め、宿舎の廊下を歩いていった。  
今だったら、分かるような気がする。

ジークも父も何故このような仕事を選んだのか。  
救いたかったのだ。本当の意味での力が欲しかったのだ。たとえばそれを粗暴と揶揄されて

も実際に人を守る盾になれるのなら、守れなかった過去の自分への贖罪となるのなら、構わなかったのだろう。

少し前に、ミアからアルスが語ったというジークの過去も聞いた。過去の苦しみを背負っていた。だからこそ、優しくなろうと強くあるうとしている。

でも……もう貴方は強いんですよ？ レナは心の中で思った。  
ステラちゃんという、もしかしたら他の冒険者や軍隊に討たれて

いたかもしれない少女を救ってくれた。襲い掛かった苦しみに絶望しても身動きを止める事なく、進み続けている。

レナの眼にはもうそれだけで充分過ぎるほど「強さ」だと思えた。「……………」

そうして、ほつとレナは自分が身体の中から火照っているのを感じていた。

そつと胸を手を当てると、ドキドキと鼓動が早まっているのが分かる。

しかし、分かってもレナにはその意味を口に出す勇氣はなかった。

それは単に彼女自身の遠慮がちな性格だけではない。この気持ち  
を本人に告げれば……………狼

狽える友がいると分かっていたから。

そして立つ、ステラの部屋の前。

一旦静かに息を整えてから、レナは朝食を載せたトレイを片手に、何時ものようにドアを

ノックする。

「ステラちゃん、私。ご飯持って来たよ？」

「うん、ありがとう。入って」

ジークさんは面倒を見させて済まないと言う。

だけど、そんな事は気にしない。

だって……………ステラちゃんは貴方が助けた、貴方を理解する切欠をくれた子だから。

「はい。お邪魔します」

まだ籠りがちだけど、少なくとも自分達クランの面々には心を開いてくれた友に。

レナは今日も甲斐甲斐しく世話を焼く。



#### 4 - (3) 邁進ベクトル

時を前後して、場所はアウルベルツ郊外の街道。

そこでは朝早くから多くの作業員達が汗水を垂らして動き回っていた。

街道の整備、もとい新規の延長の為の工事。即ちそれまで未開だった自然を切り拓いて道

を整備し、従来の街道網と連絡させる土木作業である。

「掘るのはこっちか？」

「いや、もうちよつと右……ああ、そこ。そこを境界に……」

「おい、こっちにも破碎機を頼む！」

草刈機やつるはしを手に生える草を引き抜き、土を掘り返して均し、街道の境目を示すよ

うに杭を打って他の作業員らの目印にする。

それは地味ではあったが、間違いなく世界を「開拓」する行為に他ならなかった。

飛行艇を駆る新大陸の開拓者のような派手さはないにせよ、人の手が入っていない自然を

征服し、人の領域を拡げてゆく行為。

「ギギ。又ギギギッ！」

そんな営みが、自然の領域　魔獣との境目を侵食することは言うまでもない。

気付くと、作業を続ける面々より少し離れた茂みの中から複数の魔獣達が躍り出ようとしていた。

浅黒く小柄な身体に歪んだ容貌。魔獣の一種、ゴブリンだ。

荒削りな小剣や棍棒を扱う程度の知能はあるが、一体一体の戦闘能力は高い方ではない。

しかし徒党を組んで人に襲い掛かる習性を持ったため、一般人にはや

はり危険な害獣だ。

「ぬんっ!」「……ふっ!」

しかし魔獣達の襲撃はほんの数秒で終わった。

出現に気付き逃げ出そうとする作業員らに飛び掛ろうとした次の瞬間、戦斧と拳によって

一薙ぎにされたからだ。

小気味悪い、擬音のような悲鳴を上げて地面を転がるゴブリンの群れ。

彼らと作業員ら工事現場の間に割って入るように、ダンやミアら冒険者達の集団が立ち

だかっていた。

「悪いな。引っ込んで貰うぜ?」

「……来るなら、倒すだけ」

これが今回ダン達が受けた依頼だった。

街道整備の護衛任務。工事中に姿を見せるであろう魔獣を追い払ってほしいというもの。

ダンやミア、イセルナの他にも、警護に就いている他のクランやフリーランスの冒険者達

の姿が現場には散見できる。

マーフィ父娘の言葉に、ゴブリン達は闘争心を刺激されたようだった。

各々に荒削りな得物を引っ下げ、再び面々に襲い掛かってくる。

「……雑魚が」

そんな群れを一閃したのは、同じくこの警護を請け負ったクラン・サンドゴティマの頭、

バラクだった。

小さな舌打ちと共に振った右手。

次の瞬間、手首に嵌めていた腕輪から深緑の魔法陣が出現し、その腕全体が巨大な爪を持つ手甲で覆われていた。

一閃を受けた魔獣達は地面に倒れ、醜い鳴き声と共にのたうち回っている。

ザックリと裂かれた傷口には強い酸性の毒がシューシューと煙を上げていた。

ボイスンガトレット バラクが主力として用いている“魔導具”だ。

「おおっ！ 出た、ボスの十八番！」

「ボス、やっちまって下さい！」

本来、魔導の行使には呪文の詠唱が不可欠だ。

しかしそのプロセスを「呪文の文字列を媒体に予め刻んでおく」事で簡略化したのが、こ

の魔導具の最大の特徴である。

魔導の行使を補助するツールから設備、ひいては日常のインフラに至るまで形態は様々だ

が、狭義にはこのような概して装飾品の姿を持つ“戦術魔導具”を指す場合が多い。

「……言われずともな。てめえらも手を動かせよ」

この技術のおかげで、最低限マナの制御術を扱えれば 自身の

マナを注ぐ事ができれば

誰でも魔導を行使し、或いは魔導を用いた各種インフラの恩恵を受けられるようになった。

但し、その一方で行使媒体がヒトではなくモノである以上、その出力は魔導具自体の品質

に依存する度合いが大きくなってしまるのがデメリットの一つと言える。

巨大な手甲。その爪先からは酸毒が漂っていた。

わらわらと向かってくる魔獣を次々と薙ぎ払って、バラクは叫ぶ。

「キリエ、ロスタム、ヒューイ！」

「はい」「了解、ボス」「おうよ！」

次いで銀髪の犬系獣人の女性キリエ、昆虫系亜人インセクト・レイスの男性ロスタム、赤

髪褐色の肌なヴァリアーの青年ヒューイ。サンドゴディマの三幹部が駆けた。

キリエは素早い身のこなしで、目にも留まらぬ蹴りの乱舞を。

ロスタムは、六本腕を活かした六丁拳銃それぞれに練氣を施しての銃撃を。

ヒューイは巨大な大矛を振るって、しつこく工事現場を　自分の縄張りを荒らす作業

員らを狙おうとする魔獣の群れを切り崩し、追い払う。

「ギギ……、又ギヤー！」

するとこの冒険者達の守りに劣勢を察知したのか、魔獣の群れは今度は木々草むらの中へと退却しようとした。だが……。

「　あら。何処にいくつもり？」

ゴブリン達がハツと見上げた中空には、イセルナが微笑んでいた。持ち霊ブルートと自身のマナで合体したその姿は、まるで空に浮かぶ、青い翼を広げた天使のようでもあって。

「ごめんなさいね？　邪魔をしてきたからには……消えて貰うわ」

その青いオーラを纏った翼が大きく羽ばたくと、辺りに強烈な冷気が進った。

次の瞬間、魔獣達はあっという間に空を仰いだ格好で凍り付いていた。

一匹残らず。それをざつと見渡して確認すると、イセルナは飛行のすれ違いざまに手にし

た剣で一閃、あっという間に魔獣の群れにとどめを刺したのだった。

「お疲れさん」

「……また、最後を持っていかれたか」

優雅に中空を飛び着地、ブルートとの合体状態を解除するイセルナに、ダンとバラクがそ

れぞれ別の反応で言葉を掛けていた。

ブルートバード、サンドゴデイマ、そして他の冒険者。

三人の周りでは彼女の華麗な戦いに感嘆しつつも、まだ魔獣が来るかもしれないという適

度な緊張感で警護に戻っていく同業者達の姿があった。

「ありがと。まだこの辺りは街に近いから、魔獣もあまり凶暴な種類はいないみたいね」

「だな。まあこうして街を、道を作る以前は普通の山野だったわけだから、先人の努力には感謝しとかねえと」

「……ふん。柄にも無い事を言うじゃねえか」

「あん？ お前に言われたかねーよ」

「ふふつ。まあまあ……」

一段落をつき、束の間の労いを見せるイセルナ達。

「……」

他の団員達と引き続き警戒に当たりながら、ミアはそんな父らを遠巻きに眺めていた。

そしてゆっくりと視線を移し、少しずつ広げられ連結されていく街道を見て思う。

一見すると、豊かな自然の中に人の営みが溶け込んでいるように見える。だが、それはあ

くまで“遠くから見た場合”であって、実際は人が世界を開拓して回っている。

なのに自分達は、領域を荒された害獣を、魔獣を「邪魔者」として排除している。

確かに冒険者は人を助け、守る存在。そこに力点を置くべき業界だ。

「……本当にこの“邁進”は正しいのだろうか？ ミアは時々そんな事を思う。」

「くそつ、コイツはでか過ぎる……!!」

そうしていると、背後から作業員達の声が聞こえた。

ミアが振り返ってみると、その視線の先では彼らが立ち塞がる大きな岩に苦戦しているの  
が見える。辺りの草木を取り払い、道を作る前に邪魔になるらしい。作業員らの何人かが相

次いでつるはしを叩き込んでみるが、岩はちつとも削れていない。

「参ったな。計画の路線のど真ん中にこんなものがあると……」

「おい、こつちに破砕機持って来てくれ〜！」

「すま〜ん！ こつちも堅い所があつて手が離せないんだ！」

作業員らが別の地点で作業している仲間達にそう呼び掛けていたが、既に用意されている

破砕機（先端に金属の棘ドリルが取り付けられた重機。機巧技術による土建機材の一つ）は

他の岩砕きに投入されているらしく、当てが外れていた。

その返答を聞き、作業の手を止めて困り顔をした彼ら。

「……ちよつと、どいてて」

すると見かねたかのように、次の瞬間ミアは彼らにそう言いながら歩み寄っていた。

「どいてって……。一体何をする気だい、お嬢ちゃん？」

「まさか、自分がこの岩壊しますだなんて言わないよな？」

「……そのつもり、ですけど」

驚いたのは作業員達だった。

何せ見た目はすらっとした猫系獣人の女の子だ。素人の見た目ではとてもじゃないが、力

仕事を任せられるようには見えない。

「おい、あんたら〜」

そうしていると、背後からミア達に向かってダンが呼び掛けていた。どうやら先程からの

やり取りを見て娘が何をしようとしているのか気付いたらしい。

「どいてな。ミアが手伝ってくれるんだろ？」

「こいつの言う通りにしておけ。巻き込まれて怪我をしたくないな

らな」

バラクも次いでそう忠告を放ち、益々作業員らは訝しげになった。少なくともこの猫耳少女の妄言ではないようだが……。

彼らは疑心半々といった感じで、そろそろと大岩とミアから離れ始める。

「……ん」

周りの皆が十分に距離を取ったのを確認して、ミアは小さく頷くとそっと拳を握り締めていた。ゆっくりと腰を落とし、静かに深呼吸をして息を整える。

目の前には大岩。ミアの何十倍も大きな岩が工事の行く手を阻むように鎮座していた。

作業員達、そしてダンら冒険者の面々がその様子を見守っている。

「ふっ!!」

それは数拍の出来事だった。

コオツと拳にマナを込めてオーラを漂わせた次の瞬間、ミアは瞬発的に跳ね上がった拳の

威力を真つ直ぐ大岩に向けて叩き込んだ。

ビリッと空気が震えた。次いで、打ち込んだ拳を中心にサーッと無数のヒビが入る。

そしてそこから一拳に結合を失って、大岩が粉微塵に崩れ落ちた。上がる土煙と轟音、そして驚愕で目を丸くする作業員や若手の冒険者達。

「……。ふう」

やがてその雑音が止んだ後には、大岩は跡形もなく無くなっていた。

「お、おおおお！」

「凄え!?! あの大岩を本当に粉微塵にしちまいやがった!」

「やるなあ、お嬢ちゃん!」

ミアの背後で歓声が上がっていた。

ちらりと肩越しに目を遣ってみると、ダンやイセルナ、団員達が

「よくやった」と言わん

ばかりに笑みを浮かべて頷いている。

「いや、驚いたな……」

「こりゃあ男も裸足で逃げ出すパワーだぜ」

「……」

だがそんな歓声の中で、ミアは彼らから漏れたそんな言葉を聞いて、思わず内心ぴくつと

反応し、静かな動揺に襲われていた。

（女の子じゃ、ない……。怪力女……）

脳裏に浮かぶそんなフレーズ。

そして、戦友ジークの弟の優しい笑顔。

「ッ!?」

ぶんぶんと。ミアは次の瞬間、必死で頭を横に振っていた。

どうして彼の事が……。

「……」

顔が赤くなつて火照ってゆくのが分かった。あの時、ステラやレナにからかわれたやり取りが脳裏に蘇る。

「おい、ミア？ どうした？」

「……何でも、ない」

いけない。今は仕事……。

父が遠巻きに声を掛けてくるのに顔を上げて、ミアは途切れ気味に応えていた。



#### 4 - (4) 学友と条件

昼休み。アルスは学院内の食堂にいた。

いつもは魔導の修得に勤しんでいる生徒達も、この時間においては年齢相応の青少年にな

っているように思える。会食と談笑が方々で弾む食堂内で、アルスは一人席に着いて静かに昼食を摂っていた。

「ねえねえ、あの子だよな？ 持ち霊も連れてるし」

「や〜ん。やつぱり可愛いい〜」

「だよねだよな？ 何ていうか、守ってあげたくなる系だよな？」

「……」

だが、周りの学院生らは中々それを許してくれない状況だった。

先輩達（特にお姉さま方）による遠巻きな品定め。

アルスはそんな聞こえてくる黄色い声にはうっとうしく頬を赤らめ、俯き加減になっていた。

「……モテモテだねえ、アルス？」

「か、からかわないでよ……」

加えて、傍らで漂っているエトナも何だかご機嫌斜めで。

アルスは苦笑のままため息を一つ。鮭のソテーをちみちみとフォークで掘り出しながら、

間を保つ代わりのように頬張っている。

とはいえ、恥ずかしい事この上ないが、まだ遠巻きに見られているだけならいい方だ。

ただでさえ入学式以来、ほぼ毎日のようにラボ勧誘に来る先輩達や物珍しさで接触を図っ

てくる（女子）生徒達に正直言って疲れている自分がいた。

それが新入生代表でスピーチをした いやどちらかというところ、シンシアと入学早々私闘

を演じてしまった報いであるのかもしれないが。

(……僕はもつと、普通に静かに勉強したいんだけどなあ)  
また一つ、静かに嘆息。

アルスはもきゅもきゅと昼食を口に運びながら、今更ながらに自分の置かれている現状に後悔の念を抱いていたのだった。

「よう。相席いいか？」

突然そう声が振ってきたのは、ちょうどそんな折だった。

アルスが顔を上げると、そこにはそれぞれ昼食を載せたトレイを手にもいかにも快活そうなヒューネスの少年と知的な雰囲気鷹系ウィング・レイスの少年が二人。

また勧誘などの類だろうか……？

アルスは思いながらも無碍にはできず、コクリと頷いて承諾をする。

二人は笑顔と微笑を零すと、早速アルスと向かい合うようにして席に着いた。

「……そんなに身構えなくていいよ？　僕らはラボの勧誘に来た訳じゃない。そもそも君と同じ一回生だから」

「ま、噂の主席クンとやらがどんな奴かってのは、興味あったんだけどな」

そんなアルスの様子を、彼らは予め想定していたのだろう。

知的な感じの方の彼がそう穏やかに補足する横で、快活な感じの方の彼は人好きのする明るい笑みをみせる。

「まずは自己紹介をしないとね。僕はルイス・ヴェルホーク。専攻予定は……魔導理学か、

解析学かな。まだラボは決めてない」

「俺はフィデロ・フィスター。専攻は魔導工学だ。一昨日ラボの希

望届けも出したんだぜ」

「魔導工学……。じゃあ、やっぱり魔導具の？」

「おうよ。俺、実家が武器屋だからさ。親父の跡を継ぐつもりでいるから“魔導具を作れる

武器職人”つてのを目指してるんだ。今の世の中、魔導具が作れればそうそう食いつぱぐれ

しないだろう？」

「ええ。まあ……」

鳥系亜人のルイスと、ヒューネスのフィデロ。

見た目で判断するとすれば失礼だが、そういう将来設計はフィデロではなくルイスが語る方がそれっぽいようにも思える。

「というより、フィデロの場合は何か技術をモノにしておかないと日銭労働者になってそう

だもんねえ……」

「う、うっせーな。お前はいいよ、付き添いで受験したくせに俺より成績いいし……」

「……という事は、お二人とも元々からの知り合いなんですか？」

「ああ。知り合いも何も幼馴染だよ」

「同じ故郷出身の腐れ縁、といった所かな」

「そうなんですか……」

やり取りを暫し。

その中でアルスはこの二人の関係を垣間見、何だかほっこりと嬉しさを感じていた。

多分、それは絆なのだろう。故郷から逃げるように出て行った兄を持ち、自身もこの身一

つで見知らぬ街に来た分、そういう寄り添える誰かが欲しかったのかもしれない。

「お前は何処の出身なんだ？」

「えっと、サンフェルノっていう村です。ここからずっと北にある

んですけど」

「北か。僕は南部出身だから、ちょうど学院を挟んで向き合ってやって来たわけだ」

「……そうですね」

アルスは少しずつ硬い身構えを解き始めていた。

多分だけど、言っている通りこの人達は僕を勧誘に来た訳じゃない……。

エトナも同じことを思っているのか、ちらと目を向けてみると同じようににこりと笑って

小さく頷いてくれている。

「でも、ちよつと意外だったかな」

「え……？」

「今年の新入生主席。この若さで持ち霊付きで、耳にした限りでは成績もぶつちぎり。しかも入学早々に同級生と私闘を繰り広げる大胆さ

勝手な予想だけ

ど、もつと自信満々な感じ

じなのかなって思ってたんだけど」

「だよなあ。だけどこうして話してる感じじゃあ、むしろ控えめじゃない？」

「あ、ははは……」

随分と噂が誇張されているらしい。アルスは苦笑してごまかすしかなかった。

そういったイメージ像はむしろ彼女シメンシアに近いのだが……。でもわざわざ

わざ彼らを前に訂正する

事もないかなと思った。

「皆、買かぶり過ぎなんですよ。自分で言うのも何ですけど、僕はお二人の期待に沿えるよ

うな豪胆な人間じゃないです」

「ふふ、謙遜だね。成績トップは事実だろうに」

「……っーかよお？ お前、ちよつと畏まり過ぎだって。さっきも

ルイスが言ってたろ？

俺達同級生なんだぜ。ため口でいいって」

「で、でも」

アルスは指摘されて少しビクついた。

基本的に丁寧な言動な自分にそう言われてもという思いがあった。そして何よりも、彼らは自分よりも少し年上に見える。

「……アルス君は、いくつ？」

「えと、十六です」

「俺達は十七だ。な？ 大して変わんねえって」

「そう、でしょうか……」

少なくともこれで年上は確定した訳なのだが。

勿論、生徒の学年と年齢は必ずしも一致しない。それでも年上と  
いうだけでアルスにとっ

ては充分過ぎる材料で。

「うん。少なくとも僕らには普通に接してくれていいよ。むしろそ  
うして欲しいな」

「そうだよ。友達に敬語なんて変だろ？」

「とも、だち……？」

しかし何気なくさも当然のようにフィデロはそう言った。アルス  
は目を瞬かせて静かに驚  
いていた。

それは気安く友人扱いされた軽さにはない。この僅かな時間で、  
何かと変な噂で固めら

れつつある自分を、友達として迎えてくれるという彼らの意思表示  
に驚いたからだだった。

「？ どうかしたか？」

「……いい、いいえ」

嬉しかった。もしかしたら、このまま変に皆に距離を取られたま  
ま学院生活を送ることに

なるんじゃないかという不安も抱えていたから。

アルスはゆつくりと、思案で俯いた顔を上げていた。

そこには謙虚や戸惑いの色は薄れ、代わりに喜びの色が染まり始めている。

「……ありがとう。じゃあそうするね。よろしく。ルイス君、フィデロ君……」

アルスは切り替えるように言った。思いがけず友を得られた事に感謝して。

「うん……。よろしくね」

「ああ、こつちこそ」

そんな謙虚で穏やかな小さき主席に、学友二人は笑顔で応えた。

新しくできた学友二人と昼食を摂り、暫しの談笑に華を咲かせた後、アルスは二人と別れ

午後からの講義をこなしていった。

(うん……)

そして時刻は夕方。この日の講義も大方が終わりつつあった頃。

アルスは一人キャンパス内のベンチに座って、じつとシラバスと睨めっこをしていた。

何枚も貼られた付箋。吟味の跡。それでもアルスはまだ足りないと言わんばかりに、何度

もそこに列挙された教員陣の紹介文やラボの写真などの情報を見比べている。

「……まだ決めらんない？ ラボならいっぱい回ったのに」

「うん。そうなんだけど……」

そんな齧りつくように集中している相棒を、エトナは中空に浮かんだまま少し心配そうに見守っていた。

アルスが返したのは、苦笑。

それは彼がそれだけ迷っているという証でもあった。

エトナも彼の“目指す夢”を知っているからこそ結論を急かすことはできず、ただ微笑を返してじっと待つ他なかった。

「見つけましたわ。アルス・レノヴィン」

そんな最中だった。

アルスが再びシラバスに目を落としていると、シンシアが姿を見せたのだった。

彼女はベンチに座っている彼を認めると、堂々とした何処か力んだような足取りでその前まで歩いてくると言う。

「聞きましたわよ。貴方、まだ所属ラボを決めていないそうね？」

（うーん……。結界研究の先生の講義も、思っていたのと違ったしなあ……）

だが、アルスは聞いていなかった。いや……。思案に没頭していて彼女が近寄ってきた事にすら気付いていなかったと言うべきか。

その一方でエトナは気付いており、既に彼女へと顔を上げていたが、

「そ、その……。もし当てが無いのなら、私が入る予定のラボに貴方もと、特別に招待してあげても……。よろしいですよ？」

当のシンシアの方も、何故か照れたように視線を逸らしながら語っている為、そんな齟齬

が起きているのに気付いていないらしかった。

（解析学も違うよね。一応実践系の分野だけど、基本は既存の術式を分析して対応するもの

みたいだから、僕の最終的な目標とはズレちゃうし……）

エトナの目にも、シンシアがガチガチに緊張しながら話しているのが分かった。

何があったのかは知らないが、どうやらこの女もまたアルスを勧

誘に来たらしい。

エトナはむうと頬を膨らませたが、やはり横目で見た相棒はシラバスと睨めっこを続けているままだ。

「わ、私は学年次席。決して目指す高みは貴方にも遅れを取りはしませんわ」

(……ん?)

そんな時だった。

ふと、アルスの足元にぱらりと一枚の紙切れが落ちた。

拾い上げて見ると、どうやらそれは追記の教員紹介の頁だった。おそらくはシラバスの

巻末にでも挟まって今まで気付けなかったのだらう。アルスはその文面に目を通す。

(何々? 教員名ブレア・レイハウンド。専門は魔流力学<sup>ストリーム</sup>、魔獣学……)

「で、ですからこれからは好敵手<sup>ライバル</sup>同士、同じラボで切磋琢磨を」

「これだ!!」

そしてアルスは突然叫びながら立ち上がった。

その眼は最良の選択に出会えたという喜び。そして シンシアの存在にも気付かない程の興奮度合い。

「やっと見つけたよ、僕の目標にぴったりだ! 行こう、エトナ!」

「え? う、うん……」

そしてそのまま傍らに浮かぶエトナに声を掛けて走り出す。

エトナは啞然としているシンシアと確かに目が合っていたが、結局彼の駆け出す後ろ姿を

追って共にその場を去っていつてしまふ。

「……………。何なんですの?」

ぼつねんと一人残されて。

シンシアは妙な疎外感と共にその場に立ち尽くす。



魔導師ブレア・レイハウンドの研究室は教員陣の詰める研究棟、その一階の一番奥まった場所にあった。もつと言えば何処か物寂しい位置に在った。

周りに生徒や教員の姿はない。アルスは自身の足音が廊下に反響するのを聞いてから、目的のこの部屋の扉に掛かっているプレートを確認する。

表示は『在室中』 今なら訪ねられる。

「……よしっ」

アルスはごくつと息を呑んでから、遠慮がちにドアをノックした。十秒二十秒三十秒……三分。しかし返事は無かった。アルスはエトナと互いに顔を見合わせる。

念の為に今度はもう少し強めにノック。だが、それでも返事はなかった。

「うーん、いないのかな？」

「確かにプレートを換え忘れた可能性はない訳じゃないけど……。あ、開いてる……」

だが戸惑っている中で何気なくドアノブに触れてみると、扉はあっさりと力押しに負けて

身を退いていた。キィと小さく音が鳴る。再び二人は顔を見合わせたが、

「……すみませ〜ん。レイハウンド先生はいらっしゃいますか？」

「開いてたんで入っちゃいますよ〜？」

結局そのまま室内へと足を踏み入れていく。

ラボの中は、他の魔導師もそうであるように多くの文献が壁一面の本棚にひしめき合っていた。

ただそれでも、この室内のそれは通常よりもずっと多いように思えた。

「……なんか、村のアルスの部屋を思い出すね」

「奇遇だね。僕も同じこと思った」

壁一面を覆う本棚だけではない。机の上にも、果ては床にも敷き詰められるように。

大量の書籍が、室内にはぎゅうぎゅう詰めに収められていた。アルスはおもむろに腰を降りし、足元の本の山の一つから一冊手に取ってみる。

表紙には『アカデミアレポート』の文字。魔導学司アカデミア発行の公式論文集だ。

そんな時だった。

「んあ……？ 誰だ？」

突然、もそりと部屋の奥で何かが動いたかと思うと気だるげな声がした。

きよろきよろと辺りを見渡すエトナ。アルスは反射的にビクつき、手にしていた論文集を手早く元の本の山に戻す。

「あ、あの。僕アルス・レノヴィンといいます。レイハウンド先生のこと……ラボですよね？」

「ああ。そうだが？」

一見して本の山の中 目を凝らしてみると、実際はその隙間に収まったソファからむくりと起き上がってきたのは、一人のヒューネスの男性だった。

年齢は三十台前半。ぼさぼさの茶髪に、着崩したラフな普段着。

典型的な“如何にもな魔導師”とは少々かけ離れている外見だといえる。

「ラボの見学に来ました。お、お邪魔だったでしょうか？」

「いんや、いいよ。どうせ惰眠だし。にしてもレノヴィンねえ……。まさか今年の主席くん

がうちに顔を出しに来るとは。噂はかねがね」

「は、はあ……」

アルスは思わず苦笑で応じるしかなかった。

最後の一言は間違いなく、例のシンシアとの私闘に端を発した誇

張された話の事だろう。

「ま、シラバスを読んだから来たんだろうけど自己紹介しとこうか。俺がここのラボの教官

をやってるブレア・レイハウンドだ。苗字が長めだし、呼ぶのは名前の方でいい」

「は、はい。分かりました。ブレア先生」

そう言わせておいて、この茶髪の魔導師・ブレアは何処か自嘲するかのよう言葉なく口

元に孤を描いていた。ガシガシと髪を掻きもそりとソファから立ち上がると、気だるげに室内を見渡している。

「とりあえず見学に来たんだ。とりあえず話を　　と、その前に片付けねえと。座る場所

がねえや……」

「あ、僕もお手伝いします」

「おう。悪いな」

ゆたりと足元の本の山の置き場所を変え始めるブレアを見て、アルスも動いた。

暫く二人は座談できるだけのスペースを作る為に、黙々と本の束という名のエントロピー

を移す作業に集中する事となった。……尤も、にわかか整理で片付く量ではなかったが。

「こんなもんでいいか。じゃあ適当に座ってくれ」

「はい」「お邪魔します」

そしてその一仕事を終えて、やっとアルスとエトナはラボ見学という本来の目的に取り掛

かることができた。多少だが荷物を除けたテーブルを挟み、二人とブレアが対面して椅子に座る形になる。

「さてつと……。何から話せばいいかね。何か聞きたい事はあるか

「？」

「そうですね。では、もつと具体的な研究内容を挙げて頂けると」  
「ん〜……。最近のだと魔獣生態の種別分析論文に、北方一帯のス  
トリームの十年変遷シユ

ミレート、あとは瘴気のハザードマップ作成チームに加わってたり  
とか……だな」

「ふむふむ。なるほど」

椅子の背にもたれて相変わらず気だるい感じで語るブレア。

その言葉を聞きながら、アルスは小さく頷きつつメモを取ってい  
た。

「……なあレノヴィン。いや、アルスでいいか」

「？ はい」

「お前、何でうちに来た？」

するとそんな様子を眺めていたブレアが、はたとアルスの顔を上  
げさせると、そんな質問  
をぶつけてきた。

すぐに返答ができず無言で目を瞬くアルスの表情。

ブレアの凝視する眼は、それだけ真剣味を湛えているように見え  
た。

暫し、エトナも目を瞬いて戸惑っている中で二人の視線が交わっ  
ていた。

しかしそれも数十秒の事。先にフツと真剣な眼を解いて口を開い  
たのはブレアだった。

「そもそも、一昨年くらいから俺の紹介はシラバスに載ったり載ら  
なかったりしてる。学院

にとつちや俺はその程度の扱いなんだ。……分からねえか？ 流行

らねえんだよ。俺の専門

領域はさ。魔流<sup>ストリーム</sup> マナの流れなんてのは魔導師を志すような連中

なら大抵普段から目を凝

らせば見えるし、魔獣学に至っては研究対象が対象だから単に学者

風情な身だとリスクが大きい

過ぎる。どっちにしろ“手っ取り早く金になる”分野じゃねえんだ。  
今の学生 魔導師を志す

若造がそんな選択を採るってのは、ぶっちゃけレアケースだ」

「……それは」

無理からぬ論理であり、事実だった。

元々、魔導とは世界（と精霊）に繋がり、その意思を汲み取る術  
だった。

しかしそれはあくまで大昔の話。今日では文明を支える技術の片  
輪として、もつと実利的  
なニーズが増え続けている。もつと言ってしまうえば「金になる魔導」  
だ。

そうした傾向は何も魔導だけに留まらず、所謂“保守派”からは  
批判的になっっているが  
それでも現実にはカネが物を言う。ブレアの言うように優秀な稼ぎ口  
としての魔導師というの  
は、今の時代はそう珍しい動機ではない。

「それにお前さんは今年の主席だ。他のラボからもラブコールは貰  
ってるんだろ？ だった

ら俺ん所みたいないなマイナーもマイナー、もう在籍生すら居やしない  
弱小ラボに構ってる暇は  
ないんじゃないか？」

だからこそ、アルスはブレアが自身を晒すようにそう話してみせ  
ても上手く反論できない  
でいた。誰も他にいない閑古鳥。そんな自分になど構うな。そう言  
われているようだった。

「……駄目なんですか？」

「ん？」

それでも、アルスの意思は固かった。

「魔導師が儲けなんて無視して研究に没頭しちゃ、駄目なんですか

……ッ!?」

膝の上でぎゅっと握った拳にギリリと力を込めて、潤みかけた両の瞳がブレアの自嘲の顔を強く見つめ返す。

「……じゃあ聞かせろよ。お前ほどの優秀な卵が、何でそこまで俺みたいな儲からない分野のラボを叩いたのか」

その意思の強さを、ブレアは汲み取ったらしかった。

自嘲する声色を落とし、すうっと目を細めてそうアルスに訊ね返す。

「……………。はい」

たっぷりの逡巡。

「僕は、ここから北にある小さな村で生まれ育ちました。この街のように発展もしていなけ

れば、インフラの整備も行き届いていない集落です。でも僕は自然が豊かで、精霊達が楽し

そうに飛び交って、皆が穏やかな時間を共有する……そんな村が大好きでした」

だがアルスは、やがて同じく静かに目を細めて答え始めていた。

「でも僕がまだ幼い頃、村を魔獣の群れが襲いました。村の自警団の皆が必死に立ち向かっ

て守備隊が到着するまでしのごうとしました。でも……結果を言えば、間に合わなかった」

「……………」

「沢山の仲間が、死にました。父さんを始め自警団の皆　今も行方知れずになったままの

人もいます。多分、魔獣に食べられちゃったんだと思います」

「親父さんが、か」

「……………はい」

当時を思い出したからなのだろう。アルスはくしゃっと表情をし

かめていた。

潤んだ瞳がより溢れ出んとし、それをアルスは袖でゴシゴシと拭う。傍らで浮かぶエトナも心苦しそうな表情で彼を見守っていた。

「でも、それだけじゃ済まなかった。……僕と兄さんの前で、よく知ったおじさんが瘡気に

中てられて魔獣になってしまったんです」

ぼつりと。だがブレアの真剣さを帯びた眼は確かに一層鋭くなつて。

「おじさんは、魔獣になり切ってしまう前に言いました。村の皆を手を掛けてしまう前に、自分を殺してくれと」

「……………」

「頷ける訳がありませんでした。でも、僕らが拒んでいる内におじさんは魔獣の側にもって

いかれてしまつて……。気付いたら、兄さんが剣をおじさんの首に……………」

砕けてしまつのではないかという程に、握り締めた拳が震えていた。

もうアルスの目は涙を押し留めておく事ができなかった。

ぼろぼろと零れ、テーブルの上に落ちてゆく哀しみの雫。それはあの日から今まで、ずっと

と彼の中で溜まり続けていた悔しさに他ならなかった。

ブレアが押し黙ってじっと見つめる中、アルスの声が一際感極まつて大きくなる。

「何も、できなかつた……っ！ ただ怯えて、父さんも母さんも、兄さんもおじさんも村の

皆も泣いていたのに、僕は何もできなかった！僕は兄さんみたいに剣を振るえない。武芸

の才能はない。でも、でも魔導なら……勉強ならできる。だから必

死に勉強した。もう二度

と、瘴気や魔獣で誰かが泣かなきゃいけないなんてことにならないように……もう二度と、

あんな悲しい思いをさせないように……ッ」

そつとブレアが一度目を閉じる。エトナが我が事のように自身の胸をきゅつと抱く。

一度溢れた感情を若干抑え直して、アルスは言う。

「救いたいです……守りたいんです。瘴気や魔獣で、これ以上誰かが悲しまないように。」

その為に僕は魔導を学んできました。僕にできることは勉強くらいだから……。僕は、魔導

師になって、瘴気や魔獣を可能な限りゼロにしていく方法を見つけないんです……」

それがアルスの理由だった。夢であり、あの日からずっと抱き続けた目標だった。

だからこそ“金になる魔導”は眼中になく、たとえ儲けのない分野でも、リスクを負う事

になってもこの道を選ぶことしか考えていなかったのだ。

「……なるほどな」

たっぷりと間を置いて、ブレアは小さく呟いていた。

そして必死に涙を抑え堪えているアルスを見下ろすと、

「安直に訊いて、悪かった。辛かったら」

ポンと優しく彼の方に手を遣る。

僅かにアルスは頷いていた。ブレアもその小さな拳動を見逃さない。

「確かにその目標なら俺の専門はど真ん中だ。……もしかして、うちが本命だったのか？」

「はい……。シラバスを見て、ここしかないって思いました」

「……そうか」

立ち上がったままそつと視線を逸らし、ボリボリと髪を掻くブレ



ア。

アルスはようやく感極まった自分を静め終えかけていた。傍らではそっとエトナが彼の手を取って見守っている。

暫し、いやもしかしたらかなりの時間が流れていたかもしれない。じつと背を向けた格好で黙り込んでいたブレアだったが、やがてふと半身を返すと、肩越しにアルス達に振り向いて言う。

「……いいぜ。俺がお前の指導教官になってやる」

「！ 本当ですか！？」

「ああ」

だが、その表情はまだ何かを仕込んでいるかのようなだった。

同情は消えていた。しかしそこには一人の先輩魔導師としての真剣さが宿っている。

「俺もいい加減、窓際な研究生生活には飽きてた所だしな」

顔を上げてその挙動を注視する二人に、ブレアはじつと目を細めると、

「但し……。一つ、条件がある」

眼に力を込めてそう言ったのだった。

それは、日も沈み辺りが暗くなってゆく時間帯だった。

「よいっ……しよ」

アウルベルツ商業区の奥にある倉庫群。

ぼつねんと照明の灯ったその一角で、とある二人の若者が不承不承といった様子で商品の

詰まったダンボール箱をひたすらリレーし、山のように積み上げていた。

「つたく。何で俺達がこんな地味な仕事を……」

それはアルスがこの街に来た初日、ミアに手を上げようとした新米冒険者の二人だった。

細身のキザな方が下で箱を引き寄せ、脚立の上に乗った小柄だが強気な顔つきの相棒へと

渡す。倉庫の中に積み上げられたダンボール箱の山にまた一つ箱を加えながら、小柄な方は

足元の相棒に向かって言った。

「仕方ねえだろ。この前の一件でボスにクランの仕事干されちまつたし」

「そうだけだよ。何が悲しくてこんな地味な事やらなくちゃいけねえんだよ……」

「嫌なのは俺も同じだったの。でもこんなのでも依頼を受けなきゃ飯も食えねえんだ。ボス

からの処分が解けるまでの辛抱だつて。ほら、次」

ミアに手を上げた一件を咎められ、二人は所属クランの団長・バラクからクランの一員として

の遂行メンバーから外されていた。

一時的な処分とはいえ、基本的に冒険者は依頼をこなさないと食いつ持は無い。

よつて、二人は本意ながらも自分達でも受けられる 便利屋  
の裏方仕事を受けざるを  
得なかつたのだった。

まだ若く、冒険者という肩書に一種の万能感を抱いている彼らにとつてこれは屈辱であつたに違いない。

そしてそうした思い上がりを戒める事もバラクナリ処分の意図であつたのだが、彼ら自身は十中八九そうした思いには気付いてすらいらないらしい。

「はあ。ボスも頭堅いよなあ……」  
そうして二人が渋々と、黙々とダンボール箱の山を高く大きくする作業に勤しんでいた、  
ちよつどそんな最中だった。

「……？」  
フツと背後から風が通り抜けたような気がした。  
しかしただの吹き荒びとは思えなかつた。何といえはいいのか、  
自然に吹いたというよりも“悪寒を伴う”ような、嫌な感じの一瞬の空気の蠢き。

細身の方は、そんな自分でも形容しがたい妙な違和感を背中いっぱいを受けて、思わず背後を、開け放ちになつていた倉庫の入口の方を振り返っていた。

「ん？ どうかしたか？」  
「……なあ、さつき誰か通らなかつたか？」  
「は？ 誰つて？」

脚立の上の小柄の方は、相棒の言葉に隠すことなく眉根を上げて怪訝を見せていた。

ここは表通りに店を構える商人達の倉庫がひしめている区画だ。誰か来るとすればそうし

た店の関係者か、取引のある業者くらいなものだろう。

しかし……今はすっかり日も暮れて店はあらかた閉まっている。

そうした者達が顔を出し

てくるとは考えにくかった。

「気のせいじゃねえの？ 風の音とかと間違えたんじゃねえか？」  
だからこそ彼はそう不安げに入口の方を見遣っている相棒に言った。

よしてくれよ。こんな地味な作業に加えて、盗人の取り締まりまでしろつてののか？ そこ

まで報酬に加えてくれるならいざ知らず……厄介な事この上ない。

「そうかなあ？」

「……そうだつて。そうに決まってる」

ただでさえ、最近は何騒だ。それにどうにもツキも悪い。

自分達は別にそんなおっかない連中とドンパチする為に冒険者になつたんじゃない。この

業界で金と名誉を ドカンと一発を当てる為にこの業界に飛び込んだのから。

「ほら、寝惚けた事言っていないでさっさと終わらせようぜ」

「お、おう。そうだな……」

そして二人は互いに不吉な考えを振り払うように、再び作業に戻り始めた。

テロだろうが、保守だの開拓だのという争いだろうが、俺達には関係ない。

そうさ。俺達には……関係ない。

「……………」

そんな二人の後方の倉庫の外を、一つまた一つと不審な影が音もなく駆け抜けてゆくのに  
気付く事もなく。

「……んう？」

瞼の裏に陽の光が差し込んできた。眠りの海の中に沈み込んでいた身体がおもむろに引き

揚げられるような錯覚を覚える。

アルスは、ぼんやりと眠気眼のまま天井を見ていた。

相応の年季の入ったクランの宿舎。そこには点々と広がったシミがこちらを窺うように静

止しているかのように見える。

「アルス……？」

そうしていると、フツと視界を遮って覗き込んでくるエトナの顔が映った。

ふわふわと浮かび、緑色のオーラを漂わせた中に見せる不安げな顔。

語る事はしなかったが、やはり相棒もあの事が気になっているのだろう。もしかしたら自分が見ている内に魔されてもしていたのかもしれない。

「……おはよう。エトナ」

だからアルスは努め、フツと微笑んでいた。それでもそりと身体を起こして目を擦ってまだ纏わりつく眠気を宥める。

兄と共有している二段ベッドの上。

寝間着姿のまま、トンと梯子を降りて下を覗いてみると、そこにジークの姿はなかった。

「兄さん、もう起きてるみたいだね」

「うん。もしかしたらアレかなあ？」

言って、ふよふよと壁をすり抜け（精霊なのでこいつは芸当もできる）一人廊下へと出て

ゆくエトナ。その後ろ姿を一瞥して、アルスは着替えと身支度を始めた。

寝間着を畳んで衣装ケースの中に。次いでクローゼットから普段の服とローブを取り出して羽織る。机の横に引っ掛けておいた鞆の中の教材諸々を確認して準備完了。

「やっぱりそうだったよ。ジーク、朝練してる」

「そっか。じゃあ僕らもご飯食べに行こうか」

そして廊下から外の様子を確認していたらしいエトナが再び壁をすり抜けて戻ってくるのを待つて、アルスは穏やかに言った。

廊下の途中の手洗い場で洗顔、歯磨き、そしてトイレを済まして宿舎を出る。

そして朝食を摂る為に酒場へ続く渡り廊下を歩いていると、その姿が目に入った。

「二九八六、二九八七、二九八八……」

宿舎と酒場の裏手に挟まれる敷地に設けられた中庭兼運動場。

その一角で、ジークが軽装の姿で一人朝稽古に勤しんでいた。

ぶつぶつと回数を呟きながら両手で何度も素振りしているのは、

長い棍棒とその先に取り

付けられた巨大な錘。

大きさはアルス一人分を軽く越えていた。おそらくはダンベル上げの錘部分ではないかと

思われる。そんな巨大な錘を取り付けた棍棒を、ジークは剣に見立て、上下の動きは勿論、

横薙ぎや袈裟懸け、片手ずつの素振りなどを順繰りに繰り返している。

「朝から精が出るね」

アルスはそんな兄を少し遠巻きから見つめていたが、進行方向上

にいた事もあってそつと

近付いていくとそう声を掛けていた。

「二九九九、三千　ん？　ああ、お前らか」

最後に振り下ろしを一発。ガコンと重量感満載の金属音を響かせて、ジークは額に汗を流

しつつ振り返った。どしりと、地面に訓練用の錘が降ろされる。

アルスとエトナは、相変わらずながらこの（相棒の）兄の身体能力に目を見張っていた。

ガシガシと首筋に引っ掛けていたタオルで汗を拭って、ジークは言う。

「ま、定期的にやつとかなないと身体が鈍るからな」

「……鈍ってたらそんなでっかい物なんか持てないと思うけどねえ」

「あはは……」

「別にこれくらい普通だぞ？　力だけで言えば副団長……ミアにも俺、敵わねえままだし」

『えっ！？』

あくまでジークは冒険者基準で自身の力量を見ていた。

ダンさんはともかく、ミアさんが？　アルスはむしろその事実に驚いていたが、何せあの

父娘は獣人族だ。潜在的な身体能力の高さは折り紙つきである。

アルスは改めて自分のような一般市民（学生）と兄ら冒険者達の、住む世界の違いに内心

圧倒されてしまっていた。

「そりゃあ種族としての身体の作りが違うのは分かってるけどな。だからって鍛錬をサボる

理由にはならねえよ。努力すりゃあ、種族の差なんてものはきつと縮められる」

「……そう、だね」

しかしその言葉に、アルスはフツと表情を曇らせていた。見れば、エトナも同様だった。

だがジークは一瞬その変化に僅かに眉根を寄せていただけで、この場で突っ込んで訊ねる事はしなかった。

ぐるりと肩を回したり、手首を曲げ伸ばししたりと運動後のストレッチを挟みながら、苦笑が混じったため息をついて続ける。

「それにいつも剣を振れる仕事ってわけじゃねえからなあ。この前だってシフォンと受けたのが『飼い犬が迷子になったから探してくれ』っていうのでさ……。結局シフォンが精霊に

聞き込みをして解決したから俺の出番はなし。丸つきり魔導が使えないってのも不便なもんだよなあ。こういうケースに出くわすとき」

「……」「うん……」  
「そういうわけだから、日頃から鍛えておかねえと。せめて皆の足を引っ張らない程度には力をキープしとかなくっちゃな」

そして再び軽々と錘付きの棍棒を拾い上げ、ジークはひよいと半身を返す。

見れば、弟は少し俯き加減で立っているように見えた。

だがそれよりも、

「……つと悪い。まだ朝食食ってないよな？ 学院に遅れない内にさっさと食っちまえよ。」

俺はコイツを片付けて、シャワー浴びて来てから食うからよ」

ジークは自身の愚痴を聞かせてしまった事を失態だったかもしれないと思っていた。

「う、うん……」

コクリと頷いたアルス。

ジークはそれを見て小さく笑み、中庭の奥の方にある用具倉庫の方へと歩いていった。



言葉少なげに宙に浮かんでいるエトナ。

アルスも暫しの間、その場でじっと黙してそんな兄の後ろ姿を見送る。

「……。ご飯、食べよつと」

そしてややあつて、改めてアルスは鞆を片手に、ロープを翻して渡り廊下を歩いていく。

「おはようございます」

酒場に顔を出してきたアルスは、このクランに下宿を始めて以来の、いつもの穏やかな微笑を湛えているように見えた。

「おう。おはようさん」

「今日も学校、頑張れよ」

最初こそ冒険者という、一般には荒くれ者の集まりと認識されている中に混じって暮らす

事に不安がない訳ではなかったが、自分が仲間ジークの肉親だと知らされていた彼らの気安い態度

はそんな不安などすぐに吹き飛ばしてくれていた。

考えてみれば不思議ではないのだろう。

何よりもお互いの結束が、即ち戦時における軍団としての立ち回りに影響するのだから。

「おはよう、アルス君。すぐに用意するから適当に座っていてくれ」  
「はい。お願いします」

アルスはすっかり打ち解けた団員らと挨拶を交わしながら、カウンターの中からそう言う

てくるハロルドに頷き会釈をすると、近場のテーブル席に着いた。

店内のテーブル席には他にも団員らが疎らに座っており、カウンター席ではダンとミア、

中で調理や給仕をこなすハロルドとレナとが時折談笑を交えている様子が見て取れる。

「よう。アルス」

「今日はどんな授業受けるんだ？」

そうして席で待っていると、近場の団員が数人近寄ってきた。空いた他の席に座り直して

同じテーブルに着く。団員の中には魔導を扱う者もあり、学院に通っている自分に対して

興味を持つ者も少なくないのだ。

アルスは「え〜とですね……」と懐からメモを取り出して確認しつつ答える。

「今日は一限目に魔導史概論、二限目に魔導操作論、四限と五限が解析魔導論ですね」

「……何言ってるかさっぱり分かんねえ」

「あはは。そりやお前は魔導使えないもんな。なあアルス、教材つてどんなのなんだ？」

「教材、ですか……？」

アルスを中心に団員らがワイワイと喋っている。

その気安さの中で、アルスは鞆の中から今日使う教材を取り出すと、この団員（記憶が正

しければ魔導を使える人の筈だ）に手渡す。

「は〜い、おまちどうさま」

「あ。どうも……」

ちょうどそんな時、レナが出来上がった朝食を持って来てくれた。自分達の様子を優しく見守る彼女からそのトレイを受け取ると、

アルスはカウンターの方

に戻っていくその背に小さく頭を下げてから早速朝食を摂り始める。「うーん。やっぱり学院の専門書は違うなあ。改めて奥深いって思う

よ

「学院というか一応市販なんですけど……。でも魔導、使えるんですよ？ 読んだ事ないん

ですか？」

「ないって訳じゃないがな。俺の場合、学校で体系立って学んだってクチじゃねえからさ。」

「そもそもアカデミーに入って基礎基本からみっちり学ぶ連中自体、限られてくるんだよな」

「……そう、ですね」

もきゅとパンを齧って咀嚼し、小さく首肯。

確かに魔導を教わる、その一点に関して言えば必ずしもアカデミーのような公の機関に通

わなければならぬという事はない。むしろ学院自体が各地に数があるとはいえ、総じて狭

き門なのだ。彼の言うように、半ば独学（ないし他の魔導師に教えを請う）で修得する事も珍しくはないのだろう。

実際、自分もアカデミーに入る前はリュカという在野の師に就いて学んでいた一人だったのだから。気持ち少し速めに朝食を口にしていきながら、アルスはぼんやりと思う。

自分はそんな狭き門をくぐった。他の受験生の不合格を足場にして、学院生という今の身分を得たのだ。

だからこそ“中途半端な学び”は自身にも、彼らにも申し訳が立たない……。

「おゝい、お前ら。あんまりアルスにまわり付くなよ？」

するとカウンター席から、ダンがゆたりとした様子で面々にその声を掛けていた。

言われて「へ〜い」と同じくゆたりとした声色で離れていく団員達。アルスは返された教

材を再び鞆の中に戻すと、黙々と残りの朝食を片付ける。

「……」

そんな彼を、エトナは先刻から何故かじつと不安げな眼差しで見

下ろしていて。

「ごちそうさまでした」

「はい。お粗末さま」

暫くして、朝食を平らげたアルスはトレイに載せた食器をカウンターに返却していた。

洗い物の手を一旦止め、ハロルドがそれを微笑と共に受け取ると、すぐに他の食器と同様に洗い桶の中に投入されていく。

「アルス君」

その時だった。振り向くとカウンターからレナとミアが出てきてこちらを見ていた。

「ほらほら。ミアちゃん」

「……。アルス、これ」

「？ これは……」

そしてミアがレナに促されるようにしておずおずと差し出してきたのは、弁当包み。

アルスは受け取る手が中途に止まり、思わず訊いてしまう。

その後ろでは、ダンがカウンター席に着いたまま無言の怪訝いや驚愕を見せている。

「今日のお昼ご飯。アルス……いつも学食で食べてるみたいだから。たまには、どうか  
なと思って」

「ミアちゃんが作ったんだよ？ ミアちゃんの、手作り弁当」

「……ッ！？ レ、レナ。言っちゃ駄目……」

「何で？ 本当の事じゃない。食べて貰いたいんでしょ？ せっかく朝早くから頑張ったんだもの。手伝った私としても報われて欲しいし」

「……ッ」

どうやらミアが作ってくれた弁当らしい。

何故自分という問いは無粋だと思いつかなかった。仲間の厚意は

ありがたく受け取るもの  
だろう。

「……そうですか。ありがとございます。お昼、楽しみにします  
ね」

「う、うん……」

アルスは弁当包みを受け取ると努めてそう言って笑った。

その言葉にミアは真っ赤になって俯いている。するとエトナがそ  
んなやり取りを宙から見  
下ろしつつ口を挟んでくる。

「アルス？ あんまりもたもたしてると遅れるよ？」

「え。あ、もうこんな時間か……」

何処か拗ねたようなその口調に現実には引き戻され、アルスは懐中  
時計を取り出して時刻を

確認した。確かにそろそろ出た方がいい頃合だ。

「それじゃあ、そろそろ行ってきます。お弁当ありがとございま  
す」

鞆に大事に弁当包みをしまつて、アルスはミアやレナ、団員らに  
挨拶して外に向けて足を  
踏み出した。

行ってらっしゃい。

皆の、団員らの声が重なってアルスを送り出してくれる。

何処か不意に影の差した表情。だがそれも一瞬だった。

次の瞬間にはいつもの穏やかな微笑を見せると、とてとと小走  
りでエトナと共に学院に  
向けて出発していく。

「べ、弁当……？ ミアの、手料理？ お、俺だって食わせて貰っ  
た事、ないのに……」

「はいはい。ご愁傷様」

そんな中でダンだけは、ぶつぶつとそんな事を言いながらぐって  
りとして気落ちしている

ようだった。だがそんな戦友をハロルドはむしろ面白可笑しく見遣っている。

「……」

「あ。ジークさん、おはようございます」

「ああ……おはよう」

すると何時の間にか、ジークが中庭側の戸口に立っていた。

その存在に逸早く気付いたレナがふんわりと笑って挨拶するが、ジークは何処か声色が静

かなようにも見えた。シャワーを浴びてまだ湿っている髪が結ばれずに垂れている。

(……気のせいかな?)

何の気なしに、何時もの調子で。

朝の支度時に戻っていく団員達の中にあつて。

(アルスもエトナも、何だかいつもより元気がなかったような……)

この兄だけは、一抹の違和感と共に一人、そんな怪訝を思う。

時を前後して。イセルナ達はギルドにいた。

何時ものように次の、或いはクランの当面の依頼の目星をつける為の吟味作業。

随行してきた団員らは各々に依頼書(やそのデータベース)に目を通し、冒険者として自

分達の力量などと照らし合わせて思案を重ねる。

その中にはシフォンやリンファも混じっており、窓口で職員や馴染みの同業者らと何やら

話し込んでいる姿も見えた。

「……どうかした、ブルート?」

そして当のイセルナは、ギルドの二階バルコニーの傍にいた。

眼下では柵で守られた吹き抜けが一階の皆の様子を切り取っており、がやがやと荒削りな

からも活気のある様子が見て取れる。

イセルナは、そんな階下にじっと目を遣っている相棒にゆったりと声を掛けていた。

「いや……。少しぼんやりとしていただけだ」

「そう？ 貴方がそんな風にするなんて珍しいわね」

ブルートは手すり部分に乗っかって。

イセルナは手すりに軽く寄り掛かって。

暫し二人は、ゆっくりとした時間の経過の中に身を任せる。

「随分と遠くまで来たものだ」

やがて、ぽつりと先にブルートが口を開く。

「同じ国内じゃない。まあアトス連邦朝自体、世界有数の領土の広さだから仕方ないけど」

「そういう意味じゃない。……気持ち的な距離だ」

言って、イセルナが静かに小首を傾げて自分を見るのを認めて、

ブルートはぽつぽつと続

ける。その眼差しは伶俐だが冷淡ではなく、感慨深さを湛えている。

「始めは、我ら二人だけの旅路だった。しかしダンと出会い、その後シフォン、ハロルド、

リンファと戦友ともが増えていった。何より今では我らは多くの団員を抱えるクランの長にまで

上り詰めた」

「そこまで大層なものじゃないわよ。皆が、力を貸してくれているおかげ」

「……謙虚だな。それが汝の美德でもあるが……」

ブルートはふと身体を起こして手すりの上で半身を返すと、視線をギルドの外 アウルベルツの街並みへと移していた。

建ち並ぶ家屋。その隙間、通りの道から点々とし、時に大きなうねりと化している人々。

遙か遠くの自然まで覆わんとするようなその街の広がり、ブルートは静かに目を細めて

静かにこちる。

「長く生きてきた我だが、汝らヒトの邁進ぶりには驚かされるばかりだ。精霊われらではもっと緩慢に過ごすであろう時間を世界の開拓に注ぎ込み、日々進歩しようとしている。」

我らには中々真似のできぬ精神だ」

「……それは、ヒトに対する当てつけなのかしら？」

「いや。個人的には本当にそう思っているさ。だが実際はそういう反発も多いのだろう？」

「もしかして……この前バラクと飲んだ時の話を言っているの？」

「……。ああ」

ややあつてイセルナも手すりに預けていた身を起こし、ブルートと共に背後の窓際へと移

動した。二人の眼下に広がるアウルベルツの景色　ヒトによる開拓という営みの一部。

再度そんな街並みを見つめつつ、ブルートは言う。

「……。精霊達きょうほうがざわついている」

「えっ？」

それは只事ではない。魔導を扱う者の一人として、イセルナもその事はよく分かっている

つもりだった。すぐに精神を集中させ、精霊達の気配を、声を探る。

「あまり慌てずとも良い。我ですら小規模に聞こえる程度だ。汝であつても、ヒトの身では

中々気付けぬだろう」

「……そう」

慰みのつもりなのか。ブルートは街を見下ろしたままそう言う。

静かに呟き、一度彼を横目で見遣つてから再びその視線に合わせるイセルナ。

「……我個人の意見では、世界を開拓すること自体に異を唱える気はない。むしろ心配なの



は、ヒト同士がその是非を巡って争いを拡げてしまふ事だ。ヒトは自分達の思っている以上に世界に影響を及ぼす。その自覚に乏しいことの方が我としては心配だ。……尤も、こんな考え方も汝らと旅路を共にしてきて感化されてしまっている故なのかもしれないがな」

ブルートは珍しく笑っているように見えた。

しかしその言葉の文言通りに、彼の纏う雰囲気は心配の色を濃くしている。

「……精霊達がざわついているのも、何かその争いがあるからじゃないかってこと？」

「或いは、起きようとしているからざわめいているか……だな」

「？ それは……」

一体どういう？

何処か含んだその言い方に、今度こそイセルナは眉根を上げて彼に向き直ろうとする。

「あ、いたいた。団長」

「依頼書いくつも見繕ってきました。目通しお願いします」

だがちようどそんな時、階下から団員らが駆け寄ってくるのが見えた。

目の前までやって来て差し出される、目星をつけた複数枚の依頼書。

「……ええ。分かったわ」

結局、その意図を聞き出す間を逃してしまいながら。

イセルナは団長としての自分に意識を切り替えて、差し出されたそれらを受け取った。

## 5 - (2) アルスの憂鬱

「このように、被造人オートマタと機人キジンは共に人に奉仕する場面が多いですが、その成り立ちは大きく違っているわけです」

すり鉢状の講義室に、若手の教員の丁寧な声色がマイクを通して響く。

二時限目・魔導操作論の講義だった。大雑把に要約するならば魔導における各種制御理論を扱うものである。

今日の講義テーマは被造人オートマタ 魔導によって創られた使い魔についてだ。

「見た目が生物的还是機械的かという点が最も目立つ所ですが、その歴史や本質が大きく違うのも分かりましたね？ 端的に言うならばオートマタは魔導によって創り出された生命体であり、キジンは機巧技術が生んだ生命体と表現すると分かり易いでしょう」

ここでも、両者の成り立ちは魔導と機巧技術という二大技術体系から遡る事ができる。

魔導の歴史は少なくとも人の文明が確認されている最古代から続いており、オートマタもその頃から徐々に術者（創造者）に奉仕する使い魔・従者であったようだ。

これに対し、キジン達は少し成り立ちが違っている。

第一にその誕生は「大帝国」時代の前後 “魔導開放” よりも更に数千年の後である。

そして何より金属生命体という特性故、発明主である帝国によって「戦争兵器」として長

らく戦いに従事させられてきた歴史を持っている。

だが……彼らもオートマタと同じく心を、自我を持つ者が少なくなかった。

帝国が圧政に反旗を翻した人々との戦いに末に滅びた後に、世界の復興の最前線 時に

人の身では危険な場所で積極的に奮闘したのもそういった兵器としての自分達という過去への贖罪故だったのかもしれない。

「創られたから。それは彼らにとっても大きな存在理由なのです。オートマタが術者の従者として侍るのも、キジン達が殺してきた筈の人々に報いようと団結し、今日世界の

一員として認められたのも、その存在を許されたいが為ではないかと思いませんか？ 勿論

個々の自我が何を思っているかの差異はあります。そういった忠義だけでなく、金銭的な契約関係という打算もあるかもしれません」

長々と。多くの板書を残した黒板を背中にその教師は続けた。半円状に広がる席に埋まっている学生達をざっと眺めながら。

「……ですが、皆さんには是非とも覚えておいて欲しい。彼らが『たとえ使い魔であっても

彼らには私達と同じく心がある』のです。我々魔導師は人的要素に依って立って術を行使す

存在です。くれぐれも、自身に奢る事なきように。精霊と同様、貴方達がオートマタと触

れ合い、或いは自身で創り出す時、決して一つの自我と向き合うという責任感を安易に捉えないことです。……よろしいですね？」

はい。生徒達の重なった返事が響いた。

教師はよろしいと満足気に深く頷いて微笑む。

すると、そのタイミングに合わせたかのように、講義室に校舎内にチャイムが鳴り響き始めた。二時限目終了を告げる合図だった。教師は教卓の上の教材・資料を引き寄せてまとめながら言う。

「……それでは今回はここまでです。次回からは、具体的な構築式について勉強しましょう」

そして彼は立ち去って行った。ガラリと扉を開けて姿が見えなくなるまでとざわつと緊張の糸が緩み、生徒達はリラックスした様子を見せ始める。

「……」

そんな中で、アルスはぼうつと座ったままだった。

目の前に広げられたノート。そこにはしっかりと板書の内容が丁寧に書き留められている。

それでも、アルス当人は何処か上の空のようだった。

(自我と向き合う……責任感)

小さく息を吐く。それは半ばため息に近かった。

やはり……胸の内がざわざわと動揺し続けている。少しの言葉であつても、はたとあの時に

に放たれた“条件”と重なって思えてしまう気がしてならなかった。

それは間違いなく 逡巡だった。

気持ちは、決まっている。だけどそれを言い出せば……目指すものが遠くに失われてしまうのではなにかという懸念が過ぎり、決断できてないでいた。

(アルス……)

続々と講義室を出て行く生徒らの中で、まだ座って思案顔なままのアルス。

宙に漂うエトナはそんな彼に掛ける言葉も見つけられず、ただ心苦しく見るしかない。

「お……い。アルス……！」

ちょうど、そんな時だった。

エトナが聞こえてきた声にハッと我に返り、視線を移してみるとそこ 眼下の講義室

の入口には見慣れた人影が二つ。

「アルス。アルスってば」

「……えっ？」

「ほらほら。迎えが来てるよ？」

「へ？ むか、え……？」

それでもぼうつとしていた相棒を揺すって気付かせる。エトナは努めて、彼のその悶々とした思考を一時でもいいから遠ざけたかった。

アルスがようやく我に返って、エトナが再び向けた視線に自身もそれに従う。

「やあ。大丈夫かな、アルス君？」

「やつほぐ。飯にしようぜ」

そこには開きつ放しの扉に背を預けて軽く手を上げてくるルイスと、屈託なく笑いながら

そう誘いの言葉を投げて寄越してくるフィデロの姿があった。

そして講義の後の昼休み。

アルスは顔を出してくれたルイス・フィデロの二人と共に食堂へやって来ていた。

予めテーブル席を確保し、二人が献立を選んで精算してくるのを待っていた。

「……」

食堂内を見渡せば、先輩や同学年も皆が昼休みという束の間の休息を楽しんでいるように見えた。入学から一月と経っていないにも関わらず、既に方々で新たなグループが形成されているようだ。

食事を共にし、談笑を交わす彼ら。

そんな姿をぼんやりと眺めているとアルスはつい思ってしまう。彼らは、どうして魔導を学ぼうと思ったのだろうか……。

「よっ。何ぼくっとしてんだ？」

「お待たせ。食べよっか」

だがそうした思考は、ややあつて戻ってきた二人によって一旦意識の隅に追いやられた。

ガッツリな肉食系メニューとサラダやパン類中心の草食系メニュー。

互いの性格の違いを体現したかのような献立をトレイに載せた二人は、そうアルスに声を掛けてきつつ、そのまま対面するように席に着いた。

アルスも、鞆の中から今朝受け取った弁当包みを取り出し、そつとテーブルの上に置く。

「にしても……何でまた今日は弁当なわけ？」

「さあ。何でだろ……？ ミアさ　下宿先の人が朝起きたら作ってくれていたから」

「ふうん……。どれ、拝見してもいいかな？」

「ど、どうぞ」

ルイスとフィデロがやけに興味深そうに見守ってくる中、アルスは弁当を開けた。

そこには詰められた俵型のおにぎりが半分、残りが種々のおかずで占められた献立の姿。

二人の「おおっ」と何故か嬉しそうな声。アルスも（失礼ながら）予想していたものより

もずっと繊細に作られたそれらを見て暫し言葉が出ずにいた。

兄がアマゾネス　東方の民の血を受けているから自分もそうだろうと、わざわざ米料理

を用意してくれたのだろうか？

血筋はそうでも、生まれも育ちもサンフェルノ村なアルスには嬉

しいやら驚いたやらだ。

「これ……本気ガチだよな」

「下宿先の人だっけ？ これを作ったのってもしかして、女の人じゃない？」

「うん、そうけど……。兄さんの冒険者仲間で、猫の獣人さん」

出会ってから今日までの語らいの中で、二人には自分や兄の事、下宿先の冒険者クランの

事もある程度話してある。

「ほほう？ 年上のお姉さんかあ。華奢な見た目しておいて……結構やるなあ。お前も」

「？ 何のこと？」

「はは。何ってそりゃあ」

「……フィデロ」

するとやっぱり何故か面白そうに笑ったフィデロを、ルイスがぴしやりと一言そう呼ぶだ

けで止めていた。数拍、二人の間に視線が交わり、妙な硬直時間が出来る。

「あまりからかわないでやりなよ。多分、アルス君は自覚無いだろうし」

「……。みたいだな」

「だよねえ。罪深いよね、アルスは」

「えっ……？ 何……？」

二人は何事かを悟ったように居住いを正し、一足先に昼食に手をつけ始めた。

頭に疑問符を浮かべてアルスはきょとんとしていたが、傍らで浮かんでいたエトナもまた

何かを察したように、そして嘆息をつくように呟いている。

それから暫くは三人（エトナを含めて四人）での会食となった。

巷の話題から、どの講義の教師が分かり易いやら面白いやら。

会話のネタは主に  というよりほぼ大方がフィデロから発せら

れ、アルスやエトナが反応を見せて二言三言を返すと、そこにルイスが冷静な分析や意見を挟むという構図が続く。

しかし、アルス達はアカデミーの生徒だ。

そんな話題の中に学業のそれが現れるのは、決して珍しい事ではなかったのである。

「……そういや。アルスって所属ラボは決めたのか？」

言い出したのは、同じくフィデロだった。

もぐもぐと骨付き肉を齧りながら、少なくとも本人は何の気もなしに振った話題であったのだろう。

「う、ううん。まだだよ……」

だが、問われた対するアルスは明らかに表情を暗くしていた。

齧りかけのおにぎりを持つ手を止めたまま、努めて微笑む表情がぎこちない。

フィデロは「そっかぁ」と気付いていなかったようだったが、一方のルイスはアルスと、

そして同じく心苦しそうに顔をしかめているエトナを一瞥して、無言のままに何かがあると悟ったらしい。

「俺は、前言った通り魔導工学だ。マグダレン先生のラボにしたんだ。もう事務局に届出も出したんだぜ」

「……。僕は」

「ま、フィデロは元々何をしたいかはっきりしていたからね。僕だってまださ。焦ることはないよ。学期の途中で変更は効くといっても、僕らの魔導師人生を大きく左右する可能性の高い選択だからね。じっくり選んで損は無いさ。まだ一次締切りまで日もあるんだし」



「うん……」

もきゅつと。アルスはおにぎりの残りを口に運んでいた。

「むしろフィデロは早く決め過ぎてる感があるよね」

「悪いかよ？ 魔導具職人まくとくしがはつきりしているって言ったのはお前じゃんか」

「うん。でも、マグダレン先生って結構スパルタだって聞いたんだけど。大丈夫？」

「……マジで？」

「ああ。まあ、頑張りなよ」

友からそんな事実を聞かされ、サーツと顔色が青くなるフィデロ。そんな彼の肩をポンと叩きルイスは微笑を浮かべていた。いや静かに面白がっていた。

「聞いてねえよ！？」 いや、でもあのスキンヘッドな風貌だったしなあ……」

うんうんと唸りつつもしかし食事の手を止めないフィデロと、そんな彼をやはり弄って楽しんでるようなルイス。

だがアルスは、そんな話題の逸れに内心安堵していた。

あのままでは何処に決めようとしていたか、話さなくてはならなくなっただかもしれない。

迷っている自分を知られてしまったかもしれない。

怖かった。せつかくこの学院でできた“友人すら”も、自分の突き通す夢の為に失ってし

まうのではないか？ そんな疑心が胸の奥底から湧いてきて怖かった。

「……」

今はまだ、誰かに話せる状態じゃない……。

アルスはすっかり味を感じる余裕を失って、ぎこちなく口の中へ昼食を放り込んでいく。

「それで、本当に解放するんだな？」

戸惑い。恐れ。疑問。

そうした負の感情は往々にして凝縮し、連鎖する。

「アア。ソレガ我々ノ目的ダカラナ」

青き鳥が訝しみ、若き魔導師の卵が悩むその街の片隅、人目に付かないとある暗がりの中

で、彼らは剣呑なる契約を結ぼうとしていた。

一方は、まだ歳若い青年らしき人影。

もう一方は、暗がりには溶けるような黒衣に身を包んだ集団だった。

「……分かった。だがお前達も、必ず守れ」

「分カツテイル」

「成立ダナ。デハ早速向カツテ貰オウ」

「……ああ」

信頼のなき牽制の眼差し。そのやり取りを残して。

青年は首に巻いたロングスカーフを翻しながら、その暗がりの中を後にしたのだった。

散発的な剣戟の音が、街の一角で響いていた。

ジークはリンファ、そして数名の団員らと共に大通りに居を構え、とある武器屋へとやって

て来ていた。厳密に言えば、その裏手にある空き地だった。

雑草を大まかに刈り取ったそのスペースには、店の軒下を中心に在庫らしき武具の詰まった

コンテナ箱が積み重ねられ、その上から厚手の麻布が被されている。

「じゃあ、次はこの分をお願いします」

今回ジーク達が受けたのは、開発中の武具サンプルの試運用。

市民も護身用にと武器を買ってゆく事がないわけではないが、やはり主要な顧客はジーク

らのように戦いを生業とする冒険者の類、或いは守備隊などの職業兵士で占められている。

だからこそ、そんな層に属するジーク達に実際に使い心地などを確かめて貰いたい。それがこの類の依頼が要請する内容であった。

少々気安めな「ういっす」という重なる返事と共に。

店の従業員に促され、ジーク達はこの日何箱目になるかの武具を受け取っていた。

剣を、槍を、斧を、弓を。

団員らは自分の得意とする得物を選び取ると、素振りをしてみたり軽く組み稽古をとって

みたりしてこれら武具の感触を確認し始める。

「うーん。ちよつと耐久が弱いかなあ。野盗ぐらいならまだしも、魔獣みたいな硬い相手だと刀身がもたないような」

「こっちは逆に重量を詰め過ぎだね。相応の膂力があれば何ともな

いんだろうけど、これ量

産型でしょ？ ニーズと品質が噛み合っていない感じがするねえ」

そしていくら平の団員とはいえ、彼らはやはり冒険者<sup>ブコ</sup>だった。

何度か実践的に扱ってみて、率直な意見を述べる。

中には辛口の評価も少なくなかったのだが、そもそもこれは冒険者の眼を欲しての依頼に

他ならない。無闇に反発するのは正直あまり意味を成さない。

「ふむふむ……。なるほど……」

頼んだ側の店の人間らはいくまで謙虚にそれらの指摘を受け止め、メモを走らせていた。

「ふっ！」

そんな中で、ジークもまた両手に一本ずつ、二刀流の形で剣を振るってみていた。

普段使っている愛刀らとは全く感触の違う重量感。もつと言えば……軽過ぎると思った。

それだけ日頃の鍛錬が現れていると言えるのだが、力を追い求める事に関してストイック

なジークの頭の中にはそんな思考はなかった。

むしろ自身の愛刀達に“助けられてきた”事実を改めて知らされたようで、まだまだ修行

が足りないと思っていた。

水平に薙ぎ払ってからもう片方で二撃目を。

すぐさま手を返して切り上げて、軽く跳躍して身体をぐるりと捻りながら二剣を回転させ

ると、着地の瞬間に突きを放つ。

「うん。中々様になってきたものだ」

すると、側方からゆたりとリンファが近付いて声を掛けてきた。

その手にはジークのそれよりも更に大きなサンプルの長剣が一本。

「どうだい？ 少し手合わせしてみないか？」

その言葉に、他の団員らが一斉に二人に視線を遣っていた。

「おお？ リンさんとジークが手合わせか？」

「久しぶりじゃねえか？ 二人が直接剣を交えるのって」  
それまでのプロの戦士としての眼は何処に行ったのやら。

団員らはクランの実力者同士の手合わせと聞く否や、わらわらと二人の周りに集まって早くも野次馬よろしく眺め始める。

「……見世物じゃねえっての。まあいいや。じゃあお言葉に甘えて……お願いします」

「ああ。では、いざ尋常に」

ジークはそんな皆の変化ぶりに渋い顔をしたが、彼女の誘いを断わる気はなかった。

自ずと互いに間合いを取って立ち、二刀と長剣の剣士二人が向かい合う。

はたと周囲の喧騒が遠退き、辺りが静かな緊張に包まれていく。

「勝負！」

そして、ジークがタイミングを図って放ったその一言が合図だった。

ほぼ同時に地面を蹴った二人。

先に剣を振ったのはジークだった。次の瞬間、ぶつかる金属音が二撃、三撃と重なる。

初撃のすぐ後にもう片方の斬撃が飛んだのだが、リンファはその連撃を予め予想していた

かのようにわざと後出しにした長剣の刀身を軽く一振りするだけで、それらを軽々と受け流していた。

「ふむ。相変わらず……真っ直ぐ過ぎる」

受け流し、僅かに弾かれ開いた互いの間。

その隙にねじ込むように、リンファはフツと笑いながら身を捻り強烈な薙ぎを叩き込んで

くる。ジークは咄嗟に二剣で防御するが、威力に押し負け更に弾か

れていた。

「こん、のお……！」

だが押し出される圧力を両脚で踏ん張って、再び地面を蹴る。射出されるような速さ。練氣だった。

初撃とはパワーもスピードも段違いになったその攻撃。だがリンファも同じくマナを込め

て、今度はその二剣同時の一撃を真正面から受け止めて辺りの空気を震わせる。

『おお……』

団員らは、そして依頼主である店の人間達も、息を呑んでその模様を見守っていた。

目の前では目まぐるしく何度も攻守を入れ替え、ジークとリンファが幾度となく切り結んでいる。

互いに剣戟を放っては防がれ、かわされ、いなされる。それでも間髪を入れず次の一手を打ってゆく。まるで複雑なアクロバットを見ているようだった。

そんな目で追うのもやつとの剣士同士の実戦さながらの手合わせを、一同は視線を行った

り来たりさせながらハラハラと見守る。

状況が動いたのは、そんな打ち合いがどれだけ続いた頃だっただろうか。

何度目ともなく間合いを取り直した二人。構えられる二剣と長剣。ジークは若干肩で息をし始めていたが、対するリンファはまだ悠然としていた。

剣戟は長く続いていた。ジークもリンファも、ただ無闇に打ち合っただけは埒が明かない事にはとっくに気が付いていた。

そろそろ、決め手を。

『……』

二人が同時にそう思い、再び地面を蹴ったのは何も偶然ではなかったのだろう。

それまで以上に凝縮され、集中される互いの錬氣の剣。

先ずリンファが長剣のリーチで先手を打っていた。中段からの、振り下ろし。

だがジークはその一撃を左手の刀身で押さえつけないし、身を右に跳ばしていた。

いなした剣ともう片方で彼女の剣を捉え直し、弾き出そうとする。同時に飛ばした身を捻

つて身体ごと回転し、中空からの二剣を浴びせようとする。

しかしリンファも弾かれたままでは終わらなかった。

弾かれようとした瞬間、すぐにジークの動きを察知し、逆にその弾かれた反動を利用して

自身もまた身を反転させていたのだ。

必然二人は中空で回転しながら、互いの斬撃を相手に放たんとする格好になる。

息を呑む団員、店の者達。だが……。

「なっ……!？」 「ッ!？」

その互いの渾身の一撃も、結果的には共に失敗に終わっていた。

振り下ろされた二剣と斜め下からの斬り上げ。

その両者がぶつかった瞬間、お互いの剣がその限界を超えて砕けてしまったのである。

二人は少なからず驚きながら、距離を置いて着地していた。サツとそれぞれの握っていた

得物の状況を確認する。

ジークの二剣は共に刀身の途中からボキリと折れて砕けて。

リンファの長剣は刀身全体に渡って大きく刃こぼれを起こしていた。

「……引き、分け？」

暫しの間を空けて、団員の一人がそうポツリと言った。

そうだ。決着はつかなかった。

ややあつてその言葉に、他の団員達も店の者達も、驚きのような感嘆のような諸々が入り混じった息と声色を漏らし始める。

「……やれやれ。これは参ったね」

リンファは笑っていた。

すっかり使い物にならなくなってしまった長剣に目を落とし、小さく一息をつく。

「大したものだ。腕を上げたね、ジーク」

「……何言ってるんすか。俺の負けですよ。剣もこっちの方が明らかに壊れてるし、何よりリンさんは本気の半分も出してないじゃないですか」

だが一方でジークは不満げだった。

それは剣の破損具合から見た負けらしい事へのそれではなく、剣を交える中で彼女が自身の

の本当の力を出し切らずに戦っていた事に対する悔しさに類する感情だった。

「……バれていたか。でも、ジークは今でも充分過ぎるくらいの強さだと私は思うよ?」

「世辞なんて、要らないです……」

「……。そうか」

リンファにとっては目を掛けている後輩を痛めつける趣味などないからという本音だった

のだが、それでも彼はまだまだストイックに強さを求めようとしているらしい。

(やれやれ……。力に拘り過ぎている根っこは、中々治ってくれそうにないな……)

内心でそんな事を思い、密かにため息。

若干むくれ顔になってしまったこの同族の青年に、リンファは特段の反論はせず、ただ苦



笑の中にも微笑ましさを漏らす。

「……さて。見世物はこの辺りでいいだろう。皆、少し遅くなったが昼食にしようか」

『ういゝッス!』

そして彼女はジークや団員ら面々に振り返ると、天頂を少し過ぎた陽を一度見上げてから  
そう皆に提案した。

「おおゝつ。美味そうじゃん」

「確か今日はレナちゃんのお手製だったっけ？」

「くゝつ、今日こつちに回っておいてよかったあ……」

一度服の汚れを軽く払い落とし、壊れてしまった剣の処分を店のスタッフに託してから、

ジーク達は軒下の日陰に集まって遅まきの昼休みを取ることとなった。

「……大袈裟な。ハロルドさんやレナの飯なら普段から食ってるだろ？」

「バツカ。そーいう事じゃねえよ」

「お前はいいよお前は。普段からレナちゃんとも仲いいし、ミアちやんとだって……」

「? そりゃあ克蘭の仲間だし。皆も普通に話ぐらいするだろ」

面々の前に広げられたのはサンドウィッチの詰め合わせ。今朝レナが出発前のジーク達に

と手渡してくれたバスケットだった。

種々の具材をたっぷり使ったポリユームのある見た目。

身体が資本の自分達をしっかりと気遣ってくれている証だった。ある者は味に期待し、また

ある者は女の子の手料理という事実に感涙しかける。

だがジークだけは淡々としたもので、そんな仲間達に疑問符を浮かべつつ、真っ先に一つ

手に取り頬張り出す。

「だ〜か〜ら。そういう意味じゃねえって」

「あ〜もう止めとけ。コイツ、剣術馬鹿だから自覚ねえんだよ……」

「……何だか気になる言い方だな、おい。まあいいけど……」

そしてそんなジークの反応に、嫉妬やら嘆息やらの声・表情を漏らす面々。

いまいちピンと来ず、何だか馬鹿にされているような気もしたが、一々気にしてはこ

のむさ苦しい集団の中では埒が明かない事も分かっている。

ジークは少々喧しい仲間達の雑談の中に身を置いて、暫し皆と共に一つまた一つとサンドウィッチを手にとって胃袋に放り込んでいった。

(ん……。美味しい)

野菜にマスタードと卵、薄焼きの肉など手が込んでいる。

流石に日々、ハロルドさんと一緒に皆の胃袋を預かっているだけの事はある。

丁寧な味付けに舌鼓を打ちながら、ジークはぼんやりとカウンタ―の中で笑う彼女の姿を

記憶の中から思い起こしていた。

「……うむ。美味い」

ふと視線を映してみる。

当然ながら、この輪の中にはリンファもいた。

女性なのだがむしろ凜としてカツコイイという表現が似合う彼女。しかしこうして静かにちみちみとパンを齧っている姿は……何だか不思議な感じがする。

「うん？ どうした？」

「あ、いえ……。リンさんはパンで大丈夫なんスか？ 米料理の方がよかつたんじゃ……」

「はは。気遣いありがとう。大丈夫だ。確かに私は東方の出だが、北方こうちに移ってからそれな

りに長いしね。まあ確かにパンより白米の方が好きだが……」  
フツと笑つてもぐもぐと咀嚼をするリンファ。

思えば、彼女は自分が克蘭に来て以来ずっと親切にしてくれているような気がする。

元々面倒見の良い性格という面もあるが、おそらくは女傑族としての仲間意識が働いている為なのだろう。

ジークは一度茶を啜って口の中のパンを流し込んでから言う。

「それにしても良かったんですかね？ サンプル品といっても武器壊しちゃいましたけど」

「どうかな。でも壊してしまったものは仕方ないさ。それに……もしあのまま耐久性を見過

ごされて店頭に出てしまっていたら、実戦の最中で誰かの命を脅かしていたかもしれない。

その事を思えば、今壊れてよかったとも言える」

「……そうツスね」

少し身に詰まされる気がした。

自分はただあの時、彼女に一矢報いる事に集中していたが、当の彼女はあくまでこれが依頼

頼の中の“日常”である事を忘れていなかったのである。

(やっぱ、まだまだ俺じゃリンさん達には届かないんだなあ……) 性分とはいえ、ジークは内心手合わせの中でそんな狭い見方だった自分を恥じていた。

「そっぴやジーク。剣といえはさ」

だがそうしていると、ふと彼女とのやり取りを耳に挟んでいたのか、団員の一人が口の中

の薄焼き肉のサンドウィッチを飲み込んでから話しかけて来た。

「お前の剣……いや刀って他じゃあまり見ないよな」

「あ。それは俺も思ってた」

「俺も。そっぴやえはその関係の話、あんまり聞いた事ない気がする

なあ」

「うーん？ 別にそんな大したもんじゃねえぞ？」

言われて、ジークは傍らに置いていたその当の一品 いや六刀に手を伸ばしながらあまり気が進まないといった感じで答えていた。

「……」

ピクリと。リンファが無言のままジーク達を見遣っていたが、面々は気付かない。

「正直俺もこの刀が何処から来たとかは知らねえんだよ。まだ村で修行してた時に母さんが

よかった使ってくれて言ってくれた物だからさ」

「ジークの、お袋さんが？」

「え？ お前のカーチャンって俺らと同業者なのか？」

「違えよ。母さんは村で診療所やってる魔導医だ。刀自体は父さんが昔使ってた物らしい。」

母さんからはそう聞いている」

「……そっか」

淡淡としたジークの返答。

だが団員らは思わず口籠り、気まずく押し黙ってしまった。

アルスがミアらに語ったほどではないにせよ、彼らもまたジークが魔獣の被害によって父

を失った過去については断片的に聞いていたからだ。

「すまねえ……。親父さんの形見だったとはな」

「……気にすんなって。魔獣にどうこうされたってのは別に珍しい話じゃねえだろ？」

言葉ではあつさりと呼容しているかのように見えたが、その声色はやはり少なからず沈んでしまっていたように思えた。

拙い事を聞いてしまった……。

団員らはそれぞれにサンドウィッチを齧りながらも、互いに目を

遣り、バツが悪そうに黙る込んでしまう。

「……だが、私達は前に進む他ないんだ。それが喪われた者達への生き残った者なりの供養でもある。違うか？」

そんな皆に、奮起するように静かに声を掛けたのはそれまで黙っていたリンファだった。

数秒ぼかんとする面々。だがその言葉の光に触れ、ややあつて皆は、そしてジークもココリと首肯を示していた。

頷き返し、僅かに口元に笑みを浮かべるリンファ。

「さあ。食べて一服したら昼間の続きだ。まだ試運用すべきサンプルは残っているぞ？」

「……うッス！！」

そして元気を取り戻して応える仲間達を見渡して、今度こそ彼女は微笑む。

その後、昼の休憩を挟んでジーク達は残りのサンプル試運用を消化していった。

しかし武器屋一軒分丸々を十数人でこなしたという事もあり、全ての試運用が終わり一同が帰宅の路に就いたのは、日も傾き街が少しずつ暗さの中に埋まっていく時分だった。

「ん〜……結構、地味に疲れたな」

「まあいいんじゃない？ こういう類の依頼でなきゃ、便利屋畑で思う存分武器を振るえないだろしさ」

「だよなあ。俺ジークとリンさんの手合わせ見てて、もっと鍛錬しないと思って思ったもん」

街の中心部からは離れた、河川敷沿いの道。

リンファを先頭に、ジーク達団員らはわらわらとして帰路を行っていた。

昼間は人々の営みで賑わっていた街も、この時間になると随分と落ち着きを得て徐々に夜の静寂に備えているかのようだ。

緩んだ集団の空気。

だが、それらを一瞬怪訝に変えたのは……他ならぬリンファだった。

「皆。すまないが先に帰っておいてくれないか？」

「へ？ 何ですか？」

「……私はジークと、アルス君を迎えに行ってから帰るよ。そんなに大人数で向かうものでもないだろう？」

「まあ、そうツスけど」

団員らは、少々迷っていた。いきなりの事だったからなのだろう。

「……じゃあ俺達は先に戻ってますね」

「大丈夫でしょうけど、お気をつけて」

それでも相手は克蘭のリーダー格の一人と自分達の団員の斬り込み役だ。

そう並の盗人などでは手負いにさせる事もすらもできまい。少し間を置いたものの、彼らは結局承諾し、一足先に集団を作って去っていった。

その後ろ姿を、リンファは静かな笑みと共に手を振って見送っている。

（迎え？ 俺は聞いてねえぞ？）

だが一人残ったジークは怪訝で眉根を上げていた。

入学式の前後ならまだしも、今はもうあいつは一人（正確にはエトナも一緒だが）で登下

校をしている。それを今日突然自分の事前通知もなく迎えに行くのは不自然だ。

何よりも……。この道は学院とは全然違う方向にある。

(リンさん、一体何を考えてるんだ……。?)  
深まった怪訝。

ジークは、こちらへ身を動かしかけた彼女に問い詰めようとしたのだが……。

「さて。そろそろ隠れんぼは終わりにしないか？」

振り返る事なく、肩越しに後ろをジークの方を見遣りながらリンファが放ったその一言は彼をその場で硬直させることになった。

「リン、さん……。？」

戸惑い。だが少なくともその言葉は自分に向けられているものではない。

ジークは彼女がじっと向けている視線の先 自身の背後にぽつねんと点在する並木道にゆっくりと目を遣ってみる。

「こつちに来てからずっと私達を見ていたようだが、何が目的だい？」

リンファは薄暗い闇の中に問うた。

しかし、その相手とやらも様子を窺っているのか、返事はなかった。

「……そこにいるのは分かっている。ジーク達はごまかせていたようだが、そんなに綺麗にマナを抑え込んでいては逆に不自然だぞ？」

「えっ？ それって」

「いや、錬気法じゃない。あれはあくまでマナを配分し直す為の制御術だ。……少なくとも

昼間からずっと私達をつけている君は、錬気以外にも相応のマナの制御術を心得ている人物という事になる。違うかな？」

言っと、リンファはスッと目を細めた。

静かに手が腰に下がった長太刀に添えられる。

落ちつつある陽の光が、僅かに抜いた刀をキラリと音もなく一瞬光らせた。

「……出てこないつもりか。なら、その並木ごと君を斬り伏せてしまおうが、いいのかい？」

彼女の眼は本気だった。

ザワツと込めてみせた練氣のManaが身体中から滾り始める。

(リンさん……？ な、何て殺気だよ……)

いつも落ち着いている筈の彼女が、静かにだが間違いなく殺気を込めて怒っている……。

ジークは自分達を尾行してきた誰かよりも、傍らのこの同族の先輩女剣士の底力の方がよほど恐ろしく思えた。

気休めかもしれないが、ジークも遅れてようやく身構え、腰の刀達を抜き放てるように両手を添え握る。

「……」

すると、ようやく相手が動きを見せた。

ガサリと音がする。二人の背後にあつた並木の一つから、薄闇に紛れて人影が姿を現す。

「お前は……？」

「訊いても意味はないと思うぞ。こんな状況で正直に答えるとは思えない」

二人は身構えた。ジークは問うが、当人の反応よりも早くリンフアはそれを遮り、既に太

刀を半ば抜きかけようとしている状態だった。

無言のままの人影。

だがやがて空の星明りの光がゆっくりと動くと、その姿が露わになる。

「……」



そこに立っていたのは。  
長いスカーフを首に巻いた、一人の金髪の青年だった。

彼と初めて出会ったのは、今から五年ほど前のことだ。

その日も、私は『蒼染の鳥』の一角でゆったりと時を過ごしていた。

クランの 放浪の末に腰を降ろす事のできたこの地の仲間達が、ギルドで明日の糧に目

星をつけて戻ってくるのを他の皆と待っていた。

「いででっ！ は、離せ。離しやがれっ！」

「あゝもう、やかましい！ ったく…… ホントに尖ったガキだなあ  
お前」

だがあの日は…… もっと別なものまでが付いて来ていた。

戻って来たイセルナやダン、そしてシフォン達。

だがいつもと違っていたのは、クランの副団長たるダンが一人の見知らぬ少年を片手に摘

まんだまま、彼を手荷物よろしく連れていた点にあった。

「その子は……？」

「冒険者だよ。ギルドで見かけたからね」

「で、他の連中と言い争いになって喧嘩になってたんだ。それを俺達で止めて、とりあえず

場を収めたんだが、仕方ないんで連れてきた」

「肩入れした分ね。あのまま険悪な空気の中に放置しておく訳にも  
いかなかったし……」

「ま、大方成人の儀を済ませてすぐに飛び出してきた新米<sup>ルーキー</sup>ってところ  
だろ」

「……そうか」

確かにこの少年を見る限り、年格好は十五、六。ダンやシフォン  
の言う通り、彼は冒険者

になって間もない新参者なのだろう。

髪や瞳も自分と同じ黒色。女傑族アマゾンネスだった。

しかし、元より自分達は世間一般には荒くれ者の集まりと見なされている。

多少の争いなどこの業界では日常茶飯事なのだが……。

「でもね？ ちょっとこの子、変わった物を持つたのよ」

そんな私の内心を見透かしたかのように言っただのは、イセルナだった。

ダンに摘ままれ宙ぶらりんになり、じたばたと喚いているこの少年を静かに一瞥してから

そつと、先程からその手に抱えていた布包みを解いてみせる。

それは 刀だった。

この歳の少年が持つには如何せん大きく不相応に思える三本の太刀と、三本の小刀。

彼はそんな自分の得物……所有物を取り上げられている事にも不満であつたらしい。

「くそつ、離せよ！ 返せよつ、それは俺の刀だ！」

「だつっ！ うるせえな。ちつたあ大人しくしてるい。何も取つて食いやしねえよ」

「返せ！ 返せよおつー！」

イセルナが私にこの六本を見せた瞬間、より一層離せと喚いていた。

(これは、まさか……。いや、でも何故こんな少年が……?)

しかしそんな少年の喚く声も、再び拳骨制裁を下すダンの声も、この時の私にはずっと意

識の遠くに聞こえていたような気がする。

イセルナから受け取り、じっくりと検める。他の皆もそろそろと後ろから集まってくる。

見た目は少し装飾の手が込んだ太刀。

だが……間違いなかった。私の記憶があの日から完全に色褪せてしまっていないければ。

しかし何故彼がこの六振りを持っているのか？

内心もう行方知れずになってしまったと諦めていたのに……。

あの方と共に、守り切れなかった筈の過去が何故、今になって…

…？

「……君。名前は何という？」

訊ねない訳には、確かめない訳にはいかなかった。

内心では心臓が動揺で激しく脈打っている。それでも私はできるだけこの気を荒げている

少年を刺激しないよう、彼の目線にまで屈み訊ねていた。

「何でてめえらに名乗らなきゃい　ぎゃふっ!？」

「おいおい若造。言葉遣いには気をつけな? ……で、名前は？」

お前も坊主だのガキだの

って呼ばれるままじゃ嫌だろ

拗ねたようなむくれっ面。

だがようやく自分が抵抗し切れないと悟ったようで、彼は三度喰らった拳骨の痛みを顔に顔を

不機嫌にしながら、やがて口にする。

「……ジーク・レノヴィン」

「レノ、ヴィン……?」

そして私は確信した。

もっと調べてみないと詳しい事は分からないが、間違いなく目の前のこの少年は……彼は

あの方の関係者であるらしい。

ぐるぐると脳内を駆け巡る動揺と思考と、あの日々の記憶と。

私がこの少年・ジークが口にしたその名に硬直している間にも皆はわらわらと自分達の立

つ酒場の一角に集まり、彼を弄ってみたり質問攻めにしてみたりと好き放題を始めている。

「はいはい。皆、あまりルーキー君をいじめないように」

イセルナがあくまで穏やかにポンポンと手を叩き、皆をあっとい

う間に制止させた。

伊達にこのクランの長をやっている訳ではない。ややあってしんと黙った皆を見渡してから、彼女は問い掛ける。

「それで……どうしましょうか、この子？」

「どうするって。まあ、またギルドに放り投げるのは拙いよなあ。

さっきコイツ自身が一悶着起こしたばかりだし」

「……少なくとも、とりあえずほとぼりが冷めるまではうちで預かるしかないかな？」

少なからぬ戸惑い　おそらく先程までの張った気の荒さを見たからだろうが　を見せ

る面々。それでも、先刻よりカウンターの中から成り行きを見守っていたハロルドがそつと

放ったその一言に皆の大まかな方針が凝縮されていた。

少年は、ジークは不満も言えずにダンに摘ままれ宙ぶらりんなまま黙り込んでいた。

(性格はまるで正反対だが……顔立ちは彼によく似ている)

私も、そんな彼の姿を見つめながら思っていた。

「オーケー、分かった。じゃあ何処か適当に空き部屋を」  
「待ってくれ」

そして私は、皆に口を開いていた。

場の皆の視線が、ジークの視線が私の下に集中する。

「何だ？　お前は反対なのか？」

「いや……。そうではないが」

「じゃあ、なあに？」

ダンが眉根をくいつと上げて問う。

そうだ。私はこの時もう、自ら離れるつもりなどなかった。

次いでそれまでじっと皆を　いや、何となくだが私を注視していたイセルナが問う。

「……ああ」

数奇な運命だと、自分でも晒いたくなる。

だがここで逃げてはられない。今度こそ……守り抜いてみせる。

「皆。一つ、私から提案があるのだが」

今の仲間とかつての自分と。

重なって見えてくる現在と過去の姿に向き合いながら、私はそう切り出していた。

「ジーク・レノヴィンだな？」

物陰から姿を見せた金髪の青年は、得物に手を掛け身構えるジークとリンファにじつと視

線を向けていたかと思うと、開口一番そう確認するように呟いた。

ひたすらに真っ直ぐな いや、何処か“必死そう”にも見える眼差し。

名を呼ばれ、思わずジークは怪訝と共に眉根を寄せる。

「念の為に確認するが。彼と面識は？」

「ないツスよ。仮に俺が覚えてないだけだったとしてもこんな現れ方はしないですし」

「……そうだな」

互いに剣をいつでも抜けるようにしたまま、短くやり取りを交わす。

ジークのその返答を聞いて、やはり只事ではなさそうだとリンファは思った。

真意は何か。念の為、自分も記憶の中から目の前の青年の姿を探してみる。

(……。もしかして)

そして脳裏の中にちらついたのは、アルスがこの街に来てすぐの頃。シフォンやミアと共に彼に街を案内していた時の映像レシジョンだった。

遠巻きではあったが、自分の記憶に間違いがなければ……彼はあの時、広場で観衆に囲ま

れ音楽を奏でていた吟遊詩人の片割れではないのか。

(だとすれもう一人は一体何処に？ いや、そもそも何故ジークを……?)

時折吹く風が、青年が首に巻いているロングスカーフをなびかせ

ている。

リンファが内心で疑問を重ねている横で、ジークは不信感を隠す事なく言っていた。

「一体何のつもりだ？ こんなコソコソした真似しやがって」

「……始めから目的は一つだ。だが、中々君一人になる隙が見つからなくてな」

青年は少し悔しそうに返していた。

狙いは、ジークだった。しかしクランの集団生活をしている彼に全くの一人になる機会は

数えるほどしかないのである。

「悪い事は言わない。君の剣を、渡して貰おう」

そして青年はそうはつきりとその要求を告げた。

静かに目を細めて睨むリンファに、思わず頭に疑問符を浮かべるジーク。

「やなことだ。こいつは大事な形見なんだよ。見も知らない奴にホイホイ渡せるかっての」

だがすぐにジークははっきりと拒絶の意思を示していた。

己の腰に下げた、父との繋がりを担保する六振り。ジークはぎゅつと二刀の柄を握る力を

強め、いつでも対応できるように青年を見据える。

「そうか……」

すると青年は大きく息を吐いた。

嘆息のような、決心のような。彼はそれまでぶらんと下げていた手をおもむろに持ち上げ

ると、その中指に嵌められている指輪に静かにマナを込める。

「なら、仕方ない」

指輪 いや魔導具から光が弾けた。その中心から魔法陣が展開される。

収束してゆく銀色の光の中、彼の手の中で形を成したのは一本の槍。



「貫け、一繋ぎの槍！」

バイルドランス

そして青年がそのまま切っ先をジークに向けて呟いた次の瞬間、槍がまるで意思を持ったかのように猛烈な速さで伸び、襲い掛かってきたのである。

「ッ!？」

速い。相手の手馴れた魔導具の展開もさる事ながら、スイッチを切り替えたように先手を

打ってきた青年の攻撃に、ジークは数拍の遅れを取ってしまう。

迫る槍の刃。ジークは対応すべく二刀を抜き放ち。

「ふっ……!」

だがそれよりも速く、槍を防いでいたのはリンファだった。

インパクトの瞬間に抜き放った長太刀と両腕に大量のマナを錬氣し、火花を散らさせながら

数十秒、伸び続け襲い掛かってくる槍をいなそうとする。

そしてジークが驚いて硬直していた中、ややあつて両者は弾かれた。

勢いに押されて数歩下がるリンファが太刀を横へと薙ぎ払うと、そのいなしに流されるよ

うにして青年の放った槍が二人とはあらぬ方向へと飛んでいく。

遙か後方、並木道を形成する等間隔に植えられた木々が、何本も槍にその幹を挟まれ、貫

かれ次々に倒れていった。

目を見張って思わずその光景に振り向くジーク。

だが彼を庇うように前に立ったリンファの眼と太刀は変わらず青年に向いている。

「なるほど。これが君のその魔導具の特性か」

「……」

彼女の呟きに、青年は黙っていた。

伸縮自在の槍型の魔導具。それを縮めて再び手元に手繰り寄せながら、この間に割って入

ってきた女剣士の力量の高さを直感として感じ取る。

「マジかよ……。槍と剣じゃ、ただでさえリーチが違っつてのに」  
向き直りながらジークは呟いた。

魔導具使い　少なくとも錬氣以上のマナの扱いを修めている人物。

正直あまり戦いたくない相手だった。魔導師相手なら詠唱の隙を突いて行動を封じられる

だろうが、基本的に魔導具使いに詠唱によるラグは存在しない。魔導を集中砲火されてしま

えば戦士の自分には打つ手はないのだ。

「……リンさん、早くホームに。皆に報せてきて下さい」

だがジークは戦闘スタイルの違いを把握しながらも、次の瞬間にはそうリンファの背中には

声を掛けていた。

奴の標的は自分（の刀）だ。

ここに留まって応援までの時間を稼げれば、状況はぐっとこちらに有利に働く。

「いや。その言葉そっくり返すよ。ここは私が食い止める」

「何言ってるんですか！？ あいつの狙いは俺なんですよ？」

「……だからこそだ。ホームまで君が戻れば簡単に手出しはできなくなるし、皆で確実に彼

を捕捉する事だってできる」

「でもっ……！」

だが、リンファは振り向く事もなく淡々とその申し出を断わっていた。

ジークは勿論渋った。考えている事が同じな分、尚の事彼女を一人捨て置く気にはなれな

かった。

「落ち着けジーク。力量でいえば、私の方が適任だ」

それでも彼女は首を縦には振らない。

口調こそ落ち着いていたが、ジークには不思議とむしろ彼女の方が意地になっっているようにも思えた。

確かにリンさんの方がずっと俺より強いです。

でも、このままあなたを捨て置いて自分だけ逃げるなんて……で  
きないッスよ。

「……」

逡巡の末、ジークはそつとリンファの傍に並び立っていた。

横目でそれを見て驚いた彼女だったが、すぐにやれやれといった  
感じで苦笑すると、共に

得物をぐぐつと構えて臨戦体勢を取る。

「あくまで抵抗するか……」

槍をゆたりと構えていた青年は、そんな二刀と長太刀の戦意を前  
にして目を細めていた。

あくまで冷静に。しかしその奥にはやはり滾る何かを閉じ込めて

「ならば、力づくで回収させて貰うまでだ」

彼は再びその槍先を、ゆっくりと二人に向ける。

「ういゝつす。今戻りました」

「疲れたあ……」

そして時を前後して。

二人と別れた団員ら面々は一足先にホームに戻って来ていた。

酒場の入口を開け、一同は店内に散在して一時を過ごしていた仲  
間達と暫しのやり取りを

交わしながらホッと一息をついていた。

「あ、皆さん。おかえりなさいです」

そんな仲間達の集団の中に。

何処となくぎこちない表情で向き直り、微笑を向けてくるアルス  
の姿があった。

「……あれ？ アルス、何でここに？」

だからこそ、一同はその姿を見た瞬間思わず怪訝を漏らしてしまっていた。

「？ さつき学院から帰ってきたからですけど」

「え？ ジークとリンさんが迎えに行つた筈じゃあ……？」

「兄さんとリンファさんが、ですか？ いいえ、来てませんよ？」

「へ……？ おっかしいなあ。俺ら途中で、リンさんにアルスを迎えに行くから先に帰って

てくれて言われたから、てっきり三人一緒だとばかり……」

「もしかして入れ違いになつたのか？」

「うーん……。それも違つうような。僕はいつも通り正門から学院を出て真つ直ぐ帰つてきたので、兄さん達が迎えに来ていたのなら見逃すとは思えませんし、入れ違いだとしても何処

かで会つている筈だと思つんですけど……」

「それもそうだなあ」

「……？ どうなつてるんだ？」

聞く限り、アルスは本当にジークとリンファには会っていないらしい。一同は互いに顔を見合わせて訝しがった。

話が噛み合っていない。では何故、彼女はあんな事を言つたのだらう……？

「……確か、今日はジエド商会での武器の試運用だつたよね？」

「ええ。そうッス」

するとそれまでのやり取りを聞いていたハロルドが、カウンターの中から皆に問うた。

その手前ではダンとシフォンが酒と肴を突付きながら晩酌を始めており、少しずつ不穏な

気配のするその事態に振り向いてきている。

「ちなみに、帰りはどういうルートを通つて来たんだい？」

「どういふって……アウルベ川の東から河川敷を伝つてこつちのス

トリートにですが」

すると、内の一人が小首を傾げながら答えると、サツとハロルドの表情が変わった。

いつもの微笑。だがそこには間違いなく真剣な気色が差し始めていて。

僅かに眉根を上げたダンの隣で、シフォンもその違和感の正体に気付いたのか、面々に対して「本当なのか？」と言わんばかりの眼差しを投げってくる。

彼らは頭に疑問符を浮かべて戸惑った。

何か、自分達は拙い事でもしてかしてしまったのだろうか。

「おかしいね。それだと学院とはまるで違う道になるよ」

『えっ……？』

だがそれ以上に、次にハロルドが口にした言葉への驚きの方が大きかった。

思わず顔を見合わせる皆に、シフォンが顎に片手を当てながら続ける。

「無理もないけど。魔導に縁のない者なら、いくらこの街に住んでいてもアカデミーの位

置までは知らないだろうし」

「しかし、それだとリンが言っていた事が怪しいな」

「うん。多分何かあったんだと思うよ。……皆を先に帰さないといけないだけの何かがね」

団員らはそんな言葉にざわつき始めた。

ジークに、リンさんに何かがあった？ 自分達はそれに気付けずみすみす二人を……。

「……兄さんと、リンファさんが」

アルスも、その中で静かに動揺していた。

ゆらゆらと揺れる瞳の中に同じく、戸惑っている団員らの姿が映り込んでいる。

だが、それも束の間だった。

ざわつく皆の中で、ダンがはたと立ち上がると一斉にその視線が彼に集中する。

晩酌を嗜む酒豪の面はなりを潜め、クランの副団長としての真剣な顔が皆に告げていた。

「お前ら。皆を呼べ、戦える準備をしろ。……きな臭い感じがしてきやがった」

日没間近の河川敷が戦場になっていた。

断続的に聞こえてくるのは、刃が地面を抉りながら何度も立てる轟音。

次々と薄闇の中に舞い上がる土埃と、一見すると暴れ狂う蛇にも思える伸縮自在の槍。

ジークとリンファは、青年からの猛攻の中にあつた。

「くう……っ！」

何度目か分からない槍先の突進がジークを襲う。

ジークはそれを寸での所で飛び退いてかわし、次いで間髪入れずに抉った地面から起き上がり再度突っ込んでくるそれを二刀を防ぐ。

それでも勢いは殺せず、ジークの身体は彼の意思とは正反対に槍先がうねる度に後ろへ後ろへと追い遣られてしまう。

「破ッ！」

その間に割って入ったのはリンファだった。

練氣を込めた斬撃で槍を叩き伏せると、ジークが距離を置き体勢を整える時間を稼ぐ。

それでも青年は一繋ぎの槍を止める事はなかった。

手元からぐいと引つ張り上げ、鞭のようにしならせて起こすとリンファを弾き飛ばそう

とする。振られる槍先。それをリンファは太刀でいなしながら体勢を変え、身体を反転させ

ると、今度は攻勢に出るべく地面を蹴った。

「邪魔をするな！」

「そっちこそ、ジークには指一步触れさせない！」

二人の叫びが交わる。

飛び掛かって来るリンファに、青年は自分自身を中心に渦を描くようにして槍を引き寄せながらこれを防いだ。

回転する度に槍先が彼女の長太刀とぶつかり火花を上げる。

そしてその対処に足止めをされている隙に青年は槍を元の長さに縮め直すと、最後の一身

捻りと共にその切っ先を突き出した。

突き、薙ぎ、そして払い合う。

長太刀と槍の、入れ代わり立ち代わりの攻防が展開されていく。

(……どうする?)

そんな二人の後方で、ジークは二刀を構えながらも内心戸惑っていた。

相手は、人間だ。魔獣でもなければ人に害を及ぼしている魔人でもない。素性こそしれな

いが人間に間違いなかった。

確かに相手は明確に自分を狙っている。それでも。

(そう易々と、人は殺れねえ……)

ジークの中にはそうはつきりと躊躇いが芽生えていた。練氣を、本気を出して戦う事に迷いを抱いていた。

だがそんな中、その眉間に皺を寄せる目に青年の姿が映った。

槍と長太刀がぶつかる中で、彼がリンファに向けて片手をスツと

魔導具らしき指輪を

嵌めた掌を向けようとしているのが映ったのである。

「リンさん、危ない!」

「ッ!」

次の瞬間、青年の片手を中心に黄色の魔法陣が展開され、そこからリンファに向けて一条の電撃が放たれた。

それを、彼女はジークが叫んだその声のお陰で辛うじてかわせて



いた。

ジリツと雷の威力が彼女の右袖を掠めて服を散らす。薄闇の中に電撃が吸い込まれるように消えていった。

「外したか」

「てめえ、魔導を至近距離で……！」

片腕を押さえて大きく飛び退くリンファ。

だが今度はジークがその傍らを猛然と駆けていた。

「スパークウェイブ 迸る雷波！」

青年はもう一度、その魔導具を行使してきた。

飛んでくる直線型の電撃。だがジークはそれらに臆する様子もなく、大きく迂回するよう

にして 後方のリンファが巻き添えを食わないように 駆けつけて交わしていく。

散発的に連発される電撃。

ジークは二刀と平行に身体を低くして駆けていった。

(躊躇っちゃ、失っちまう……)

相手は魔獣ではなく人だ。だが少なくとも自分達を傷付けようとする者だ。

戸惑いを頭の中から追い払うように、ジークは二刀を瞬時に逆刃になるように持ち替えて

いた。錬氣を、両腕と両脚に集中させていた。

「おおおおっ！！」

これなら、少なくとも即死はしない。

ただこの場を何とか収める。ジークは叫びながら地面を蹴った。

青年に向かつて振り下ろされる二刀。だが……。

「リフレスカーフ 楯なる外衣」

彼は冷静だった。

中空から落ちてくる斬撃が二つ。それをしっかりと目に映しながらも、青年はそっと首に

巻いたスカーフのピンに指先を当てながら静かにマナを込める。

するとどうだろう。突如としてそれまでただの装飾品だとばかり思っていた彼のスカーフ

がひとりでに巨大な布になって広がり、ジークの攻撃を受け止めたのだ。

「何っ!？」

「……僕の魔導具がこれだけだとは言っていないぞ?」

それはまるでクッションに押し返されるように。

驚くジークを、その二刀ごと振り払うようにして、青年は巨大化したスカーフ 防御の

魔導具を翻して弾き飛ばす。

ジークは中空に投げ出された。体勢も崩れたままだった。

「平静を失った、君の負けだ」

スカーフと共に身体を一回転させ、青年は槍先をジークに向けていた。

それが何を意図するのか、ジークにも分かった。

「しまっ」

着地して受身を。いや、それも間に合わない。

そして地面に叩きつけられそうになるその身を狙って、射出された槍が迫り。

(…………?)

だが、切っ先はジークを貫かなかった。

どさりと地面に倒れたその身体。覚悟した痛みと違い、ジークは思わず瞑ってしまった。

た目をゆっくりと開けてみる。

「ッ!？」

するとそこには。

「……………大丈夫か、ジーク」

襲い掛かってきた槍先からジークを身を挺して守って、両者の間に割り込むように立って

いたリンファの姿があつて。

しかし利き腕をやられていた故にその威力を殺し切れず、脇腹にその刺突が直撃し真つ赤な血を滲ませていたリンファの姿があつて。

「リン、さん……？」

「……よかつた。怪我は、無」

脂汗をかきながら肩越しにジークを見遣つてフツと笑い、そしてぐらりと血を飛び散らせ

て崩れ落ちたリンファの姿があつて。

（えっ……？）

血飛沫が目に焼き付いた。

彼女の身体から引き抜かれる槍先と、そこにこびり付いた血の赤が目に焼き付いた。

どつつと、目の前で彼女が仰向けに倒れ込んでいた。

苦痛を浮かべた、でも自分を庇えたことに安堵したかのような表情で。

「……」

守れなかつた。傷付けた。また、自分の所為で。

同族を、自分をクランに迎え入れてくれた張本人を、頼れる姉貴分を。

「ア……アア」

全身を駆け巡る懐かしくも忌々しい狂気と共に。

ジークの目の前が次の瞬間、真つ白に弾けた。

気付いた時には、灰色の世界だった。

少し気味が悪いくらいに静かで殺風景。

ジークはややあつて自分が丸腰で、且つ浅い水面の上に立っているらしいと分かる。

「……ここは」

辺りを見渡してみる。

透き通った水面は見渡す限り延々と広がっていた。そして灰色の空の中に溶けるように、点々と無機質な塔によつた、中小様々なサイズの構造体が建っているのが見えた。

記憶を辿り直してみる。

途端にズキリと痛んだ脳裏。一気に再生される映像<sup>ビジュアル</sup>。

そうだ。リンさんが俺を庇って、倒れて……。

「あらあら。こっちに来ちゃったんだ？」

だがそんなジークの思考も沸騰するように駆け巡ろうとした焦りも、次の瞬間に聞こえて

きた声に掻き消されてしまっていた。

思わずバツとその声のした方向へ振り返ってみる。

するとジークの背後、少し離れた所に先程の構造体によく似た複数のオブジェの上に乗る

掛かるようにして、自分を見ている者達がいた。

「……何だお前ら？ ツーかここは何処なんだ？」

ジークは怪訝を隠さなかった。それはきっと内心の動揺もあつたのだろう。

振り返ってみた先のオブジェの上。

そこには何故か“ぼやけた霞”のような文字通りの人影がいた。

ざつとその数、六体。

あくまで表面の強気を崩さずに言うジークに、先程の やんわりとした女性の声先ず

応えていた。

「何って……いつも一緒にいるのにつれないわねえ」

「おい。あまり余計な事を喋るな。我らは眠るように申し付けられているのだぞ？」

「……でも、こいつはボクらの側に入ってきた」

「緊急事態ですね」

「う、うむ。そうだな」

声色は六人共違っていた。だが、あくまで聞いた感じだが、全員が女性のようにジークには聞こえた。

中央に陣取るやや大きめの影。その隣一段下で小首を傾げているような影。その反対側で

更に一段下には淡々とした声色と真面目そうな声色の二つの影。

ジークは頭に疑問符を浮かべていた。

一緒にいる？ 何を一体……？

「でも、外は今大变みたいですよ？」

「そーだぜ？ このままじゃあコイツやられちまうんじゃないの？」

だがその間も影達の会議（？）は続いていた。

中央の影の左右に座っていた、手持ち無沙汰に立っていた残り二体の影が言う。

「そうだな……。そうなると確かに困る」

そしてそのやり取りの末、六体の視線（そもそも目があるかも分からないので、感覚的な

判断だが）が一斉にジークに向けられる。

「な、何だよ……？ と、取って喰ったって美味かねえぞ」

思わずジークは心持ち後退りをしていた。

半ば無意識的、反射的に腰へと手を伸ばす。だがそこには一本の刀も下がっていない。

更に脳裏に疑問符が掠めていった。

もしかして、俺はこいつらに刀を取られたりしたんじゃない……？

「人の子よ」

だがそんなジークの思案は、再び明後日の方向に飛ばされてしまった。

中央に陣取る影が、ややあって何かを決心したようにそう重々しい声で語り掛けてくる。

「お前は、力が欲しいか？」

「え？」

唐突な質問だった。思わず間抜けに聞き返してしまう。

「……力が欲しいのだろうか？ もう二度と、自分の所為で誰かを失わない為の」

「ッ！？ お前……！」

何故その事を。

問い詰めようとしたジークだったが、結局それ以上の言葉が出なかった。

実際に目に見えたわけではない。だが……何故かこの影達が、フツと微笑んだように見えたのだ。

すると虚を衝かれたようになったジークのすぐ傍らへと、左右に控えていた二人の影がストンと降りてくる。

「……？」

気のせいだろうか。

間近になったからなのかは分からないが、彼女達（？）二人の輪郭がより人らしい、少女のようなそれになっているように見えた。

二人を見比べ、眉根を寄せるジーク。

「力、欲しいんですよね？」

「特例だ。ちよっとの間、貸してやるよ」

すると彼女達の言葉と共に。

二人は蒼と紅の光となってジークの左右で輝き始める。

(……一体、何が起きている？)

青年は手繰り寄せた槍を握ったまま啞然としていた。

対するは二人。一人は先程突き刺し戦闘不能にした女剣士。

そしてもう一人は。

「……」

両手にする二刀から膨大な蒼と紅の光を マナを滾らせている

青年。

彼の標的たるジーク・レノヴィンその者だった。

何が起こったのか分からなかった。

ただ青年の目から映ったのは、自分が割って入った女剣士を倒した直後、彼が言葉になら

ない悲鳴のような、叫びのような狂った声色で仰け反り、次の瞬間その二刀から突如として

大量のマナが溢れて刀身を蒼と紅の光に染めたという事だけ。

「ジーク……。まさ、か……」

リンファは地面に倒れ、血に塗れた脇腹を押さえたまま何事か呟いていた。

だがジークはその言葉に反応がない。

ただぶらりとマナの光を滾らせる二刀を手に下げたまま、俯き加減な前髪でその表情を隠して立っている。

間違いなく、異変。青年は眉間に皺を寄せて内心の動揺と戦っていた。

（マナの強さが跳ね上がった？ それにこの感じ……魔導具？ いや、だがさつきまでの戦

い方からして錬氣以外でマナを扱えるようには）

しかしそんな青年の困惑を余所に、ジークの逆転攻勢が始まっていた。

同じく驚いて、倒れたまま見上げてくるリンファの横をジークはゆっくりと通り過ぎ、そして一気に地面を蹴る。

「くっ……！」

青年は半ば反射的に槍を放っていた。

だがジークは避けようとしなかった。ただゆらりと右手に握った紅い刀身を持ち上げ、

振り下ろした勢いのまま、襲い掛かってきた槍を一撃の下に地面に

めり込ませたのだ。

「なっ……！？」

驚いたのはリンファも、そして青年も同じだった。

あれだけ苦戦していた筈の自分の得物をいとも容易く叩きのめす。青年は焦った。その間にも、ジークは再び地面を蹴って爆発的な速さで突撃してくる。

急いで威力を殺され伏せた槍を手繰り寄せ、次の瞬間大振りに放たれたジークの斬撃を防御する。

「ぐう……っ！？」

ズシリと響く衝突音と重量感。

明らかに重い。防いだ筈なのにビリビリと周りの空気が、両脚が悲鳴を上げていた。

大きく弾かれ後退する青年。それでもジークの猛攻は止まらない。半ば獣じみた荒々しい叫びと共に、次々と襲い掛かってくる紅と蒼の軌跡。青年はそれらを槍で後退しながら防ぐだけで精一杯になっていた。

（駄目だ。よく分からないが、今直接ぶつかったら押し負ける……！）

突如として躊躇いのなくなった いや、そんな意識すら見受けられない猛攻。

青年は堪らず槍でジークを払い、僅かにできた隙を見て数度、槍の伸縮も利用して大きく

飛び退つて距離を取り直す。

「スーパーウェーブ 迸る雷波！」

遠距離からの雷撃。

しかし変貌したジークにはそんな戦略など無意味だった。

猛烈な速さで駆け、その結果虚空を過ぎる無数の雷撃。

そして更に、左手に握った蒼く光る刀身を振るった瞬間、何とその蒼い斬撃がこちらに向



かつて文字通り“飛んできた”のである。

「何……っ!？」

飛ぶ斬撃。そんなフリーズが頭に過ぎりながらも、青年は寸での所で身を交わしてそれを

何とか回避した。直後地面に直撃し大きく爆ぜる地面と土煙。思わず青年は片目を瞑ってそ

の余波の前に動きを止めてしまう。

しかしジークは迫っていた。

ぐらつき動きを鈍らせたその一瞬の隙を狙うように、彼は叫び声を上げながら、立ち上る

土煙の中から二刀を振り上げて襲い掛かってきたのだった。

「……ッ!！」

その力任せながら絶え間のない斬撃の嵐に、青年は堪らず槍で防御する。

だがやはりそのパワーは圧倒的だった。

少なくともただの錬気ではない　自分と同じ、魔導具のそれだ。

青年は何度も弾かれ、

押されながらも確信していた。

隠し玉？　いや、しかしこいつの今の状態はむしろ……。

「ぬんッ!！」

「ぐっ!？」

だが青年の防御はいつまでも続かなかった。

やがてその大量のmanaで強化された紅と蒼の斬撃が、青年の槍を弾き飛ばしたのである。

大きくぐらつき、体勢を崩す。あらぬ方向へ弾かれた槍が孤を描いて中空を飛んでいくの  
が見える。

ジークが、二刀を振り上げる姿が見えた。

(くっ……!　防御を……!)

咄嗟に青年は再度スカーフの楯を展開していた。

魔導の力で巨大化した布が、紅と蒼、二色の軌跡を残して振り下ろされる斬撃を受け止めようとする。

だがしかし……今度は同じようにはいかなかった。

バチバチと迸る火花。だが感触は間違いなく相手に押され続けているもので。

「そんな。カーフでも防ぎ切れな」

そして次の瞬間、青年はクッション効果の限界を超えたスカーフと共にジークの二刀の直撃を受けていた。

最早防御する手立てはなかった。

ただその狂気にも似たパワーを乗せた一撃を受け、青年は大きく後方へと吹き飛ばされるしかなかった。

ダメージが身体中に駆け巡って悲鳴を上げる。中空を低空飛行する空気の抵抗を感じる。

「がは……ッ!!」

その間、実質十数秒。

それでも青年へのダメージは決定的だった。

吹き飛ばされてゴロゴロとボロ雑巾のように地面に転がったその身。次いで遠くへ弾き飛ばされてた槍が何度も回転した末に地面に突き刺さる。

「……………」

ジークは大きく肩で息をついていた。

振り降ろした二刀。その蒼と紅の刀身が戦いの決着を見届けたかのように輝きを失い、元の金属な太刀へと収まっていく。

そしてガクリと。ジークは崩れ落ちるようにその場に肩膝を突いて倒れ込んだのだった。

「が……あ？ 何だ？ か、身体が……重く……」

大きく息を荒げながら戸惑う。

ジークは突然身体中を襲ってきたダメージに苦痛の表情を隠せなかった。

それでもジークは荒く息をつきながら、後方のリンファを 地面に伏したまま、驚愕の

表情で自分を見ている彼女を見遣っていた。

「当たり、前だ。素人がいきなり……そんなにマナを使ったんだ。反動が、来るのは当然の事だろ……」

そんな彼に、青年もまた別の意味でのダメージに喘ぎながら、途切れ途切れに口を開いていた。地面に何度も打ち付けられて汚れ、傷付いた身体。そこには最早ジークと交戦しようという余力は残されていなかった。

「……知らねえよ。気付いたら、もう必死で……」  
ぼんやりとする意識の中で、ジークはつつけんどんに応える。

俺は、リンさんを守れたのか？ こいつに、勝ったのか？

疲労が身体に警告を送る中、それでもジークはどうやら場を凌げたらしいとようやく理解

していた。よかった。これで後はリンさんを 。  
「失敗力」

だが、それは本当の終わりではなかった。

突然聞こえてきたのは、不気味な片言の声色。

青年がそのダメージを受けた身体にも関わらず辺りを見渡し、心なし狼狽し始めている。

ジークと、そしてリンファも彼に倣うようにしてその声が出た方向に目を遣る。

「ヤハリ直々ニ遂行スベキダツタカ」

「使エナカッタナ」

するとそこには、夜闇に溶けるような黒衣と仮面に全身を包んだ

一団と、

「っっ！　っっっ！！」

彼らに羽交い絞めにされてもがいている、一人の桃色の髪の少女が立っていた。

「……誰だ。てめえら」

緊張と焦りを見せる青年の先手を打つように、ジークは現れた一団に問うていた。

眉根を寄せて睨む眼差し。そこには遠慮などは微塵もない。

あからさまに正体を隠すようないでたち。上から目線。何よりも

……か弱い少女を躊躇い

もなく人質にしているらしいその姿に、ジークの正義感は告げている。

こいつらは、敵だと。

「失敗シタナ。不履行ダ」

だが黒衣の一団はそんなジークには目もくれない。

淡々として、だが纏わり付くような声で彼らは青年を向き指弾しているようだった。彼ら

の手によって捕らえられている桃色の髪の少女が一層もがいている。

「ま、待て……。まだだ。まだ、やれる……」

「戯言ヲ。敗者二用ハナイ」

「ソレニ……貴様ハ要ラヌ事ヲシテクレタ」

必死に何かを止めようとしている青年。だが黒衣の面々の口振りには、そんな彼を今まさに

切り捨てようとしている。

(要らぬ事？ それって……)

まだ満足に動いてくれない身体に鞭打ちながら、ジークは思った。そう言えばこの金髪も、狙いは俺の刀だった。

あいつらは俺の、父さんと母さんの刀の何を知ってるってんだ……

……？

「ま、マスター！」

するとそれまでもがいていた少女が、羽交い絞めにされていた黒

衣の者から僅かだけ抜け出し叫んでいた。

マスター？ ジークはその言い方に違和感を覚えたが、私の事は構いません。早くこいつらを　ぐっ！？」

「……ジットシテイロ」

「人質八黙ツテオケ」

それも束の間、すぐに鳩尾を殴られて封じられ、再びがっしりと捕らえられてしまう。

「お前ら……よくもマルタに！」

そんな黒衣の一団の仕打ちに、青年は弾かれたようにその名を

おそらくはこの少女の名を叫んでいた。それでもジークから受けたダメージが尾を引いており、身体はろくに動かし事ができないでいる。

「ダガ……モウ用済ミダ」

「貴様達モ、ジーク・レノヴィンモ、諸共二処分スル」

そして黒衣の一団は、確かにそうジーク達に言ったのだった。

「待て、話が違う！　こいつから刀を回収すればいいんじゃないやなかったのか！？」

青年は再び叫んでいた。先程よりももっと大きく、強い口調で。

（……こいつ、まさか）

事態が混線している。しかし何となくだが、彼の事情は呑み込めなように思う。

やはりあの黒ずくめは敵だ。それも、こんな卑劣な手段を用いるような……。

しかしそう頭では分かっているとしても、青年との戦いでお互いに消耗しているという事実に変わりはなかった。

一斉に自分達に向き直り、黒衣の袖口からガチャリと鉤爪を迫り出す一団。

その前衛に守られるようにして、桃髪の少女・マルタを捕捉する  
後衛らが控えている。

(マズイな……)

既に普段の姿に戻っていた二刀を構えながらも、ジークは内心で  
焦っていた。

自分も、あの青年も今満足に戦えない。怪我をして倒れている  
同じように緊張した様

子でこちらを見ているリンさんに任せるなんてもつとできない。  
どうする？

ジークがぎゅっと柄を握り締める。一步また一步と黒衣の集団が  
迫ってくる。

だが、次の瞬間だった。

「目を瞑れ！」

闇をつんざくように聞こえたのは、聞き覚えのある シフォン  
の叫び声だった。

仲間だ。反射的にジークもリンファも言われるがままに目を瞑る。  
するとそれとほぼ同時に黒衣の一団へと飛んできたのは、一本の  
矢だった。

何のこれしきと思ったのだろう。内の一人がサツと鉤爪の片手を  
振るい、その矢を叩き落  
とそうとする。

それが火蓋を切る事になった。

「ッ！？」

その瞬間、突如として弾けた鏃が強烈な光となって辺りに放出さ  
れる。

閃光弾ならぬ閃光矢だった。

不意を衝かれた黒衣の一味はバラバラに眩しさと立ち眩んで動き  
を止めた。

「……………」

そんな中に、一人の人影が飛び込んできた。

猫耳に尻尾。そして閃光対策らしいサンングラス。

「あ、貴方は……？」

「大丈夫。多分、あなたの味方」

それは他ならぬミアだった。

まだ閃光矢の威力が効いている中、彼女はマルタを捕らえていた  
黒衣を練氣で強化した飛

び蹴りで吹き飛ばすと、薄らと目を開けて何とか自分の姿を確認し  
ようとすることの桃色髪の  
少女にそれだけを告げて。

「ひゃっ……！？」

お姫様抱っこ、そしてぐっと地面を蹴って跳ぶ。

「……ミアか？」

着地したのは黒衣の一団から距離があるジークとリンファのすぐ  
傍。ミアは閃光の中心を

背後にして、サンングラスをその場に投げ捨てていた。

二人は徐々に慣れてきた、収束する閃光の中でゆっくりと目を開  
いて仲間の姿を、助け出  
されたマルタの姿を確認する。

「又……。何が、起キ」

そしてその向こうでは大きな隙ができた黒衣の一団に次々と攻撃  
が叩き込まれていた。

片言の不気味な声、悲鳴。それらが夜闇を揺るがすように重なり、  
こだまする。

「お待ちどうさま。リン、ジーク」

「何とか間に合ったみたいだな」

黒衣の一団とジーク達。

収まった閃光の後、その間に割って入るように陣取っていたのは、  
イセルナやダンを始め

としたクラン・ブルートバードの面々。ざっと見てもクランの総戦  
力に近い。



「団長、皆……」

「……ああ。ちょっと遅いくらいだけど……ね」

ジークとリンファはそれぞれに苦笑し、安堵した。助けが来た。これで何とかなる。

ミアがお姫様抱っこからマルタを降ろし、同時に克蘭の仲間達の中からレナとハロルド

ら支援隊の一部がこちらに駆けってくる。

「大丈夫ですか。ジークさん、リンファさん！」

「……リンファの方が重症かな。レナ、ジークの方は頼んだよ」

「はいっ」

ジークにはレナ達、倒れているリンファにはハロルド達が手当ての任に就いた。

「慈しみ育む緑霊よ。汝、我が隣人の心氣の磨耗を補い給え。我は彼の者に豊かなる源を授

けんことを望む者……」

「慈しみ育む金霊よ。汝、我が隣人の病苦を除き治し給え。我は彼の者の健やかなる軀たる

ことを望む者……」

同時に詠唱を始め、そつと相手の胸元へ傷口へ、その緑と金の魔法陣を展開しながらかざ

される二人の掌。

「盟約の下、我に示せ  
サブライメント  
精神の枝葉

「盟約の下、我に示せ  
ブラル・ウィツシュ  
快癒の祈り

ホウツとジークの胸元を、リンファの傷口を二人の回復魔導が癒していった。

それまで疲弊してろくに動かなかった身体に活力が戻る感覚と。槍に突かれてできた大きな傷口とそこからの出血が、止まり塞がっていく光景。

暫しその経過を見つめながら術の展開に集中するエルリツシュ親子。

「はい……。おしまいです」

「うん。これで一応塞がった」

そしてその治療が一段落するのを見て、傍らに控えた数人の支援隊の仲間らが回復剤を渡

してくれたり、傷口を清潔なガーゼと包帯で覆い始める。

「皆。その……」

「ああ、分かってるよ」

「気にすんな。要はこの黒ずくめをぶっ飛ばせばいいんだろ？」

ジークは若干の後ろめたさと共に告げようとしたが、既に仲間達は戦闘体勢の真っ只中であ

った。

「大丈夫。後は僕らが引き受けるよ」

矢を番え直し、シフォンがフツと微笑んでくれてからゆっくりと構える。

黒衣の一団もようやく自分達が奇襲されたと、人質も奪還されたと分かったようで、鉤爪

を構えて今にも飛び掛ろうとしている。

「皆」「やっちまいな!!」

そして次の瞬間、クランの長二人の声を合図に、仲間達は一斉に黒衣の一団へと襲い掛か

っていった。激突する両者。激しくお互いの武器がぶつかり合う。

「チツ……!! こいつらも錬氣を」

「躊躇うな。数じゃ上なんだ。押せ、押せ!!」

戦闘経験が豊富な筈の自分達傭兵畑の冒険者の群れ。

しかし黒衣の一味も負けてはいなかった。全身、鉤爪を備えた両腕にマナを滾らせ、彼ら

の攻撃を防ぎ、或いは反撃に転じようとする。

「皆、気をつけて! そいつら被造人だよ!!」

「それもこのマナ回路の構造……間違はなく戦闘特化型です!!」

するとそう皆から一歩離れて叫んでいたのは、エトナとアルスだ

った。

「お、お前ら。何ついて来て……」

「そっちこそ何襲われてるのさ？ 皆心配したんだからね！」

「……大丈夫だよ。僕だって、仲間だもん」

「お前ら……」

ジークは思わず視線を逸らして頭を掻いていた。

レナや、ゆつくりと起き上がらせて貰っていたリンファが静かに微笑んでいる。

やっぱり。まだまだ俺には力が足りない……。

仲間達の力添えを心強く思いながらも、ジークの胸中にはそんな思いがざわめき立つ。

「オートマタか。って事は、何処ぞの使い魔連中ってことだな」

「だろうね。それもよほど性質の悪いらしい主を持つ……」

「今はそれよりも撃退よ。あまり深追いはしないで！」

ダンが錬氣を込めた戦斧を振るって黒衣のオートマタ達を叩き伏せたかと思えば、間髪入れずにイセルナの剣さばきやシフォンの矢が飛んでくる。

形成は、逆転していると見て間違いなかった。

「……マルタ」

ぼつりと、切実な心配の声。

ジーク達が振り返ると、そこには大きく肩で息をした青年がこちらに向かって歩いてきて

いた。ボロボロになった服。それでもそんな外見など気にせず、彼はただ桃色髪の少女の身を案じているようだった。

「マスター……。すみません、こんな事に」

「いや、いいんだ。全て僕の油断が招いた事態だ」

ジーク達はそんな二人のやり取りを、少々ポカンとした目で見つめていた。

やはり彼女はこいつの事をマスターと呼んでいる。一体この二人

は何者なんだ……？

「……そうか。じゃあ君が、その被造人かのじよの主なんだね？」

だがその疑問は、同じくじつと様子を見ていたハロルドが解決してくれた。

驚くジークやリンファ。

本当に？ あんな不気味な黒ずくめとこの女の子が同じオートマタだと？

ハロルドと自分達を見比べるジークに、青年と桃色髪の少女・マルタは言った。

「はい。私はマスターの従者として、そのお世話をさせて貰っています。マルタです」

「……自己紹介が遅れた。僕はサフレ。フリーランスだが、一応君達と同じ冒険者だ」

二人、金髪の青年・サフレとマルタはそのまま深々と頭を下げていた。

巻き込んでしまつて申し訳ないと。

「あ……いいって。いい加減、大体の事情は把握できたし。リンさんも幸い命に別状は無  
いみたいだから、半殺しにするのは許しておいてやる」

「そ、そうか」

サフレは苦笑いを見せていた。先刻の戦闘もあり冗談も冗談に聞こえなかったのかもしれない。

ない。すると彼はゆっくりと踵を返すと、未だ交戦を続けている面々の方へと向き直った。

「君達は休んでいてくれ。……落とし前は、自分で取る」

「落とし前って……。お前ボロボロだろ」

「大丈夫だ。マルタがいれば、まだまだ戦える」

「……？」

ジーク達が頭に疑問符を浮かべる中、サフレはそう肩越しに微笑んで、マルタに目配せを

してみせた。すると彼女は心得たと言わんばかりに、嵌めていた指輪からハープ型の魔導具を取り出してみせて。

「~~~~」

音色を、歌声を奏で始めた。

「綺麗……」

「ああ。本当に……」

マルタの奏でるハープの音色と歌声は、すぐにジーク達周りの皆を魅了していた。

天使の歌声。そう形容しても憚られないような澄んだ優しい音色だった。

だが、それらはただ聴く者を感心させるものではなく、

「何だ……この綺麗な声？」

「それに何だろう、よく分かんねえけど……力が溢れてくる」

実戦的な意味でも面々を大いにサポートしているらしかった。

それなりに押し合い圧し合いを続けていた筈のクランの仲間達が、まるで回復魔導を受け

たかのように活気付き、どつと黒衣の一団を押し遣り始める。

「何なんだ……？」

「これが、マルタの得意技さ」

自身もまた身体中に力が沸き上がってくるのが分かる。

ジークがその変化に疑問を示していると、サフレが地面に突き刺さったままの槍を回収し

て、その傷物になった全体にマナを注ぎ直し新品に再構築ながら言った。

「確かにマルタは戦闘用に作られたオートマタじゃない。だが、彼女の奏でる音色は周囲の

マナを、精霊を味方に付けて加護を引き出してくれる」

「……なるほど。一種の“古式詠唱”ですか」

魔導に心得のあるハオルドやレナはそれで納得していたようだが、

ジークやリンファには  
まるでちんぷんかんぷんだった。

それでも、彼女の音色が自分達の力になってくれるらしいという  
事は分かる。

「俺も、出るぜ」

「しかし……」

「いいんだよ。俺もこのままあいつらに好き勝手されたままいられ  
やしねえ」

「……。すまない」

ジークが二刀を、サフレが槍を構えた。

再び身体中に溢れるマナを錬氣に換えて、二人は地面を蹴って交  
戦する仲間達の下へと合  
流する。

「貫けっ！ バイルドランス 一繋ぎの槍！」

「うらあッ！！」

高速で伸びた槍の突きが一直線に敵を捉え、ジークの斬撃が彼ら  
を一挙に薙いだ。

「復活したか。よし、お前ら。一気に叩きのめすぞ！」

『応ッ！！』

状況は完全にこちらに傾いていた。

力を得たブルートバートの面々とサフレが黒衣の一団を次々と突  
き崩す。そのずっと後方

ではマルタが演奏を続け、レナやハロルドの支援隊、アルスとエト  
ナがそんな戦況を見守っ  
ている。

「皆、下がれ！」

サフレがジーク達に言って、また新たな魔導具を展開した。

手首に嵌めた緩めのブレスレッド。そこに刻まれた呪文が彼自身  
のマナによって起動し、

その指差した中空に赤い魔法陣を出現させる。

何かする気だ。ジーク達は黒衣の一団がそれを見上げ出すよりも早く、大きく飛び退いて

十分な距離を開けていた。

「弾けし灼火！」

次の瞬間、魔法陣から巨大な炎球が出現し、弾けた。

それはそのまま真下へと降り注ぐ無数の炎弾となつて黒衣の一団を飲み込んでいく。

上がる悲鳴。焼き尽くされ倒れ動けなくなる者。

そして術式が終了した時、黒衣の一団はその兵力の大多数を失つていた。

「よおし！ とどめを」

だが威勢よく追撃を加えようとするジーク達を、

「ッ！？ 止せ、退け！」

「皆、危ない！」

ブルートとエトナの声を押し留めていた。

思わず急停止する面々。

するとどうだろう。黒衣の一人がその叫びとほぼ同時に、袖口から何か丸い球を地面に投げ付けてきたのだった。

次の瞬間、辺りに舞い上がるとす黒いオーラ。

「なっ！？ これは……」

「やべえ、瘴気だ！」

それは魔導の素人ですら知覚できるほどの高濃度の瘴気。

ジーク達、最前線の面々を中心に皆は大きく後退せざるを得なかった。

濛々とその場で立ちこめる瘴気。その直撃から、

「大丈夫か！？」

「あ、ああ……サンキュ。助かった」

サフレが捕獲ロープよろしく伸ばしてきた槍の柄によって、ジーク達はごっそりと引き寄

せられて助け出される。

暫し遠くに離れて目を凝らすジーク達。

だがその瘴気の靄が視覚に薄れ始めた頃には、もう黒衣の一団の姿は綺麗さっぱり消えてしまっていた。

「……チツ。逃げられたか」

「仕方ないわよ。一応、撃退するという目的は達成できたのだし」「後味が残る結果だけどね……」

「皆、下がるんだ。急いで浄化作業をするよ！」

その後の時間はハロルドらにより浄化の魔導による後始末と、ややあつて騒ぎを聞きつけ駆けつけて来た守備隊からの事情聴取に費やす羽目になった。

立て続けの襲撃騒動の現場となった河川敷。

辺りはあちこちが破壊の跡に埋め尽くされていた。

今は夜の暗がりですら誤魔化しているが、陽が昇った後には人々は大いに驚くに違いない。

「……ふう。一段落、だな」

「ええ。やつと」

クランの代表として一番しつこく事情を聞かされていたイセルナとダンが、待機していた皆の下に戻って来た。

そこには兄らが心配でついて来てしまったアルスとエトナ。

そして、少し離れた位置に今回の一端を担いだサフレとマルタがぼつねんと立っている。

「……だがまあ、まだ俺達にとっちゃ終わってねえわけで」

ダンが、皆が二人を見ていた。

覚悟の上だったのだろう。サフレは心持ちマルタを庇うように前に立ち、唇を真横に結ん

でジーク達一団を見つめ返している。

「これだけの事があつたんだ。ジーク、リン。お前らはもういいの



かもしねねえが」

「ええ。分かってます」

「ああ……。だが、あまり酷な真似はしないでくれよ」

当事者二人に一言入れ、ダンは「分かってるよ」と心なしかの嘆息をついた。

そして団長であり友であるイセルナと、互いに顔を見合わせて頷くと、

「サフレ君にマルタちゃん……だったわね」

「悪いが少し、うちに顔貸して貰うぜ？」

クランを統べる二人はそう彼らに言ったのだった。

立て続けに起こった襲撃事件の後。

ジーク達はサフレ、マルタの両名を連れてホームへと戻っていた。営業時間もとくに過ぎた、酒場『蒼染の鳥』店内。

そのテーブル席の一角に隣り合って座る二人と対面する形で、イセルナら創立メンバーと

ジークが陣取り、団員らはその両者をぐるりと取り囲むように人垣を作っている。

「……つまり、オートマタの嬢ちゃんを助ける為にあの黒ずくめ連中からの ジークの剣

を奪って来いっていう要求を呑んだ、と」

「はい……」

ダン達は改めてサフレから事情を聞きだし、整理をしていた。

頂垂れ気味に膝の上に手を乗せ、言葉少なげに頷くサフレ。その傍らでは攫われていた当

人であるマルタが心苦しそうにこの主の横顔マスターを見つめている。

そこまでして、この嬢ちゃんを助けなきゃいけないと思ったのか……。

ダンは正直内心で唸っていた。

使い魔を持った経験などないが、そういった存在を持つ術者とはもつと淡泊な性分ではな

いのか？ 勝手な推論ながらそう思う。確かに目の前の彼女はヒトと大差ない外見だ。旅の

相棒でもあるのなら情が移っているのも分からなくないが……。

「にしても、何であいつらと戦わなかったんだ？ 俺やリンさんとあれだけやり合えるなら

十分渡り合えたらうに」

「……君は馬鹿か。自分の力を信じていない訳ではないが、一対複

数人を相手に戦うなんて

分が悪過ぎる。それに……マルタが向こうに捕らわれていたんだ。力任せに解決しようとするのはリスクが大きい」

「バツ……！？　だ、だからって俺らを狙うつてのは」

「マスターは優しい方ですから。私は、幸せ者です」

「……マルタ。そういう事は一々口にしないでいい」

「はい。マスター」

そんな中でジークは疑問をぶつけていたが、あくまでサフレは冷静に言い返していた。

一見ちぐはぐなような二人。しかしそんな主とジークを、マルタのぼわぼわとした微笑みが中和する。

サフレは小さくわざとらしい咳払いをし、自身の従者を窘めていた。

それでも何だかいい雰囲気の二人。そんな様を見たジークもまた追求する事を止め、何故

か自身まで恥ずかしくなつたように視線を逸らして頬を掻く。

(……案外、似てるのかもな。ジークもこいつも)

ちらと僅かに眉根を寄せるジークを一瞥して。

ダンはふと思考を切り替える。

そう思うと、急にフツと心持ちが軽くなつたような気がした。

ちよいと馬鹿ではあるが、こういうのは嫌いじゃない。

相手がたとえ厳密にはヒトではなくとも、大切な誰かならば全力で守ろうとする……そんな狭義心溢れる精神は。

「それにしても困つたわね。サフレ君はあくまでけしかけられた刺客で、あの黒づくめに関

しては何も知らなかつただなんて……」

「ああ。そうだな」

すると隣に座るイセルナがマイペースに呟き、ダンも頷き返して同意を示した。

この二人をわざわざホームまで連れ帰ってきたのは、そもそもジークを狙ったあの黒衣の

一団についての手掛かりを探る為でもある。

「すみません、お力になれなくて。迷惑ばかり……」

「あゝいや、そう畏まるな。知らないもんはどうしようもねえよ」

マルタがサフレが再三に渡り謝罪をするが、ダンらはもう咎めるつもりはなかった。

確かに迷惑を被ったのは事実だが、それだけ必死だったのだろう。現に彼女を取り戻した

後はこちらに加勢してくれた。

「でも驚いたね。ジークの剣が魔導具だったなんて」

「ジーク、リン。念のため確認するけど、確かなのよね？」

「ああ……間違いはない。確かにこの目で見た」

「みたいツスね。何が何だか分からないまま終わってましたけど……」

……

だからこそ話題は自然とサフレへの批難ではなく、そもそも狙われる理由となったジークの刀について及んでいく。

当のジーク本人は皆自分からないといった具合でバツの悪い顔をしていたが、このまま素

通りできる問題ではない事は確かだった。傍に立てかけられた刀の

一本をおもむろに手に取

りながら、シフォンが言う。

「おかしいよね。魔導具なら僕やイセルナ、ハロルド、魔導の心得のある皆がとつくに気付

いていた筈なんだけど」

「全くだ。何で今まで誰も気付かなかったんだよ？ それなりに付き合い長いだろ、俺達」

ダンと言ったが皆は頷けずに押し黙っていた。

皆、気付けなかったのだ。クランの一員になってからずっと、ジークは魔導は使えない、

一介の剣士だとばかり思っていた。

「……これは、可能性なんだけどね」

そんな中、ジーク本人もどう反応していいか分からずに黙っていると、ゆたりと口を開い

たのはハロルドだった。眼鏡のブリッジを押さえて視線をシフォンの握る刀に移し、

「おそらくジークの剣は、封印が施されていたのではないかと思うんだ。現に今は普段通り

のそれに戻っている。今回リンファ達が見たのは、一時的に解除されたものじゃないかな」

皆が注目する中でそんな推測を口にする。

ジークを含め、場の面々が沈黙していた。

それは多くが魔導を扱えぬ故に圧倒されていたからではない。さりと彼が口走った言葉

の通りだとすれば、それは……。

「封印？ 俺の刀が……？」

「となると、少なくとも流通している普通の魔導具というわけではなさそうだね」

「だな。何でそんな物がつてもあるが、どうして奴らが本人も知らないそんな事を知ってた

かってのも引つ掛かる」

やはり今回の一件が単なる物盗りの類では済まないらしいという事だからあって。

疑問符と不安が、場を覆い尽くそうとしていた。

「父さんと母さんの刀が、何で……」

傍らに控えさせた愛刀らを手にして、そう一人呟くジーク。

周りの団員らも、その人垣の中に埋もれていたアルスやエトナも、

そしてじつとそんな彼を見つめている手当てを受けた姿が痛々しいリンファも、それぞれが重い沈黙の中に浸る。

「……それは、追々調べればいいわ」

だがそんな沈黙を解いたのは、イセルナだった。

静かだが澄んだ力のある声。その団長の一声に皆の視線が一斉に注がれる。

「それよりも、これではつきりした事があるわね。今回の一件はまだ終わっていない。あの

黒ずくめの一団はまだ何処かで蠢いている筈よ」

そして彼女は、そう言うのと微笑を湛えた眼差しでサフレとマルタを見遣った。

「それで、貴方達はこれからどうするつもり？」

「え？ 私達、ですか？」

「……そうですね。取つてある宿に戻るのは、危険かもしれませんがマルタは小首を傾げていたが、サフレは彼女の言わんとする事に気付いたようだった。

神妙な反省顔から真剣な顔つきに。

ちらほらと互いを見比べている団員らの見守る中、彼は顎に手を当てて繋げる。

「奴らは僕らもまとめて“処分する”と言っていました。このまま真つ直ぐ宿に戻ったとし

ても、待ち伏せされて襲われるかもしれない」

「……さしずめ口封じって所か」

「あゝ、確かにそういやそんな事言ってたっけ……」

そんなやり取り。

やっと危うい状況がまだ続きかねない事を理解し、マルタはあたふたと慌てている。

そんな彼女をサフレはそっと手を握ってやる事で宥めていた。

大丈夫。今度こそ、僕が守る。

まるでそう言いたいかのように小さく頷いて。

「だからね？ 私から提案があります」

「は、はい」「……何でしょう？」

「二人とも、うちのクランに入らない？」

そして次の瞬間、イセルナがそう言うのと面々は思わず驚きの声を重ねたのであった。

「イセルナ……。お前、何言ってたんだ？」

「ふむ？ 団長の方針なら従うけど、でも彼らは事情があったとはいえ、ジークやリンファ

を襲った張本人とその連れだよ。いいの？」

「だからこそよ」

そんな皆に、イセルナはフツと笑っていた。

今回の当事者、ジークとリンファに視線を向けて彼女は言う。

「さつきも言ったように、私達もサフレ君、マルタちゃんも今回黒ずくめの一団と敵対した

訳よね？ そして狙いはジークの剣らしいという事も分かっている。向こうとしてはできる

限り余計な外野は始末したい筈よ」

「……だからむしろ、こいつらを取り込んで徒党を組んで対抗しようって事が。まあ理屈は

分かるが、ジーク達がなあ……。どうなんだ？」

「ええ……。俺は別にいいツスよ。確かにやり合いはしましたけど、事情も分かりましたし。

もう終わった事です。団長の決めたことなら、俺は従います」

「私も構わないよ。私自身、暫くは怪我で満足に戦えないだろうし、彼らなら充分穴埋めに

もなっってくれるだろうと思う。実際に剣を交えたのだから保障する」

「そっか……。ならいいんだが」

少し虚を衝かれた感じだったが、ダンもそして当事者であるジークもリンファも異存はな

かった。ダンはどうにも毒気を抜かれたようで少々目を瞬かせると、ぐるりと皆に「お前ら

もいいのか？」と意思を問い、各々の首肯を確認して取りつける。

「決まりね。それでいいかしら？ サフレ君、マルタちゃん」

「……えつと」

「は、はい！ ありがとうございます。お世話になりますっ！」

そして改めてイセルナが問い掛け、戸惑うサフレに変わってマルタが感涙に瞳を潤ませながらぶんつと頭を下げている。

やや遅れてサフレも彼女に倣うように頭を下げ、承諾の意思を示す。

ジーク達はホツと一息をついたように互いを見返していた。

「……よし。じゃあ新団員誕生か。ハロルド！」

「そう来ると思ったよ」

そして切り替えが早いのもこの業界の者達の性質で。

ダンが大きく深呼吸をして振り向くと、ハロルドは既にカウンタ―へと歩み寄り酒と肴の準備を始めていた。

「さて皆。今夜は新団員歓迎の宴といこうか」

『ういっッス！！』

ハロルドが酒瓶を片手にそう言う。

場の団員達は訓練された兵隊よろしく歓喜の声で返事を重ねる。

そして深夜の酒場で宴は始まった。

とはいっても、むしろダンらは口実を作って酒を飲みたかっただけなのかもしれない。

用意された酒と肴。それらを囲んで大いに語り、笑い、飲み食いする。

「~~~~~」

その輪の中で、マルタがハーブ片手に美しい音色を奏でていた。



荒っぽい冒険者の中では些か繊細過ぎる曲調だったかもしれないが、戦いにもこうした休息にも癒しを与えてくれる彼女の特技に、皆は惚れ惚れと聴き入り、宴の酒が進んでいく。

「……なに主役がぼつねんとしてんだよ」

そんな宴席の中で、一人そんな相棒の姿をぼうつと眺めていたサフレに、酒瓶を片手にしたジークが近付いて来た。

少し驚いたような彼だったが、もう警戒するような謂れはない。

一瞬視線を交じらせただけで彼はジークが隣に座るのをあっさりと許容する。

「飲めよ。和解の杯って事でさ。……飲めるよな？ 年格好は俺に近いみたいだし」

「ああ。今年で十九になる。嗜む程度にはイケる口だ」

「それを聞いて安心した。まあうちには酒豪が二人いるから、くれぐれも気を付けとけ？」

「……肝に銘じておく」

ジークが卓上で重ねられたグラスから二人分を取り、酒を注いだ。小振りのグラスに満たされた酒が二杯。二人はそれぞれにその透明な杯を手に取り、

「ま、よろしくな」

「こちらこそ。マルタ共々、世話になる」

カチンと静かに乾杯の音を鳴らす。

「……」

そんな二人の後ろ姿を、銀髪な黒ローブのクランの引き籠もり少女・ステラが物陰から覗き込んでいた。

何だか騒々しく皆が出て行ったと思ったら、どうも団員が増えたとか何とか。

アルスの事もあるのに、自分はどうしたらいいのだろう……？

きゅつと物陰、裏口の戸を握り締めると彼女は緊張と不安で静かに震える。

「ステラ？」

すると、ふとレナと共に給仕に回っていたミアがその姿に気付いてやって来た。

重なった沢山の皿を、軽々と片手で持ち運んでいる。

「本当だ。気になったんだ？」

ビクリと身体を震わせるステラ。しかしそれでもレナとミア、友人二人は運んでいた食器

を流しの中に放り込むと二人してずっと近寄ってくる。

「……うん。また団員が増えたんだって？」

「うん、そう。あそこでジークと飲んでいるのがサフレ。皆に囲まれてハーブを弾いて歌っ

てるのがマルタ」

「そっか。じゃ、じゃあ私はこれで」

「待って」

だが立ち去ろうとするステラを、ミアははしつと掴んで止めた。

レナが小首を傾げている中、彼女はおどおどしているステラを暫し見つめてから言う。

「……ステラも、混ざろう？」

「えっ」

「あ、いいね。折角の歓迎会だもん。無理強いはできないけど……」  
それが意地悪ではないことはよく分かっていた（もしかしたらミアは、以前のアルスの件  
のお返しのもりだったのかもしれないが）。

だからこそ、ステラはあまり強く拒むことができずに押し黙った  
ままで、

「よし。行こう」

「う、あ？ ちょ、ちょっと……！？」

「ぶぶっ。ゴーゴー」

結局そのまま友人二人にエスコートされる格好となってしまう。

「お？ ステラじゃねえか。どうだ、お前も飲むか？」

「いきなりボクらの友達に酒を勧めないで」

「なっ……。ミア、そんな冷たい目で見なく」

「……」

「す、すみません……。自重します。ハイ」

かといってダンら宴の中心、団員らはステラを見て畏まる事は敢えてしなかった。むしろ

顔を出してくれた事自体に素直に喜んでいようでもあった。

副団長の親馬鹿ぶりと力関係に、どつと団員らが酔いで赤くなつた顔のまま大笑いする。

ダン当人は不服そうだったが、かといって本気で怒っているわけもない。

「マルタちゃん。紹介するね」

「ボク達の友達の、ステラ」

「うっ。こ、こんばんは……」

女子陣は女子陣で、負に中てられた少女と魔導により創られた少女が出会いを果たす。

「こんばんは。初めまして。……ええとウィザードさん？ でもこの感じ、魔人さん？」

「ッ！？ いや、あの」

「……そうでしたか。よろしく願います」

「うん。あの、怖がらないの？」

「……？ 私は別にステラさんから何かされた訳じゃないですよ？ それにマスターにも曰

頃から『他人を肩書で判断するな』と言われています。皆さんの友達なら、きつと貴方も

いい人です」

ステラは呆然としていた。

冷静に考えればそうなのかもしれない。或いはオートマタである

からこそ、主たるサフレ

の言葉に忠実であるからなのかもしれない。

「……うん。ありが、とう」

それでもステラには充分だった。

ぼろりと、何かが一枚脱げたように涙が零れる。

「ふえ！？ ど、どうなさったんですか？ 私、何かまたドジを…

…」

「ううん。何でもないんだよ。ステラちゃんはただ、嬉しかっただけ」

「……というかその言葉。普段からドジしてるって言っているようなものじゃ……？」

彼女達は四人になっていた。

また一つ、ブルートバードに絆が芽生え始める。

だが一つだけ……例外がそこにはあった。

ダンやイセルなら大半の団員達、ミアら新生女子グループ、そしてシフォンやリンファも

加わり飲んでいるジークとサフレの四人。それ以外の。

「……………」

それは、アルスだった。

歓迎の宴。皆が束の間の享楽を愉しむ中で、彼とその持ち霊たるエトナだけは、密かに店

の外、裏口から見える中庭を眺めてぼんやりとしていたのだ。

店内で騒いでいる面々の声が意識に遠くを掠めている。

兄さんも、リンファさんも無事だった。

それでも……今の自分に、良い光は見えない。

アルスは大きいため息をつき、あの日の事を思い出す。

「……いいぜ。俺がお前の指導教官になってやる」

「！ 本当ですか！？」

「ああ」

それは自分が所属ラボを決めようとし、ブレアの下を訪れた日の事だ。

自分の過去の苦しみとそこから抱いた夢を、願いを聞き、確かに彼は自分を受け持ってくれると言ってくれたのだ。

『俺もいい加減、窓際な研究生生活には飽きてた所だしな』

だが、彼はもう一つ自分達に告げたのだ。

肩越しにじっと見据えた、冗談など一切通じない力強い眼。

『但し……。一つ、条件がある』

『条件、ですか？』

『そうだ。さしずめ、お前が俺に教えを請うに足る資格とでもいった所か』

やや不安げに問い返す自分に、ブレアは言う。

そしてその不安は……。すぐに現実のものとなったのだった。

『アルス・レノヴィン。お前の持ち霊・エトウルリーナを契約解除しろ』

淡々と、そんな条件を突きつけられると共に。

7・(0) 覚悟はあるか

「エトナを……捨てる？」

ブレアの言葉の意味を、アルスはすぐに受け入れる事ができなかった。

アルスも、エトナも、お互いの顔を見合わせる余裕すらなく、ただ啞然と肩越しに自分達に鋭く真剣な眼差しを向けてくる彼を見遣るしかない。

「どう、して……」

「そ、そうだよ。何で!？」

「何故？ よく考えればお前なら分かる事だろ？」

たつぷりの沈黙。アルスはそう動揺に震える中で呟くのが精一杯だった。

エトナと、離れ離れにならないといけない……？ あの日からずっと一緒だった相棒であり家族である彼女と？ 実感がわかなかつた。それでも身体の震えが止まらない。

当のエトナは対して弾かれたように問い詰めていたが、ブレアはあくまで冷徹な様子のみま続けた。

「お前たちが目指している研究は、魔獣や瘴気と切っても切り離せない。そんな環境の中で持ち霊 精霊の連れなんぞを同行させてみる。ただでさえ精霊族はマナに近く瘴気の悪影響を受け易いんだ。……中てられて死ぬか、最悪その場で魔獣になつちまう可能性が高い」

「それ、は……」

「……お前の意気込みやら動機は把握した。だが、現実はそのような根性論で変わってはくれは

しないんだ。お前に、自分の持ち霊が魔獣になっても研究を続ける覚悟が……あるのか？」

アルスは答えられなかった。

確かにそのリスクがある事くらいは承知だった。

でも実際にブレアの口からその天秤の選択を迫られたこの場で、アルスはすぐに決断する

事ができなかつた。傍らで、エトナが不安そうな眼で自分を見つめているのが分かる。

夢 目標が僕にはある。

でもその為にエトナを捨てるなんて……。

「これは、俺なりの親切心のつもりなんだがな。俺だって魔導師の端くれだ。自分の持ち霊

が失われる事がどんなに辛いか、分からないわけじゃない。でもな、だからこそこう言つて

いるんだ。瘴気の中てられて取り返しのつかない事になる前に自分から遠ざける。……論理的に間違っている選択じゃない筈だぜ」

「で、でもっ！」

「……いいんだエトナ。先生の言い分は、理に適ってるよ」

「あ、アルス……？」

ブレアの言葉が揺らぐ心を容赦なく打ち貫いていった。

確かに理屈はそうかもしれない。でも自分達は

エトナはそう言おうとしたようだったが、アルスは敢えてそれを制止していた。

トーンを落とした戸惑いの声が振ってくる。アルスは俯き加減のまま、怖くてその顔を見

返す事ができなかった。

「流石は主席クンだ。あくまで冷静であるなら、俺の言っている事は分かるよな？」

「……はい」

つまりこれが彼の言う条件なのだ。

エトナを瘴気から守る為に、敢えて彼女を契約解除すてゐするのか。

それとも彼女との繋がりに拘った結果、その彼女を失う末路を取るのか。

夢を追う　その為に自分の教えを請いたいならば、その覚悟を示せと。

「……………」

それでもアルスは決断できなかった。

夢を追いたい。皆が瘴気や魔獣によって悲しまない世界を作りたい。

でも、その為にエトナとの契約関係を解除する　彼女を切り捨てる選択を、アルスはど  
うしても下せなかった。

「ま、いきなり決めろつても酷だがな。そう焦ることはねえさ。  
ゆっくり考えろ。邁進す

るのか諦めるのか。持ち霊を捨てるのか拘るのか。まだ希望届の締め切りまでは日がある。

よく考えて決めることだ。……お前はまだ若くて、何より優秀な卵なんだ。もつと別の進路だつてあるんだつて事も忘れるなよ」

「……………はい」

アルスの声はとても弱々しく、か細かった。

そして暫しブレアの肩越しの眼に晒されてから、アルスはそのりと踵を返してラボに背を  
向けて歩き出した。

その動きに慌ててエトナが、しかし掛ける声を見つけられずに後を追う。

部屋を出て行く間に彼女はキツとブレアを睨んでみせたが、対してブレア当人は意に介

さずといった淡々とした表情でその眼差しを受け流し、書物だらけ



の室内に再び腰掛ける。

「…………ふう」

再び研究室<sup>ラボ</sup>内は一人だけになった。

夕暮れの日差しが無言で差し込む本の山の中、ブレアは届けるべき相手が去った中でそつ

と言の葉を紡いでいた。

「悪い事は言わねえ。こつちに…………来るな」

7・(1) 迷いの兄弟

イセルナの提案で、サフレとマルタの両名をクランの一員に抱え込んでから一夜。

ジークはまだ少々身体に残る酔いと共に起床し、何時ものように廊下の途中にある手洗い場へと足を運んでいた。

「よう。おはようさん」

「おはよう。昨夜は寝れたか？」

何時ものように、手洗い場には仲間達が集まり朝の身支度をして  
いる光景がある。

ジークが姿を見せると、彼らは何時ものように気安い挨拶を寄越  
してくれる。

「……ああ」

だが、ジークにとっては何時ものようにはいられなかった。

酔いの残り以上に心身を重くするもの。それは何よりも、昨夜自  
分達の身に起こったあの

襲撃事件 自身の愛刀を狙う存在がいるという事を知ってしまった  
たからに他ならない。

このまま朝食を取り、依頼をこなす動線故に今は六刀を身に付け  
てはいるが、そのもう慣

れ切った筈の鋼の重みが今朝は心なしか普段以上にずしりと身を引  
つ張るかのようだった。

ぼんやりと受け答えをし、皆の中に混ざる。

「あ。兄さん……」

そこには当然ながら、先に起きて同じく身支度をして顔を洗って  
いたアルスト、その傍ら  
に漂っているエトナがいて。

「お、おう。おはよう」

「うん。お、おはよう……」

ジークがその隣に立つと、アルスは何故かおどおどしたような、落ち着かないような様子ながら、それでいて何時もの微笑を作ろうと努めているように思えた。

内心頭に疑問符を浮かべつつも、ジークは正直弟のその変化に構ってやれる程の余裕を持っていていなかった。昨夜から、ずっと疑心が身体の中を這いずり回っていた。

自分の刀はどうして封印などされていたのだろうか？ どうしてあの黒衣の一団は自分達ですら知らなかった事実を把握していたのだろうか？

「……」

湧いては掻き乱し湧いては掻き乱してくる疑心を拭うように、ジークは蛇口を捻って強めに水を出すと何度も冷たさを顔に叩き込んだ。

それでも、ほんの一時的なもの。タオルに手を伸ばして顔を拭く頃にはまた同じように疑心や不安が纏わりついてくる。

（兄さん、やつぱり昨夜の事を気にしてるのかな……？）

そんな兄の様子を、アルスも傍らで心配そうに見遣っていた。

いや、この心配は……不安感<sup>不安感</sup>は彼へのものか？ それとも自身のものか？ 多分きつと両

方が緋い交ぜになってしまっているのだろう。

ただ悶々として落ち着かなくて。

アルスはタオルに半分顔を埋めたまま、同じく思い悩む相棒<sup>エトナ</sup>の背後からの視線を感じつつ密かに苦しむ。

エトナを契約<sup>すてる</sup>解除しろ。

それがブレアの提示してきた、自分の教官になってくれる為の条

件だった。

しかしアルスはその条件を呑む事などできなかった。

幼い頃、まだ自分が他人よりも導力に恵まれている事が分かる前に故郷の森で出会った、

初めてのヒトに並び立つ人格を持つ精霊<sup>とも</sup>。

あの日、悔しさで狂いそうになった時も寄り添い、共に頑張ってきたそんなパートナーを

ようやく夢の入口に立てるようになった段階で切り捨てるなど……領ける訳がなかった。

それでもブレアの言うように、このままでは彼女を瘴気によって失ってしまうかもしれないという可能性は、最悪魔獣と化してしまうリスクは、否定しようもない事実だった。

本当に彼女の事を思っているのならば。

彼の言う通りにするのが、理に適った選択ではないのか？

そんな理屈が、訴える。

「……はむ」

あれから日数だけが過ぎていく。僕は、決めなければならぬのに……。

アルスはぐるぐると身体の中をのたうち回る迷いで重い気持ちになりながらも、のそりと

棚から自分のコップと歯ブラシを取り出すと歯を磨き始める。

何時ものように朝食を摂りに酒場の方へを顔を出す。

そこにはやはり、何時のように団員らがガヤガヤと冒険者らしい荒っぽさの中で雑談し、

食事を摂って店内に散在している光景があった。

それぞれに思い煩いを抱えたまま、ジークとアルス（とエトナ）は互いを見合わせる余裕

もなく、ただ言葉少なげにテーブルに着く。

「おはようございます。はい、どうぞ。……それと、アルス君にはお弁当ね」

「……ああ」

「あ、はい。何時もありがとうございます」

ややあつてレナが二人分の朝食を運んで来てくれた。

厚切りベーコンを乗せたパンにコーンスープ、山菜のサラダ。そしてホットミルク。緩く

適度に温められ、上がる香りが鼻をくすぐる。

加えてアルスに手渡されたのは弁当包みだった。

何日か前から始まったお昼の弁当習慣。アルスがぎこちなく小さく頭を下げて受け取るのを見ると、レナはちらと肩越しにカウンター席にいたミア　この弁当を作ってくれている

本人を見遣り、優しく且つお節介気味に「やったね？」といった感じで微笑んでいた。

「あんまりのんびりしてたら、遅れるぞ」

「う、うん。そうだね。……いただきます」

ミアは照れたように眉根を寄せて、給仕を終えてこちらに戻ってくるそんな友を見返して

いたが、ジークはそれでも意識は何処か上の空だった。

ぼそつと一言、視線も向けずにパンを千切って口の中に放り込み始める兄。

そんな横顔と声色にやはり気まずく、緋い交ぜになる物思いが心苦しく、アルスは苦笑いを作りつつそれに続いた。

何時も通りに丁寧に味付けされた、美味しい筈の料理。

だがブレアからのあの言葉以来、こうした一時ですら気分が重く感じられてしまう。

「で、飯は基本的にこっちの酒場で摂るんだ」

「ハロルドさんが店主をやってんだよ。うちのクランの副収入だな」

「俺達も回り持ちで何人かヘルプに入ってる。お前もここに慣れたら面子に入れるからな」

そうしていると、また宿舎の方から店内に数名の団員らが入ってきた。

「分かった。料理……か」

「大丈夫ですよ。お手伝い程度ならマスターにもできます」

そんな彼らが連れていたのは、サフレとマルタだった。

どうやらクランの新人として皆にここでの生活を色々と教えて貰っている最中らしい。

フリーランスの冒険者生活に自炊は馴染みがなかった（基本的に点々と宿を変えるため）

からか、サフレは少し不安そうに僅かに眉をひそめていた。そんな主を、ほんわりと微笑んでマルタが励ましている。

(……主従、か)

アルスはぼんやりとそんなフレーズを思いながら、もきゅもきゅとパンを咀嚼していた。

自分も、エトナとは契約関係でいえば似たような間柄になるのかもしれない。

ちらと視線を上げてそのエトナを見遣ってみる。彼女はやはり自分と同じくぼうつと物思

いをしていたようで、やや遅れてからこちらの視線に気付く。

「しかし……本当に良かったのかい？ マルタ君と同じ部屋で」

だがそんな場の雰囲気も次の瞬間、彼らの分の朝食をカウンターに出しながらそう訊ね

てきたハロルドの言葉にはたとざわめく事となった。

「何い！？ 聞いてねえぞ!？」

「ほ、本当なのか？ サフレ……?」

団員らは知らなかった事らしい。彼らはハロルドのその一言を耳にすると、一斉にサフレ

へ詰め寄り始める。

「ああ。旅先でもそうして来た。宿代の節約にもなるしな」

「なんてこった……。折角の新しい女の子が、また本命持ちだなんて……」

「しかも既に金髪イケメンの毒牙に掛かっていた。鬱だ……」

「失敬な言い方だな。マルタは僕の従者であつて、そういう関係では」

「そうですよ？　そもそも被造人わたしたちに生殖機能はありませんし」

「……マルタ。お前は少し黙っていくれ」

「ふえ？　でも事実ですよ？」

「それはそうだが……。た、頼むから誤解を招くような発言は……控えてくれ」

サフレ自身は変に勘繰られることに眉根をひそめていたが、むしろ当の彼女自身の又ケた言動に苦慮していた。

好意と忠誠があるからこそなのだろう。しかし彼は、頭に疑問符を浮かべつつも了承する

彼女に少し齒切れを悪くしている。

「……あんまりサフレを弄るもんじゃねえよ。昨日の今日なんだ。先輩おれたちがいきなり寄っ

て集って困らせてどうすんだよ」

「う、うるせえ！　お前には……お前だけには言われたかねえよお  
お！」

「そつだよ、お前はいいよ。レナちゃんやミアちゃんや、ステラちゃんまで……ぐすん」

「……。何を言ってるのか分からんが、とりあえず八つ当たりされてるのは分かった」

ジークがそんなやり取りを遠巻きに見てぼつりと苦言を呈していたが、逆にシンクロした

反応を皆に返されて心持ち逆襲されていた。

理不尽な。そう言いたげに呆れ顔で押し黙ると、ジークはくいとミルクを喉に流す。

「そついやジーク。お前、今日の予定空いてるか？」

するとそれまでカウンター席に着いて一服をしていたダンが、ふと声を掛けてきた。

「ええ。空いてますよ。……ちょっと調べ物がしたくて」

「そうか。じゃあ飯食ったらサフレ達と一緒にギルドに行つて、こいつのクラン参加申請を  
して来てくれねえか？」

「俺が、ですか？ でもそついうのつて団長とかが立ち会う方がいいんじゃない……」

「イセルナはリンを連れて病院に行つてる。ハロルドが回復魔導で傷を塞いだとはいえ、怪

我人には変わりないからな。俺も抱えてる依頼が立て込んでて時間が取れねえし。そもそも

お前は発端だろ？ 二人の面倒くらい見てやれ」

「そついう事なら……。了解ッス」

ダンが椅子を回して話すその頼みを、ジークは頷いて受け入れていた。

そんな二人のやり取りを、事の発端の片棒を担がされた者として、リンファを負傷させた

張本人としてサフレ（とマルタ）は言葉なくバツの悪い表情で見遣つている。

「なら、僕も同行しよう」

そして一連のやり取りを見ていた、別席のシフォンもそう申し出た。

食後の紅茶を嗜みながら、ゆつたりと落ち着いた声色で言う。

「要は参加するクランの誰かが 特に古参メンバーが立ち会つているのが望ましいっていい

う事だから。僕も創立メンバーだし、事務局の方からも難色は出な



いと思うよ」

「それはありがてえ。よろしく頼む」

悩みの気色も、仕事の話となるとジークは表情を心持ち潜めさせられるように思えた。

或いはそれだけ、今回の襲撃騒ぎの件で責任を感じているのかも  
しれない。

(責任、か……)

アルスはそう兄達がやり取りをしている間にも食を進め、最後の  
パンの欠片を咀嚼し飲み

込んでいた。ぼんやりと、日々起る事態に対処していく彼ら冒険  
者という存在が自分には  
眩しく思える。

「アルス。そろそろ出ないと……時間」

「えっ。あ、本当ですね。そろそろ出ます。ごちそうさまでした」

「うん……後はボクが片付けておくから」

「はい。ありがとうございます」

すると、レナと共に給仕に回っていたミアが少し逡巡しつつ声を  
掛けてきた。

言われて懐中時計を取り出して確認してみれば、確かにそんな頃  
合。

弁当包みを足元に置いていた鞆の中に詰め、持ち上げ肩に引っ掛  
ける。

「じゃあ……。行ってきます」

そしてジークやミア、場のクランの皆の声に送り出されて。

アルスはエトナを伴い小走りで駆け出しながら店を後にしてゆく。

息が、歩みが弾む。しかしそれらは爽やかではなかった。

ホームを出発してアウルベルツの街中を、ここ一月近くで通い慣  
れた学院への道に行く。

大通りに差し掛かり、往來が増えてきたのに合わせるようにアル

又は徐々に小走りの足を  
緩めて徒歩になっていった。時刻はまだ朝方なのだが、通りには既  
に中々多くの人々がその  
人の波という全体を作っている。

「……」

往来の中で、そつと目を凝らしてみる。

すると目に視えるのは、中空を漂う千差万別な精霊達の姿だ。

一見すると何かのマスコットのような。比率的なことを考えても  
彼らは皆中級・下級の部  
類に属する精霊達だろう。

こうして人々が文明を営む中でも、彼らは確かにそこに在る。

「アル、ス……？」

急に立ち止まってぼんやりし始めたからだろう。はたとエトナの  
控えめな心配の音が振つ

てきた。アルスは彼女を見上げ、静かに苦笑だけを返して再び歩き  
始める。

色々と考え過ぎているのかもしれない。

僕はただ、救いたかった。ヒトだとか精霊だとか……そんな線引  
き以前に。

思えば、それはエトナと出会った頃には既に始まっていたように  
思っサンフェルノ。

故郷近くの森。よく兄さんや村の皆と遊びに行っていた森。

僕はその森が大好きだった。

空気が美味しい、緑の豊かさが目に優しいというだけではなくて  
そこにはたくさんの精霊達を視ることができたから。

千差万別の姿をした生命いのちの化身達。

だからなのだろう。皆の穏やかに漂う姿を見ていると、僕もまた  
心穏やかに微笑ましくな  
ることができた。

あの頃の僕はリュカ先生に教えて貰うまで、自分が見えているそのセカイが他の人には見えていないという事に中々気付けなかった。

(……あ。またあの娘だ)  
時分はちょうど、リュカ先生に僕の導力を調べて貰った頃だったと思う。

村の中で数少なかった“見える”僕は、森へ遊びに行く度にしばしば目になっていたものがあつた。

それは、一人の女の子。

踊り子風……といえれば良いのだろうか。ふわりと若干余裕のある、上着と切り取り袖と腰

に巻きつけるタイプのミドルスカート。ちょっと当時の僕からすれば(今でも時々思うのだが)露出が多いかなと思える格好だった。

しかし何よりも気になったのは、彼女が淡い緑のオーラを纏っていたこと。

そして 見かける時はいつも、森の中でも一際年季の入った大樹の上に座っていたという点だった。

「……兄さん、皆。ちょっと待ってて」  
「? おう」

森を訪れその大樹の近くを通り掛かる度に見かけたその姿。……  
いつもぽつねんとして、  
寂しそうにしていたその姿。

だからあの日、僕は意を決して彼女に話し掛けてみたのだ。  
「あの。お姉さん、どうかしたんですか?」

僕はあくまでごく普通にそう言ったつもりだったのだけど。

「えっ!? き、君。私のこと、視えてるの……?」

「は、はい。見かける度にいつも一人だから気になって……」

「……そ、そうなんだ」

彼女はとても驚いていたようだった。

だが僕が視える人間だと言葉の端から察してくれたようだった。

目を見開いて僕 正確

にはその後ろで頭に疑問符を浮かべている兄さん達を含めた皆を腰を降ろしていた枝の上から暫く見下ろすと、彼女はふわりと重力などものともせず舞い降りてくる。

緑のオーラが綺麗だった。そして何より僕以外に彼女は見えていない。

やっぱり……彼女は精霊だったのだ。それも、僕らヒトと大差ない姿をし、言葉もきちん

と口頭で通じる程の力を持つ。

「君……名前は？」

「えと。アルス・レノヴィンです。で、こっちが兄さんのジーク。それから」

僕と彼女はこうしてようやく接触を果たした。

心なしか、自身の存在に気付いてくれた事に嬉しそうな表情<sup>かお</sup>。だから僕も勇気を出して話

し掛けてみてよかったと思えた。

「……ねえ。その、やっぱり君 アルス以外には私のこと、見えてないんだ？」

でも彼女はフツとそう言ってやっぱり寂しそうで。

「は、はい……。僕の方が特殊みたいなんです。導力が他人よりも高めだから」

「アルス、さつきから何ぶつぶつ言ってんだよ？」

「早く遊ぼうぜ」

「待てよ。……アルス、そこに精霊がいるんだな？」

「うん。緑のお姉さんが一人、この樹から降りて来てくれた所」  
だから、僕は思った。

痺れを切らしつつある皆を窘めてくれる兄さんに頷き返しなが  
ら思った。

彼女は……独りだったんじゃないだろうか？

勿論、他の精霊どうぶくもいっぱいいる。だけどこれだけ僕らと普通に話  
ができるだけの自我を備

えた精霊ともなれば、それだけではやはり寂しさを覚えてもおかし  
くない。

「……ねえ、お姉さん。もし良かったら僕らと一緒に遊びませんか  
？」

だから、僕はそう決心して語り掛けていた。

「え。でも、私……」

「大丈夫です。素人判断ですけど、これだけ話せばきっと顕現も  
できると思いますし」

「……う、うん」

ケンゲン？ 兄さん達は小首を傾げていた。

でも僕には半ば直感的な確信があった。

力ある 大抵の場合ヒト以上の自我も持っている精霊は、自分  
の意志でその姿を見せた

り消したりすることができる。魔導の入門書で得た知識だった。

彼女は少し戸惑っていたものの、何度か両手を開いたり閉じたり  
していた。

顕現の経験があまりなかったのだろう。だからこそ人恋しそうな  
風に僕には思えたのだ。

「……」

そして、ふわっと優しい微風が吹いて。

次の瞬間、彼女は僕らの前に顕れていた。

兄さん達が「おおっ！？」と驚きと感嘆の声を上げる。

「ど、どうかな？ 私、皆に視えてる？」

「はいっ。バッチリです」

「ああ。そんな姿だったんだな」

「おー……。すげー」

「へえこれが精霊かぁ……。オレ達とあんまり変わらないんだなあ」  
僕と違い精霊を直に視る経験がなかったので、当然といえば当然の反応だったのだけど。

暫し僕は彼女の顕現の成功の前に、少々様々な反応で色めき立っていた。

少し恥ずかしそうに苦笑する彼女。でも、僕にははにかんで嬉しそうにも見えた。

「よし。じゃあ、ねーちゃんも混ぜて遊ぼうぜ。いいよな？ あ。えつと……」

ややあつて兄さんが皆をまとめるように言う。

だけど、僕らはまだ肝心の事を 彼女の名前を聞いていなくて。

「？ ああそつか。私、まだ名前教えてなかったね」

笑う。今度こそ嬉しそうに。人と繋がれて嬉しそうに。

「私は樹木の精霊・エトウルリーナ。……呼ぶ時は、エトナでいいよ」

その言葉に僕も兄さんも皆も、口々によろしくと笑って一つの輪になって。

それが僕らの彼女との、エトナとの出会いで。

「アールス！」

はたと意識が幼少の光景から現在いまに戻ってくる。

呼び戻してくれたのは、今や随分と聞き慣れた声だった。

学院の建物が見える辺りまで、正門に続く坂道の途中を歩いていたアルスはその声のした後方に振り返る。

「いよつ。おはようさん」

「おはよう。アルス君」

あれから何年もの年月が経った。あれから友となったエトナも、魔導を学び始めた自分の

持ち霊になりたいと申し出てくれて契約を結び、僕らは今に至っている。

アルスは思った。変えたくなくても、僕らは何処かで変化を続けているものなのだ。

それは他人との出会いであるかもしれないし、或いは別れなのかもしれない……。

「……おはよう。フィデロ君、ルイス君」

心持ちトーンは落ちても、物腰だけは穏やかに。

内心の煩悶や思考を紛らわすように、アルスは駆け寄ってきた学友二人にフツと笑みを返す

すことに努めていた。

朝食を摂ってからの午前中。

ジークとシフォンはサフレ、そしてマルタの両名を連れてギルドにやって来ていた。

相変わらず冒険者で賑わっている館内。ジーク達はそんな一種の荒々しい空気の中、窓口へと歩を進める。

「え〜っと。うちのクランの新入りを登録しに来たんですけど」

「クラン加入ですね？ では既存メンバーの方のカードを提出下さい」

「僕だね。どうぞ」

窓口の職員からそう言われ、シフォンが自身のレギオンカードを差し出した。

それを受け取り、窓口の彼女がリーダーダ機器に通してデータを確認。背後に広がるデスクで

で事務をこなしている他の職員らもにわかに手先が慌しくなる。

「……はい、確認しました。クラン・ブルートバードですね。では新規加入の方はこちらの

書類にご記入を。カードも提出下さい」

「はい」「分かりました」

次いで差し出されたのは、青いボードにクリップされた数枚重ねの申請用紙。

サフレとマルタは自分達のレギオンカードとそれらを交換するよ

うに受け取ると、窓口

に置かれている筆立てからペンを取り、必要事項を埋め始めた。

(……?)

だが、すぐにジークは一抹の変化に気付く。

サフレのペン先が止まっていたのだ。見てみれば、出身地や名前



の欄のようだった。

そういえば二人がフリーランスの冒険者とは聞いていたが、何処の生まれなどかは聞いていなかったっけ……。

「……マスター」

「問題ない。何時も通りに書いてくれ」

その様子にマルタも気付き、声を掛けていたが、サフレはあくまで平静な表情を崩さず  
にそれだけを言うと、再びペン先を動かし始める。

名はサフレ・ウィルハート。

出身地はフォンティム。レスズ都市連合 概して独立独歩の気風が強く、都市国家が乱

立している東方においてその覇権を握っている、有力領主らの連合体 の領内である。

(こいつらは東の出か……)

カリカリとペンを走らせて二人が書類に項目を埋めていく。

そんな彼らの様子を傍らで見守りつつ、ジークは暫しぼんやりとする。

「ジーク。そっちは任せたよ」

するとシフォンが、職員から返却されたレギオンカードを受け取りながら言った。

「ん？ ああ。もしかして依頼持ってたのか？」

「いや……そうじゃない。ちよつと資料室に行っているよ。調べ物があるんだ」

「そっか。分かった」

ジークははたと気を遣おうとしたが、そういう理由ではないらしい。

書類にペンを走らせていたサフレとマルタ、そして頷いたジークに静かに微笑を残すと、

シフォンはゆたたりと踵を返して、がやがやと雑音を奏でている冒険

者らの人ごみの中へと消えていく。

館内の一角にある資料室は、ラウンジとは違いしんと静まり返っていた。

先ず何よりも全身の感覚に訴え掛けてくるのは、年季の入った紙やインクの臭い。

一応検索用の端末は設置してあるが、そのスペースの規模を遙かに上回る紙媒体の資料が

ずらりと並ぶ本棚の中に詰め込まれており、何処か無言の威圧感さえ漂わせている。

(……さて、と)

室内をざっと見渡してみても、人の姿はせいぜい数人。

シフォンは漂ってきた空気に気持ちを引き締めると本棚の山へと歩き出す。

先ずは保管してある中からここ三ヶ月間の新聞を見た。日付を確認し、その内一枚を取り

出す。そこには『結社・鉾山都市でテロ』の見出しが躍っている。

次いでそれを片手にしたまま、端末の前に座って操作し、検索を掛ける。

結社“楽園の眼”

そうキーワードを打ち込んで、シフォンは表示されたアーカイブの数に内心驚いていた。

魔導で映された画面を、半球状の機器に手を乗せて転がす事でスクロールさせていく。

最近起きた事件ではほんの数日前に、もっと古くを遡ってみれば十年や二十年 いや百年単位での記録が残されている。

(思っていた以上に暴れ回っているらしいな……)

流石はレギオンだ。こういった荒事に対する情報網はかなりしつ

かりとしている。

シフォンは今更ながらにこの業界に身を置いた事に密かに感謝していた。

“結社”の暗躍は、昨今多くの国を悩ませている。

だが実は、その歴史は一朝一夕程度では済まない。少なくとも記録の上では現在の世界政  
府たる王貴統務院おうきとうむいんの成立前後から およそ九百年近く前からその存在は確認されている。

『ヒトの手により掻き乱されし世界を、本来の在るべき姿に戻す』

“結社”の掲げる主張はそんな守旧的なベクトルだ。

しかし……その手法は、どう捉えても弁護の余地はないとシフォンは思っている。

一言でいえば、過激派なのである。

保守原理主義を抱えるテロ組織 自分だけではなく、世の殆どの人々の認識はそうした具合で一致している。

文字通り、世界の開拓を進める開拓者関係者やその象徴である機巧技術勢力への、或いは

そうした“開拓派”を支援する勢力全般に対する、執拗なまでの妨害行為<sup>□</sup>。

更にそれらに加えて、彼らは異種族のカップルに対してもその攻撃の矛先を向けている。

曰く「純血を脅かす患者」だからなのだそうだ。

……馬鹿馬鹿しい。

飛行艇や“導きの塔”など、大陸同士の移動手段の乏しかった太古ならいざ知らず、現在

は人も物もその交流は活発に行われている。その中でそれまでとは違い、恋愛が種族の垣根

を越える事は当然の成り行きでもあるのではないのか。

それに、各分野の研究でも“異種族同士から生まれる子は、およ

そ六割弱が母の血を濃く

受け継ぐ傾向にある”という事実が弾き出されている。

女系種族である女傑族などはその好例だろう。

尤も、ジークのように男性のアマゾネスもいない訳ではないが…

…。

しかしそんな強引な思想や行動にも関わらず、彼らの勢力は今や世界各国を悩ませる程に巨大化している。

要因はいくつかあるのだろうが、やはりそれは開拓に邁進している今日の世界に対して、いわゆる保守派だけでなく、雑多な不穏分子も含んだ不満を持つ者が少なくないからなのだろう。結社が、そうした者達の受け皿になっている現実が存在してしまっているのだ。

「……………」

検索を掛けて出てきた結果を転写印刷してメモにし、シフォンは本棚の山と格闘した。片

つ端から結社が関与した事件の資料を洗い出す。

そしてテーブルの一角に陣取りそれらを積み上げてみると、これもまた山のような山があった。

それでも彼は文句一つ言わず、特に最近の事例を中心に一つ一つ目を通して始めた。

一番最近起きた大きい事件はやはり、西方の鉱山都市で起きたテロ事件だった。

飛行艇 開拓に必須な機巧技術の源はこうした鉱工業に依る部分が大い。だからこそ

結社は執拗にこうした拠点をつけ狙う。

そこでの手口や、事件後すぐに世界中に発信された犯行声明。

何より、その際に姿を見せた構成員が皆“黒衣とアルカイックな仮面を纏っていた”点。

結社の特徴と符合する。

やはり、今回の件も奴らが。

「エデンの眼、かね」

そうしていると、不意に背中に声が掛けられた。

それだけ集中していたからなのだろうが、シフォンはハッと我に返って振り向いていた。

そこには顎髭に白髪を混じらせた一人の冒険者が立っていた。

だが彼は単に年老いている感じはしない。それは貫禄や、鍛えられた隆々とした身体を目

にしたからなのだろう。

シフォンが黙ったままいると、老練の冒険者はテーブルの上の資料を一瞥し、言った。

「悪いことは言わんよ。奴らに下手に関わるな。……命が幾らあっても足りんぞ」

だがシフォンは素直に頷くことは決してしなかった。

一度何度か静かに目を瞬かせた後、ぐっと目を細めて平静を装いつつも言い返す。

「分かっています。でも、僕は奴らを許せない。このままじゃ、きつと……」

「……そうか。あんたのような古種族エルフですら、奴らは敵に回すとはな」

老練の彼は敢えて諫め続けるのを止めたように見えた。

しかし、その眼には間違いなく嘆息の色が混じっているのが分かる。

「無粋な真似をすまないね。……だが、くれぐれも深入りはしない方がいい」

「……お言葉は、受け取っておきます」

見据えながらそう言われ、彼はフツと苦笑いを漏らしていた。

そのままゆたりと身を返して外へと出て行くこうとする。

「まあ、死なない程度にな」

そう捨て台詞を残して。

シフォンは暫し黙したまま彼の立ち去った方向を見遣っていた。  
いや……睨んでいた。

それは、普段物腰穏やかな筈の彼には珍しいもので。

「お。ここにいた。やっと見つけたぜ」

「うわあ。本や新聞がいつぱいです……」

すると今度は反対方向から声が聞こえた。

振り返れば、ジーク達三人が自分の姿を見つけて近寄って来ている。シフォンはごく自然

に、しかし捲っていた資料を意図的に隠すようにその上に裏返しにした本を積む。

「申請終わったぜ。これでサフレ達うちのメンバーとして仕事ができる」

「立会いありがとう」

「何。途中で僕はこっちに來たんだし、カードさえあればいいだけだよ」

振り向いて受け答えしたシフォンの表情は、元の穏やかなそれに戻っていた。

小首を傾げて書類の山を見遣っているマルタを僅かに横目に捉えてから、

「一旦ホームに戻るつもりなんだが……。まだ掛かりそうか？」

「ああ。先に戻っていてくれ。僕はもう少しここで調べ物を続けることにするよ」

「ん……。分かった」

念の為にと訊ねてくるジークにそう返す。

「それじゃあ、行こうか」

「ああ」「はいです」

少し怪訝に資料の山に目を遣ったジークだったが、それも数秒の事ですぐにサフレとマル

タを促すと資料室を後にしていった。

再び、室内は周囲には人がいなくなつた。

しんとする書の威圧感の中の空気。

「……貴様らは、また僕から大切なものを奪うつもりなのか？」

するとシフオンは彼らが出て行つたのを再確認すると、

「そうは、させない」

そつと重ねていた本を除けて、資料の中の黒衣達に独りごちる。

静寂から騒々しさへ。

ジーク達は資料室を出て再びラウンジに戻つた。

「……調べ物、ねえ」

がやがやと相変わらず冒険者達が室内に屯している。ジークはそんな彼らをぼんやりと眺

めながら誰にともなく呟いていた。

「一体何を調べていたんでしょう？」

「分からない。だが、予想ならできるな……」

マルタは小首をかしげ、サフレはじつと目を細めてジークの背中を見ている。

するとサフレは数拍間を置いて何かを考えるようにすると、その後ろ姿に声を投げた。

「ジーク。僕らも調べてみないか？」

「あ？ 何をだよ？」

「隠さなくてもいい。気になっているんだろう、自分の剣の事を？」

「……。まあ、な」

サフレに小さく指差された、自身の腰に下げた愛刀達にちらと目を落とし、ジークはか細

く頷いていた。

考えれば無理もないだろう。何せ、サフレはあの変化を直に味わつた本人なのだから。

「でも調べるつつつてもどーすんだよ。もうあの時みたいになつてねえし、どうやったのか

も俺には分かんねえし……」

「ああ。だが、その剣は間違いなく魔導具の類だ。直接その洗礼を受けた僕が保証する」

少し意地悪く、だが真面目に。

ジークはバツが悪く苦笑いを零したが、質問を付け加える事を忘れはしなかった。

「しかしよ。団長やハロルドさん、シフォンだって気付いてなかったんだぜ？ 戻ってもう

一度聞いてみた所で進展があるとは」

「クランの皆にじゃない。いるじゃないか。この街には、専門家が」

「……専門家？」

数度、目を瞬く。

ジークはすぐにその意図に気付けなかったが、サフレの傍らのマルタはそうではなかった

ようで、なるほどとポンと両手を合わせる。

「そうだ。魔導具 魔導の専門家が集まっている場所が、この街にはあるだろう？」

ハツとして。

ようやく気付いたジークに、サフレはコクリと頷いて言った。

「そう……。魔導学マカデミー司校だ」



常識というものは、しばしば時代の流れや新たな発見によって覆される。

(あつた。これだ……)

時刻は午後の夕暮れの少し前。

アルスは学院の図書館に足を運び、ある文献を探していた。

多くが埃を被った本棚の山の中、ようやく目的のそれを見つけて

アルスは人気も疎らな館

内の一角の席に着き、その分厚い冊子を広げる。

その表紙には『新聖暦七八五年度・アカデミアレポート』の文字。

もう二百年近く前の論文集であつたが、流石はアカデミアの関連

機関だつた。館内にはこ

れまでに発行されたレポートの大半が所蔵されていた。

(七三号、七三号……あつた)

そしてアルスが目次を一瞥し、少しもたつきながら捲っていった

ページにはこう題された

論文が載せられていた。

『瘴気ストリウムの存在理由と魔流循環に関する研究報告』

通称・七三号論文。

今から二百年以上も前、アカデミアレポートにて掲載された論文である。

この論文が一躍人々の話題を搔つ攫つたのは、その内容にあつた。

魔獣は、世界にとって必要不可欠な存在である。

その論旨をざっくりと説明するならばそんな所であるのだろう。

それまで魔獣を忌避の念

を込めて“悪”としてきた社会に対し、論文の発表者たるライルフ

エルド博士は膨大な調査

データと論理的思考を展開し、その再解釈を成功させたのだ。

これは魔導師にとっては今や常識になっているのだが……瘴気が生じる理由は、魔導そのものにあると言ってもいい。

即ち、魔導の行使が精霊の起こす奇蹟（現象）をより多くし、結果としてマナのより多くの消費、その劣化、瘴気発生リスクを高めているという指摘である。

だがそれはあくまで“過剰に使われた場合”の話だ。

だからこそ、魔導を実利実益に積極的に転用していく事に対して批判をする者達も多い。

七三号論文は、ある意味でそんな今の時代の傾向を予見していたのではないか。アルスは個人的にそう思っていた。

何故魔獣が存在するのか？ それはアルス自身にとっても長く疑問であつて。

そして多くの文献を探し求めては読み漁った中で出会ったのが、この有名な論文だった。

曰く、魔獣とは瘴気を自身の中に抱え込むことにより、一時的に世界のマナの総量に対する瘴気の割合を減らす作用を担っているのだという。つまり自然の自浄能力、マナの総量自体が瘴気を中和していくプロセスを補助しているというのだ。

実際、瘴気が発生しても全てがヒトに害を及ぼすレベルにはならない。

そこには自然の自浄作用が、魔獣の存在が、人々を生き物達をそのエリアから追い払うといった作用が働いているとも考える事ができる。

そうした科学的・論理的な理由を、博士は見事に証明してみせたのである。

しかし……結論から言うと、それが悲劇の始まりだった。

論理的な説得力、正論は劇薬となった。

それまで魔獣を絶対的に悪としていた各種信仰の徒、魔獣を狩る事がある意味存在意義としていたレギオン、そして何よりも今まで信じていた「常識」を否定された民衆からの猛烈な抗議が各地で巻き起こったのである。

当時の記録を見る限り、その様相はまさに喧々諤々であっただけだ。

画期的な発見・論文だと賞賛する真理を求める学者達と、これまで培ってきた伝統や常識を穢されたと錯覚し怒り狂う（主に守旧派の）市民達。

各地で博士とアカデミアに対するデモが続き、少なからぬ者達が暴徒と化した。

アカデミアは勿論、各国政府も鎮静化に力を尽くしたが“劇薬”に怒り狂った人々の怒涛のパワーはそんな権力者らでも止められなかった。

そして、そんな中で悲劇は起きる。

人々の反発にも屈せず説明と説得に奔走していた博士らが、公衆の面前に突如として現れた一人の青年の自爆テロによって帰らぬ人となってしまったのだ。

世間は大いにざわついた。すぐに調査が行われたが、当の青年は勿論即死。代わりに彼の

自宅から見つかったのは「信仰を穢す不屈き者に、神の鉄槌を」と書き記された青年直筆の

遺書 いや、犯行声明文。

だが、皮肉にもこの一件が互いの激突を收拾させる切欠になっていった。

言い過ぎれば、自分もあなるかもしれない……。

そんな自己保身の念が人々に自粛の方向へと走らせたのである。

かくして、このアカデミア史上最悪の不祥事 真理の敗北、通

称「七三号論文事件」は

一先ずの幕を降ろした。

虚実が、人々が心地よいと思う虚実が、真実を叩き伏せたのである。

それでも尚、今もまだこの論説に対する見解は人々によって大きく分かれている。

後世、多くの学者がこの学説を再検証し間違いないと発表し続ける一方で、自分達の教義

に反するものとして頑なに認めない信仰勢力も多く残存している。

魔獣に対する、魔人に対する敵意と偏見は……今も根強く人々に植え付けられている。

「……………」

それでも、アルスには大きな影響を与えた論文だった。

根本的なセカイのシステム。だが、それまでただ魔獣を憎み撲滅する事ばかりを考えてい

た頃とは違い、何とか共存していけないか 自然の自浄能力だけ

ではなく、瘴気を生み出

す一端となっている自分達ヒト自身が、それらを浄化する術を生み出してゆくべきではない

のかと考えるようになった。

そしてそれは、やがてアルスの夢にもなった。

瘴気は、魔獣は、根本的に消滅させる事はできないだろう。

生命に不可欠なマナの一部たる瘴気が消滅してゆけば、いずれマナ自体も減ってしまう。

魔獣は確かに人命を奪うかもしれないが、その存在がより大きな被害を抑えている。

だからこそ、自分の魔導はそんな瘴気を浄化する為に そして人々を救う為の力として

究めていきたいと思った。

幼い頃より、自分には見えていたマナの流れ。精霊達の姿。

この豊かな世界を、悲しみに満ち溢れたものにだけは、したくない。

(でも。ブレア先生は……)

論文を読み直しあの日の想いを掘り起こしても、アルスの脳裏にはブレアから告げられた条件が蘇る。

エトナを捨てる。自分の夢の為に、大切なパートナーを。

「……アルス」

迷いは隠し切れずに伝わっていたのだろう。いや当人だからこそ分かっていたのだろう。

彼女はふよよと漂いながら、哀しく心配そうな声色と表情を投げ掛けてくる。

アルスは冊子から顔を上げ、微笑み返してみせた。

しかし、その表情はやはり辛そうだった。無理をした微笑だった。

「ねえ。エトナは……」

「う、うん」

「……。いや、何でもない」

訊こうとしたが、結局止めてしまった。

もう何年もの付き合いだ。契約によって結びついた相棒同士だ。

お互い今、ブレアの言葉

を受けて何を思っているかくらい、容易に想像できている筈だった。

だからこそ、口に出す事が憚られた。

エトナ。君を守る為に、契約を解きたい。

そんな事言えば、彼女は拒むだろう。もしかしたら泣かせてしまいかもしれない。

「……帰ろっか」

今日も、決断できなかった。

アルスは冊子をパタンと閉じると、静かに言う。

辺りはすっかり茜色に染められていた。

学院に残っている生徒も徐々に減り始めている。夜間の講義もあ

るが、兄が心配してくる展開が予想できていたので、よほど予定が詰まっていけない限りは夕方までに済ませるようにしている。

ぼんやりと陰鬱な気分。

「よっ、アルス」

「兄さん……？ それにサフレさんにマルタさんも」

「やあ」「お迎えに上がりました」

だが正門へとやって来ると、そこには兄と、先日新たにクランの一員となった二人が自分達を待っていたのだった。

一度ホームに戻って軽い昼食を摂った後、ジーク達は学院へと向かった。

サフレの言うように、ここには魔導師がわんさかと居る。

専門家の眼なら、愛刀達についてより詳しい情報が得られるのではと思ったのだが……。

「また君か。今日も弟さんに用事かな？」

「いえ……魔導具について調べ物をしたくて。そういう専門家、いるでしょ？」

「そう言われてもなあ。自分達はただの警備員だからな」

「そういう事なら、事務局で訊いた方がいいと思うぞ」

先ずは守衛達に呼び止められて怪訝の眼を向けられ、たらい回し的に。

「アポイントなしの、個別の問い合わせには対応しかねますね」

「えっ？ アポ……？」

「……まあ、そうなるかもしれないとは予想はしていたが」

次いで事務局へと顔を出して話してみても、返ってきたのはそんな事務的な拒否で。

ジークは少しムツとなったが、サフレは慣れているのか窓際に背を預けて涼しい顔をして

いた。暫くジークは対応してきた事務職員と粘っていたが、やがて諦めて戻ってくる。

「チッ。何だよ、俺の事をどいつもこいつも余所者扱いしやがって……」

「間違っではないだろうか？ 冒険者は基本的にこっちは違う。」

君の弟が在籍していると

いうだけの繋がりだよ」

「そうだけだよ。これじゃあ何も進展しねえぞ」

「では専門書を見てみますか？ 途中、図書館があるのが見えましたけど」

「……それはやめとく。俺に学問の本とか、拷問だから」

マルタはそう提案したが、ジークは苦笑してやんわりと、割と本気で首を横に振った。

「物に訊くよりは人だ。生徒を捉まえて訊いてみよう」

だが ジークのそんな方針は、やはり上手く回らなかった。

再び構内に出ると通り掛かる学院の生徒に魔導具について、自身の愛刀についての見立て

を訊ねてみていったのだが、まともに取り合ってくれた者は数えるほどしかいなかった。

無理からぬ事ではあったのだろう。

学問に浸かって生きてきた大半の学院生らにとって、ジークのように剣を下げた見知らぬ

青年にいきなり声を掛けられれば何事かと思う筈だった。

「す、すみません。自分は分かりません……」

「え？ お、おいちよつと……。何も取って喰うわけじゃ」

「……すまないね。手間を取らせた」

「勉強頑張つて下さいね」

サフレやマルタが荒っぽいジークの緩衝材役を果たすものの、自分たち冒険者という存在

は彼らにとって別世界の人間とでも思われているらしい。

結局、ジーク達はろくに聞き込みする事も叶わずに、ただ時間を浪費するだけになってしまっていた。

「……参つたなあ」

気付けば、時刻はたっぷりと昼下がり。

ジーク達は一旦聞き込みを中断し、構内のオープンテラスの一角に着き暫しの休憩を取っ



ていた。テラス内のスペース、或いはその外側の学院の通路に学院生や職員らがぼつぼつと点在し行き交っている。

木板の横長テーブルの上にくったりと顔を伏せ、ジークは困ったなど嘆息をついていた。

「皆さん、何だか怖がってましたもんね……」

「言い出したのは僕だとはいえ、いきなり学院に乗り込むのは無理があつたか」

「うん……。そう言われても学院にコネがあるわけでもねえし。一端アルスが帰ってくる

のを待つて仲立ちしてもらえないか頼んだ方がいいのかもなあ」

マルタもサフレも、同じく思った以上に反応が悪かった事に戸惑っているようだ。

ジークはぼそりとそんな事を呟きながら、次の手を模索しようとする。

「……アルス？」

ちょうど、そんな時だった。

ふと通り掛かりの中から自分達に返ってきた反応。

むくりと顔を上げてその声のする方を見遣ってみると、そこには学院生らしき活発そうな

ヒューネスの少年と知的な感じのウィング・レイスの少年が立ってこちらを見遣っていた。

「ん？ 何だよ」

「えっ。あ、その……もしかしてにーさん、アルス・レノヴィンの知り合い？」

眉根を寄せて視線を返すと、そう活発そうな方が確認するように訊ねてくる。

「知り合いも何も。弟だよ、俺の」

ジークは頭に疑問符を浮かべながらも答えていた。

するとこの二人　フィデロとルイスは互いの顔を見合わせ、破

顔を  
顔した。

「おー。じゃああんたか。アルスが話してた冒険者してる兄貴ってのは」

「初めまして。僕はルイス・ヴェルホーク。こっちはフィデロ・フイスター。アルス君とは

学院でも仲良くさせて貰っています」

「ああ……。アルスのダチか？ いやいや、こちらこそ」

目の前の彼らが弟の学友だと分かり、ジークもだらしとしていた居住いを正した。

サフレとマルタも、近付いて回り込んでくる二人を見遣り、調査にちよつとした光を見たように和やかな表情を浮かべる。

フィデロはルイスと共にジーク達の空いた席に腰掛けると言った。

「それで、お兄さんらはどうして学院に？」

「ああ、それなんだがな」

言われて思い出す。そうだ、こいつらになら訊けるかもしれない。ジークはテーブルの上に愛刀達を置いてみせる。

「よく分かんねえんだけど、どうやら俺の刀が魔導具らしいって分かったんだ。でも俺は素

人だからよ。ここなら専門の人間がいるし、何か分かるんじゃないかと思つてさ」

「なるほど……。なら、俺の出番ツスね」

「こつ見えてもフィデロは魔導具職人志望ですからね。視て貰いましよう」

「おお。そうか！ じゃあよろしく頼む」

「へへっ。了解ツス」

するとフィデロは腰に巻いていた大きめのポーチからもそもそと何かを取り出し始めた。

出てきたのは幾つかのパーツに分かれた機器。彼は手馴れた手付きでそれらを組み立てる

と、完成したそれ　ゴーグル状の機器を頭に巻き、レンズ越しに刀を手に取る。

「……それは？」

「導力走査用のゴーグルです。魔導師ならある程度マナは見えるんですけど、複雑な回路を

視るにはこういうツールがあつた方が便利なんですよね。まあ扱つ側もそれなりに導力がな

いと宝の持ち腐れになつちやいますけど」

刀を抜き、ゴーグル越しに刀身を検めていくフィデロ。

その視界に映るのは、深い紅を染め掛けたようなビジョンで。

「……確かにこいつは魔導具ツスね。かなり細かいですけどちゃんと刀身に呪文ルンが刻んであ

るみたいです。……んう？　これは」

「？　どうかしたか？」

「いや……。妙なんすよねえ。回路もルーンも、見た事がない感じ  
で」

だがややあつてフィデロは首を傾げていた。

六刀をざつと走査しながら、ぶつぶつと口にする疑問。

ジークらが頭に疑問符を浮かべていると、傍らでその様子を見ていたルイスが言った。

「フィデロ。僕にも見せてみて」

「ああ。ほいよ」

今度は代わつてゴーグルをルイスが着けて見立てを始める。

静かに息を呑んでその反応を見守るジーク達。耳元のダイヤルを  
回し、何度かピントを調

節し直しながら、やがてルイスは呟いた。

「もしかしてこれは……古式詠唱かもしれないね」

「古式い？　おいおい。何でそんな古臭いもんが……」

「何だよ、それ？」

何処かで聞いたような。

だがジークはその記憶を辿るのも煩わしく、目の前の専門家の卵らに問う。

ルイスはGoogleを外してフィデロに返すと、少しこの素人らに対する説明の内容を考え込んだようだった。

「何と説明すればいいでしょうか……。皆さんも、魔導は呪文という言語で以って精霊と交

渉し、その奇蹟の力を借りるものだというのは、ご存知ですよね？」

「ああ」「はいです」

「え？　そういうものなのか？」

「……。ですが、魔導はある時期を境にその型が大きく違っていきます。古代、魔導とは特権

的な魔法使いらによる門閥毎の秘伝の法でした。つまり、似た内容の術式でもその発動に用

いられる呪文はそれぞれに大きく異なっていた訳です」

ルイスの講釈。サフレやマルタはこくこくと頷いていたが、ジークは目を瞬いて既に疑問

符で頭が埋もれつつある。

「しかしそのままでは、その個別の呪文を知らぬ者は永遠に魔導を扱えない。そこで下級の

術者や民衆を中心に起きたのが『魔導開放』運動でした」

「ああ。それは聞いた事がある」

「歴史のお勉強でもよく出てくるフレーズですものね」

「そうだった？　覚えてねえんだけど……」

「……。この一連の運動により、成立したのが“大盟約”<sup>コード</sup>　統一され定型化された呪文体

系です。これによりそれまで一部の者に独占されていた魔導が広く人々の手に開放される事

となりました」

「で、今自分らが使っている魔導ってのが、そのコードに基づいた

呪文体系ってわけです。

だからそれ以前の統一されていなかった頃の古式詠唱ってのは、はつきり言ってお払い箱に

近い状態になってるんですよ。今でもそれを現役で使ってるのは…

…最後まで開放に反対し

てた連中の末裔 ドゥルイ 古仰族くらいなんすよね」

ちなみに、ウイザード 眞法族は逆に当時開放賛成に回った術者らの末裔に当たる。

元は同じ銀髪を湛える魔法使いの民だったが、この魔導開放運動を期に袂を分かち、その

まま今日に至っているという歴史を持つ。

「……ええと、ややこしい事は分かんねえんだけど、要するに俺の刀はその大昔の呪文が使

われているんじゃないかと。そういうことなんだな？」

「ええ。そんな理解でオツケーっす」

「だからこそ、僕らには知識不足でこれ以上の事は……」

ジークがガシガシと頭を掻きながらざっくりとまとめた結論に頷き、フィデロとルイスは

言った。

だが申し訳ないと表情を曇らせた二人に、ジークは笑ってみせる。

「いや、それが分かっただけでも充分な前進だ。少なくともこいつが相当年季の入ったもの

らしいってのがこれではつきりしたんだしな。ありがとよ」

フィデロとルイスはちらと互いを見合わせて、笑い返した。

ジークが六刀を再び鞘に収め、腰に差し直し始める。

「……ねえ、フィデロ」

そうしていると、ふと何か静かに考え込んでいたルイスが傍らの幼馴染に口を開いた。

「マグダレン先生ならもつと詳しい事が分かるんじゃないかな？」

「ああ……そうだな。訊いてみる価値はあるかも」

「マグダレン？ 誰だ、そいつ？」

「パウロ・マグダレン。俺の指導教官をしてくれてる先生っス」

「何せ専門が魔導工学 魔導具関連ですからね。僕らよりもきつと知識も経験も豊富な筈

です。彼に見立てて貰えればもつと詳しい事が分かるかもしれない」彼のその言葉に、ジーク達は更に光が見えたような気がした。

ジークはサフレ達と顔を見合わせ、表情を驚きと期待に染める。

「俺でよければ先生に取り次ぎましようか？ 保証はできないっスけど」

「本当か？ ならば非頼む」

「了解っス。先生の都合もあるでしょうし、すぐに返事できるとは思えないですけど」

「ああ、構わねえよ。進展があつたら連絡してくれ。アルスからもう聞いているかもしれないえ

が、住所はクランの宿舎の同室だ。今夜にもクランの皆に大体の話は通しとく。クランの導

話番号は……これな」

持つべき者は優秀な弟か。

ジークはフィデロらの申し出を快諾し、マルタからメモ紙とペン（サフレの従者という事

もあり、細々とした用意はお手の物なのだそうだ）を借りてその場で連絡先を書き記すと、

二人に手渡した。

「うっす。了解です」

「できうる限り協力しますよ。アルス君の友人として」

「……ああ。ありがとよ」

何とかなつて良かったぜ。

ジークは弟とその友人らとの出会いに感謝しながら、再び笑みを見せたのだった。

「そつか。フィデロ君とルイス君が……」

夕暮れの帰宅の路を、兄や新たな仲間達と共に歩く。

アルスは「何故学院に？」という疑問に答えた兄の横顔を見つめながら、そう呟いた。

「そういう事なら言ってくればよかったのに。先生達に掛け合うなら僕にもできなくはないんだし」

「そうだよなあ。思えば遠回りだったかも。でも、俺はこれで良かったと思ってるぜ？」

「……？」

傍らで漂っているエトナを背に、アルスは小首を傾げる。

ジークはにかつと笑って答えてみせた。

「お前にも、ちゃんと友達ができたってのが分かったからな。……正直心配だったんだよ。

入学早々一悶着に巻き込まれたる？ それで他の連中に距離を取られてたらどうしようかと

思ってたんだ。もしかしたら、苛められてるかも……とかさ。お前は何だかんだで控えめな

性格してるしな。でも安心した。ちゃんとダチが出来てたんだな」

「兄さん……」

アルスは口籠もっていた。

付き合いが長いから、兄弟だから分かる。兄さんは嘘を言っていない。

自分の刀に何か曰くがあるらしいと不穏が纏わりついていても、自分の学院生活を案じて

いてくれた。そんな余裕が、兄さんにはあった。

なのに、自分といえはどうか。

ずっと一人で悩んでいた。ブレア先生の言葉に迷っていた。

そんな姿をエトナに心配されているのを分かっているにしても、言い出せずに抱え込んで。僕は

ただ決断を先延ばしにし続けて。

「……………」

ジークが、サフレとマルタが自分の左右を歩いている。支えられているのに。自分はなんて小さいのか。

「……………ねえ。兄さん」

「うん？」

だからこそ、いやようやくアルスは意を決していた。

ごくりと唾を飲み込んで、か細い声で恐る恐るとそう口を開く。

「兄さんは、自分の夢の為に大切な人を切り捨てないといけなくなつたら、どうする？」

それでも臆病が邪魔をして。

アルスはストレートに打ち明けられずにそんな遠回しに訊ねていた。

だが弟のその神妙な表情と声色に何かを感じ取ったのだろう。ジークははたと笑っていた

表情を真剣なそれに収め直し、じつと不安げなアルスの顔を見返す。

「……………何でなんだ？」

「えっ？」

「何で、どつちかじゃないといけねえんだ？」

たっぷりと数十秒。

そして兄から返ってきたのは、思いもがけない回答だった。

「何でどつちかなんだよ。夢も大切な人も、どつちもひっくるめて守りゃいいじゃねえか」

「……………そうだな。そもそも、夢というのはそういった人達と分かち合うものだろう？」

ジークが至極あっさりと言い放つてみせたその言葉に、サフレも頷き繋げていた。

彼がちらと視線を移したのは、微笑むマルタの姿。

きつとそれは、危うく大切な人<sup>マルタ</sup>を悲しませかけた自戒も兼ねているのだろう。



アルスは啞然としていた。いや、そんな選択肢を知らぬ間に排除していた自分に驚き呆れていたという方が正しいかかったのかもしれない。

(どっちも、守る……)

だが兄のその言葉は、じわじわと胸の奥へと染み入るかのようだった。

同時にもやもやしていた迷いが、解れていく感覚が全身を包んだ。「アル、ス？」

そして次にアルスが顔を上げていたその表情は、パアツと明るく元氣を取り戻したそれへと変わっていた。

エトナが驚いている。だがややあつてこのパートナーの想いは伝わったらしい。

拗れた糸が解けたような解放感。微笑んだアルスに、エトナもこくと頷き返す。

「……ありがとう兄さん、サフレさん。僕、行ってくる！」

「へっ？ 行くなって何処に」

今度はジークが呆氣に取られる番だった。

しかし訊ね返す間もなく、アルスとエトナは踵を返して猛然と来た道を引き返して走り出して行ってしまった後で。

「……何なんだよ、一体？」

サフレ・マルタと共にジークは取り残されて、戸惑い気味に眉根を寄せる。

「ブレア先生。失礼しますっ」

アルスは夕暮れの学院内を逆走し、一気にブレアの研究室<sup>ラボ</sup>へとやって来ていた。

息切れする呼吸を整えながら入って来るその姿に、ぼんやりと讀書をしていたブレアは思

わず面食らっていたが、すぐに気だるい顔つきに戻って言う。

「……一体どういうつもりだ？ また性懲りもなく来るなんて。まさか俺の条件を忘れたって訳じゃねえよな？」

「はい。その事について、お話があります」

そうはつきりと告げるアルス。ブレアもその声色に何かを悟ったのか、開いていた本を閉じるとじつと彼とその持ち霊の姿を見据えた。

無言の催促。アルスは一度大きく深呼吸してから、言った。

「……エトナは、捨てません」

はつきりと言い放つ。

するとブレアは静かに眉根をひそめ、持ち上げた。

「そうか。じゃあ俺とは、縁がなかったって事で」

「いえ。志望はこのラボから変えるつもりはありません」

「……分からねえ奴だな。言った筈だぞ？ 瘴気の研究をしようって奴が持ち霊を連れてた

ら、そいつを失うリスクが大きいんだ。それでも学びたいなら、持

ち霊は捨てるって言ったんだぞ？」

「はい。でも僕は、捨てません」

目を細めて睨むように見つめてくるブレア。

彼のそんな視線に耐え、対抗するようにアルスは、そしてエトナは強い眼差しを返す。

「迷っていました」

互いを見合わせる事なく、でも心は一つで。

「それは自分の夢を……瘴気を浄化する研究に携わる事と、エトナを切り捨てる事を天秤に掛けていたからです」

「だけどさ。おかしいよね？ 何でどっちかじゃないといけないのさ？」

アルスとエトナは、続ける。

「そもそも二者択一で考えるのが正しい事なのかなって。僕は、皆を瘴気や魔獣から少しでも救いたいと思ってこの道を志しました。なのに、その為にエトナを捨てなければならないなんて……間違ってると思うんです」

それは兄の言葉でようやく自覚できた、いや認める事のできた心の奥の本心。

原点だった。

かつて、自分の力が足りない事で守れなかった者達への申し訳なさ。後悔の念。

「一番身近な、大切な人を捨てたら、僕の目指しているものの本当の意味はなくなってしまう。守りたい筈のものを捨ててしまったら、僕の夢は、意味を成さなくなる」

だからこそ、アルスは迷っていたのだ。身近な存在であるエトナを捨てるという選択をす

る事に、無意識に近い場所からずっと疑問の声がストッパーを掛けていたのだった。

「だから僕は……エトナを捨てません。夢も彼女もどちらも守りながらこの道を進みます」

お願いします。

アルスは深々と頭を下げた。エトナも見よう見真似でそれに倣っている。

「……それは理想論だ。お前の持ち霊をリスクに晒す事に変わりはねえんだぞ？」

「分かってるよ。それでも、私はアルスと一緒にだもん！」

「覚悟は、できています。そうしたリスクを克服する為にも、研究をしたいと思います」

ブレアは静かに指摘していた。

だがそれでも二人はぶれなかった。頭を下げたまま答えるアルスと、顔を上げて少しムキになって頬を膨らませ、離れないと宣言するエトナ。

「……………」  
ブレアは、じつとそんな二人を目を細めて睨み付けていた。ピンと張り詰め始めるラボ内。

アルスとエトナはその視線に無言のまま耐え続ける。

「……………ふっ」

だがその緊迫は、他ならぬブレア自身によって解かれていた。

それまで真剣だった表情が一転、ふと緩んだかと思うと徐々に笑い声を漏らしたのだ。

室内に響くブレアの笑い。

思わず顔を上げたアルスは、エトナと目を瞬かせて顔を見合わせる。

「合格だ」

「えっ……………？」

そして次の瞬間、ブレアはそう告げた。

頭に疑問符を浮かべ、声を重ねたアルスとエトナ。だが彼はそんな二人を、今度は間違かちいなく好意的な表情で見つめ返している。

「合格って、どういう事……………？」

「そのままの意味だ。お前らは、俺の出した条件をクリアしたんだよ」

エトナが少し不審気味に言ったが、ブレアは笑っていた。

テーブルに片肘をつき、彼は言った。

「俺は確かに、俺の下で学びたいなら持ち霊を捨てるとは言った。だが俺が聞きたかったの

は、自分のパートナーを切り捨てるのか、学問を諦めるのかっていう答えじゃねえ。お前ら

に瘴気のリスクと向き合う覚悟があるかのを聞きたかったんだよ。

……瘴気を研究しようっ

て奴が俺の小手先の言葉だけで引っ込んでしまっようじゃ、遅かれ早かれ自滅するからな」

「むう。試されてたんだ……。何か嫌な感じ」

「あはは……。あの、じゃあ僕らは……。？」

「さつきも言ったる？ 合格だつてな」

心地よくないと唇を尖らせるエトナを苦笑で窘め、アルスはおずおすと問い返す。

すると今度こそブレアは言った。

もう徒らに二人を突き放すわけでもなく、

「歓迎するぜ？ アルス。今日からお前は……。俺の教え子だ」

にっとなんて、そう安堵させるかのように。

世界規模の商業ギルド・全陸財友会。せんりくさいゆうかい

各地に設けられた支店は通称「財友館」と呼ばれ、金品の倉庫業や投資窓口、導話などの

インフラの代行サービスといった様々な業務を提供している。

「じゃあ、イセルナ」

「ええ。見張ってるからごゆるりと」

そして此処アウルベルツにも、勿論財友館は設けられている。

イセルナはリンファを病院へ連れて行ったその帰り道、通りの一角にある同支店へと立ち

寄ると、導話を掛けたいという彼女に付き添っていた。

ずらつと壁際に設置され、防音の個室式となっているブース。

その中にリンファが入ったのを確認し、イセルナはドアを閉めてその前に背を預ける。

「……………」

一度ちらりと遮音壁で囲まれた周囲を見渡して。

リンファは目の前の導話に手を掛けた。

指先が覚えた番号　少なくとも今までに何度も掛けた事のある

その向こう側の人物へと

発信を始める。

『はい、もしもし？ レノヴィンです』

やがて導話の向こうから対応したのは、一人の女性の声だった。

「……………お久しぶりです。リンファです」

『あら、久しぶり。どうかした？　定期の連絡はまだ日があった筈だけど……………？』

優しい穏やかな声色。

その声にフツと頬を緩ませかけたリンファだったが、すぐにそれを自戒するように引き

締めると、真剣な表情を 相手への“最大級の敬意を込めた態度”を保っていた。

リンファの名を聞いて、向こう側の彼女も一抹の硬さをすぐに解いていた。

だが当のリンファ本人は、そんな彼女の優しい声色に対して、あくまで冷静に振る舞いながら告げる。

「護皇六華（しこうじゅうか）”の封印が解けました”  
衝撃が導話越しに伝わってくるようだった。

それまでにこやかだった向こうの彼女が、その言葉を聞いた瞬間凍り付く。

ガタンと物音がするのが聞こえた。ややあって、己を宥めさせながらの声が返ってきた。

「それは、本当……なの？」

「はい。間違い御座いません。私もこの目で、間近で目撃しました。ただ解放は一時的なも

のだったようです。その場が収まった後は再び元の状態に戻っていきます」

「そうなの……。六華が……」

「……申し訳御座いません。切欠は私自身でした。私の、所為で」  
「？ どういう事？」

問い返す声に、リンファは先日の襲撃事件の詳細を話した。

ジークの刀を狙う者達が刺客を差し向けてきたこと。その交戦の最中に自身の負傷が切欠

で封印が一時的に解ける事態を招いたこと。そして、その刺客だった者 サフレとマルタ

をイセルナの提案により自分達の懐（クラシ）で抱える事になったこと。

導話の向こうで、彼女は暫く黙り頷いていたようだった。

淡々と報告をしながらも、その苦悩は察するに余りある。リンファもまた、内心でこれか

らの彼らに降りかかるであろう受難を思つと胸が痛んだ。

『息子達は、どうしてるの？』

「ジーク様はシフォンと共に、サフレとマルタを克蘭メンバーに申請するべくギルドに向

かったそうです。アルス様はいつも通り学院に登校されたかと」

『そう……』

ため息が聞こえた。

何を思っているのだろう。自身故の禍根への後悔か、それとも息子達への憂慮か。

証拠がある訳ではないがおそらくは後者だろう。

リンファは思いもかけない再会を経てから今までに至るまでのやり取りの中で、彼女が今

や家族というささやかな幸せに寄り添って生きているのだと強く感じていた。

『ねえ、リン。この事は』

「分かっております。最大限、私どもで事態を大きくしないよう努めるつもりです。それは

同時に私達の望みでもありますから。……ですが、お二人自身が付き、追求を始めてしま

えばそれも何時まで続くかは」

『……そうね』

再び、今度はか細くため息が漏れる。

『仕方ないのかもしれない。どれだけ逃げても、私は私なんだもの……』

そして誰ともなく呟いたその言葉に、リンファは無言のまま居た堪れなくなる。

暫く二人は導話越しに黙っていた。もしかしたらこの場でこうして話している事自体が、

状況をより望まない方向に進めていってしまうのではないかと錯覚するようだったから。



それでも、向こう側の彼女　レノヴィン兄弟の母・シノブは気  
丈を装おうとしていた。

穏やかな声色を少し真剣なそれに軌道修正するようにして、ゆっ  
くりと言う。

『お願いね、リン。どうかあの子達を……守ってあげて』  
するとリンファは胸元に手を当てると、

「勿論です。……この命に代えてでも」

最敬礼で以ってその懇願に応えたのだった。

その日、ジークはマーフィ父娘とサフレ・マルタ、そして数名の団員ら仲間と共に荷馬車に揺られて道を行っていた。

今回ジーク達が受け持ったのは、商人らから成る荷馬車の一団の護衛だ。

基本的に旅人の類は既に整備された街道ルートを選ぶのだが、それでも魔獣、或いは盗賊の類が出ないという保証はない。とりわけ彼らのように物資を多く携える商人らは、襲撃に對するリターンが大きいとして他の旅人達よりも狙われ易い傾向にある。

故に、彼らがこうして冒険者を護衛として雇うことは決して珍しい事ではないのである。

「……………」

ガラガラと、車輪が土や石畳の上で滑ってゆく。

そんな奏でられる振動に身を任せ、時折腰に差した愛刀らを撫でながら、ジークはぼんやりと分乗した荷馬車の中で待機をしていた。

「何つーか、暇っすね……………」

「いいんだよ。何も無いに越したことはねえんだし。だが気は抜くなよ?」

「分かってますって」

ジークが沈黙の中でそう呟くと、ダンが少し釘を差すように言った。

彼の大柄な体軀では荷馬車の中というスペースは狭苦しいらしい。

ダンは今折もそもそと

座っている位置を微調整していた。

「……それにしても、荷物がいっぱいですよねえ」

そんなスペースの多くを占めているのが、分厚い麻布を被せられた物資の山だった。

箱詰めにされている事もあり中身までは逐一知る由もないが、

「当然。商人の荷馬車だから」

「う、うん。そうなんですけど。でも……」

荷積みの際に立ち会った時に見ていた限りでは、生活物資以外にも武器も少なからずあったように思う。

マルタはそつと麻布を捲ると木箱の蓋を少しずらし、そこにゴロゴロと詰められている剣

や銃器などの武器を暫し見遣ると呟いていた。

「私には、違和感があります。盗賊さん達に襲われたら怖いからマスター達を雇っている筈

なのに、運んでいる物資にこうして武器が混じっているなんて」

「……マルタらしいな」

「そんなもんだろ？ 誰だつて武器やら暴力が要らなかつたり無い方がいいと思ってるさ。

だけど実際は魔獣も出るし、ヒトですらいい奴ばかりじゃねえからな。お前のマスターも

ジャラジャラと魔導具をぶら下げてるだろ？」

「そう言う君だつて、何本も剣を差しているだろうに……」

ふつと微笑ましく彼女を見守るサフレに対し、ジークはより現実

的 シニカルな反応を見せていた。

悪ぶつた言い口。その言葉尻にサフレは手こそ上げなかったものの、あまりいい表情はし

なかった。荷馬車内の壁に背を預けて座ったまま、指輪や腕輪自身が使っている魔導具

らが揺らめいているのに目を落とす。

(確かに現実はこちら、だがな……)

今の時代は、それ以前に比べれば随分と豊かになっているという。それは魔導開放、そして何より帝国時代に大成された機巧技術が大きいのだろう。それま

ではマナの雲海というヒトの歩では渡ること叶わなかった大陸同士が、今では無数の飛行艇の定期航路によって綿密に結びつき、人も物も活発に行き来をしている。

だが……その発展は、本当に“正しい”ものなのだろうか？

この瞬間も、そして今の当てのない旅に出てもずつと、サフシはそう何度も自身に問い掛け続けていた。

武力がなければ守れないものがあるから、人は武器を取る。

だがそうした個々の選択が広がれば広がるほど、末路として人は争いの中にその武力を落とし込んでしまいかねない。

今よりもつと豊かな暮らしを望むから、魔導も機巧技術もそんな“実利”に特化する。

だがそうした欲求が人々の食指をどんどん未開の大陸へと伸ばし、利権を生み、新たな対立を生み出し続けているのも否めない。

いわば今の時代の、この瞬間の豊かさは……そうした薄氷の上にあるとも言える。

しかしセカイの開拓を続け、多くの軋轢を生み出しながらもそこから得られる利益の味を知ってしまった以上、もうヒトは“古き良き時代”には戻れないのかもしれない……。

(冒険者になってみても、現実をどうこうできる訳じゃ……ないんだな)

そこまで思考を回していたのではないのかもしれないが、きつと

マルタはそうした危うい  
バランスを漠然とした不安として感じ取ったのだろう。

サフレは細かに揺らぐ魔導具の金属音をそんな思いと共に閉じ込めるようにして、そっと

手首にぶら下げたこの「力」や「実利」の結晶達を握り締める。

「そっいや、ジーク」

するとそんなやり取りで思い出したらしく、引き戸近くに腰掛けていたダンがふとそう呼び掛けてきた。

「剣で思い出したんだが、お前ら学院に剣調べに行ってたんだっけな？」

「ええ。魔導具らしいって事は分かってたんで、じゃあ一度魔導師せんもんかに視て貰おうって話になりました」

「なるほどな。で、どうだった？ 何か分かったのか？」

「うーん、分かったようなそつでもないような……」

「学院側からは協力を得られませんが、魔導工学を専攻しているアルスの友人には会えしました。彼の見立てでは古式詠唱を使った魔導具のようです」

「……コシキ？ 何だそりゃ？」

「ええっと。要するに古い型の魔導具らしいんです。なのでその場ではそれ以上詳しい事は

分からなくって。でも彼が自分の担任の先生を紹介してくれるって言うってくれて」

「で、今はそいつ フィデロからの連絡待ちって所です」

「ああ……。そっいやハロルドやイセルナが言ってたな、そんな事……お父さん、魔導だから分からないやっと思ってすぐに飲んでたから」

ジーク達の代わる代わるの言葉を聞き、ダンはようやく記憶を辿っていたようだった。

ミアがその背中からひよこつと顔を出すようにすると、そう眩く、頬を搔いて、乾いた苦笑。

「ダンは表向きは苦笑いのままだったが、（やっぱ、まだ終わっちゃいねえんだよなあ。シフォンも最近単独行動してるみたいだし、

イセルナやリンも何かコソコソしてやがる。……厄介な事にならねえといいんだが）」

内心ではそう、歳相応の経験と副団長としての眼を光らせていた。だがそんな思案を吹き飛ばす変化が起きたのは、ちょうどそんな時だった。

ガクンと荷馬車全体が大きく揺れ、停止した。

他の馬車も同じく動きを止められたらしい。左右から馬の嘶きが聞こえてくる。

「た、大変です。野盗です！」

即座に反応し身構えたジーク達の下に、仕切り幕を捲って商人の一人が駆け込んできた。

確かに耳を済ませてみれば、粗野な脅しの怒号が飛んでいるのが聞こえる。

「ダンが皆に頷き合図する。」

ジーク達は同じく無言で頷き返すと、一気に左右の荷馬車の引き戸に手を掛ける。

「おらあ、大人しくしろ！」

「死にたくないなら金目の物を出　ぎゃふっ!？」

次の瞬間、表で小剣などをちらつかせていた野盗達のその得物が、荷馬車から伸びきた棍

の一撃によってあっという間に弾き飛ばされていた。勿論サフレの槍である。

次いで、ジークとミアの二人がぐんと彼らの懐に飛び込み、二刀と拳を振るってその集団の隊伍を崩してゆく。

「な、何だあ!？」

「まさか……傭兵か!？」

「ご名答だ」

そんな先手によるめき、集団をバラされた野盗ら。その数およそ三十名。

そこに対峙したのは、戦斧を肩に担いで姿を見せたダンを始めとした団員ら十数名程。

それでも個々の戦闘能力ははっきり言ってジーク達の方が上だった。二刀と拳、ジークと

ミアがよろめくその隙に間合いを取り直すと、ダンらに交ざる。

「さてと……。お前らも運が悪かったな。こっちも仕事なんだ……シメさせてもらうぜ?」

ダンがぶんと戦斧を一振るいし、野盗らに口上を。

「 やっちまいな! 」

そして次の瞬間、そうダンがくわつと獣の眼を見開いて叫んだのを合図に、ジーク達は気

合の声を上げながら一斉に彼らへと飛び掛っていく。

「いやあ、助かりました」

「お陰で商品も無事。ありがとうございます」

「いやいや。これぐらいどうって事ないっすよ」

手早く野盗らを退け、捕らえたのち、ジーク達は目的の隣町へと到着していた。

荷降ろしを始めている小間使いらの傍で、荷馬車の一団を率いていた商人らがダンらに礼を述べている。

「……お父さん」

そうしていると、街に着いてから別行動を取っていたミアと数名の団員らが戻ってきた。

振り返る父らに彼女は淡々と言う。

「野盗たち、守備隊に引き渡してきた」

「おう。ご苦労さん」

ダンら本隊と合流して、ミアは心なし一息をついていたようだった。びくんと猫な獣耳が揺れるのが見えた。

元々あまり感情を表に出さない娘だ。

だからこそ、普段から 特に仕事の時はその疲れを見極めてやらないと。

内心、ダンはその父親らしい子煩悩を刺激される。

「お嬢ちゃんもありがとうな。強いんだねえ」

「いえ……。とんでもないです」

「……」

商人達に小さく会釈しているその横顔を見遣りつつ、そこにダンは別れてしまった妻の面影を見る。

あなたが冒険者として“暴れている”ことが私には辛かった。

離婚を切り出された時に、彼女の口から出た言葉だ。

一般人な妻には自分の存在が合わなかったのかもしれない。無理をして籍を入れてくれていたのかもしれない。

だからこそ、いざ彼女が自分の下を去ってしまうとなった時、娘が妻にではなく自分についてくると言ってくれた時は正直驚いたものだった。

（一体何を思っ、こいつは俺についてきてくれたんだろうかね…）

年頃というのものもあるのだろうが、正直言って分からない事だらけだ。実の娘なのに。

それでも……と、ダンは密かに頬を緩ませていた。

少なくとも昔に比べれば、随分その無表情も改善されてきたように思う。



クランの皆、いやレナやステラという親友達の存在が大きいのだらう。

それに加えて、最近は妙に色付いて。  
（だ、駄目だぞ？ 確かにアルスは悪い奴じゃねえが。で、でも…）

ダン**はぶる**ると小刻みに首を横に振っていた。

俺だつて、ミアに料理作つて貰つた事なんてないのに……。

「……何してるの」

「おあ！？」

完全に不意打ちになっていた。

思わず情けない声を漏らした父に、ミアは相変わらずの感情に乏しいジト目のまま僅かに

小首を傾げていた。

「ジークやマルタの姿が見えないけれど」

「ん？ ああ……」

だが、そんな疑問も束の間。辺りを静かに見渡して訊ねてくる娘の言葉。

ダンは低頭にして去っていく商人らや、それを見送る団員らが見遣りながら、

「ギルドだよ。先に報告に行つて貰つてるんだ」

気を取り直すように、苦笑混じりに笑つてそう答える。

「はい、確認致しました。クラン・ブルートバードですね。では今回の依頼書と依頼主からのサインを提出下さい」

「ういッス」

七星連合レキオンのギルドは何もアウルベルツにだけではない。ある程度の規模の街には大抵置かれてる。

ジークはサフレ、マルタを連れて現地のギルドに顔を出していた。

窓口の男性職員に自身のレギオンカードやダンから預かってきた今回の依頼書類を渡し、手続きを済ませる。

浮かび上がるディスプレイとそこに流れるデータ、そして手馴れた感じで職員とやり取り

をしているその姿を、サフレとマルタはやや後ろから見守っていた。

「……ジークさん、こなれてますね」

「それはそうだろう。僕らとは違って長くクラン所属でやってきたようだしね」

「な〜に他人事みたいなこと言ってるんだよ。お前らも早いとこ慣れて、クラン単位の手続き

を覚えて貰わねえと。副団長が俺らに行って来いって言ったのはそういう意味なんだぜ？」

「そ、そうなんですか……？」

「分かってているさ。僕らもずっとフリーランスの頃のままですつもりはない」

ややあつてジークは依頼の達成報告を終えて二人に振り返った。

その手には返却された自身のレギオンカードと、今回の依頼の領収書。

これでレギオンの事務局を通し、後日クランへと送金が行われる運びとなる筈だ。

「その意気だ。せいぜい戦力になって貰わねえとな」

あくまで冷静に受け答えするサフレに、ジークはにっと荒削りな笑みを見せていた。

ガチャリと。腰に下げた六刀もそんな動きに合わせて触れ合う金属音を鳴らしている。

（……もしかすればとは思っていたんだが、並の野盗程度が相手ではどうやらあの時の再現にはならないみたいだな……）

サフレは、そんな彼の愛刀に密かに視線を落として。

あの時自分が体験した彼の いやこの刀型の魔導具の豹変ぶりを再び思い起こす。

「よう。終わったか」

だがそんな彼の思考も束の間。

そうしていると、ギルドにダンら仲間達が合流してきた。

「ええ、ちょうど今さっき。これ、領収書ツス」

「おう。ご苦労さん」

ジークは歩み寄って来た彼に領収書を手渡すと、周りの団員らと労をねぎらう。

ダンは受け取ったそれをざっと捲って確認すると、

「よし。じゃあ一旦ホームに戻るか。帰り支度始めろ」

『ういっゝス』

そう一同に撤収の指示を飛ばそうとする。

ちょうど、そんな時だった。

ふとラウンジ内に鳴ったのは、導話の着信音。

ジーク達を始め、周りの冒険者らの何割かがその音に反応して窓の方へと目を遣り出す

中で、一人の職員がその応対に手を伸ばしていた。

「……はい。では暫くお待ち下さい。……すみません、この中にジーク・レノヴィンさんはいらっしやいませんか？」

「えっ？ あ、はい。自分ツスけど」

そして数秒のやり取りの後、彼がラウンジの面々に呼びかけたのは、紛れもなくジークの名だった。

当のジーク本人も驚いていたが、特に無視しないといけない理由もない。

周り何事かと思遣ってくる視線をくぐり抜けて、ジークは名乗りを上げると窓口へと舞い戻り、職員から受話筒を手渡される。

「もしもし？」

『もしもし、ジーク君かい？ 私だけれども』

「ああ……ハロルドさん」

だが、少々怪訝気味だった第一声も、導話の向こうから聞こえてきた声で安堵していた。

紳士然とした物腰穏やかな声。それは間違いなくハロルドのそれ  
で……。

「どうしたんですか、わざわざこっちに掛けてくるなんて」

「うん。別にホームに戻ってきてからでもよかったんだけどね。少しでも早く伝えておいた

た方がいいだろうと思って」

そつと眉根を細めたジーク。

そんな導話の向こう側の彼の表情が見えているかのように、ハロルドは酒場のカウンター

の中でフツと静かに受話筒越しに微笑むと言った。

「例の面会アポの件、返事が来たよ」

「……その話、本当ですか？」  
場所は昼下がりのユーティリティ研究室<sup>ラボ</sup>。

シンシアはゼミが始まるまでの時間を待つ中で聞かされたその話  
に、思わず眉根をひそめ

ると、ずいっと身を乗り出して問い返していた。

「うん。何せアルス君本人から聞いた話だし」

にこにことした表情そう答えたのはルイスだった。二人は同じラ  
ボの所属なのだ。

「そうですね……」

他のゼミメンバーらが、少々びくつきながらテーブル越しにこち  
らを見遣っている。

シンシアはじっと彼らに無言の睨みを投げてから、ゆっくりと座  
り直した。

（私の誘いを無視して、一体何様のつもりですか……？ アルス・  
レノヴィン）

アルスが所属ラボを決めたらしい。

今日ゼミの為にラボへとやって来たシンシアの耳に飛び込んで  
きたのは、そんなニュース

だった。その輪の中心にいたルイスに詰め寄るとあっさり肯定。彼  
がアルスと仲良くしてい

る事は前々から聞き及んでいたもので、嘘ではないのだろう。

正直言って、驚きだった。いやショックだったと言うべきか。

決着がつかなかったもやもやを、勝負けしかけたのに何一つ咎め  
てこない能天気ぶりにど

うにも拍子抜けしながらも、自分の中では意地を捨てて好敵手とし  
て切磋琢磨しようと同じ

ラボにと呼び掛けたのに……。

彼はあろう事か、無視した。別の場所へとそっぽを向いた。

「……」

ぎゅっと、テーブルに置いた拳を強く握る。

怒りのような悔しさのような 寂しさのような。緋い交ぜになったこの感情。

だからこそ何だか許せなかった。こんな気持ちにする彼を、なっ  
てしまう自分自身を。

「では彼は一体どのラボへ入ったんですの？ ここ以上のランクは  
この学院にはないと思う  
のですけれど」

「……それは人それぞれだと思うけど。確か、レイハウンド研究  
室<sup>ポ</sup>だそうだよ」

「レイ、ハウンド……？」

若干心持ち窘める声色になったルイスのその返答に、シンシアは  
勿論他のメンバーもが首  
を傾げた。

一様に見せたその反応は「何処そこ？」という不知。

ルイスが一丁前に反抗的な意見を述べてきたらしい以上に、シン  
シアはその聞き覚えのな  
い教官の名に眉根をひそめていた。

此処ユーディ研究室<sup>ラボ</sup>の主、エマ・ユーディ女史は学院長補佐も勤  
める学院きつての切れ者

として知られている。その専門は魔導解析学。魔導の構築式を分析  
し、より効果的な術式を  
追求する分野だ。いわば全ての領域の魔導を底上げすることのでき  
る指揮官的なポジション

花形分野の最たるものなのである。

魔導の有爵位家の家柄から考えれば、これほど自分に相応しい専  
攻はないと思っていた。

なのに、アルス・レノヴィンは一体何故そんな知名度のないラボ

を……？

「ブレア・レイハウンド先生。専門は魔流力学<sup>ストリーム</sup>、魔獣学です」

するとそんな彼女達のやり取りを聞いていたのか、背後の入口のドアを開けるとエマ当人が姿を見せて言った。

ハツと振り返ったシンシア達。

だがその集まった視線にも動じることなく、彼女は眼鏡のレンズ越しに伶俐な眼差しを教え子達に返す。

「ストリーム力学？ 何でそんなマイナーな分野を……？」

「私に訊かれても困ります。確かに彼のラボはあまり人がいないのは事実ですが」

あくまで事務的に、淡々と。

エマは魔導書数冊を小脇に抱えたままシンシアらの傍を通ると、自身のデスクに着いた。

キュツと背もたれ付きの黒革椅子を回して振り返ると、机上にそれら書物を置いて言う。

「エイルフィードさん。当アカデミーは、生徒がどのラボに所属するかについても個々人の意思を最大限尊重しています。私のゼミこそが至高という考えは、少々高慢に思えますね」

「うっ……。し、失礼しましたわ……」

以前の私闘の件もあり、正直シンシアは未だに内心エマを苦手としていた。

シラバスで見た時には悩んだが、そんな事でへこたれている場合ではないと自身を鼓舞さ

せて所属すると決めた。だが、この鋭さを伴った伶俐な眼はそう簡単には慣れそうにない。

しょんぼりと小さくなるシンシア。そして安堵のような、少々複雑な感情を垣間見せてい

るルイス。

エマはそんな教え子らを見遣りながら、

「……これは私の憶測ですが、レノヴィン君がレイハウンド先生のラボを選んだのは冒険者

をしている彼のお兄さんの影響があるのかもしれないですね。先生の

専門は、冒険者 魔獣

退治と組み合わせれば大きな効果となりますから」

今度は半ば独り言のような言い方でそう呟き出す。

「兄？ ああ、あの野蛮剣士ですわね」

「…… エイルフィードさん？」

「な、何ですか？ ヴェルホーク」

「……」

「わ、分かりましたわよ。い、言い方が悪うございましたわ……」

「うん。分かってくれればいいんだ。……前に僕も会ったのだけど、弟想いのいい人だった

よ？ 確かにちょっと荒っぽい感じではあったけど、それは冒険者自体にそういう部分があるからなんじゃないかな？」

「……そうかも、しれませんがね」

顔は笑っている癖に、侮れませんか。

シンシアは笑顔の威圧を向けてくるルイスに気圧され、折れていた。

友人の兄を悪く言ったのがそんなに癪に障ったのか。何だかこの学院に来てから、自分の

調子を崩される事が多くなったような気がする。

(……いいえ。今はそれ所ではありませんわよね)

本人は推測と言っていたが、あの日アルス・レノヴィンが兄に見せていた満面の笑みを思

えば、ユーディ先生の見当はあながち間違っていないかもしれないとシンシアは思った。



兄の助けになりたいのだろうか？　つまり自分ではなく、他の誰かの為……。

「……」  
そんな思考が脳裏を過ぎり、何だかまた一つもどかしい思いに、悔しい思いに駆られた。

自分は魔導の有爵位家の跡取りとして　いや、自身のプライドの為に魔導師を目指して　いや、自身のプライド  
いる節がある。なのに、彼はそんなものとはまるで無縁のように思えて。

（……おもしろくありませんわ。これじゃあ、私だけが必死なようではありませんの……）

熱持った歯痒さが、レールを切り替えたような気がした。

いいですわ。だったら、私はとことん高みを目指して貴方を。そんな時だった。

学び舎全体にチャイムの音が響いていた。昼休みの終わりを告げる合図だった。

その音にシンシアも、ルイスら他のメンバーらも頭を切り替えて鞆から教材などを取り出して準備を整える。

「ではゼミを始めましょうか。テキストの六十五頁を開いて下さい」  
そしてエマも椅子から立ち上がると、テキストの魔導書を片手に、きびきびとした歩みで

シンシアらのテーブルの上座に着き、そう静かに仕切り直した。

一方レイハウンド研究室<sup>ラボ</sup>では、紙を捲る音とペンが走る音が繰り返されていた。

テーブルを挟んで向き合っている格好のブレアとアルス（及びエトナ）。

二人が唇を結んでじっと見守っている中、ブレアはびっしりと解答の埋まった用紙の採点

を続けていた。

「……ふむ」

それがどれだけ続いた頃だったろうか。

ペン先が最後の丸印を描いたのとほぼ同時に、ブレアは小さく呟きを漏らした。

「あ、あの。どうでしたか？」

「ごくりと唾を呑んで。アルスは恐る恐るとそんな自身の教官に訊ねてみる。」

「そんなにビビるなって。流石は主席クンって所か。ほぼ満点だ」

「……ほぼ？」

「このこと、それにここ。誤字が二箇所ある。なんで、九十八点だな」

「あつ。しまった……」

「何、そう気にするな。構築式も解答の意図も俺には分かったし間違っちやいなえ。実質は

満点みたいなものだろうよ」

ぴらりと解答用紙を掲げて見せてそんな事を言われ、アルスは「恐縮です」と苦笑いを混

じらせたはにかみを見せた。ブレアはそんな教え子の謙虚さに自身も小さく口元に孤を描くと、片眉を上げて呟く。

「にしてもこの問題、ちよつと意地悪して二回生修了レベルとか三回生前期レベルとかも混

ぜてみたんだぜ？ なのにお前、普通に解いてやがる。正直驚いた」

「えっ」「むう……。意地悪なんてしてたんだ」

「まあまあ、そんなにむくれるなっての。これでも褒めてるんだぜ？ 試しにどれだけ理解

があるのかを診てみるつもりだったんだが……こいつは予想以上だよ。どうやってここまで

勉強したんだ？」

「えと。故郷の教練場の先生が元魔導師でして。その人に基礎基本

から教わっていました。

あとは魔導書を取り寄せて自分なりに読み解いて、先生に合わせて貰ったり……」

「ほう……。いい師匠を持ったんだな」

アルスは小さく頷くと、ほんのりと照れたように頬を染めて頷いていた。エトナもその傍らに浮かんで、我が事のように「でしょでしょ？」と胸を張っている。

「まあこれで大体のお前の力量は診れたと思う。少なくとも今の学年にしちゃ、座学に関しては申し分ない」

もう一度、アルスが解答したほぼ満点の用紙にざっと目を落とし、

ブレアは時折思考の間を挟みながら言った。

「アルス。お前にこれから必要になってくるのは、実践だ」

「実践……ですか」

「ああ。それにお前はもっと“悪意”を知るべきだ。この俺らの分野を志そうってならな」

アルスはその言葉に目を瞬かせ、頭に小さな疑問符を浮かべていた。

悪意　それはどういう事なのだろう？　つまりは魔獣や瘴気に対する人々の忌避感情を

言っているのだろうか。しかし彼の言葉は、もっと大きなことを言っているような気がする。

「……今までのやり取りで思っただが、お前は“優等生タイプ”だろ？　言っちまえば綺麗

なセカイの中で生きてきた訳だ。だが魔獣や瘴気ってのは　そういうものに対する世間の

連中ってのは、ある意味そいう綺麗さとは真逆のベクトルにあるんだよ」

「は、はい……」

「あ、いや今すぐ理解しろってのも無理か。まあ俺個人の眩きとして聞いててくれりゃそ

れでいい。お前はまだ若いんだ。これから自分なりに手探りしてけばいいさ」

「……はい」

ブレアは気安い感じでそう言っていたが、当のアルスは引っ掛かっていた。

全てを知っていると思うような高慢さが自分にあるつもりはないが、遠回しに自分の未熟さを指摘されているらしい、そう思えたから。

そんな複雑な表情を見遣ると、ブレアはふっと頬を緩めて笑っていた。

そのまますつくと席から立ち上がると、おもむろに文献の詰まった本棚をぐるりと物色し始める。アルスが、エトナが何となくそんな様子に視線を向けるのを背に受けながら、ブレアは言った。

「さつきも言ったが、お前には実践が必要なんだよ。演習場アリーナを借りられればそれでもいいんだが、一番効果的なのは冒険者に交じって実際に魔獣やら瘴気やらと向き合う事なんだよな。

まあ学院の生徒を見学よろしく受け入れてくれるお人好しがどれだけいるかは、正直言って怪しい所なんだが」

「……冒険者、ですか」

アルスはそのフリーズに、思わずエトナと顔を見合わせた。

幸い、自分達は冒険者フレイトバードクランに下宿している身だ。環境だけを考えれば、事情を話せば協力してくれるかもしれない。

(でも、兄さんは反対するだろうな……)

しかし、一見ぶっきらぼうだが、根っこは優しい兄がそれを許すようには思えなかった。

何よりも……何故自分が魔導師を目指しているのか、その本当の理由を自分は未だに兄らに話せてすらいないのだから。

「よつと……」

だがそんな思考は、不意に目の前に置かれた魔導師の山によって遮られていた。

内心驚いてアルスらが顔を上げる。

そこにはその魔導師の山を撫で、再確認をしているブレアの姿があった。

「ま、その辺は俺が何とかする。事務方に許可申請しねえといけねえんだろうけど、何なら

俺が外に実習としてお前らを連れ出すつてもアリだ。……ただ、それと併行してお前にも

やってもらわねえといけねえものもあるわな」

「それがこの魔導師書、ですか？」

「ああ。浄化系魔導師関連の文献を幾つかリストアップしてみた。先ずはこいつらを精読する

事から始めようか。ま、ここでのゼミ用テキストだな」

「……はい。分かりました」

ざつと数えて二十冊近い。

アルスはこくと真面目に頷くと、その山から一冊を抜き取り試みにページを捲ってみる。

後ろからエトナがそれを覗き込んでいる中、次いでブレアは席に着き直しながら言った。

「あゝそれと。お前、今受けてる講義はどんなもんだ？」

「え？ あ、はい。えつと……こんな状況です」

訊かれてアルスは鞆の中から手帳を取り出すと、現在の講義スケ

ジュールを示した。

暫く、ブレアは顎に手を当てそれらにぎっと目を通してから言う。

「……ふむ。お前なりに浄化系魔導に關係する講義を選んでるみたいだな。あとは個人的に

興味のあるものが幾つか、か」

「……いけませんでしたでしょうか？」

「いや。そこまで縛る気はねえよ。ただお前だって關係性の薄いのを取るのは徒勞だろ？」

だから俺の眼で見直してみようかと思つてさ」

「そう、ですね……。宜しく願ひします」

座つたままこくりと頭を下げるアルス。

その教え子の姿に、ブレアはふっと笑つた。受け取つた手帳にもう一度目を落としてから

自身も彼に寄り添うように、心持ち身を乗り出す。

「おう。じゃ、早速カリキュラム編成といきますか」

ハロルドからの連絡を受け、ジークは仲間達と足早にアウルベルツへと帰って来ていた。

一旦ホームに戻り、軽い身支度と愛刀らの手入れを済ませると、サフレ・マルタの両名を

伴って学院へと向かう。

「お兄さん達〜。こっちツス〜」

正門をくぐると、すぐ傍の広場（休憩スペース）の一角で自分達に手を振って呼びかけてくるフィデロの姿があった。どうやら迎えに待っていてくれたらしい。

ジーク達は彼と合流し、学院の敷地内を進む。

「すみません、急な連絡になっちまいました。どうやら先生、先に出張の予定が入っていた

らしくて……。その調整をしていたらこんなタイミングに」

「そっか。まあ気にすんな。無理を言ったのはこっちなんだしな」「念のため確認しておくが、博士は？」

「研究室ツスよ。待ってるんで迎えに行行ってやれって言われて」

暫く構内を進み、四人はラボが収まっている教員棟の玄関をくぐった。

入ってすぐのホール横にはマナを導力に動く昇降機があった。物珍しそうに見遣っている

ジークを横目にフィデロは慣れた手付きでボタンを操作し、エスコートしながら乗り込む。

「へえ……。こんなもあるんだな」

「珍しいツスか？ でも西方や南方はもっと凄いらしいツスよ？」

何せそれぞれ機巧技術と

魔導の聖地がありますからね」

「機巧師協会と、マスターズ魔導学司ですアカデミアね」

「これも、魔導と機巧技術の融合の例という訳か……」

ゆっくりとグラデーションするマナの光を受けながら上昇する機械の籠の中に暫し身を委

ね、ジーク達は目的の階へと到着した。

チンとねじ巻きが弾け戻る音と共に扉が開いた。左右には等間隔にラボらしき部屋のドア

が点在し、それらの中央、真正面に円形にくり抜かれたラウンジが見える。

「こつちツス」

その廊下を左折し、ジーク達はフィデロの案内のまま進んだ。

目的の場所はその中ほどに在った。確かにドアの傍に掲げられたプレートには「在室中」

の表示とマグダレンの名が確認できる。

「先生、フィデロです。連れてきました」

「ご苦労。通してやってくれ」

軽いノックの後、ドア越しにフィデロが声を張ると、中から男性の返事がした。

それを確認してから彼は「どうぞツス」とドアノブを捻り、ジーク達をラボの中へと通し

てくれる。

「……君がアルス・レノヴィンの兄か。それと……後ろにいるのは魔導具使いにオートマタ

だな。ようこそと言っておこうか。既にフィスターから聞いているだろうが、私がバウロ・

マグダレンだ。魔導工学を専門にしている」

ラボの窓際で階下を眺めていた当人、バウロはジーク達の足音を耳聡く聞いて振り返ると

そう悠然として自らを名乗った。

長身で隆々としたガタイのよい体躯。加えて頭はスキンヘッド。



短く剃り揃えられた顎鬚

がただでさえ威圧感のあるその外見に拍車を掛けているようにも思える。

「は、初めまして。ジーク・レノヴィンです。アルスの兄です」

「サフレ・ウィルハートです。ジークと同じ冒険者クランに所属しています」

「その従者をしておりますマルタです。本日は時間を割いて頂いてありがとうございます」

ジークは驚き混じりの緊張気味に、サフレとマルタはこういう社交に慣れているのか落ち着いた対応を見せていた。

（本当にこのオッサン、魔導師か？ 見た目だけじゃ冒険者でも通用するぞ……）

内心でそんな事を思っているにも、流石に口にはできない。

ジーク達は次の瞬間にはパウロに席に促され、目の前のテーブルに着いていた。

左からマルタ、サフレ、ジークの順。

その真正面に向き合う形でパウロ、そして少し距離を置いてちょこんとフィデロが座る。

パウロは小振りのアタッシュケースを別の卓上から手繰り寄せながら言った。

「それで。頼みというのは君の魔導具について調査して欲しいというものらしいが」

「はい。自分の刀なんですけど、どうもこいつらが魔導具らしくてそれで今回専門家に診

て貰おうと」

「……ふむ。では早速拝見しようか」

ジークが腰から六刀を抜き、刀身を晒した状態でテーブルの上に並べると、パウロはその

アタッシュケースの中から部品毎に分けられた機器を組み立て始め

た。先日フィデロが使っていた走査用のゴーグルだ。しかもこちらの方がずっと高級そうである。

パウロは組み立てたゴーグルを頭に巻くと、一本一本を検め始めた。

至極真剣そのものな　というよりむしろ強面が増している目を細めた表情。

ジーク達が固唾を呑んで見守る中、彼はそっと刀身の表面をなぞるようにして呟く。

「……確かに、これらに刻まれているルーンは古式詠唱だ。フィスターや生徒連中には確かに手に余る代物だろうな。おい、フィスター」

「は、はい。何でしょう？」

「左奥の本棚に『古詠録』という文献がある。赤い表紙に金の刺繍がしてある本だ。こっちに持ってこい」

「了解ッス」

ゴーグル越しの眼を向ける事なく言われ、フィスターがすつくと立ち上がった。

そのまま身を返してラボのずらりと並ぶ本棚の一角へ。視線を下へと移して指示された

文献を探し始める。

「あの、見つけましたけど、十巻とか二十巻とかあるんですが…

…」

「ああ。とりあえず全部こっちに持ってこい」

「う、ういッス」

あっさりとは重労働が決定し、フィデロは分厚い図鑑サイズのその文献らを本棚と往復しな

がらパウロの傍らに積み上げ始めた。途中でメイド気質が刺激されたのか、マルタもその作

業に加わる。サフレは最初やんわりと止めようと口を開きかけたが、結局ジークと顔を見合

わせた後、二人して同じく作業に加勢することとなった。

「ふうむ……」

その間も、バウロは刀身のルーンを見比べながら、多数の付箋が貼り付けられたその図鑑

を片っ端から手に取り、照合作業を進めているようだった。

フィデロはともかくジーク達は専門外だ。

ただただ、三人は暫くその様子を見守るしかなかった。

「……これは。いや、まさか。そんな」

そうしてそんな沈黙がどれだけ続いた頃だったろうか。

やがてバウロの眉間に深い深い皺が刻まれていた。ゴーグルをずらしては巻き直し、何度

も文献の内容を指でなぞっては確認している。

「あ、あの。どうかしたんですか？」

その動揺が尋常ではなかった。ジークは何か拙い事でも起きたのかと、おっかなびっくり

に声を掛けて訊ねてみる。

「……。少年、これはただの魔導具ではないぞ」

「はあ……。というと？」

「私の見立てが間違っていないければ、これは……“せいじょうき聖浄器”だ」

ゴーグルを外し、ぐっと眼力を込めたバウロの一言。

その瞬間、場の空気が ジークを除いて凍り付いていた。

「セージョーキ？ 何です、それ？」

「せ、せせせ先生っ、それ本当なんスか!？」

「ああ、間違いないだろう。封印が施されていた理由も……これで領ける」

「？ フィデロまで……。何なんだよ。そんなにヤバいのか、俺の刀？」

「危険という意味ではないがな。……フィスター、説明してやれ」

「う、ういッス」

「ごくりと息を呑み、居住いを正したフィデロがゆっくりと口を開き始めた。

それでもジークだけは頭に疑問符を浮かべたまま。サフレとマルタ、そしてパウロ。三人

それぞれの驚愕な視線が左右・正面から向けられている。

「聖浄器というのは、対瘴気用に開発された浄化促進器ッス。その起源は大盟約成立期まで

遡ることができるもので、魔導開放によってそれまで以上に魔導の行使者が増え、結果的に

マナの消費量 論理上発生しうる瘴気の増加とその種々の変化に対応する為に」

「あ……すまん。頭痛くなってきた……。悪いけどざっくり説明してくれねえか？」

「ええっと。要は瘴気に対して効果の高い、特殊な魔導具なんスよ」

「かの“志士十二聖”も利用したとされる武具だ。……驚いたな。

まさかそんなアーティファ

クト級の代物だったとは」

「志士十二聖って、あれか？ 帝国をぶっ倒したっていう英雄だろ

？ でもそれっておとぎ

話なんじゃねえのかよ」

「確かに後世人々によって脚色された部分も多いな。だが、ゴルガニア帝国の存在はれっき

とした史実だぞ？ 結局は強権政治の末に彼ら解放軍によって滅ぼ

されたが、機巧技術が現

在ほどの進歩を遂げたのは、当時から帝国によって研究と実践が積み重ねられていたからと

いう側面も大きいんだからな」

「……ぬ、ううう」

フィデロからサフレから講釈を受けて、ジークは頭が煙を上げて

オーバーヒートしそうに

なっていた。何とも言えないもどかしさを呟きながら、ガシガシと自身の髪を掻き乱す。

「難しい話はいいや。俺の頭じゃ分かんねえし。……要はすげー珍しい魔導具なんだな？」

「……そうツスね。ぶっちゃけるとそれで済みます」

フィデロは答えながら苦笑していた。

弟とは違って勉強は苦手らしい。それが分かったのだろう。

だが、パウロだけは眉間に皺を寄せた真剣な面持ちのまま、クスリともしていなかった。

「仕事の合間にと軽く受けたつもりだったが、とんでもない物を持ち込んでくれたものだ。

少年よ、一体これらを何処で手に入れた？ 何故君のような者が聖浄器を持っている？」

「何でって……俺もよく分かんないんですってば。母さんから受け取ったとか、昔父さんが

使っていたとか、それぐらいしか知りませんし……」

「……そうか」

パウロは大きく息を吐くのがつしりと両腕を組んで考え込み始めていた。

落とした視線の先には、ジークの六本の愛刀 いや、聖浄器。

暫く、その沈黙に身構えていたジーク達だったが、

「ならば私が君に勧めるべき提案は一つだ。これらの出自、君の母上に今一度訊くべきだ。

場合によっては更に遡らなければならぬかもしれないが、正体が判明した以上、このまま君の

手の中に収めておく訳にはいかなくなるだろう」

キツと顔を上げたパウロはそう確かに、命令のような懇願のような言葉を投げていた。

「あ、兄さん。おかえり」

「おつかえり〜」

日は沈み、辺りはすっかり薄暗くなっていた。

学院からホームに帰り、宿舍の部屋に戻ると、机に向かっていたアルスとその傍らで漂っていたエトナが振り向いて迎えてくれる。

「ああ……。ただいま」

ジークは色んな意味での疲労をひた隠しにしながらも、笑みを返すように努めていた。

少し前までは何だか辛そうだったのに、今は何だか嬉しそうで。

そんな勉強に励む弟を見ていると、暗い表情を見せるわけにはいかなかった。

「ちつと横になってるわ。飯時になったら起こしてくれ」

「うん……。分かった」

ゆらりとした歩みで掛台に六刀を安置すると、その足でどつと投げのようにベッドへと

身を任せて腕を枕に仰向けになる。

色々、疲れた……。

勉強机の照明を中心とした明暗のグラデーションの中で、ジークはぼんやりと身体を休め

始める。

（ジーク、どうしたんだろ？）

（さあ……。お仕事が大変だったのかな）

エトナがひそひそ声でそんな事を問い掛けてくるが、アルスには心当たりはなかった。

机の上に積みまれているのは、ブレアから借りてきたこれからのゼミで使うテキストの魔導

書たち。ゼミの时限のあと特に予定のなかったアルスは、早めに帰宅し早速その精読と予習

に勤しんでいたのだった。

(あんな様子じゃあ、尚更言えないよね……)  
テキストに目を通してながらも、正直アルスは心配半分安堵半分の気持ちだった。

ブレアから言われた、自分に必要なのは実践という言葉。その一番の手が冒険者に交じり

魔獣や瘴気への対処を実行することだという言葉。

幸い、伝手がないわけではない。

兄やイセルナ達クランの中心メンバーに、自分にも冒険者の仕事

魔獣討伐を手伝わせ

て欲しいと頼んでみればいい。

だが兄はきつと……反対するだろう、心配するだろうと思った。

だから今すぐに相談しなくてもいいのかなと思えると、正直ホツとしていた。それが一時

しのぎなものであると分かっている。

(……今は、もっと知識を積もう)

だからアルスは改めてテキストに視線を落として集中し始めた。

自分の身を案じて立ちほだかってくるであろう、頭の中の兄の姿から距離を取るように。

(……セージョーキ、か)

一方でジークもまた目を瞑ったまま考えていた。

門外漢な自分には結局よく分からないままだったが、愛刀らはとんでもないレア物である

らしい。サフレとマルタも帰宅中、しきりに驚いていた。そしてまだ安易に今回の結果を誰

かに報せない方がいいと釘も刺されていた。

愛刀らの正体がレア物だというのは、正直自分にはさほど驚きはない。

だがそれ以上に気掛かりなのは、パウロが自分に告げた警鐘のよ  
うなああの言葉。

君の母上に今一度訊くべきだ。

それは導話越しで、という意味ではないのだろう。

彼が言っていたように、もっと遡ること　母すら知らない可能性もある。真に問い質す

のならば、故郷サンフェルに戻る必要がある。

（村に戻れ、か……）

ごろりと寝返りを打ち、弟に背を向けた状態でうつすらと細めた目を開く。

（今更戻れるのか？　殆ど、勝手に飛び出していった俺が……）  
それだけが、何よりも気掛かりだったのだ。

「　うん？」

ちようど、そんな時だった。

不意にドタドタと遠くから複数の慌しい足音が聞こえてきた。

エトナは逸早くその外の様子に気付いたようで、

「ねえ。何だか外、騒がしくない？」

部屋の外へと視線を向けながらそうジーク達に投げ掛けてくる。

「お前もか、エトナ」

「何だろう？　ご飯の時間はまだ先だし……急な依頼でも入ったのかな？」

互いに顔を見合わせて頭に疑問符。

だがそんな足音はどんどん近くなり、次の瞬間、バンツとサフレ・マルタと数名の団員ら

がいきなりジーク達の部屋に飛び込んで来たのである。

「チイ……。ここにもいねえのか」

「おいおい何だよ、ノックもせず。俺はいいが、こっちにゃ学生がいるんだぜ？」

ベッドからむくりと身体を起こし、ジークが窘める。

だが仲間達はそんな気だるい反応すら惜しいと言わんばかりに口々に叫び出していた。

「それどころじゃねえんだよ。なあ、お前シフォンさん見てねえか？」



「シフォン？ いや。今日は朝から副団長達と出てたし、返って来てからは学院に顔出して

たし……。あいつがどうかしたのか？」

「ああ。僕らも、さっき皆に聞かされて知ったんだがな」

そして場の団員らを代表するように、サフレが代弁して告げたのは。

「シフォンさんが帰って来ていないんだ。ここ何日もずっと。誰も行方を知らないんだ」

そんな、ジーク達が思わず目を見開くような緊急事態で。

ヒトの歴史とは、争いの歴史と言い換えることもできるだろうと思っ。

聖域・<sup>エデン</sup>靈界より始まったセカイの伸張と神々の乱立、創世の時代。神々からの独立を模索し、魔導という力を確立した古種族台頭の時代。

特権的力となった魔導を人々に開放させしまんとし、争い混乱に落ちた改革の時代。

混乱の中で成立した、穏健なる「神竜王朝」の勃興とのその滅亡に至るまでの時代。

あらゆるセカイを巻き込み広がった覇権を争う群雄割拠、空前絶後の乱世の時代。

戦乱を統一した「ゴルガニア帝国」とその原動力たる機巧技術の大成、開拓の時代。

だがそんな強権さゆえに人々の反旗によって滅ぼされ、再び混乱の中に落ちた時代。

そして そんな混乱を経て、各世界政府が樹立され今日に至るこの時代。

どの時代にも、人々の争いがあった。

旧来の姿に寄り添う者達と、そこから脱皮し新たな姿を希求する者達。

往々にして彼らは相容れずにその懸隔こそが争いの火種となってしまう。歴史でも、個々

人の事であっても、現実に多くの争いはそうした“溝”が発端となることが多い。

僕は……思ってならないのだ。

どうしてヒトは、これほど共存することを難しくしてしまうのだろうか。どうして相手の思

うそれらを許し、重んじることができないのだろう。  
何よりも どうしてそんな現実を変えたいを願うことすら、許  
されないのだろう。

僕は妖精族エルフの一部族の集落に生まれた。

豊かな自然と古き良き伝統の中、僕らは静かに時を過ごしていた。  
でも時折そんな僕らの集落にも、ヒューネスなど他の種族が訪れ  
ることはあった。

勿論、里があるのは天上界の一つ・古界ハンゲアであり、現在身を置く地コ  
上コ 顕界ミナガルトに比べれば

そう人々の出入りは多くなかったけれど。

それでも異文化、外よりもたらされる刺激は、歳若かった僕には  
憧れだった。

僕らの生きるセカイはこんなにも豊かさに満ちている。そんな未  
だ見ぬ地を思うだけで胸  
が躍った。

だけど……里の先達らはそんな交流すら快く思っていなかったら  
しい。

僕ら里の若者が外からの商人らとやり取りを交わしているのを見  
かけるだけで咎め、彼ら  
を時に力づくで追い出すことさえあった。

『いいか、お前達。ゆめゆめ“秩序”を乱すな。我らはセカイの要  
素なのだ。その領分を弁

えず徒らにセカイを掻き乱す輩に肩入れすることはあってはならぬ』

長老らはそう何度も、耳にタコができる程に説教を繰り返した。

あの頃は、外への憧れと若さでじゃじゃ馬だったのかもしれない。  
今の自分なら、あの頃

既に周りの同族達なかまから白い目で見られていた事にも気付けたかもし  
れない。

でも……気付くのが遅かった。もう、取り返しがつかない程に。

だから僕は故郷を出た。

これ以上、僕の思いで誰かが傷付くのが怖かったから。これ以上、大切な人達を危険に晒したくなかったから。

悔しかったけど……里を捨てるしか、なかった。

長い旅路だったと思う。

パンゲアをぐるりと巡っても同志は中々見つからず、やがて僕は地上界に降りた。

そこでようやく、僕は長老達の言葉が指す「負」を知った。

豊かさ。だがそれは必ずしも皆が幸せになるそれではなかったのだ。

機械が轟音を上げ、魔導が連発され、精霊達が疲労を訴えている。それでも人々は何食わ

ぬ顔でその犠牲の上に成り立つ限定的は繁栄を謳歌しているように見えた。

だが、それでも心が百八十度回ってヒューネスらを憎まずに済む事ができたのは……間違

いなくイセルナ達との出会いがあったからなのだろう。

冒険者。汚名を着せられても、大義を信じて戦うその姿は眩しかった。

そして皆と出会い、共に時間を共有していく中で、僕は……ようやく腰を落ち着ける場所を見つけたように思えた。心の、底から。

クラン・ブルートバード。

イセルナを団長に擁ぎ、ブルートの名を冠し、仲間達と共に打ち立てた僕らの居場所。

十数年。エルフの僕には瞬き程度にしかならない時間の筈なのに、とても心穏やかな時間

であることに疑いはなかった。

イセルナやダン、ハロルドにリン。そして少々ぶっきらぼうな友・ジークに、団員達。

皆が、僕に居場所をくれた。里を捨て、居場所を失くした僕に安住の地をくれた。

だから……守ってみせる。今度こそ僕の手で。

何とも因果な巡り合わせじゃないか。……そうだろう？ 楽園エデンの

眼。

だが、たとえ相手がお前達であつても。

ジーク友を仲間を手に掛けようとしたその所業 決して僕は、赦しはしない。

「団長、皆！」

ホームの酒場にはイセルナを始め、クランの面々が既に集まっていた。

サフレらと共にその場に駆けつけたジークは、その焦りと心配の表情が並ぶさまを目の当たりにする。

「おう、お前らか。……つーことは、ジーク達も知らないのか」

「ええ。俺も初耳ツスよ」

「シフォンさん、どうしたんでしょう？」

「そりゃあこつちが聞きたいよ」

ジーク達の姿を認めて、ダンはやいていた。という事は、彼がホームの何処かにいるのではないかという希望的観測は呆気なく崩れたと言える。

事情を聞くこうにも皆が疑問の中で、互いに持ちつる情報は無いに等しいらしかつた。

「妙だぜ。あいつはまめな性格してるからなあ、遠出をするなら誰かに言伝を残している筈

なんだが……。イセルナ、お前も聞いてないんだよな？」

「ええ。依頼にしる何にしる、彼が遠出するような話は一言も来てないわ」

イセルナはあくまで冷静に答えていたが、そこから漏れる気配は有事に皆を率いる団長としてのそれに満ちていた。

「……シフォンの身に、何かあったのやもしれぬな」

そして、彼女の肩に乗っていたブルートが皆を見渡して、

「我らが標的にされる理由。皆も見当がついているのだろう？」

そう怜悯な猛禽類の眼を細めて言う。

「……あの黒づくめの連中か」

「くっ……。僕ではなく、シフォンさん　外堀から狩るつもりか」

「マスター……」

眉間に皺を寄せたジークの横で、サフレがぎゅっと拳を握り占めていた。

十中八九、発端であろう自分を責めているのだろう。そんな主に、マルタは心底心配そう

な表情で掛ける言葉をすぐに見つけられずにいたものの、そっと寄り添っている。

（チツ。単独行動に気付いた時点で諫めておくべきだったか。しかし、俺はともかく慎重な性分のあいつが何で……？）

クラン中核メンバーの行方不明。その動揺で団員らはざわついている。

そんな中であって、副団長ダンは一抹の後悔と疑念を抱き、「落ち着いて、皆。とにかく探しに行きましょう。三班に分けるわ。私と来る者は街の西側

を、リンと来る者は東側を、ダン達はギルドと中心街をお願い。ハロルドと支援隊の皆はこ

こに残って情報整理と私達との連絡を。急ぐわよ」

『ういッスー!!』

隣の団長イセルナは次の瞬間にはそう、皆を宥め指示を飛ばしていた。

緊張の中、団員らが重なった声で弾き起きて三班に分かれて散っていく。サフレとマルタ

はイセルナの、ジークはリンファの班に加わる。

「リンさん、もう動いて大丈夫なんスか？」

「ああ。おかげ様だね。完治とまではいかないが、もう十二分に戦えるさ。それよりも今は

シフォンが気掛かりだ。急ごう」

足早にホームを後にしていく三班。

ジークも当然その一人として酒場を出て行こうとしたのだが。

「に、兄さん。僕も」

「駄目だ。お前はハロルドさん達と……いや部屋にいる。こいつは俺達クランの問題だ」

その後ろ姿を、おずおずとしたアルスが呼び止めようとする。

「で、でもっ……！」

「いいな？」

「……。うん」

しかしジークは弟の随行を許さなかった。

それはひとえにもしかしたら危険な事になるかもしれない事態に、一介の学生である彼を

巻き込むまいとした気持ちだった。

それでも、アルスは間を置いて頷きながらも不服さを隠さなかった。

僕だって、仲間だよ。

まるでそう言いたいかのように。

「ジーク。そういう言い方は」

「いいんです。行きましよう、時間が惜しい」

「……。分かったよ」

だがそれでも、ジークはそんな無言の訴えを敢えて振り切るように振る舞っていた。

思わず窘めかけたリンドアを制止するようにして、そう自分達の班を出発させしむ。

シフォンの姿を求めて、ジーク達クランの面々は暮れなずみの街を駆けた。

徐々に活動から休息、眠りへと移り変わっていく街並みの中、大人数が時に一挙に通りを

駆け抜け、時に散開して注意力の眼を撒き払う。

「シフォンさん！」



「何処行っちゃたんですかー！」

「少なくなってきた通行人からの聞き込みや、骨董屋や書店といった彼が好みそうな場所を

中心とした人海戦術。それでも当然の本人の姿は見受けられない。

「ブルート、シフォンの気配はする？」

「……少なくともこの辺りでは感じ取れぬな」

「西側にはいらっしやらないのでしょうか？」

「分からぬ。それに街の中にいるとも言い切れぬしな」

「やはり、僕の……」

「責めるのは後でゆつくりとね。今はそれよりも身体を動かしまし  
よう？」

周囲に散って搜索網を広げていく団員らを見遣りながら、イセル  
ナは不安げなこの新入り

二人を励まし、静かに微笑む。

「シフォン・ユーテイリアさん、ですか？」

「おう。ここには来てないのか？」

「姿が……見えないの」

マーフィ親子らの班はギルドに飛び込むように足を運び、窓口の  
職員に問い詰めていた。

レギオンのギルドはその業種の性質上、基本的に昼夜を問わずに  
門戸を開いている。それ

でもラウンジに屯している冒険者らは昼間ほど多くなく、突然慌て  
て飛び込んできたダンら

に何事かと迷惑半分好奇心半分の視線を遣っている。

「……利用履歴は二週間前が最後のようですね。依頼の契約状況で  
も、該当する名は見られ

ません」

問われて少し面を喰らっていたが、同じクランのメンバーだとの  
証言とダンのカードの提

示を受けて、暫く照会作業を行った後、職員は目の前のディスプレイ

イを何度か確認するよう

に眺めてから言った。

「そうか……。何処に行きやがったんだ、あいつ」

ダンはガシガシと髪を掻き毟った。

少なくとも、個人で受けた依頼でへマをしたというシナリオは見当違いらしい。尤もそう

であれば、イセルナや自分にその契約の情報は伝わっていた筈だが。

「……その御仁とは、どんな人相だね？」

そんな時だった。

どうするか、中心街へ聞き込みに行こうかとしていたダンらに、ふと一人の老練めいた冒

険者が進み出て声を掛けてきたのだった。

顎鬚の白髪を撫でながら、振り向いてきたダンやミアらを見返している。

「ん？ ああ、エルフの青年だ。まあ実年齢は俺らなんかよりはずっと上だがな」

「確か……二百六十歳くらい。ヒューネス換算で見た目は二十五、六歳くらいだと思う」

「……ほう？」

すると彼は僅かに小首を傾げて眉根を上げた。

小さな呟き。その反応にダンらが眉間に皺を寄せると、何か記憶を手繰り寄せるかのよう

に言った。

「お主らの言う同じエルフかは知らんが、少々前に資料室でそんな青年を見かけたぞ。必死

に“楽園の眼”<sup>エデン</sup>について資料を漁っておった。儂は諫めたのだがの「……エデンの眼を？」

その言葉にダンらはお互いの顔を見合わせた。

シフォンかもしれない。だが、それ以上にその取っていた行動が不思議でもあった。

(どついう事だ？ あいつ、一体何を……)

だが思考で立ち止まっている暇などなかった。

「確証はねえが、シフォンかもしれねえな。この事、ハロルドに導話しておいてくれ。俺達

はこのまま中心街の方へ向かうぞ！」

ダンはコキツと首を揺らし、団員の一人に指示を飛ばして言う。

「シフォン！ 何処だー！」

一方その頃、ジークやリンファもまた街の東側を駆けていた。

散開して搜索網を広げつつ、円形を維持する。だが通りを進み、

彼の行きそうな好みそう

なスポットを巡ってみても一向にその姿は見当たらない。

「……見つからないな」

「ええ。一体、何処に行つたんだか」

深刻そうに眉根を寄せているリンファに、腰の六刀を揺らしながらジークは頷いていた。

出発前、ホームでサフレが自身を責めているようだった。

だが……その重荷を感じるべきはむしろ自分の方なのだと思う。

仮にこれが黒衣の一団に

よる反撃攻勢であるとすれば、その狙いのそもそもは自分 いや、

腰に下げられたこの六

振りに他ならないからだ。

(……セージヨーキ、だったか)

夕刻のマグダレン研究室ラボで、あの厳つい魔導師せんもんかはそう言った。

本来、一般人が持つことすら叶わぬレア物。対瘴気用の特殊な武器。

奴らが何故そんな自分すら知らなかった情報を知り、狙ってきたのか。

じわじわと、しかし確実に粘りつくような重量感を以って、ジークの全身に形容の難しい

悔しさや理不尽さがこみ上げてくる。

「 珍しいな。こんな時間に」

ちようど、そんな時だった。

不意に聞き覚えのある声が道の向こう側から聞こえてきた。

ジークとリンファ、それと周りにいた団員ら数名と。

「ブルートバードのホウ・リンファとジーク・レノヴィン、ですね」

「ひやはは！ 何だ、おめえらも宴会帰りかあ？」

「ヒューイ。君は飲み過ぎだ……」

振り返ったその向こうから近付いて来たのは、冒険者クラン・サンドゴディマの面々。

「……。随分と慌てているようだが、一体何の騒ぎだ？」

そしてその頭領である、毒蛇のバラクことバラク・ノイマンの姿で。

時を前後して。

クランの宿舎内で、アルスはそわそわと歩き回っては、廊下から酒場 居残った団員ら

が動き回っている様を眺めていた。

「やっぱり、気になる？」

「うん……」

傍らのエトナがちらとその横顔を覗き込んでくる。

アルスは僅かな苦笑を漏らしながら、小さく頷いた。

兄には部屋に居る、学生の本分に集中していると遠回しに言われた。渋った自分を制止す

る、巻き込みたくないという気持ちだったのは分かる。

(でも兄さん。こんな時に勉強に集中できる訳、ないじゃない……)

それでもアルスは机に向かってじっとしてる事などできなかった。

これは自分達クランの問題だ。そう兄は言った。

だが、それはちよつと違う。

何故ならもう、自分は冒険者でこそないが、クランの皆は仲間だと思っっているから。

「早く見つかるといいんだけど……」

「そうだね……」

また一步。アルスは再びゆっくりと、手持ち無沙汰に廊下を歩き始める。

「大丈夫だよ。シフォンさんはそんなやわな人じゃないもの」

「それはそうだけど……。心配だなあ」

そうして何となしに歩いていく最中だった。

ふとアルスの耳に、進行方向の先から何かしらのやり取りが聞こえてきた。

(……？ この声は)

惹かれるように直進し、ひょこりと顔を出す。

そこは廊下の中央階段傍にある小さなロビー空間。その一角にレナと、見慣れぬ銀髪の少女が話し込んでいる姿があった。

「レナ、さん？」

「ッ！？」

誰だろう。見かけた事のない人がいる。

アルスは一抔の疑問を抱きながらも、そうぽつりと声を掛けていた。

すると弾かれたようにレナと、そして銀髪の彼女　ステラがこ

ちらの接近に気付いて振り返ってくる。

虚を衝かれたようにちよっぴり驚いているレナ。だがそれよりも

ステラの様子の方が普通

ではないように、アルスには見えた。

驚きという類ではない。咄嗟にレナの陰に隠れ、緊張している様はまるで何かに、いや姿

を見られた事そのものに怯えているかのような……。

「ア、アルス君。居たんだ……」

「ええ。僕も探しに行きたかったんですけど、兄さんに止められて

しまつて。あの、そちら

の方は？ 間違っていたらすみません。僕には見覚えがない方みたいなんですが」

「そ、そうね」「……」

ぎゅつと。レナのローブの裾を握り締めてステラは震えていた。

記憶忘れてもしたのだろうか。

アルスは何だか申し訳ないような、戸惑うような心境の中、苦笑で言葉を濁しているレナ

の様子に小首を傾げる。それは同時に目を細めて注視する事でもあり……。

「……ねえ、アルス。もしかしてその子」

「うん。僕も今気付いた」

それまで傍らで漂っていたエトナが逡巡の後に切り出すのと同様と同じタイミングで、アル

スもまたその事実<sup>に</sup>気付くこととなった。

「もしかしてさ、レナ。その子……魔人<sup>マア</sup>？」

ビクツと。擬音が本物になりそうなくらいの怯えだった。

アルスが訊ねるよりも早く、エトナが代わるようにそう言つと、

レナは苦笑を濃くし、傍

らの当人は一層に怯え出す。

「……うん。そうだよ」

ステラが不安そうに見上げている。

だがレナは、少し間を置いてからできるだけ柔らかな表情<sup>かお</sup>と声色で答え始めた。

「ステラちゃんね、以前に瘴気で滅んでしまった村に取り残されていた子なの。でもそれ

を、ジークさん達が保護してうちに連れて帰ってきたの。ジークさんが『同じ年の弟がいる

んだ。放っておけない』って言って……」

「……。そうだったんですか」

語られたのは、かつての出会いとジークを見直したあの日の断片的記憶。

するとその話を聞いて、アルスはフツと笑顔をみせた。とても、優しい微笑みだった。

レナもアルスも、エトナも誰からとでもなく微笑んでいる。そんな三人の様子を、ステラ

当人だけはまだ面食らったような戸惑い気味の眼で見比べている。

「……私の事、怖がらないの？」

だからステラが心持ちレナの陰から身を出してきて問う言葉に、

「ええ。兄さんが助けた人なら、同じ屋根の下にいるなら、皆と同じ仲間じゃないですか」

「だよね〜。そんなにビクビクしなくていいと思うよ？ あ、私は

アルスの持ち霊のエトウ

ルリーナ。呼ぶ時はエトナでいいからね？」

「えっと、兄さん達からもう聞いていますと思いますが、アルス・レノヴィンです。兄さんの

弟です。改めてよろしくお願いします」

アルス達は一切躊躇いなどなかった。

「う、うん……。こちらこそ」

「ふふっ。よかったね、ステラちゃん？」

「……うん。ホツとした」

新参者だからといって忌み嫌う事はない。

それが分かってようやくステラも怯えから開放されたようだった。

微笑んで手を差し出し

てくるアルスらと、きゅっとして握手を交わしてようやくの対面と相成る。

レナもその様子に満足し、安堵し、微笑んでいた。

そんな友にステラも小さく頷いている。魔人である事の負い目さえ除けてしまえば、普通

の女の子とそう変わりはない。

（そっか……兄さんがメアを。そうだよな。こういう人達こそ、僕らが助きたい守りたいって思ってきた人達なんだもん……）

エトナと顔を見合わせてアルスも笑う。

お互いに告げ合った訳ではないが、自分達兄弟の目指す願いが重なつて、胸の奥がほつこ

りと心地良い温かみを貰えたような気がした。

「おわっ。な、何だ、アルス達か」

「レナちゃんにステラちゃんも。そっか……ようやくご対面してたんだな」

そんな時だった。

ふと耳に届いてきた上階からの足音。

アルス達が振り返るのと、傍の階段から数名の団員らが降りてきたのは、ほぼ同時のことだった。

「あ、はい。本当ならもっと早く気付いてあげるべきだったのかもしれませんが……」

「いって事よ。な、ステラちゃん？」

「うん。隠れてたのは、私の方だし」

一瞬人影があるのに驚いたようだったが、彼らはすぐにアルス達の姿を認め、加えてステ

ラがアルスとエトナに顔出しをしている事にも温かな安堵の眼差しを寄越してくれる。

「あの。どうかしたんですか？」

「ああ……そうそう、それなんだがな」

いい仲間達に恵まれたんだな。アルスはフツと笑うこの同年代の少女を見て、つくづく自身

身の境遇も含めてそう思った。

そんな中で、レナが面々を代表して先程駆け下りて来ていた彼らに訊ねる。



団員らは、思い出したようにハツと表情を引き締め直し、言った。「詳しくは知らないが、侵入者が出たらしいんだよ」  
「皆が今、そいつらを取り押さえてる。これから俺達も加勢に行くんだ」

そのままアルス達は、現場に急行する団員らについて宿舎の階段を降りた。

アルス達との対面が事なきを得た安堵のままだったのか、ステラもレナの袖を取る形で同行してきている。

現場は宿舎を出て中庭の隅、物置が並ぶ建物と建物に挟まれた死角のスペースだった。

「は、離しなさい！ 私を誰だと……！」

そこで他の団員らに取り押さえられていたのは一人の少女だった。淡い金髪の、強気な眼差しときゃんきゃんと喧しい叫び声。

その少し傍では、団員らに囲まれていても特に抵抗せず、どうしたものと立ちぼうけて

いる大きいのと小さいのの二人組の姿。

「……シンシアさん？」

その三人には、見覚えがあった。思わずアルスは目を瞬きながら彼女らの名を口にする。

ピクリと。その少女・シンシアと、傍らの二人組たるゲドとキースははたと顔を上げてその

声に反応した。

「ん？ 何だ？ こいつらと知り合いなのか？」

「え、ええ……。学院の同級生さんです。隣のお二人はそのお付きの方達です」

そこでようやく団員らはシンシア達へと警戒を解いてくれたらしい。

アルスが「大丈夫ですよ」と宥める格好で、彼女達は解放される。

それでも団員らに囲まれている状況は大して変わらない。

バツが悪そうに目を逸らしているシンシアに、アルスは小首を傾げていた。

「あの、一体どうしたんですか？ 別に知らない仲じゃないんですから、正面から来てくれれば迎えましたのに」

「うっ。そ、それはあ……」

しかしそれでも彼女は言いよどんでいた。

何故か頬が心なし赤くなっているような気がする。そしてそのまま言葉に窮していると、

ふむと何か思案した様子で従者の片割れたるキースが代弁を始めた。「いやまあ。例の入学式の日の件について、今度こそお嬢から直接謝らせようと思ってね。」

ホーさんと二人して連れてきたんだ」

「だったら前みたいに、酒場の方に顔を出してくれれば……」

「まあそれは……さ。何だか立て込んでみたいだからよ」

「そ、そうですね。だから他に入口がないか探していて……それで」

「？ キース、話が違うではないか。今宵はアルス殿がシンシア様とではなく、別なラボに

所属したらしいという話を確かめ」

「ひゃあああぁっ!?!? だ、黙りなさいゲド！ 今その話をしちや

……!」

キースが言つて、シンシアが何処かぎこちなく追従しようとする。

だがゲドはそんな二人を見てぽつりを呟き、首を傾げかけシンシアに制止される。

（ホーさん、察してやって下さいって。俺が口裏を合わせますからね？）

（ふむ……？ 相分かった）

またきゃんきゃんと喚き出すこの主を横目に見遣つて。

キースとゲドはお互いにアイコンタクトを交わしてから、先程か

ら頭に疑問符を浮かべて  
いるアルス達に繕うように向き直る。

「ま、そういう訳で余計な面倒掛けてすまなかったな。……どうやら今日はタイミングが悪  
かったらしいし」

「いえいえ。とんでもない」

キースとアルスが、互いにコクリと小さく頭を下げ合っていた。  
顎に手を当て思索しているゲドの横で、シンシアはエトナと無言  
の火花を散らしている。

「……それで。今夜は一体どうしたというのだ？ 表の慌てようは  
只事ではないようだ」

だがそんな中でも、ゲドはあくまで一介の戦士として冷静だった。  
一先ず侵入者騒ぎの誤解も解けた所で、今度は彼らからの質問が  
飛んでくる。

「えと。それは……」

思わずアルス達は顔を見合わせ、戸惑った。

知り合いとはいえ、彼らは部外者だ。自分達の判断で勝手に話し  
てしまつていいものか。

皆がそんな懸念に阻止され、答えに窮していた。ちょうどそんな  
時だった。

「行方不明になっているんですよ。うちのクランのメンバーが、ね」  
顔を上げて視線を向ける。

すると酒場の裏口の方から、ハロルドと数人の支援隊のメンバ  
ーらがこちらに近付いてく  
るのが見えた。

シンシアは「えっ」と短く驚きを漏らし、従者二人組は冒険者と  
してのその深刻さをすぐ  
に把握したのか無言のまま眉根を寄せる。

話しても大丈夫なのかというアルス達の視線からの問いに「構わ  
ないよ」と頷くようにし

て、ハロルドは続けた。

「シフォン　うちの創立メンバーの一人のエルフの青年でしてね。ここ暫く、音信不通の

状態になっっているんです。今団員総出で捜し回っているのですが…

…」

「エルフの……？　ああ、あの温厚そうなの……」

「？　キース、何故貴方が知っていますの？」

「えっ。あ、いや……。俺達もこの街の冒険者みたいなもんですしね、ホーさん？」

「……うむ。エルフには珍しい、ヒトに友好的な若者であったな」

今度はゲドが、思わずあの謝罪に訪れた夜を思い出しボ口を出し掛けたキースをフォロー

していた。幸いかシンシアはそれ以上は追求せず、興味的眼を既にハロルドに向けている。

「そうでしたの……。すみませんわね。そんな夜に訪ねてしまって」「いえいえ。謝る事はないですよ。それに、さっき一つ情報が入ってきましたね」

「……情報？」

眼鏡の奥の瞳を細め、ハロルドが言う。

アルス達はその言葉に反応を示すと、彼は一呼吸を置き、できるだけ平常心を保とうとするかのようにつた。

「ダンから導話があったんですよ。ギルドの資料室でそれらしいエルフが資料を読み漁って

いるのを見た奴を見つけた……とね。しかもその内容が“楽園<sup>エデン</sup>の眼”関連のものばかりだったそうです」

「楽園<sup>エデン</sup>の、眼……？」

その飛び出したフレーズにアルスは勿論、場の皆に緊張が走った。シフォン本人だという確証ではないかもしれない。だが奴らとい

えば、関わり合い自体が

危険視されている、世界を股に駆けるテロリスト集団として有名だ。

もし、シフォンがその毒牙に掛かっていたとしたら……？

クランの仲間として、不安にならない訳がなかった。

「ま、マズインじゃねえか？　いくらシフォンさんでも“結社”に目を付けられたら……」

「ああ……。でも何で標的がシフォンさんなんだ？　偶々、なのかな？」

「知るかよ。けど何かに巻き込まれた可能性は高くなったかもな。ハロルドさん、この事は団長達には」

「ええ。先程イセルナやリンファさん、他の捜索班にも連絡を飛ばしました。程なくすれば

皆一度こちらに戻ってくる筈です」

ざわめき出す面々。ハロルドが淡々と、しかし内心の焦りや悔しさを押し込めながらそう

状況報告を付け加えている。

(シフォンさん……)

アルスもまた、そんな心配の念に駆られる一人だった。

同じく不安げに傍らを漂う相棒<sup>エトナ</sup>や、緊張した面持ちのレナ・ステラを横目に見遣り、事態

の思った以上の深刻さを憂う。

「……エデンの眼、か」

だが、そんな最中だった。

少しばかり蚊帳の外になりつつあったシンシアと従者二人。そんな中で、ふとキースが顎

に手を当てると、記憶の何処かを手繰り寄せるように呟いたのである。

「どうかしたの？」

「ええ。いやまあ、今回の件に噛んでるかは分かりませんがね……」

シンシアを始めとして、皆がそう呟くキースの次の言葉に意識と視線を向けていた。

神妙な面持ち。一応の前置きをしつつも、彼は、

「……奴らのアジトが一つ、街の外にあるんスよ。もしかたらエルフの兄ちゃんは、そこに

居るのかもしれない」

そう、自身の密偵業ひかくしぎやうからの情報を口にしたのだった。

何時しか沈み込んでいた意識が、纏わりつくような悪寒によって叩き起こされた。

それでも瞼は重い。身体も強い疲労や痛みを訴えている。

「んっ……」

再び沈み込みそうな意識に鞭打つようにして、シフォンは小さく唸りながら目を開いた。

全身を這う寒気、薄暗い視界、伝わってくる石畳の冷たさ。

暫くぼつつとその場にへたり込んだまま、彼は何とか今の状況を把握しようと努める。

(……そうか。僕は捕まったのか)

後ろ手の両手首にずしりと感じるのは、金属製の手枷の重みと冷たさ。

薄暗い周囲 　　どうやら牢屋の中であるらしい 　　を見渡しなが

ら、シフォンはここに至

るまでの記憶を手繰り寄せ直す。

やはり、あの時ジークとリンファ達を襲った黒衣の一段は“樂園<sup>エデン</sup>の眼”の手の者であることが分かった。

何故ジークの剣を？ 　　当然の疑問は過ぎたが、正直自分にとって問題はそこではない。

やっと得られた新しい居場所を、仲間を奪われること、それに対する憤りだったと思う。

だからこそ何日も掛けて“結社”との関わりを洩る人々から情報を収集して回り、ついに

アウルベルツ近郊に奴らのアジトを見つけたのだった。

だが……自分とした事が、その時点で冷静さを失っていたことに気付けなかった。

こつそりと様子を窺い潜入を試みようとしたその矢先、黒衣の集団 結社のオートマタ兵達に取り囲まれてしまったのだった。

独断専行。

昔の悔しさに押されて、無茶をしてしまったなと思う。

何よりも、今頃皆はどうしているのだろうか？ 拘束されて何日が経ったかは判断がつかないが、少なくとも所在が分からないとなれば自分を捜し始めている

かもしれない。

(……結局、僕はまた“仲間”に迷惑を掛けてしまったんだな)

反省するように、自嘲するように。

シフォンはフツと牢に繋がれたまま独り苦々しい笑いを零した。

だが先ずは状況把握、そしてどうすれば脱出できるかだろう。

相変わらず辺りは不気味な薄暗さの中にあっただが、シフォンは疲労のたまった身体に鞭を

打ち、最大限に周囲に対して五感を研ぎ澄ませてみる。

すると、全身の感覚が告げたのは、点在するぐったりとした人々の気配と怯えたような精

霊達の様子だった。

他にも囚われの人達がいるのか……。

シフォンは無言のまま眉根を寄せた。自分一人ならともかく、人数を解放させるとなれば

その難度はぐつと跳ね上がるだろう。

(しかし居ると分かった以上、見捨てるわけにもいかないしな……)

金属の手枷にガチャガチャと抵抗してみながら、シフォンは深く深く思案をする。

ちようど、そんな時だった。

「……？」

ほつつと、不意に空間の奥で灯りが点いていた。

コツコツと足音がする。耳を済ませてみれば複数人のようだった。



誰か、来る。

シフォンは目を凝らし、その人影らを待ち構えるかのように睨み付けていた。

ゆっくりと灯りがこちらに近付いて来るに合わせ、周りの他の牢の中に繋がれた人々のぐったりとした姿が薄闇の中に浮かび上がっては、また溶けて見えなくなる。

「お目覚めのようですね。シフォン・ユーティリア君」

照らされた灯りの中、牢の格子越しに見下ろしてきたのは一人の神父風の男だった。

その周りを黒い覆面で人相を隠した数名のヒトの兵士と、黒衣のオトマツ人形達が固めている。

どうやらこの男がリーダー格らしい。

シフォンはより一層、睨む眼に殺気を宿らせていた。

「私は楽園わたくし エデンの眼の“信徒”ダニエルと申します。ようこそ、古き良き民の方よ。わざわざこ

のような場所まで足を運んでくださるとは」

「今更上辺だけの丁寧さなど要らないだろう？ 歓迎するというのが、今すぐ僕や周りの

人達を解放しろ」

「それは、できない相談ですね」

神父風の男・ダニエルは敵意を隠さないシフォンと相対してもフツと笑うだけで、一見す

るとにこやかな表情を崩さなかった。

だが、シフォンには嫌という程に感じ取られた。

この男達は……強烈な“狂気”を抱えている。

「驚きましたよ。まさか貴方達からこちらへ乗り込んで来られるとは。……まあ、できれば

ジーク・レノヴィンも一緒に連れて来てくれるともっとありがたかったのですが」

「やはり、お前達がジークを……！」

「ええ。ですが貴方達は愚かな抵抗をした。加えて放った尖兵も役立たずに終わりました。」

人形達も随分と可愛がってくれたようですね？」

言葉にならない怒りで、ガチャリと手枷が揺れる。

尖兵とはサフレの事だろう。しかも人質を取っておいて役立たず呼ばわり。

目の前の相手が“結社”という事もあったのだろうが、その言動の一々が癪に障る。

「しかし正直言って助かりましたよ。次の手を如何するか、思索していたのです。確か貴方はジーク・レノヴィンが属するクランの一員でしたね？ 今配下の者を放っています。一両

日中にも貴方と彼 いや、あの六振りと交換させて頂く」

「……冒険者を見くびるな。お前達相手に、取引などに応じるものか」

「愚かな。では今度こそ、貴方達は神の裁き見ることになりますよ？」

「そんな事はさせないッ！！」  
そして何よりも、目的の為には平然と皆を手に掛けようとする事が許せなかった。

繋がれたまま、それでもシフォンは声を上げて彼らに飛び掛ろうとする。

「ッ！？」

だが次の瞬間だった。

突如として全身に奔る激痛と、内部から侵食されるような感覚。

黒い血色の奔流がバチバチと唸りを上げ、シフォンの足元で不気味な輝きを放った。

身体から力が いや、マナが奪われている？

ダメージを受けた身体で視線を足元に遣ると、そこには黒血色の

光でなぞられた魔法陣が  
床一面に描かれているのが分かった。

「う、ぐっ……！」

ガクリと身体中から力を奪われて脱力する。同時に魔法陣をなぞる光も消えてゆく。

一見しただけでは何の呪文かは判読できなかったが、どうやらこの上に居る者がマナを  
使おうとすると、そのマナを吸収する 魔導師封じの効果があるらしい。

疲労していた身体に追い打ちを掛けられたようで、思わずシフォンは再びその場に崩れ落ちてしまった。肩で荒い息をつく彼に、ダニエルはにんまりとした顔を見せて言う。

「無駄な抵抗はしない方がいいですよ？ お分かりですね？ 貴方は一般の“罪人”達とは少々勝手が違うので、少し特殊な部屋を用意させて貰ったのです」  
「……。罪人、だと？」

だがそんな自身を見下し晒うダニエルらの表情よりも、シフォンはそのごく自然と発せられたフレーズに反応していた。

それは周りの、囚われた他の人々の事だろうか。

黒衣の兵士の一人が手にして照らしている灯りの照明を通して、シフォンは薄闇の向こうで力なくうなだれ、或いは生氣なくこちらを見ている彼らを見遣りながら思う。

「ええ、罪人ですよ。世界を徒らに掻き乱す罪深き者達です」

「…… 開拓派の人間を罪人扱いして投獄、か。そんな私刑、馬鹿げている」

「分からぬ方だ。貴方も古き良き民エルラでありましょう？ 彼らのような輩を野放しにしておけ

ば世界は掻き乱される。我々はその歪みを正そうとしているのですよ」

「確かに、開拓によって自然が荒されるのは一介のエルフとしては複雑な心境だが……それでもお前達のやり方は間違っている。一方的な暴力に変わりはない

そんな事、許される訳

がない」

「何が私どもを許さないのです？ 人の法が常に正しいとでも？

我々は世界の理の下、そ

の理想を遂行しているに過ぎないのですよ。大義は……常にこちらにあるのです」

睨み合う両者。

シフォンとダニエルらは平行線だった。

聞き及んでいた通り、彼ら“結社”の掲げる『世界を在るべき姿に戻す』為の暗躍は常軌

を逸している、シフォンは改めて再確認していた。

狂信。まさにその一言に尽きるのだらう。

開拓への邁進に疑問を抱くことは正直自分にもある。だがそれらを力づくで封じ込めよう

とする、多くの人命の犠牲を厭わないそんな“信仰”を自分達は認める訳にはいかない。

『……………』

暫し両者は、見下ろし見下ろされる格好のまま、じつと互いを睨み付けていた。

過去と今、重なり合う敵意の眼と、狂信が見せる一種の陶醉の眼。そしてそんな対峙が、どれだけ続いていた頃だったらうか。

「ダニエル様」

ふと再び奥から灯りが点り、数人の黒衣の兵士達が近付いて来た。振り向いたダニエルに、その内の一人が歩み寄り、何やら耳打ちをしている。

表情こそ貼り付けた笑みのままだったが、何か状況の変化があったらしいことは窺えた。

「……そうですか。では丁重にお迎えしてあげなさい」

「はっ」「お任せを」

ややあつてダニエルがそう言つと、彼らは低頭して承諾し、再び来た道に戻つていった。

薄闇の中を照らす灯りが、二つからまた一つになる。

「……。残念ですよ」

やがてダニエルはゆっくりと踵を返すと、

「古き良き民の出自ならば、我々の理想にも共鳴してくれると思つたのですが」

睨み付けてくるシフォンを、肩越しに狂気の微笑で見遣つてそう言い残し灯りを揺らしな

がら、配下の兵士や人形ら共にその場を後にしていく。

「……ここが結社のアジトなのかよ？ 随分としょぼいんだが……」

暮れなずみの空は、陽の落ちた夜闇に塗り変わっていた。

思いもかけずキースから提供された、楽園<sup>エデン</sup>の眼のアジトの情報。

精霊達を伝つてアルスが皆にその旨を報せると、ジーク達は一度ホームに集合し直してか

ら早速そこへ向かつてみようという話になった。

「間違いないわ。彼の情報通りならここで合っている筈」

「しかしまあ、アウトベルツの郊外にこんな場所があったとはな。

知らなかったぜ」

ちなみに、道中への足は（何故かホームに来ていた）シンシアらが自家用の馬車を出して

くれたおかげで確保できている。

彼女らと団員らの一部を離れた場所に残り、ジーク達は街道から大きく逸れた獣道の中を分け入つていった。

やがて姿を見せたのは……夜闇の中にひっそりと佇む廃村。

魔獣や瘴気にやられたのか、或いは単純に住む者がいなくなってしまうたのか。今となっ

ては判断できないが、どの家屋もボロボロに朽ちており、少なくとも長い間放置された場所である事が窺える。

「……だが、これなら奴らの隠れ家にはもってこいだな」

そしてブルートバードの面々だけでなく、今この場にはバラクラ克蘭・サンドゴディマの面々も加わっている。

ジークが街の中を搜索している途中、偶然出くわしたのだ。

威圧感に押されて仕方なく事情を話すと、その場で協力を申し出てくれたのである。

「ですね。気を引き締めなきゃ……」

正直部外者を巻き込むのは戸惑ったが、心強い。

何せ相手の力が未知数なのだ。味方の戦力が多いに越した事はない……のだが。

「……なあアルス、エトナ。やっぱりお前らも来る気なのか」

前衛に立つジーク達の少し後ろ、ハロルドやレナの支援隊に交じって立っているアルスに

ジークは再度確認 いや、説得しようとするように肩越しに声を掛けていた。

「勿論だよ。一大事だからね」

「僕らにとってもシフォンさんは仲間だもん。じっとしてなんて、いられないよ」

「……だがなあ」

「ジーク、大丈夫。ボクらが守る」

「私からもお願いします。アルス君だって心配なんですよ」

「お前らまで……」

弟とその持ち霊。本来ならばこんな危険の伴う場所に連れて来た

くはなかった。

それでも本人達が、更にミアやレナまでもがジークにそう懇願の言葉と眼差しを向けてくる。それ以上強く言えずに言葉を詰まらせる彼に、リンファ達も視線を遣った。

「心配は要らない。アルスも守る、シフォンも救う。そうだろう？」  
「弟だものね、心配なのは分かるよ。でも卵だとはいえ、魔導師が戦力に加わってくれるのは心強くもあるさ」

「……」

そして今度は目上のメンバー達からも容認の声が出る。

アルスを仲間として認めて貰っているからだとも、戦略的なプラスだからとも両方共。

ジークは顔をしかめていた。それでも腰の刀の柄をそつと撫でると、

「……分かったよ。でも、絶対無茶はするな」

「うんっ」「分かってる」

小さく舌打ちをして数歩、荒い土の地面を歩き、仲間達と共に廃村の奥へと進んで行く。

敷地の外から眺めている分もそうだったが、やはり不気味なほど人気がない。

打ち棄てられた家屋が静かに佇み、今にも夜闇の中に溶けてしまっ  
いそうだった。

ただ一同が進む土を踏む音だけが、薄ら寒いくらいに耳に届く。

「本当にがらんとしてるな。アジトラしい建物なんて何処にも」

「！？ 皆、待て！」

「誰がいる……。ううん、いっぱいいる！」

だが、不気味な探索は長くは続かなかった。

廃村の敷地、そのちょうど中央辺りまで来た所で、ハッと気配を感じ取ったブルーとエ

トナの精霊二人がそれぞれに皆へ警戒の声を上げたのだ。

それとほぼ同時に現れたのは、黒衣の戦闘人形オートマタと若干名の黒衣の兵士達。

どうやらずっと気配を殺して待ち伏せていたらしい。次の瞬間には、ジーク達は廃村の物

陰から次々と姿を見せた彼らによってぐるりと包囲されてしまう。

「チツ。待ち伏せてやがったか」

「アルス君、レナちゃん、支援隊の皆を中央に。私達も円陣を作るわよ」

「俺達もだ。……ブルートバードの連中のフォローをするぞ」

「ま、予想はしていたが……。団体さんのお出ました」

ザラリと敵味方、お互いの得物が一斉に抜き放たれ、展開された。周りを包囲して徐々に距離を詰めてくる黒衣の一団に対峙し、一同は身構える。ジークも

抜き放った二刀にマナを伝え、刀身が全身がオーラを纏う。

「……覚悟しろよてめえら。ダチに手を出されて頭にキてるんだ……」

「加減なんてしねえぞ」

そして次の瞬間、内側へと外側へと。

両者二つの円陣が拡がり 激突が始まった。



9 - (3) 廃村の戦い(前編)

夜闇の中の廃村に数多の金属音が重なっていた。

黒衣 “結社”の兵らと、二つのクランの合同戦線。互いの得物同士がぶつかり合う。

「らあっ!!」

一体、また一体と身体を捻り飛び交いながら、ジークは二刀を振るってオートマタの兵らを斬り伏せていく。

同じく円形の前線を崩さぬように、ダンやミア、リンファ、そしてフォローに入るバラク

達もまた、自分達を捕らえようと迫る黒衣の兵らを戦斧で薙ぎ払い、拳で殴り飛ばし、或いは剣や槍で斬り伏せ貫き倒しては迎え撃つ。

「……………」

そんな前線のジーク達を、オートマタらの前線の後ろで銃剣を構えた黒衣の人兵らが狙おうと銃口を向けるが。

「盟約の下、我に示せ

ファル・ジユロム  
群生の樹手!

「盟約の下、我に示せ

バニッシュメント  
戒めの光鎖!

次の瞬間アルスとレナの詠唱の聲が重なっていた。

アルスの足元からは緑色の魔法陣が展開し、エトナの制御を伴って無数の樹木が触手のよ

うに伸びて兵らを縛り、レナがかざした掌に展開された金色の魔法陣からは、無数の光線が

放たれ、逃げようとした兵らを捉えるとぐるりと輪っか状に変化しその動きを封じ込める。

「ヒトの兵士達は任せて!」

「皆さん、援護します!」

「おう。ありがとよ」

オートマタはともかく、いくら結社の手の者とはいえヒトを斬るのは正直躊躇があった。

ジーク達は後方のアルスやレナ、支援隊らの補助をありがたく受けると、改めてワラワラ

と向かってくる傀儡兵らを斬り伏せ、撃ち倒してゆく。

だが……その数は一向に減る気配がなかった。

むしろ時間を経るごとに増えているような気がする。オートマタ故に多少の傷なら問題な

く動けるといふ事もあるのだろうが、思ったより向こうの余剰兵力は膨大であるらしい。

「ったく、キリがねえな」

「アジトの真っ只中だからな。何処かに出撃口があると思うのだが……」

「しかしこう囲まれていては進むも退くもできませんよ?」

「元からそのつもりなんだろう……よッ! そう簡単に、奥まで進ませてはくれねえさ」

突き出してくる鉤爪を刀身でいなし、半身を捻って二刀の一撃をお見舞いする。

それでも次々と立ち上がり、加勢が増えていく傀儡兵らにジーク達は流石に焦りを見せ始めた。

流れるような動きで斬り伏せていくリンファの剣の軌跡をなぞるように、起き上がりかけた

た彼らをサフレの槍が薙ぐ。

少々押されている気がする前線。

サフレが後方で丸く固まっている支援隊　いやマルタを見遣りながらそう焦りを零して

いると、ダンはいいながら戦斧を振り下ろして、また一体とオートマタを叩き斬っていた。

「……だが確かに、このままでは埒が明かないな。イセルナ」  
「何かしら？」

するとそんなやり取りを聞いて、バラクが背を預けていたイセルナに声を掛けた。

サーベルを一振りし、迫ってきたオートマタを斬り伏せると、彼女は肩越しに反応する。

「お前ら、先に行け。ここで人形どもと遊ぶのが目的じゃないだろう？」

「それはそうだけど……大丈夫？」

「心配される筋合いはない。道を作つてやるから、先を急げ」

戦いの中であるのにあくまで穏やかな返答をする彼女に、バラクはふんと鼻を鳴らして晒つていた。

そしてちらりと、キリエやロスタム、ヒューイら自身のクランの面々に視線を送る。

するとそれを合図に彼らは傀儡兵らを一旦弾き飛ばし、同時にジーク達を含むバラクの後

方に位置する面々が大きくわざと円陣を崩すように退いた。

ぐぐつと、バラクがマナを滾らせた酸毒爪甲ポイズンガレットの右腕を引く。

オートマタ達は、その動きを見て大技が来ると察知し後退しようとしたが……遅かった。

「消え失せるッ！」

次の瞬間、バラクが大きく振り抜いた空間から真っ直ぐにこつそりと、強烈な酸の津波がオートマタ達を飲み込んでいたのである。

身体を溶かされてもがく傀儡兵。

そんな同胞らを見て思わず動きを止めてしまふ傀儡兵。

「行けッ！」

そうしてできた隙と突入口を、ジーク達は見逃さなかった。叫び促すバラクに視線で礼を

返すと、イセルナとブルート、彼女らが冷気を放ち作り出したの氷の道の上を安全地帯に、

ブルートバードの面々が一気に駆け抜けてゆく。

包囲網を抜けて、廃村の奥へ。

おそらくアジトの中枢はそこにある。

やがて隊伍を立て直す黒衣の一団らに、バラクらサンドゴディマの面々は、今度は凹レン

ズ型の陣形で以って対峙した。

脚甲を纏い、沈着冷静に白い髪を夜風に揺らしているキリエ。

六本腕それぞれに銃を握り、静かに目を細めているロスタム。

身の丈近い大矛を肩に担ぎ、戦いに嬉々としているヒューイ。

そんな血の気の多い部下達を従えて、バラクは魔導の手甲を握り締めると言い放つ。

「……さあお前ら、存分に暴れる。鼠の一匹もここを通すな」

一方、廃村最寄の街道の一角で。

「ひゃああつ！ な、何ですの、こいつらは!？」

乗ってきた馬車の一団と共に待機していたシンシア達もまた、夜闇に紛れた黒衣の一団からの襲撃に曝されていた。

「大方“結社”の手勢でしょうね。何せすぐそこにアジトがある訳ですし」

「なあに。心配なさるな、シンシア様。私どもがある」

運転手らと共に馬車の中へと身を隠して慌て惑い、きゃんきゃんと声を上げるシンシア。

その主の声に若干面倒くさそうな声色を返しながら、キースは手品のようにサツと両手に

何本ものナイフを取り出してみせると練氣を込める。その傍らの地面を蹴り、ゲドが得物の

大槌を振り上げ黒衣の兵らに飛び掛っていく。

「この程度の敵襲、何なるものぞ！」

叫びながら振り抜かれた大槌。

そのインパクトの瞬間、目に見えない衝撃波が黒衣の兵らを吹き飛ばした。

グライドハンマー  
震撃の鎚。ゲドの扱う鎚型の魔導具である。

次いで、吹き飛ばされ隊伍を崩された彼らに、シンシアらの警護の為に事前に宛がわれて

いた二つのクランの冒険者達が追撃に掛かる。

「ふははは！ 貧弱貧弱ウ！」

それでも幾人かのオートマタらは馬車へと迫ろうとしたが、それらは皆カルヴェインの豪腕

と鉄色の焰によって阻まれ、駆逐されていた。

だが……それでも兵力の差は如何ともし難かった。

こちらが戦えるのはせいぜい十数名程度。しかし“結社”の手の者達は傀儡兵を主力とし

て次から次へと夜闇の中から現れてくる。

「うっ！？」 「があっ！」

前線のオートマタが数の力で押し、遠距離から人兵が銃で狙う。

だがその陣形を許さぬように、彼らの額に手に、次々と正確無比なナイフが飛んでくる。

構えた銃を思わず緩めて短い悲鳴を上げ、ぐらりと揺らめく黒衣の兵士達。

「……………」

その背後に、キースが音も無く忍び寄っていた。

瞬間、次々と跳ねられ、或いは両腕で捻り折られる首。

彼らが反撃攻勢に出る間もなく、その場があっという間に絶命した人兵らの墓場と化す。

(……………これで、結社の人間の方は片付いたみたいだな)

べつとりと血のついたバタフライナイフを片手に、キースはそんな即席な骸の山を見下ろ

していた。

少し離れた、馬車の近くでは未だオートマタらがクランの冒険者達やゲドの大槌に吹き飛ばされては何度となく立ち上がり、襲い掛かるうとしているのが見える。

やはり人間じゃない分、あいつらも“殺し”に忠実なんだな。倒れた兵士の服の袖でナイフを拭ってしまいながら、キースは何とも言えない胸糞悪さを覚えていた。

自分のように暗部を渡る人間は何時の時代もいる。そしてそうした者を使う側は、より余計な私情を持たない“人形”を欲しがる。

自分達の命令に忠実な、戦闘用オートマタ。或いはキジン。これほど都合のよい存在はないのだろう。だからこそ自分はこつも静かに苛立っている……。 (……さてと。密偵は密偵らしく、奴らの出所を押さえ) 小さく舌打ちを一つ。それでもキースはそんな“要らぬ”感情を抑え、再び夜闇に紛れて行動を開始しようとする。

ちょうど、そんな時だった。

「深闇に潜み解ける紫霊よ。汝、その姿顕し静謐を妨ぐ者らを蹂躪し給え。我は、闇すら友とし仇討つことを望む者……」

それは魔導の詠唱だった。不意に馬車の一つから紫色の光が輝き、大きく魔法陣が展開される。

遠巻きのキースもオートマタらも、彼らを相手にしていたゲド達やシンシアも、何事かと

その光の方向に思わず目を遣っている。

「盟約の下、我に示せ シャドウサヴァント 陰影の眷属」

そして詠唱が完成した次の瞬間、魔法陣から何かの黒い群れが一斉に飛び出してきた。

キースは目を凝らす。

またオートマタ達か？ いや違う。あれは……影？

結論から言えば、それらはキース達の味方だった。

何者からか現れた影の軍勢。下半身から黒い靄のような軌跡を残しながら、その無数の眷

属達は一斉にオートマタらに突撃し、その身体を破壊し始めたのである。

容赦なく黒い凶刃で以って壊されていく傀儡兵たち。それでも立ち上がろうとする者も少なくなかったが、それらにすら影の眷属らは追い打ちを掛けるように群がり、徹底的に粉微塵にしていったのだった。

(……。何なんだ？)

やがて、敵の気配が止んだ。

ポカンとしているゲド達に、キースも夜闇の中から恐る恐る小走りで見ると合流する。

「あれって、魔導……だよな？」

「シンシア嬢。もしかしてあんたが加勢してくれたのかい？」

「ち、違いますわ……。私はずっとここにいますよ」

ゆらゆらと中空を漂い、やがて夜闇に紛れて消えていく影達。

待機兼護衛の冒険者らが問うたが、馬車からこっそりと顔を出すだけのシンシアは自身の

魔導ではないと言い切っていた。

「そうよの。我らの得意とするのは火門かもんの魔導。闇門あんもんではない」

「じゃあ、誰が……？」

腕を組み言うカルヴィンは、じっと先程魔法陣が見えた馬車の方を凝視していた。

キース達を始め、皆の視線が一様に合流し、そこにいるであろう

何者かを待つ形になる。

「……………」

それからたつぷりと数分。

何やら躊躇いと葛藤があったらしく、やがてこそごととその馬車から姿を見せたのは。

「えつと……………。皆、大丈夫？」

銀色の髪に黒いローブを纏ったウィザードの少女　引き籠もり  
な筈のステラその人で。



ジークの一閃が、また一体傀儡兵を斬り伏せていた。

包囲網を抜けても、黒衣の一団はワラワラと散発的に湧いては襲い掛かってきた。

前線にジークやダン、ミアらが立って向かってくる彼らを薙ぎ倒し、その後ろにはアルス

やレナ、マルタといった支援向きの面々。そして殿にはリンファとイセルナ、サフレらがそ

れぞれに控えて対応する。

抵抗が激しい。だがそれは即ちアジトの中枢に近いことを意味している。

暫くして、ジーク達は廃村の奥、その広場らしき空間へと辿り着いていた。

「……何だ？ 急に連中の姿が見えなくなった……」

「アジトが近いんだろう。下手に出入り口を守らせれば、僕らに中枢を教えてしまうような

ものだからな」

ガランと。急に黒衣の兵士らの気配が遠退く。

ジークは二刀を構えたまま眉根を寄せたが、その横を通りながらサフレは冷静な口調で辺

りを見回しつつその出入り口とやらを探そうとしている。

「でしょうね。皆、散開して怪しい所がないか調べてみましょう」

「だが油断はするなよ？ 何処に奴らが潜んでいるか分からん。必ず複数人で行動しろ」

『ういッス！』

そしてイセルナらの指示の下、ジーク達は周囲に点在する廃屋を一つ一つ調べ始めた。

朽ち果てた元・民家や商店、集会場。

点在する家屋は辛うじて何の建物だったかの判別はできたが、それでも一様に困いとして  
の役目は果たせそうになかった。

何が、この村にあったのだろうか？

今では知る由もない過去への疑問を脳裏に過ぎらせつつ、ジーク達は幾つかのグループに分かれてそんな廃屋の中を検めていく。

「……しかし本当に何も無いな。こんな所にアジトなんてあるのかよ」

「でもさつきまで黒ずくめの兵士さん達が湧いてたんですよ？ 何もないとは思えません」

「そうなんだよなあ……」

だがそう簡単に手掛かりが見つかる事はなく。

団員ら、そしてレナと一緒に廃屋を回っていたジークはガシガシと髪を掻きながら、そんな行き詰まり感を前に眉根を寄せた思案顔になる。

「皆、ちよつと来て〜！」

表から皆を呼ぶエトナの声が聞こえてきたのは、ちよつどそんな折だった。

ジーク達が顔を出してみると、エトナが表に出て皆に手招きをし、全員を一旦集めている

最中のようにだった。

レナらと顔を見合わせ、ジーク達もその集合に加わる事にする。

「何か手掛かりでも見つかったのか？」

そこは、他のそれと同じく朽ちた家屋 教会跡だった。

既に中には皆が集まっており、何があったのか、その報告を待っていた。

「うん。これを見て」

そんな皆の中心にいたのはアルスだった。

ジーク達も合流し、そう問われると、アルスは皆に目の前のそれ

杖を手にした何者か

の像が安置された台を指差す。

「……彫像だな。これがどうかしたのか？」

「ええ。さっき辺りの家屋を一通り回ってみたんですけど、他にも似たような像が設置されていたんです。ここを含めて、十二体分」

「十二体……？」

そういえば見かけたような、なかったような。

互いの顔を見合わせる皆を眺めてから、アルスとエトナは続ける。「妙なんですよね。これだけ劣化の激しい廃村なのに、この像達だけは比較的新しい」

「だからこれは、後から“結社”の連中が作った物なんじゃないかって考えたわけ」

「皆さん。ここにプレートがあるのが分かりますか？」

示されて目を凝らしてみる。

すると確かに、その一角に何かしらの文字を刻んだプレートが複数枚、台座と一体化した

枠の中に収まっているのが確認できた。

「……何て書いてあるんだ？ 読めねえぞ。つーかこれ、本当に文字か？」

しかしその文字が何なのか、ジーク達にはまるで分からない。

「そりゃあ兄さん達には読めないよ。これは詠唱言語スベルランゲージ、魔導を使える人じゃないと知らない、

精霊族の言語だから」

「そのようだね。しかし……見る限り、特に意味のある文字列には見えないけれど」

「ええ。このままだったら」

苦笑するアルスに、ハロルドら魔導の心得のある者らが目を凝らしていた。

それでもプレートに刻まれた文字は特に何かの単語を成している

訳でもないらしい。

するとアルスは、ついつと再び台座の上の像を見上げる。

「さつきも言いましたが、この像は廃屋の中に十二体ありました。

そしてそれぞれの像の位

置関係と像の姿から考えると……これは全て十二聖を象っているようになんです」

「十二聖って、志士十二聖か？」

「うん。そして、今この場に置かれている像

魔導師の青年の彫

像は、他の像との位置関

係から考えて十二番目。つまり、その身を犠牲にして次代を繋いだ

天才魔導師……」

訥々と、台をプレートを撫でながら推理するアルス。

その眼は知性を宿すそのもので。兄のジークですらただ時折目を瞬いてその様子を見守る

ことしかできずにいて。

「 “ 精霊王ユヴァン ” 」

アルスは、言ってプレートの内の幾つかをぐつと奥へと押した。

その押された精霊文字を辿ってゆけば、それは「ユヴァン」の名をなぞる綴り。

するとどうだろう。次の瞬間、その操作に呼応するかのよう

台の上の魔導師の像が何

かの機械仕掛けよろしく独りでに動き出し、九十度向きを変えたのである。

同時に、すぐ横の石材の床タイルがスライドし、そこに地下への階段が出現する。

「……これって、隠し階段？」

「おおっ！ やったな、アルス」

ジーク達は一斉に歓声を上げていた。

兄がよくやったと褒めると、アルスは静かに笑い、何処か恥ずかしそうにそつと頬を赤く

染める。傍らのエトナも、我が事のようにふふんと胸を張っていた。

「おそらくこれが、アジトへの入口なんだと思います」

「なるほどな。十二ヶ所もあれば、あれだけ人形どもが湧いてきた経路にも説明がつく」

「……行きましよう。皆、くれぐれも気を付けて」

イセルナのトーンを落とした真剣な声色に、団員ら一同はしつかりと頷く。

ハロルドの魔導が、エトナが纏う緑色のオーラが、薄暗い地下への階段を進む皆を照らす

灯り代わりとなってくれた。

じめつと、薄暗い足元に注意しながらジーク達は階段を降りていく。

するとやがて一行は、地下の広い空間に出ていた。

「……ここは」

ハロルドが、レナが、魔導の灯りを照らして周囲を確認し始める。視覚情報は断片的だったが、どうやらここは円形の広間であるらしい。

「皆？」

「その声……シフォンか!？」

そして、薄闇の中から聞こえてきたのは、間違いなく捜していた友の声。

ジークが思わず目を凝らしながら声を上げる。

ハロルドが灯りを声のする方向へ向けてみると、そこには牢の中で鎖に繋がれたシフォン

の姿が確認できた。更に左右の周りにも牢は幾つも設けられており、それらの中にも、人々がぐったりとして囚われているのが見える。

どうやら円形の内部の外周に沿うように牢屋が並んでいるらしい。

「待ってるよ、今助けに……!」

「ま、待つんだ。これは」

ジークは居ても立ってもいられず、その姿を目の当たりにした瞬間、シフォンらを救い出そうとずんと一歩を踏み出そうとしていた。

だがそんな友の、仲間らの歩みを、何故かシフォンは止めようとする。

次の瞬間だった。

ガシャンと、突如として背後に鉄格子が降りてきたのだ。

そして思わず振り返った皆のその動きに合わせるように、不意に室内の照明が点灯する。

「……お待ちしていましたよ、ジーク・レノヴィン。そしてその御仲間の皆さん」

そして今度は前方、別の通路の方から声がした。

向き直ると、そこには神父風の男　ダニエルが、黒衣の兵士や傭兵らを伴ってジーク

達の前へとゆたりと歩いてくる姿があつて。

反射的にザワツと、警戒心を隠さない一同の身構えた様子に、ダニエルはフツと晒った。

「ようこそ、我がアジトへ。……私どもは貴方達を歓迎しますよ」

「歓迎だ？　笑わせんな」

「全くだ。……お前が、マルタを」

ジークはくすりとみせず、今にも刀を抜き放ちそうになっていた。それを隣に立ったサフレが制止するも、彼自身もまた、自分達を

嵌めた張本人を前にして

沸き立つ怒りにぐつと眉根を寄せる。

「そうだけ。大体、こんな鉄格子くらい錬氣でぶっ壊せば……」

その背後で団員の一人が剣にマナを伝え、退路を封じに掛かってきた鉄格子を壊そうと

していた。

大振りに振り下ろされた斬撃。

だが刃が鉄格子に触れようとした次の瞬間、バチツと目に見えない奔流が彼を押し退けた

である。よろめき、目を瞬かせる団員、仲間達。

「これは……まさか防御結界？ 駄目ですつ、物理的な攻撃じゃあ壊せません！」

「何い！？」

「じゃ、じゃあ本当に俺達、退けなくなったのか……？」

「ふふ。言っただでしょう？ 私どもは“歓迎”しますとね」

この団員らも、鉄格子に張られた結界を見抜いたアルスも、ジーク達も一同は再びこの目の前のリーダー格を睨み付けた。

彼ら越しの向こう側、牢の中ではそんな仲間達を心配そうに見守る、衰弱したシフオンの姿が見て取れる。

（こいつは参ったな……。この分だとおそらく、シフオン達の方にも結界が張ってあるか）

ジークは鞘に手を掛けたまま、内心で焦りを感じていた。

結界自体はアルスを始め魔導を使える仲間が何とかしてくれるかもしれない。だが、そんな暇をこの似非神父どもが許すとは到底思えなかった。

しかもこのまま奴らと戦えば、牢の中のシフオンに、囚われた人々にそのとばっちりが降り掛かる可能性がある……。

明らかに「敵」が目の前に現れたのにすぐに攻撃できなかったのは、そのためだった。

「少々予定は狂いましたが、手間が省けました。取引をしましょう、ジーク・レノヴィン」

「取引だ？」

「ええ。簡単な事ですよ。貴方の剣六本を私どもに差し出してさえ下されば、その御仲間

は解放致しましょう」

するとダニエルはそう持ち掛けてきた。謂わば、人質交換。

「……断わる。人攫いと交渉する理由なんざねえよ」

だが、ジークは睨む眼をより深めただけでその言葉をあっさりと跳ね返す。

「よく言った、ジーク」

「ええ。私達はシフォンを助けに来たのだもの。貴方達の口車に乗る為に来たんじゃない」

「その通りだ。もう騙されはしない。シフォンさんも、周りの者達も……皆、解き放つ」

「ははっ、元からそのつもりだがなあ？ ……てめえらまとめて、ぶっ倒してやんよ！」

それが合図だった。

“結社”に媚びる必要はない。一同は今度こそ臨戦態勢を取って得物を抜き放った。

牢の中のシフォンも、正直そんな仲間達にホッとしたように苦笑している。

「……愚かな。所詮罪人の片棒は罪人、ですか」

しかしダニエルはそんなジーク達をむしる侮蔑の眼で見ている。

何やら魔導具らしき腕を嵌めた左手をそっと持ち上げ、パチンと指鳴らしを一つ。

変化は、その瞬間だった。

「ひっ!？」

ダニエルのその合図と同時に、牢の一つ、円形に沿って並ぶ牢屋の一番遠い端の天井から

突如としてどす黒い靄オーラが噴き出し始める。

「あれは……！」

その正体は、冒険者でなくても明らかだった。

素人にも見えるほどの高濃度の瘴気。その死の毒素が、鉄格子の結果によって実質の密室



となっている牢の中に充満し出したのである。

手枷に繋がれ動けない牢の端の囚われ人。

そんな彼を、瘴気は漂い、もがき苦しむ様子など微塵に気にする筈もなく蹂躪し やが

て絶命させてしまおう。

「……ふむ。一人目は失敗ですね」

だがそんな様子をダニエルは平然とした様子で横目に眺めていた。端が満杯になると、壁の一角の通気口が自動で開き、隣の牢へと瘴気が移動してゆく。

阿鼻叫喚の図だった。

次々と牢に囚われた人々のもがき苦しむ声が重なっては、絶命して消えてゆく。

しかしその一方で、中にはそのまま魔獣へと変異してしまう者もいた。

醜悪な容貌をした巨人の魔獣・ジャイアント、下半身が蜘蛛で上半身が爛れた人の姿をし

たアルラウネ、最早ヒトの姿すらなくなった肉塊と触手と無数の眼球から成るルーパー。

牢の中で、死人と死せずしに魔と成り果てた者らが混在する。

「大体四割という所ですか……。まあ上々でしょう」

「ッ！ こんのおッ！！」

怒りの沸点が振り切っていた。

ジークは激情に任せてダニエルに飛び掛ろうとするが、すぐに彼を守るように黒衣の兵士

達が間に入り、十数人掛かりでそのがむしやらかな斬撃を受け止める。滾るジークの殺気の眼。

だがダニエルはそんな彼の姿すら、侮蔑するように見下して晒す。「光栄に思うことですね。世界を掻き乱す罪人を、我らは魔獣として転生させているのです

よ？ これは我ら結社の、人々への慈悲なのです」

「ふざける、な……ッ!!」

ジークは無理やり力押しで黒衣の兵士らを突破しようとしていた。イセルナらもまた、何とか瘴気に当てられていく人々を救おうと動こうとするが、その行

く手を同じく黒衣の兵士らに妨げられる。

「こんなの……こんなの、酷過ぎるよ……」

アルスは、泣きそうになっていた。

なまじ魔導師としての知識があるからなのだろう。この人為的な“魔獣製造”の一部始終

を目の当たりにするには、彼もエトナも、あまりに優し過ぎた。

レナやマルタは思わず口元に手を当て、ミアやサフレも胸糞悪く眉間に皺を寄せている。

「こん、のお!!」

何とかジーク達は突破しようとした。

だが黒衣の兵士らが傀儡兵らが邪魔をして、思うように助けに向かえない。

「……神の裁きを受けなさい。罪人同士の粛清を!!」

そしてダニエルが掌に藍色の魔法陣を展開させると、変異したばかりの魔獣達が空間転送

されジーク達の前に立ちはだかった。

血色の双眸を光らせ、狂気の息をついている元・人間達。

流石にすぐに剣を向けることを躊躇ったジーク達に、ダニエルはにんまりをほくそ笑む。

「さあ、浄化の遣い達よ。今こそ我らの信仰の敵を」

だが……それまでだった。

「どわっ!?!」

意気揚々と命令を下した筈のダニエル。

しかし次の瞬間、魔獣の攻撃の矛先は、何故かそんな彼らに向けられていたのだった。

隊伍を崩され、黒衣の兵士もまとめて薙ぎ払われる“結社”の面

々ら。

「……な、何だあ？」

やられるとばかり思っていたジーク達も、急に背を向け振り返って彼らに襲い掛かり始めた魔獣らをただポカンと見遣ることしかできない。

「な、何故だ？ 何故制御が利かない！？ 魔導具の術式は完璧な」

「無駄だよ。その程度じゃ、私の方が強いから」

左手に嵌めた魔導具（魔獣を操る為の代物だったらしい）にマナを込め直し、何度も手駒

にしようと試みるダニエル。

だがそんな焦りの声を、抑揚の低い声色が遮っていた。

ダニエルら、そしてジーク達もその声のした方向 背後の鉄格子の向こうを見遣る。

すると聞こえてきたのはコツコツと近付いて来る複数人の足音と、揺らめき漂う、紫色をしたマナのオーラで。

その人影は鉄格子の前に立つと、そつと手をかざした。途端に境界の魔力が乱れる。

「！」

そしてその境界の弱体化を逃さず、別の巨躯の一雑音が鉄格子を破壊して吹き飛ばした。

目を見開くジーク達。

それは何も塞がれていた鉄格子をあつさり壊してくれた事ではなくて。

「……やれやれ。外道だとは聞いていたが、ここまでやるとはな」

「ヒヤッハー！ 俺、参上！」

「……五月蠅いよ。耳元で騒がないでくれ」

「遅れてすみません。表の人形達を片付けるのに、少々手間取っていました」

それは何も一步を踏み出し、姿を見せたのがバラクとその部下ら

だったからではなくて。

「よかった……。何とか、追いつけたみたい」

「お、お前。何でここに……?」

それはバラクラと共に姿を見せ、照明の中に現れた銀髪の少女だったからで。

「遅くなってごめん。でも、もう大丈夫。……助けに来たよ」

魔人の証である血色の眼を発現させたまま。

彼女は、ステラは驚く仲間達にそう呼び掛け、静かに微笑んでいたのだった。

「ステラ……お前」

「もしかして、ついて来ていたの？」

思いもかけない援軍ステラの登場に、ジークもレナも皆も驚きを隠せな  
いでいた。

瘴気により滅んだ村に取り残された魔人メアの少女。

その烙印故に外の世界に怯え、長らくホームに閉じ籠った日々を  
送っていたのに……。

「ごめんね。でも、私だって心配で……」

だが彼女の方へと視点を変えれば、この行動力もあり得ない訳で  
はないのかもしれない。

救われた者にとって、その居場所や仲間達は精神的にとても大き  
な存在であろうから。

「謝るなって」

だからこそジーク達は、次の瞬間にはふつと優しい笑みを返して  
いた。

それは戦況を変える加勢カセが来てくれたこと以上に、彼女自身が己  
の中の怯えと葛藤してで

も今回の出撃に紛れ、駆けつけて来てくれたことが嬉しかったから  
に他ならなくて。

「……よく来てくれた。これで、奴らをぶつとばせる」

ステラが頷き、はにかみを返すのを見届けてから。

彼女達を守るように再び前線を張り、得物を構えて、一同は再び  
ダニエルらを見据える。

「何故です？ 何故魔人トウシが “選ばれし者” である善の貴方が彼  
らのような罪人どもに与  
するのです？」

「同志？ 違う。私はあんた達の仲間なんかじゃない」

ステラを　魔人を見てダニエルは確かにそう戸惑いを零した。それはまるで、魔人という存在を信仰の対象としているかのよう

に。

だが当のステラはきっぱりと彼の言葉を撥ね付けていた。血色の両眼、魔人が興奮状態になると見られるその症状を呈したまま、彼女は言う。

「私は……死んだも同然だった。メアは魔獣の親戚みたいなもの。だからもうヒトとして見

られないって思ってた。でも……ジークは、ブルートバードの皆は、こんな私でも受け入れ

てくれた。生きてていいんだよって、言ってくれた」

それは出会いの時からずっと、自分の中に掻き抱いていた想いだっただのだから。

ジークが、仲間達が、肩越しにちらりとその感情に震える表情を見遣っている。

「だから私は生きる。こんな身体になっただけ。だからこそヒトを駒みたい使うあんた達の

事は許せないし、認めない。仲間を、ヒトの生命を弄ぶような奴は大嫌いだ!!」

そして彼女が叫んだ瞬間、再び魔獣らが動いた。

一斉にダニエルらに　いやその背後の牢に向けて攻撃を仕掛け始めたのである。

防御結界が張ってあったものの、魔獣のパワーの前には成す術もない。

ぐわんと一瞬魔力が歪むような波紋を見せて、牢の鉄格子は次々と破壊されていった。

「大丈夫か、ニーチャン？」

「!?　君達、まだ理性が……」

逸早く魔獣らによって解放されたのはシフォンだった。

不意に声を掛けられ驚く彼に、姿こそ怪物と化した彼らはフツと

笑って答える。

「アア。アノ子ノ声ノオカゲデ正気ヲ取り戻セタミタイナンド」

「サア早く外へ。瘴気が迫ッテ来テイル」

「……ああ。ありがとう」

おそらくは魔獣の狂気を、その亜種たる魔人の彼女が制御したという事なのだろう。

シフォンは一度深く頷いてから、衰弱した身体を引き摺って、彼らにエスコートされるように牢の中から脱出を始めた。

「よしっ！ これでシフォンの方は何とか……」

「皆さん、今の内に他の人達の救助を！ さっきの様子からして、流れている術式を乱せば

結界の効力は弱まる筈です！」

「分かった。おい、魔導師連中は俺と来い、結界をぶち破るぞ！」

「僕らも加わります。マルタ、カブリチオ狂想曲を」

「はいっ！」

そしてジーク達も、この隙を逃がしはしなかった。

魔獣らの再度の一撃でダニエルらが体勢を崩されている隙を突いて、バラクらとアルス、

サフレ・マルタや支援隊の面々らが人々が囚われている牢へと駆け寄っていく。

「……」

ハーブ型の魔導具を取り出して、マルタが調べを奏で始めた。

聞く限りは、不協和音ばかりの奇怪な音色。だがその調べに乱されるかのように、周囲の

牢の結界達は不意にぐわんと魔力の揺らぎを波紋として見せたのだった。

「今です！」

その変化を目に映し、アルスが叫んだ。

そして次の瞬間、バラク達はそれを合図に一斉に鉄格子に攻撃を

叩き込んでいった。

するとどうだろう。それまで武器を通さなかった筈の結界が押し負け、次々と鉄格子への直撃を許したのである。

こうなればこちらのものだった。バラクらは錠を中心に攻撃を繰り返して鉄格子を破壊し

手枷を切り離すと、中に囚われていた人々を大急ぎで救出にかかる。「レナ、皆さん。僕らは浄化を」

その傍で、ハロルドらは牢から牢へと漏れてくる瘴気を防ぐべく詠唱を始めていた。

エルリツシュ父娘と、支援隊の面々。何人分もの金色の魔法陣が展開される。

『盟約の下、我に示せ セイクリッドフィールド 聖浄の鳥籠！』

彼らから延びてゆく無数の光の金糸。

それらは重なり合って巨大な細かな目の網となり、漂ってくる瘴気を捉え、ジユワジユワ

と無色透明 本来のマナへと浄化させてゆく。

「こちらは大丈夫です！ あとは連中の確保を！」

「ええ！」「うむ」

「おうよ。言われなくてもだ！」

形勢は、完全に逆転していた。

イセルナ、ダン、リンファのクランの中核メンバーとジークやミアら団員。そしてステラ

やシフォンを搬送してきた今は彼女によって制御された魔獣達。

すっかり配下の兵も削り取られたダニエルを、ジーク達はじりりと追い詰めようとする。

「くっ……！ わ、私は“信徒”なのに、選ばれし者なのに……。こ、こんな所で敗れる訳には……！！」

だが彼はあくまで抵抗しようとした。



残った僅かな傀儡兵らを差し向け、ジーク達が迎撃する間を縫って詠唱を完成させる。

「盟約の下、我に示せ 審判の光雨！」

ジャッジメント

中空にかざした手、その先に金色の魔法陣が現れる。するとそこから、無数の鋭い切っ先を持った光が雨霞と降り注いだ。

「うぉあッ!？」

決して充分とは言えないスペースに降り注ぎ、爆音と共に破壊され石畳の粉塵を上げる目の前の光景。

「……ははっ！」

傀儡兵すら巻き込んでいても、ダニエルは乾いた笑い声を漏らしていた。

何としてでもこの場を生き延びる。

私は、こんな者達に負けることなど許され。

「……は？」

だが、頭の中にイメージされた殲滅の光景は、そこにはなかった。随分と、無茶をするじゃない」

代わりに粉塵が晴れたその渦中には、ドーム型の障壁を展開して仲間達を守ったステラの

姿があった。笑おうとしていた顔が引き攣り、ダニエルは目を細めているこの魔人の少女の威圧感に啞然とし、無意識の内に後退る。

それは恐怖だった。

いつもなら魔人<sup>かれ</sup>らを選ばれし者” その身を以って瘴気を慰

む御遣いとして信仰して

いる“結社”の人間も、その力を直接自分に向けられれば畏敬よりも肌を伝う感情が畏怖と

なるのは仕方ない事だったのかもしれない。

「ぬうっ……!」

もう恐怖心に駆られる形で、ダニエルは再び詠唱を始める。

足元にはぐつたりと動かなくなった傀儡の兵らが散らばっている。だがそれでも、ジーク

達は先の魔導を防御しようとした格好のまま、斬り込みには行かなかった。

いや、敢えて任せたのだ。

自分達の前に立ち、やや遅れて同じく静かに詠唱を始めるステラの後ろ姿を見守って。

『盟約の下、我に示せ』

金色と紫色、二人の魔法陣が展開していた。

魔導の打ち合い。そしておそらくこの一撃が勝敗を決める。

「天印の光！」

「……黒闇の叫渦」

巨大な光の塊と、緋い交ぜに吹き荒れる暗闇の突風がぶつかり合った。

インパクトの瞬間、光の塊が弾けて無数に放射する光となる。だがそんな眩い光撃すら、

ステラの放った闇はいとも容易く飲み込むと、一斉にその勢いを押し返してゆく。

「そ、そんな……！ 私の魔導が、こんなにあっさり……」

「当然よ。聖魔導と冥魔導は相反関係にある同士。互いにぶつかれば、あとは力の大小で優

劣が決まる。貴方は外道とはいえ人間、ステラちゃんはメア……。

常人より遥かに高い導力を持つ彼女に、貴方が勝てる理由なんてない」

自身の放った魔導が打ち破られていく。

その事実を目を丸くするダニエルに対して、イセルナは静かに呟いていた。

「ぎゃはっ!？」

やがて、ステラの冥魔導がダニエルのそれを完全に押し潰した。

途端に押し寄せ、暗闇の突風。声なき者らの叫びにも似たその威力をまともに受け、彼は激しく叩き付けられながら地面を転がる。

受身を取る余裕もなく、その身体は壁際へと押し遣られていた。

「ぬ、ぐっ……。逃」

「逃がすかよ」

しかしそれでも這いつくばって壁伝いに進もうとするその首元に、次の瞬間、ジークが刀の切っ先を突きつけていた。

見上げてみれば、既にジークを中心に面々が自分を見下ろし取り囲んでいる。

「……年貢の納め時だぜ。似非神父」

ジークは抑えながらの怒りの下で言い放った。

頬に冷や汗を伝わらせながら、ごくりと息を呑むダニエル。

もう逃げられない。誰もがそう思った。

「……いえ。おさらばです！」

しかし次の瞬間、ダニエルはそう苦し紛れに晒うと、どんと背後の壁を叩いていた。

すると不意にその壁の一部がぐるりと横回転し、彼の身体を壁の向こう側へと送り出す。

「なっ!?!」

文字通りの、どんでん返し。

流石にジーク達は驚き、その壁に殺到した。

だが既に向こう側からロックを掛けられてしまったのか、同じように叩いてみても壁はもう

微動だにせず、回転することはなかった。

「くそおっ！ 待ちやがれっ！ このまま逃げるなんざ、絶対許さ

」

「落ち着け。ジーク」

この卑怯者。

そうとでも言わんばかりに叫び、何度も拳を壁に叩きつけるジークの手を、ダンのはしと取って制していた。

「気持ち分かる。俺達だって悔しいさ。だが……俺らが優先すべきことは別だろうが」

「そうね。今は深追いする事よりも、シフォンを、皆さんを助ける事の方が先でしょう？」

振り返ると、ダンとイセルナ　クランのトップ二人がそう自分に言い聞かせてくれていた。しかし彼女達もまた、同じく悔しさを堪えているのが分かる。

ジークは静かにぎゅっと拳を握り締め、唇を結んだ。

複雑そうな表情を浮かべるステラと、そんな彼女に寄り添うようにミアやリンファが立っ

ていた。その背後ではレナやハロルドの支援隊、そしてアルスらが慌しく、助け出した皆の救護活動に当たっている。

「……分かり、ました」

そして暫くそんな皆の様子を見つめてから。

ジーク達は踵を返すと、加勢の為にゆっくりと仲間達の下へと歩いてゆく。

地下アジトを出て、ジーク達は犠牲者らの遺体を浄化し、廃村の一角に丁寧に埋葬した。

即席の墓標らを前に、元神官のハロルドが失われた生命達へと祈りや言霊を捧げ、静かに弔いの儀式を執っている。

本来なら一人一人遺族を探すべきなのだろうが、そんな余裕もネットワークもない。

そうしている間にも遺体は腐敗していくだろうし、何よりも……浄化を施したとはいえ、

身内だとはいえ、瘴気に中てられた遺体を引き取りたいと願い出る遺族がどれだけいるもの

か。哀しいかな正直分らないという点も大きかった。

「……これで一応の弔いは済みました。あとは、彼らが次の世で良き生に恵まれることを願うばかりです」

やがてハロルドが皆にそう振り返っていた。

哀しみ、悔しさ。そうした思いが入り混じった静かな苦笑。

そしてそれは、ジーク達も、助けられた者達もまた同じく抱いていた想いでもある。

「……すまなかった。僕の所為で皆をこんな目に遭わせてしまって」「謝るなって。水臭いこと言うなよ、仲間<sup>たち</sup>じゃねえか」

「そうですよ。シフォンさんも皆さんも、助けられて良かったです」

「ああ……。だから私達からも礼を言わせてくれ」

「ありがとうよ。あそこに繋がれたままだったら、きっと俺達全員が死んでいた筈だ」

シフォンは責任を感じていたのか、ぽつりと呟いて頭を下げている。

しかしそんな弱った彼に肩を貸していたジークが何ともないと答えると、アルスや助け出

され生き残った人々からも慰みと礼の言葉が返ってくる。

仲間達は静かに笑っていた。シフォンが戻ってきた。それだけで充分だと言うように。

「……うん。こちらこそ、ありがとう」

暫くぼうつとそんな皆を眺めていた彼だったが、やがてゆっくりと表情を緩めると、控

えめな返事を漏らして再び小さく頭を下げる。

「だが、当の主犯格には逃げられたんだぞ？ よかったのか？」

その一方で、サンドゴディマの面々を束ねるバラクは淡々とその事実を逃さなかった。

「そうね。でも私達の目的はシフォンを捜し出す事だったから。…  
…相手は統務院ですら手を焼いている組織なんだから。正直、私達だけじゃあ手に負えないわよ。とりあえずは、皆  
さんを送り届けてから、街の守備隊に届け出ておくという所かしら  
ね」

「ああ、そうだな。妥当な判断だろう」

寸前で逃がしたジークや、利用されていたサフレらは彼のその言葉にしかめ面を見せてい

たが、当人はそんな視線を歯牙にも掛けず、イセルナの応答に頷いてから空を仰ぐ。

「……。問題は、こいつらだな」

言いながら見上げた視線。

夜空を背景に立つのは、先刻まで味方についてくれていた魔獣囚われの人々だった。

ジーク達もまた、彼の視線に追従するように、姿こそ異形だがまだ心はヒトのそれを保つ

ているこの彼らを複雑な表情で見遣って押し黙る。

死んでしまったのなら弔う事はできる。

だが、魔獣をヒトに戻す術など存在しない……。

「……悩ム事ナンテナイサ」

「殺シテクレ」

「えっ……！？」

しかし当の彼らは、確かにそう告げた。

ステラが銀髪を揺らし、明らかな動揺を見せる。ジーク達も、身を乗り出したり無言で眉

根を寄せたりと様々だったが、一様に躊躇いを零していた。

「そんな……。だって皆、こうやって普通に話せて……」

「アア。才嬢チャンノオカゲデ、心マデ怪物ニナラズニハ済ンダヨ」

「ダケドサ、自分達ニモ……分カルンダ。コノ正気モ、長クハ続カ

ナイツテコトクライ」

「それ、は……」

ステラは俯いて返答に窮する。だがそれは彼らの言葉の肯定に他ならなかった。

動揺で瞳を揺らしながら、ジークはアルスら魔導を使える仲間達に振り返ったが、その憂

いを認めるように、弟達は心底悔しそうな表情で力なく頷いている。

「だ、駄目だよっ！　せつかく生きてるのに！」

「仕方ネエサ。モウ……ヒトニ八戻レハシナインダロウ？」

「タトエアンタ達八見逃シテクレテモ、魔獣ツテノハイズレ狩り殺サレル。ソレハ俺達ガヒ

トダツタ頃カラズツト、アンタタチ冒険者ニ丸投ゲシテキタ事ナンダカラサ……

……

「頼ムヨ。ダツタラセメテ、アンタ達ノ手デ終ワラセテ欲シイ。……

……完全ニ魔獣ニナツチマ

ウ前ニ、セメテ人トシテ死ナセテクレ」

それでも魔獣達はそう頭を下げて懇願してきた。

そんな死の覚悟を決めた彼らに、ステラは大粒の涙を瞳に溜めて、ふるふると言葉が出ずに

に首を横に振っている。

「……分かった」

だが、仲間達はその願いを受け入れようとした。

ぼろぼろと涙を零すステラの肩をぽんと叩きながら、ダンがジークが、皆が真剣な面持ち

で一步彼らの前へと進み出てくる。

「みんな……？」

「……察してあげて。ステラちゃん」

「このまま彼らを解き放つても、待っているのは……人々の忌避と迫害です」

イセルナらはゆっくりと振り向くステラを横目に一瞥すると、静

かにそう諭していた。

その横顔は、何処までも真剣で……辛くて哀しそうで、悔しそうで。

だからこそステラはそれ以上何も言えなかった。視線を移した先のレナやミア、マルタら

友らも同じく苦渋の決断にじっと耐え忍んでいる様が見て取れた。

「アリガトウナ」「頼ンダヨ」

「……ああ」

彼らが 魔獣達がそつと身を屈め、首を差し出して来る。

首を跳ねれてしまえば、魔獣であっても大抵は息の根を止められるから。

「……すまなかった」

ダンとイセルナを中心に。

ジーク達は自分の中のざわつく感情を堪えながら、ゆっくりと武器を抜き放つて 。

「 はあっ、はあっ！ はあっ……！！ 」

地下アジトから逃走路を抜けて、ダニエルは一人廃村郊外の森の中を走っていた。

何度が振り返ってみる。どうやら追いかけては来ていないようだ。激しく息切れする身体を休ませるべく、彼は肩で大きく呼吸を整

えながら両膝に手をつき

その場にへたり込んだ。

（とんだ誤算だった。まさか、彼らにメア様が味方しているなど…

…。兵らに調べさせた情

報にはなかったのに……）

あの邪魔さえなければ。ダニエルは思った。

シヨックだった。何よりも、自分達“結社”の者にとって魔人とは瘴気を緩衝する人の盾

であり尊ぶべき存在なのである。そんな魔人当人が、自分に攻撃を



向けてきたのだ。

個人的には彼らに敗れた事よりも、その所為で“信仰”が揺るがされたことの方が衝撃が大きかったと言ってもいい。

「だがまだだ……。ようやく“信徒”の号を得られたのに、このままで終わる訳には」

「だよねえ？」

そんな時だった。

ダメージでボロボロになった服の汚れを拭いながら呟いたその声に、返答があつたのだ。

思わずハツと我に返り、ダニエルはその声のした方向　夜闇に溶ける森林の中に目を遣り目を凝らす。

「やあ。散々だったみたいだね」

「ざまあねえな」「あはは。ボロボロ」

やがて夜闇に紛れて姿を見せたのは、三人の人影だった。

一人は隆々とした体格の、いかにも荒っぽそうな大男。

一人は継ぎ接ぎだらけのパペットを抱えた、一見すると幼い少女。

そして一人は、青紫のマントを纏ったキザな言動の青年で。

「おお……！　これはこれは“使徒”様方ではありませんか。わざわざ御足労を頂かれたなど、何と申し訳ない……」

するとダニエルは彼らの姿を見るや否や、傳くように大仰に駆け寄って跪いていた。

アジトでジーク達に見せた余裕など何処へやら。

その様はまさに従属する者のそれで……。

「ああもつ、纏わりつくなんての。堅苦しい」

「ふふ。まあいいじゃないか。信徒達かれらを束ねるのも僕らの仕事だよ？」

大男は面倒臭そうに顔をしかめていたが、青年はむしろそんなダ

ニエルを微笑ましく

いや、嘲笑に近い表情で見下ろしていた。

ばさりとマントを翻し、青年はそのまま跪く彼の前にしゃがみ込む。

「……信徒ダニエル。さっきこのままでは終わりたくない、そう言っただね？」

「は、はいっ！ 勿論で御座います！」

期待の眼差し。ダニエルは道が開けた、そんな解釈してバツと顔を上げていた。

だがむしろ、対する青年の微笑みは不気味な“悪意”に類するものだった。

彼はそっと自身の掌を持ち上げ、このすがり付いてくる狂信の徒へと告げる。

「ならば君に新たな任務を与えよう。……“最期”の任務を、ね」  
そう呟いたその掌からは、濛々とどす黒いオーラが立ち上っていた。

その日、とある書簡に目を落としながら一人の男性が眉根を寄せていた。

淡い金色の長髪を後ろで緩く括り、腰掛ける黒革張りの椅子にどつしりと背中を預け、片

肘をデスクの上につき、じっと黙してその書簡に目を通してている。

彼自身を見れば胸元を緩めたワイシャツ姿　ラフなもの、その周囲を彩る室内の調度

品はどれも洗練された品質を漂わせており、彼が相応の身分であることを示していた。

セオドア・エイルフィード。近しい者達からの愛称はセド。

ここアトス連邦朝中西部の都市・打金エイルヴァーの街の領主その人である。

「セド様」

軽い数回のノックの後、ドアの外からそう聞きなれた男性の声が聞こえてきた。

「おう。開いてるぞ、入れ」

貴族　有爵位者の割には案外ざつくばらんな口調。

顔を上げると、セドはそうデスクの上から彼を促し室内へと招き入れる。

「失礼します」

折り目正しい一礼をして入ってきたのは、黒の正装を身に纏った壮年の男性だった。

アラドルン・ヴォルガー。エイルフィード家の執事長であり、セドにとっては幼少の頃から仕えてくれている頼れる副官でもある。

その背後にはアタッシュケースを手に提げた数人の使用人　機巧技師らの姿もある。

アラドルンは数歩進んで室内でセドに向き合うと言った。

「評議会の時間が近くなっています。そろそろ回線の準備をと思いますが」

「ああ、もうそんな時間か……。いいぜ、始めてくれ」

壁際の柱時計を見遣りセドは呟くと、そう承諾の言葉を返した。

すると「はい」と再び小さく低頭して、アラドルンはドアの前で控えていた技師らに作業の開始を指示する。

室内の隅に這わせた配線の繋ぎ口に、技師らが取り出した機材を接続していく。

その様子を横目に見ながらセドは椅子から立ち上がると、背もたれに引つ掛けていた正装

の上着を手に取り、羽織ろうとする。

「……セド様、その書簡は？」

「ん？ ゲドとキースからの報告書だよ。昨夜届いた。お前読んでないのか？」

「はい。執務室に届けるように指示はしましたが、私が検めた訳ではありませんで」

「そつか。まあいいや……。だったらお前も目を通しておいでくれ」「畏まりました」

主が身支度をしているのを一瞥してから、アラドルンは断りを得てデスクの上に放置されていたそれを手に取り目を通し始めた。

だがややあつて、その整えられた白髪交じりの口髭、歳にも関わらず精悍な顔立ちに静か

な緊張が走る。ぎゅっと寄せられた眉根。彼は書簡を手にしたまま、主に問い直した。

「この内容は……」

「ああ。またうちのじゃじゃ馬娘が面倒事に首を突っ込んだらしい。まあ、半分は成り行き

みたいらしいんだが」

険しいアラドルンの表情。

だが、対するセドのそれは一見すると苦笑混じりながらも、何処か気楽なように見えた。

正装に身を包み、鏡の前でタイの位置を調節しながら彼は笑う。

「全く我が娘ながら元気が良過ぎるっつーか何っつーか。ホント、一体誰に似たんだか」

「……………」

しかしアラドルンはその呟きに対しては黙っていた。

それは決して“それは貴方様しかあり得ませんでしょ”とは流石にツッコミを入れられな

かったからではない。入られなかったからでは、ない。

小さく咳払いを一つ。

書面に落としてた目を上げて、彼は代わりに憂慮の言葉を紡いだ。

「…………宜しいのですか？ この報告が間違いなければ、シンシアお嬢様は」

「これでもキースの密偵能力は信頼してるんだぜ？ 後から追調査をさせるつもりだが、

まあ間違っちゃいねえだろう」

「では、尚更このままというのも」

「分かつてる。苦言の一つくらいは遣るよ。でもまあ、あいつの性格からしてそうはいはい

と素直に言う事を聞いてくれるとも思わねえけどな……………」

胸ポケットから勲章バッジを取り出し、引っ掛ける。

それは名士 この国の有爵位者の一人として、そしてこの領土の統治を連邦朝政府から

任されているという証でもある。

「…………梟響アウルベルツの街に行かせちまうのは、間違ってたのかねえ」

再び黒革張りの椅子に腰掛け、セドはぼつりとそう静かに誰にもなく呟いていた。

「旦那様。回線の準備が整いました」

「ん。じゃあ早速繋いでくれ」

しかしそんな当主 いや一人の父親としての心配が脳裏を巡る中で、技師らが準備完了の旨を伝えてきた。

いけない。自分には課された仕事がたんまりとあるのだ。

セドはもう一度居住いを正してデスクに着いてから、技師らに合図を飛ばす。

すると、彼らが駆動を開始した機器を操作して中空に呼び出したのは……左右に何枚も展開されたディスプレイ。そこにはセドと同じく、勲章を付け正装に身を包んだ人々の顔が映し出されている。

『やあ、ごきげんよう。エイルフィード伯』

「こちらこそ。ごきげんよう、サヴィアン侯」

それは国中の、領地の統括を任された貴族らだった。

更に中央のディスプレイには一際大きく、豪勢な議場らしき場所とそこに着いている正装の人々が見て取れる。

これから始まるのは、アトス連邦朝の評議会。

各領地の統治を任された貴族らと、各地から選抜された市民の代表・評議員らによる国の意思決定の場である。

この国を含め、世界は未だその多くは王国という態を採っている。だがかつての「帝国」の圧政による人々の忌々しい記憶は今日も引き継がれている。

しかし、王を倒して市民達じみんが権力を握ろうという動きまでにはならなかった。

理由は単純だ。帝国による圧政で権力集中の危うさを知り、そして その後の度重なる

混乱、即ち権力の奪い合いを市民達かれら自身で続けた結果、得られる筈

だった安定した暮らしすらできなかつたという末路を知っているからだ。

ならば貴族と市民、双方が国政を動かそう。……その最終的な責任は国王に押し付けて。

謂わば折衷型の立憲君主制。多くの場合、評議会（国によって多少名称や仕組みが異なるもの）を中心としたシステムが一般的になっているのが現在のものである。

『 静粛に。静粛に』

やがて中央のディスプレイの向こう、議場の最上壇で国王列席の下、議長が評議会の開会を宣言していた。セドらもまた、その形式儀礼の前に小さく静かに頭を垂れる。

本来ならば、全ての領主・議員らが馳せ参じるべきなのが建前だ。だが大抵の場合、セドら遠隔地の領主達はこうして導話回線による参加である事が多い。

世界は……広いのだ。

『それでは、最初の議題に移る』

淡々と議事は進み始める。手元の紙資料、ディスプレイにも表示されたデータ。双方を合わせて出席者らは議論と、あわよくば採決にまで至る。

だが……結局は、多い者勝ちの“数の暴力”に他ならず、議論よりも事前の根回しが結論を決めている現実がある。

表面上はそんな議会に出席しながらも、セドはやれやれとやや冷めた想いを抱いていた。

（それよりも……）

セドは静かに目を細める。

先程まで目を通していたゲド・キースからの報告書簡。

そこには、娘達が知り合った冒険者達と“樂園の眼”<sup>エレン</sup>のアジトに

てその一派と交戦したと  
の文面が踊っていた。

幸い娘に大事はなかったものの、囚われていた人々が少なからず  
“結社”の手によって命  
を落としてしまったらしい。

（まあアランの言う通り、何がなんでも首を突っ込む相手にしちや  
ありスキー過ぎるわな）

娘が無事だったことへの安堵。一方で犠牲になった人々がいるこ  
と。

セドはフツと、そんな自分を内心で晒った。

随分と俺も小さくなったものだ。それとも……父親になれば誰し  
もこうなるものなのか。

だが、これでこの一件の全てが終わる気が、どうしてもしな  
かった。

報告書に上っていた当事者の名前。

囚われていたエルフの青年、シフォン・ユーティリア。

奪還戦に加わったメンバーの中に見た、ホウ・リンファやサフレ・  
ウィルハートといった

姓名。何よりも……ジークとアルスというレノヴィン兄弟の名。

内心凍り付いた背筋が、もう一度逆襲を受けたような気分だった。  
人違いか？ だがおそらくこの直感は間違っていない……。

（やれやれ……。因果なもんだぜ）

やがてセドはずしりと心の奥底を覗き込んでくる重量感に、思わ  
ず息を吐くと、

（なあ？ コーダス……）

評議のやり取りをBGMに、そう心の中であつての遠き戦友の名  
を呼んだ。



「ええ。検査結果を見る限り、大きな怪我也マナへの侵食も見られませんでした。処置としては栄養剤の点滴と何よりも静養。体力さえ回復すれば、一週間ほどで退院できるかと思えます」

廃村での“結社”との対決から数日。

ジーク達は依頼の合間を縫い、大事を取って入院しているシフォンを見舞っていた。

病室を訪れると、ちょうど回診に来ていた医師らと出くわし、彼の状態についての説明を受けることができた。

「そうですか。良かった……」  
「しかし、妙な病状でしたね。まるで長い間、身動きが取れなかったような」

「あ、はは……。まあ冒険者冒険者ですしね。ちょっとへマったんですよ」「ふむ……？ ですが無理は禁物ですよ？ 健康あってこそその我が身なのでから」

その中で医師は運び込まれたシフォンらの様子に小首を傾げているが、イセルナもダンも素直に仔細を話すことはしなかった。やり合った相手が相手という事もあり、下手に情報を漏らしてしまうのは得策ではないと判断した為だ。

幸い医師は苦笑いで誤魔化すダンらを追求するつもりはなかったようで、そう彼は医者としての忠告の言葉を残すに留めていた。

「では、お大事に」

そしてややあって、医師らは去っていった。

個室に残されたジーク達と病室の主となっているシフォン。

「……すまないね。こう皆で来なくとも良かったのに。依頼に支障が出るんじゃないか？」

点滴に繋がれ、ベッドに下半身を潜らせ座った格好で、そう彼はフツと静かな苦笑を漏らして呟く。

「気にすんな。こっちはちゃんと回してるぜ？」

「早くよくなつて下さいよ？ シフォンさんは俺たち遊撃隊のリーダーなんですから」

「おいおい。そこはゆっくり休んで下さいだろ？ 急かしてどーすんだよ」

だが対する仲間達にはこやかだった。

迷惑を掛けた。その自責の念を抱いているらしい彼をそれとなく宥め、励まし、どわつと時に笑つてすらみせる。

「これ、皆で選んだ本です。入院中は退屈でしょうから。イセルナさんやお父さん、アルス

君達の意見を聞いてシフォンさんの好きそうな魔導書や歴史書、あと小説も」

「それと果物も少々。医師から止められていなければいいんだが」  
そしてレナ、リンファが代表して見舞いの品を差し出した。

「……ああ。ありがとう」

静かに、ぐつと感情を堪えたような目尻で、今度はシフォンが微笑み返した。

ベッドのすぐ傍の棚にその暇潰し用の書籍を収め、新鮮な果物の入った籠を上置き置く。

「痛まない内に食べちゃわないといけないですね。宜しければ剥いておきましょうか？」

「いや、また後でもいい。自分でやっておくよ。……リハビリにもなる」

「分かりました」

その横では、元氣そうで何よりとホッと一息をついているサフレと甲斐甲斐しく世話を焼

こうとするマルタの姿がある。

言って彼女は進み出ようとしたが、シフォンはやりわりと止めていた。

食べる事に焦らないというよりも仲間達に手間を取らせる事がまだ申し訳なかったのかも  
しれない。

それから暫しの間、イセルナ達はシフォンと他愛ない雑談を交わした。

クラン依頼の進捗状況。廃村の一件で囚われていた人々は、無事守備隊の保護の下、元い

た住所へと送り届け始められたこと。そして近々、正式にあそこに埋葬された犠牲者らを甲

うべく慰霊の儀式が執り行われる話が進んでいること。

「……そうか。これで少しは皆も浮かばれてくれるといいな……」

シフォンはホッと、心底安堵しているようだった。

自分も囚われていた一人だったのに、他の皆を心配していた。

イセルナ達はそんな少々“他人優先”な仲間ともの姿を見て苦笑し、  
微笑みを返す。

「じゃあ、そろそろ私達は帰るわね？」

「ああ。穴を開けてしまつてすまないが、よろしく頼む」

「だから気にすんなって。今のお前の仕事はしっかり休むこつた。  
いいな？」

「……そうだね。ではその言葉に甘えて専念させてもらおうか」

「ええ、そうして下さい。私達冒険者は何よりも身体が資本なんです  
から」

「……それじゃあね？ また時間を見て様子を見に来るわ」

とはいえ、大人数で長いもよくない。

イセルナの一言を切欠に、一同は頃合をみて暇することにした。最後に一言三言やり取りを交わし、面々は連れ立って病室を後にしていく。

「……」

はたと、室内が静かになった。

廊下に行く足音や外で鳴く鳥の囀りが聞こえる以外、これといって何がある訳でもない。

「……。シフォン」

いや一人だけいた。

ぼつねんと、壁際にジークだけが独り、ベッドの上のシフォンを見遣ったまま残っていたのである。

シフォンも、ジークも暫くお互いをじつと見つめ見遣っていた。

仲間だから……何よりも懇意にする友同士だから。分かるものがある。

「……なあ、シフォン。どうしてお前はあんな無茶をしたんだ？」

やがてぼつり呟くジーク。

だが、その言葉は質問というよりは確認に近いニュアンスだったように思える。

「俺の所為なのか？俺が、いや俺の刀が“結社”に狙われたから、お前はっ」

それは自責の念に他ならない。

そもその発端は自分にあるとジークはずっと内心で思っていた。

“結社”の手の者を通じてサフレと戦う羽目になり、今でこそ傷は癒えているがリンファを負傷させてしまった。

その時点で責任は自分にあると思っていたのに、更に今度はシフォンを 友を敵地に向

かわせ、囚われの身とさせてしまうという結果も招いた。

「……俺がいたからお前も、リンさんも」

やはり、全ての発端は。

「それは違う。ジークの所為なんかじゃないよ」

「ッ!? でもっ……!」

だがそれでもシフォンは静かに微笑んでいた。正直、哀しい苦笑にも見えただけだ。

ジークが顔をしかめて己を責めようとする。するとベッドの上の友は、じつと目を細めて

その出掛かった言葉を無言のままに堰き止めていた。

「確かに切欠はジークが“楽園の眼”と交戦したことなのかもしれない。だけどそれを理由

に君を責めるつもりはないよ。僕も、リンファも、勿論皆もね。そもそも僕だって彼女だっ

て、自分の意思で決めて……守ろうとした。それだけなんだから」

「……」

シフォンは言う。だがそれでも友は黙したものの、不服な様子、悔しさを噛み締める様

を収め切ることはできないでいるようだった。

「……。ジーク」

だからこそ彼は、

「少し、昔話をしようか」

僅かに眉根を寄せた友にフツと微笑の一瞥を寄越すと、何処か遠くを眺めるように視線を

移して持ち上げ、ゆっくりと語り始める。

昔々、とある妖精族<sup>エルフ</sup>の里に一人の青年がいた。

彼は子供の頃から好奇心旺盛で、時折里にやって来る旅人や商人と積極的に交わっては未

だ見ぬセカイに想いを馳せる日々を送っていた。

……そうだね。エルフにしては珍しかったと思う。知っていることだろうけど、一般的に

エルフは閉鎖的な種族だ。由緒ある古種族の一員として、その古くからの伝統と格式を重んじ、秩序あることを何よりも尊ぶと言われている。

だからこそ、彼が周りの同胞達から白い眼で見られるようになったのは、時間の問題でも

あったんだ。……当の本人は若さ故か、そうした“空気”を読めずにいたのだけどね。

でも、彼がその事に気付いた時にはもう遅かった。

その日も彼は気の合う仲間の若いエルフらと共に外出から帰ってきた。

だけど……そこで目の当たりにしたのは、いつもの平和な里じゃなかったんだ。

攻めて来たんだよ。オートマタの兵士を中心とした“楽園の眼”<sup>エデン</sup>の軍勢がね。

どうして？ 彼は思ったよ。

自分はともかく、里は常に腕利きの戦士や術者らが詰めていた。

そう易々と里の守りが破

られるとは考え難い。

でもね……答えは単純だった。

奴らは予め手の者を送り込んでおいたんだ。

そしてその者とは、襲撃の数日前に行き倒れ、彼らによって保護されてきた行商人達

いや、そんな装いで皆を騙して里に潜入していた連中のスパイだったんだ。

青年は怨嗟を叫んだよ。

あちこちの家が火を掛けられ、逃げ惑う里の仲間を次々に殺された。

そんな連中の中に自分達が助けた筈の商人 “結社”の尖兵達の顔を見た時は、我を忘れて飛び掛っていた。

だけど、適う筈もなかった。安穩と理想論だけを抱いて鍛錬もろくにしてこなかった遊び人の寄せ集めじゃあ、日常の如く殺戮を繰り返す“結社”の力になんて及ぶ訳がなかった。

彼らは言ったよ。

『セカイを掻き乱す罪人全てに、天罰を』……とね。

一夜明けた里は、酷い有様だった。

それでも幸か不幸か、生き残っていた者達は居たけれど、むしろそれが連中の狙いだったんじゃないかと後々になつて思えるほどだった。

この疫病神め！

財産も家族も失つて、里の者達は一斉に青年らを責めたよ。

青年らは所謂“開拓派”的な思想に依っていた。本人達はそんな自覚には乏しかったのだ

けど。でも元よりそんな彼らを嫌っていた皆、特に長老クラスの面々は強く責め立てた。

……遅かつたんだ。気付くのも、改めるのも、何もかも。

もう里に居場所はなかった。

唯一、叔父さん夫婦は味方してくれたけど、その厚意は気持ちだけ受け取ることにした。

これ以上里に留まり続けければ、彼らすら皆は「敵」と見なすだろう。

だから、青年達は里を出る決意をしたんだ。

……ああ。そうだね。事実上の追放だったんだと思う。

それから彼らは、古界をぐるりと旅して回った。

でも既に近隣のエルフの集落にも噂は届いてしまっていて、居場所なんてなかった。他の

古種族の街でも、自分達が“結社”に目を付けられた者だと知ると殆ど例外なく距離を置い

て疫病神扱いだった。

どれくらいだったかな。だから彼らは地上界

ミ下ガルト  
顕界に降りる事

にしたら。  
かつて憧れた場所。外のセカイ。ここなら、自分達の居場所も見  
つかるかもしれないと淡  
い期待を抱いてね。

だけど……結果的にはそう上手く事は運ばなかった。

ジーク達生まれ以つてのミドガルドの住人には当然の景色だけど、  
彼らは初めて地上に降  
りた時、強い衝撃を受けたんだよ。

轟音を上げる機械の音、乱発される魔導。精霊達が……あちこち  
で酷使されていた。

遅過ぎたのかもしれない。でもそこで、ようやく“幻想”は砕け  
たんだ。

里で聞き及んでいた「豊かさ」は、決して万能のものなんかじゃ  
なかった。多くの犠牲を  
払いながら、それでも突き進む事で得られるものなんだってね。

そしてそんな現実が、遂にはそれまで行動を共にしていた青年ら  
の袂すらも分かつことに  
なつたんだ。

一人、また一人、青年の前から仲間が離れていった。

こんな筈じゃなかったという後悔や怨嗟の声だったり、自然を食  
い散らかす「繁栄」の姿  
に対する憤りだったり。……その度に喧嘩して、その度に誰かがい  
なくなつて。

遂には、青年は独りっきりになつてしまった。

共に地上に降りてきた仲間達の行く末は、とうとう分からなかつ  
た。

意を決して里に戻つたのかもしれない。もっと別の場所で落ち着  
いたのかもしれない。



或いは、もしかしたら……地上の有様に憤って“結社”に身を落とすとしたのかもしれない。

……うん。青年も随分と苦しんだよ。このまま色んな後悔や怒りを“開拓派”にぶつける  
無法者になつてしまおうかとさえ思った。

でもね？ ようやく「救い」の手が青年を救い上げたんだ。

冒険者 荒くれ者の汚名を着せられながらも、自分達の仕事  
人々を守っているとの自負を、誇りを胸に戦い続ける、そんな小さなチームに青年は拾われたんだ。

眩しかったよ。自分も、かつてはこうやって理想に燃えていたんだって思い返せて。それをただ甘い言葉を吐くだけで終わらせずに貫ける「強さ」が羨ましくて。

そして何よりも……彼らは居場所をくれたんだ。  
故郷を追われ、信じていた筈の仲間も去ってしまった彼に、皆はやつと落ち着ける居場所をくれた。……安息の日々を、くれたんだ。

「だから、ジーク。僕と君は似ているんだよ」  
はたとそんな言葉が向けられて、ジークはハッと我に返ってぼやけ始めていた意識の焦点をシフォンへと向け直す。

彼はとある青年の昔話だと語った。  
しかし流石のジークでも分かっていた。……これは、他ならぬシフォン自身の過去だと。

何と返せばいいのか。いや、それにだから自分に似ているとはどういう意味だ？

眉根を寄せ、疑問の言葉の代わりに視線を向けるそんな友にシフォンは言う。

「……以前、アルス君から聞いたんだ。ジークも、守りたい人を守り切れずに故郷を飛び出してきたんだってね。だからなのかな？　こうして僕らは仲良くできている」

「……。かもしれねえな」

あいつ、余計な事を。

ジークは内心舌打ちをしそうになって思ったが、それよりもシフォンが素直にそんなこっ恥ずかしい台詞を吐くものだから意識はつついその照れ隠しに回ってしまう。

束の間、ほんの数十秒間だけ、お互いの表情が緩む。

だが次の瞬間にはシフォンは微笑の中に、強い決意を瞳に込めて語っていた。

「僕は、ただ守りたかったんだ。狙われていたジークは勿論、僕に克蘭・ブルートバードという居場所をくれた皆を。だから……たとえ一人でだけでも、今度こそ奴らの思うままにさせたくなかった」

「……そうか」

ベッドに座った格好ながら、シフォンは深く深く頭を下げていた。すまなかつたと。

そんな友の姿を真正面から見据え、暫しジークは黙り込み、それだけを呟く。

「やっと事情は分かったよ。いいから顔を上げてくれ」

言われて、ゆっくりと。

シフォンは再び頭を上げた。それでも、映る瞳は告白を果たした清々しさというよりは友

が次に何を言ってくるのか、そんな不安の色が濃かったように思う。

「……なあ、シフォン」

だからこそ、ジークは正直に、今度はもやつく自分の胸の内を打

ち明ける。

「皆が大事なものは何もお前だけじゃねえんだぜ？ 一人で特攻なんて真似、もうしてくれる

な。俺達の為だっていっても、それでお前がいなくなっちまったら

……悲しいんだぞ」

ハツと弾かれたように、シフォンの表情が静かな驚きに染まった。

やれやれ、とんだお人好しだよ……。ジークはフツと口元で笑った。

「……ま。でも、ありがとうな」

でもだからこそ、次に口に使っていたのは叱責などではなく、感謝のそれで。

「……ああ。こちらこそ……」

シフォンもまた、思わず掌で目頭を押さえながら細く答える。

(ふう……。やれやれ、だな？)

(そうね。これでもう大丈夫でしょう)

そして病室の外 扉越しに、そんな二人のやり取りに耳を済ませる。

イセルナやダンから見舞いに来ていた面々もまた、ホツと密かな安堵と共に胸を撫で下ろしていたのだった。

10 - (2) 彼女達の決心

(……うう。人がいっぱいいる……)

目深に被ったフードの下から往来の姿と気配を覗く。

ステラは、意を決してホームの外へと足を踏み出していた。

昼間の通りをゆっくりと。

しかし左右前後からは雑多な人の波が寄せては過ぎてゆき、その度にステラは胸の内から

ざわめいてくる不安や怯えと戦わざるを得ないでいた。

「……本当に大丈夫？」

「辛かったら休んでもいいんだよ？ 無茶はしないで、ね？」

そんな彼女の両脇を、ミアとレナの友人二人は守るようにして固め、歩みを共にする。

「……。大丈夫」

だがステラはそれでも気丈に振る舞っていた。

もしかしたら、周りの人達に自分が魔人<sup>メア</sup>だと気付かれるかもしれない。もしかしたら、その事実を知って皆は私を迫害に来るかもしれない。

体が、心が、怯えてふらつきを隠せないでいた。

にも関わらず、両脇の友人達に支えて貰いながら、彼女は一步また一步と進んでいく。

(もう、私だけずっと閉じ籠っている訳には、いかないんだもん……)

それが彼女を突き動かした理由だった。

かつて行き場を失った自分を拾ってくれたジーク、クランの皆。

そんな仲間が シフォンさんが危ない。その報をレナやアルスと共に聞いた時、自分は

動いていた。こっそりと、廃村へ乗り込むべく用意された荷馬車に

隠れて。

しかし……あの時振り絞った勇氣は、果たして良いものだったのだろうかと思う。

シフォンさんを助けるはできた。でも、救えなかった生命もたくさんあった。

瘴気の毒で息絶えてしまった人達、何よりも魔獣の姿のまま理性を保ったが故に人として

最期を迎えたいと願った彼らのことが今も脳裏に焼き付いて離れない。

言ってしまったえば後悔だった。

あの時、魔獣と化したあの人達に「声」を掛けて踏み止まらせるべきではなかったのかも

しれないと。……自分は、かえって彼らの死を苦しいものにしたのではないのかと。

廃村から帰って来てからずっと彼らの最期について考えていた。でも。

（私なんか比べれば、ジークの方が、イセルナさん達皆の方がずっと辛かった筈……）

彼らに手を下したのは、安楽死を施したのは、自分ではなく仲間達。

冒険者の覚悟があるのかもしれない。

でも、皆は悔しさや悲しさといった感情をぐっと押し殺して刃を振り下ろしていたのだ。

自分は“遠い”と思った。同じ屋根の下に住んでいるのに、歩いている場所がまるで違っているように思えた。

今までなら、自分は冒険者じゃないから。その部屋の中に逃げていたかもしれない。

でも……もうそんな逃避に走るような口実を、彼女は許せなくなっていた。

(外に出る。少しでも、皆に追いつかなくっちゃ……)  
それがせめてもの、自分が犯した“過ち”に対する真摯な対応であり、自分なりの償いである。ステラはそう決心を固めていたのである。

『……………』  
一方で、ミアもレナもそんな籠りがちだった友の変化に気付いていない訳がなかった。

驚きはした。でも理由は分かる。

廃村での、地下アジトでの“結社”との戦いがこの小さな身体に大きな苦悩を抱えた少女を今まさに駆り立て始めているのだと悟っていた。

(ステラも、苦しんでる。ボクらの力が及ばなかったばかりに) 父や仲間達には褒められているこの拳も、あの時は十二分に発揮できなかった。

(ステラちゃん、ごめんね……。私達の浄化術がもつと磨かれていれば、死んでしまった皆さんの中にも助かった人がいたかもしれない)

養父が冒険者に転身した。その成り行きのまま自分は迷いのまま支援隊に加わっている。

(もつともつと、ボクは強くなりたい……)

(お父さん。祈りだけでは駄目なの？ 争いを止める為には、力が必要な……?)

ギュツと静かに拳を握り締めて、そつと苦しく感じる胸元に手を当てて。

ミアは自身の力が及ばなかった悔しさから、更なる強さを欲し始めていた。

レナは敬虔なクリシエン又教徒であるだけでは、人は救えないのだらうかと悩んでいた。

黒いフードを被ったままのステラを真ん中に、ミアもレナも、三人は言葉少なげにそれぞれ

れの苦悩に眉根をひそめながら歩いていった。

仲間を、守りたい。元気で穏やかでいて欲しい。

思い起こした最初のイメージは違っても、彼女達の描いた願いは間違いなく同じで。

「ほらほら、退いた退いた！」

「ボサツとしてると轢かれるぞ〜！ 道を空けてくれ〜！」  
だがそんな時だった。

次の瞬間はたと三人の耳に届いたのは、複数の男達の忙しない張り上げられた声。

何だろう？ 三人は誰からともなく、思わず立ち止まる。

「退いた退いた〜！」

すると、ややあつて目の前の石畳の上を数台の行列が駆けていった。

金属製の車体に大きな歯車。窓から垣間見えた、身なりを整えた壮年男性を乗せたそれら

はどうやら馬ではなく、燃料を燃やして動いているらしい。車体の尻からは黒い煙が吐き出

されている。

鋼車。機巧技術が生み出した、鋼の車だった。

どうやら先の声の正体は、この車列が通る為の先払い達であるらしい。

三人は勿論、周囲の往来が物珍しそうに、しかし轢かれるのは御免と言わんばかりに遠巻

きに道を空けて眺めていた。そんな光景の中、やがてこの鋼車の列は通りを横ると、あつと

いう間に遠くに姿を消してしまう。

石畳の上に、モクモクと黒い煙が暫し漂っていた。

だがそれも束の間のこと。突然の車列が通り過ぎた後いつもの雑踏が盛り返してくると、

人々は次の瞬間には何事もなかったように再び人の波を形成し始め

る。

「……鋼車なんて、珍しい」

「う、うん。何処のお偉いさんだろうね……?」

レナ達は暫しぼうっと、先程までの思考を一緒に持っていかれたかのようにその場に立ち尽くしていた。

最初にぼつりと呟いたのはミア。それに続いて、戸惑いながらもレナが頷いて言う。

魔導や機巧技術が発展しているとはいえ、基本的に一般庶民の交通手段は馬車が殆どだ。

それなりの遠隔地、或いは別の大陸へ渡る必要がある際には流石に鉄道や飛行艇を利用するが、それでも現状としてそれらの運賃は決して庶民にとって安いとは言えない。

だからこそ、鋼車や飛行艇などといった自家用機を所有するということとは、その人物が貴族・金持ちの類とほぼイコールであると考えて差し支えないのである。

「……。も、もしかしたらこの前の“結社”との件で領主が私達のことを調べてるのかも。」

ど、どうしよう? 今度こそ見つかったら、私」

「だ、大丈夫だよ。ステラちゃんの身柄はイセルナさんが責任を持って預かってくれる」

でしょ? きちんと手続きは取ってあるんだから平気だよ。ね?」

「うん。仮にそうだとしても今更だと思うし。それに、もし本当にステラを連れ去るっていうなら……ボクが追い払う」

「あ、ありがとう。でも……穏便にだよ?」

まさかと思い、ステラはぼそつと不安を口にしたが、レナもミアもその可能性は低いと大



丈夫だと彼女を宥めていた。

お互いに言っ、はたと沈黙の間が空く。

ギクシヤクというほどではないにせよ、どうにも互いに“守りた  
い”気持ちがあふいてい

るように思えて何だか妙で、何だかおかしくて。

『…………ふふっ』

くすりと。三人はちよつとだけ堪えて、ちよつとだけにはかむ。

「…………。でも何で、あの人たちはアウルベルツに来たんだろ？」

「分からない。そもそも貴族達とボクラじゃ、生きている世界が違  
う」

「それはそうかもしれないけど……………」

そして互いに顔を見合わせると、彼女達は既に姿も見えなくなっ  
てしまった車列の行った

路地の先を、ぼんやりと眺めた。

機巧技術が機械を繰る“物的技術”だとすれば、魔導は精霊達との関係性の上で初めて成り立つ“人的技術”であると言えるだろう。

勿論、魔導の知識は必要だ。だがそれだけで魔導の行使 精霊達の「奇蹟」を借り受けられる訳ではない。

呪文という共通言語こそあれ、最終的には術者が精霊達とどれだけ信頼関係を築けるか。

魔導の成否はそこに大きく依っているが故に、術者個々人の人的要素が強いのである。

そのため、ここ魔導学司校アカデミーでも座学の講義棟に加え、そうした実践訓練の場としての演習場アリーナもまた何棟も設けられている。

この日、アルス達は実習に出席する為、その内の一つへとやって来ていた。

「うっし！ 実習だ、腕が鳴るぜ！」

「上機嫌だね。フィデロ君」

「……まあ、元々机に向かってじっとしてるようなタイプじゃないからね」

ルイスとフィデロ、いつもの学友二人と連れ立ち土と石畳のピッチへと足を踏み入れる。

アルスが微笑みながらついと目線を上げると、ドーム状の天井から何本もの照明ランプが下がっているのが見えた。

学院のアリーナに入るには、監視棟を兼ねた全棟共通の出入りゲートを通るしかない。

事前の手続き（実習時は教員が済ませている）さえあれば、あと

は学生証を提示してそこ

から延びる連絡通路を通って互いに繋がっているドーム状の各アリーナへと進める。ちなみ

に今アルス達がいるのは第六アリーナだ。

「そうだね。魔導は知識以上に実践も大事だし」

笑顔で遠回りに毒気を吐くルイスに、アルスは優しい苦笑で小さく頷いていた。

既にピッチ内に来ている者、後ろからやって来る者。講義開始の時間が近付いていること

もあり、他の受講生らが集まり始めている。

拳を握って今にもどこかに殴り掛かりに行きそうなくらいに生き生きとしているフィデロ

の後ろ姿を見つめながら、アルスは思っていた。

（そうだよ……。僕に必要なのは、実践なんだ……）

それは以前教官であるブレアから受けたこれからの指針。

そして更に廃村での“結社”との対峙を経た今では、その言葉はより具体的な願望として

アルス自身を静かに、しかし確実に突き動かそうとしている。

救い出せた仲間。一方で救えなかった　みすみす死なせてしまった、生き延びても魔獣

の姿故に死を望まざるを得なかった人々がいた。

どれだけ知識を深めても、自分は目の前で苦しむ彼らを救い切れなかった。何よりも兄達

が、悔しさを堪えながら人の心を残したままの彼らに刃を振り下ろす後ろ姿が辛かった。

もっと……もっと僕は、力をつけなくっちゃいけない。

皆の為にも。何よりも自分自身の為にも。

静かに悔しさと決意を反芻し、アルスは密かに拳を握り締める。

「ちよつと。ぼさつと突っ立ってないで下さいな？」

「えっ？　ああ……ごめん」

すると背後からどうにも不機嫌な、聞き覚えのある声がした。

振り返るとそこにはシンシアと取り巻きらしき女子学生らの姿。

アルスが思わず反射的に

謝るが、彼女はふんと小さく鼻を鳴らすと、すたすたとピッチの中に歩いていってしまふ。

「何だよ、感じ悪いなあ。主席アルスと違って次席は随分と天狗だぜ」

「ま、高飛車なのはもう慣れたけどね。アルス君、エイルフィードさんに何かした？」

「何かって……。ううん、特に心当たりはないんだけど」

そんな後ろ姿を、ぼうつと疑問符を浮かべて見遣る三人。

だがそんな怪訝の思考も、直後にドーム内に鳴った講義開始のチャイムの音と、計ったよ

うに正確にその場に現れたエマら教員陣によって中断されることとなった。

「皆さん揃っていますね？ それでは早速実習を始めましょう。先ずはこれを腕に。学生証

も提示して下さい。出席確認も済ませます」

この講義 魔導解析論の講師であるエマがバラバラにピッチ内に散っていた生徒達を手

を叩いて呼び寄せると、彼女は傍に控えていた他の教師ら（作業着風な格好から察するにア

リーナ専任の職員と思われる）に合図をし、アルス達一人一人に乳白色の腕輪 魔導具を

配らせ始めた。

言われるがまま腕に嵌め、皆がそこに刻まれた呪文ルインを見ている。

「簡易なものですが、障壁生成用の魔導具です。いくら実習とはいえ、本当に魔導が直撃すれば無事では済みませんからね」

このように、安全面への配慮は万全が期されていた。

原則、アリーナを利用する際はこの腕輪を装着することが義務付

けられているのである。

「さて……。この講座では相手からの魔導に対してどう対処するのがより効果的かを学んで貰っている訳ですが、今回初めての実習講義という事で、先ずは単純に攻撃魔導を放たれたという想定からスタートしてみようと思っています。実際は術式の系統や置かれた環境などもっと複雑な因子が絡むのですが……今はそういった部分は置いておきます」

強く声を荒げる訳でもない、エマの切り出す言葉。

それでもアルス達を含めた受講生らは一斉に静かになり、即席で並んだ集団のまま、彼女の講釈の始まりに耳を傾けている。

「一応、軽く確認しておきましょうか。では、その貴方」「は、はいっ」

「魔導における属性とその相反する関係を答えて下さい」

暫く語った後、エマはビシリと生徒の一人にそう設問を出した。

「えっと……。焰と蒼、鳴と流、墳と天、魄と鏤、聖と冥、意と虚あと……刻と界です」

「よろしい」

指名されたの男子は緊張している様子だったが、魔導師を志す者にとつてこれくらいならまだ常識の範囲といえるものだ。

特に詰まることもなく答えた彼に、彼女はそう言って頷く。

「基本的にこれら相反関係にある魔導同士は相殺し合う性質を持っています。但しこれは、

あくまで力が拮抗している場合です。実際には導力 術式への出力の強度などに差がある

ので、多くの場合力量の大きい側が押し勝つ形となります」

魔導解析学はより効率的な魔導の行使を追及する、謂わば対策指

南書としての位置付けに

ある。だからこそこの分野は実益に結びつき易く、理路整然として  
いる。

「ですが、逆を言えば力づくで押し切るのは効果的ではない、リス  
キーな選択だとも言えます

す。だからこそ、魔導を打ち合うにしてもより相手よりも優位に立  
ち回れるように多くの系

統の魔導を修めておくことが大きなアドバンテージとなります」

生真面目な気質の彼女のような人間にとっては、これほど住み心  
地の良い学問世界はない

といつてもいいのかもしれない。

「ですが……知つての通り、人が扱える魔導の系統には個々人の持  
つ“先天属性”によつて

得手不得手が存在しています。故にただ弱点を突くだけではなく、  
自分の持ち味を最大限に

伸ばし活かせるよう状況に柔軟に対応することこそが最終的な効果  
力を決めると言えます。

では、その貴女」

「はいっ……」

「魔導における属性の親和関係を答えて下さい」

今度は別の女子生徒が指名されていた。

先の彼と同じくエマの伶俐な眼差しが恐いのか、彼女もまた緊張  
しているようだった。

「ええつと。焰と鏖、蒼と流、鳴と天、墳と魄……聖と意に、冥と  
虚……。刻と界に対して

は純粋な親和関係はなかった……と思います」

「よろしい。ではこれらの親和関係同士の系統を何と呼称しますか  
？ はい、貴方」

「え、えつと。火門、水門、風門、地門、光門、闇門、空門です」

「ご名答。またこれらの親和関係に加えて、個々の属性に対する準

親和関係が各系統同士を結び付けています。皆さんはもう導素表（属性同士の親和関係を線で結んだ図）を頭に叩き込んでおられると思いますので割愛しますが、特に刻属性と界属性はこの準親和性でのみ結びついている為、全系統の中でも最も扱いが難しいとされています。…ちなみに、私の先天属性はその片割れ、刻属性なのですが」

エマからの質問の嵐に耐えしのぎ、その後何気なくぽつりと出た彼女の告白。

生徒達はその事実を知り少なからずどよめいていた。

刻属性は「時間」を、界属性は「空間」を司る魔導の系統だ。その特殊さ故に扱える人材は他の系統に比べてぐっと少ない。皆が驚くのは無理もないことだった。

「……静かに。前置きはこのぐらいにしておきましょう。先ずいくつか私が実演をします。」

レノヴィン君、こちらに来て貰えますか？」

「あ。はい」

それでもエマはあくまでクールに振る舞うとざわめく彼らを静め、今度はアルスを呼んできた。好奇の眼。自分たち今年の新入生主席の登場。そんな皆の色々な感情のこもった視線を全身に受けながら、アルスは小走りでエマの下へと向かう。

「それでは先程の知識を実践して貰おうと思います。レノヴィン君、貴方の先天属性は魄でしたね？」

「はい」「そうですね。何たってこの私が」

「今から私が墳魔導と刻魔導を撃ちます。一発目は相反属性で相殺を、二発目は親和属性の

術式を使ってみて下さい」

確認の為の開口一番に頷くアルスと、ふふんと胸を張ろうとするエトナ。

だがエマはそんな樹木の精霊の言葉には耳を貸すことはなく、次の瞬間には“使う魔導を

宣言”した上でそんな指示を出してくる。

「……。はい、分かりました」

「むう……」

むくれる中空のエトナに苦笑してから、アルスは再び頷いた。

そしてそれを合図に両者はザツと距離を取った。ルイスやフィデロ、相変わらずの不機嫌  
面なシンシアを含めた生徒達も心持ち距離を取り直している。

エマがゆっくりと呪文を唱え始める。それをワントテンポ観察してから、アルスもまた同じ

ように一発目の詠唱を開始する。

「盟約の下、我に示せ

ストーンクラフ  
礫の塊弾

「盟約の下、我に示せ

ウィンドダート  
風紡の矢!

両者の掌に展開された魔法陣。

エマの黒色のそれには地面から多数の石塊が引き寄せられ、飛ぶ。アルスの白色のそれには風が渦巻き矢のような螺旋となり、飛ぶ。二人が放った魔導は寸分の狂いもなく真正面からぶつかっていた。地と風、相反する二つ

の力はぶつかり合った次の瞬間、共に四散し消えていった。魔導同士  
の相殺だった。

続いて、今度もエマがまた先んじて詠唱を始めていた。

様子を見ていたエトナが半ば無意識に前へ出てこようとする。だがアルスはそれを片手で

押し留め、彼女に微笑んで頷くと、

（まあこの腕輪があるし、先生も加減してくれているから大丈夫だ  
とは思うけど……）



向き直って指示された通りに二発目の呪文を唱え出す。

「時をたゆたう紺霊よ。汝、その囚われぬ流れにて全てを掌握し給え。我は仇なす者の時を

掴まんと望む者……」

そつとアルスに手をかざし、エマが呪文を紡ぐ。

その掌には紺色の魔法陣。そう多くをお目にかかれない刻魔導発現の瞬間。

「盟約の下、我に示せ

クロック  
時の把紋」

「盟約の下、我に示せ

ジューム  
撓の樹手！」

二発目。今度は紺色と緑色の魔法陣が相対した。

アルスの足元から伸び、加速してゆく触手のような樹木が一本。だが、対するエマからは

何か目に見えるものが放たれた様子はない。しかし……。

「ッ！」

変化はすぐに起きた。

何か、目に見えない振動が中空を通り過ぎ樹木の触手と貫いた次の瞬間、触手の動きがピタリと止まったのである。

ざわつと小さくどよめく生徒達。するとエマはそんな皆を僅かに一瞥すると、くいつと指

先を折り曲げ、伸ばす。するとどうだろう。それがまるで合図だったかのように、樹木の触

手がアルスに向かって加速し始めたのだ。

刻魔導。それは時間に作用し、そのベクトルを自在に変える。

故に初級術式ですらこのように相手の魔導を“逆再生”する事ができるのである。

樹木の触手の矛先が変わった。

迷いなく、いやエマの制御によりアルスの放った魔導は他でもないアルス自身に向かい、

腕輪から自動的に発動した障壁に弾かれて爆ぜ消えたのだった。

「ア、アルス!？」

「……大丈夫。これが『親和属性による増幅効果』なんですよね?」  
跳ね返ってきた自身の魔導の勢いで尻餅をついたものの、アルス自身に怪我はなかった。

エトナが思わず心配するが、当のアルス自身は最初の指示の時点でエマの意図が分かっている。

「ええ、その通り。話が早くて助かります」

エマはコクと頷いていた。一応アルスが無事なのを視認すると、きびきびとした動きでこの

の撃ち合いを見守っていた生徒達に向き直って言う。

「理解できましたか? これが魔導の相反属性同士の相殺と、親和属性による自身の術効果

の増幅です。先程も補足はしましたが、相手との力量差やその場の状況、何よりも放つてく

る術式の種類によって対応は違ってきますが、基本的にこの二つの手法を如何に上手くノウ

ハウとして組み込めるかが実践的な魔導解析の骨子となります」

まだポカンとしている者が多い生徒達。

それでもエマはパンパンと手を叩き、彼らを次のステップへと促した。

「では、今度は皆さんも実践してみましよう。三人一組を作ってお互いに十分な距離を保つ

て下さい。内二人が実際に魔導を撃ち合い、残りの一人がグループを囲むように障壁を張り

フオローに入ること。それと安全面には万全の体勢を期しています

が、あまり強力な魔導は放たないように。相手を怪我させる事が目的ではありませんからね。では……始め!」

そして最後のその一言で、生徒達は弾かれるように動き始めた。それぞれが手近に三人組を作り、ドーム状のアーリーナ内にくつもの障壁のドームを張っていく。中には気が早いのか、早速撃ち合いを試しだす者達も見られた。

「お手本ご苦労さま」

「俺達も組もうぜ」

「あ、うん。行こっか」

そんな中アルスも、ルイスとフィデロに誘われてその障壁ドームの一角を成す事になる。

「よし、じゃあ始めるぞ。あ、俺の先天属性は鳴な」

「僕は天だよ。フィデロ、馬鹿力は出さないようにね？」

「分かってるって。んじゃ……」

ルイスが障壁を張って見守る中、向き合ったアルスとフィデロが詠唱を開始した。

掌の水色と中空に現れた黄色。二色の魔法陣が展開される。

「盟約の下、我に示せ ライトニング 雷撃の落ッ！」

「盟約の下、我に示せ ウォーターシュート 水の流弾」

アルスの頭上から真つ直ぐに落ちてきた一条の雷。だがアルスはたっぷりと余裕を以ってそれに反応し、頭上へ掲げた掌の魔法陣から凝縮された水流を放っていた。

上空でぶつかり、相殺された両者の魔導。だが……やや水流の方が電撃を押ししているようにも見えた。

「まだまだあ！ もう一丁！」

それでもフィデロは豪快に笑っていた。片腕をぐんと後ろに振り被り、次の詠唱に掛かり始める。アルスもまた、再び彼の掌から展開される黄色の魔法陣を確認すると対抗する為の

詠唱に移ってゆく。

「盟約の下、我に示せ

サンダーブレイド  
雷剣の閃ツ！

「盟約の下、我に示せ

バブルコーティング  
水泡の護衣

次にフィデロが放ったのは、魔法陣から延びた長剣状の電撃。彼はそれをバッドの如く振り抜くとアルスを薙ごうとする。

だがその一撃がヒットし、腕輪の障壁が作動するよりも速く、アルスの全身を泡の防壁が包み、雷剣の衝撃を受け止めていた。

迸る雷のエネルギー。だがそれすらも受け流すように、ややあつてフィデロの放った雷剣は弾き飛んだ飛沫と共に掻き消されていた。

「……やるなアルス。流石だぜ」

「あ、はは。ありがとう……かな」

「とういかさ。アルス君、防御呪文は今日は範囲外じゃないの？」

「あつ」「何だよ、素か？ 素なのかよお？」

破られたのに嬉しそうに笑うフィデロ。

だがルイスがぼつと指摘したアルスのポカミスで、更に彼は可笑しそうに笑っていた。

そんな屈託のない友に、アルスもまた苦笑交じりに、だが間違はなく居心地良さに微笑みを返す。

「……………」

一方シンシアは、遠巻きにそんな様子を見遣っていた。

じつと不機嫌面のまま見ているのは、柔らかな苦笑を漏らしているアルスの表情。

無言。そんな姿に、彼女はギツと密かに唇を噛む。

「め、盟約の下、我に示せ

アイスニードル  
冷氷の刃！

するとそんな隙を気付いていたのかいなかったのか、シンシアと向かい合っていた女子生

徒が少々おっかなびっくりなまま詠唱を完成させ、掌の青い魔法陣

から鋭い氷の棘を飛ばし

てくる。

「ファイアボール  
……炎熱の弾」

だがシンシアはそんな一撃すら意に介さぬと言わんばかりにサツと片手を振ると、一瞬で

飛んできた氷の棘を跡形も無く焼き払ってしまった。

同時に勢いを失くさなかった炎の球が、対面するこの女子生徒を直撃する。

きゃあと短い悲鳴と自動展開された障壁。それでも彼女はシンシアの放った迎撃の威力に

耐え切ることができず、そのままドスンと尻餅をついてしまう。

「あう……」

「……全く。詠唱の際に雑念を混じらせては術の質に粗が出ますわよ？ これは訓練ですか

ら今は大したことはなくても、本当の実戦なら貴女、とつくに黒焦げでしてよ？」

「そうですね……。す、すみません」

「私に謝らないで下さいな。次はもっと集中するのですよ？」

シンシアは肩をすくめてため息をつきながらも、颯爽と彼女に近づき、さも自然と言わん

ばかりに手を差し伸べていた。

バツが悪いらしく苦笑して平謝りする女子生徒。

（……）。やはり私に相応しいレベルの同窓生というのはそういるものではありませんわね）

そんな彼女を、シンシアは再びやんわりと窺めるとそつと嘆息をつく。

「はい、そこまです。皆さん一旦集合して下さい」

そうしていると不意にエマが皆の注意を引くように手を叩いて告げた。

撃ち合い練習の手を止め、障壁を消し、アルス達生徒が再び集ま

ってくる。彼女は面々が揃ったのをざっと見渡し確認すると、言った。

「少しはどういうものか体感しましたね？ 座学だけでは修め切れないのが魔導です。今後

ともこのような実習は続けますから、各自復習を怠らないように。

では、今度はもう少し次

のステップに進んでみましょう。……レノヴィン君、こちらへ」

「はい……」

あれ？ また呼ばれた。そんな当人の小さな躊躇い。

新人生主席つても大変だな。そんな生徒達の静かな苦笑とやっかみ。

アルスは呼ばれて、再びエマの前に進み出た。無意識に手首の腕輪を撫でている。先の実

演で説明もなく相棒を攻撃されたのが快くなかったらしく、彼の頭上に漂っているエトナは

無言ながらも先程より間違いなくむくれていた。

「先程は予めどの系統の魔導を使うか伝え合った上で打ち合っていました。ですが本当の

実践場面では勿論、そんな悠長なことはまずあり得ません。ですので、今度はお互いに自由

に系統を選んで打ち合ってみましょう。タイミングも互いの間合いも自由、より実践に近い

形式です。ではレノヴィン君、先程のように私と」

「待つて下さいな。ユードイ先生」

だが、そんな次のステップへと進もうとしていた彼女達を引き止める声が上がった。

アルスがエマが、皆が一斉に向けた視線の先にいたのは、他ならぬシンシアで。

「……何でしょう？」

気の強い彼女の人となりを多少なりとも知り始めていた生徒らが

面と向かって口出せる筈

もなく、数拍の後、エマが皆を代表する形で彼女の次の言葉を促していた。

するとキツと睨み付けるような、強い眼差しがアルスに向けられる。アルス当人は頭に疑

問符を浮かべ、エトナやフィデロは警戒の構えでその横顔を睨み返している。

「ユーディ先生。そのアルス・レノヴィンとの実戦、私に譲っては下さいませんか？」

途端にざわつく生徒達。エマは黙したまま目を細めていた。

そしてそんな中で、当人であるにも関わらずいまいち状況が呑み込めずにポカンとしてい

るアルスに、シンシアはびしりと指差して振り向くと、

「私と勝負しなさい、アルス・レノヴィン！　ここであの時の決着をつけますわよ」

そう強気全開に言い放ったのだった。

「ちょっと、何言ってるのよ。まだ入学式の日のアレを根に持っているわけ!？」

「チツ。さつきから黙ってりゃあしゃしゃり出やがって……」

アルスへの宣戦布告。再戦の申し込み。

ざわつく面々の中にあつて、逸早くそう反抗の声を上げたのはエトナとフィデロだった。

「貴方達は引っ込んでいなさいな。これは私と彼との矜持の問題です」

「んだとお!？」

「関係ないことないじゃん! 私はアルスの持ち霊なのっ!」

「ま、まあまあ二人とも落ち着いて……。皆も先生もびっくりしてるし、ね?」

それでもシンシアは強気な言葉と態度を返してきた。

売り言葉に買い言葉。そんな表現がびったりなような互いの間で散り始める火花。だが、

そんな仲間らの憤りを宥めたのは他ならぬアルス本人だった。

流石に彼当人に言われたこともあり、それ以上の反論を吐くことは抑えていたが、二人の

様子は不服そうな気色を隠さない。やれやれと眉根を下げて苦笑すると、アルスは彼女に向

き直って訊ねる。

「あの。どうしても戦わないと駄目ですか?」

「拒否権があると思っただけ? それにあの時とは違って、ここなら存分に戦っても問題は

ない筈ですもの。……そうでしょう、ユーディ先生?」

正直言っただけが進まない。

だがそんなアルスのやんわりとした態度も、シンシアの先んじた



強気の前にはあまり意味

を成さなかったようだ。更に彼女には何か算段もついていたらしく、返答の後にそう付け加

えると、先程から眉根を寄せて押し黙っていたエマにそんな言葉を投げ掛ける。

「……この機会を狙っていたという訳ですか。確かに、私は学院長室で貴方達に『互いの実

力を図りたいのならアリーナの模擬戦を利用しなさい』とは言いましたが……」

彼女はぶつぶつと呟きながら、してやられたと静かな悔しさを漏らしていた。

確かここならば周りに被害が及ぶこともなく、安全性も配慮されている。実習時間中とし

てきちんと（他ならぬ自分自身が）利用申請も済ませている。「……。分かりました」

そして暫し彼女自身の中で思考が戦った後、エマは嘆息ながら言った。

「その申し出、許可しましょう。予定とは違いますが、講義の後半は二人の模擬戦を皆さん

で観察するという態を採らせていただきます。成績優秀者同士の実戦は皆さんにとっても良

い勉強になるでしょう。……それで構いませんね？」  
「えっ。せ、先生……?」

「ご英断、感謝致しますわ」  
戸惑ったままのアルスト、小さくほくそ笑むシンシア。

そしてそうと決まれば早速と、エマらは他の生徒達の誘導を始める。

どうしよう。話が進んでいつている……。  
むすつとしたエトナを伴ってアルスが立ち尽くしていると、ふと

目の前にフィデロが腕組

みをしながら割って入ってきた。

「ならエイルフィード、俺も混ぜるよ。これでも武術やってるからな」

「ふむ。じゃあ僕は代わりに彼女の側につかせて貰おうかな？ —

対二、いや二対三じゃあ

人数的に不公平だからね」

「フィデロ君……。それにルイス君まで……」

「な、何をいきなり。これは私達の」

「分かりました。それではフィスター君とヴェルホーク君も参加という事で」

申し出はフィデロとルイスからも出たのだった。

ポキポキと拳を鳴らし、アルスの隣に立つフィデロと、公平の為にと言いつつ何処か楽し

むような底を隠した微笑でシンシア側についてみせるルイス。

シンシアはあくまでアルスとの一騎打ちを望んだが、エマが容認する言葉を放ったため、

なし崩し的に三対三（エトナとカルヴィンを含む）の模擬戦という形式に決まった。

暫くしてエマや職員、生徒らを含めた残りの面々はアリーナのピッチから通用口を經由す

ると、数段高い観客席へと移動を完了していた。

ちなみに観客席とピッチの空間の境目 ずらりとフェンスが設けてある部分にも障壁が

展開されるようになっており、万が一流れ弾的に魔導が飛んで来たとしてもよほど強力な一

撃が叩き込まれない限りは大丈夫な設計になっている。

「うーん。気が進まないな……」

「……まだ言ってる。考えてもみてよ、ここであいつをやっつければ今度こそイチャモンを

つけられる謂れもなくなると思わない？」

「うーん、どうなんだろう？ 何だかあまり変わらなさそうな気がするんだけど……」

ピッチ上にはアルス・エトナとフィデロのチームとシンシア・カ  
ルヴィンとルイスのチー  
ムが距離を置いて向き合う形となっていた。

エトナの“懲らしめてやるうぜ”的な発言に苦笑を隠せないでい  
ながらも、アルスは戸惑  
いの思考を巡らせていた。

確かにあの時の決着はついていない。以前にキースさんとゲドさ  
んから彼女なりの事情と  
性は聞き及んで理解はしたつもりだった。

でも、無闇な戦いは好きにはなれない。誰かを守るといった理由  
ではないからだ。

(シンシアさん、僕の事がそんなに嫌いなのかなあ……)

どうにも重く張り付く気鬱を落ち着けるように、そつと胸を撫で  
て大きく深呼吸を一つ。

「心配すんなって。前衛は俺が張ってやる。お前はあのタカビー女  
に手痛い一発をぶち込ん  
でくれればいい。簡単だろ？」

「う、うん……」

だがそんなアルスの思案など知る由もなく、傍らのフィデロは手  
足首を回して準備運動を  
しながらそんな言葉を掛けてくると、はたと手首に琥珀色をした腕  
輪型の魔導具を装着して  
起動させた。

「来い、ヴォティックス迅雷手甲！」

次の瞬間、黄色 鳴属性の魔法陣と共にフィデロの両腕に装備  
されたのは、盾と拳を組

み合わせたかのような大型の手甲。手首、盾の頭部分には核となる  
琥珀色の宝珠が嵌ってお

り、意気揚々とした使い手に合わせて静かに光を反射していた。

「どうやらこれが彼の主装であるようだ。」

「何度か拳を突き出したりして感触を確かめてから、彼は「準備オッケーです！」と観客席

に陣取ったエマらに合図を送る。」

「分かりました。では、全員構え。」

エマは傍の無線拡声器でアルス達にそう指示を送った。

「持ち霊付きの魔導師ともう一人、それが二組。それぞれに臨戦体制で持つて互いを見る。」

「始め！」

ギリツと絞り放つように、次の瞬間開戦の合図が飛んだ。

するとフィデロが急激な加速で飛び出したのは、それとほぼ同時。両手甲から電撃のエネルギーが噴射され、鉄砲玉よろしく彼自身をいの一番に特攻させたのである。

「うおらあああッ！」

基本的に、魔導師は呪文を唱える時間が取れなければ無力に等しい。

それは持ち霊を持っていても中々変えられぬ欠点でもある。シンシアはそのあまりに直線的に過ぎる初手に驚き、対応に遅れを生じさせていた。だが……。

「ゲイルスタッフ風練りの杖」

その隣で、今度はルイスが指輪型の魔導具を起動させていた。

白色 天属性の魔法陣と共に出現し、彼の手に握られたのは端々に真っ白な飾り布が付いた一本の杖。

するとどうだろう。ルイスがその杖を軽く一振りした瞬間に、周囲の大气が揺らめき突如

として巨大な風の防壁を作ってフィデロの突撃を受け止めていたのである。

渦巻く風の壁に、バチバチと電撃のエネルギーが迸る。

だがそんな風圧にやがて押し返され、フィデロはその威力と共に背後のアルスの方へと弾き飛ばされた。

「大丈夫？」

「え、ええ。一体何ですか？ 魔導師がいきなり単身で突っ込んで来るなんて……」

「うーん、魔導師っていうかフィデロは職人志望だからねえ。まあ全力馬鹿だからああいう

戦い方が性に合っているとさえ言えるのだけだ」

自分達の周囲を囲む風の防壁を見上げて、シンシアは問うた。

洗練さの欠片もない、荒削りな戦い方。それだけでもシンシアにとつては異質であるのに

ルイスはすっかり慣れたよと言わんばかりに笑って余裕すら浮かべている。

「……それに、貴方達の魔導具。まさか」

「ああ、断っておくけど違法改造じゃないよ？ チューニング 僕らの魔導具はち

やんと営業許可を取って

いる魔導具職人 チューニング フィデロのおじさんに改造して貰ったものだから。

まあ市販の魔導具

より遥かに威力が上げられているのは否定しないけどね」

ひゅんと杖を掌の上で一回転させて、ルイスはそう訝しむ彼女に補足を加えた。

それでも視線は目の前の風の防壁、その向こう側にいるであろうアルス達への警戒を続けている。

「さて……。そろそろエイルフィードさん達も構えておいてね？

さつきは防いだけど、僕

の防壁だけじゃフィデロの拳はそう何度も耐えられないから」

「えっ。じゃあ」

シンシアが嫌な予感と共に口にしようとする。

だがその言葉は、予感的中　風の防壁を打ち破って再び電撃の拳と共に突っ込んでき

たフィデロの出現によって遮られていた。

中空からの、迸る雷光の右ストレート。

シンシアに向けられたそれは、確実に彼女へと迫り……。

「ぬうんッ！」

次の瞬間、カルヴィンが代わりにその一撃を自身の拳で受け止めていた。

「ほう。中々良い拳をしておる。良き戦士になれるぞ、お主」

「ハハッ、そりやどう……もっ！」

拳で語り合うように。カルヴィンとフィデロは、鈍色と雷光色の迸りの中で暫しギリギリ

と鏢迫り合い　もとい拳迫り合いをしていた。

だがややあって、フィデロが今度は左拳を振り出し、雷光の一撃を放つ。

その動きを読んで身を捻るカルヴィン。すると勢い余ったフィデロの一撃はそのままあら

ぬ方向へ飛んでいき、辺りの地面を吹き飛ばしていた。

「も、もうつ。貴方無茶し過ぎですわ！」

「ハハハッ！　良きかな良きかな。戦いこそ我が糧なり！」

巻き上がる土埃にシンシアはきゃんきゃんと喚いていた。それでもカルヴィンは嬉々とし

た様子で高らかに笑いながらそんな相棒を担ぎ上げると、大きく跳躍して距離を取り直す。

(……さて)

一方でルイスは、土埃でシンシアらと分断された中で皆の気配を探っていた。

その杖先にはいつでも対応できるように徐々に風が渦を巻いて集まり始めている。

（どう来る？ フィデロの開幕直後、全力突撃は予想通りだけど

）すると、ルイスに向かって土埃と何枚もの風の層を突き破って、フィデロが雷の拳を向け

てくるのが見えた。

「ウィンドウォーカー  
ツ。風紡の靴」

咄嗟に今度は風を自身の両脚に集め、浮遊しながらの高速移動でその一撃をかわす。

ルイスは正直、内心驚いていた。

（僕にフィデロをぶつけてきた？ アルス君も僕らがお互い手の内を知っていると予想できていた筈だけど……）

予想とは違う展開。

その時、土煙の向こうでドンと大きな爆発音がした。魔導を撃ち合う音だ。

「やっと私と決着をつける気になりましたのね？」

「……。そんな所ですね」

互いに地面に大穴を開けた土埃の中、アルスとシンシア（とエトナ、カルヴィン）は対峙

していた。獲物を狙うかのように瞳が爛となる彼女に、アルスは言葉少なげな肯定を呟く。

「殊勝な心掛けですね。ならもう一つ、貴方に提案がありましたよ」

「何ですか？」

「私が勝てば何でも一つ、こちらの言う事を聞いて貰いますわ」

「……？」 「何それ？」

そしてシンシアが次に告げた言葉に、アルスもエトナも小首を傾げていた。

何を要求するのか、見当がつかないけれど。

数秒思索したが、アルスは分かったと小さく頷いてみせた。

今はそんな事は気にしている場合ではない。今は。

(……なるほど)

そんなアルス達の様子を中空に浮かびながら、ルイスは一人合点を得ていた。

彼が新入生主席「ロジカルな人間だとばかり思っていた。だからこそ自分は先ず自分を三

人掛かりで潰しにかかるか、フィデロとは手の内を知り合っている自分に彼自身が向かって

くるのではと予想していたのだ。

しかし、実際はそうではなかった。あくまで彼はシンシアと対面することを選んだ。

それはつまり戦略的な有効性ではなく“彼女との決着をつける”という心意気の側の選択をしたということでもある。

(……ふふ。君は思っていたよりも情熱家なんだね、アルス君)

ちよっぴりそんな友の一面を見直し、同時にシニカル気味な自分を内心で晒って。

次の瞬間にはルイスは向き直り、雷光を纏いながら飛び掛ってくるフィデロを迎え撃つ。

一方、そんな様子を観客席から眺めていた生徒達は言葉を失っていた。

驚愕と自分達との圧倒的な実力差。同じ年度の入学生だということに、その主席・次席上位

二人の本気はこれほどに違うものなのか。

舞い上がる土埃と、爆発音。

呆然としている生徒達のその横で、エマもまた眼鏡にブリッジに指を当てたままじつと無

言の思案顔をみせている。

「あちゃ〜……。やりやがった、あのじゃじゃ馬お嬢」

「ふむ？ これはこれは……。あんなに暴れて大丈夫なものだろう



か

そうしていると、ふと通用口の方から近付いて来る足音があった。エマ達が振り返ってみると、そこにはヒューネスとトルルの二人組の男性の姿。

「大丈夫ですよ。利用後はアリーナの職員によって修復されますので。……貴方達は確か」

「ああどうも。自分はお嬢　　シンシア・エイルフィードの護衛と目付け役を任されている  
キース・マクレガーといいます」

「同じくゲド・ホーキンスと申す。ユーディ女史ですな？　シンシア様が毎度毎度ご迷惑を  
掛けておるようで。従者としてお詫びいたす」

「……いえ、お気になさらず。彼女は私の研究室ラボの所属生でもありませんから」

見覚えがある。エマがそっと眉根をひそめると、この二人　　キースとゲドはそれぞれに

自己紹介をしながら、懐からカードを取り出してみせた。レギオンカードと学院内への出入りを認められた者に発行されている通行証だった。

数拍目を瞬いてから、エマは半ば社交辞令的にそう答えると、観客席に混じる二人の姿を黙して視線で追う。

ピッチ内では先程からずっとアルスとシンシア達の交戦が続いていた。

ルイスは風で防ぎ、フィデロは雷で打ち破っては地面を砕き爆ぜさせている。

シンシアとカルヴィンの鍔と焰の魔導の乱打に、アルスは障壁を張り、時には撃ち返して相殺しながらしのいでる。

「……良かったんですか？　模擬戦とはいえ、お嬢はアレなんで加

減なんてしてないと思う

んですけど」

「ええ。まあ今回は以前の私の発言を逆手に取られましたからね……。それに成績上位者の

実戦を見せるのも、生徒達にはいい勉強になります」

「かもしれませんか。他の席にも観客が来ておるようですよし」

「ま、俺達も生徒達が『模擬戦をやってるらしい』と話してるのを聞いて、まさかと思って

駆けつけて来たクチなんですがね。でも、参考になりますかねえ……

……？ お嬢がガチで戦っ

てるからとはいえ、コレ冒険者じふんでも正直裸足で逃げ出すレベルですよ？」

「……。やはりそうですか」

そんな模擬戦（という態の私闘第二ラウンド）を見物しながら言うキースとゲドに、エマ

は静かにため息をつきながら呟いていた。

彼女もまた、いくら何でも（主にシンシアが）飛ばし過ぎではと思っていたのだろう。

（やっぱり、どう考えてもアレが原因だよなあ……）

爆音が断続的に続くピッチを眺めながら、キースは内心で苦笑いを漏らしていた。

『何ですって！？ お父様が……どうして』

それは先日の事。街の郊外にあるエイルフィード家の別邸に、伯爵からの使者がやって来たのである。

『数日前にゲドとキースからの報告書が届きました。シンシア様。

これはセド様からのお言

葉でもあります。危険に首を突っ込むようならば、エイルヴァ口に戻って来いと』

応接室でシンシアと対面しているのは、精悍な顔つきをした壮年の男性。

キースとゲドも、従者の一人として知らない筈はなかった。

彼こそがエイルフィード家の従者衆の頂点、執事長アラドルンだったのだから。

『嫌よッ!』

しかしゲドと共にその対面に同席していたキースの五感に、シンシアの反射的なまでの拒

絶の返事が響き渡る。

『私は……二度もアカデミーの試験に落ちたのよ? もう地元でなんて学べないわ』

『……はい。ですがしかし』

『報告書がどうであれ、私はちゃんと無事にここにいますわ。アラ、ん、わざわざ来て貰って

申し訳ないけれど、その言い付けを受け入れることはできなくてよキツと彼女が自分達を睨んできた。

確かに名義はホーさんと一緒にだが、実質こうした定期報告書を書いているのは自分だ。

その睨みだけで萎縮するほど小さくまとまっているつもりはないが、正直心苦しい。

キースは苦笑いをこの強気一辺倒な主に返すと、とりあえず続けて下さいと眼で促す。

『……予想はしておりましたが。ですが、セド様のご心配もどうか理解を下さい。こちらへは魔導の修行を名目に滞在しておられるのです。決して“火遊び”の為ではありません』

シンシアはあくまで淡々と諭されて押し黙っていた。むすつとむくれ面をみせてわざとらしくアラドルンから視線を逸らしている。

『……。では、私が魔導師として成長していると証明できれば文句

はないのね？」

だがそんな沈黙の暫し後。

ふと彼女は何かを思い付いたように訊ね返す。

「そうですね……抗弁としては理に適っているとは思いますが、定期試験などはまだ

先の予定だと聞いておりますが？」

アラドルンは、そんな彼女の言葉に肯定しながらも疑問を呈していたが、

「ええ。でも証明の場なら他にもありましてよ？ 待っていなさいな」

シンシア自身は口角を吊り上げて、そう自信たっぷりに応じていたのだった……。

つまりこの実習という時間、アリーナという周囲への安全性が担保された場所で自分より

も格上であるとされたアルスを破る。それによって自分が入学当初から成長したと証明する

つもりなのだろう。

(……全く。世話の焼ける嬢ちゃんだぜ……)

キースは隣で純粹に一介の戦士として観戦している(ように見える)ゲドを横目で一瞥し

ながら、ずずんと押し寄せてくる心労にため息を隠せなかった。

「盟約の下、我に示せ ディオヴァロン 烈撃の鉄錐！」

「盟約の下、我に示せ ケランシールド 守護の地盾！」

一方、ピッチ上では変わらず魔導の撃ち合いが続いていた。

銀色の魔法陣から射出された、螺旋する鋼の尖った弾丸。それに對抗してアルスは目の前

に分厚い岩盤の防壁を地面から呼び出した。

しかし唸りを上げて突っ込んでくる弾丸の威力は防ぎ切れず、やああって岩の盾はひび割

れて崩れ去ってしまふ。上がる轟音と土煙。アルスは盾を捨てて横に駆け出す。

「んもう！ しつこいんだから！」

その頭上でエトナが両手をかざした。その動きに合わせて地面から多数の木の枝が触手のように飛び出していく。

「ふん……。無駄無駄ア！」

しかしそんな樹木の鎖を、カルヴィンはあっさりと退けていた。

隆々とした鋼色の両腕とそこに纏われている鈍色の炎。成す術もなく、枝の触手は燃やさ

れて消し炭になって四散してしまふ。

「むう。やっぱり私達じゃあ相性が悪いよお」

何度目ともなく燃やされた樹木らを惜しむようにエトナが唇を尖らせている。

その間も、シンシアらを挟んだ視線の向こうではルイスとフィデロが交戦を続けていた。

自在に中空を飛ぶルイスに、手甲からエネルギーを噴出しては飛び出し殴りかかろうとしている

フィデロ。それらが空振ったり弾かれたりする度に、下の地面が轟音と土煙を上げているのが確認できる。

元々はピツチの中央に三層構造で敷き詰められていた石畳も今は碎けて無残に吹き飛んで

おり、その周りの押し固められていた土の地面も、同じく彼らや自分達の攻防の中ですか

り掘り起こされてぐちゃぐちゃな状態になっていた。

「……そうだね。でも相反属性同士なのはお互い様だよ。エトナ、もう一度攻撃をお願い」

「うん。オツケー」

駆けていた足を止めてざっとそんな状況を確認するように見渡し

てから言うと、アルスは再びエトナに援護を依頼した。

今度こそ。彼女が手をかざして力を込め、再び樹の触手がシンシアらに襲い掛かる。

「何度も同じ手を……」

シンシアは舌打ちしそうになっていた。

戦う。そう言ったくせにこの有り様はなんだ。彼は防戦一方ではないか。

もしかしてまだ戦うことに躊躇いがあるのだろうか。

甘い。今日の魔導とは様々な「敵」と切っても切り離せないというのに。

腕に炎を灯すカルヴィンを従えて、シンシアは対抗呪文の詠唱を始めようとす。

「時を駆ける紺霊よ。汝、その迅き流れを貸し与え給え。我は相対する全ての先を往くことを望む者……」

だが、既に変化の予兆は始まっていた。

アルスからも始まった詠唱。だがその足元に展開され始めたのは紺色の魔法陣。

「盟約の下、我に示せ クロックアップ 時の車輪」

次の瞬間、アルスとエトナの身体を魔法陣が過ぎ去って消えていった。

それとほぼ同時にエトナからの攻撃を消し炭にして放った筈のカルヴィンの鈍色の炎。

しかし、その反撃は当たることにはなかった。

何故ならその時には既に、アルス達は“姿を消していた”からである。

「え？ 何……？」

「なあ、さっきの詠唱って」

「ああ……だよな。刻魔導だよな？」

観客席の生徒達は、どよめいていた。

扱いが難しい筈の空門の魔導。アルスはそれをあっさりと使ってみせたのだから。

「驚くことはないわ。レノヴィン君の先天属性　魄属性と刻属性は準親和関係にある。彼

の力量なら使えても不思議ではありません」

それでも、エマはあくまで冷静にそう言うと言つと眼鏡越しに再び戦いの続きを見遣る。

「くっ……！　これは、時間加速の魔導！？」

シンシアとカルヴィンはきよるきよると辺りを見渡していた。

僅かに、一瞬間だけアルスが移動しているのが辛うじて分かる。

だがそれ以上の追随は叶

わなかった。相手の位置を突き止めようとする中で、今度は方々か

ら水流撃や樹木の触手が

飛んでき始める。

「らあッ！」「……っ」と

そんな交戦の更に外周で、ルイスとフィデロの交戦もまた続いていた。

電撃を纏った拳を何度も放ってくるフィデロ。その攻撃を、風を纏った機動力でかわしな

がら、時折風の刃を放って牽制しつつ、ルイスはそんな状況の変化に密かに目を配る。

（刻魔導か。まあそれ自体はそう驚くことでもないんだろうけど……）

再び、フィデロの拳をかわす。

再び、勢い余って地面が碎けて爆ぜる。

だがルイスは先程から続くそんな応酬に、徐々に疑問を持ち始めていた。

（おかしい。全力馬鹿のフィデロが力をセーブして戦ってきている。こいつも学習している

という事か？ いや……)

やがてもう一度横目にシンシアらと、その周りを高速で立ち回りながら何度も突付くよう

に弱い攻撃魔導を放ってはかわされているアルスらを見て、彼は疑問を確信に変えた。

(おそらくはアルス君の指示、か……)

一体彼は何をするつもりなんだ？

次の瞬間、再三のフィデロの拳を風の盾で受け止めてルイスは戦いながらも思考する。

「盟約の下、我に示せ

ウォーターシュート  
水の流弾！」

「盟約の下、我に示せ

ジュロム  
撓の樹手！」

その間も加速効果を受けて立ち回るアルスの四方八方からの攻撃を、シンシアらはいなし

続けていた。

カルヴィンの鈍色の炎と自身の障壁で掻き消しては、弾く。

だがシンシアはその緩い攻撃の乱発に、徐々に苛立ちを濃くしている。

「どういっつもりですか！？ こんな初級呪文ばかりでは、私は倒せませんわよ！」

アルスの残像が過ぎる。シンシアが片手を振るって詠唱を始める。

「盟約の下、我に示せ

ブレイズウィップ  
爆炎の鞭！」

掌に展開された赤色の魔法陣。そこからゆるっと伸びた長い炎の塊を、シンシアは相変

わらず駆け回るアルスに向かって振り下ろした。

炎の鞭。形を成した炎がしなうって地面に叩きつけられるその度に地面が爆ぜる。

それでもアルスはそんな炎の鞭の動きすらも加速の動きの中で次々とかわしてみせて、尚

緩い水流をあさっての方向に放ち、また一層シンシアを苛つかせていた。



「……うむ。これでは埒が明かぬな」

「全くですわ。だったら……」

そして今度の彼女の詠唱、赤い魔法陣は先程とは違い足元の広範囲へと広がっていた。

赤い光の円がアルス達の駆け回る周囲を網羅する。

「盟約の下、我に示せ ファイアウォール 炎熱の獄！」

するとどうだろう。その魔法陣の外周をなぞるようにして、高々と高密度の炎の壁が噴き上がったのである。

そしてそれまで駆けていたアルス達を、その内側へと閉じ込めることに成功していた。

良しとほくそ笑むシンシア。

「カルヴィン。集中砲火、いきますわよ！」

「……ふむ。承知した！」

加速効果は確かに厄介だ。だが、術式の効果はいつかは切れる。そこを狙えば。

「……」

だが、結果的にシンシアの読みは先刻からの奇立ちによって鈍っていたと言わざるを得ないのだろう。

「フィデロ君、お願い！」

ニコと。まるでそんな状態になるのを待っていたかのように微笑み、アルスは叫んだ。

「おうよ！」

それが合図だった。

アルスのその呼び掛けに応じ、それまでルイスとひたすら戦っているように見えたフィデロが、はたとルイスから逆噴射で距離を取りながら詠唱を始めたのである。

「ッ！？」

ざわつと。ルイスは嫌な予感を感じた。

思えばお互い、それまで連携らしい連携すらなかった。いや、彼らの突撃でそんな経路を寸断されていたのだ。

なのに、今まさに二人はそれを先んじて取るうとしている。

(何か、仕掛けてくる……!?)

ルイスは半ば直感でそう判断し、正面のフィデロに構わずシンシアに叫んでいた。

「二人とも、避けて！ 何かやる気だ！」

「……もう遅い！」

目を見開いてこちらを見てくるシンシアとカルヴィン。

だがフィデロはそれと同時に詠唱を完成させていた。

「盟約の下、我に示せ 雷剣の閃オツ！！！」  
サンダーブレイド

掌の魔法陣から出現した巨大な電撃の剣。

それをフィデロは、ルイスやシンシアらに向けて思い切り横薙ぎにスイングしてくる。

デカイ。その雷剣の大きさは先刻の訓練の比ではなかった。

ルイスもシンシアも、咄嗟に中空へ逃げ、カルヴィンに抱えられて跳躍し、回避するだけで精一杯だった。

アリーナが……震えた。

アルス達を囲い込もうとしていた炎の壁も、雷剣の威力と共に消し去られてしまった。

抱えられた跳躍の途中で、シンシアが啞然とした顔で呟く。

「どういう事なの？ これじゃあまるで……自滅覚悟じゃない」

しかし結論から言うと、そうではなかった。

次の瞬間、猛烈なスピードで伸びてきた何か、彼女をカルヴィンの腕から突き除けてしまったのだから。

「ぐうっ!？」

短い悲鳴を上げて、彼女がアリーナの地面の一角に叩きつけられる。

そんな彼女を捉えていたのは 樹木の触手だった。

「シンシア!？」

速い。それはカルヴィンですら反応できないほどの高速の一撃だった。

だがあの触手はもう何度も迎え撃ってきた筈……。

急いで地面に降りながら、カルヴィンは焦りの中にそんな疑問を抱く。

「……ふう」

しかしそんな疑問はすぐに氷解することになった。

アルスト、その足元から生えて伸びていた先程の樹木の触手。

その様子が先程と違っていたのは、加速効果のオーラが彼にではなく、その触手に掛かっていたという点で……。

「まさか、術を掛け直したのか？ では先程の雷剣は」

「らあああッ!!」

ようやくアルスが何をしたのかを飲み込んだカルヴィン。

だがその瞬間には、既に別方向からフィデロが電撃の拳を以って迫っていた。

激しくぶつかって迸るエネルギー。そんな衝突に振り向いて、ルイスも加速度的に変化し

始めた状況の意図に気付き出す。

「しまった! そうか、始めから ぬあっ!？」

「ふふん。ぼやっとしてちゃ駄目だよ?」

だが今度は、エトナからの樹木の触手が彼を捕らえていた。

「いよいよ連携か。だがお主の力量で我を押さえ切れるとでも?」

「多分無理だね。でも、押さえ切れなくてもいい。……ちよいと押さえればいいんだ」

その言葉を聞いて、カルヴィンは怪訝に眉根を寄せ、

「カルヴィンさん、早く彼女を！ これはアルス君への時間稼ぎだ！」  
ルイスは確証を得たと言わんばかりに樹木の縄の中でもがきながらも叫んでいた。

「…………ぬう」

シンシアは樹木の触手でガツシリと身動きを封じられていた。

カルヴィンもルイスも足止めを喰らっている。もがきながら唇を噛み締めていると、ゆっ

くりとアルスが近付いて来るのが見えた。

「シンシアさん」

見下ろしてくるアルス。

だがその表情は先刻までのなよっとした、自分と戦うことを躊躇い続けていたそれとは全く違っていたもので。

「…………入学式の日の件は、すみませんでした。あの日の夜、僕、キースさんとゲドさんから

シンシアさんの家庭の事情を聞いたんです」

「なっ!？」

静かに頭を下げるアルスの言葉に、シンシアは思わず驚いていたようだった。

やはり本当にお二人の独断でお話に来てくれたんだなあ。アルスはそう思っただけで続ける。

「僕は、後悔しました。いきなりの事だったとはいえ、自分の勝手な思いで貴女の必死さを

否定してしまった。…………だから僕のこと、怒ってるんですよね？」

「…………」

虚を突かれたように、押し黙る。

無茶に戦いを挑んだことくらいは流石に自分でも分かっていた。

だからこそ、彼の方が逆

に謝ってきたことにシンシアは正直面喰らっていた。

「だから今度は」

そしてそんな中で、

「全力で、貴女を倒そうと思います。それが……僕なりのお詫びになると思うから」

アルスは静かに、しかしはっきりと決心を彼女に告げる。

10・(5) けじめの為に

『チツ。やっぱ駄目かあ』

開幕後最初の一撃をルイスの風の壁に阻まれて、フィデロはのそつと地面から起き上がった

ていた。そんな彼に、アルスとエトナは駆け寄ってくる。

『大丈夫、フィデロ君？』

『あんた達、魔導具使いだっただねえ』

『まあな。しっかし参った。この風結界は面倒なんだよなあ……。

一応マナをガッツリ込め

てぶん殴れば壊せない事はないんだが』

『良く知ってるんだね』

『そりゃあな。あいつとはガキんちよの頃からの付き合いなんだ。

使える魔導も、戦い方も

お互い知り尽くしてるぜ。俺がパワー型なら、あいつは小技で翻弄

していくタイプだな』

『……………』

どうしたものかと風の防壁を見上げながらフィデロは言う。

『じゃあルイス君はフィデロ君に任せてもいいかな？』

『ああ、別に構わねえけど。でもそうなるにあのタカビー女はお前が相手するって事になる

よな？ いいのかよ？ せっかく加勢の為に俺が入ったつてのにさ

あ……………』

『……………うん。いいんだ』

すると、そんな言葉を聞いてじつと何やら考え込んだ後、

『彼女と決着をつけなきゃいけないのは、僕なんだから』

アルスはフツとやや陰のある微笑を浮かべて。

(そうだ。初めから、狙いはエイルフィードさん一本だったんだ…

…)  
樹木の触手に捕らわれたまま、ルイスは頭の中でパズルのピースが綺麗に嵌っていくのを感じていた。

思えばおかしな点が多かった。

全力を出さずに“地面ばかりを壊して回る”フィデロ。

アルスとエトナの一见すると無駄撃ちばかりの初級呪文の連発。

だが……それらは全て布石だったのだ。

これから放つ、彼の一撃をより確実にする為の。

「樹を司りし緑霊よ。汝、その姿顕現し給え。我はその地に芽生え潤し、覆い尽くす魄たる

全てを力に借りんと望む者……」

片手を胸元に、もう一方の片手を地面に向けてかざして行われるアルスの詠唱。

しかしその様子は他の魔導とは明らかに異なっていた。

先ず足元に展開された緑の魔法陣の大きさが尋常ではなかった。

既にその面積はピッチ全

体をも軽くカバーしており、何より全身に不思議と寒気が走るほどの強烈なマナの蠢きが感じられる。

「……まさか」

何事かとざわめく観客席。

その中で唯一、エマだけが眼鏡越しに目を見開いてこの詠唱が何なのかを逸早く悟った。

「盟約の下、我に示せ

サモン・ザ・ドリアド  
樹司霊招来」

次の瞬間、顕れたのは“とてつもなく巨大な大木”だった。

数え切れないほどの強靱な枝葉。そして幹に点々と浮かび上がる仮面のような顔。

アルスの展開した魔法陣の中から飛び出すように、その巨木の樹の大精霊ドリアドは

アリーナのピッチ、その地面の全てを剥ぎ飛ばすようにその場へ生えてくる。

『……………』

流石にシンシアも、一同も絶句していた。

人一人など簡単に握り潰せる。そんな巨体から無数の枝葉が伸び、シンシアの身体を雁字搦

めに捕縛すると、彼女はあつという間に上空へと持ち上げられる。

「がつ、あつ……………!?!?」

ギチギチと締め上げられるシンシア。

腕輪の障壁は自動作動しているものの、そんなものは意味を成さないと言わんばかりに枝

葉らは軽々とその防御を砕いて彼女を“落とし”にかかる。

「ね、ねえ…………。あれってまさか“属司霊召喚”じゃない?」

「ええっ!? ま、マジか?」

「おいおい…………。そんなの、応用過程の生徒ですらまともに扱える奴がいなくてという高等

術式じゃねえかよ…………」

全ては、この一撃の為の布石だった。

フィデロが地面ばかりを壊していたのは、魄の大精霊を呼び寄せ、る土地を確保するべく、

石畳や固められたピッチを“耕していた”ため。

アルスが水撃の魔導ばかりを放っていたのは、シンシアを攻撃するのではなく、その土地

に十分な水を与え“植物が育つ環境を整える”ため。

そして何よりも強力な魔導を使わなかったのは、この大規模術式の発動に備えて“マナを

温存していた”ため。

生徒達がピッチの中の皆がようやくそれに気付いて驚き、言葉を失う中、アルスは驚愕で

真っ青になった顔で自分を見下ろしてくるシンシアに告げた。



「……これが、僕の全力全開だよ」

そして次の瞬間、ついにシンシアの耐久力は限界を迎えた。

完全に粉碎されて飛び散る障壁の欠片。そんな圧倒的な力と共に、シンシアはガクリと意識を失ってしまふ。

観客席が、場の皆が大きくざわめいていた。

ドリアドが力尽きたシンシアを、そっと枝葉で包んで地面に降ろしている。

そして役目を終えたと言わんばかりに新緑色の光に包まれて静かに姿を消したのとほぼ同時に、

アルスは倒れ込むように膝をついて、激しく肩で息をし始めたのだ。

「アルス！」「おい、大丈夫か!？」

そんな彼に、エトナとフィデロが駆け寄って来た。既にシンシアがやられてもう戦う理由

もないと諦めたのか、後ろから足止めと拘束を解かれたカルヴィンとルイスも追って来る。

「……僕は、だ、大丈夫。それよりもエトナ、シンシアさんの治療をお願い」

「え？ あ。うん……」

流石にこれだけの大魔導には相当の消耗を伴うのは避けられなかったようだった。

アルスはその場で息を荒げて呼吸を整えつつも、心配そうに顔を覗き込んでくる相棒にそう頼みを告げた。

一瞬、彼女は「なんでよ?」と言いたげな表情かおをしたが、ここま

で消耗している彼の言葉

を無碍にはできず、渋々といった様子でシンシアに近付くと治療の奇蹟を彼女に放ち始める。

「……んう?」

「おお。無事か、シンシア？」

「ややあつてシンシアは静かに目を覚ました。」

「……。私、負けたのね」

術式の効果が途絶え、解けて消えた樹木らを目を瞬いて確認してから、ぼんやりとした思考力でようやくその事実を理解が及ぶ。

自身を取り囲んで見下ろしているカルヴィンや面々。

その中に、ようやくフラフラになりながらもアルスが合流してきた。

「あの。だ、大丈夫でしたか？」

「一応ね。貴方、本気過ぎよ……」

憎まれ口を叩かれて、アルスは思わず苦笑していた。

それでも消耗の大きさは隠しきれておらず、その表情にはまだ強い疲労が見える。

「……。どうして」

そんな彼の表情を見つめて、シンシアは問うた。

頭に疑問符を浮かべて小首を傾げるアルスに、彼女はぎゅっと唇を噛む。

「これだけの力があるのに、どうして……」

言葉は途切れ途切れだったが、アルスは何となく予想できていた。何故、これだけの力があるのにその力を出し惜しむような、戦うことを躊躇うのか。

「簡単なことですよ」

アルスは答えた。フツと微笑んで。

「僕は、皆を守りたいんです。自分が得をしたいからとか、そういうつもりで魔導を習って

きた訳じゃないから。……皆のために、僕は生きてきたから」

とても優しく、穏やかな笑顔で。

「ッ！？」

すると何故かシンシアが硬直していた。いや……紅潮していた。

まるで何かに中てられたかのように、ぼくとした目でアルスの微笑みを見遣っている。

「シンシアさん？」

「!?!? な、何でもありませんわ！ 何でもありませんの！」

「? はい……」

アルスが頭により大きな疑問符を浮かべていた。

エトナが何故かむすっとした顔になり、ルイスが何か面白いものを見つけたと言わんばかり

りにほくそ笑み、カルヴィンとフィデロが何事だと互いの顔を見合わせている。

「……」

ざわめき、色めき立つ生徒達の傍らでエマはそんな様子をじっと見つめていた。

どうやらようやく彼らの中で“決着”がついたようですね……。

彼女はフツと小さく密か笑うと、無線拡声器を手に取ってコールする。

「そこまで！ この模擬戦、レノヴィンチームの勝利です！」

消耗の回復を待たざるを得なかった事もあり、結局アルスは実習の後のコマに控えていた講義には出られなかった。

医務室でたつぷりと休養を取らせて貰い、見舞ってくれた友人達やエマ、そして何故か頬

を赤く染めてカチコチだったシンシアとその従者二人らへの対応が一通り済んだ頃には、辺

りはすっかり茜色に染まっていた。

(……ふう。今日は色々と疲れたなあ)

この日の講義予定が過ぎ去ってしまった為、仕方なくとぼとぼと帰宅の路に就く。

ホームの勝手口から宿舎に帰って来て部屋のドアを開けると、ア

ルスはどつと疲れが改め

て押し寄せてきたように思えた。

「アルス……。本当に大丈夫？」

「うん。平気平気」

「……その割にはたつぷり寝てたじゃん？」

まだ少々心配そうなエトナに指摘され、思わず苦笑する。

流石に、力を使い過ぎた。残りの講義も出れずじまいだったし…

…。

(今日の分の講義ノート、誰かに頼まないとなあ)

ルイス君やフィデロ君と被っている講義はいいとして、そうではないものは顔見知りな誰

かにお願ひしないといけないだろう。

生来の謙虚、いや大人しさが早くも不平不満の声を上げている。

「……兄さん、いないみたいだね」

「依頼に出てるんじゃない？」

鞆を机の上に置いて室内を見渡す。自分とエトナ以外の姿は見えない。彼女が何の気なく

そう言うのを聞きながら、アルスは差し込む夕陽を背にぼんやりと  
している。

(ん……?)

そうしていると、ふと耳に何やら声が遠くに聞こえてきた。

誰だろう？ アルスはおもむろに歩き出すと廊下に出ていた。エ

トナもふよふよと宙に浮

かんだまま後をついてくる。

「 お願いします。団長、副団長」

そしてややあって、そのやり取りの主をロビーに見つけた。

そこには兄・ジークと、イセルナやダンらクランの主要メンバー  
が揃っていた。

アルスとエトナは離れた距離からその様子を見遣って小さな怪訝  
を浮かべる。

「どうやら、兄が何かを頼んでいるように見えるが……。  
するとジークは、

「俺に、何日か暇を下さい」

そう目の前の皆に深く頭を下げたと言っていたのだった。

珍しく礼を以って頭を下げてきたジークに、イセルナら一同は少なからず驚いているよう

だった。しんと、ロビーに沈黙が走る。

「……学院で何か分かったのね？」

暫しの間を置いて、イセルナが皆を代表して訊ねていた。

ジークはその言葉にワンテンポ遅れてゆっくりと頭を上げて言う。

「ええ。何か、俺の刀はかなり珍しい　ア、アート……」

「アーティファクト？」

「え、ええ。それッス。何でもそのアーティファクト級の魔導具、らしいんです」

「ほう……。やはりただの代物ではなかった訳だ。でも何でそれが休暇願いになるのかな」

ハロルドの小さな含んだ微笑の問いかけ。

その隣に立つリンファは眉根を寄せて押し黙っていたが、彼はそんな彼女の様子にもそれ

となく横目の一瞥を寄越している。

「刀を診て貰った魔導師のおっさんからも言われたんです。一度、母さんに　この刀をく

れた本人にこいつらの事をちゃんと問い質してみるべきだって」

するとジークは、何処か返事を躊躇うように俯き加減の顔をしかめると、

「……それに、もう知らん振りをしたままじゃいられない。俺がこいつらを持つてる所為で

リンさんを怪我させる事になっちまった。サフレやマルタを巻き込んで、シフォンにも危な

い目に遭わせちまった……。もうこれ以上、俺の所為で皆が傷付ける訳にはいかねえ……」

悔しさを押し殺すように吐露された、抱え込まれた罪悪感。

再び、しんと面々は押し黙っていた。

ずっと気に病んでいたのだ。最初に“結社”の傀儡兵らとの一戦からずっと。

病室のシフォンに漏らしていた思い。イセルナら四人はあの時の彼の悔しさを思い、安易

な慰みは通用しないだろうと悟っていた。

リンファとシフォンは特に、アルスから以前聞いた兄弟の過去を思い出す。

魔獣によつて奪われた故郷の同胞らの命。そしてあまつさえ瘴気  
に中てられ魔獣化してし

まったそんな一人を自らの手で殺さざるを得なかつた心の傷<sup>トラウマ</sup>。

普段は無愛想な言動が目立つが、この眼前の青年は誰よりも“強  
さ”に拘っているのだ。

もうあの時のように、力不足から誰かを守れなかつた結末を繰り返さない為に。

だからこそ その時とは事情が違っているとはいえ “自分  
が原因で仲間が傷付く”

ことにきつと誰よりも敏感であり、堪えがたい心地がしているのだ  
ろう。

「……なるほど。だから、お前のお袋さんに問い質すために故郷に  
戻ろうつてわけか」

今度はダンがそんな皆の想いを代表するかのようによくため息  
をつき、ガシガシと髪を

掻きながら言った。ちらりとイセルナとブルートを、リンファを、  
ハロルドを、この場にい

る克蘭の幹部にして戦友<sup>とも</sup>でもある面々を見遣る。

コクと。皆の頷きが確認できた。

「……駄目ツスカ？」

「別に断わる理由なんざねえだろうが。俺達としてももう“結社”

とはドンパチやっちまっ

てるんだ。むしろ向こうの狙いやら手掛かりが掴めりゃ助かる」

「それじゃあ」

「だけどな」

断わられる訳ではない。ジークが僅かにホツとして言葉を続けようとしたが、それをダン

は遮っていた。小さな怪訝と、にやりと威厳のある含み笑いと。両者が視線を交わす。

「一つ条件がある。俺達も連れてけ」

「えっ……？」

するとジークは隠す事もなく驚いていた。いや戸惑いという表現に近いのだろうか。

全く……。てめえの考えてることは分かり切ってたよ。

ダンは内心で一笑に付していた。

大方、自分達を巻き込む訳にはいかないとかのたまつつもりなのだろうか……。

「あのなあ、お前は俺達が“結社”相手にやられるとか考えてんだろ？ その台詞、そっく

りお前に返すつての。これでもお前よりはずっと長く冒険者やつてんだ。そう簡単に後れを

取られて堪るかよ」

「そうだね。それにジーク君一人よりも私達が徒党を組んでいた方が“結社”と相對した時

も対処の幅が広がる。合理的に考えても君一人に全てを背負わせる訳にはいかないさ」

「……ジーク、もう私は君の歩みを止める事はしない。ただせめてその背中を守らせてく

れはないだろうか？ 一度逆に守って貰った口で言うのも何だがな……」

「分かってやれ。皆にとりお前は仲間だ。奴らの狙いがその身と剣



ならば尚更だろう?」

ダンの苦笑と憎まれ口を皮切りに、皆の意見は一致していた。

「……みんな」

仲間だろう? 水臭いこと言うなよ。

「ふふつ。そういう事だから。ね? ジーク、私達もついて行っていいでしょう?」

そんなイセルナ達の気遣いが、温かさを帯びて決心を固めようとしていたジークを包む。

「……。本当にいいのかよ」

「くどいつての。それに、その弟君もお前の一人旅は許さないんじゃないかねえか?」

「へ?」

唇を噛んで渋々とするジーク。

だがダンはそのうした反応は織り込み済みだったらしく、今度はついつとそう彼の背後を顎

で示すと言った。

「兄さん……」

振り返ると、ロビーとの境目の物陰にアルスとエトナがこっそりと隠れるようにして立ち

らを窺っていた。ダンの言葉で兄や一同の視線がこちらを向くと、エトナを伴って、この弟

は緊張と驚きを半々に混ぜたような表情かおでふらふらと近付いて来る。

「村に、帰ってくれるの?」

「……あ、ああ。話、聞いてたんだな」

「うん。その、偶然通り掛っちゃって……」

もじもじと。だがこの少年の感情は驚きから徐々に喜びにシフトし始めていた。

バツが悪くジークが言葉を濁しかけるのを遮ってしまうかのよう

に、ややあって彼はバツと顔を上げると、

「兄さんが帰ってくれるなら、僕も一緒に行く！」  
ぱあつと明るくなった笑顔で告げる。

「お、おい。勘違いするなよ？　これは村に戻るんじゃないで母さんに刀の事を訊きに」

「同じことだよ！　そっか……。やっと兄さんを皆に会わせられるんだ……！」

少なくともアルスの中では「兄が故郷に戻ってきてくれる」ことへの喜びが大きなウエイトを占めているらしい。

ジークは微妙に解釈がズレているそんな弟に言葉を掛けようとするが、満面の喜色を浮かべるその様子に水を差すような真似もできず、ただ気まずく頬を掻くことしかできない。

「まあいいんじゃない？　どのみち帰省って事には間違いないんだし」

「そりゃあそうなんだが……」

エトナも苦笑い気味に。傍らの相棒を横目にしながら、ジークとその苦笑を共有する。

「決まりだな」

そしてダンが仕切り直すように言った。

イセルナとブルート、リンファにハロルド。この場にいるメンバーらと共にジークを見遣

るとフツと口元に孤を描く。

「そうと決まれば善は急げだ。ハロルド、リン、皆を呼んでくれ。今抱えてる依頼、さっさと片付けちまおうぜ！」

ジークが、アルスとエトナが見遣る中、ブルートバードは再び動き始めた。

一度乗りかかった船。その行く末を決める舵を、自分達の手で握るべく。

「らあッ！」

ジークの放った一閃がギチギチと小気味悪い鳴き声で迫ってきたゴブリン達を薙ぎ払って

いた。多くの山野に出没する醜い容貌の小人型の魔獣。彼らはジークから冒険者の一団の向こう側で土地を拓いている作業員達を、顔をしかめて睨んでいる。

「まだやるか？ 小鬼ども」

二刀をだらりと下げ、挑発気味な言葉。

だがゴブリン達にはそれだけで充分だったようだ。ギチギチと呻くような声を漏らし、荒

削りの小剣や棍棒を振り上げて再び向かってくる。

「マルタ、円舞曲ワルツを」

「はい。マスター」

ふんと手の中の槍を一回転させながらサフレが言った。

そんな主の指示に従い、マルタは手にしたハーブで音色と歌声を奏で始める。

「~~~~~」

淡々と、しかし小気味良いテンポの連続。何よりも彼女の歌声は美しい。

だがゴブリン達の様子は違っていた。わらわらと再び吹き飛ばされた距離を詰めて襲い掛

かろうとしていた最中、突然一樣にその場でぐるぐると回転し始めたのだから。

「グ……ギ？」

「ギギギッ！？」

それがマルタの奏でる、この魔力ある音色の効果だった。

相手を“強制的に踊らせる” 要するに足止め。ゴブリン達も

何が起きたのかいまいち

分かっていないまま、聴覚から半ば強制的に取り入れてしまう妨害の力の成すがままになっ

て戸惑っている。

「バイルドランス繋ぎの槍！」

そうして従者が作ってくれた隙を、サフレは余すことなく利用した。

槍の魔導具にマナを込めると鞭の如くしならせ、ぶんとい振り。

その一閃にその場で回り続けていたゴブリン達はまとめて捉えられて横薙ぎの槍を浴びせ

られた。幾度目かの小気味悪い悲鳴や呻きの合唱と共に魔獣らは地面を転がり、或いは致命

傷を負って灰が散るように崩れ去っていく。

「前から思ってたけど、お前らしいコンビしてるよな。ホント」

「……まあな。イセルナさん達の下に身を寄せるまでは二人で冒険者稼業をしていたんだ。

多少なりともコンビネーションが取れていなければそれはそれで困る」

ひゅうと小さく口笛を吹いて、ジークが言った。

からかっても何も出ないぞ。槍を静かに引き寄せ直し、サフレはそうとでも言いたげに僅

かに眉根を寄せつつ呟いている。だが一方では褒められたとでも解釈しているのか、マルタ

はほんのりと頬を赤く染めて優しい微笑みを浮かべていた。

「ジーク。君達が帰省する件だが」

ぶらりと彼に両手に下がった二刀を見遣って、サフレは思い出すように、話題を逸らすよ

うに口を開いていた。

「結局、その剣はどういった魔導具だったんだ？」

「ん？ あー……」

訊かれて、ジークは眉間に皺を寄せた。

言われないと忘れそうだったが、実はこの愛刀らは魔導具だそうなのだ。

それは魔導師<sup>マロ</sup>であるマグダレンからも指摘されたこと。随分と年代物の呪文が使われていて。

(……ええと。何だっけ?)

何か驚き専門用語らしいことを喋っていたものの、アポから何日も経ってしまい肝心のそ

の言葉をジークは忘れてしまっていた。

難しい学問の話は元より頭に入れておける器ではない(と内心で言い訳してみる)。

何よりもそのすぐ後にシフォンが“結社”に囚われたと分かり、リンさんに続いて自分の

所為で危ない目に遭った仲間が増えてしまった。……ジークの意識はその段階でそれらへの

自責の念で塗り潰されてしまっていたと言っても大袈裟ではなかったのである。

「何か、随分古い、珍しい魔導具だとか言ってたな」

「何かって……。具体的な術式などは聞いていないのか?」

「いんや。つーかそんなのを聞いてたとしても、魔導師でもねえ俺が覚えてられるかよ」

「……そこで胸を張るな。胸を」

だからこそ、ただジークの頭の中にあっただのは“この愛刀の出自を問い質すこと”一点。

その為にイセルナらに休暇を願い出、気が重いなながらも久方ぶりのサンフェルノへの帰省を決めたのだ。

「ですけど、久しぶりの帰郷なのですよね? なのにお母様にはどうして連絡を……?」

ジト目を向けていたサフレに代わり、今度はマルタが訊いていた。少し遠慮気味に遠回しに。でもそこに込めたニュアンスはきつと世話好きな彼女の性格が

反映されたもので……。

「……。導話ならアルスがしてたよ、昨夜嬉しそうにな。それに下手に愛刀こいつらの事を話題に乗せちまったら、何か知ってるかもしれない母さんが警戒しかねえし……」

手の中、腰に下げた愛刀らを俯き加減に一瞥し、ジークは呟いていた。

しかしそれは外見の後付な言い訳だ。そんな事はジーク自身が一番分かっていた。

気まずいのだ。

アルスはともかく、自分は成人の儀を終えてすぐに村を 家族や村の皆から逃げるよう

に 飛び出して行った身なのだから。

今更……どんな顔をして戻れというのだ。

「ですけど。折角久しぶりの母子おやこの再会ですのに」

「マルタ。その辺りにしておけ」

あくまで外見はそうつつけんどんに。

マルタはそうしたジークの言い様に歯痒さを漏らそうとしていたが、そんな彼女をサフレ

は制していた。お喋りが過ぎるぞ？ そんな苦言を彼はこの従者の少女に説き始めている。

自分への配慮か、それとも別な理由があいつにもあるのか。

それでもこの話題にストップを掛けてくれたのは正直ありがたいと思った。

どのみち帰省する旨自体はもうアルス経由で伝わっている。後は淡々と帰省し問い質す。それだけのことなのだ。

「……………」  
目を瞬き、接する者誰にも優しいお節介を向けてくるこの桃色髪のオートマタ少女とその主の青年を横目に、ジークは二刀の片方の背で自身の肩をぽんぽんと叩きながら周囲の様子を確認しがてら眺めた。

街と街、或いは集落を結ぶ人工の街道。

その延長工事の警護の任に、今自分達は就いている。

整備された道以外は、開発の手の及んでいない山野などが接してきている。中にはその奥地に魔獣らの巣窟　忌避地ダンジョンも少なからず含まれているのかもしれない。

それでも、魔獣を殲滅しなければならぬ「討伐依頼」よりもこうした「警護依頼」の方がまだ気が楽である事は否定しようもなかった。討伐は文字通り“ヒトの都合”で魔獣を殺

さなければならぬが、こうした依頼はあくまで工事　魔獣らにとっては縄張りを荒らす

行為　を邪魔してくる魔獣を追い払えばそれで済む。……ヒトの都合なのは同じだが。

（仕方ねえつつつても、やっぱ乱暴なんだろうかねえ）  
そんな事を思いつつ、ジークはフツと静かに苦笑いを零す。

何を今更。そういうダーティな“ヒトの正義”を引き受ける為に冒険者じふんたちはいるのではないか。それだけ、今の自分がグラついているという証なのか。（いけねえな。これじゃあ……誰も守れなくなっちまう）

遠く道を挟んだ向こう側では、他の冒険者らが林野から出てきた有翼の魔獣らを銃や魔導で撃ち落しているのが見える。

おっといけない……。

どうやらぼやつと雑談をしていた間に、工事の前線が大分動いてしまっていたようだ。

ジークは彼らに追いつくべく駆け出しつつ、サフレとマルタへ肩越しに呼び掛けた。

「おい、痴話喧嘩はその辺にしとけ。工事の連中が進んでる。俺達も場所を移すぞ」

一方、クランの仲間達は。

「破ッ！」

「ふっ……。甘い甘い、もっと全体に目を配れ！」

出立に備え、それぞれの時間を過ごしていた。

何時ものように団員らが抱えた依頼をこなすその合間、ダンとミアの父娘はホームの中庭で組み稽古を取っていた。

機敏な動きで鋭い拳や蹴りを放ってくる娘に、ダンも訓練用の模造棍を片手にそれらをか

わしながら、そう指南の声を飛ばす。

『……お父さん。ボクに稽古をつけて』

言い出したのはミアの方だった。正直言ってダンも内心驚いたものだ。

普段から感情の起伏が乏しく、あまり自己主張しない娘が自分からそんな事を頼んできた

という驚き。そして娘に頼られたという事に対する父性からの喜び。だからダン自身も手を

抜くことなく、抜くつもりもなく、実戦形式で組み手の相手をしているのだが……。

( やっぱ、例の一件が悔しかったんだろっかね……？ )

廃村での“結社”との対峙。

目的であるシフォンの救出こそ果たしたが、それと同時に少なからぬ犠牲者を出してしま



ったのもまた事実。

それを“自分の力が足りなかったから”と責めているのかもしれない。

分からない気持ちではない。しかし、だが……とダンはある。

「ぬんっ！」「ッ！」

ダンの救い上げるような一撃。

それをミアは間一髪所でひゅんとバク転してかわし、着地する。

「……。お前は強いよ、同い年の若造に比べればずっと。だがな

……お前の拳は真っ直ぐ

過ぎるんだ。当たれば強いが、動きが読まれてちゃ当たるものも当たらん」

どれだけ力があっても“全てを救う”ことなんてできない。

それは長年冒険者をやってきて何度か災禍　瘴気と魔獣、或いは

魔獣化した同胞に見舞

われた人々を目の当たりにし、自身至っている実感でもある。

幼い頃より、戦う自分の背中を見ていた故の憧れなのか。それと

も、もしかしたら「力」

さえあれば自分と妻の仲も取り戻せていたかもしれないという思いなのか。

しかしそういう動機は……危ないとダンはある。

周りが充分に見えてない。真っ直ぐ過ぎるのだと思う。

それらは、ただそれだけで“自滅”に自らを置く事になりかねない。

……自分だって、そうして妻を失う羽目になったのだから。

（血は争えないってか？　はんつ。ふざけんなっての……）

模造棍をブンツと手の中で回しつつ、ダンは内心で晒った。

親心の身勝手かもしれないが、せめてこの娘には「普通」な幸せを得て欲しかった。

だがそれでも彼女自身が自分と同じ道を志したのならば、それを無理に妨げるべきではな

いとも思っ。

なにせ心根はとても真っ直ぐな娘なのだ……。表情には出さなくても、そんな多感な心を無闇に傷付けることはしたくない。

「ミア、もっと相手の隙を作る動きを併せるんだ。ただ攻撃を打ち込めば倒せる相手なんてのはそう多くねえぜ？ 本命の一撃は、相手を崩した後でいい。その方が確実だしな」

「……うん」

本当なら、そういうことを膝を詰めて「話したい」のだけど。お互い何とも不器用で。

だからこの獣人の父娘はこうして拳で語り合うのが精一杯で。

「あいよ。いつものね」

「はい。ありがとうございます」

街のメインストリートでは、レナが建ち並ぶ商店の一角で馴染みの店主とやり取りを交わ

していた。代金を渡し、紙袋に詰められた注文の食材を受け取る。

義父ちちに頼まれての買出し。

それは普段から任されている手伝いの一つなのだが……。

「ところで、そっちの子は知り合いかい？ あまり見かけない顔だけど」

「あ、はい……。大切な、お友達です」

「……」

今回いつもと違っていた点があるとすれば、それはその傍らにフードを被って半ば人相を

隠したステラが立っていた事であろう。

店主が小さな怪訝と共に投げ掛けてくる質問に、レナはあくまでそう友人だと答える。

普段、ホームの宿舎に籠りがちなステラ。だが今日はこうして買出しに出掛けようとして

いた自分に同伴を申し出ていたのだった。

『私もずっと籠ってばかりじゃいられないし……。その、外に出る練習に……』

レナに断わる理由などある訳がなかった。むしろ友として嬉しくさえ思った。

だが、今まで魔人故に外の眼を恐れていた彼女がこうして外界へと打って出ようとする理由を想うと、レナもまた考えざるを得なかった。

(シヨックだったんだろうな……。ステラちゃんも)

廃村での“結社”との対峙。

自分を許してくれた 元より特に害を加えられた訳でもないのに許す許さないもないの

だが 仲間が危ない。その思いが籠り切りの彼女を奮い立たせ、結果窮地の皆を救った。

しかし、それ同時に喪ってしまったものもある。言わずもがな救い切れなかった囚われの

人々、魔獣化してしまった人々だ。

悔いたのだろう。メア故にある程度なら魔獣を従えることは可能な身。しかしそれは魔獣

と化した人々をその後の迫害から解放できることとイコールではないのだ。

もしかしたら自分は“ヒトの心を残させた魔獣化”という最も苦痛な最期を彼らに与えて

しまったのではないか？ そんな静かな罪悪感ではなかったのか。そうレナは推測する。

「ほう。そうかいそうかい。仲良くな」

「勿論です。ね？ ステラちゃん？」

「う、うん……」

だが……それは自分も同じだ。

買い物袋を片手に、レナはきゅっと締め付けられる想いで胸元を

掻き抱いていた。

自分ができる事は父から学んだ見よう見まねの聖魔導。特に瘴気の浄化術や補助系術式と  
いったサポート特化型の力。しかも今まで自分はそれすら内心で疎い、戦いの場に随伴しな

い限りは半ばは無意識的に使わないようにすらしてきた節がある。

でも、果たしてそんな“逃げ”に自分だけ走ってもいいものなのか。

普段はクランの皆の世話をしているも、自分は名簿上れっきとした冒険者なのだから。

「ありがとうございます。じゃあそろそろ行きますね。……

ステラちゃん、行く?」

「うん……。し、失礼します……」

「あいよ。毎度あり〜」

そんな内面の思考の中、店主との雑談を切り上げると、レナはそつと未だに震えを収めきれない友の手を取って踵を返していく。

(……ただ祈るだけじゃ、皆を救えないのなら……)

ふわつとなびくのは、長い金髪とゆつたりとしたローブの裾と。

そしてその指には文様の刻まれた指輪、魔導具が嵌められていて。

「はい。確かに受領致しました」

所変わってギルドの窓口にはイセルナがいた。

積み重ねた依頼関係の書類を検め、入力処理を済ませた職員が営業スマイルで言う。ピピッ

と小さな電子音がし、機器から出てきた自身のレギオンカードを受け取ると、彼女は発行さ

れた受領書などを束ねて小脇に抱え、颯爽と窓口から去って行くこととした。

「珍しいな。お前が自ら雑務に来ているなど」

すると、不意に傍のラウンジから聞き慣れた声がする。

視線を向けてみると、テーブル席の一角にバラクからサンドゴディマの面々が座していた。

机上に書類　依頼書が何枚も積んであるのを見るに、おそらく依頼の目星をつけている

最中だったのだろう。

「ただ踏ん返り返っているのは性に合わないもの。皆、頑張ってくれているから」

言いつつそつと近寄る。

するとバラクは口角を吊り上げてイセルナの顔を見上げていた。

「そうかよ。……聞いたぜ？　北に遠征するそうじゃねえか」

「耳聡いわね。そうよ。ジークの件でちよつと、ね」

「……ほう？」

小声でそつと身を寄せた彼に、イセルナは掻い摘んだ事情を話した。

ジークの剣　刺客<sup>サフレ</sup>まで放ち“結社”が狙ったものがアーティファクト級の魔導具である

らしいこと。そしてその出自を質しに、彼がその剣を受け取ったという母の住む故郷へと赴く

事になったこと。

一時にしても共闘したからという理由もあつたが、イセルナは周りの雑音に紛らせるようにして語る。

「なるほどな。それで何か分かればいいんだが……。これで小僧のお袋さんが知らぬ存ぜず

じゃあ、お前らの所も骨折れ損ばかりだからなあ」

「……大丈夫よ。あの子の剣だつて作られた物。きつと何処かにそのルーツはあるわ」

即ちそれはリンファやシフォンの事だろう。

バラクの反応は相変わらずの皮肉混じりだったが、イセルナは小

さく笑うだけで慣れたよ

うに意に介すことはなかった。

「それに……」

加えて彼女は、

「私達の誰一人、ジークとアルスを恨んでいる者なんていないもの」

あのことち

フツと視線を何処か遠くに向けて、そう愛しさの眼差しで呟いて

。「ぎやはっ!?!?」

情けない悲鳴を上げて男達がごろごろと地面を転がった。

その数ざつと十人弱。いや、この間にもぞろぞろと背後の廃墟

彼らのアジトから援軍

よろしく出て来るのが見える。

「くう……。場所が割れてたなんて。お前ら、その風体からして守備隊じゃねえな? 雇われの冒険者が」

相手はとある郊外に居を構える野盗の一団だった。

小剣や拳銃など小回りの効く武器を中心に各々武装した、如何に

もといったアウトローな

風貌の一団。

「……」

そんな彼らに相對していたのは、ざらりと太刀を手にしたリンフアだった。

一閃の下に迎え撃たんと飛び掛ってきた彼らを薙ぎ倒し、彼女は

ゆっくりと彼らの縄張り

へと歩を進めている。

「リ、リンさん」「自分らは……」

「大丈夫だ。皆は軽いフォローだけでいい」

その後ろには同行してきた数人の団員達。

だが彼女はあくまで彼らを前線には立たせず、ただ一人として野盗らに立ち向かおうとし

ていた。数では明らかに分が悪い。なのに……野盗らはそんな彼女の威圧感にただただ怯え戸惑うことしかできないでいる。

「……お前達は“通過点”なんだ。私の快復後の肩慣らしさ」  
ぎらりと。鋼の刀身に静かな闘志を宿したその顔が映り込んでいるた。

「野盗程度にもたついていようでは話にならない。守らなければならぬものが、私にはあるのだから……」

「ごくりと。敵も味方も思わず唾を飲む中で、リンファはそうまるで自身が抜き身の太刀であるが如くゆっくりと呟く。

11 - (2) 兄弟を結ぶもの

「里帰りだ？ まだ入学して三ヶ月目になったばかりじゃねえか」

レイハウンド研究室ラボのソファに腰掛けて、ブレアはそう言って眉根をひそめた。

何時ものように本の山の中にちょこんと座る教え子アルスと二人、いやエトナも含めて三人、

ゆるゆると指導しされていた中でふと目の前の少年が言ってきたのである。

「はい。今度兄さんが久しぶりに村に帰省する事になりました。僕もその付き添いに……」

「事務の人の所に届出を出しに行ったらさ、まずは指導教官にサイン貰ってきてくれって言

うんだもん。だからこの時間まで待ったんだよ？」

解き終わった問題集を横に置き、アルスとエトナが互いを補足するように答えていた。

一人は少なからず嬉しそうでもあり不安そうでもあり、もう一人はたらい回しな事務の反応に少々気を悪くしているようで。

「ふむ……」

口元に手を当てながら、ブレアはアルスが鞆の中から差し出してきた外出届の書類を受け取ると、ちらと眼だけを上げて言う。

「そいつは、もしかしなくてもその兄ちゃんの剣 魔導具の件か」

「！？ 知って、らしたんですか……？」

「おいおい。俺だつてここの教職員だぜ？ 教員同士、情報交換の一つや二つ普通にやって

るっての。……と云いたい所だが、実際はパウロのおっさんの方が



ら聞かされたんだよな」

「マグダレン先生に、ですか……？」

考えてみれば充分過ぎるくらいにあり得る話だ。

マグダレン先生は魔導工学が専門であり、確か兄の刀を診てくれたと聞いている。その出

自が不明だというのだから、彼自身も気になって他の同僚を当たったという事はあってもおかしくはないだろう。

アルスは静かに目を瞬かせつつ、そう内心で納得させていた。

「ああ。おっさん、凄え剣幕でなあ。『お前の教えている兄弟は一体何者なんだ？』って詰

め寄って来てさ……。その時は俺も初耳だったから知らぬ存ぜずで通したんだが……」

その間にも対するブレアはふっと肩をすくめて語っていた。

やれ顔が恐いのに至近距離はキツイだの、やれあんたの専門で分からねえんなら俺が知る

訳ないじゃんよだの。

「でもびつくりしたぜ。何でもその兄ちゃんの剣、“聖浄器”だそうじゃねえか」

「えっ？ 聖浄器!？」

だが次の瞬間、ブレアから告げられたその言葉にアルスは思わず驚愕の声を上げていた。

「バ、バカ！ そんなデカイ声出すなって……！ この話、まだ全員が全員知ってる訳じゃ

ねえんだぞ……」

「す、すみません……」

「……まあいいや。でも何で知らないんだ？ お前、実の弟だろ？

下宿の部屋だっけ同じ

なんじゃなかったっけ？」

「そうですね……。でも僕、そんなこと初めて聞きました……」

ブレアが慌てて身を乗り出して塞いでくる口をもごもごと動かしつつ、アルスは動揺でぐらつく眼でこの指導教官を見遣った。

何故兄さんはそんな大事なことを教えてくれなかったのだろうか？  
もし本当に聖浄器だと

すれば間違いないくアーティファクト級 然るべき機関が預かり、  
保管すべき代物なのに。

(まさか……)

しかしやああってアルスは思い至る。そして苦笑を漏らさざるを得なかった。

おそらくだが、兄に故意はない。……多分忘れているのだ。

自分たち魔導師にとっては大層な代物だが、門外漢の そして昔から小難しい勉強は不

得手だった兄にとっては意味不明の単語として記憶されているのだろう。

それだけならまだ良かった。帰って来てから訊いていけば皆でバツクアップできたらう筈

だから。でも実際は、兄が学院に赴いた日の夕暮れにそんなやり取りのインパクトすら凌駕

する出来事が起こっている。言うまでもなく、シフォンさんが“結社”に囚われた一件だ。

あの時の交戦とその後の混乱は大きなものだった。

だからこそ兄は責任を感じ、先日ロビーでイセルナさん達に帰省の為の暇を申し出ていた

訳で。でもその時既に、記憶の中には「聖浄器」という専門用語は消えうせていたのだろう  
と思われる。

兄の意識にあったのは、自分の刀が原因で皆が危ない目に遭ったこと、その罪悪感。

そしてその謂れを母さんが知っているかもしれないという可能性

だったのだろう。

つまり兄は友の一件を挟んだ事で、記憶に急激な篩いが掛けられたとも言えるのである。

（兄さん……。何で忘れちゃうのさ……）

ぐわわんと慌しく脳裏を掠めていった推測を確信めいた直感に変え、アルスは大きなため息をついていた。

少なくとも聖浄器らしい件を話してくれれば、自分も協力する事はできたらうに……。

“結社”との一件の後感じていた負い目も、自分が一緒に背負ってあげられたのに……。

そんなアルスの呆れや申し訳なき、色んな感情が混じった苦笑に気付き、何を思っていたのかを察してくれたのか、傍らのエトナもまた複雑な表情でこちらを見遣ってくれている。

「……ま、知らなかったなら仕方ねえわな。俺がこの話をしておいで正解だった訳だ」

そんな二人のやり取りを横目に映しながら、ブレアはテーブルの上の書類を手にざっと目を通していった。

項目がアルスの自筆で埋められていることを確認すると、後ろのデスクに振り向いてペン立てから一筆を取り出し、サラサラッと指導教官印の欄にサインを走らせる。

「ほれ。これで事務の連中も受理してくれるだろう。そのもやもや、スッキリさせて来い」

ピツとその書類を差し出し返すと、アルス達にそうにんまりと笑い掛けて。

出発の日はシフォンの退院の日程に合わせて決められていた。

その当日、酒場『蒼染の鳥』のドアには「CLOSED」のプレートが下がっていた。ハロルド

がその木目をサラツとなぞり、そっと踵を返して皆に合流する。

「皆、準備はいいわね？」

「おう。バツチリだ」「ああ。問題ない」

メンバーはイセルナら創立メンバー五人とミア、レナ、ステラの三人娘。そしてサフレと

マルタ。何よりも当事者であるジークとアルスのレノヴィン兄弟を忘れる訳にはいかない。

旅支度を整えたイセルナを筆頭に、合計十二人（持ち霊二人を加えれば十四人）。

そのジークら面子を見送る形で、留守番を任された残りの団員らが店側に立っていた。

「それじゃあ私達が出掛けている間、ホームの事はよろしくね。大丈夫だと思うけど、何か

不測の事態があつたらバラクに サンドゴディマに連絡を飛ばして。彼には助力して貰え

るよう話をつけてあるから」

「ういッス！」「お任せを！」

「大丈夫ですよ団長。俺達でしっかり守ってみせますって」

次々に自分達のクランに誇りを持って胸を張ってみせる部下達に、イセルナはふつと優しい

微笑みを浮かべてさえている。

「……」

だがそんな中であつて、ただ一人ジークだけは少々浮かない顔をしていた。

腰に下げ、差した六刀。今回の一連の騒動の原因と目されている刀剣の魔導具。それらを

無意識に手で撫でたり握ったりを繰り返しながら、彼は嘆息めいて皆に改めて問う。

「……なあ皆、本当について来る気なのか？」

「勿論よ。認める代わりについて言ったでしょう？ 今回の件は、貴方だけが背負うことじゃない。」

「私達皆で解決すべきことよ？」

「そうだな。せめて共に歩くことくらいは許してくれ。友として、仲間として……ね」

「シフォン……」

それでも仲間達の答えは随伴のそれで。

退院し、すっかり元氣を取り戻した友の言葉に

見舞いの折、

彼自身から語られた思い

を反芻させるようなその言い回しに、ジークは思わず彼の微笑を見返す。

「もう、兄さんったら。……人の厚意は素直に受け取らなくっちゃ駄目なんだよ？」

「そうそう。ジーク一人じゃ危なっかしくて見てらんないもの」

アルスもエトナも、彼の言葉に追隨していた。

酒場の前を舞台にするように、団員ら同胞らと今回随伴するメンバー達と、ジークと。

「……………」

皆の眼差しが、笑顔がジークには眩しかった。

同じ釜の飯を食うといった仲間意識、興味や好奇心、或いは友情、密かな決心諸々。

元を辿れば自分の所為なのに。なのに皆は自分達の依頼を足早に片付けてまで時間を作っ

てくれた。申し訳なささと嬉しさが、胸の内に同居する。

「……分かったよ」

だからか、それとも始めから本気で拒絶する意思はなかったのか。やがてジークはため息交じりの声を漏らしてみせ、ゆたりと身を翻した。

眼前に遠く広がっているのは、朝靄にまだ眠っているアウルベル

ツの街並みとその先に広

がり故郷に繋がっているであろう遠方の大地、おぼろげな稜線群。

「後悔すんなよ？ 俺にだって、これから何があるか分かんねえんだ」

遠回し。だけどそれは許諾と出発の合図に他ならなくて。

だからアルス達は、皆はニツと笑い合った。先に足を踏み出して  
いこうとするジークの背

中を一瞥し、ダンがここぞと音頭を取る。

「じゃあ行くとしますか。レノヴィン兄弟の故郷 ふるさと サンフェルノ

へ！」

『応ッ！』

拳を突き上げ、その期待も不安も一緒に抱き込むように。

肩越しに苦笑するジークとその仲間達の重なる声が、朝ぼらけの  
街にこだました。

「聞いてませんわ、そんなこと！」

ユーデイ研究室<sup>ラボ</sup>にて、シンシアはそう叫びながら両手でテーブルを叩くと同時に立ち上が

っていた。ガタンと音がし、机上のテキスト類やカップが揺れる。

アルス・レノヴィンが兄と共に故郷に帰省した。

その報せをルイスから聞かされ、思わず彼女は反射的にそんな反応をしまっていたのだった。

「まあそうだろうねえ……。だけど別に、アルス君にはエイルフィードさんに話さないといけないっていう必要とか義務はないと思うんだけど」

しかし対するルイス自身はあくまで冷静　いや何処となく彼女のそんな反応を楽しんでいるかのようだった。キンツと上がった声の響きが引いたのを見計らって、彼はそう少しばかりの弄びな言の葉を加えつつ微笑んでいる。

「ぬうつ。それは、そうですねど……」

だがここで彼の口車に乗って熱くなってしまうとは思う壺だ（このゼミで顔を突き合わせ

て以来、嫌というほど経験したためである）。生来の負けん気が抗議の声を上げているのを

無理やり無視すると、シンシアはぐっと堪えるようにして呟き、渋谷席に着き直す。

（この前の“結社”との件もそうでしたけど、随分と急な話ですわよね……）

それでも胸の内のもやもやは打ち消せなかった。むしろトクトクと一層強くなっていくよ

うな気さえする。

多分、それは「また除け者にされた」という感慨。

じつと胸元に軽く握った片拳を当てていると、はたとそんなむくれている自分に気付かされて思わずシンシアは眉根をひそめた。

（な、何ですよ……。これじゃあ、まるで私が彼と）

そして脳裏に蘇るのは、演習場<sup>アリーナ</sup>でヘトヘトになりながらも自分に全力を賭して応え、笑ってみせたあのとても優しい微笑みで。

「……………」

顔が、身体が沸くように熱を持つような気がした。

ずるい。追いつこうとしても、貴方はそ知らぬ顔で笑い、また何処か自分の預かり知らない

い場所へと赴こうとしている……。

「ヴェ、ヴェルホーク？　そ、その。アルス・レノヴィンの帰省先というの？」

「うん？　何、もしかして追いかけるの？　愛しの彼を？」

「そつ……！　そそそ、そんな訳ないでしょう！？　いきなり何を仰るのやら……………」

だからこそもつとルイスから詳しい話を聞いてみようとしたのだが、ルイスは微笑の細目を僅かに開くとそんなフレーズを浴びせかけてくる。

ポフツと、身体中が沸騰するような心地だった。気付けば殆ど反射的に否定して怒鳴って

しまっていた。だがそんな彼女の反応を、ルイスはにやにやとほくそ笑んで面白おかしそうに見遣っている。

（……………結構、面白い人だな）

学年次席とは言っても、本質は同年代の箱入り娘といった所なのだろう。



ルイスはまた一つ“オモチャ”を確信したようで密かな笑いが止まらない。

(でも。だからこそ彼女には話せないよねえ……。アルス君とお兄さんの帰省の理由)

しかしそんな表情も次の瞬間にはなりを潜め、微笑の中、冷静な眼が向けられていた。

詳細はフィデロからの又聞きであるにせよ、事は重大らしかった。何せよお兄さんの持っていたあの六本の剣がこともあるうに“聖浄器”である可能性が高いという結果が出たのだから。

フィデロの見立てなら笑って信じなかったろうが、実際はマグダレン先生。こと魔導具に

おいては学院随一の専門家だ。故に十中八九、聞かされた情報は正しいものだと思う。

フィデロの話では、マグダレン先生はお兄さんにその剣のルーツを調べる　彼にそれら

を託したという母に今一度問い質すべきだと助言したそうだ。だとすれば今回の帰省はその目的の為だとほぼ確定する訳で……。

(アルス君の才能がアレな分、お兄さんの方も曰く有りってことなのかな……?)

まだ顔を赤くして何やらもごもご言っているシンシアを見遣りながら、ルイスはそう既に

切り替わった思考の中にずっと沈んでいく。

「……ヴェルホーク君。あまり彼女を苛め　弄らないように」「はい」

そしてエマも、デスクの上からそんな彼女達ヲボ生らのざわめきを窺め、そつとブラック

のコーヒーを淹れたカップに口をつける。

『 それは、本当の話なのですか』

脳裏に蘇っていたのは、暮れなずみの学院長室。

エマは急遽呼び出されて同室を訪れ、ミレーユと既に同席していたパウロからその理由と

なる事態を聞かされることとなっていたのだ。

『 ええ。マグダレン先生、念の為に確認しますが』

『 うむ……。間違いないぞ。少年を帰す前に走査も施させてもらっている。これが、その分析結果だ』

パウロの小脇に抱えられた紙の束がテーブルの上に広げられる。

それは一見すると複雑に多数の曲線が入り乱れたグラフのようだったが、彼女らはこの道

の専門家達。暫くじつとその分析結果に目を通すと、ミレーユもエマも一様に厳しい表情で

眉根を寄せていた。

『 認めたくはないですが……。本物の聖浄器、ですね』

『 ええ。このストリーム波形とルーンの構造式は間違いなく“魔導開放期”頃の主流様式と

一致する。驚いたわね、まさか一介の冒険者がこのような代物を所有していたなんて……。』

『 同感ですな。私も何故彼がこのようなアーティファクトを持っているのかを訊ねたのです

が、当人は知らぬ存ぜずでして……。曰く母から託されたものだ、父が昔愛用していたもの

である、と……。』

『 ……レノヴィン君の、ご両親？』

ミレーユがぴくりと片眉を上げていた。

その反応に予想はついていたのであるう、パウロは居住いを正して彼女に向き直ると続け

て答える。

『はい。ですので、私は両親に出自を問うてみるべきだと進言した次第です。尤もその両親

ですらルーツを知らないという可能性はありますが……』

『そうね……』

学院長のデスクの上で、ミレーユは両手を組み、暫くじっと考え込んでいるようだった。

エマも、バウロも、何か見えない糸に捕らわれたかのようにその場に直立不動の姿勢を取り、じつと次なる言葉を待っていた。

『……。マグダレン先生、この事は他の誰にも？』

『一応は。ですが一人だけ、彼を仲介してきた私の研究室生のフィスターという者は少なからずこの事態を知っています』

『そうですか。それでも、事態の大きさは多少なりとも理解しているでしょう。それとなく

口止めをしておいて下さい』

『承知致した』

やがて、彼女はスツと椅子に沈んでいた身を起こして二人に指示を与え始めた。

屈強なバウロすら圧倒する風格で。そこにはにこやかで飄々とした普段の彼女はなりを潜めてしまっている。

『ユーディ先生』

『はい』

そしてエマには、また別の指示が下された。

『貴女には、内々に身元の再調査をお願いします。アルス君 いえレノヴィン兄弟の出自

をもう一度洗い直して下さい。取るべき対応は……今の段階で決めてしまうのは些か拙速だと判断します』

ビリビリとこの場に、身体中に緊張が走るのが分かった。それでもエマは一度小さく頷くと、

『……承知致しました』

そう深々と腰を折ってその密命を拝承したのだった。

(……レノヴィン兄弟の里帰り、ですか)

コトンとデスクの一角に空になったカップを置き、エマは立てていた聞き耳から思案を巡らせる。

確かルイス・ヴェルホークはフィデロ・フィスターとは同郷だったと記憶している。おそらくは先程のやり取りを聞いた時点で、彼はこの内々の事案について多少なりとも既知の身となつていると考えてよい。マグダレン先生が一步遅かったのか、何とも噂に戸口は立てられぬとも言うべきか。

それでもレノヴィン兄弟自身が帰郷したとなれば、事態は何かしら動き出す公算が高い。

まだ調査が途中だが……どうやら彼らは少し前に“エレン楽園の眼”の一派と交戦したという情報も届いている。

(どうやら、ただの里帰りにはなりそうにないようですね……) ざわざわと過ぎる暗く黒い不安のような感覚。

そんな一抹には大き過ぎる胸騒ぎを感じながら、エマは一人静かに嘆息を漏らした。

アウルベルツ駅から周辺各地に連絡する鉄道網。

ジーク達はその内の一つ、北域へと向かう特急列車の中にいた。

庶民にとつてまだまだ鉄道は安い移動手段であるとは言えないのだが、それでも車内は多

くの乗客で混雑をみせている。商売人らしき風体の者や自分達と同じく冒険者の類の一団、

或いは旅行と思しき家族連れなど。緩急に揺れるリズムに合わせながら、面々はそれぞれに旅の一時を過ごしていた。

「本当に、何から何まで……すみません」

当のジーク達が陣取ったのは、通路の左右に寝台が設けられた車両だった。

鉄道での旅は数日ばかりになる事も、それ故にこうして就寝場所としての設備があるのは

決して珍しい訳ではないのだが……。

「いいのよ、気にしないで。座席で互いが見えるよりも、こっちの方がステラちゃんも少しは緊張しなくて済むでしょうしね」

事前に自分達の指定席を予約してくれていたイセルナの意図は、もう少し先の部分に向けられていたのだった。

座席がズラリと並ぶ一般の相席よりも、カーテンで間仕切りもでき、他人の視線を和らげ

られるであろう寝台席を。全ては未だ人への怖れを残すステラを、緊張の中での旅路である

うジークやアルスを労わっての配慮。

「……本当に、ありがとうございませす」

「ふふつ。だから、そんなに畏まらなくなつていいのに」  
だからこそ、ジークは深々とイセルナに對面して頭を下げていた。  
柔和で女性的な微笑を漏らす我らが団長。そんな二人のやり取り  
を、ステラがこっそりと

寢台の中、カーテンの隙間から覗いているのも気配で確認できる。

「ところで。サンフェルノにはどの位で着くのかしら？」

「……直通な道はないですよ。こいつに乗るのは最寄駅までです。

後は乗合馬車と徒歩で村

まで行くつもりです。途中の街道が混んでさえいなければ、日暮れ  
前までには着きますよ」

「そう。じゃあそれまで貴方もゆっくり休んでおいて？ 肝心なのは着いてからよ？」

「……そうツスね。そうさせて貰います」

軽く彼女からの補足質問に答えると、ジークはそつと踵を返して  
その場を辞した。

団長の言う通りなのだろう。本題は村に着いてからなのだ。

なのに、自分は既に自身を臨戦という名の緊張の糸で雁字搦めに  
してはいないか？ だが

らこそ彼女は敢えてゆっくり休め 頭を冷やせと言ったのではな  
いか？

(どうして。何であんた達はそんなに落ち着いてられるんだよ……。  
そもそもは、俺が)

通り過ぎ向けられる乗客らの視線。

ギリツと静かに握り締めた己の両拳。

ジークは爆ぜそうな内なる感情を堪えつつも、一人車両の中を歩  
き去っていく。

一方で、同伴する仲間達は思い思いに旅の一時を過ごしていた。  
ダンとハロルドは向き合つて駅弁と麦酒缶ビールを開け、少し早めの昼  
食を。

レナとマルタは吊革で筋トレをしていたミアや寢台の中でじつと

していたステラを回収す

ると、寝台の中とその足元に持って来た椅子に着き、女子四人の談笑と洒落込んでいて。

サフレはじつと静かに読書を。

向かいのシフォンは得物たる弓の手入れに余念がなく。

リンファは一人、流れてゆく車窓の風景を眺めつつ何やら物思いに耽っている。

「こんな所にいたんだ？」

そんな時間がどれだけ流れた頃だっただろうか。

車内を歩いていたアルスとエトナは、ようやくジークの姿を見つけていた。

場所は、車両同士の繋ぎに当たるトイレ以外何も無い空きスペース。

ジークはその一角の壁に背を預けて、ぼつと長方形なガラス窓越しに景色を眺めるように佇んでいたのだった。

「……何だよ。まだ村までは長いぞ？ 休んでろよ」

「僕達なら大丈夫。それに、それはこっちの台詞だよ？」

「そそ。何一人でたそがれてんのさ？ そんなに村に帰るのが嫌なわけ？」

「……別に」

二人がその声を掛けるも、ジークは曖昧な返事ばかりだった。

だが、何ともないと答える割には明らかに機嫌が悪いようにも見える。

エトナが「むう」と唇を尖らせているのを苦笑して見遣ると、アルスはゆっくりと口を開

いていた。

「……自分の刀が聖浄器だって知って、やっぱり迷ってるの？」

即答はなかったが、その言葉は効果てきめんだった。

それまでぼうつと窓の外を向いていた兄が、はたと目を見開いて

自分を見遣ってくる。

「ブレア先生から聞いたんだ。先生自身もマグダレン先生から問い詰められたらしいんだけどね。……兄さんのことだから、専門用語だし、忘れてたんでしょ？」

「……あ、ああ。そうだ。そっか……セージョーキ、だったな」

アルスは静かに苦笑していた。

やっぱり。エトナがジト目になっているが、アルス自身は別段責めるつもりはなかった。

むしろこのフレーズを兄が忘れていて助かったとさえ、今では思っていた。

もし皆にこの事実が知れていれば、今ほど皆はリラックスした旅を満喫できていなかった

だろうからだ。遅かれ早かれこの事も知れる所となると予想はできていたが、同じだった。

兄さんのように、僕も皆に過大な心配を掛けたくはなかったから。

「兄さんは……抱え込み過ぎなんだよ」

ぽつりと。アルスは呟いていた。

静かに兄が眉根を寄せている。何か反論されるか、或いはお前には関係ないと突っ撥ねられるか。しかしそれでも退くつもりはない。

「皆も言ってくれてるように、今までの“結社”との一件は兄さんだけの所為じゃないんだ

よ？ そんなに負い目で自分を責め続けないで」

「……お前らには、関係ねえよ」

「ッ！ あのねえ　！」

「エトナ。いいんだ」

そして案の定、自分をあくまで巻き込むまいと避けようとする兄の応答。そんな彼を叱咤



しようとして声を上げるエトナ。だがアルスは彼女を片手で制すると続けた。

「聞こえなかった？　僕は兄さんの“だけ”のせいじゃないって言ったんだよ？」

「……？」

怒る訳でもない、だが確かな意思。

今度は、僕の番。　アルスはふうつと一度大きく深呼吸をしてから言う。

「ねえ、多分気付いてるよね？　兄さんは今、昔の僕らを重ねてる。自分の所為でマールウ

おじさん達を守れなかったあの日みたいに。……恐いんだよね？

また自分の所為で仲間や

大切な誰かが失われてしまうのが」

眉根をぎゅつと寄せていたが、ジークは何も言い返さなかった。

それは凶星だからか、或いは向き合う自分の弟があまりにも強い眼をしていたからか。

「でもさ……。それは僕だって同じなんだよ？　そもそもあの日、

僕が精霊たちの声を聞いて

て無理に飛び出して行かなかったら、もっと違った結末があったのかも知れない」

「……。アルス……」

「責任があるのは、僕なんだ。同じなんだよ……。兄さんがそう思ったように、僕も、力が

欲しいと思った。もう同じ思いをしないように、誰も傷付けられないように、皆を救うことので

きる力が欲しかった。だから僕は魔導を学んできた。だからアカデミーにも入学したんだ」

ジークは口を半開きにして黙っていた。

単にそれは驚きだけではない。普段大人しい性格の弟が抱いていた決意が自分のそれとま

るで瓜二つであり、そして自分の所へ下宿してきた意味も……。

「だから、兄さんだけが背負うなんてさせない。兄さんの苦しみは……僕も一緒に背負う」

「……アルス。まさか、お前が魔導を学んでる理由って」

だが、ジークのその言葉は最後まで紡がれることはなかった。

次の瞬間、列車全体をそれまでにない激しい揺れが襲ったからである。

「な、何だ!?!」

「分からない……。でも、これって……急ブレーキ?」

数十秒の後、やがて揺れは収まった。前後の車両からは乗客達の戸惑いや混乱の声が重なり合って聞こえてくる。

だが、それまで続いていた前方への動きが感じられなくなっていた。どうやら列車が突然

止まってしまったらしかった。

「一体何が……?」

いきなりの事で戸惑いを隠せるわけもなく。

大きな疑問符と共に、三人はお互いの顔を見合わせていた。

最初に異変を察知したのは、列車の先頭でその操縦桿を握り、一方は各種計器に目を配つ

て状況の指示を送る運転手の二人組だった。

「え、次はリムデール。リムデールに停まります。お出口は右側です」

その副運転手が、車内アナウンスで次の停車駅が近付いている旨を放送している。

だが、そんないつも通りの運行は次の瞬間、終わりを告げていた。拓かれた緩やかな丘陵に延々と敷かれた線路の上に、突如として何者かの人影を認めたらである。

「な……っ!？」

当然ながら、運転手は反射的に急ブレーキをかけていた。

列車全体がその操作の結果、激しく揺れた。背後の運転室のドアの向こうから乗客達の悲

鳴や転倒と思しき物音が重なって聞こえてくる。

幸か不幸か、列車はその人影の鼻先数センチの所で停止した。

「ばっ、馬鹿野郎ッ！ 何突っ立てんだ、死ぬ気か！」

運転席の横窓を開いて外に身を乗り出し、運転手の片割れが原因となつたその人影に怒号を飛ばした。

しかし……様子がおかしい。まるで彼の者の反応がなかったのだ。しかも目を凝らしてみれば、その格好はまるで戦場から帰ってきてすぐであるかのようなスタボロになつた神父風。被ったフードも同じく薄汚れ、俯き加減の表情はよく窺えない。

「……お、おい。聞こえてる、か？」

思わず顔を見合わせる運転手二人。そして次に向けた声色は、不審からくる怯えですっか

り氣勢が削ぎ落とされてしまっていて。

「ク、……イン」

「あ？」「何だつて？」

代わりに人影から聞こえてきたのは、断片的な、無機質な呟きの声。

二人は眉根を寄せて、頭に疑問符を浮かべてその声に耳を傾けたのだが。

「ジーク、レノヴィンツ！！」

次の瞬間だった。

くわつと叫ぶように、顔を上げたその神父風の男 “結社” の

信徒・ダニエルのその両

眼は、血に染まったような赤だった。

その刹那、そんな彼の身に変化が起きる。

突如として身体中からどす黒い靄オハラが、瘴気が迸ったかと思うと、

「オ、オオオオオオオ……ッ！！」

その身が巨大な爬虫類の姿をした怪物に変わったのである。

「ひっ……！！？」

「ま、魔獣う！？」

その姿は、一言で表現するなら“ゴツゴツとした巨大イグアナ”だった。

大型鋼車一台を軽く超える巨体を包むのは、岩肌のようなゴツゴツとした体表。隆々とし

た六本足は踏みしめる地面を、レールをぐにやりと歪ませている。

何よりも、その額に位置する肌には、虚ろな目をしたダニエルの顔面が埋もれるようにし

て蠢いてさえいたのだ。

「なっ、何でこんな所に魔獣が……」

「知るかよそんな事……つて、来たあ！？」

当然ながら、二人は焦っていた。少なくとも一介の鉄道職員が対応できる事態ではない。

しかしそんな狼狽すらも吹き飛ばすように、次の瞬間、魔獣と化したダニエルが運転席に向けて突っ込んでくる。

正面の大型窓は一瞬にして粉碎された。

情けない悲鳴を上げてその場から我先にと逃げ出す運転手二人。

そこにはスイッチをオンにしたままの車内アナウンスと、突っ込まれた衝撃で再びフルス

ロツトルに入ってしまった操縦桿が残されて。

「おいおい……。こいつあ……」

だからこそ、ダンやハロルドらを始めとしたこの列車に居合わせていた者達は、放置され

る形でただ漏れてくるアナウンスから何が起きているのかを断片的にながら知り得ていた。

「魔獣、ですか。それにあの叫びは」

「ああ。だがそれよりも今は客どもの避難誘導だ。ハロルド、お前は何が起きてるか見てください

てくれないか？ 魔獣相手なら、お前の結界も効く筈だ」

「なら、僕も行きます」「わ、私も一緒にします！」

「……はい。では護衛を宜しく頼みます」

急停止した列車が、再び動き始めていた。

一度無理やりレールの上を通るように大きく列車が揺れ、こうしている間にもどんどん加

速しているらしい事が体感として伝わってくる。運転手がすたこらと逃げてしまっている事

も聞こえてきたので、誰かが操縦桿まで行かなければ、全員がクラッシュに巻き込まれてし

まう末路は確実であろう。

すぐさま同行を申し出たサフレとマルタを伴い、ハロルドは混乱

で人々の叫びがこだます  
る中を駆け出してゆく。

「ったく。よりによってこんな形で逆襲とはな……」

非常事態だから仕方ないとはいえ、乗客らの我先にという逃げ惑  
いっぷりにダンは内心辟

易したい気分だった。

走り出してしまった以上、ここは密室に近い状態にある。どうす  
れば彼らを救えるか。

「……。ちよいと荒療治だが、他に方法はねえわな」

論理的思考というよりも、長年の冒険者としての勘で以ってざつ  
とプランを描き、ダンは  
踵を返して仲間達と、そして乗り合わせた他の冒険者らを集め始め  
る。

『ジー、ク……レノ、ヴィンツ!!』

アナウンスから断続的に聞こえてくる、ダニエルのそんな狂気の  
叫びを耳にしながら。

「あの、野郎おツ！」

その声は当のジーク達にも届いていた。

少々くぐもってるが、間違いない。あの時の似非神父の声だ。

また、俺の周りの人間を巻き込もうつてのか……！ ジークはギ  
リリと拳を握り締めた。

「に、兄さん落ち着いて！」

今にも声のした方、列車最前部の運転席へと駆け出そうとする兄  
を、一方でアルスは必死  
に引き止めようとしていた。

「これは罠だよ！ 状況ははっきりしないけど、兄さんを誘い出す  
気なんだ！」

「そんな事は分かってる！ 放せ、アルス！ このまま黙ってられ  
るか！」

だがそれでも兄は一人駆け出そうとするベクトルを止める事はし

なかった。

無理もなかったのかもしれない。

いくら普段は気丈に振る舞っていても、度重なる“自分の所為で起こる厄災”の連鎖。

一見相変わらずのぶつきらぼうに見えても、兄のその精神はじわじわと嬲られ続けていた

筈なのだから。

「で、でも……！」

「だからって飛び込んでどうするのさ！ カッとなったままじゃ、死ぬよ!?」

列車が揺れている、動いている。いや……ドスンと大きな音と衝撃が頭上から響いてくるのが伝わってきた。魔獣ダニエルが移動を始めたのか。

「俺はどうでもいい！ このままじゃ、列車ごとあの野郎にぶつ潰されるだろうが！」

落ち着け。そう止めようとする弟とその持ち霊の手を、ジークは振り払っていた。

「兄さん!」「ジーク!」

腰に差した六刀 アーティファクト級の魔導具たる“聖浄器”達。

その得物を激しく揺らして、制止しようとする二人を引き離して、それでも負い目の青年

は全力疾走でその場から飛び出していつてしまう。

逃げ惑う乗客の人ごみを掻い潜り、ジークは途中で自分の姿を認めて合流してくれたリン

ファと共に列車の最前部へと駆けつけていた。

「ジーク君、それにリンファも」

「た、大変なんですっ。魔獣が……」

するとそこには、逃げ出してしまった運転手の代わりに既に八口

ルド達の姿があった。

三人は操縦桿を握り、計器の数値を読み、期せずして走る密室と化したこの列車の制御を代行してくれていたのだ。

「ああ、分かっている。……上か？」

マルタが振り向きおたおたと声を漏らしている様に頷いて、ジークは天井を見上げた。

既に運転席は魔獣が突っ込んできた際の衝撃で粉碎されており、半ば野晒し状態になって

いた。加えて天井は乱暴にぶち破られており、金属の天井プレートには大きな風穴が空いてしまっている。

「はい。どうやらここを伝えて屋根の方の上っていったみたいなんです」

「一応ハロルドさんがすぐに周囲を結界で覆って奴の動きを鈍らせてはいるが……運転もしながらでは長くはもたないだろうな」

「列車の方は私達が何とかします。二人とも、すみませんが」「分かってます。元からそのつもりなんで。リンさん、行きましょ」

「ああ。ハロルド、そっちは頼んだぞ」

最低限の応急処置は施され始めているようだった。

だが、肝心の元凶である屋根の上の魔獣を退けない事にはそれも根本的な解決にはならな

いだろう。ジークとリンファはハロルド達に運転制御を任せると、風穴をよじ登り屋根の上へと上がっていく。

「……………」

そこには、巨大なイグアナのような魔獣がいた。

二人が加速の風に煽られつつも屋根の上に立つと、背を向けてい



たその巨体はのそりと鈍

重な動きで振り返り、額に埋もれている男性の　　ダニエルの虚ろな顔を対面させる。

「ジー、ク……。ジーク、レノ、ヴィン……。ッ！」

それでもヒトならざる身となった彼から紡がれるのは、怨嗟のような掠れ声だった。

「やっぱ、あの時の似非神父か……」

「よもや魔獣化してまで襲ってくるとはな。気をつけろ、ジーク。あれは確かバシリスクと

いう種だと記憶している。しかし本来はもっと乾燥した環境に多い筈なんだが……」

「それは今は置いときましょうよ。少なくとも、現にこうして襲ってきてるんだ」

言って、ジークは二刀を抜き放った。リンファも続いて太刀を抜く。

のしりと小さく身じろぐダニエル　　もとい魔獣・バシリスク。

真っ先に動いたのはジークだった。ぐっと両脚に力を込め、屋根を蹴って駆け出す。その

動きにバシリスクも応じていた。二刀を引っ下げて突っ込んでくる彼に向けて、大きく口を

広げ始める。

「……ッ!?　ジーク、避ける!　いなすな!」

だがその動きを見て、リンファは何かを思い出したように叫んでいた。

その声に、ジークは反射的に駆けていた運動ベクトルを横へと逸らす。リンファも言って

飛び退くようにその場を離れる。

するとどうだろう、バシリスクの口から収束した灰色の光は光線となって放たれ、先程ま

で二人のいた空間を薙いだのである。

「……こいつは」

加えて、そのヒットした部分、屋根の一部は急激に熱を帯びつつ“石化”し始めていて。

「……思い出せてよかった。石化の光線だ。まともに触れれば動けなくなる。掠ったとして

も、おそらくはこんな感じになる。奴の突進で粉微塵にされるのがオチだな」

「な、なんつー厄介な……」

ジークは二刀を握ったまま息を呑んだ。

彼女の咄嗟の判断がなければ、今頃自分は石像にされていただろう。これでは下手に近付くことも難しい。

(どうする？ ただでさえ、ここは足場が悪いつてのに……)

奥歯を噛み締めて、ジークは熱している自分を諫めつつ思案した。状況は決して良くはない。足場もさることながら、この下には未だ数千人単位の乗客が逃げ惑ってもいるのだから。

(でも……。俺達がやるつきやねんだ)

ジークはもう一度刀を握り直し、リンファの方を見遣った。対する彼女も同じ事を考えていたらしく、コクリと頷いてくれるのが見える。

石化光線は確かに厄介だ。

だが大きくかわせれば、相手は間違いなく隙ができる。そこを一気に叩けば……。

再び大きく口を開くバシリスク。ぐぐっと両脚に力を込めて散開する姿勢を取る二人。

「お願い、ジャステイス 征天使！」

だが次の瞬間だった。

飛び出そうとした二人の前に巨大な影が庇ってくれるように降り立ち、放たれた石化光線

をその盾から生じた障壁で掻き消したのである。

「な、なんだあ……？」

目を丸くしてジークがその巨軀を見上げる。

それは、巨大な“天使”に見えた。

六枚の白い翼を持った、鎧に身を包み剣と盾を携えた天使。

ジークとリンファがその想定外の援軍（？）にぼうつとしていると、天使が次の行動に移

ろうとしていた。掲げた盾をそつと引き、今度は手にした剣を振り上げる。

一閃。大上段からの斬撃が、バシリスクへと叩き込まれていた。

敵意を察知して当のバシリスクも身をよじろうとしていたが、その身は鈍重の類。天使か

らの攻撃をかわし切れることは叶わず、左の肩 前足付け根部分を中心に深々とした裂傷を

刻まれる。

そして上がった、バシリスクの絶叫。赤黒い大量の血飛沫。

鈍重な筈の魔獣の巨体も、流石に額のダニエルの顔を苦悶に変えてのた打ち回った。

「ジークさん、リンファさん、大丈夫ですか!？」

聞き慣れた、それでいて緊張した声色がする。

二人が振り向くとそこには、風穴からよじ登ってくるレナの姿があった。

慣れないアスレチックな場面を、同伴してきたステラの差し伸べる手に支えられて何とか

通過して、彼女らは一層目を丸くしたジーク達の傍らへと駆け寄ってくる。

「レナ、ステラ……。お前らどうして」

「もしかして、この巨体は……？」

「そうだよ。召喚型の魔導具・征天使。ジャステイスレナのとおき」

「……そっか。ありがとよ、コイツは心強えや」

言われ、恥ずかしそうに指先の指輪　この巨大な天使の本体を撫でているレナの代わりにステラが答えていた。

思わぬ援軍だ。それにしても、レナが自分から戦いに来てくれるなんて……。

ニツと笑い返してやりながらもジークは思った。

「目には目を歯には歯を、デカブツにはデカブツだな」

二刀を構え、のた打っているバシリスクに警戒の視線を向けままの“征天使”と横並びになる。

レナとステラを背後に控えさせて、再び構えるジークとリンファ、そして征天使。

対するバシリスクも、肩口から血を流しつつも魔獣の再生能力で持ち直しながら再び向き

直り、再度攻撃をしようとしてくるのが見えた。

「前ばかりじゃないのよ？」

だが今度は背後からの邪魔が入った。

口を大きく開こうとしたバシリスクを、強烈な冷気の波が押し倒していた。ギシツと列車

の屋根がその衝撃で凹む。

「団長！」「イセルナ」

ジーク達の持ち上げた視線の先、バシリスクの背後の中空に、イセルナがいた。

持ち霊・ブルートと合体し、冷気の翼を纏った飛翔形態。始めから全力全開で加勢してくれている団長の姿。

「遅れてごめんなさいね。今、ダン達が皆を後ろの車両に誘導しているわ」

「避難が完了した後、ここと後続車両とを切り離す。それまで時間を稼ぐんだ！」

「分かった！ 任せとけ！」

そして中空から叫ばれた作戦、仲間達のフォローの全容を知り、ジークは頷いて叫び返していた。少なくとも乗客をこの場から逃せられれば、後は存分にぶちめせる。

「……来るぞ！」

正眼に太刀を構えたリンファの叫びが合図だった。

三度バシリスクから放たれた石化光線。それを征天使の障壁で掻き消すと、ジークとリン

ファはその発射後の隙を突いてぐんと屋根を駆けてゆく。

懐に飛び込んで来た二人に、バシリスクは雄叫びと共にその巨体を振るってきた。

振り降ろされる強靱な脚や尾。そのひどく重い一撃を一つ一つ、攪乱しつつ避けながら、

二人は練氣を込めた斬撃をぶつけては飛び退いていく。

「じつとしてなさい！」

「盟約の下、我に示せ デモンズジャベリン 悪魔の擲槍！」

そんな二人を、イセルナとステラが援護した。

中空からは冷気の翼の羽ばたきから放たれる無数の氷の刃を。頭上の紫色の魔法陣からは

血色の文様に彩られた槍状の闇を。バシリスクは身体を、そして最大の武器である口を、彼

女達の魔導によって塞がれる格好となる。

「グ、オオオオオツ！！」

だがバシリスクもやられっ放しでいる筈はなかった。

身体中に刺さった氷や血色の槍を激しくもがきながら振り払い、引き千切ってゆくと、同

時にまた口の中に石化光線のエネルギーを収束させ始める。

「なっ、至近距離で！？」

「くっ……！！ 退け、退くんだ！」

こうなると、ジークとリンファも肉薄し続ける訳にはいかなかった。灰色の光が強くなつていくのを瞳に移しながら、急いで散開し、大きく距離を取り直す。

「いや、その必要はないよ」

だが、また変化があつた。

ポツリと呟くような声が聞こえたかと思つたその刹那、マナを纏つた一条の輝きが寸分の

狂いもなくバシリスクの顔面　ダニエルの右目に命中したのだ。

堪らずバシリスクは痛みを咆哮し、その所為で石化光線はあさつての方向の空へ消える。

「車両の方はダンとミアちゃん達に任せてきた。僕らも加勢するよ」

「大丈夫！？　兄さん、皆！」

「ああ……。大丈夫だ！」　「すまない、助かつた」

背後、イセルナの眼下の屋根から蓋を開けて姿を見せていたのは、弓を放つた姿勢のまま

のシフォンとその傍らに張り付いて風圧にふらついているアルスだつた。

ジーク、そしてリンファが答えると二人はフツと安堵したように笑つた。そしてアルスが

自分達で挟み撃ちに行っている魔獣をじつと見て、叫ぶ。

「皆、まずは背びれを壊して！　バシリスクの光線のエネルギーは背びれから取り込んでい

るんだ！」

「本当か？　分かつた！　……ん？　でもアルス、何でお前そんなこと」

「何をぶつぶつ言っている、来るぞ！」

アルスからの作戦指南。ジークは反射的にそれを信じ受け取つたが、同時に何故そんな事

を弟が知っているのかという疑問が思考を過ぎつた。

しかし既にバシリスクは動き出しており、リンファがばやく暇すら与えない。

「盟約の下、我に示せ ガイアディフェンド 大地の加護！」

先ずは薙ぎ払われた尾を飛び退いてかわし、アルスが完成させた詠唱がジーク達の身体の表面に土色のオーラを付与する。

振り上げた脚、吐き出す石化光線。

だがそれをジーク達がかわし、或いは掠ってしまう度に、まるでそのダメージを受け止めるように薄らと土色の壁のようなものが見え、石化も痛手も防いでくれていた。

どうやらアルスの掛けてくれたこれらは、防御系の術式であるらしい。

「兄さん、早く背びれを！」

「ああ、分かってる！」

巨体からの迎撃、それを押さえ込もうと飛んで来るイセルナヤステラ、シフォンからの援護射撃。その雨あられの中を掻い潜って、ジークはリンファと併走し、再度バシリスクの懐へと切り込んでいく。

「トナン流錬気剣」「おお」

両側を挟んで二人が跳んだ。

どっしりと構えた横撫での太刀と、振り上げた大上段の二刀。錬気を宿した一撃を、

「鬼刀きとう!!!」「らあッ!!!」

二人はすれ違いざまにかの魔獣の背びれへと放って斬り結ぶ。

バシリスクは悲鳴にも似た断末魔の声を上げた。二人の渾身の一閃に、ゴツゴツと生えて

いた背びれが縦に横に斬り捨てられ、走り続ける列車の遠景の中へと吸い込まれて消える。

「おっと……」

「はわつ。だ、大丈夫ですか？」

「ああ。フォローすまない」

「お、おう……。悪い」

そして跳躍した余り屋根の外へ飛び出しかけた二人を、イセルナとレナの征天使がしっか

りと受け止めてフォローしてくれる。

イセルナに手を取られてぶら下がったリンファが、征天使の掌に乗ったジークが、そ

れぞれに苦笑を漏らして礼を述べていた。

「おゝい！ あんたらだな？ 乗客の誘導が完了した、衝撃に備えてくれ！」

するとドタドタと運転席に駆けてきた人影があった。

風貌はジークらと同じく冒険者。どうやらダンらと共に避難誘導をしてくれていた一人であるらしい。

彼は運転席の風穴からこちらを見上げると、そう準備完了の報告を持って来てくれる。

「分かりましたー！ そちらも手筈通りお願いしま〜す！」

一番風穴に近いレナが眼下の彼に返答をした。ハロルドやサフレ、マルタと共に彼は大き

く頷く。するとまた数歩車両の方へと駆け出し、後続の仲間達に手旗の合図を送った。

「よおし……。それじゃあ、切り離すぞ！」

車両を切り離すその境目の位置にスタンバイしていたダンが、その合図を見て振り向いて

叫んだ。ミアや誘導に協力してくれた冒険者らと共に、車両同士を結んでいる連結器の隙間

へぐぐつと蹴りを込め始める。

「う〜……っ」



「こぎぎ……！」「ぐぬぬ……！」

「どう、りゃあああッ！！」

やがて大人（ミアも一応は成人だ）達が一斉に加えた力が、ぐらりと連結を緩め始めた。

こうなると後は力を込め続けるのみで、車両は遂にバシリスクが乗っている車両と残りの乗客達がまとめて避難した後続車両に分断される。ダンらが振り落とされないようにサッと飛び乗り直す中で、切り離された後続車両が乗客達の不安げな眼差しと共にどんどん遠退いていく。

「切り離し成功だ！ 速度を上げる！」

「……了解！」

運転席へダンが叫び、ハロルドがぐつと操縦桿をフルスロットルに前倒して自分達の残る車両を加速させた。ぐんぐんと速度は上がり、動力を持たない遠くレールの上の後続車両との距離はますます離れ、その姿が豆粒以下に小さくなる。

そんな変化をバックミラー越しに確認し、ハロルドが風穴の先のジーク達に叫んだ。

「作戦成功です！ バシリスクを外へ弾き飛ばして下さい。こちらもすぐ追いつきます！」

「う………ういッス！」

飛翔態のイセルナやレナの征天使に庇って貰いながら、ジーク達は衝撃に備えて屋根にしがみついていた。

これで乗客という憂いは排除できた。後はもっと別な場所に似非神父を隔離して。

「吹き飛ばして、ジャステイス征天使！」

「え？ ちょ、待っ」

すると次の瞬間、レナの呼び声と共に征天使が急に加速して、背びれを失ってうめいていたバシリスクを突進と共に列車から弾き飛ばしたのである。

先刻から征天使当人（？）に抱えられていたジークも、当然その爆発的な加速の風圧に晒

される格好となり、ぐわんぐわんと脳味噌を揺さ振られる格好になった。

「……レ、レナ。お前って、結構大胆なんだな……」

「え？ ああっ！？ ご、ごめんなさい！ ごめんなさい！」

冷気の翼を纏う伴<sup>ルンナ</sup>霊族の女戦士と、巨大な天使を従えた有翼の少女。

彼女達に運ばれるようにしてジーク達は列車から離れ、地面に降り立った。

衝撃がよほど凄かったのだろう。バシリスクは大きな転がりの軌跡を長々と地面に残し、ピクピクと悶えているようにも見える。

「あはは……」

「ぼさつとしないで。皆、とどめを刺すわよ！」

そしてジーク達はよろめいて立ち上がるうとするバシリスクに向き合った。

咆哮。そこに最早かつてダニエルという一人の人間だった面影はない。ステラが無言で眉間に皺を寄せる中、面々は一斉に地面を蹴る。

アルスの助言の通り、バシリスクはもう光線を吐けなくなっていた。

だとすれば、後は巨体の薙ぎ払いを封じればいい。

アルスとシフォン、ステラの援護射撃を受けて、ジーク達は最後の抵抗をみせるこの狂信

の徒の成れの果てを追い詰めていく。

「おおおおお！！！」

そして　ジークが駆け抜けざまにその腹を深々と斬り裂いたのが決め手となった。

辺りに響いた断末魔。

ブバツと血飛沫が上がり、ジークの背後でどつとバシリスクの巨体が地面に倒れ込む。

そうしていると、ようやく停車させた車両からハロルド達が合流してきた。

「やりましたか？」

「ええ……。何とか」

流石に疲労して、ジークは肩で息をしながら振り返っていた。

しかし、そんな彼の横を通り過ぎてバシリスクの方を見ようとしたり、ダンが「む？」と眉根を寄せて呟く。

「……この野郎、まだ息があるぞ」

確かに、よく見てみるとバシリスクは再生が追いつかないほどの大量出血に見舞われなが

らも、まだ辛うじて虫の息を残していた。

その言葉を聞いて小走りに集まってくる仲間達。

暫しじっとダンは黙っていたが、そのまま戦斧を取り出して振り上げ……。

「待って下さい」

だが、その手をジークは止めていた。

視線を向けてきたダンに、彼は真剣な　自身に何かを課すかの

ような眼で言う。

「俺が殺ります。はじめをつけなきやいけないのは……俺なんです」

「……分かった」

斧を下げて、ダンが一步下がった。

代わって、バシリスクのすぐ傍らに立ったジークは。

「これで……ようやくお終いだ。似非神父」

そう呟くと、正眼から振り上げた刀にありったけのmanaを込め、

その太くゴツゴツとした  
魔獣の首へと刃を一気に振り下ろして。

かくして、突然の襲撃事件は解決をみた。

しかし何の了承もなく車両を切り離され運行を乱されたとして、  
鉄道当局やまるで頼られ  
なかった所管の守備隊の担当者らにはこつてりと絞られる羽目にな  
ってしまった。

理不尽な。こっちは必死の思いで倒したのに。

ジーク、そして仲間達は少なからずそんな事を思ったものの、言  
った所で理解される保証  
など何処にもない。所詮は“保身”や“不変”にしか関心がないの  
だ。ジークは説教されな  
がらそう結論付けて適当に話を聞き流す事にしていた。

故に、当局から解放され、再びサンフェルノへの旅路に戻った頃  
には予定は大きく狂って  
しまっていた。急いでダイヤを確認し、村の最寄の駅に着いたのは  
日も暮れてしまった後。

仕方ないにしてもずっと身体に纏わりついた疲労感を共に、ジーク  
ク達は薄暗くなった林道  
の中を歩く結果となっていた。

「……すみません。俺の所為でまたこんな……」

「いいのよ。仕方ないじゃない。“電車が事故で遅れた”のだから」

「そうだよ？ だから兄さんが悪いんじゃないんだよ。ね？」

「……。分かったよ。そういう事にしとく」

旅荷を背負いぼやくジークに、弟からは、仲間達からはあくまで  
許してくれる言葉が返っ

てくる。少々トーンを落とすジークは不承不承よろしくやり取りを  
収めこそしたが、やはり

自責の念が消えるようなことはなかった。

(やっぱり、俺が村になんて……)

ぶり返してくる帰省の躊躇い。遅れる旨は道中で連絡を入れたが、果たしてこれで如何ほ

どの迷惑を重ねたことになるのか。

「あ、来た来た。おゝい！」

だがそうしていると、その時はやって来た。

ふと目に飛び込んでくる、夜を照らす集落の灯り。こちらに手を振ってずらりと待ち構えている多くの人影。

「皆……。母さん、先生……！」

アルスがぱあつと心なし明るい顔になって先んじて駆け出していた。ジーク達も顔をちらと見合わせると、同じくやや歩む速度を上げる。

「……」

待つてくれていた。遅くなると言ったのに。

村の、故郷・サンフェルノ村の入口の前で、村の皆が灯りを焚いて待つてくれていた。

「おう！ 随分と掛かったな！」

「ブルートバードの皆さんですね？ どうも。ジークとアルスがお世話になってます」

見間違う訳がなかった。皆の顔。歳月は経っているとはいえ、記憶にあるそれと、彼らは綺麗に次々と一致していく。

「お帰りなさい」

ハツとなって、ジークが、そしてアルスが視線を向けた。

村の皆のやや中央抛りな位置。そこに立っていたのは、簡素な白エプロンを纏った、一人の柔和な顔立ちな黒髪黒瞳の女性で……。

「母さん……」

兄弟は躊躇いと嬉色と、互いに別な感情を漏らして母 シノブ・

レノヴィンを見遣る。

だが彼女はそんな“不安”も何もかも、全てを包み込んで癒してくれるかのよう。

歓迎の意。彼女はそんな村の仲間達と共にフツと小首を傾けて微笑むと、

「お帰りなさい。……久しぶりね。ジーク、アルス」

そう静かに優しく、息子達を迎えてくれたのだった。

息子達が、帰って来た。

特に上の息子は成人の儀を済ませるとすぐに家を出て行ってしまったから……正直、心配でならなかった。

理由は、分かっていた。マールウさんやあの人の事なのだろう。いつもツンとして強がってはいても、根はあの人と同じく真つ直ぐで優しいから。力が及

ばず救えなかったことをずっと悔やんでいたのだろう。だからこそあの子達はクラウスさん  
とリュカちゃん、それぞれに剣の、魔導の教えを請うたのだと。

あの父娘おやこにならば安心して任せられる。  
そう思っであの子達の修行に対しては静かに見守っていたのだけ  
ど……。

(まさかこんな事になるなんてね……)  
折に触れて息子を任せていた彼女からの連絡。その中に、事態の急転が含まれていた。

驚いた。しかしやはりかとも思った。  
それは驚愕というよりも、一種の長く待ち構えていたかのような諦観と嘆息で。

結局、何処へ逃げようと私の“血”は変えられないのだと。

「夜分失礼します。まだ起きておられますか？」

コンコンと、部屋の外からドアをノックする音が聞こえた。  
時刻は深夜。すっかり村全体が寝静まっていた。

一人じつと居間のテーブルに着いていたシノブはハッと意識を現実  
実に揺り戻されるように  
顔を上げる。

警戒する理由などなかった。その声はずつと信頼を寄せてきた相手の声だったから。

「ええ。入って」

フツと微笑んで静かに応えようと、そつと極力物音を立てないようにして一人のアマゾネス

の女性　リンファが神妙な面持ち入ってきた。

他の部屋は既に消灯されている。開いて閉められる、その数十秒間だけ居間の灯りが外の廊下に一条の白となって漏れていた。

「……申し訳ありません。このような時間になってしまい」

「いいのよ。遅れるって話は聞いていたのだし」

「そつという意味では、ないのですが……」

改めてスツと頭を垂れて言うと、シノブはくすと笑って寛大に微笑んでいる。

だがそうではないのだ。単に到着が遅れただけではなく、今日の道中で“結社”の刺客が

自分達の乗った列車を丸ごと襲ってきたこと。

そして何より“彼らが核心に迫ろうと帰ってきた”　それを止められなかったことが。

黙して眉根を寄せたりリンファ。だが対するシノブは何も責めはしなかった。もしかしたら自分が考えていることすら勘付いているのかもしれない。

すると低頭のままのそんな彼女を、シノブはやんわりと許した。

「とりあえず頭を上げて、ね？」

「……。はい」

「念の為に確認しておくけど、まだ息子達には？」

「大丈夫です。まだ知られてはいません。……今はお二人ともお部屋に？」

「ええ。長旅で疲れたのねえ、二人寄り添ってぐっすり」

ふふつと、とても微笑ましく嬉しそうに。



上品に口元に手を当てて笑っているシノブだったが、対するリンファはそれにつられる事はなく言葉少なげだった。

「……ねえリン。貴女の言いたい事は分かってるわ。あの子達が気付いてしまいつつある、

それが私達には都合が悪い。それは確かよ。でも……せめてあの子達自身が問い質してくる

までは、久しぶりの再会を喜ぶべきだと思うの」

「……」

「勿論、リンにもね」

付け加えてウインクしてみせる彼女に、リンファはハツとなった。驚きというよりは気恥ずかしさとも言うべきなのだろう。しかしほっこりと緩もうとし

た自身の表情を改めて引き締め直すと、彼女は小さく一度わざとらしく咳払いをする。

「そう、ですね。私もこうして直接お会いできたのは暫くぶりになりますから」

部屋を照らすのは天井から下がった導力灯のみ。

周りは夜の闇に沈殿していても、二人の相對するその場だけは何処か神々しく、凜とさえ

しているかのような錯覚。

するとリンファは、

「……では、改めて」

片膝をつき胸元に手を当て、最上級の臣下の礼で以って。

「お久しぶりでございます。殿下」

深く恭しく、彼女はその低頭を目の前の『主』に捧げていた。

(……………んっ)

閉じた瞼の裏を陽の光が刺激する。気だるい眠りの中にあつたジークの意識はその静かな揺らぎと共に目覚めを迎えた。

ぱちくりと瞬き、ごしごしと目を顔を搔く。

最初に目に映った天井は宿舎の部屋の模様ではなく、いつか記憶の向こうに消えかかつて

いた実家の部屋の、木板のそれで。

そつだ……。昨夜自分達は村に帰つてきたのだ。サンフェルノ

到着したのがたつぷり日が暮れた頃であつた為か、迎えの後は結構なドタバタであつた。

久しぶりの再会に快く皆が声を掛けて もとい一通り弄られ、団長らが挨拶を済ませた

後は、とりあえず歓迎諸々の行事は明日に回そうという事になり、こうしてぐたりと就寝。

ちなみに他の面々は村の皆が分担して泊めてくれる手筈となつてい

る。「おゝい。アルス、エトナ、朝だぞ……そろそろ起きろ」

「ううん……むにゃ」

「あはは。もうし仕方ないなあ、アルスは……ZZZ」

まだ眠気の残る身体をベッドから引つ張り出し、隣のベッドで眠っているアルスとエトナを軽く揺さ振ってみた。

だが弟は実に無防備というか可愛らしい寝顔で気持ち良さそつで、エトナはエトナで空中

に浮かんでいる丸まっているといういつもの体勢で何やら意味深な寝言を呟いている。

(……ま、その内起きるだろ)

ポリポリと髪を搔いて、ジークは一先ず自分の着替えを優先させた。

母が用意してくれた寝間着を枕元に積んで、いつもの服装に着替える。同じくいつものよ

うに六本の愛刀らを腰に差す。長年の、慣れ親しんだ感覚だ。

「……」

しかしその感覚も、実は危ういリスクの中にあっただとここ二月余りの中で否が応でも知ら

されることになったのもまた事実だった。

マルタという人質を取られていたとはいえ、刺客から狙われたこと。その最中にリンファ

を負傷させてしまったこと。それらの首謀者が“楽園の眼”<sup>エデン</sup>である

らしいと分かり、

友すらもその危険に巻き込んでしまったこと。

そしてその全ての理由は……マグダレンにセージョーキと呼ばれたこの刀達に在る。

母に問い質す。その為に久しぶりの帰省をしたとはいえ、果たして彼女は自分達の求める

答えを知っているのだろうか？

アルスは僕も一緒に背負うと言ってくれた。

だが、あいつは何も悪くない。今も解決すべきは自分自身なのだと言い聞かせている。

正直な所を言うところだった。いや今も恐いのだろう。

母が何も知らなかったら、ルーツを探す旅は空振りになる。

だとすれば道中で似非神父　バシリスクが列車を襲ってきたあの一件もまた“無意味”

になってしまっているのではないか。だとすれば、奴自身も無駄に命を…

…。

「……ッ」

そこまで思考してぶんぶんと首を横に振った。

いや、元より奴は“結社”側の人間だったのだ。友を仲間達を手に掛けようとしたのだから今更情けをかける必要など……ない。

そう思うとやはり、と“責任”が自分の下にループしてくる気がしてならなかった。

知らなかったとはいえ、自分が　自分が愛刀こいづつらを持っているからこそ一連の事件は起きたのは否定できない訳で。なのに皆はそれでも自分に味方し、付き添ってくれてさえている。

俺は、本当に皆と来てよかったのだろうか……？

何度も罵られるように胸の内て繰り返されてきた自責の念とでもいべきもの。

だが、ジークはまたぶんぶんと首を横に振った。先程よりも、強く。パンパンと気付けのようにより自身の頬を数度叩く。

(……しっかりしろ、俺。やらなきゃいけないことは待ってくれねえんだぞ……)

疼くような後悔を奥底に押し込めるようにギリツと奥歯を噛み締め。

ジークは気合を入れ直すと、ばさりと身を翻した。

四度目の揺さ振りをやつと起きた弟とその持ち霊と共に洗面所で洗顔を済ませ歯を磨いた後、ジークはキッチンへと足を運んでいた。

そのテーブルの上には既に用意されていた人数分の朝食。

懐かしい匂い。我が家の、母の温もりの気配がふわつと色彩を増したような感覚がする。

「おはよう。昨夜はよく眠れた？ 朝ご飯できてるわよ」

三人の近付いて来る気配を感じ取って、流しに立っていたシノブ

が振り向いた。

その姿は、普段着の上に何故か引つ掛けた白衣。

何を隠そう彼女は村唯一の医者　魔導医なのだ。自宅を増築する形で隣の棟には診療所

も構えており、それまで遠くの町まで出掛けるしかなかった（病氣持ちな）村の人々には大層ありがたがられている。

そんな母はジークとアルスにとって、密かな自慢でもあった。

「お、おう……」「うん。いただきま〜す」

早速、兄弟揃ってテーブルに着く。

献立はふっくらした自家製のパンに分厚いベーコンエッグ、温かなコーンポタージュ、も

さりと盛られたサラダパスタ、それと（甘党な彼女好みの）ミルク多めなホットコーヒー及

び取り分け自由に置いてあるフルーツ各種。

結構しっかりとした内容だった。

大方、久しぶりに息子達が帰って来たことで気合いが入っているからなのだろうが……。

「……？」

パンとベーコンエッグを適度に千切って口に放り込みながら、ジークはちらと自分達の向かいに座ってにこにこ微笑んでいる母を見た。

手元にコーヒーの湯気が上っているが、彼女には息子の投げきた視線に対し僅かに小首を

傾げているだけでこれといった変化は見られない。

（どうするかね……。今なら他にも誰もいねえし、刀の事も訊けるが）

そつと眉根を細めて思索する。

元よりその為の帰省してきたのだ。本音を言えばあまりのんびりと飯を食っている精神的

な余裕すら実は覚束なかつたりしている。

今度はちらと視線をアルスへ。

すると彼も似たことを考えていたのか、気付かれぬようにと僅かに頷いてくれる。

確かにチャンスではあるよね。

じゃあ、どっちが母さんに訊く？

何度かアイコンタクトでのやり取りを交わしての作戦会議を。

結局、当事者ということでジークが訊く手筈になった。色々と頭が回るのでアルスにはそ

の都度フォローに回って貰おうとする。

「ねえ。二人とも、梟響アウルベルツの街での暮らしはどう？」

だが……ジークがごくりと息を呑み口を開こうとした次の瞬間、先に飛んできたのはそんなシノブからの問い掛けだった。

「えっ。向こう、どの……？」

先手を打たれたようで、思わず即座の返答に詰まるジーク。

「うん、楽しいよ。学院の勉強は凄く面白いし、友達もできたし。

……まあ、ちよっぴり変

わった知り合いもできちゃったけど」

「……。まあ何時も通りだよ。ギルドに行って依頼の目星をつけて契約して、その仕事をこなして稼いでくる。その繰返し」

だからか、アルスはフォローしてくれるように微笑みを作って答えにくれていた。

実際、その言葉の内容は間違っていない（弟の後半は十中八九、シンシアの事だろう）。

そのフォローに合わせるように、ジークも一度コクンと頷くと自身の近況もオブラートに話した。

「そう……。元気そうで良かったわ。でもジーク、お仕事ばかりで

根を詰めちゃ駄目よ？

これは医者としても言ってるのだからね？」

「へいへい……。気分転換くらいはしてるさ。シフォンやリンさん、副団長とかとはよく一

緒に酒を飲んでるし、空き時にはトレーニングしてるし」

「……それって息抜きなの？ やってる事がもうおっさん」

「うるせーな。余計なお世話だったの」

エトナが呆れ顔で突っ込んでくるのをぶっきらぼうに制しながら、ジークはもしやっつと皿

の上のサラダを口に運んだ。

ちらと目を遣っているのは、くすくすと笑っている母の顔。

偶然だろうか？ 何だか訊きそびれてしまったような気がする……

…。

もう一度目を遣ってみるとアルスも同感だったらしく、コーヒ―を啜りながら小さく頷き返してきた。

「で、シノブ。朝から白衣着てるけど、急患でもあったの？」

「ううん。そうじゃなくって。ほら、昨夜ジークとアルスと、クランの皆さんが着いた後、

皆が色々騒いでいたでしょう？ ザックさんとかトマおじいちゃんとか、昨夜、二人の帰省

祝いだとかいってお酒を煽っていたみたいだから……。肝が悪くなっ  
っていないか診に行こう

と思っ  
てね」

今度はその間を持たせるようにエトナがちよいと白衣のシノブに向けて訊ねる。

すると彼女は苦笑し、そう往診に出向くつもりだと言った。

「ああ……。つーかまだ懲りてねえのかよ、一回死にかけたんじゃない  
なかったか？」

「そうね。でも昨日今日くらいは許してあげて？ それだけ二人が

村に帰ってきたのが嬉しかったのよ。まあだからと言って肝臓に悪いのは変わらないんだけども」

ジト目になって、記憶の中からやたら口実を作りたがるのん兵衛な村の中年・老年連中の顔を思い出すジーク。

だが主治医である筈のシノブも、今日だけはそんな彼らに同情的な言葉を漏らしていた。

無言のまま、ついとジークは視線を背ける。

寛大というか何というか。俺は、村の仲間を殺した人間なのに……それなのに……。

「あ、そうそう三人とも」

するとポンと思い出したように両手を叩き、シノブは続いて口を開いた。ジークら三人はそれまでバラけていた視線を自然と彼女に集中させる。

「昨夜は遅かったから延期になったけど、今夜は開くからね？ お帰りなさいパーティー」

「ああ……」「そういえばそうだったねえ」

「もう。皆、そんなに気を遣ってくれなくてもいいんだけどなあ……」

「ふふっ。皆、嬉しいのよ。あと口実が欲しいのよ。飲んで騒いでできるっていうね。もう

集会所の方でも準備が始まっていると思うけど……」

遠い目での嘆息と、苦笑が四人分。

シノブもその内の一人だったが、それでも当の兄弟よりはずっと嬉しさが勝っているよう

に見えた。優しく懐かしい柔和な微笑み。だからこそ、ジークもアルスも表立ってそんな村

の皆のお節介に露骨な苦言を呈する気にはなれなかった。

(……でもなあ。皆が集まったら余計に刀のこと、訊き難くなっち



まうじゃねえかよ……)

それでも、心の中でそつと拙いなと不満を吐きつつ。  
ジークはもきゅつとふつくら柔らかな食感のパンを頼張る。

朝食を済ませて暫く一息をついてから、ジーク達は久々の我が家を出てとある場所へと向かっていった。

そこは村の敷地の外れ、少し小高い丘にある村の共同墓地だった。丸みを帯びた刺又のような柱部分に支えられるように合わさった丸い木製の球。

クリシエン又教徒の墓であればもつと厳密な様式を求められるのだが、一般的に墓標とい

うと、石にしる木にしるこのような形を人々は連想し、用いている。

何でもこれらの形はヒトと“世界樹”<sup>ユグドラシル</sup>とを表しているのだそうだが、あまり詳しい事を

ジークは知らないし、別段興味があるわけでもない。

(……ん？ 誰がいる……)

途中で献花用の花束を調達 といつても近くの山野に入れば摘めることもあり、村には

花屋といった洒落た店はないのだが して墓地内に足を踏み入れると、ジーク達はすぐに

そこに既に先客らしき影があるのに気付く。

「リンファさんに、イセルナさん……？」

その人影二人はクランの団長と切り込み隊長の女性二人組だった。ジークよりも先にアルスがぼつと呟き、三人が近付いて来る足音を聞くと彼女達はフツと

墓標の群れに落としていた視線をこちらに向けてくる。

「ん？ ああ……。お前達か」

「どうしたの？ 貴方達もお祈りに……みたいね」

「ええ。まあそうなりますか」

ちらとアルスが胸元に抱えている即席の花束を一瞥して、イセルナが呟いていた。

ジークは静かに頷くとアルスらと伴い、彼女達がぼんやりと見ていた敷地 彼の墓標に比べて人の手がよく入っているように見える墓標の群れの前に移動し始める。

「……ジークです。訳あって、久しぶりに村に帰ってきました」  
ぼつりと先ずはジークがそう墓前に報告を。次いでアルスが花束をそこへと供え、ゆっく  
りと腰を降ろして屈み込む。

イセルナとリンファもそつと後を歩んできてその墓標らに刻まれた名を読んだ。

マールウ・リビトン、コーダス・レノヴィン ざつと数えても  
三十人近くはある。

「これは、まさか」  
「……ええ。父さん達の墓です」

「まあ、半分近くの人が亡骸すら見つからなかったんですけどね。  
おそらくは……」

「魔獣に喰われた、のか」

リンファが喉を詰まらせたように苦悶の声で問うていた。アルスは言葉でこそ答えはしな

かったが、無言の僅かな頷きがその返事だった。

暫く黙り込んだ後、イセルナ達は語った。

泊めて貰っている村のご夫妻から“ジークはやはり今も悔やんでいるのか？”というニユ

アンスの質問を投げかけられたこと。そこでのやり取りから、レノヴィン兄弟がそれぞれ剣  
と魔導を習い始めた切欠となった村への魔獣襲撃の一件を聞いたこと。

そして、ならば自分達も甲いの祈りを捧げようとして墓地に

赴いたこと。

「そうツスカ……」

余計なこと喋りやがって。丘に時折吹く風に混じって、ジークがそうぼそつと付け加えているのが聞こえた。

イセルナがそんな彼の背中に落とした視線を隣のアルスに向けると、対して彼は複雑な表情、苦笑を肩越しに返してくるのが見えた。

「……」

暫くイセルナは静かにそんな兄弟の背中を見つめていた。

実はリンファが、アルスの下宿が始まって少し経った頃に彼自身の口で語れたその話を又

聞きしていて初耳ではなかったのだが、ジークの機嫌を余計に損ねそうだったのでここは大  
人しく黙っておくことにする。

「……お父さん、コーダスさんでいいのかしら。貴方達のお父さん  
って、どんな人なの？」

その代わりというのも何だが、イセルナは少し間を置いくとそう  
繕うように訊ねていた。

リンファが隣で黙したまま眉根を寄せ、肩越しからこちらを振り  
返るアルスが少し驚いた  
ように顔をつつと上げてくる。

「何でまた……。訊いたっていい人間を」

そんな中でもジークはじつと背中を向けて墓前に屈み込んだまま、  
淡々と答えていた。

「……ま、一言でいうとお人好しみたかったですよ。俺達がガキの頃  
もちよくちよく路頭に迷

ったとか言ってる連中を連れて帰っては母さんが診てましたし」

「そうだねえ。で、実はそいつが盗賊で、朝になったら家からお金  
が抜き取られてた！」

なんて事もあつたけ」

「ああ。流石にあの時は母さんも怒ってたな。……表情は笑ってたけど」

イセルナが敢えて“どんな人”と「過去形」を使わずに訊いたにも関わらず、当の実子で

あるジークはあっさりと「でした」とその言い回しを使っていた。

懐かしさよりも何処か苦痛のような。

それを感じ取ってかエトナがそれとなくサバサバとした口調で相槌を打っていたが、それ

でも彼の声はやはり重苦しく思える。

「……だったかな？ 僕はあまり覚えてないや……」

そしてアルスも、こちらは年少故の自身の記憶の風化を感じて少々感傷的になっていた。

穏やかだが内心はきつと辛い、そんな苦笑い。

そんな弟の様子に、流石にジークもちらと心配な眼を向けたのだが、

「でも、これだけははっきり覚えてる。母さんは、父さんと一緒に  
凄く幸せそうだった」

「……そうだな」

それでもすぐに自身で繕うように言い、兄の同意を得る。

無言で苦笑し合う二人に、エトナが静かに胸を撫で下ろしていた。  
イセルナはそんな姿を

見遣りながら、リンファは何処か遠くに目を遣って風に身を任せながら互いに黙り込む。

それから、お互いにどれだけの沈黙が場を支配していただろうか。  
じつと墓前の前に座ったままでいた兄弟とエトナに、リンファが  
そつと声を掛けていた。

「……。私達も、手を合わせていいだろうか。生憎献花する花束は  
持ち合わせていないが」

「ええ……」「勿論です」

承諾を得てイセルナとちらりと顔を見合わせると、彼女達もまた墓前に屈み込んだ。

はつきりとは分からないが、その状態から見て立てられてから十年弱といった所か。

名と共に歳月を刻んだ木製の墓は、アルスが供えた即席の花束をそつと抱いているように静かに並び立っている。

残されたもの、喪ったもの。

(……父さん。俺の刀は一体何なんだ？ 父さんは、知ってたのか……？)

(コーダス。あなたの息子達はちょっと危なっかしいけど、ちゃんという子に育ってるよ)

(ごめんなさい……父さん、マールウさん、皆……。必ず償うから……。だから……)

言葉にする分にはたった数文字で済んでしまうその事実も、間違はなく当事者らには重く

付き纏い続けるであろう過去で。

(やっぱり慣れないものね。魔獣を殺すことが仕事でもある筈なのに……)

(……婿殿。貴方の妻子は私がこの身を以って守ります。ですから、どうぞ安らかに……)

遺された者とその仲間達と。

間を置きつつ風の吹き抜ける墓群の丘で、五人は暫くその場で祈りを捧げ続けていた。

12・(2) 小村の守護者

サンフェルノ村は地理的に少々寒冷な気候に分類されるとはいえ、周辺を豊かな緑の山野に囲まれている。

街には無い、ゆったりとした時の流れと自然が醸し出す匂い。

静かな木漏れ日を浴び、小動物らの息遣いを聴覚に届けながら、サフレとマルタはじっと

そんな森の中に佇んでいた。

「……いい所だな」

「はい。精霊さん達もたくさんいますし、それだけ生命が豊富なんでしょうね。私の導力回路もすこぶる良好です」

従者たるオートマタの少女とその主たる青年。

普段はそれ以上でもそれ以下でもない（とサフレ自身は言動に含めている）が、この場の

二人は何処かその言葉通りにしては少々齟齬を感じさせた。

言うなれば、主従を越えた親愛し合う様であるような。

心持ち視線を顔を上げて緑の枝葉が覆う空を眺めているサフレの手に、マルタがもじっと

数拍の躊躇の後、自身の手を伸ばそうとして

「マルタ」

「は、はいっ!？」

「……。彼らのこれまでの一件、どう思う?」

「えっ? ええと、ジークさん達……ですか?」

視線を変えないまま、サフレが不意に質問を投げかけてきた所為で、その動きは打ち止め

になった。一瞬ビクリとし、次の瞬間にはそろりと。マルタは伸ばしかけた手を引っ込め

ると数秒ぱちくりと思案顔になる。

「そうですね……。正直私には何が何だか。ジークさんの剣がアーティファクト級の魔導具だとしても、それを“結社”が狙う肝心の理由はハッキリしませんし」

「だからこそこうして彼の故郷まで足を運んでいるんじゃないか」

「え、ええ……。でも気の毒ですよ。ジークさん、何度も“結社”の手の者に狙われ、仲間も巻き込んでしまつて……。きっと凄く不安だと思います」

「……。かもしれないな」

随分とのんびりとした感想だな。僕らも一度は奴らに掴まったクチであるのに……。

ちらりと。そんなお人好しというか、もしかすると人間以上に優しい性格なのかもしれない。

いこの従者をサフレは横目で見遣りながら思った。

外から見ている限りは無愛想にも取れる彼だったが、いざ克蘭の一員となつて行動を共にしてみると本質はむしろ熱い滾りを秘めている人物であることはサフレ自身も薄々気が付いてはいる。

一体、そんな彼の剣　いや魔導具にどんな理由があるというのだろうか？

(こんな事なら、マグダレン氏の鑑定に僕らも同席すべきだったな……)

付け焼刃ながらも克蘭の一員として依頼をこなしていなければならなかったとはいえ、

サフレはどうにも悪い巡り合せに密かにため息をついていた。

「だけど、帰省して良かったのかもしれないね。これだけ豊かな場所に滞在してれば少し

は心も落ち着くんじゃないでしょうか」

「……………」

そんな思考の隣で、マルタはぽつぽつと言う。

するとサフレは、何故かそれまでよりもはつきりと、意図的に睨むような眼で彼女の顔を見遣っていた。

その視線の意図に、彼女はすぐに思い当たるような節を知っていたのだろう。

ややあつて彼女はハツと「い、いけない……………」とバツの悪そうな顔を浮かべる。

「ぐくりと息を呑んで仕切り直し、彼女はおずおずと、再確認するように言った。

「……………」あの。マスターはやはりご実家に戻るつもりはないのですか？ ジークさんとアルス

さんのようには「

「その話をするなど言っている筈だぞ。あまりしつこいとたとえお前が相手でも」

キツと向けられた眼は本気だった。完全に憎悪の眼だった。

流石にそれを実行することはせずとも、マルタは「す、すみません……………」と半ば反射的に平謝りするしかない。

瞳を潤ませた、一見しただけでは普通の少女と変わらないオートマタの少女。

その姿にチクリと罪悪感を刺激されたのか、サフレはふんと小さく息をつくと軽く身動き

をし、再び枝葉が点々と遮る空を見上げていた。

「……………」僕の事はいい。それよりも今は彼らの事だ。迂遠ではあるが、この旅は僕らのけじめ

の為に成る。このまま“結社”<sup>けっしや</sup>にやられたままというのは僕のプライドが許さないんだ」

時折間を置いて整理しながら呟く彼に、マルタは「はい」と小さ



な追隨を示していた。

しかし同時に、内心ではホコホコと嬉しさを感じずにはいられなかった。

彼自身が“結社”に手駒にされたことへの当てつけもあるだろう。だが同時に、そこには

十中八九“自分が人質に取られたことへの憤り”があるとも思えたから。

それだけ私は　マスターに大切に想われている。

ちよっぴりの依存的な心理。だけどやっぱりこの気持ちは、作り物の生命でしかない筈の

自分の胸の内を温かく包んでくれるものでもあって……。

「……僕はまだ戻るつもりはない。暫くは彼らと行動を共にしよう」  
「……はい。マスターの仰せのままに」

森の微風にスカーフを靡かせて呟いたこの主の言葉に、彼女は微笑と共に是として従う。

結局、午前中は肝心の母への問い質しは果たせずじまいだった。

墓前への報告を済ませて家に帰って来て間もなく、顔見せに入れ代わり立ち代わりで村の  
皆がやって来ていたからだ。

そうしている内に、朝食の折に言っていたようにシノブは往診へと出掛けてしまい、彼女

がそれらを済ませて帰宅した頃には時刻は正午を少し回っていた。

『あらあら。お客さんがいっぱいね。ついでだから皆、お昼食食べていく?』

しかし問われるべきシノブ自身はそう至ってマイペースで。

ジークやアルス、訪れていた数人の村人　特にその中に混じっていたシフォンや、往診

の途中で合流したらしいリンファも加わって、昼食はちよっとした食事会の様相となった。

彼女の厚意に甘んじた会食の一時。

やがて村人らは「じゃあ、また今夜にな」と帰っていったが、シフォンとリンファはまだ

その場に居残っていた。二人は元よりジークとアルスが予定していた午後の外出の話を聞く

と、同行することを申し出てくる。そしてそれを拒む理由も特にな

い。  
かくして、予定より多く四人（エトナも含めて五人）の小集団となつて、ジーク達は

暫しの食後の休憩を挟んだ後、再び外出をするのだった。

「そうか。じゃあ、まだシノブさんには」

「ああ……。どうにもタイミングが合わなくてな。正直、もしかしなくても本当に知らないんじゃないかとも思つてたりするんだよね……」

家を出て先ずは村の中央へ向けて歩く。

昨夜からの成果を訊ねられ、ジークは正直にそう詰まり気味であることを白状していた。

もし訊いて何かが壊れるのではないか？ そういったおそれが内心あるのも否定はできな

かった。そんな胸の内の揺らぎを知つてか知らずか、シフォンはふむと口元に手を当てて少

しばかり思案顔になる。

「可能性はない訳じゃないな。彼女はジークのように剣を扱える人ではないのだよな？」

「ああ。父さんは冒険者だったらいいけど、母さんは見ての通り医者だからな」

「でも母さんは魔導医　魔導の心得があるんだよ？　本当に何も知らないのかなあ……」

「さあねえ。だけどさ、大体私やイセルナ達だつてごく最近まで気付けなかつたんだよ？」

ジークの刀が実は魔導具だつてこと自体、気付いていないかもしれないじゃない？」

「そうだけど……。ううん……」

わしゃつと頭を搔いて、アルスは言いかけていた言葉を引っ込めていた。

兄弟とその友と、持ち霊。四人の“あくまで可能性”の話が方々に右往左往する。

「……」

その様子静かに見守るように、リンファは一步下がって歩いていく。

「どのみち、一度きちんと膝を詰めて訊かないことには始まらないよ。こう推測で議論して

もどうにもならないしね。そう焦らなくてもいいんじゃないか？

ここに来てまだ昨日の今

日なんだ。機会はいくらでもあるさ」

「……まあ、そうなんだけどなあ」

暫しあーだこーだと意見を交わすも、結局はぶつかってみる。その一点に向かう他ない。

ジークとアルス、そしてエトナは苦笑を漏らしつつ互いの顔を見合わせる。

やがて、五人は村の中心に位置する集会場（広場）に差し掛かった。

シノブの言っていた通り、既に集会場一帯は今夜の宴に備えての準備が着々と進められて

いた。集会場の小屋の中だけでは収まらず、その外周りにもテーブルが運び込まれ、莫塵が敷かれている。

その周りでは準備に当たっている村人らがトタトタと動き回っており、小屋の中、その奥

には『お帰りなさい！』の文字が書かれた即席の看板が、村人らに

よって取り付けられ始めていたのも窺える。

「……つたく、一々大袈裟なんだよ。団長達を迎えるのも兼ねてるにしても、アルスはまだ下宿を始めて三ヶ月だぞ？」

「はは……。それだけ喜んでくれてるんだよ。兄さんの帰省を、ね」「どうだかな。ただ飲んで騒いでほしいだけじゃねえのかね……」「ぶっきらぼうに悪態をついてみせる兄に、アルスはくすつと笑っていた。

実弟だからか、或いは自身が浮かれている部分があるからか、そんな兄の言葉はどうにも素直じゃないように気がして逆に微笑ましかったのだ。

「……？」  
そうしていると、ふとジークの視線がそれまでとは違う方向に向いた。

見遣ってみるとそこ 皆が準備に走り回っている集会所の裏手を覗き込むように、黒いフード姿の少女が一人立っているのが見える。

「……。何やってんだよ、ステラ」

「ふわっ！？ あ……。な、なんだ、ジークか。それに皆も」

「何だじゃねえよ。何してんだ、こんな所でこそこそと。レナやミアはどうしたよ？」

ビクツと一瞬驚いた顔をみせたのは他ならぬ魔人の少女・ステラだった。

アルスらを伴い、近付いて声を掛けたジークが少々訝しげに問うと、彼女はその視線を再

び集会所の裏手 ちよつとした空き地になっている へと遣る。

「あわわっ……。は、羽は取っちゃ駄目え〜！」

「……耳、触るな。しっ、尻尾も……」

その視線の向こうでは、レナとミアが村の子供たちのオモチャに

なっていた。

背中白い翼を撫で回されたり、猫耳や尻尾をもふもふされたり。涙目と諦観の顔と。なまじ相手が幼い子供たちということもあって、二人とも安易に手を

出せず、なすがままになっっているようだ。一応保護者役として傍にハロルドが立っていたが

彼自身そんな様子をニコニコと眺めているだけで、すぐに止める気はなさそうだった。

「……遊ばれてるな」

「うん……。遊ばれてるね」

ジークとアルスは呆れ顔と苦笑でそんな呟きをシンクロ、

「いいのか、ステラ？ ダチがガキどもに弄られまくってるが」

そして横目でジークが問うと、ステラは心持ち一步後退りしたように見えた。

「だ、だって私……。メアだから……」

「……」

返答はたどたどしかったが、それだけで彼女が何を言わんとしているのかは分かった。

自分が魔人だとバレたら、どうなるか分からない。

大方、そんな心配が、躊躇いが彼女を先刻からずつと物陰に潜ませ続けていたのだろう。

「あのな。ステラ」

呆れ顔だったジークの表情が、サツと真剣なそれに変わっていた。

数拍の沈黙の直後、はたとその手がステラが被っていたフードに伸び、彼女の白系の銀髪

が顕わになる。少々ビクリと肩を震わせた彼女の視線に合わせ、ジークは言った。

「今までも散々言ってきたろ？ お前が皆に何かしたのか？ 違うだろ？ お前はただ瘴気

に巻き込まれた、だけど生き残った。それだけだろ」

それは、彼女を孤独の中から引きずり出したあの日以来、何度となく掛けてきた筈の言葉に他ならなくて。

分らない訳ではない筈だ。だがそれだけ、この少女の心の傷が深いのだろうとも思う。

「……お前が縮こまらなきゃいけない理由なんざねえんだ。もっと胸張ってる。仮に誤解を受けたら全力で俺達がそれを解いてやる。お前は、生きていい。…瘡氣に中てられたら生きてちゃいけないなんて理屈、俺は絶対に認めねえ。全部……ぶっ壊してやんよ」

だったらその傷が疼く度に慰めよう。その度に共に闘おう。

ジークは言い放っていた。それは同時に自分自身がずっと胸の内に点している誓いの火でもあって……。

「……うん。ありがと……」

俯き加減で胸元に手を、頬をほうつと赤く染めて。

ステラはこくと頷いていた。その密かに熱っぽい瞳の意味は実はもう少し別の所にある

のだが、ジークは今も昔もそれに気付くことはなく、「気にすんな。ほら、行って来いって。ハロルドさんもいるし、フオローもあるだろ」

フツと苦笑に口角を上げてポンと彼女の背を押してやると、視線の向こうの彼女の友人らの方へと促す。

ステラはもう一度頷き、ゆっくりと友人らの下に歩いていった。

左右の耳元で結わった銀髪が揺れる。子供たちが「銀色のおねーちゃんだ」と三人目の

オモチャを見つけたと言わんばかりに群がり始める。レナやミアは多少解放された事にホッ

としたのも束の間、やはり変わらず弄られ続け出すことに苦笑を禁じえない。

ここは大丈夫だよ。私に任せておいてくれ。

ジーク達に向けて、ハロルドがそう言ってくるかのようにそっと片手を上げてみせた。

レナやミアもまたその動作に気付き、こちらを見て同じようにジエスチャーで「大丈夫」を伝えてくれる。

レナ、ミア、ステラの三人娘と彼女達に群がる無邪気な村の子供たち。そしてハロルド。

「おいガキども。あんまりねーちゃん達を泣かせるような真似はすんなよ！ 特にその猫のねーちゃんはキレると恐

「……………」

「あ、いや。何でもないです、ハイ……………」  
子供たちにちよつと余計な事を付け加えようとして、ミアから物凄く睨まれた。

ジークは乾いた苦笑いを浮かべてひらひらと手を振ると、  
「……………」じゃ、俺達もそろそろ行こうか」  
半ば逃げるように踵を返しアルス達を促しながら歩き出す。

ジークを先頭に足を運んだ先は、一軒の小さな家 庵とでも言うべき家屋だった。

建てられた場所は村の外れの一角。しかし小さな石囲いの庭を挟んで、ぐるりと村の敷地全体を見渡すことができる立地でもあるらしい。

板状の石を敷いた土の上を渡り、ジーク達は硝子と木枠の表戸越しに来訪を告げる。

「あら？ いらっしやい」

応対してきたのは、セミロングの紺髪をサラリと肩に流した一人

ドラグネス  
の竜族の女性

リュカ・ヴァレンティノだった。

「こんにちは。お久しぶりです、先生」

「よう……リュカ姉。師匠せんせい居るか？」

「ええ。ちょうどいい所に来たわね。ささ、上がって頂戴」

言って彼女はジーク達を家の中へと促した。

どつという意味だろう。少なからず頭に疑問符を浮かべつつも、一同は早速ヴァレンティノ

家の敷居をくぐらせて貰うことにする。

「あら……？」

「おう。なんだお前らか」

その意味、先客 イセルナとダンは客間にいた。

リュカと共に部屋に入ってきたジーク達が少し驚いた顔をしていると、二人とテーブルを

挟んで座っていた壮年の男性が静かにこちらを見上げて口を開く。

「……久しぶりだな、ジーク。アルスにエトナも」

「ええ……。久しぶりです、師匠」

「こんにちは、クラウスさん」

「うん、元気そうで何よりだね。その無骨な感じも前のまま」

「……言葉が少々浅はかなのはお前も変わらん、エトナ」

老練。その一言がしっくりとくるが、しりとした体躯と顔立ち。

歳相応に短めの髪は白く

なりつつあるが、左眼から頬にかけての傷跡という目立つものもあってか、その威厳の類は

普通に話しているだけでも相当なものがある。

クラウス・ヴァレンティノ。

リュカの父にしてジークの剣の師でもある、物静かな村のご意見番だ。

言葉こそ少なかったが、師らもまた大事には至っていないようだ。ジークとアルス、エトナは密かに胸を撫で下ろし、互いの顔をを



見合わせる。

「お前らもクラウスさんに挨拶か？」

「ええ。午前中は父さん達に報告をしたので。副団長たちも？」

「おうよ。聞いたぜ？ 何でも村のリーダー格で、お前ら師匠らしいじゃねえか」

「だから私達もクランの代表としてご挨拶をしておこうと思ってね」

「……そうツスカ」

「思わぬ先客だったが、思いの外、皆先手に村の面々と交流をしてくれているようだ。」

「ジークは色々と間に回らずに済んだとホツとしたような、しかし下手に皆と関わりが深く

なってしまうって大丈夫なのだろうかという、漠然とした自分でも分からない不安もまた顔を

出してくるようで複雑な表情かおで応えるに留まっていた。

(……そうだ。師匠なら)

そこでふと思いつく。自身の愛刀達についてだ。

ヴァレンティノ父娘は母や父とも交友が長いと又聞きだが記憶している。元冒険者と魔導

師。もしかしたら何か情報が得られるかもしれない。

「あのさ、師」

「ねえ。ジーク、アルス、エトナ」

だがその言葉は不意に掛けられたリュカの声に上塗りされるように止められてしまった。

振り向いてみると、彼女はいつの間にか四人分（エトナは精霊なので別に要らない筈のだが、彼女はしつかり“一人分”と数えているらしい）の茶を淹れた

湯のみを盆に乗せて再び部屋に足を踏み入れて来ている。

「立ち話もなんだし、向こうでお茶にしない？ アウルベルツでの生活とかも色々聞きたい

しね。お父さん、団長さん達は任せていい？」

「……………ああ」

「はい。じゃあ行こっか。居間でいいわよね」

タイミングを奪われたように突っ立っていた間も、リュカはクラウスにそう一言掛けて返

事を受け取り、ややあって今度は了承の矛先をジークとアルスに向けてくる。

「あ、ああ……………」

ジークは少々急な勢いに押されてこくと頷くしかできなかった。

間が悪い。だが教え子（元教練場の、という意味では自分も含め）との再会に機嫌が良さ

そうなりユカの様子を見てしまっている以上、そんなことは中々言えたものではない。

ちらと横目で見遣ってみると、アルスも小さく頷いてくる。

考えることは同じであつたらしい。

そして、まあ仕方ないかと、ジークとアルス、そしてエトナは彼女の後について行くと廊

下の奥を曲がって姿を消してしまう。

「……………」

客間にはクラウスと、四人の経験豊富な戦士らが残された。

ジーク達の後ろ姿が見えなくなったのを見届けてから引き戸を閉め、リンファもシフォン

もそつとイセルナ達の座る席の左右へと腰掛ける。

暫く、誰も言葉を発さなかった。

それはクラウス自身の無言の威圧感に起因していた部分もあったのだろうが、それ以上に

レノヴィン兄弟が退席したこの場で、ダンを中心としたクランの代表らが何かを計るように

してこの壮年の<sup>下リンクネス</sup>竜族の様子を窺っていたからという点も大きかった。

「さて……………」

長い沈黙の後、口を開いたのはダンだった。

隣でそつと眉を細めているイセルナと薄らとその肩に顕現し様子を窺っているブルート。

反対側の隣ではシフォンが何か引掛り始めたかのようにクラウスの顔をしげしげと見

つめ、心持ち間を置いて正座するリンファはじつと黙ったまま事態を静観している。

「世話はこれくらいにしておこうか。あんたも分かってるんだろう？ ただ俺達が挨拶に

来ただけじゃないって事くらい」

心持ちずいっと。

「聞かせて貰いたんだがね。俺達はともかく、あんた程の手練なら気付いていてもおかしく

はない。話はジークやアルスからも小耳に挟んでる。あいつらとはガキの頃以前の付き

合いだそうだな。何も気付いていないとは思えねえ」

ダンテーブルの上に片肘をついて身を乗り出してクラウドに問うた。

「……………だろう？ “竜帝”クラウド」

12・(3) 深夜の告白

村はその夜、予定よりも一日遅れの宴の始まりを待っていた。

会場となる村の集会場に集まった村人、そしてジーク達。今宵の主役としてレノヴィン兄

弟を上座に据え、その脇にシノブ及びイセルナらが着いている。

「あれ？ クラウスさんとリュカ先生は？」

「ああ……。あの二人なら出て来ないってよ。挨拶はジークや団長さん達が昼の間に済ませてるって聞いてるし、今頃父娘おやご水入らずで晩酌ばんしやくでもしてるんじゃない？」

「そっか。まあ竜族ドラゴンズって基本的に隠居人だもんなあ……」

「言つてやるなよ。村の為に色々手を貸してくれている分、あの二人はまだ付き合いはいい方だつて」

「……。そうだな」

こそこそと。幹事役の青年らは話していたが、こういった事例は今に始まった事でもないらしい。彼らはヴァレンティノ父娘の話はそこで中断すると、ざわざわと宴の時を今か今かと待つ皆へと呼び掛けた。

「コホン……。皆さん、お待たせしましたっ！」

「それではこれよりジークとアルス、そして克蘭・ブルートバードの皆さんへのお帰りなさいアンド歓迎パーティーを開会しようと思います！」

「さあさあ、もう待ち切れないって感じだねえ。硬い前振りなんぞ無しだ。では早速皆さん

杯を拝借

「じゃあ、ジーク達の帰還を祝して……乾杯ッ！」

「乾杯〜ッ!」

次の瞬間、待ってましたと言わんばかりに皆が掲げた杯が力チンと何度も打ち合う音を重

ねて、夜空の下に宴の始まりを告げる。

わつと場が一層騒がしく、陽気になった。

のんびりとした空気を弾き飛ばすかのように、皆が一気に羽目を外し始める様がジーク達

の着く上座からありありと窺える。

「ほらほら、ボサツとしてないでお前も飲めよ。今夜の主役なんだからさ」

「お、おう……」

「ハハハッ！ ほれほれくいと。今夜は飲むぞ〜!」

そうしていると実に自然に、同年代を中心にわらわらと村人達がジークの下に集まり出し

てくる。乾杯の際に飲み干した杯に新しく二杯目が注がれた。

本当は“帰還”ではなく“帰省”なのだが……。

ジークはそんな本音から複雑な想いを抱きつつも、喜色で楽しんでいる皆の水を差す真似

をする訳にはいかず、促されるままくいと手にしたその杯を煽る。

「いやあ、それにしても正直驚いたぜ。まさかお前が帰ってくるなんてな」

「……色々忙しかったただけだ。皆、帰省くらいで大袈裟なんだよ」

「まあこれくらい大目に見てやってくれよ。お前らもそうだけどさ、俺達くらい世代

若い連中つてのは大抵街の方に出ちまつてるからさ……」

「嬉しいんだろうよ。住み心地はいい、悠々自適と言ってみても寂れてるのは否定しようが

ないからな。だからおっさんから上の世代はそれだけで十二分に酒の肴になるんだろうよ」

「……。かもしれねえな」

初っ端からややハイペースで飲みながら語る、同年代の村の青年達。

それはきつと間違っていないのだろう。少なくとも逃げるように村を飛び出していった自

分に地方集落の衰亡を語る資格があるとは思えない。

くいつと杯を傾け、呟くように応えながらジークは静かに目を細める。

「……で？ アカデミーでの勉強はどうなんだ？」

「魔導師にはなれたのか？」

一方で、アルスは刻一刻と出来上がりつつある年配の村人らに囲まれて質問攻めに遭って

いた。兄と違ってあまり飲めないと皆知っているので酒を強要してくることはなかったが、

それでも酒臭さ是否が応にも全身の感覚が伝えてくる。

「ええ。順調、ですよ。入学してよかったです。講義も興味深いものが多いですし、友達に

も指導教官の先生にも恵まれて……」

「おうおう。そうかそうか。ハツハツハツ！」

「あ、あと。入学してすぐですし、正式に魔導師を名乗れるのはまだまだ先ですよ？」

「んう……？ アカデミーに入ったら魔導師じゃねえのか？」

酔いで思考力が削がれている部分もあるのだろうが、やはり一般人には魔導師へのプロセ

スについての知識はそう豊富ではないらしい。

ほくほくと肉厚のソーセージを咀嚼し飲み込んでから、アルスはゆっくりと説明する。

「……ええ。そもそも学院自体にそういう機能はないんですよ。正式に魔導師を名乗って仕

事も受けられるようになるには、魔導師の資格が必要なんです」

「資格？ そんなのがあるのか」

「はい。一つは“汎用免許”<sup>ベースライセンス</sup>。これは魔導師としての技能全般を  
持っているという証。要は

共通の免許です。もう一つは“専門免許”<sup>スキルライセンス</sup>。といって、こっちはそれ  
ぞれ自分の専門分野を

示すものです。……ええと、例えば母さんなら魔導医なので『<sup>ドク</sup>医薬  
師』<sup>タリ</sup>の免許を持って

いる筈ですし、リユカ先生なら教練場の先生もしているので『<sup>スカラー</sup>学師』  
の免許があります」

「あと、リユカは『<sup>ディヴァイナー</sup>星詠師』も持ってたんじゃなかったっけ？」

「あ、うん。そうそう。スキルライセンスは自分が扱う分野ごと  
に色々持てるんですよ」

「要するに魔導師の免許つてのは二階建てなんだよね。皆共通の一  
階部分がベースライセンス

スで、二階のスキルライセンスは自分の好みで色々付け足すつて  
感じ」

「ほう……。なるほどなあ」

エトナが補足的に噛み砕いて説明してくれたお陰か、皆もようや  
く理解が追いついてきた

ようだった。アルスは「ありがとね」と彼女に微笑むとお茶で軽く  
喉を潤す。

「少なくとも、まずはベースライセンスを取得しない事には始まり  
ません。大きく捉えても

そこを通過できなくっちゃ魔導師は名乗れませんし……。人により  
ますけど、その為の勉強

は 基礎過程の二年から三年くらいは确实だと思います」  
「試験自体が半年のスパンだからね」。一度落とすと色々痛いもん

「うん。だから受ける前の準備をしっかりとっちなくっちゃってこと。

……まあ、その受験への

ゴーサイン自体は指導教官の先生の裁量なんだけど」

「大丈夫だよ、アルスなら。何せ学年主席なんだから」

そして、はたとエトナが口をついてしまった言葉。

アルスは咄嗟に「そ、それは……！」と慌てて彼女の口を押さえ  
たが、もう遅かった。

「何だつて……？」

「それ、本当なのか!？」

「……え、ええ。僕も知つたのは向こうへ下宿を始めてからのこと  
なんですけど……」

今まで以上にずっと迫ってくる(酒臭い)村人達。

その人数的な質量に気圧されるように、アルスは仕方なく苦笑い  
で頷く。

『おおおお……っ!?!』

「ハハツ! こいつはめでたいじゃないか! シノブさんとリュカ  
先生に続いてこの村から

また優秀な魔導師が誕生するってことだろう?」

「祝杯だ、祝杯っ。お〜い、こっちにもっと酒持つて来てくれ〜!」  
どうやら彼らの酒の肴がまた一つ増えてしまったらしい。

アルスが目をぱちくりと瞬かせている内に、またテーブルの上へ  
酒や料理が積み上げられ

るかのよう追加されていく。

「……皆、流石に気が早すぎるよ……」

時間を追うごとに、宴は益々盛り上がっていた。

集会場の一角ではサフレとマルタが横笛とハーブでリズムを奏で、  
それに合わせて村人ら

が輪になって躍ってさえている。

「ほう。ではハロルドさんは教団本部にいたんですか」

「ええ……。今は辞めてこうして野に下っている身ですが」

「教団本部つていうと“クロスティア聖都”ですよね? いいなあ……」

「だよなあ。クロスティアつて言えば『地上で最も美しい街』つて  
言われるもんな。死ぬま

でに一度でいいから行ってみたいねえ」



「……。そうですね、是非訪ねてみて下さい。景観の美しさ“だけ”は保障しますよ」

徐々に野放図な集団も、見てみれば幾つかのグループに分かれつつあるように見えた。

ジークやアルスの主役の座る上座は勿論、シノブと静かに飲むイセルナやリンファ、教団関係者だったハロルドの周りに集まっている年配中心の集団、それらの周りを取り巻く中小のどんちゃん騒ぎなグループ群。

「よう。楽しんでるか？」

一通り村人らの質問攻めも波が済み、ジークがちびちびと飲んでいるとふと酒瓶を片手にしたダンとシフォンが近付いて来た。

まあ、一杯飲めよ。

そう言わんばかりに瓶先を傾けてくる彼に応え、杯を差し出して注いで貰うと、ジークは

くいとそれを飲み干して、どっかりとその場に座る二人に相對する。「やっぱ宴席ってのはいいねえ。生き返る」

「否定はしませんけど。でもあんまり飲み過ぎて迷惑掛けないで下さいよ？ 俺やシフォン

と違って、村の皆はごくごく普通の一般人なんスから。副団長がバシバシ叩いてたら冗談抜きに怪我人が出かねないですし」

「大丈夫。そうならないように僕が見てるから」

「……言いたい放題だなおめえら。……まあいいや」

にっこり笑顔で隣のシフォンが言うのをジト目で見つつも、ダンは別段怒る素振りはないように見えた。代わりに残っていた酒を煽り、ふうと大きく一息をつく。

「……で、どうだ？ お袋さんに肝心の質問は果たせたのか？」

「いえ……。何だか上手くタイミングが掴めなくて」  
言ってジークは背後のアルスを見遣った。

気疲れもあったのだろう。彼は既にテーブルの上に突っ伏して穏やかな寝息を立て始めて

いた。そつと薄手の毛布を掛けてあげつつ、エトナが「こつちは大丈夫」と頷いている。

「そつか。実は俺達も、それなりに探りは入れてみてるんだがな」  
「えっ」

「そんな顔すんなって。探りって言っただろ。遠回しにお前の剣の事を話題に噛ませてみるだけだ。だがこれといって収穫はねえな。皆、頭にはてなマークだ」

「やっぱり、シノブさんに直接訊いてみないといけないかな」

「……………ああ」

心持ち気弱に頷く。それは分かっている。そのつもりで久々に帰省をしたのだから。

だが、正直恐くもあつた。母は……………どんな事を知っているのだろう。或いは知っていない

のか。どちらにせよ、この目的を知ったことで純粋な帰省でないとがっかりさせてしまうか

もしれない。そもやもやとする胸の内だと思った。

「まあそれが元々の目的だしな。しかしなあ、俺にはどうもきな臭

」

だが次の瞬間だった。

にわかにザワツと宴の集団が騒ぎ出す。

それまでの半ばな嬉々のBGMではない、短い悲鳴のような重なる声色。

ジーク達が反射的に立ち上がりかけ、その方向を見遣る。

「ステラ、ちゃん？」……………ステラ？」

「お……………お嬢ちゃん？」

それはステラらが混ざっていた女性陣の集まる一角だった。  
不意の事だったのか、驚いているレナやミア、そして村の奥様方  
な面々。

当のステラは何かを見たかのように一人ついつと森の奥へと目を  
凝らしていたのだが。

「その、目が……赤い……」

「ッ!？」

震え出して指摘されて、ようやく彼女自身は気付いたようだった。  
弾かれたように引き攣った表情で、バツと両手で顔を覆う。

「まさか」

だが、既に周囲の村人らはその事実気付いてしまっていた。

「お嬢ちゃん……。あんたまさか、ミアなのかい？」

ステラの振り返って咄嗟に隠した顔。その両眼が血色の赤に染ま  
っていたことに。

弾かれたように村人らがざわざわと動揺で騒ぎ始めた。

魔人<sup>ミア</sup> 瘴気<sup>ミア</sup>に中てられても尚、ヒトの姿を持って生き残った者  
達の総称。それはかつて

魔獣の襲撃によって大きな被害を被ったサンフェルノ村の皆にはと  
っては充分過ぎるほどに

恐れ、忌むであろう存在でもある筈で……。

「ち、違うんです!」

逸早く動いたのはレナだった。

バレた。その事実<sup>ミア</sup>にガタガタと震え出すステラを庇うように割っ  
て立ち、村人らを説得す

るように力説する。

「た、確かにステラちゃんはミアです。でも彼女はただ巻き込まれ  
ただけで……」

「うん。そう。ステラは、何も悪い事はしていない」

だが一般的に魔獣や魔人への忌避意識は強い。

レナとミアが友人として仲間としてそう断言したが、村人達は戸

惑いを隠せないでいる。

「……大丈夫だ。こいつは俺がクランに連れて帰ってきたんだ」  
するとザツと足音がした。

近付いて来たのは夜風に結んだ後ろ髪を揺らし、ポケットに両手を突っ込んだジーク。

彼は左右のダンとシフォンと共に言った。

「昔、魔獣に滅ぼされた村に仕事で行ったことがあってな。こいつはその中で唯一生き残っ

てたんだ。……だから団長達に頼んで保護した。年格好もアルスと一緒にだ。見捨てられねえ

と思っただ。嫌だっけんなら、俺も一緒にこいつとホームに戻る」

一同が驚きの眼をジークに注いでいた。

村人達も、クランの仲間達も、何より掌の隙間からそんな様を窺っていたステラも。

沈黙が宴だった筈の場に降りて。

「あらあら、そうなの。ビックリしたわあ」

「それならいいや。すまねえな、嬢ちゃん。ビビらせちゃって」

だがしかし、それらはあつという間に四散していた。

まるでジークのその言葉が合図だったかのように、皆はそれまでの宴の陽気さを取り戻す

とステラに軽い謝罪の弁を掛けて、すぐにまた宴の一時を愉しみ始めたのである。

「……え？ え？」

ステラは驚いていた。いや呆気に取られていたというべきか。

変わり身の早い、瞬時の理解。その未経験の光景に啞然としていると、そつとその傍らに

ジークが「よつと」と腰掛けてきて呟く。

「な？ 何ともなかつたろ？ お前が縮こまらなきゃいけない理由なんてねえんだよ」

傍にあった酒瓶を引っ手繰り、くいつと持ってきた杯で喉を潤す。

見渡せば、ダンやシフォンも皆に混じっている。ミアはこくと静かに頷き、レナも同様に

微笑を　ちよっぴり羨ましそうに　返してくれている。

「……うん」

ほつつと頬を染めて。

ステラは恩人であり想い人でもある彼の傍で、ちびちびと茶を啜る。

歓迎の宴は大盛況の内にお開きとなった。

長く飲めや歌えやと騒いでいたのもあってか、すっかり辺りは暗くなっている。今頃は皆

はしゃいだ疲れの中で深い眠りにについていることだろう。

「アルス、まだあ？」

「……うん。もうちよつと」

ばしゃばしゃと手を洗う水音がする。

ふよふよと漂って待っているエトナの前のドアを開けて、寝間着に身を包んだアルスが姿

を見せた。要するに、お手洗いに来ていたのだ。

「ごめんね。起こしちゃって」

「いいって。私もまだちよつと興奮気味だったから」

二、三やり取りを交わして二人は夜更けの廊下に行く。

灯りは全て消え去っており、照らすのは雲の合間から漏れ注ぐ月明かりくらい。

その筈、だったのだが。

「……？」

アルスはふとその例外があることに気付いた。

廊下の向こうが、控えめだが灯りが点っているらしい。ほんのりと夜闇の黒を薄める程度

の光が息を殺しているようになってるのが見える。

(……まだ、誰か起きてる?)

ちよこんとアルスは首を傾げた。

兄は先程部屋を出てくる時も眠っていた。エトナがトイレの外で待つてくれていたので彼が通り過ぎたとも考え難い。

「診療所の方、みたいだね」

「急患じゃない？ 何せあれだけ飲み食いしてたんだもの。誰かがお腹壊して薬でも貰いに来てるんじゃないかな」

「うーん……」

だとすれば、あんな半端な灯りで迎えるものだろうか。

アルスは少し考えたが、結局一抹の好奇心が勝っていた。

「ちよつと見に行ってみようか。もしかして泥棒だったりするかもしれない」

「まさか。ま、でも念のために……ね？」

そろりそろりと、廊下を進んで増築してある診療所の方へ。

灯りの白は心なし強くなっていった。そしてその距離が数メートルまで迫った所で、二人

ははたとその足を止めざるを得なくなる。

「それ、本当なのかよ……」

ダンの声だった。

しかしその声色は普段の豪放磊落としたそれとは打って変わり、明らかかな、それも今まで

アルスが彼に対し耳にしたことのないような戸惑いの色を濃く備えているように思えた。

(……エトナ、気配を消して)

(う、うん。分かった……)

囁くような小声でエトナにそう言い、彼女は一時的に顕現を解いて姿を消した。

アルスもまた、身体から外に流れていくマナを深呼吸の下に押し留める。

「マナの一時的な遮断“断氣”。

錬氣法と同様、マナの制御法の一つであり、主に相手から氣配を悟らせない目的で使う。

謂わば「息止めのマナ版」とでもいうべきか。

何処なく、いや先程よりも確実に存在感を薄めたアルスは、静かにドアを僅かに開けると  
そつと聞き耳を立てる。

「ああ……本当だ。偽りは一切ない。この話の為に皆をわざわざ密かに呼んだのだから」

中には母とイセルナシノら克蘭の幹部メンバーが揃っていた。

しかし妙だ。母の傍らにリンファとイセルナ、彼女達に向き合うようにダン、シフォン、

ハロルドの三人が 表情はそれぞれだが何れも驚きや戸惑いの様子で佇んでいる。

一体、こんな時間に何を？

だがアルスのそんな落ち着いた思考は、

「シノブとは嬪殿による仮初の名。真名はシノ・スメラギ。我ら女傑族アマゾネスの国“トナン皇国”

の先代の皇の一人娘にして、正統なる皇位継承者であらせられる」  
次の瞬間、紙くずのように吹き飛んでいた。

(……………母さんが、皇女さま?)

たつぷりと唾然とした間が過ぎ、アルスはごくりと息を呑んでじつとドアの隙間から見え

るそのやり取りに目を見開いた。

頭の理解はそう整理してくれたのだが、まだカラダがその事実を追いついていない感触が

ある。それは部屋の中のダンら三人も似たようなものであるしく、僅かな灯りの下、強烈な

衝撃に打ちひしがれて咄嗟の応答に窮しているようだった。

「これは、随分と予想の斜め上を行ってくれたね……………」

「ああ…………。だがよイセルナ、お前もそっち側に立つてるって事は…………知ってたのか」

「…………ごめんなさいね。リンから極力この事は内密にしておいてくれと頼まれていたから」

フツと苦笑と共に小首を傾げてみせたのが彼女の答えだった。

「欺いてたのか? そんなダンの、失望とは言わないまでもシヨックな気持ちをちゃんと理

解してからこそその返答だったのだろう。

「…………ま、黙ってたことは今更責める気はねえ。起きねえよ。こうして白状したんだしな」

「そうだね。むしろ、僕達が問うべきは……………」

「何故このタイミングで? という点だね」

三人が顔を見合わせてから投げ掛ける言葉。それは話の続きを促すのと同義で。

「…………そうだな。順を追って話そうか」

コクと頷き、リンファ達は告白を続ける。

「そもそもその始まりは二十年前　まだ先皇・皇妃両陛下が御存命



で、私も近衛隊の一員と

して殿下の御側役として仕えていた頃に遡る」

「二十年前の皇国トナンつつーと……」

「……クーデター、ですか」

ハロルドが意図を悟り始めたのか苦々しく呟いた言葉に、リンフアは無言で頷いた。

今から二十年前、トナン皇国で勃発した大規模なクーデター。

旧態依然なしがらみを打破し、同国をかつての強国に復活させしめんと掲げられたその武

装蜂起は王宮を制圧し、当時の国王・皇妃夫妻を殺害。結果、クーデター側の長である皇妃

の実姉・アズサがその後の実権を握ることとなった。

当時は随分と騒がれたものだが、結局各国は静観を貫いた。

理由は内政不干涉 もとい、アマゾネスという良質の傭兵集団でもある彼女らとの関係

を干渉により壊す事が国益を損なうと判断した、時の権力者らの“保身”に他ならない。

「だが、当時の国王側は肅清されたって話じゃあ……？」

「それは半分は事実だが、半分はアズサ殿サイドの広報だ。現に先皇御夫妻の一人娘であら

れるシノ様は、殿下はこうしてこの場におられる」

つまりは、亡命に近い歳月を過ごしたというのか。

ダン達、そしてドアの隙間からその告白をじっと目を見張って聞いていたアルスはそれぞれ

れに息を呑んで黙り込む。

「……謀反の軍勢は王宮を一挙に攻め立てた。火をかけられたその中で、両陛下は私たち近

衛戦士団に殿下を逃がすように、最期の命令を下された。多くの同胞らが討たれていった。

私は必死になって殿下を御守りしながら皇都を脱出し、ひたすら逃

げた……」

言葉で話せばほんの数フレーズ。

だがその過酷さは如何ほどのものだったか。ダン達は過去の辛酸を思い顔をしかめている

彼女を、シノブ いや皇女シノ・スメラギをただただ見遣ることしかできない。

「……だが救いもあつた。逃亡の旅の中、私達に手を差し伸べてくれた者達がいたんだ」

「それがあの人達 コーダス・レノヴィンとその仲間の皆だったんです」

繋がる経緯。

リンファから言葉を継いだシノブの表情はふっと優しく緩み、ほんのりと思慕の気色で赤く染まっているのが分かる。

「あの人達は、私達の身の上を知っても差し伸べた手を引っ込めることをしませんでした。

むしろ伯母上からの追っ手とも必死に戦い、反乱軍から『皇女誘拐犯』と謗られても私達を守り続けてくれました」

「そついやそんなニュースもあつたな。だが確かあれは……」

「ああ。ほどなくして誤報だと婿殿達が世に証明してくれたんだ。汚名をそそいだんだよ」

「……なるほど」

ダンが呟いたのは、何もリンファの補足の言葉に対してだけではなかったのだろう。

その後、現にシノブと名を変え、コーダス 後にレノヴィン兄弟の父となるその守り人と恋に落ちたという旅の果ても、その全てを含めての。

「クーデターのごたごたが一通り済んだ後、私はコーダスと共にこの村にやって来ました」

それからジークとアルスを産んで、旅の途中で得ていた魔導師の資格を使って村で医者をはじめたんです。……クラウスさんとリュカちゃんには、その時から色々手を回して貰っていいんですよ」

ダンが片眉を上げてイセルナを見た。フツと肩をすくめた苦笑が返ってくる。

(……なるほどね。道理で突っ込んで訊いてみてもうんともすんとも言わなかった訳だ)

頭をガシガシと掻き、はあと大きく嘆息。

要は自分達はいいつらの掌の上でジタバタしていただけってことじゃねえか……。

「話は、分かりました。まだ驚きで心臓はバクバクいっていますけど」

そんな彼を横目に、今度はシフォンとハロルドが質問役に代わる。「ですがそれは、今回ジークと共にこの村に来た理由とは違うように思うのですが……」

「いや。そんな事はないんだ。……これまでの話はあくまで前振りだよ」

一度シノブを見遣り、その首肯を得てからリンファは言った。

「結論から言おう。ジーク いやジーク様の持っているあの六本の刀はただの刀ではないし、単なる魔導具でもない」

自分達の過去を打ち明け、少し楽になっていた気を引き締めるように次なる告白をする。

「あれらの名は“護皇六華” 六振り一組の聖浄器にして、我が国の正統な皇位継承者が代々受け継ぐ“皇器”だ」

その言葉に、ダン達は先程以上の衝撃を受けたようだった。バツと顔を上げて。或いは目を見開き、眼鏡の奥の瞳を静かに光

らせて。

「おまつ、知ってたのかよ……!?!」

「聖浄器だったのか。しかも皇器だなんて……」

「ふむ。別に珍しくはないですよ。各国とも詳細を公表していないだけで、聖浄器といった

アーティファクトを皇器 国家の象徴としているケースはよくあることですから」

「ああ。そうだ。護皇六華もその一つになる」

「……皆さんをこうして呼んだのは、このことも含めて全てをお話しする為なんです」

そう少し申し訳なさそうに言い、両手を行儀よくお腹の前で組むシノブ。

少なからず動揺していた面々だったが、そんな彼女の静かな声色に宥められたのか、やや

あつて居住いを正すと「じゃあ……」と話題を核心へと向け始める。「ジークにそのゴコーリツカを与えたのは、あんただと聞いてるんだが」

「はい。村を出るあの子を護ってくれるように。以前はコーダスに預かって貰っていたので

すけどもう今はいませんし、私が持っていてもろくに使えませんか……」

「だから正直焦ったよ。サフレと戦った時に、一時的とはいえその封印が解けたのだから。

あれはおそらく、ジーク様自身の身の危険に護皇六華が反応したからなのだろう」

「そっか。知ってたんだな……。でもうっかり話しちまうと色々バレちまう、と……」

「そういう事だ。だが、もうここまで来ては隠し通せない。そう殿下は判断した」

「ですからリンと相談して、まずは皆さんにだけにでもお話を通し

ておこうと思ひまして。

黙っていて、すみませんでした」

恥も外聞もない。ただシノブは、リンファは深く頭を下げていた。今まで黙っていた一種の裏切りに対して。そして今まで息子達を守ってくれていた感謝も同時に込めて。

「あ、いや……。そんな、頭を上げてくださいよ。一国のお姫さんにそんなことされちゃあ敵わねえツスから」

ダンは慌てて応えていた。いくら肝が据わっているとはいえ、流石に畏れ多いのだろう。

「……で、イセルナ。お前はいつからこの事を？」

だからか、彼は話の矛先を変えるようにそう静かにシノブ側に立っていた盟友に問う。

「五年前、ちょうどジークがうちのクランに身を寄せるようになった頃よ。リンがこっそり

打ち明けてくれたの。自身の正体も含めて、色々とね」

「……驚いたよ。殿下にご息がおられるとは聞き及んでいたが、まさか私が世俗に身を隠

しているその懐に現れてくるとは。皆にはすまないと思つたが、少なくともクランの長であ

るイセルナには話を通しておかないと色々裏で手が回し辛いだろうと思つたんだ」

眼を見る。二人とも嘘は言っていない。少なくとも彼女達の密かな協定はその頃から始まつていたことになるのだろう。

「……水臭えじゃねえか。言ってくれりゃあ俺達だつて協力は惜しまなかつたぜ？」

「そうだね。でも、始めから聞かされていたら、僕はジークと友人「まじのまじ」関係を築けていなかった

かもしれないなあ」

「すみません。できる限り、あの子達には普通の人生を送って貰いたかったから……」

そうシノブが再び頭を下げようとしたので、ダンらは慌ててそれを止めていた。

気持ちは分からなくもない。いくら皇族といっても一人の母親には変わりないのだ。自分が出自故に苦労した分、子供たちには幸せになって欲しい。それくらい願ってもバチは当たらない筈だ。

そう……信じたかった。

「……。念の為ですが、このことを当の本人達には？」

「いいえ。今の段階で知ってるのはこの場にいる皆さんとクラウスさん、リユカちゃんだけです。息子達が訊いてくるのは……もう、時間の問題なのでしょうけど」

ハロルドが確認の為にそう問う。シノブは小さく首を振りつつも、覚悟を決めているよう

だった。だからこそ、先ずは“外堀”から埋めようと考えたのだらう。

しんと、一同が黙り込む。

( ……そんな )

胸の動悸が止まらなかった。アルスはぎゅっと胸元を片手で押さえながら、そのやり取りの全容を確かに記憶に焼き付けていた。

母さんがトナンの皇女さま。という事は、僕と兄さんは 皇子さま？

兄の刀についての真相も驚いたが、アルス自身はそれよりも自分達兄弟の出自に大きな衝撃を隠せないでいた。

（ど、どどど、どじょう！？　こんなこと、兄さんにどじやって  
）

「何やってんだ、アルス？」

「ひゃああアっ！？」

このまま居たらマズい。

だがそう思っただけで動揺で震える身体を引き摺ってその場を去ろうとしたその瞬間、不意にぼ

すんと肩を叩かれ、アルスは思わず情けない悲鳴を上げてしまう。

「お、おい。大丈夫か？　俺だよ、俺」

「あ……。に、兄さん……。？　どうして」

「？　別になんてこたあねえよ。変に目が覚めちまったから、一回外の風にも当たりに行

こうかと思っただけ。そしたらお前らがふらふら歩いていくのが見えただからよ。……。っーか、

何だかお前“薄く”なっただけか？」

怪訝に眉根をひそめているジークは、確かに寝間着の上に着たの上着を羽織って二刀を

腰に差していた（おそらくは一介の剣士としての習慣でそうしているのだらう）。

だが、今はそれ所ではない。

「……その声、ジークにアルスか？」

やはりバレていた。リンファがドアの向こうから緊迫した声で問い掛ける声が聞こえる。

「リンさん？　何でこんな時間に……」

「あ。に、兄さん！　ちょ、ちょっと待っ」

兄が頭に疑問符を浮かべてそのままドアを開けて入って行くこととする。

アルスは慌ててそれを止めようとしたのだが、

「……………」

目を見開いて一斉に自分達を見てくる面々の姿に晒され、時既に

遅く。

「……………」

ジークは皆に囲まれるようにして、暫く難しそうに黙り込んでいた。

無理もない。何の気なしに夜中に起きてきて、突然自分達兄弟の出生諸々の秘密を聞かされたのだ。

(兄さんはどんな反応をするんだろう……)

見咎められてしまい断氣を解いたアルスは、同じく顕現し直して傍らで漂っているエトナと共にそうじつとそんな兄の横顔をおずおずと窺っている。

「ん……………。そっか」

(割とあっさりだー!?)

しかし当のジークは一見すると淡々とした言葉を漏らしていた。弟の内心のツッコミなど露知らず、彼はポリポリと寝癖のついた髪を掻きながら腰に下げた刀を一瞥して言う。

「俺やアルスが皇子で、国宝の刀なゴコーリツカねえ……………。すまん、正直いきなり過ぎて頭

が追いついてねえや……………もしかしたら目的が果たせてホツとしてるのかもしれないけど」

「ジーク……………」

「ったく、リンさんも団長も水臭えよ。知ってるなら言ってくれればいいのにさ」

「す、すみません。ですがこれはお二人の事を考えての……………」

「だからさ。今更になってリンさんも敬語使わなくってもいいですって。そりゃあ血筋はそ

うでも、いきなり皇子だとか言われても自覚ねえし……………それ以前に俺は俺だし、アルスは



アルスだし、母さんは母さんだ。必要以上に硬くなることなんてないでしょう?」

リンファが、シノブが、アルスが、皆が啞然としていた。

一番今回の一連の謎について悩んでいていただろうジークのその言葉に、思わず返す言の葉を失う面々。

(……でも、兄さんらしいと言えば兄さんらしいのかな……)

それでもと。アルスはふっと何だか可笑しくなった。

良い意味でも悪い意味でも、彼は自然体なのだ。自分は皇族だと言われて狼狽してしまっただけれど、兄はそんな事実を告げられても「肩書き」には興味が無いのだろう。

だからむしろここに至るまでの懸案が解決した、その安堵感の方が強いのだと思われる。

尤も、この真実に緊張した皆を解すという意図があったのかもしれないが……。

「そうか……」

リンファはふっと苦笑してシノブ 忠誠を誓う主と顔を見合わせていた。

そして向き直りつつ零れる「ありがとう」の言葉。

しかし、その視線はふとジークの腰へと向かって……。

「ところで、ジーク、護皇六華の残りは……?」

「え? ああ、何となく起きて来ただけだからこの二本だけだけど

—  
そんな時だった。急に村全体にけたたましい鐘の音が鳴り響き始めたのは。

ジーク達はハツとなってその音の方向、外へと一斉に視線を向ける。

「これって……」

「村の警報だよ。一体、何があったんだ……?」

にわかに夜闇の中の村が騒ぎ始めていた。

ジーク達も、何かとその場を移動しようとする。

「ッ!? 待て、ジーク」

だが、その時リンファが何かに気付いた。眉をひそめ、慌てて声を張り上げる。

「結社だ! 部屋に戻れ! 六華が危ない!」

12・(5) 終着点(はじまり)

「私達は二人の部屋へ行くわ。ダン達は村の皆さんをお願い！」

「分かった！ 気を付けるよ！」

廊下を駆け出し、ジーク達は二手に分かれた。

イセルナ、そしてシノブに寄り添うリンファと共に、部屋の残り四本の護皇六華の下へ。

一方ダンとハロルド、シフォンの三人は、今頃警鐘で慌てふためているであろう村人らの避難誘導へと向かっていく。

(くそつ、しくじった……！)

走りながら、ジークは奥歯を噛み締めながらそう内心で後悔していた。

帰郷を果たして何処かホツとしていた、列車への襲撃で一区切りという油断があったのか

もしれない。いくら愛刀達 護皇六華の正体を知らなかったとはいえ、お粗末だ。

程なくして弾くようにジークが部屋のドアを開け放った。

するとそこには、リンファが半ば助付いたように抱いた懸念をそっくり再現したかのよう

に黒衣の一団 “結社”のオートマタ兵らが蠢いていた。ギョロツと。夜の暗がりの中で

真っ赤な複数の眼がこちらを見ていた。

丸く切り抜かれ、そこから鍵を開けたと見られる分解された窓ガラス。

搜索かとはまた犯行の顕示の為か、念入りに荒らされた室内。

そして彼らの手には、三本の脇差と黒の太刀、残り四本の護皇六華。

「こん、のおッー!」

お互いの視線があつたとほぼ同時に、ジークはだんと地面を蹴つていた。

腰に下げていた刀を一本抜き放ちながら、ジークはその力任せの一閃を一群として固まっていた傀儡兵らに叩き込む。

夜闇の中で、生々しい斬撃のめり込む音がした。

倒される何人かの傀儡兵。その中の一体、脇差の一本を持っている手が斬り飛ばされ、宙に舞うのをジークは見逃さなかった。

「先ずは……一本！」

空中でもぎ取るようにそれを回収して腰に差すと、返した刃で二撃目を。

だが傀儡兵らは既に退却の体勢に移っていた。一瞬暗がりの黒色を衝くような銀閃が走る

その寸前に、彼らは背後の窓を突き破って外へと逃げてゆく。

「ちいつ！ 待ちやがれ！」

考える暇もなくジークはその後を追った。

砕けたガラス片にも構うことなく同じく窓を乗り越え飛び出し。

「ッ！？」

迎えたのは、先程よりも遥かに多い傀儡兵の眼。ぐるりと注がれる気配。

「しまっ……！」

こう来るだろうと待ち伏せられていたのだ。

地面に着地すると同時に、ジークは顔を引き攣らせて刃を盾にしようとする。

だが、待ち伏せの一斉攻撃は現実にはならなかった。次の瞬間、周囲の草木が無数の鞭の

ようになつてしなり、傀儡兵らの一部を薙ぎ倒したからだ。

「兄さん、大丈夫！？」「もっつ、カッとなり過ぎ！」

「……すまん。助かった」

アルスとエトナのフォロー。

二人がよいしょと窓枠を乗り越えて隣に立つのを横目に見ながらジークは呟き、血が上り

掛けた頭の中をクールダウンする。

次いでイセルナとリンファ、シノブがその後が続いてくる。

「リンさん。母さんを頼みます」

「ああ。分かっている」

母が長太刀を抜いた彼女に護られているのを肩越しに確認してから、ジーク達は構えた。

奪った三本を手に駆けていく突入班だったらしき先程の傀儡兵。

その追跡を阻むようにし

て待ち伏せていた他の傀儡兵らの隊伍がジーク達の前に立ちほだかる。

「時間稼ぎのつもりね。ジーク、ここは私が引き受けるから急ぎなさい」

「うっす」

言って隣に立ったイセルナが剣を抜いて片手を水平にかざすと、ブルートが蒼い輝きと共に

に彼女のマナと同化する。飛翔態。始めから全力で叩く意思表示だ。

二人は殆ど同時に地面を蹴っていた。わらわらと飛び掛ってくる傀儡兵らを冷気を纏う剣

撃と錬氣で揺らめく銀閃が薙ぎ払っていく。

だが相手の数の上でジーク達には分が悪かった。加えて多少の傷ではひるみすらない戦

う人形とくる。

懸命に剣を振るものの、次から次へと湧く傀儡兵らを前に中々道が開けない。

「くそっ！ このままじゃ逃げられるっ……！」

「ジーク、イセルナ、伏せて！」

「盟約の下、我に示せ　　ガイアブランチ 大樹の腕！」

するとその状況を見てアルスが援護をくれた。

エトナが叫んだその声に半ば反射的に応じ、身を低くする。すると次の瞬間、周囲の草木

を編み込んだ巨大な緑の鞭が目前の傀儡兵にくへきを吹き飛ばす。

「兄さん早く！」

「おうっ、サンキュー！」

殲滅こそはしてないが、しっかりと隙が、道ができた。

そんな、母を庇いつつも自分を促しアシストしてくれた弟に、ジークは返礼を投げながら

駆け出そうとする。だが……。

「させるかよオー!!」

「ッ!？」

突如として頭上から荒々しい声が響いた。

そしてぞわっと全身が伝えたのは、警告のそれで。

ジークは反射的に駆け出そうとした脚に急ブレーキを掛けて身を擦って横へと飛ぶ。

すると直後、その場所をどす黒い靄オーラを纏った大きな何がその地面へと激突し、激しい爆音を上げた。

地面は勿論、場の傀儡兵すら巻き込んで爆ぜ飛ぶ地面。

「ふう……。な、何だよ一体？　それに、この靄オーラって……」

「ええ。瘴気ね……」

濛々と上がる土埃を前にジーク達は手で口を覆い、思わず立ち尽くす。

「やれやれ。君はいつも荒っぽいね。もう少し洗練された戦い方をしなよ」

「あゝも〜！　バトちゃん駄目だよ。お人形さん達が壊れちゃうじゃない!」

すると、そんな土埃の向こう側から声が聞こえてきた。

ジーク達がハツと我に返って目を凝らす。やがて先程の衝突体巨軀のそれを合わせて

三人分の人影が、ゆたりと揃い踏みとなって姿を現す。

「うっせえな。大体こんなまどろっこしい真似なんぞせずとも俺らが早々にぶっ潰しとけば

こんな手間にならずに済んだつての」

一人は隆々とした体格をした、現在進行中で荒っぽい口調を吐いている大男。

「スマートじゃないじゃないか。事を万全に運ぶ為の配下<sup>メイド</sup>達だろう？」

「あゝあ。お人形さん壊れてる……」

対するのは、青紫のマントを纏ったいかにも気障な感じの青年と継ぎ接ぎだらけのパペツ

トを抱えた幼い少女だった。

大男と青年がそれぞれに言い争っている(?)その場で、少女は先の衝突で大きく損傷し

て動かなくなつた傀儡兵らをちよんちよんと突付きしよぼくれている。

「……てめえらは」

もう一本、残つた腰の太刀を抜いて構え、ジークが口を開いた。

するとやり取りをしていた青年がその声に振り向き、フツと口元に無駄に爽やかで気障な

微笑みを返してくる。

「やあ。お母様との対面は終わったかな? 中々感動的な話じゃないか。うん」

「……かもな。でも最悪だぜ。どこのキザ野郎どものおかげで台無しになつたんでな」

言動こそ丁寧なように見えた。

だがジークは、そんな彼に殆ど直感に近い判断でその皮肉に言い返して睨み付ける。

村を襲ったこともある。だがそんな事云々以前に　こいつらは、敵だ。

フツと、また青年は大仰にすくめてみせながら晒っていた。青紫のマント、腰に下がった長剣がガサツと揺れる。

「おやおや。さて、誰の所為かなあ？　君が素直にその剣を　護皇六華をこちらに渡してさえくれれば僕らもこんなに色々と手を打たなくともよかつたんだよ？　全部君の所為だ。

金髪と桃髪の二人連れも、オートマタ兵達も、魔獣の身になってまで君達を討とうとした信徒ダニエルも。全て君が拒んだから……巻き込まれ、死んだ」  
「ッ……！」

正直ガツンと腸を打ちのめす一言だった。思わずジークは悪寒と共に顔を引き攣らせ、言葉を詰まらせる。「違う！　兄さんの所為じゃない！」

だがそんな兄の動揺を逸早く察した救いの言葉が、アルスから放たれていた。

「元凶はお前達じゃないか、楽園エデンの眼！　兄さんの所為なんかじゃ断じてない。兄さんは、兄さんは……ッ！」

ぐらりと揺らいだ瞳で見返してくる兄の姿すら顧みることなく、ただ強い意志　誰よりも優しく悔やみ続けた身だからこそその反論をぶつけている。

「アルス……」  
普段大人しい筈のアルスが、こつも激しく憤っているなんて……。その様に当のジークはむしろ冷静さを取り戻せていた。

確かに事の元凶は目の前の　傀儡兵を率いている事からも十中八九“結社”の連中であるのだろう。



でもな？ それでもお前の言うほど“俺が何も悪くない”ってことも、ないんだぜ……。

既に飛翔態の冷気の翼を展開しているイセルナの横で、ジークは再び二刀を構える。

「ふむ？ では、この期に及んで要求を呑むつもりはない……と」

「当たり前だ。こいつらのルーツを知った手前、おいそれと渡せるかよ。てめえらこそ残り

三本wp返しやがれ。それは……母さん達の刀だ！」

シノブはハツと目を見開き、そして瞳を潤ませて胸を掻き抱いていた。

さもなくば。それはジーク達の拒絶であり、臨戦の意思表示。

「……やれやれ」

だが、青年はむしろその意思を軽々と一笑に付していた。

一歩前へ。マントをばさりと翻し、

「仕方ないね。エクリレーヌ」

「はい」

ぴっと立てた人差し指と共に、傍らの少女・エクリレーヌに一見軽々しい指示を与える。

「やつちやえ！ ポチ、ミケ！」

しかしその実行は、彼らのやり取りの軽さとはまるで反比例していたものと言わざるを得

なかった。彼女がまるでペットに語り掛けるようなそんなノリで言葉を発したかと思うと、

その左右からどす黒い魔法陣を伴って現れたのは巨大な狼と虎型の魔獣が一体ずつ。

「どつか〜ん！」

開かれ、膨大なエネルギーが魔獣らの口に収束したかと思うと、次の瞬間、二体の口から

青と赤の巨大なエネルギー弾がジーク達の頭上を掠めて飛んでいったのだ。

直後、爆音を上げて村の家屋が吹き飛ぶ光景が現実になる。

そのいきなりの、あまりにも　　バシリスクの時とは桁違いの破壊力に、ジーク達は思わず目を丸くして硬直する他なかった。

「安心していいよ。これはまだ軽く試し撃ちをさせただけだから」

「……ッ。てめえ……！」

そんな夜闇に点った火の手を、青年は実に爽やかな笑顔のまま眺めていた。

「でも次はないよ？　いいのかなあ？　拒んだら……消すよ？　こんな村くらい、簡単に」

振り返り直し睨み付けてくるジーク達にすら、そんな笑顔を崩さない。

エクリレーヌが、呼び出した魔獣を従えて次弾に備えている。

何処からともなく新しく傀儡兵らが夜闇に紛れて現れ、再び青年ら三人の前に隊伍を形成し始める。

悪意。全身に嫌な鳥肌が立つほどの悪意だった。

下手に応えることも、飛び掛っていくこともできず、ジーク達は得物を構えたままじっと

睨み付け、押し黙る。

そんな時だった。

「アースグレイブ　這寄の岩槍！」

そんな声がかしたかと思うと、突然ジーク達の足元を縫うようにポコポコと地面が隆起し、

勢いよく突き出した無数の槍型が傀儡兵らを一貫き刺したのである。

一瞬の、スローモーション。

貫かれ弾き飛ばされる傀儡兵らが宙に舞う、青年らの立つそこへ今度はマナを帯びた矢と手斧が飛んでくる。

「はんッ！」

だが青年らは、まるでこの奇襲に動じた様子はなかった。

それまで退屈そうに木の幹に背を預けていた大男が、その体軀に見合わぬ俊敏な動きで反

応したかと思うと回転して飛んでくる手斧、刃を。

「ぬるいッ!!」

隆々とした筋肉の腕、拳の一撃だけで粉微塵に、確実に捉えて粉砕する。

「だねえ……」

そして、青年もゆたりと一步を踏み込むと。

「閃光矢は、通じないよ？」

大男とほぼ同時に近いタイミングで飛んできた強化された矢の紙一重の位置を歩き過ぎ、

そつとかざした手でその矢を丸ごと一瞬にして凍らせてしまったのだ。

バラバラと木屑のように散っていく金属の手斧と、ゴトンと鈍い音を立てて地面に落ちる

分厚い氷に包まれてしまった矢。

「くそっ……。仕留め損ねたか」

「……ま、そう簡単にはいかねえわな」

「だね。皆、大丈夫かい!？」

「あ、ああ……。何とかな」

振り返ると、背後から槍を弓を斧を、得物を構えたサフレらあの場にいなかった面子を含

めたダン達が駆けつけて来ていた。

ジークは一瞬ホツとして声色を上げつつも、すぐに状況を思い直して尻すぼみになる。

「見てみるよ、フェイアン。結局こーなっただから端っから俺らで殺つときゃよかつ

たんだつてのに……」

「それは結果論だよ。戦いも、美しくなければ」

「はん。相変わらずのナルシストが」

村の向こうで火の手が上がり続ける中。

ダン達を加えて、ジーク達は改めて青年ら　いや“結社”の軍勢と対峙した。

「……。ねえ、どうして？」

そんな中、最初に口を開いたのはレナの横でぎゅっとその袖を握っていたステラだった。

怯えによる震えか、或いはもっと別の何かか。

自身もまた、魔人<sup>メア</sup>の証である高揚時の血の赤の眼を隠すことなく訊ねる。

「あんた達だつてメアなのに、どうしてこんな酷い事するの？　もしかして、恨み……？」

すると対する彼らは、同様に自ら目を赤くすると、その嘲笑を隠す事なく答えた。

「恨みだあ？　お前バカか。何で今更そんな小せえ事で暴れなきやいけねえんだよ」

「エクはただ、魔獣<sup>みんな</sup>をお外でもっと自由に遊ばせてあげただけだよ……？」

「ふむ？　一言で言えば信仰の為、ですかねえ」

「……信仰。貴方がた樂園<sup>エデン</sup>の眼の言う『世界を在るべき姿に戻す』、ですか」

眼鏡のブリッジを押さえ、レンズ越しの眼を静かに光らせながらハオルドが呟いた。

ぴくとその言葉に反応している、矢を番え、構えていたシフォン。それでも気障な青年、フェイアンはあくまで飄々とした態度を崩さない。

「正直答える義理はないんだけど……。まあ全体の大願はそうだよ？　僕ら個々人の理由はともかくね」

「ハオルド、対話なんざやってる場合じゃねえだろ。そんな次元の

『敵』かよ」

「好戦的……と言いたい所だけど、今回ばかりは同意ね。……ジーク達は下がって置いてね。

相手が魔人<sup>メマ</sup>なら、生半可な力じゃ太刀打ちできないわ」

「でもっ！」

「目的が違っているわよ？ 冷静になりなさい。今貴方がすべきことは、六華の奪還よ」

ジークは食い下がろうとしたが、背中で静かに語るイセルナの言葉に二の句を継げること

はできなかった。

その左右を、冷気の翼を纏った飛翔態のイセルナと戦斧を担いだダンが通り過ぎてゆく。

「バトナス。君はあっちの獣人を。レデイのお相手は僕の役目だ」

「だろうと思ったよ。おいエク、お前は手え出すなよ？」

「おっけ」

イセルナと青年・フェイアン、ダンと大男・バトナスがそれぞれ向き合う格好となった。

ジーク達が、エクリレーヌや傀儡兵らがじっと見守る中、

「……………！」

はたと、両者が同時に地面を蹴って初撃を放つ。

瞬間、力の奔流が周囲を揺るがした。ビリビリと感じられる闘気。確かにそれはジーク達が安易に踏み入れては即、死に繋がるよう

なレベルに思えて。

「ほほう？」「ふん……」

だが様子のおかしさに、ジーク達はすぐに気付いてしまった。

イセルナの飛翔態を以つての全力攻撃も、ダンの練氣を滾らせた渾身の一閃も、このメア

の二人はあっさりと受け止めていたのだから。

「おいおい。その程度かよ？ 本当に本気出してるかあ？」

「ふふ。気高く、美しい……。ですが、僕には効きませんね」

ダンの斧を素手で受け止めていたバトナスの腕からどす黒いオーラが。

イセルナの剣を、冷気の渦を平然と受け止めているフェイアンの背中から。

「ぬるいんだよッ!!」「ほら」

次の瞬間、ジーク達は、そして当のイセルナとダンも勿論、驚きに目を見開いていた。

バトナスの片腕は禍々しい異形のそれに変貌し、フェイアンの背からは八体の巨大な冷気

の蛇が現れ、一挙に二人を押し始める。

「ダン！ イセルナ！」

「拙いぞ。退けっ！」

ハロルドやシフォン、そして融合していたブルートらが口を揃えて叫んでいた。

そしてそれとほぼ同時、ダンは戦斧ごとその禍々しい いや魔獣そのものな剛腕の拳を

受け、イセルナは逆にフェイアンの冷気の八頭蛇オロチに侵食されかけ、共に大きく吹き飛ばされ、

後退する。

「がつ……あ!?!」「ぐう……!」

悲鳴に近い。

ジーク達が口々に叫んでいた。特にダンの実娘たるミアと長く彼女と秘密を共にしてきた

リンファはより悲痛な叫びを上げている。

「嘘、だろ……?」

ほんの一度の切り結びであつたのに。

「団長と副団長が、押し負けた……?」

その力量差は誰もが見ても明らかとしまっていて。

ダンもイセルナも、お互いに仲間達に駆け寄られ介抱されつつも、大きなダメージを負い

肩で息を荒げてただただその事実には愕然とすることしかできない。

「何だよ。弱えなあ」

「ま、元から負けるつもりなんてないんだけどね」

バトナスとフェイアンはそう呟くと、やれやれと言わんばかりに悪態をつき、肩をすくめてジーク達を晒っていた。

「……まさか、魔獣キメラ人もいるなんてな」

そんな彼らを眉根を寄せながら、ダンがそう小さく呟いている。

魔人メアの中でも特に魔獣に近い性質を持つ者。それが魔獣人キメラだ。

彼らはバトナスのように魔獣そのものに変じる、圧倒的なパワーを持つが……その力の大き

さの反面“狂気”に蝕まれ易い。

「おうよ。だが結社結社のお蔭で存分殺れる。そういう意味じゃ、復讐なのかもなあ」

「……ッ！」

その顔は血を見るのが好きで好きで仕方ないといった、戦うことへの狂気に他ならず。

原理的には“同じ”である筈のステラは、思わず戦慄の表情で震え出す。

「さて……と。これで状況は分かって貰えたかな？ 君に、拒否権はないんだよ？」

そしてフェイアンはそう言い、今一度問うてきた。

それは間違いなくジークに、彼のその残り三本を寄越せという趣旨で。

「……」

ジークは二刀を握ったまま黙した。

譲るつもりは、ない。だがこのままでは間違いなく村が奴らに焼き尽くされるだろう。

(どうする？ 団長達でも勝てない相手を、どうやって……)

答えが決まっている筈の、迷い。

つうつとその頬に冷や汗が伝って落ちようとした。

その時だった。

「盟約の下、我に示せ　ダウンバースト　伏さず風威」

明瞭な声と共に紡がれたのは、一つの詠唱。

すると次の瞬間、ドンツとジーク達の目の前の空気が咆えた。

まるで目に見えぬ巨大な誰かが空間ごとその場を押し潰したよう

な、そんな吹き下ろされ

た猛烈な風圧。その一撃に、傀儡兵らが一人残らず巻き込まれるの  
が見える。

更に、第二撃が間髪を入れず“飛んできた”。

風が咆えたと形容するなら、これもまた、咆える衝撃だと言っ  
てもいいのかもしれない。

そんな衝撃波が続いて傀儡兵らを、フェイアンらを巻き込んで辺  
りの地面を丸ごと削ぎ取  
るように蹂躪していったのだ。

「……………。えっ？」

目の前で起きた突然の光景に、そんな少々間の抜けた声しか絞り  
出せなかったジークとそ  
の仲間達。

「大丈夫ですか、皆さん？」

しかし次の瞬間、土煙の向こう側から聞こえ、現れた姿にジーク  
達は心底安堵する思いに  
駆られることになる。

「リュカ先生！」

「せ、せんせい師匠……………!?!」

突然の攻撃が放たれたその線上の基点。

そこから歩いてきたのは、他ならぬクラウドとリュカの父娘おやしこだっ  
た。

クラウドは軽い武具に身を包み、身の丈はあろう大剣を片手に。  
リュカはいつもの村の女



性といった趣から、高潔な魔導師といった白と空色のローブをまとって。

驚きの声で、ジーク達はそんな援軍な二人を迎える。

そして面々はそこでようやく、先程の攻撃がこの二人の魔導と剣圧だと悟ったのだった。

「……やれやれ」

しかし、肝心の敵は生きていた。

ジーク達が振り返ると、そこには分厚いガラスのような球体  
いや、これも間違いなく

障壁なのだろう。それもとんでもなく練り込んだ　の中に守られるように包まれ、平然と

しているフェイアンら三人（と先的大型魔獣二体）の姿があった。

「驚きました。なるほど、斥候役の人形達が帰って来なかったのは貴方の仕業だったという

わけですか……。元・七星<sup>しちせい</sup>、竜帝クラウス」

静かに消えていく障壁から足を踏み出しつつ、フェイアンがそつと目を細めて言う。

バトナスはポキポキと両拳を鳴らし、エクリレーヌは使役する魔獣二体に無邪気な笑顔を

向けてさえている。

「し、七星！？ 師匠が？ そんなの初めて聞　」

「……昔の話だ。今はただの隠居老人に過ぎん」

「ご冗談を。軽々と大剣を振り回せるようなご隠居なんていないでしょうに」

ジークやアルスが驚愕の表情であたふたとしている中でも、フェイアンとクラウスは淡々とやり取りを交わしていた。

それでも心なしか、フェイアンの表情は先程よりもほんの少しばかり焦りや思案といった

感情が出てきているようにも思える。

だがそんな悠長な会話など要らないと言わんばかりに、クラウドは剣の切っ先を向けた。

「……即刻この村から去れ。そして二度と立ち入るな。さもなければ、問答無用で斬る」

「はんつ。隠居爺がヒーロー面か？ いいぜ、その顔の傷、倍にして」

「待つんだ、バトナス」

それを挑発と受け取ったのか、ずいっと戦おうと前に出るバトナスを、フェイアンは即座に制していた。

隠すつもりもなく不満げに苛立ちの表情を見せるバトナス。だが当のフェイアンはあくまで冷静さを失わず、彼を窘めるが如く言う。

「今回は退くでしょう。“竜帝”と戦うのが僕らの目的じゃないだろっ？」

「そりゃあそうだが……。でもよお」

「まあ後の障害になるなら消してもいいけど、その労力に見合う成果かなとね。何せ相手は引退している身とはいえ“七星”クラス。そう易々と倒れる相手じゃない」

それに……と、フェイアンは続けた。

ちらと横目の視線を寄越した先では傀儡兵がものの見事に全滅し、そんな粉微塵になつて

再生も不可能になつた彼らをつんつんと突付いているエクリレーヌの姿がある。

「連れて来た人形達もすっかりこの通りだ。いくら何度でも替えが効くとはいえ、無駄に浪費しながら戦うというのは割に合わないし僕のポリシーに反する」

「けっ。またその手の話かよ。ま、倒すに多少骨の折れる相手なのは認めるがな……」

クラウドはまだ剣の切っ先を向けて静かに睨みを利かせ続けている。ジーク達も揃って身

構え、徹底的に抗う意思を曲げていない。

「……チツ。どいつもこいつも」

バトナスは眉根をしかめて悪態よろしく舌打ちをした。

「でもいいのかよ？ 三本まだ残ってるぞ？」

「仕方ないさ。ここでまた0本にさせられるよりはマシだろう？」

それに、残りはまた機会

を作れてしまえばいいだけの事……」

言って、フェイアンが舐めるようにジークを見遣った。

勿論ジークも皆も渡すつもりなどなかった。握り締めた二刀を、

辛うじて取り戻した脇差

をもう二度と離さないようにぎゅっと力強く握り締める。

「……今日の所は退散致しましょう。でも僕らはまた訪れます。ジーク・レノヴィン。全て

は君の英断に掛かっている。……その剣は、本来君達が持つべきも

のではないのだから」

バサリとマントと翻してそう言い残すフェイアン達。その言動と

直後の行動に、ジーク達

やクラウドが追い継ろうとした。

だが次の瞬間、フェイアン達をどす黒いオーラが包み込む。

瘴気だった。反射的にジーク達は駆け出そうとした足を止め、そ

れらを吸い込まないよう

に口元を押さえて飛び退かざるを得ない。

「それではごきげんよう。愚かなる邁進者の諸君」

そして、集束する瘴気の渦と共に瞬く間に消えたフェイアン

“結社”らの痕跡。

辺りは急にしんとなった。ただ村の奥で上がっている火の手の音

だけが聞こえてくる。

目の前には交戦でことごとく抉り取られた地面が広がっている。

「……った」

「？ 兄、さん……？」

「盗られちまった。母さん達の、刀が……」

『……………』

ぐらりとその場に崩れ落ちて悔しさに声を漏らす兄と、そんな吐露に返す言葉さえ見つけられない弟や仲間達と。

蹂躪と、嘲笑の跡。

告白の夜は、そんな圧倒的な闖入者らによってズタズタにされてしまっていて。

「 本当に行くのね？」

それから数日、ジーク達は滞在予定を延長し村の修復の手伝いに奔走した。

家屋の損害は決して少なくなかったが、犠牲者が一人も出なかったのは何よりもクラウス

とリュカが逸早く“結社”の軍勢に気付いて村の皆を避難させていたお蔭に他ならない。

そして事件の大きさ故に、村人達に真実を隠す事はできなかった。意を決してシノブ シノ・スメラギらによって告白される彼女

達の出自や、それが故に息子達が“結社”に狙われていることを諸々と。

だが……村人達はそれを理由に彼女らを爪弾きにする事はしなかった。

当然だったのかもしれない。ずっと秘密を隠されていたショックも、他ならぬ彼女自身の

口から打ち明けられ、且つ自分達を必死になって助け出してさえくれた。

何よりも、二十年近く村唯一の医師として自分達の身も心も癒し続けてくれた彼女に、今

更倦厭の念を抱く者は誰一人としていなかっただのである。

「ああ……。皆と話し合つて決めたことだからな」

一通り村の修復が済んだ、その翌朝。

ジーク達はアウツベルツへの帰途に就こうとしていた。

村の入口に立つ一行を、シノブを始めとした村の面々が見送りに来てくれている。

「……奴らから、六華を取り戻す。あれは母さん達が守ってきたものだ。それに俺が油断し

ていた所為でもあるしな。このままやられっ放しで済ませる気は毛頭ねえよ」

六本から三本になってしまった愛刀らをそつと撫でつつ、ジークは言った。

仲間達と共に決めたこと。それは護皇六華の奪還 即ち“結社

”との全面対決。

その意思までを否定するつもりはないし、できないだろう。

それでもやはり。母は心配そうな様子で息子達を見遣っている。

「でも、一体どうやって……」

「簡単なこつた。皇国トナシに行く。元々はあそこの国宝だつたんだろ？

連中が六華を狙う理由

がイマイチ分からない以上、一番六華に近い場所の筈だ」

「それに……僕達にとつては血筋の故郷ふるさとでもあるからね」

でも。そう呟くかのようにシノブはぱくと口を開けて閉じ、一度静かに目を瞑つた。

決意は昨夜までの内に聞かされた。それでも今も躊躇いは残る。

元はと言えば、自分があ

の日々から逃げ続けてきた所為だというのに……。

「……分かつたわ。でも、絶対無茶はしないで」

そつと瞼を開いて、シノブは言った。

頷く息子達。二人を護るように囲むクランの面々。彼らに彼女は深々と頭を下げる。

「リン、イセルナさん、クランの皆さん。どうか息子達を……よろしく願います」

「勿論ですわ。責任を以って、お預かりします」

「ま、皇子云々以前にジークもアルスも俺達の仲間だからよ。言われずともって奴でさあ」

「……頭を上げてください。御安心を。私もこの一命を賭して御守り致します」

そして兄弟を爪弾きにしなないと決めたのは、何も村人達だけではなくて。

慈愛、同朋意識、友情、或いは思慕や忠誠のそれ。

仲間達のそれぞれの快諾に、ジークとアルスは言葉少なく気恥ずかしそうにしている。

「……。そろそろ行こうぜ？ このままじゃあ、頭を下げ合い続けるみたいで敵わねえや」

わざとらしく視線を逸らしつつのそんな一言。

それが、一行の出立の合図となった。

「気を付けてね〜！」

「……常に冷静でいる。お前達の命は、もうお前達だけのものではない」

シノブやクラウド、村の皆が見送る中、ジーク達は一步また一步と村の敷地の外へと踏み

出し、来た道を戻っていく。時折振り返って皆に振り返りつつ、夕方ぶりの、しかし非常に

濃い帰省 その故郷の全てに惜別の手を振る。

(待つてるよ……。絶対に、取り戻してやるからな……)

半分を奪われ、その物足りなさや寂しさを奮起に変えながらジークは決意を新たにする。

横目で見遣ってみた弟とその持ち霊も、同伴する仲間達も想いは同じ。皆コクリと小さく

頷き返してくれる。

一つの旅が終わりを告げ、一つの旅が始まるうとしている。  
道をゆくジーク達を、静かな朝の光が照らしていた。

アウルベルツ  
《梟響の街》

編：了《》

そこは、地上の何処とも形容しがたい場所だった。

一見すると仄暗く、しかし視界全体に強烈に飛び込んでくるもの。刻一刻、淡々とその色彩を変え続けている光の柱だった。……いや、厳密には非常に高濃

度のマナの流れストリームであるらしい。

それらが縦横無尽に複雑に入り組み、遙か天上へ、或いは底知れぬ深淵へと延びている。

ヒトの営み、有象無象な雑踏のノイズ。

それらとは明らかに一線を画す空間、静謐な世界の拡張。

『そうか。元・七星が潜んでいたとはな』

そんな中に彼はいた。

青紫のマントを纏った気障な青年・フェイアン。

隆々とした体躯を持った荒々しい大男・バトナス。

継ぎ接ぎだらけのパペットを抱いた少女・エクリレーヌ。

彼らは点在する分厚い硝子のような足場の上で、その静かに響いてくる声に跪いて耳を傾けている。

「申し訳ありません。よもやあのような伏兵だとは斥候役の兵だけでは把握できず……」

『構わぬ。少なくとも六振りの内半分を回収できたのだ。上々とするがよい』

「はっ……」

そんな低頭するフェイアン達に相對するのは、巨大な光球だった。マナの束が支柱の如く周囲を巡る中に鎮座するようにそれは中空に浮かんでおり、淡い紫

の光を揺らめかせながら静かに瞬きつつ、一人の男性 耳にする限りは老年らしき 声



を発している。

「ですが、どうします？ もう一度体勢を整え直して残りを奪取に向かいますか？ 今

度こそ邪魔な奴らは全員ぶっ潰して」

『その必要はない。目的は護皇六華であってそれを所有している者達ではないのだぞ』

「……す、すみません」

「そーだよ？ “教主”様の言う通り。バトちゃんはいつも突っ走っちゃうんだもん」

「ぬう。任務ほつたらかして遊ぶような奴に……あぁっ、止めだ止め！ 埒が明かねえ」

予期せず退く形になったことが気に入らないままだったのだろう。バトナスは光球の主に

向かってそう進言しようとするが、彼はその言葉を遮り静かに諫めた。

バトナスのような荒々しい好戦者すらも従える者。

その光球の主 “教主”は暫しやり取りを交わすバトナスらを無言で眺めているかのようにも見える。

『……ところで、レノヴィン一行のその後はどうなっている？』

「はい。目下残存の兵で追尾させておりますが、どうやら皇国トナシへ向かうつもりようです」

「らしいな。でもそうになると色々面倒だぜ？ あっちは……」

『うむ。護皇六華の出所に手掛かりを求めるつもりなのであるが、そうになると我らの務めに支障を来すやもしれぬ』

「ですよねえ。でも生憎、俺達のところには今充分な人形がいませんぜ？ 竜帝の野郎に……」

そりもっていかれちまったんで……」

バトナスがごちるのを合図にするように、フェイアン達は暫し黙

り込んだ。

しんと静謐な空間にマナの色彩が変遷する。三人は目して漂う“教主”の応答を待つようにしてやや上目遣いに視線を送る。

「……ルギス。オートマタ兵の生産状況はどうなっている？」

「はいですねエ。現在発注数のおよそ五割になっておりますよオ？」  
すると次の瞬間、“教主”のそんな問い掛けを待っていたかのようにつつと薄暗さの中から一人の人影が現れて答えた。

痩せぎすの長身に撫で付けた褪せた金髪。ヨレヨレの白衣を引っかけ、分厚い眼鏡の眼光を怪しく光らせて笑うその声色は「奇人」のそれと言って差し支えないだろう。

ふへへと、不気味な引き攣り笑い。

そんな彼・ルギスにバトナスが片眉を若干しかめつつ悪態をつく。  
「まだ半分なのかよ。もつと早く用意できねえのか？ “博士”の称号は飾りかよ？」

「はははア、あまり無茶を言わないでくれたまエ。いくら無尽蔵に製造可能であるとはいえ  
被造人もまた魔導の産物なのだよオ。これでもラインをフル稼働させているのだがねエ」

「……つまり、まだバトナスの言ったような兵力に物を言わせて強襲するという手は使えないと考えた方がいいね」

「んー。何なら他の連中から分けて貰うか？」  
「冗談を。そんな真似、スマートじゃないじゃないか。任務といえど常に優雅に、だよ？」

フェイアンが気障ったらしく髪を撫でて言ってみせるのを、バトナスは横目で鼻で笑っていた。その間にも、時折ルギスは何やら腕に巻いた端末を操作して

いる。

そしてそんないがみ合う二人を制するかのようになり、やがて“教主”は静かに告げた。

『そうだな。できる限り各方面での計画に綻びが出るのは避けるべきだろう』

フェイアン達のはたと彼に向き直り、低頭してその言葉を受ける。静かに濃淡と共に瞬く紫の光球。

数拍の間を置いて、

『使徒フェイアン、バトナス、エクリレーヌ。それでは改めて命じる。レノヴィン一行から

の残り三本の回収を図り、その行動を阻害せよ。併行して皇国方面トナシの“使徒”らと合流し此

度の計画の成就を図るのだ』

厳粛な声色で告げられる“教主”の命。

「はっ」「了解です」「任せて〜」

フェイアン達は更なる低頭を以ってその指令を承っていた。

同じく数拍、深々と下げた頭を垂れると、三人は勢いよく立ち上がり出立しようとする。

「そうだ。エクリレーヌ」

「？ な〜に？」

だが颯爽と踵を返そうとしたちようどその時、フェイアンはふと何かを思い巡らせたかのようになり微笑むと、

「……ちよつと君には別な“お遣い”を頼みたいんだけど、いいかな？」

そうこのパペットを抱いた魔なる幼女にそんな言葉を向けたのだ。つた。

初め、皆が見せた反応は紛れもない驚愕や当惑のそれだった。

無理もない。まさか帰省から戻ってきた冒険者仲間の兄弟が一国の皇子だったなんて土産を誰が予想していただろう。

「……ほ、ほほ、本当に本当なのか？」

「お前らがお、王子様だなんて……」

サンフェルノを発ってほぼ一日。ジーク達はアウルベルツのホームに帰還すると、すぐに全団員を宿舎のロビーに集めて明らかになった事実の全てを話して聞かせていた。

「……ああ。わざわざホラを吹く為に呼び出すと思うか？」

予想できていた反応とはいえ、どうにも恥ずかしいというか申し訳ないというか……。

おずおずと仲間達から問い返され、当のジークはそう何処か他人事のようにぶっきらぼうに呟きつつ、ポリポリと頬を搔いて視線をそれとなく逸らしてしまっている。

「そ、それもそうだよなあ。いやあ……びっくりだぜ。まさかジークが」

「おいおい。この場合“ジーク様”とか皇子とかなんじゃね？ タメ呼びしていいのか？」

そんな当人の態度もあって、団員らは互いにあれこれと言い合いつつ困惑を多く混じらせた表情を見せる者が殆どだった。

「あ、その事なんですけど。僕達のこととは今まで通りに接して下さいとありがたいです。正直言って僕達もまだ全然実感がなくて……」

とはいえ、このままではお互い恐縮し合うままになってしまふ。  
アルスは苦笑交じりで、そう皆の緊張を解すように微笑んでペコと頭を下げて言った。

「そうだな。私からも頼む。皆には協力して欲しくて打ち明けたということもある。周囲の

他の者達に不審がられない為にも、今後ともこれまで通りにしてくれると助かる」

「……まあ、そういう事なら」

「りよ、了解ツス」

加えてリンファ　元・皇国近衛隊の隊士からもそう請われれば否とは言えない。

団員らはまだぎこちなさが抜け切れなかったものの、互いに顔を見合わせると小さく頷い

てくれた。それに併せて皆の真剣な表情も少しずついつもの“仲間”に対する気安さへと変わっていく見える。

「んじゃあ、ま。改めて。お帰りなさいです。団長、皆」

「こっちは特段異常はありませんでしたよ」

「そう……。ありがとう。ご苦労さま」

神妙な話はこちらまで、とでもいった所か。

場の空気を切り替えるように団員の一人が言うと、一同がピシッと即席の敬礼で以ってそ

う留守中の報告へと代えた。

イセルナがフツと笑い、ダン以下クランの中核メンバーらも互いに顔を見合わせてようや

く人心地といった感じで静かな安堵の息をついている。

「……ふふつ。貴方達もいい仲間おともたちを持ったじゃない」

そんな中でまた一人、ジーク達に新たな仲間が増えていた。

サンフェルノ村の教練場の教師にして、レノヴィン兄弟とは家族ぐるみの付き合い、更に

アルスにとっては魔導の師でもある竜族ドラグネスの女性・リュカである。

少々弄くるように静かに微笑んでみせる彼女。

だが、対するジークの表情はむすっとした、気の進まない表情のままだ。

「……なあ、本当に俺達について来るつもりかよ？ まあホームにまでこうして来てるんだ

からその気なんだろうけど」

「分かっているならよろしい。嫌だと言ってても駄目よ？ シノブさんやお父さん、皆から

頼まれてるんだから。これから色々大変だろうから、二人の事宜しくねって」

「でもなあ。旅行じゃねえんだぞ？ 冒険者でもねえリュカ姉を連れてくのは……」

「兄さんは先生が苦手なだけじゃない。それに僕だって厳密には冒険者じゃないよ？」

「……」

要するにお目付け役といった所か。

村の代表として同行する。そう自分達に言って来たのはまだ村の修復作業が途中だった頃

だった。夕食の席に珍しく厭世的なクラウド　リュカの父であり、ジークの剣の師からの

招待があったと思えばそんな申し出がついてきたのである。

確かに幼い頃から勉学や諸々のことを教えて貰ってきた相手だ。

何より魔導師としての力

量は確かなものがある。これからの旅の中、戦力としては申し分ない……のだが。

（リュカ姉は俺の事を何かにつけガキ扱いするからなあ。なんつか、やりにくい……）

個人的には幼い頃からの諸々を知られている故のそんな苦手意識じみたものがある。

もどかしいような、こそばゆいような。

「……。つたく、分かった。好きにしろよ……」

ジークはついそうぞんざいな言い方で呟くと、ため息混じりに髪を搔く。

「ええと、それでジーク。今度はその」

「ゴゴリッ力だっけ？ お前の持ってたあの剣。あれを取り返しに行くんだよな？」

「ああ。このままやられっ放しじゃいらねえからな」

そうしていると、団員らが話を次の段階に振ってきた。

その声色や様子は先程よりもずっと気楽　いつも通り“仲間”に接するそれに変わっている。

「連中の目的が何かは知らねえが、あれは母さん達の刀だ。何が何でも取り戻す」

理解ある仲間達でよかった。

そんな事は恥ずかしくてとても口にできないが、ジークは代わりにこれからの方針について、そう“結社”への対抗心を吐露するとギリツと拳を握り締めた。

「にしても皇国トナンねえ。現状、東方随一の強国だな」

「で、ジークやリンさんみたいな女傑族アマソネスの国でもある、と」

次なる目的地、トナン皇国。

東方のトナン大陸群一帯を領有し、豊かな水と緑を湛えるアマソネスの民族国家である。

古くから良質の傭兵である彼女らの出稼ぎを主な収益源としていたが、アズサ皇　レノ

ヴイン兄弟の大伯母の代になってからは、所謂“開拓派”　開放改革的な政治手腕で以つ

てその国力を強化していると聞く。

ロビーのテーブルの上に地図を広げて、ジーク達は各々がそんな一般的な今日の皇国につ

いての概要を脳裏に再生しつつ、暫し黙り込んだ。

“結社”に奪われた残り三本の護皇六華<sup>しゅくわうろくか</sup>。

少なくとも出元である此処なら何か分かるのではないか？ そう踏んでいるのだが……。

「でも、大挙して皆で潜入するのは拙いでしょうね」

「だろうな。“結社”の方も俺達がこう来ることは予想の範囲内だろうしな」

イセルナとダン。クランの代表二人が最初に口を開いた。

リンファやハロルド、シフォン、中核メンバー以下々々もその見立てには賛成のようだ。

皆一様にコクリと首を縦に振って二人を見遣っている。

「何より、連中はこっちの情報はとづくに把握してる筈だ。ホームを丸裸にしたらそれこそ

奴らに攻め込まれちまう可能性が高い。……だから向こうには、人数を絞って向かう」

「賢明な判断だね。じゃあその振り分けはどうする？」

「ん。イセルナ、お前は残って皆を指揮してってくれるか？ あっちでの代表は俺が務める。

で、連れて行くのはジークに先生さん」

「あ、あのっ。僕も行きます！」

結社の動きも気になる。

だが早速メンバーの選定をダンを中心に話し合い始めると、不意にアルスが己の内気を振

り払うように声を張り上げ手を挙げた。

その拳手に、ダンら一同は思わず目を遣ったのだが。

「……駄目だ。お前はここに残れ」

代わりに答えた　その志願を却下したのは、他ならぬジークだった。

「どうして！？　僕だって兄さんと同じトナンの血を……」

堪らずアルスは両手を握り締めて叫んでいた。



少なくとも彼自身は同行するものだとはかり思っていたのかもしれない。

「足手まといだ。俺達は旅行に行くんじゃねえんだぞ」

しかしジークの眼は一切の妥協を許さない拒絶だった。

その鬼気迫る様子は左右にいた団員らをビクリと心持ち退かせるほど。

それでも尚「でも……！」と食い下がろうとするアルスト、背後で漂いつつ眉根を寄せているエトナを睨むように見返すと、ジークは言い放つ。

「これからの旅は間違いないく“結社”が邪魔をしてくる筈だ。自分の身を守れなきゃきつと

死ぬぞ？ お前に、他人を殺す用意があるのか？」

「ッ……。ぼ、僕は……」

アルスの声色が震え始めていた。

それは何も覚悟を問われて戸惑っているからではないのだろう。

その言葉がかつて兄が犯

さざるを得なかったあの日のことを指していると、すぐに気付いたからだった。

お前は“こつち”に来るんじゃねえよ。

兄はそう自身の古傷を抉りながらも自分の同行を諫めようとしている。その、目の前の大

きな心の壁に震えて。

「お前はホームに残ってる。お前は勉強さえしておけばいいんだ。

……いいな？」

「……。うん……」

暫し睨み合った（実際は一方的にジークが、だったのだが）後、アルスは折れていた。

しゅんと大きく気落ちしたように肩を落とし、横目で強い眼差しを向け続けている兄を――

警すると、とぼとぼとその場を後にしていつてしまふ。

そんな兄弟の、言い争いじみたやり取りに視線を往復させていたエトナも、少し遅れてその後についてゆく。

「……。ジーク、少し言い過ぎじゃないか？」

「そうだけ。いくらアルスを巻き込みたくないからといってもよお……」

後ろ姿がロビーの向こうに消えてしまってから、シフォンやダン、団員らは少々気まずい

と、おずおずとした声色で遠回しな諫めの言葉を掛けていた。

「……。あいつは、あくまで学生なんだよ。俺達みたいに危ない橋を渡せられるかっつての」

だがジークはそんな仲間達の言葉を素直に聞くことはしなかった。ふんと小さく息をつくとき、あらぬ方向を向いて上着のポケットに両手を突っ込むと呟く。

「もしあいつの“理由”が俺の予想通りなら、尚の事だろうが……」  
殆ど彼自身にしか聞こえない程の、小さな声で。

「……………」

ふらふらと部屋に戻ったアルスはどうつとベッドに身を投げた。

仰向けから見える天井の模様をぼんやりと見つめながら、アルスはじわじわと込み上げて

くる悔しさのような、哀しさのような想いに胸を締め付けられる気がした。

「アルス、大丈夫……？」

そんな彼の様子を心配して、エトナはふよふよと傍らで漂っている。

「……………うん。僕なら、平気」

正直言つとそんな事はないのだが、それでもアルスはフツと無理に彼女に微笑んでみせる

と答える。いや、むしろ自分を鎮める為の言葉だったのかもしれない

い。

「嘘。そんなにぐったりした顔してよく言うよ」

だが、対するエトナの方はそんな相棒ほど相手への気遣いを払うつもりはなさそうだった。ずいっと心なし至近距離に詰め寄ると、彼女は苛立ちを吐くように言う。

「ジークもあんな言い方することないじゃない。いくらアルスを巻き込みたくないからって  
あんまりだよ」

「……。でも兄さんの言っていたことは間違っていないよ。僕はあくまでアカデミーの学生であって冒険者じゃない。魔導は使えても、僕らは誰かを傷付ける為に学んでいるんじゃないんだから」

「それはそうだけど……。ぬうう、釈然としないなあ」

アルスはあくまで冷静に 諦観気味に淡々と言い聞かせたが、それでもエトナは不服な表情のままだった。

自分の気持ちに素直である彼女に少なからぬ羨ましさ覚えながらも、アルスは同時に理屈が優先しがちな自分には中々真似のできないことだという理解も持ち合わせていた。

同時併行的な思考、或いは感情。

そんな諸々をひっくるめて押し込めるようにもう一度フツと苦笑交じりの微笑を浮かべる

と、アルスはぼんやりと仰向けの視線を真っ直ぐに遣り直す。

（エトナの言うように、間違いなく兄さんは僕らを巻き込みたくないんだろっな……）

分からない訳ではない。

これまでは仕掛けられる側だったが、ある意味今後はこちらから“結社”との接点を作っ

ていくことになる。奴らの目的　そもそも聖浄器を手に入れることが彼らにとって何の得になるのか　がはつきりしないとはいえ、兄達は護皇六華を奪い合う関係になるうとしてい  
るのだ。だとすれば、少なからず“結社”との対立は今後避けられなくなるだろう。

そんな時、果たして自分にどれだけの事ができるのか。

サンフェルノで彼らが襲撃を掛けてきた時ですら、自分はただ皆が追い詰められていくのを見てのことしかできなかった。幸いクラウドさんや先生が加勢に来てくれて難を逃れた  
とはいえ、二度目三度目の保障はない。

足手まとい。

兄は自分を押し留める為に敢えてああいった強い言い方をしたのだろうが、少なくともその指摘は否めない事実でもある。

“皆を救う為に魔導を身につける”　目標自体は合致しているが、お世辞にも自分がその理想に到達できているとは思えない。だからこそあの場で自分は反論できなかったのだ。

(でも……)

もぞもぞと。アルスは大きいため息をつきながら数度身をよじらせた。

視界は天井からベッドの横の壁に変わる。心配そうに漂って見守ってくれているエトナの視線を背中にひしひしと感じる。

(そうやって、兄さんはまた一人で全部を背負い込もうとするつもりなの……?)

意識するとまたギリツと痛むかのような胸元を掻き抱いて。

アルスはそのまま静かに目を閉じ、暫しの眠りに就き始める。

「よし。それじゃあ、このメンバーでいいな？」  
一方、ロビーのジーク達は皇国トナンに赴くメンバーの選定を終えようとしていた。

当地への代表役を買って出たダンを筆頭にして、彼は皆に了承を取りつけている。

話し合いの結果、トナンに向かうと決まったのはジーク、リンファ、リユカ、マーフィ父  
娘、サフレとマルタ、レナ、ステラの九人。

イセルナ達残りの面々はホームに残り、適宜 サンフェルノ（厳密にはシノブラ）への  
連絡役などをこなして留守を守ることになった。

既にダンが述べている通り、クランを“結社”を襲ってくるかもしれない。その備え。

そしてこの街に居を構えている冒険者クランの一つとして、長く  
営業を疎かにする訳にも  
いかないという事情もあつたりもする。

（九人、か……）

正直言えば、自分達が束になつてもあの魔人メアの連中に歯が立たないかもしれないのに戦力を分散させてしまうのはどうなのだろうという思いはあつた。

しかし実際問題として、サンフェルノでイセルナとダンというクランの二強が彼らに押し  
負けた姿を目の当たりにした手前、ジークの心の中の天秤は『できるだけ危ない目に遭う仲間  
間は連れて行かない』という方向へと大きく振れている。

「……なあ。レナ、ステラ。お前ら本当に来るつもりかよ」  
だからこそ、ジークは気乗りしないといった表情かおで振り返っていた。

私達もメンバーに加わる。

そう志願してきた鳥翼族と眞法族の少女達。

ウィング・レイスウィザード

正直言えば二人は今まで多くが裏方だった。

だからこそ、ジークは彼女達は弟と同じくホームという拠点の中で守られていて欲しいと思っただが……。

「うん。一緒に行くよ。私達もジークの力になるって決めたんだから」

「……だ、駄目ですか？」

二人の意気込みはどうやら思いの外固いようだ。

何だかすっかり肝の据わってきたメアのステラと、断われば今にもしくしくと泣きそうな顔で上目遣いに見上げてくるレナ。

ジークは「うっ」と小さな声を漏らし動揺をひた隠しにしようとしつつ、どうにもバツが悪く視線を逸らしてしまう。

「ア、アルスにも言ったる？ 間違いなくこの旅は危ないものになるんだ。そんな所に女を

ホイホイ連れてくのはなあ……」

「大丈夫。身を守るくらい力なら持つてるつもりだよ。それに魔<sup>マ</sup>人の私がいれば途中で魔<sup>マ</sup>

獣に出くわしても無駄に戦わずに済むし」

「危ないからこそです。皆さんがもし怪我をしても、私がいればすぐ治療もできます」

「……でもなあ」

それでも二人はそれぞれにそうアピール（？）をしてくるものだから余計に扱いづらい。

途中で耳に「あれ？ これってもしかして女の子扱い？」とはたと気付いて呟くステラや

「ボクだって女なのに……」とぼやくミアの声が届いていたが、殆ど直感に近い判断でその

辺りには突っ込まないことにする。

「いいんじゃないかな？ 実際あの“結社”のメア達と再び戦う事になるかもしれないし、二人の力があつて損することはないだろう。……それに、こう見えてうちの娘は一度決めたら結構頑固だしね」

「……養父<sup>ちちおや</sup>らしからぬ放任ツスね」

結局、ハロルドのその一言で二人の同行は容認される形となっていた。

ジークは苦笑交じりにため息をついたが、父親公認とされれば口を挟む訳にもいかない。

少しだけむくれたレナだったが、次の瞬間には普段の穏やかさを取り戻し、ステラと共にハロルドに小さく頷いている。

「……。ジーク」

そうしていると、今度はシフォン 留守番側に回ることになった友が口を開いてきた。

「やっぱり僕も同行した方がいいんじゃないか？ ハロルドの言うように“結社”の手の者と出くわす可能性は高い訳だし、そっちの戦力を集中させた方がまだ」

「いや、お前は団長達と残っててくれ。奴らは俺達じゃなくここを狙ってくる可能性だつてあるんだ。その時……俺が戻ってくるまで、アルスを誰が守るんだ？」

思案顔になっていた彼に、ジークは向き直るとそう言う。

敢えてクランの中核メンバーであるこの友を残して貰うように頼んだのは他でもない。自分がない間の弟の身を案じてこそだったからだ。

「改めて頼む。俺達がトナンに行ってる間、アルスとエトナを護っ

てやってくれ。別に絶対

隠れないといけないってことはねえけど、できるだけこつそりと

静かに頭を下げて、再度の懇願。

始めから護衛ですと言ってしまったえば、いくら面識のある仲間相手でもアルスが気を揉むで

あるうことは目に見えている。あいつはそういう奴だ。

だからこそ信頼のおける友にそのポストに居て貰いたかった。…

…随分と、手前勝手な頼

みではあるとの自覚はあっても。それでも。

「……分かった。アルス君とエトナの事は任せておいてくれ」

「ああ。……ありがとよ」

そんな友の姿を見て、シフォンは頷いてくれた。

物腰穏やかな友の声色。ジークもまた礼を言々と小さく苦笑して

真面目な己を濁す。

「話はまとまったみたいだな」

「ええ。ホームは私達に任せておいて。ダン？」

「おうよ。じゃあ次は具体的な日程だな」

そしてイセルナ達も頷く中で、ダンは再び皆に語り出した。

「サンフェルノから帰って来てすぐにこう言うのもなんだが、トナ

ンへの出発は極力早い方

がいいだろう。既に村の修復作業を手伝った分、奴らは体勢を整え直している筈だ」

「そうですね。だとすれば、明日にでも飛行艇の予約を取らないと

……」

だがリユカがその言葉に頷きそう返すと、ジーク達は思わず押し黙ってしまった。

リユカは知らないのだ。ジーク達がサンフェルノへ向かう鉄道を利用していた最中、他な

らぬ“結社”からの襲撃を受けたことを。

ジークも、また仲間達も同じその時の映像が脳裏に浮かんだのだ



ろう。

互いに顔を見合わせつつも、さて誰が話すかといった感じで暫しの躊躇いをみせている。

「……リユカ姉。その正攻法はマズいんだ」

「？ でも大陸を渡るっていうと普通飛行艇に乗るものでしょう？」  
「まあそうなんだけども……。あのさ、これは母さん達を心配させたくないから言わなかつたんだけど、実は俺達、サンフェルノに行く途中の列車ごと“結社”に襲われてんだよ」

結局その空気の理由を説明はジークが責任を負った。  
そもそも奴らは自分（の持つ六華）を狙っていたのだから。

そう内心で、チクチクと自責の言葉を己に投げながら。

「だから、流石に同じような方法で動くのはマズいと思うんだ。列車は地面の上だったから

こうして生きて戻って来れてるけど、空中で襲われたらそれこそお終いだろ？」

「……。ええ、確かに危険過ぎるわね……」

髪をガシガシと掻きつつの弁。

リユカは最初その告白に驚いたようだったが、すぐに平素の知性で以って状況を把握して

くれたようだった。そっと口元に手を当てながら、彼女は思案をしつつ呟く。

「だとすると、もっと別な方法を探らないといけないけれど……」

「大丈夫。それなら代替案は用意してありますよ。“導きの塔”を使います」

「ミチビキ……？ ああ、あのよく分かんねえ塔か」

しかし既に策は練っていてくれたらしい。

リユカが呟くのに対応するようにして、ダンが言った。ジークもまた、おぼろげなその記憶

を辿りつつも何とか話について来ている。

## 導きの塔。

その起源は遙か太古『神竜王朝』時代に遡り、当時自由に大陸同士を渡る術を持っていなかった人々を見た時の王の命により、世界各地に建立されたという塔型の神殿である。

内部は大規模な空間転移術の設備が整えられており、これにより人々や物資の行き来が可能となった。更に王朝直々の命による建造物という点も相まって地域の祭礼場としても機能していたらしい。

しかし王朝の消滅とその後の帝国時代に飛行艇が発明された事で、その存在価値は大きく削ぎ落とされてしまっており、今日では歴史を物語る遺跡として保存されるかどうか程度の存在というのが現状だ。

「この辺りにもいくつか残っている所があるからな。あそこの転移機能でトナンに飛ぼうと思う。古いからちと不安だが、掛かる時間だけを見れば実際飛行艇よりも早い」

「そうですね。でも大丈夫でしょうか？ 飛行艇を使わずにというのは“結社”側も予想しているかもしれません。だとすれば主だった塔はマークされてる可能性が高いですよ？」

それでもリユカはあくまで冷静な分析だった。数秒目を瞑ってから開き、そうダン達に同じくリスクがある旨を問い返してくる。

「流石は先生さんだ。頭がよく回りなさる。でも、その点は俺達も対策は考えてますよ」

しかし、ダンには既にその点も折り込み済みであったようだ。リユカの聡明さにほうと感心の表情をみせながらも、ニツと口元

に孤を描いて言う。

「そもそもこの話は帰りの列車の中で考えてたことでもあるんですがね。そしたらシフォンが解決策を持つてたんですよ」

「シフォンが？」「それは一体……？」

ジークとリュカが、他の仲間達も顔を見合わせていた。

そんな中で、ダンに促されるようにしてシフォンはコクと頷くと、簡単なことだよ。導きの塔は、何も一般に知られている場所ばかりじゃないってことさ」

そう、何処か遠い眼差しを中空に投げつつ答えたのだった。

13 - (2) セオドア伯

「とまあ、自分達が聞き耳を立てた分はそんな具合です」

アウルベルツ  
梟響の街の一角にあるエイルフィード家の別邸。

その地下室で、伯爵令嬢の護衛　お目付け役を任されている従者二人組はそう専用回線

を用いた導話越しに雇い主への報告を行っていた。

ヒューネス  
人族の密偵・キースは憶音器（ボイスレコーダーのようなもの）を片手に受話筒からブルート

バードの面々が話していた内容を伝え、隣で覗き込んできている相方で巨人族トルの戦士・ゲドとちらと顔を見合わせる。

ブルートバードの面々が遠出していた事は既に把握していた。

しかしその理由と持ち帰ってきたという成果には正直、キースも驚かざるを得なかった。

（まさか、あの兄ちゃんと弟クンがトナンの皇子さまだとはねえ…

…。お嬢も色々やっこしい相手をライバル視しちゃったもんだぜ……）

ただ彼自身、その事実には驚くというよりはむしろ、自分の周りによからぬ事が起きるらしいという危惧　いや面倒臭さの念が強かったのだろう。

だからこそ彼は、小さく嘆息をつきながらも淡々と報告を済ませられたのだとも言える。

『……そうか。あいつらがトナンに。血は、争えないんだな……』  
対して導話の向こう、エイルフィード伯爵・セドの声色は硬かった。

まるで望まない予想が的中してしまったかのような、そんなじわりとした嘆きがそこから読み取れる。

「……伯爵。いい加減、そろそろ自分達にも話してくれませんかね？」

そして互いにそんな心持ちの温度差があったからこそ、

「何でまたブルートバードの連中　いや、レノヴィン兄弟の事をそこまで自分らに追わせ

るんです？　お嬢が弟の方を目の仇にというか、勝手にライバル視しているからって訳でもないんでしょう？」

「やはり“結社”との関わりですか……？　私どもがクラン近くの夜闇であの時のオート

マタ達を見つけたのも、奴らが彼らを狙っているからに他なりません  
まい」

キースとゲドは問い質せていた。

以前より　シンシアがアルスと私闘を演じてみせた旨を報告をしてから　この雇い主

が折に触れ、彼ら兄弟とその仲間達の同行を自分達に調べさせ、報告させる、その訳を。

『……』

暫くセドは黙っていた。

躊躇いか、或いはそれよりも先の算段か。

「……まあこちらら雇われの身です。答えたくないと言ふのなら無理強いはしませんが。

ただ申し付けられたこと以上の“始末”もやる羽目になった分、それ相応の対価を貰ったと

してもいいんじゃないかなど。そう思うんですけどね……」

受話筒をずらしゲドの発言も届けられるようにしながら、キースはそう彼の応答を待つ。

『……シンシアには気付かれてないな？』

「ええ。お嬢なら今風呂に入ってますよ。女中たちにもそれとなく時間を稼いでおいてくれ

と言つてありますし、暫くは戻つてこないかと』  
『そうか』

最初、セドが訊いてきたのはそんな確認だった。

それは即ち娘に聞かれるのは宜しくない事情なのだろう。しかしそれは予想できていた事

でもある。だからこそ自分もホーさんも細心の注意を払つて、今までこつそりと密命をこなしてきたのだ。

『……簡単な事さ。シノブの言う“仲間”達の中には、俺も含まれてるんだよ』

受話筒を手にしたキースが、隣で聞き耳を立てるゲドが静かに目を見開いていた。

次いでゆつくりと互いの顔を見遣り、返す言葉のない驚きのままこの雇い主の告白の続きに耳を傾ける。

『まだ爵位を継ぐ前の話だ。俺は冒険者をやっていた。社会勉強つていう口実だったが、実

際は堅苦しい貴族の社交界が嫌で出奔していた。まあそれでも柵や何やらがあるのは何処に行つても同じではあるんだがな。それに気付くにはまだ青かつたつてことさ。……で、ガキ

の頃から教え込まれた魔導の力で気の向くまま魔獣やらならず者やらをぶつ飛ばし、依頼を

こなす、そんな毎日を送っていた中で出会つたのがコーダス・レノヴィン シノブの後の

夫に、ジークとアルスの父親になる男との出会いだった』

導話越しに、部下二人が黙して耳を傾ける気配が分かる。

「面白い奴だったよ。剣の腕は立つ癖に、他は信じられないくらいすっからかんでさ。人の

言うことを簡単に信じ過ぎて何度も痛い目に遭つて。それでも絶対

挫けない変な奴で。終い

には『騙されたのが僕でよかったよ』なんてのたまう、お人好しの大バカ野郎だったんだ。

……だけでもう、その時には俺はあいつを見捨てるなんて考えなくなってた。何だかんだで

あいつのフォローをして、だけど同時に色んな大事なことを教わって……俺達は間違いなく

マラダチ親友になっていたんだ」

普段の回線とは別の受話筒を引つ張り出して耳に当てつつ、セドは一人執務室のデスクに

ゆたりと腰掛け、そう在りし日々をしみじみと思い出していた。

「暫く、俺達は面白おかしくやってたよ。でもある時、転機が訪れた」

「……それがシノ皇女との出会い、ですか」

「そうだ。たまたま俺達は故郷をクーデターで追われたシノブ達と知り合っただんだよ」

つながる過去の記憶。

キースが呟くとセドは静かに頷き、先刻までの懐かしむ声色を神妙なそれに変える。

「その時既に追っ手に何度も襲われて護衛はリン　ホウ・リンフアを含めて数人って状態

にまで追い詰められていた。ま、そんな状況を見て普通は分が悪いと退いちまうもんなんだ

ろうが……そこはお人好しのコーダスだ。あいつは迷うことなく彼女達に手を差し伸べる道

を選んでいた」

「……」

「その後、何が　政治表面的に起こったのかは情報通のお前なら俺よりも詳しいかもな。

俺達仲間は紆余曲折の後、シノブの身分を偽らせることにした。そ

それはあいつ自身の望みでもあったんだがな。力のない自分が国に舞い戻って政情を掻き混ぜるよりも、早く政権を落ち着かせ民の暮らしにできるだけ傷跡を残さないようにしたい……そんなことを言って」

それは。キースは口を開きかけたが、反論をすることはできなかった。

もうあのクーデターからは二十年の歳月が経っている。今更自分が「それは逃げだ」と責めた所でどうにもならないし、そもそもその言葉を向ける相手も違う。

何よりも、導話の向こうの伯爵 かつての当事者の一人が声色の端に漏らす悔しさの念

は、外野の自分の一朝一夕の言葉で慰められるものではないからである。

「結局、シノブは権謀術数に立ち向かうよりも、愛する人との平穩を選んだ。その選択が正しいかどうかは……俺も分からないし、俺が語るべきことじゃない。それでもあいつらの望んだ平穩を認めない奴らはごまんという。……自分の欲の為に、他人を平気で陥れて当然だとするような、下衆どもだ」

セドが空いた片方の拳をギリツと握っていた。

導話越しのキース達にも、その音は微かながら耳に届いてくる。

「……これが俺の理由だよ。どんなに理想があっても、夢があっても、力がなきや有象無象

の悪意に簡単に潰されちまう。だから俺はこうして爵位を継いだ。地道に人脈を築いて味方

と呼べる力も蓄えてきた。……全てはあいつらの為だ。コーダス、シノブ、リン、ハルトや



サラにアイナ、それとクラウスのおっさん。俺はこの権力を仲間達の為に使うと誓って今此処にいる」

暫くの間、セドもキースもゲドも、お互いがじつと黙り込んでいた。

一方は遠い昔に結んだ誓いを、もう一方はその秘め続けた想いをしっかりと受け取るようにして。

重いと思った。だが、それでも。

「……そうですか。まあただ単にくだけた方じゃないとは思ってましたがね」

「ガハハ！ 何という仁義！ 私、感服致しましたぞ！」

一つだけ確かなことが この人には、忠節を尽くすべき価値がある。それは間違いないと思えた。

二人なりの賛辞がこそばゆいのだろう。導話の向こうのセドは暫し返す言葉を口にしあぐねているようだった。

「そんな誇ることもねえさ。ただ俺は俺なりの考えで動いている。それだけだ」

それでも暫し、ポリポリと頬を搔いてから彼は言う。

「……で、だ。これで心置きなく頼める。シンシアのついでって形でも構わねえ。これから

はお前らのその眼を力をあの兄弟にも向けてやってくれ。あいつらは戦友の大事な忘れ形見、

俺にとつても息子みたいなもんなんだ。……頼めるか？」

だからこそ。

「勿論！ その任、喜んでお受け致しましょうぞ！」

「断わる選択肢があると思ってるんですか？ ま、しっかりその分の報酬は貰いますけどね」

請われて、キースとゲドは互いに顔を見合わせて笑って。

13・(3) 皇という手札(カード)

帰省　　というよりもその中で知った多くのことによる疲労が溜まっていたのか、気が付

けばアルスは何時の間にか深い眠りの中に落ちていた。

兄の「お前は残れ」という言葉。

その理由も心情も分からなくなりはなかった。それでも、やはり兄弟として哀しかった。

「……」

結局、異議を認めて貰えることなく夜が明けようとしている。

部屋のカーテンから朝の光が漏れ注いで瞼の裏を、眠気の意識をじわじわと揺さ振っていく

る感覚がする。

のそりと。アルスは眠気眼を擦りつつ寝間着の身体を起こした。

隣の中空では、エトナがいつものように器用に浮かんだまま眠りこけている。

いつも通りだった。

ここに下宿を始めて三ヶ月ほどだというのに人の慣れというのは妙なもので、そんな外の

活気が遠くから耳に届いてくる、朝のゆったりとしたこの静けさが普通に思えるのが何だか

微笑ましくなる。

「エトナ。朝だよ？」

「ううん？　むにゃ……」

今度は自分が相棒エトナを。

しかし彼女はまだ夢の中で舟を漕いでいるらしい。もぞもぞと寝返りを打ち、ただでさえ

薄着な衣装がだらしなく肌蹴る。

(昔はもっとお姉さんって感じだったと思うんだけど……。僕がそ

れだけ成長したって事なのかなあ？)

家族、仲間。そんな親愛の情で以ってそっと目を逸らしつつとそんなことを思う。

時は確実に流れている。始めは故郷の近くに棲む精霊と近所の子供でしかなかった自分達  
の関係も、兄と弟が歩み始めた道も。気付けば、もう「昔」は遠退いてしまっている。

だというのに、兄さんはいつも僕のことを。

「……兄さん。起きてる？」

二段ベッドの上から覗き込んでみる。だが既にそこにジークの姿はなかった。

もう起きているらしい。時間はまだ早朝だが、朝稽古などをこなしている兄にすれば別段  
珍しいことという訳でもない。

「……。僕も起きなきゃ」

むくと覗き込んだ身体を起こして、アルスは一人言い聞かせるように布団から抜け出す。

身支度を済ませ、教材諸々を詰め込んだ鞆を手に部屋を出て手洗い場へ。

だがそこにも兄の姿はなかった。

そこで訊いてみると、居合わせた団員ら曰く。

「ああ。何だかいつにも増して早く出掛けてるみたいだよ」

「団長達もだぜ？ 大方、<sup>トナン</sup>皇国に出発する準備を急いでるんだろうな。 “結社” の連中は待

つてくれないし、早いとこ体勢を整えるべきなのは確かだしな」

「それにしたってジークもああまできつく言うことなかったらうに。ごめんな？ 見かけた

ら俺達からも釘刺しとくから」

既に兄ら出立組がトナンへ向けて動き始めていることを知って。

「……ありがとうございます」

それでもアルスは氣遣つてくれる団員 仲間の皆の優しさが嬉しかった。

自分達兄弟が皇子だと知っても、たとえその場では戸惑いこそはしても、変わらぬ親交を

約束してくれる。振る舞つてくれる。その“壁”の無さに。

「でもお構いなく。僕らなら、大丈夫ですから」

冷水で洗った顔をタオルで拭い終わった後で。

エトナが横で「無理しちゃって……」と小声で呟くのを取えて聞き流しつつ、アルスは彼らに小さく頭を下げると手洗い場を後にする。

「やあ。おはよう、アルス君」

「おはようございます。ハロルドさん」

「昨夜は、眠れたかい？」

「ええ。旅の疲れがあつたみたいで、結構ぐっすり」と

「……そうか。それはよかった」

ホームの食堂を兼ねた酒場にはこれまたいつも通りに団員らが思い思いに席に着き、食事を進め、談笑を交わしていた。

宿舎側の裏口から足を踏み入れ、カウンターの中でいつものように料理を振る舞っている

ハロルドに微笑で挨拶を返して通り過ぎる。厨房内では当番の団員ら数名に加え、エプロン

姿のレナやステラまでもが動き回っており、束ねられた綺麗な金髪と銀髪が揺れている。

今までは魔人<sup>魔法</sup>であることに気兼ねして籠っていたのに……。

皮肉な結果なのかもしれないが、彼女もまた“結社”との対峙の中で精神的な成長を遂げ

つつあるらしい。

「すぐに用意するよ。適当に座っていてくれ」

「はい。お願いします」

そんなクランの“日常”を瞳に映して、アルスは安息を感じている自分に気付かされた。

何処か似ているのだ。サンフェル故郷の皆の、緩くもそれでいて密に結びついた仲間意識とでもいうべきものが。

(何だか、僕まで嬉しくなっちゃうな……)

これもまたいつものやり取り。

アルスはハロルドと厨房の中の面々に肩越しで応えると、空きテーブルに腰掛ける。

「……おまたせ」

すると程なくしてトレイ 二膳手にしているので、一方は彼女自身の分だろう に乗  
せた朝食をミアが運んで来てくれた。

「それと、お弁当……」

「あ、はい。いつもありがとうございます」

そしてそつと一緒に差し出される彼女お手製の弁当。

そういえば気付けばこれも“日常”になっていた。

アルスがにこと微笑んでありがたく受け取ると、ミアはほつと赤く頬を染めて若干俯き

加減になる。だがすぐに「相席、いい？」と呟くように訊いてきたため、当のアルス自身は

そつした挙動にさして注意もせずには勿論と頷いていた。

「いただきます」

「……ます」

何ともなくミアとの相席で始まる朝食。

礼儀正しく手を合わせてから、ちみつとパンを千切って口の中へ。

向かい側に座るミアはそんなアルスの様子を時折ちらちらと見遣りつつ、静かに咀嚼を続

けていた。

緊張。一見すると感情表現に乏しい筈の彼女が、何処かぎこちない。

アルスは気付いていなかったが、傍らでふよふよと浮かぶエトナは僅かに眉間に皺を寄せ

むすつと唇を尖らせていた。そんな二人（と一体）の様子を、レナとステラがこっそりと厨房の奥から覗いている。

「……その。アルスはボクの弁当を食べてて平気？」

そうしていると、ふとミアがそんな事を訊ねてきた。

その彼女の視線の先には、テーブルの脇に置かれたままの先程の弁当包み。

「？ 平気も何も毎回美味しく頂いてますけど……？」

何を妙なことを言っているのだろうか？

アルスはツナ和えのサラダを口の中で咀嚼して飲み込んでから、そう頭に疑問符を浮かべ

て小首を傾げながら答える。

「なら、いいんだけど。アルスが皇子さまなら下手な料理は出せなくなると思って」

「あ……」

少し恥ずかしそうな逡巡を経て、ぼつりと一言。

その言葉でアルスはようやく彼女の意図に合点がいった。

心持ちは分からなくはない。いくら今まで通り接してくれと言われても、そういう所で気を遣わせてしまっていたらしい。

「それは大丈夫ですよ。僕も兄さんも生まれてから今までずっと庶民の暮らしをしてきた訳

です。今更貴族っぽい生活を〜とか言われても合わない気がするんですよねえ。兄さんなら

きつと『堅苦しくてやってらんねえ』とか言っただけで放り投げちゃいます」

だからこそアルスはふふつと穏やかな笑顔で笑っていた。

「それに……僕はミアさんみたいな味付けの方がずっと好みですから。何とかオフクロ

さんの味みたいなきがして」

本当に気を遣うことなんてないんです。そう心から言いたくて。

「……。ありがと……」

ミアは先程よりも一層ボツと顔を赤くして俯いていた。

アルスは「照れなくてもいいのに」とニコニコ。背後ではエトナが半眼を。

故に、当の彼は彼女の赤面するその本心を悟ることはなくて。

「……」

しかし暫しの沈黙の後、ミアは羞恥以外の感情に目を向けたらし  
かった。

再び食事に戻ってから長く間を置いて、彼女は再びぽつと切り出  
す。

「ジークのことは、ごめん」

小さくぺこりと下げられた頭。

アルスが静かに目を丸くしたのにも構わず、彼女は戦友ともが彼に向  
けた邪険さを代わって詫

びていたのだった。

アルスもまたその意図を数拍の後に理解すると、あたふたと両手  
を振って言う。

「い、いいえ。ミアさんが謝ることじゃないですよ。頭を上げて下  
さい。ね？」

「……でも、あれはボクも言い過ぎだと思う。皆もぼやいていた」  
手洗い場での団員らの言葉が蘇った。皆、自分のことを気に掛け  
てくれている。

でもそれが守られているようで嬉しくて……申し訳なくて。

だからアルスほもぞつと居住いを正すと、そつと顔を上げた彼女  
の目を見て言った。



「兄さんが不器用なのは昔からですから。別に僕は怒ってませんよ。……でも、哀しかったかな。もっと頼ってくれてもいいのになって。そんなことは思いませんけど」

苦笑いの中に微笑みを残そうとするアルスに、ミアは一瞬押し黙っていた。

それでも彼の吐露に何か思う所があったのだろう。

暫し目を細めた後、彼女は少し焦点をぼかすような眼をしつつ口を開いていた。

「……ジークは、アルスを失うのが怖いんだと思う」

「僕を、ですか？」

反芻された言葉に、コクリと首肯。彼女は心持ち落とした視線のまま続ける。

「ジークにとつてアルスはかけがえのない弟、肉親だから。だからトナンについて行きたい

と言ってきてても止めさせようとしたんだと思う。頼られるのが嫌だとかじゃなくて、心配の

気持ちが強いんだとボクは思う」

「それは……。ええ……。そうですね。兄さんは昔から僕のことになると心配性でした」

「……ジークは、ボクに似てるから」

「えっ？」

だが途中でその推測は、ミア自身の吐露に変わっていた。

アルスが思わず聞き返す。彼女は一度ちらと彼を見返すと数拍間を置いてから言った。

「ボクのお母さんは、ボクが小さい頃にお父さんと離婚した」

「……。そういえば奥さんの話は聞いたことなかったです」

「元々一般人だったから。冒険者が肌（肌の）に合わなかったんだと思う。だけど、お母さんが家を

出て行くって言って離婚が決まるまでの間、お父さん、凄く悲しそ

うに見えた」

話の繋がりを問う事もできず、アルスはただ耳を傾けることしかできなかった。

淡々と彼女は語るが、幼い頃の彼女自身にとってはとても大きな出来事だったに違いない

と思った。自分だって父や村の仲間達があの日、魔獣によって失われて、それで。

「……だからボクはお父さんと一緒にいる事にした。あんな哀しい背中は嫌だった。少なくともボクが一緒にいれば、お父さんは一人ぼっちじゃないと思った」

「ミアさん……」

つまり失いたくない肉親がいる。その点がジークと自分が似ていると言いたいのだろう。

なるほどとアルスは思った。今まで話してくれなかったから知らなかったとはいえ、彼女

が何だかんだで兄と戦友として共闘している理由がおぼろげだが分かったような気がした。

「皇子さまにお説教なんてとんでもないかもしれないけど。でも覚えておいて欲しい。絶対

に守りたい誰かがいるって、強いけど、弱いのに……。はい」

心を支える理由にもなれば、逆に衝かれると大きな弱点にもなるということ。

アルスは頭の中で整理してそう解釈を整えていた。

だからこそ、ただ兄を邪険だと子ども扱いばかりする奴だと反発しないでやって欲しい。

そう彼女は言いたかったのだろう。

「ミアさん」

故にアルスは言った。

「トナンに行っても、兄さんの事を宜しくお願いします。勿論、ダ

ンさん達も」

フツと笑い、不満を吐くのではなく、小さく頭を垂れて仲間託す言の葉を。

「……うん」

故に対するミアもまた、

「ボクも、ずっと初めからそのつもり」

猫耳をピクリと、数度目を瞬かせて、ややあつて口元に僅かな笑みを描くとそう応える。

その場に居合わせた者全てが驚愕と震撼の中にいた。

場所は貸切られたとある酒場。そこに集まっていたのはアウルベルツを拠点とする冒険者

クランの代表的な頭目、ないし幹部クラスといった面々ばかり。

本来、一度束になれば怠惰な官製の衛兵くらいは軽く圧倒できる彼らの視線が、眼差しが

この時ばかりは大きく見開かれ、或いは凝視の類で細められ、ある一点に集まっている。

「それは本当、なのか……？」

「ええ。嘘を吐く為にこれだけの人数にわざわざ来て貰ったと思う？」

そこに立っていたのはイセルナだった。左右にはダンとリンファも控えている。

面々の動揺は尤もなことでもあった。

何故なら、わざわざイセルナらに大事な話があると呼び出され何事かと集まってみれば、

彼女達ブルートバードがあの“楽園の眼”<sup>エデン</sup>と対立関係になっているというのだ。

それですら 触らぬ神に祟りなしとでもいっべき余計な真似をと思つのに、加えてその

そもそもの対立化の原因が、彼女らが『とある王族を仲間として護

り、匿っている』という

ものであった事から、驚きは容赦なく二段重ねに襲ってくる。

「偽りではないことは私が保証しよう。かつての近衛隊の一人としてな」

言つて、リンファが改めて皆にかざして見せたのは革のホルダーに収められたとある一枚

の紋章。エンブレム トナン皇国王宮近衛隊のものであるという。

冒険者という職業柄故に各国の国旗・文様には皆、多少なりとも知識がある。

ざわざわと小さく、しかし明らかに動揺の気色を濃く滲ませて、この場に集まつた冒険者

らは互いの顔を見合わせて戸惑いの様子を隠せない。

「……確かに以前にお前らが“結社”のアジトを叩いたって話は聞いてたが。まさかなあ」

「しかし、何故俺達にそこまで詳しく話す？ 一体何が目的なんだ？」

「分からねえか？ 薄々勘付いてるとは思っただがな」

「簡単なことよ。皆にも、いざという時には協力して欲しいの。同盟を請つて所かしら」

ダンが、イセルナが戸惑いの中で打ち明けた要請。

だが出席した多くの同業者達は、そのざわめきを強く批難的に変えてぶつけてきた。

「なっ……！ 俺達まで巻き込むつもりか！？」

「今まではそつちの揉め事として手を出さなかったんだぞ？ 相手は“結社”だぞ？ どれ

だけリスクが高いか分かつてんのか！？」

当然といえば当然の反応だったのかもしれない。

たとえ冒険者、荒くれの最前線に立っているといえる彼らにとつても“結社”の持つ異常

性と謎多きしかし確実に強大な力は周知の事であった。そんな連中

と誰が好き好んで巻き込まれたいと思うのか。

一言でいってしまえば、保身。

そもそもお前達ブルートバードの起こした揉め事だろう……？

一挙に批判の声をぶつけてきた面々の抱いた思いは、おおよそんな内容だった。

「ごちゃごちゃうるせえぞ、てめえら。それでも冒険者<sup>フロ</sup>か」  
どよめく面々。

だがそんな彼らをそう一喝の下に鎮めたのは、同じく出席していた蛇尾族<sup>ラミアス</sup>の男性、

バラク・ノイマンその人だった。

「サンドゴディマの“毒蛇”……」

「何でそんなに落ち着いてんだ。こいつらは俺達を巻き添えにしようとしてるんだぞ？」

キリエ、ロスタム、ヒューイの腹心三人と共に場の席の一角に陣取っていたバラクへ面々の視線が集中する。

その威圧感ある丈夫に大半の者らは押し黙ったが、それでも何人かはいい顔をせず心持ち食ってかかろうとする。

だがバラクはふんと口角を吊り上げると、眼をイセルナらに向けて言った。

「ここでイセルナ達を批難して何が変わるってんだよ。分からねえか？ 呼び出されて応じた時点で俺達は一蓮托生なんだよ。こいつらの隠してたでっかい事

実を知っちまったんだからな。……だろう？」

「流石ね、バラク。話が早くて助かるわ」

「はん。そこで褒められてもちつとも嬉しくもねえや」

彼の言う通り、敢えてイセルナらがこの街の同業者ら呼び出し

たのはその時点で策だったのである。秘密の共有。それは言い換えれば“共犯”関係であるとも言える。

「それに、たとえ私達が皆にこのことを話さなくても“結社”の魔の手はそう遠くない先に伸びていた筈よ。……これまで私達は四度、奴らとの交戦をしている。内後半二度は向こう側からの奇襲だった」

「いい加減分かるよな？ もう奴らは確実に俺達を狙いに定めてる。既にホームの場所も、この街のことも把握済みだろう。次は、直接ここに攻め込んでくる可能性が高い」

イセルナから引継ぎ、ダンが言い切ったその言葉に面々が再び大きくざわめいた。

中には現状にまで引き摺った彼女達を語る声や、その王族とやらを掴み出さないのかといった言葉も飛んだが、それでも結局は不毛な言い分に他無からなかった。

仮にその“王族”を爪弾きにしても彼の者を知ってしまった以上、それ以前の状態には戻れないし、そもそも“結社”が攻撃の矛先を引っ込める保証とはならない。

根本的解決では ないのだ。

「ここまで至った不徳についてならいくらでも誹りは受けよう。だがそれを繰り返すだけでは何も変える事はできないとも思う。……あの方々を護り抜く為にも、どうか皆の力を貸して欲しい」

それでもリンファは誠意を尽くした。

深々と頭を下げて場の面々に助力を求めようとする。ワンテンポ

遅れてイセルナとダンも  
そつと頭を垂れる。

「……………」  
先程よりは過激ではなくなってきたものの、それでも面々は戸惑  
っていた。ざわざわと互  
いのクラン、その反応を窺いつつ即座に返答に詰まっている。  
限定された選択だったのだ。

協力を拒み、トナン皇国という東方の強国を遠回しに敵に回すか。  
協力を受け入れ、徒党を組んで“結社”の魔の手に対抗するのか。  
だとすれば、どちらにせよ絶対の「安全策」はないようにも思え  
る。だとすれば後者とい  
う選択で大きな徒党を組めさえすれば、個々のリスクという面では  
前者よりもずつと軽減で  
きるかもしれない。けども、好き好んで“結社”を刺激したくも  
ない。

そんな内心の打算の中で面々は揺れていたのだ。  
「ふん……。面白いじゃねえか」

だが次の瞬間、そんな皆の戸惑いを取りまとめるように呟いたの  
はまたもバラクだった。

テーブルの上に片肘を突き、哄笑。

面々の視線が集まってくる中で、彼は言った。

「どのみち“結社”が何かしらお前らを狙ってくるのは間違いない  
んだらう？ 今は関係な

いと俺達に関わらずとも、長引けばそれだけ奴らの矛先は周りの俺  
達や、或いは街の一般人  
にも飛び火しかねない訳だ。それなら早くに体勢を固めておいた方  
が憂いも断てる」

正論というよりも、個々の利を揺さ振るニュアンスでの言葉。

それ故に面々への説得力は大きかったようだ。彼の言葉を受け、  
クランが一つまた一つと

頷き、協力関係の受諾を示し始める。

(やられたぜ、イセルナ。お前は王族あのみきよつだいすら手札カードにした訳だ)

哄笑の後、バラクは内心で思う。

既に自分達は乗せられた後なのだ。現実的といえは聞こえはいいが、彼女は置かれた状況

を逆に利用して自分達に有利な状態を作ろうと街中の同業者らを集めたのである。

「それに、以前から“結社”の暴れっぷりは尋常じゃない。ここいらで奴らに一泡吹かせら

れば冒険者としての株もぐつと上がるだろうよ」

先程よりも頷くクランの面々がぐつと増えている。

誘導はこんなものか。バラクがちらとイセルナの方へと眼を向けてみると、彼女が小さく

こちらに頷いてみせているのが確認できた。

ありがとう。ご苦労さま。

大方そんな感じの、労いという態の隠したほくそ笑みを。

(はん。やっぱり食えねえ女だぜ、お前はよ……)

バラクはどかっとな椅子に座り直して皆を見渡すと、彼らから承諾の首肯を取り付ける。

「……決まりだな。だがよイセルナ。報酬もくしえものはしっかり貰うぜ？」

そして静かに口角を吊り上げてみせると、彼はそう不敵な表情と共に言った。



「うん……」

鞘から抜き放った愛刀の刀身を陽の光の下ためつすがめつしつつ、ジークは眉根を寄せて小さく唸っている。

場所はアウツベルツの郊外。人気のない空き地の一角だった。

廃材などが詰まれたその場にはジークにサフレ、マルタ、そしてリュカの四人がいる。

「なあ、リュカ姉。これで本当に六華こいつらの封印とやらが解けたのか？ どう見ても普段と大し

て変わらない気がするんだが」

「ええ。でも今は魔導具としての効果を発動してないから。装飾品型の待機状態と同じよ」

ジークが刀 護皇六華を片手に下げたまま問うと、リュカは穏やかな声色で答える。

「シノブさんから六華の術式は教わってるわ。だから私はそこから逆算して施された封印の密度を緩めただけ。あとはジーク、貴方のマナと意思で発動できるようになっている筈よ。」

流石にマナを注ぐくらいはできるわよね？」

「ああ。錬氣みたくマナを移せばいいんだよな？ それなら普段からやってるさ」

ジーク達が朝早くから人気のない場所に来ていたのには理由があった。

それは、特訓。

遠からず起こるであろう“結社” あの時手も足も出なかったメアの面々との対峙に備

え、彼らに対抗しうる力をつける為にジークは手元に残った護皇六

華を少しでも使いこなせるようにとリュカの指導の下、それらに施されていた封印を解いて貰っていたのである。

「ならいいんだけど。だけど気をつけてね？ 六華はただの魔導具じゃない。力が強い分、

消耗も大きいからジークの導力だと連発は辛い筈よ。いざという時の奥の手 それぐらいのつもりでいるといいわ」

とはいえ、六華は普通の魔導具ではない、対瘴気特化な「聖浄器」の一つ。

故に、魔導の知識や制御術に乏しいジークには非常にピーキーな代物でもあるらしい。

「ん……。分かった」

リュカに言われて、ジークは脳裏にサフレと戦った時のことを思い出していた。

その時の話を聞いた彼女曰く、あの時六華が見せたものは一種の暴走状態になっていたのだそうだ。

術式展開 効果の発動に要するマナが足りない場合、術者から構築式の側へとマナが強制的に流れてしまう。その結果、魔導を“使う”筈が“使われる”結果になるのだと。

今は彼女が構築式を調整してくれたので、よほど無理をしない限り同じ事が起きはしないらしいが……それでもやはり、あの時の自分を思い出すと正直不安は残る。

「よろしい。じゃあ早速試してみましようか。ジーク、サフレ君。そこに立ってくれる？」

すると一人うんと頷いて、リュカがそう指示を出してきた。

言われるまま、ジーク、そして魔導具使いの一人として今回フォ

ロー役に回ってくれるサ

フレの二人は彼女から少し距離を置いた位置に立ち直す。

周囲、空き地一帯はしんと静かだった。

街中心部の喧騒も風に乗って微かに聞こえるかどうかといったところである。

すると、心なし不安そうに二人を見守っているマルタを傍らにして、リュカはそっと二人

に向けて手をかざすと呪文を唱え始めた。

「空くうを闊歩する藍霊よ。汝、我の描く箱庭を今ここに現出させ給え。我は夢想の箱庭にて

興じることを望む者。盟約の下、我に示せ

イマジンフィールド  
「イマジンフィールド 夢想の領」

次の瞬間、藍色の魔法陣が二人の身体をスキャンするようになり過ぎていった。

それと同時に目の前が眩しい白光でくらむ。

そして思わず瞑った目を開けた時には……二人は見知らぬ場所に立っていた。

そこ無色でただっ広い、緩やかな丘陵が延々と続く空間。

空を見上げてみれば雲の一つもなく、代わりに呪文ルーンの文様が延々と連なり揺らめいている。

ジークは暫くそんな現実味のない空を見上げると、ぼつりと呟いていた。

「……何処だ、ここ？」

「空間結界だな。万が一君の剣の力が暴走しても周囲に被害が及ばないようにというリュカ

さんの配慮だろう」

『ご名答。どう？ 私の声、届いているかしら？』

すると何処からともなく 気持ち中空からリュカの声が聞こえた。

しかし姿を探してみるが彼女の姿はない。

「ええ、聞こえますよ。流石ですね。これは界魔導ですよ？ 空

門の術式は扱いが難しい  
というのに」

ジークが頭に疑問符を浮かべて辺りを見渡しているその横で、サフレは落ち着いた様子でその呼び掛けに答えている。

『ふふ……ありがとう。どうやら上手く結界内に移送できたみたいね。こっちも貴方達の様子はいしっかり確認できているわ』

ふつと微笑んでお愛想を。

一方でリユカ達の目の前からジークとサフレの姿が消えていた。代わりに二人の姿は彼女の掌に浮かんでいる光球の中に確認できる。

マルタがそくつと横からそんな様子を覗いているのを横目にしつづ、彼女は言う。

「これからジークにはその中で模擬戦闘をこなしてもらおう。さっき教えた通りに六華を解放してみてね。手順は、ちゃんと覚えたわね？」

『お、おう……。どんと来いだよ』  
「オツケー。じゃあ早速使い魔を出すわよ」

中空からのリユカの声に応えてジークは視線を戻した。するとそのタイミングに合わせたかのように、少し離れた位置に多数の魔法陣が現れ、白

い甲冑を纏った、しかし中身のない人影が次々と姿をみせる。

「よし……」  
要は彼らを倒すのが、六華を使って倒すのが今回の特訓の内容だった。

ジークは手に下げたままの刀をぎゅつと握り締めると、錬氣の時の感覚で以って己のマナを刀身へと流し込む。

「薙ぎ払え」

次いで、シノブから教わっていた愛刀らの 長らく存在する事  
すらも知らなかった銘を

以って呼びかける。

「紅梅べにうめ！」

変化が起きたのは、その瞬間だった。

刀身を中心に突如として瞬き輝きだした紅い光。

ジークの脳裏にあの時の、サフレとの戦いで窮地に陥ったあの時  
に見た灰色の空間とそこ

に佇むおぼろげな人影達の姿がフラッシュバックのように過ぎる。

そして同時に身体中で感じたのは、マナごと自分自身を持ってい  
かれそうになるかのような強烈な力。

「ぬうッ……！？」

思わず柄を両手で握り直し、意に反する身体のぐらつきに耐える。  
そうして顔をしかめ暫くその威力に抗っていると、やがて暴れて  
いた力のベクトルが徐々に収まっていくのが分かった。

「……。これでいい、のか……？」

「みたいだな。とりあえず第一関門突破といった所だろう」

煌々と刀身が紅く光っている。

ジークが疑問系で傍らのサフレに問うと、彼はフツと肩をすくめ  
て一応の肯定をみせた。

大方発動自体にそう手間取っては使いこなせたとはいえない。  
そんな所なのだろう。

静かに眉根を寄せ「そうかよ……」と呟くと、改めてリュカの聞  
こえてくる。

『じゃあ使い魔達を迎撃してみせて？ さっきも言ったけれど、消  
耗には気をつけてね』

「ん……。分かった」

頷き、刀を構える。

するとそれまでぼんやりとその場に立っていた抜け殻甲冑らのはたと動き始めた。

盾と剣。おぼろげな靄でできた身体を震わせ、彼らは一斉にジークに襲い掛かってくる。

だが、そこは冒険者としてならしてきたジークだった。

相手の動き出すよりも早く、強く地面を蹴って駆け出すと、彼らが斬撃を繰り出さんとす

るモーションよりも素早くその刀を振るう。

「!?」

六華の持つ力は絶大だった。

刀身を振り抜いた瞬間、一撃で粉微塵になる抜け殻の甲冑。その衝撃の余波は凄まじく、

その立っていた地面すらも巻き込んで大きな抉れた陥没を作り出してしまふ。

六振りの一つ、紅梅。その特性は「増幅する斬撃」。

威力に所有者自身が押される感覚を伴うが、その分一撃の破壊力は爆発的に増加する。

「ははっ、こいつは凄えや！」

ジークはその紅い軌跡を残しながら甲冑らの間、モーションの間隙を縫い、次々と彼らを

薙ぎ倒していった。

元より真つ直ぐで鋭い一撃を持ち味とする彼にとって、この特性は相性が良いらしい。

(……ぬう?)

だが一瞬忘れかけていた。導力がさほど高い訳ではないジークにとって、六華という刀剣

はピーキーな得物であるということ。

踊るように切り結んでゆく、調子付き始めたその最中、ジークは突然身体が重くなるのを

感じ取ったのだ。

しかし肉体的な疲労というにはどうにも違う。

これはまさに心身の力が抜き取られていくかのような。

「バイルドランス 一撃ぎの槍！」

するとジークの傍をサフレの槍が駆け抜けていた。

ちようど位置としては、ジークの死角を狙う格好で剣を振り上げていた甲冑を突き倒すよ

うな格好。

「やはりな。どうだ、身体の芯が疲れてきただろう？ それがマナを使うということだ」

「……らしいな。サンキュー、助かった」

砕かれて崩れ落ちるその使い魔と、そのフォローしてくれた彼を交互に見遣って。

ジークは身を感じた変化を隠す訳にもいかず、思わず苦笑する。

そして残った数体を、疲労する身体に鞭打って斬り伏せると、リユカの繰り出した使い魔

達はようやく全滅をみたのだった。

「……ふう。こいつは、思ってた以上にしんどいな……」

刀に込めていたマナを、使うという意味を引っ込めると紅梅は静かにその光を収めた。

元に戻った普段の愛刀。ジークは大きく肩で息を吐くと、そうしみじみとした実感で以っ

て呟く。

『お疲れさま。でもまあ初めて意識的に使ったにしては上々よ。剣自体を普段使っているのが大きいんでしょうね』

「ですね。今後の改善点を挙げるとすれば、ペース配分でしょう。本当の実戦で使うには正直これではもちません」

「そう言われてもなあ……。具体的にどうすればいいんだよ？ 何というか、使ってる間も

ずっと力をもぎ取られてるような感覚だったんだぜ？ 配分つてのがこつちで出来るもんなのかよ、そもそも」

刀を鞘に収めて半ば嘆息気味に。

口調は強気だが、それでも口にする内容は教えを請うものに他なからなかった。

自分は剣士であって魔導師ではない。知らない知識や技術が“結社”との戦いで必要となるのならば、ここで聞き惜しむことはしたくない。そんな思い。

『勿論できるわよ。そもそもね、ジーク。錬気というのはあくまでマナ制御法の一つでしかないの。それも“身体の中のマナを移し変える”っていう全体からすれば初歩的なものよ。』

「ただ魔導具を含めた魔導の行使はそんなエネルギーの移動じゃない。文字通り“消費”する行為なのよ」

「だから今ジークは疲れているだろう？ マナは精神から僕ら生命を潤すエネルギーだ。空腹になると力が出ないように、マナも枯渇に近づくほど活動能力に大きな支障を来すんだ」

「……ふうむ？」

分かったような分からないような。

少なくとも、今まで通りにマナを使うのではこの力は扱いあぐねるらしい。

ポリポリと頬を掻きながら、ジークは半眼を作り足りない頭をフル回転させようとする。

『だ、大丈夫ですよ。マナも休んでいれば溜まってきますし、ご要望があればそこから出

た後にでも私の音楽でジークさんの中にマナを呼び込んで回復させる事もできますよ』



「そうか。じゃあ、後で頼めるか」

『了解しました』

とりあえず大体の感触は掴めてきた。後は練習あるのみだろう。

ジークは中空から降ってくるマルタの気遣いをありがたく頂戴しながら、ぎゅっと何度か

自身の掌を握ったり閉じたりすることを繰り返していた。

「……やっぱ俺も、アルスみたいに導力が高くないと駄目って事なのかねえ」

「そうだな。ただでさえ君のそれは消耗が大きい代物だ。術者の基礎体力という意味では導

力が高いに越したことはない」

『……………』

そして思い出したのは、魔導に通じた弟<sup>アルス</sup>のこと。

剣は使えるが学問はからつきし。

学問には優れているが武芸はからつきし。

無いものねだりと言われればそれまでだが、中々上手くいかないなどジークは思う。

『……………ねえ、ジーク』

だが同じく彼のことを脳裏に過ぎらせたのは、何もジークだけではなかったらしい。

ふと、声色を神妙なそれに落として呼び掛けてくるのはリュカの声。

『どうして貴方は、あそこまでアルスの同行を押し止めたの？ もっと他にも言い方はあつた筈じゃない。どうしてあそこまで強く……………』

ジークがその声にふっと視線を上げ宙を仰ぐと、彼女の声色は静かな批難となっていた。

「……………。ちゃんと否定しなきゃあいつは諦めないだろ。トナンへ行くのは単純な里帰りなん

かじゃねえんだ。何事もない旅になるわけがねえ。少なくとも俺と

六華があいつから離れて

いれば“結社”の連中の矛先はこっちに来るだろうしさ」

静かに眉根を寄せ、ジークは言う。

「あいつを巻き込むわけには、いかねえんだよ……」

暫く、場の皆が黙っていた。

弟の身の安全を想うからこそその敢えて突き放した言葉。分からないくはない。でも。

『それは……エゴよ。ジーク、貴方はあの子の意思を認めないともいうの？』

「……ッ」

しかしリュカの静かな反論に、今度はジークが押し黙る番だった。顔をしかめ、しかし言い返す言葉が見つからず。ただバツが悪く視線を逸らして黙ってその場に立ち尽くすだけの兄。

だが、だからといって彼女の言い分通り、弟の意思を受け入れる気にはなれなかった。

サンフェルノへ向かう列車の中で吐露された彼の言葉、想い。

もしあの時に汲み取ったものが間違っていなければ、弟が魔導を学んでいる理由は自分と同じ筈なのだ。

罪滅ぼし。あの日の悔しさから“力”を求めてきた自分という存在。

だったら尚の事、俺はあいつを自分と同じ道に走らせる訳にはいかない。

「……」

そしてリュカもまた、思っていた。

本音を言えば言葉通りに彼を責めた訳ではない。しかしあの頃からこの兄弟は変わっていないのだから。思っていた。

“自分を殺して”でも誰かの力になる。救いを成す。そんな負い



「……見つけましたよ」

そしてその張本人は、リュカ達のすぐ向こう側に立っていた。マルタを含めた三人と共に、じっと視線を向ける。

「アルス・レノヴィン君のお兄さん、ジークさんですね？ 一先ずはお久しぶりですとでも言うべきでしょうか」

「……あなたは、確か」

静かな淡々とした声色で。

そこに凜として立っていたのは、他ならぬ学院の教員・エマ女史その人で……。

「はい。休んでいた間のノート」

「あ、うん。ありがとう。助かるよ」

時は前後してお昼時。場所は学院の食堂、テラスの一角。アルスは例の如くルイス、フィデロと落ち合い昼食を共にしていた。

弁当を、トレイの上の献立を広げてすぐルイスが鞆から数冊のノートを取り出し、差し出してくれる。帰省の前に頼んでおいたものだった。アルスはありがたく拝借し、いそいそと自身の鞆の中に収めて礼を述べる。

サンフェルノに帰省していた約一週間のブランク。

正直を言うと学院の講義がどれほど進んでしまっているか気になっただけだったが、軽く彼が

まとめてくれた講義ノートを見る限りは何とかかなりそうに思えた。

僕なんかにも、ちゃんと友達ができたんだよね……。

心なしほっこりとして、アルスはこの学友二人と暫しの会食に興じる。

「……で？ どうだったのよ、里帰り」

「えっ？」

そしてフィデロがふとそんな事を口走ったのは、その最中の事だった。

ちみちみとフォークでこま切れにしたハンバーグを口に入れた格好のまま、アルスは数秒彼の言葉の意図を量るように硬直する。

「ど、どうつて。普通だよ？ まあ兄さんにとっては五年ぶりの帰省だったから、村の皆は随分騒いでたけれど……」

「そういう意味じゃねーよ。訊いたんだろ？ お袋さんに。お兄さんの剣のことをさ」

ごくんと、ハンバーグの塊が喉を通っていった。

少し咽てお茶を一杯。アルスはぐるぐると焦る思考の中で笑みを繕って言う。

「そうだけど……。母さんも知らないみたい、だったよ？ うん。

知らないって」

「ふうん……？ そっか」

もしかっと焼きベーコン巻きのパンを齧りつつも、幸いフィデロはそれ以上の追求はしてこなかった。あっさりとしている性格故か、それとも配慮をみせてくれたのか。隣のルイスもまた、特に何かを言い出すわけでもなく微笑のままその様を見つめている。

何とか誤魔化せたかな……？

アルスは苦笑を漏らしながら内心ホッと胸を撫で下ろしていた。

まさか事細かに話す訳にはいかなかった。

自分たち兄弟がトナンの皇子で、且つ兄の剣がその国宝でもあるだなんて。……言える訳

がない。隠すことへの後ろめたさはあった。だがそれ以上に真実を知ってこの二人から友と

いう位置から遠ざかってしまうのではないかという怖さが強かった。

「……」

ちらとテラスの柵の向こう、キャンパス内の植木へとそれとなく目を遣る。

そこには木の幹にもたれかかってこちらを静かに見つめているシフォンの姿があった。

彼曰く、兄ともに留守中の自分の護衛を頼まれたのだそうだ。

別に嫌という訳ではない。信用できる仲間がついていてくれるのなら安心ではある。

(言えない、よね……?)

だがこの時ばかりは……下手な発言を監視されているかもしれないという猜疑心がちらりと顔を出してくるようにも思えた。

「ここにいましたのね。アルス・レノヴィン」

そんな時だった。

ふと向いていたのと逆方向から聞こえてきたのは、聞き慣れた、しかし何かとトラブルの種になりがちな少女の声。

振り向くと案の定、そこには腰に両手を当ててシンシアが立っていた。

すぐ後ろには例の従者二人組が待機し、何事かと怪訝と好奇の眼を向けてくる他の学生ら

に「すまねえな」「失礼するぞ」と何気に侘びを入れつつ彼女のフオローに回っている。

「シンシア、さん……?」

嫌な予感がした。

だがこの場から一人勝手に逃げ出せる筈もなく、アルスは席に着いたままつかつかと近付いてくる彼女達を見遣るしかない。

「やっと戻ってきましたのね。いい加減教えて貰いましょうか。一体、貴方達は何をしよう

としているの？ この前だってそう。あの野蛮　貴方の兄が“結社”とやり合う理由も、  
全て聞かせて頂きますわよ」

にわかに周りが動揺の声でざわついた。

無理もない。事情はさっぱりだっただろうが、彼女の口から“結社”の名が出た事で只事

でないらしいということは十二分に伝わっていたのだから。

「し、シンシアさん！？　こ、ここでその話は」

「やはり何か隠してますのね？　教えなさい。私だけ除け者なんて

……認めませんわ！」

アルスは慌てて場を収めようとした。彼女をやりわりとでも追いつ返そうとした。

しかし対するシンシアは何故かすっかりご立腹らしく、捲し立てるようにアルスに詰め寄ってくる。

そんな感情を沸騰させた主にキースとゲドの二人も流石に手を焼いているようで、彼らは

何処かバツが悪そうに控えているようにも見える。

「……これは初耳だね」

「アルス、お前“結社”と何が……？」

「あう。え、えっと……」

静かな驚嘆と強い疑問符と。友人二人もアルスに問い掛けていた。拙い。シンシア達と彼ら、両者に視線を往復させながらアルスは思わず言葉に窮して狼狽

する。遠巻きに様子を見遣っていたシフォンもまた、そっと身を起こして何か対応に打って出ようかとしている。

喋る訳にはいかない。僕達のことを知ってしまえば、何が降り掛かるか分からない。

しかし、そう直感的に思うと同時にアルスはそんな己を晒す自分

にも気付いていた。

(……これじゃあ、まるで兄さんと同じじゃないか……)  
眉間に皺を寄せて小さな嘆息を。

しかしその飛び火した思考が、彼を結果的に落ち着かせることになった。

とりあえず彼女を人気がない所へ。昂ぶっているようだから落ち着かせなければ。それと

この場のフォローはルイス君とフィデロ君に頼もう……。

そしてそう狼狽から冷静さを取り戻し、アルスは早速事態の收拾に動こうとする。

だが、その時だった。

「アルス・レノヴィンさんですね」

ふと、今度は黒スーツの男達が数人、アルス達を取り囲むように近付いて来たのである。

シンシアを含めた場の面々が一斉に視線を向けた。

追求を逃れられた、のか……？

アルスの内心に過ぎたのは、乱入者の登場によって断たれたそれまでの詰問状態からの

解放、そんな一抹の安堵の念。

だがそれも、結局は束の間のことではなかった。

「私達と一緒に来て頂きます。学院長がお呼びです」

じつと束ね向けられた黒服達の視線。

彼らはアルスを見据えると、そう粛々と告げてきたのだった。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7439v/>

---

ユーヴァンス叙事詩録-Renovin's Chronicle-

2011年12月11日20時50分発行